三重県埋蔵文化財調査報告１２３-４上

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅳ

鴻　ノ　木　遺　跡

（上　層　編）

１９９８．９

三重県埋蔵文化財センター

遺跡遠景（北から）

朱書きされた土器

序

埋蔵文化財は、土に埋もれた、あるいは刻まれた過去の記録で、私たちの祖先がその時代を懸命に生きた証です。

一般国道42号松阪・多気バイパス路線内にも埋蔵文化財がたくさん残っていることがわかりました。これらは、一度破壊してしまうと二度と復元できなくなってしまうかけがえのないものであることは言うまでもありません。しかし一方で、自動車の運搬力や機動力は現代の生活に欠くことができないものとなり、道路の建設や改良は公共事業の緊急課題となっています。

三重県教育委員会では、これら埋蔵文化財の保護と道路建設との調和をはかるため、建設省等関係機関と協議を重ねてきました。その結果、バイパスの建設工事によって、どうしても保存のできない遺跡については、発掘調査によって記録として残すことになりました。

今回報告するのは、松阪市射和～中万町に所在する鴻ノ木遺跡についての発掘調査結果です。本書が、消滅した遺跡にかわって、郷土の歴史、文化を未来に伝える一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査事業の推進にあたっては建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所、(社) 中部建設協会、松阪市教育委員会、多気町教育委員会をはじめとする関係機関各位、地元の方々などからご理解、ご協力をいただきましたことに厚くお礼申し上げます。

平成１０年９月

三重県埋蔵文化財センター

所　長　　大　井　　與　生

例　言

1．本書は、三重県教育委員会が建設省中部地方建設局から委託を受けて実施した、一般国道42号松阪・多気バイパス建設予定地内に所在する埋蔵文化財発掘調査事業のうち、平成７～９年度に整理・報告書作成業務を実施した、鴻ノ木遺跡の発掘調査報告書（上層編）である。

2．現地発掘調査及び整理・報告書作成にかかる費用は、建設省中部地方建設局の全額負担による。

3．本書に掲載した各遺跡の概要については、すでに当センター発行の『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報』Ⅰ～Ⅴで紹介しているが、本書の記述をもって最終報告とする。

4．本書に使用した事業計画図面は、建設省紀勢国道工事事務所の提供により、他に建設省国土地理院発行の地形図、松阪市作成の都市計画図を使用した。

5．本書に掲載した写真の撮影、遺構・遺物図面の作成は、調査・報告担当者、調査補助員・業務補助員を中心に行った。現地調査の担当者は第４表に示したとおりである。執筆分担は目次に示し、さらに文末にも記した。

6．図面における方位は、国土座標第Ⅵ系を基準とする座標北を用いた。
なお、真北は座標北のＮ０°18′ 44″ Ｗ、磁北は座標北のＮ６°48′ 44″ Ｗである。

7．本書で報告した記録類および出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

8．現地調査及び報告書作成期間中には、下記の方々に専門的な御指導と御助言をいただいた。記して感謝の意を表したい。（五十音順、敬称略）
磯部　克　　門暉代司　　柴垣　　勇　　西田尚史　　福田　昭　　福田哲也　　藤澤良祐　　山下俊郎

9．本書では、土層及び遺物の色調について、小山・竹原編『新版標準土色帖』（9版1989）を使用した。

10．本書で使用した遺構表示略記号は下記による。
ＳＢ：掘立柱建物　ＳＤ：溝　ＳＥ：井戸　ＳＦ：竈跡・炉跡・焼土　ＳＨ：竪穴住居　ＳＫ：土坑
ＳＸ：墓　ＳＺ：その他・不明

11．スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

目　次

Ⅰ．　前　言 ……（田村陽一・森川常厚）… 1
　1．調査に至る経過 …… 1
　2．調査の体制 …… 4
　3．現地調査の方法 …… 5
　4．調査の経過 …… 6
Ⅱ．　位置と環境 ……（西村修久）… 11
　1．位置 …… 11
　2．歴史的環境 …… 11
Ⅲ．　第1次調査 …… 19
　1．遺構 ……（小山憲一）… 19
　2．遺物 ……（山田　猛・小山憲一）… 27
Ⅳ．第2次調査 ……（森川常厚）… 40
　1．遺構 …… 40
　2．遺物 …… 42
Ⅴ．第3次調査 ……（森川常厚）… 46
　1．遺構 …… 46
　2．遺物 …… 49
Ⅵ．第4次調査 ……（森川常厚）… 60
　1．遺構 …… 60
　2．遺物 …… 75
Ⅶ．第5次調査 …… 124
　1．基本層序 ……（小濵　学）… 124
　2．遺構 ……（小濵　学）… 124
　3．遺物 ……（小山憲一）… 135
Ⅷ．第6次調査 ……（下平康弘）… 155
　1．A地区の遺構 …… 155
　2．B地区の遺構 …… 157
　3．遺物 …… 158
　4．小結 …… 165
Ⅸ．自然化学分析 ……（パリノ・サーヴェイ株式会社）… 171
Ⅹ．結語 ……（森川常厚）… 176
　1．遺構の変遷 …… 176
　2．遺物 …… 182

挿　図　目　次

Ⅰ．前言

第１図　路線、工区、遺跡位置図 …… 2

第２図　遺跡地形図 …… 9

第３図　調査区位置図 …… 10

Ⅱ．位置と環境

第４図　遺跡位置図 …… 14

Ⅲ．第１次調査

第５図　調査区土層断面図 …… 20

第６図　調査区平面図 …… 21～22

第７図　SB31・SB32 実測図 …… 23

第８図　SB33・SB34・SA35 実測図 …… 24

第９図　SK26・SD27・SK30
出土遺物実測図 … 27

第10図　出土遺物実測図 …… 29

第11図　出土遺物実測図 …… 31

第12図　出土遺物実測図 …… 32

Ⅳ．第２次調査

第13図　遺構平面図 …… 41

第14図　土層断面図 …… 41

第15図　第２次調査出土遺物 …… 43

Ⅴ．第３次調査

第16図　遺構平面図 …… 47

第17図　遺構平面図（２次検出面） …… 48

第18図　第３次調査出土遺物 …… 50

第19図　第３次調査出土遺物 …… 51

第20図　第３次調査出土遺物 …… 52

Ⅵ．第４次調査

第21図　土層断面図 …… 60

第22図　遺構平面図 …… 61～62

第23図　SX4026・SZ4168 実測図 …… 63

第24図　SB4072・SX4060・4063
・4086・4103 実測図 … 64

第25図　SX4137・4139・4140・4147
・4150・4154～4157・4186 実測図 … 66

第26図　SX4158～4162・4164 実測図 …… 67

第27図　SX4132～4134 実測図 …… 71

第28図　SX4135～4138 実測図 …… 72

第29図　SX4141・4142・4144～4146
・4148・4152・4153・SE4149 実測図 … 73

第30図　SX4026・SZ4168・SK4127・SD4095
・4101・4130・4131 出土遺物実測図 … 76

第31図　SD4190 出土遺物実測図 …… 77

第32図　SD4190 出土遺物実測図 …… 78

第33図　SD4190 出土遺物実測図 …… 79

第34図　SD4190 出土遺物実測図 …… 80

第35図　SX4108 出土遺物実測図 …… 82

第36図　SX4063・4086・4103・4139・4150
・4164・4169・4171 出土遺物実測図… 84

第37図　SK4076・4090・SB4072・SZ4109・4197
・SD4100・4102・4129 出土遺物実測図… 85

第38図　SD4014・Pit出土遺物実測図…… 86

第39図　SX4132･4134･4135 出土遺物実測図 … 88

第40図　SX4132・4133・4136・4138・4144
・4146 出土遺物実測図 … 89

第41図　SX4148 出土遺物実測図 …… 90

第42図　SX4145･SZ4170･4172･4195･4196･4198
・SE4149・SD4107 出土遺物実測図 … 91

第43図　SZ4199 出土遺物実測図 …… 92

第44図　包含層出土遺物実測図 …… 93

第45図　包含層出土遺物実測図 …… 95

第46図　包含層出土遺物実測図 …… 96

第47図　包含層出土遺物実測図 …… 97

第48図　包含層出土遺物実測図 …… 98

Ⅶ．第５次調査

第49図　調査区遺構実測図 …… 125～126

第50図　土層断面図 …… 127

第51図　SF524・SE533 実測図 …… 128

第52図　SX505･507･508･516･526 実測図 …… 129

第53図　SX556 実測図 …… 130
第54図　SH502・519 実測図 …… 131
第55図　SH520・521 実測図 …… 132
第56図　SH514・534 実測図 …… 133
第57図　SB536・537・538・539 実測図 …… 134
第58図　SX505 出土遺物実測図 …… 136
第59図　SX505 出土遺物実測図 …… 137
第60図　出土遺物実測図 …… 138
第61図　出土遺物実測図 …… 140
第62図　出土遺物実測図 …… 141
第63図　包含層出土遺物実測図 …… 142
第64図　包含層出土遺物実測図 …… 144
第65図　包含層出土遺物実測図 …… 145

Ⅷ．第６次調査
第66図　Ａ地区平面図 …… 156
第67図　Ａ地区土層断面図 …… 156
第68図　SD603 遺物出土状況図 …… 157
第69図　SH605・606 実測図 …… 158
第70図　SH605・606 貯蔵穴遺物出土状況図 … 158
第71図　Ｂ地区平面図 …… 159
第72図　Ｂ地区土層断面図 …… 159
第73図　SD603 出土遺物実測図 …… 160
第74図　SH605 出土遺物実測図 …… 161
第75図　SH606 出土遺物実測図 …… 162
第76図　包含層出土遺物実測図 …… 164

Ｘ．結語
第77図　遺構変遷図 …… 177～178
第79図　土師器･ロクロ土師器の数量 …… 182
第80図　紡錘車･加工円盤の重量と径の相関 … 183
第81図　陶質加工円盤の直径による分布 …… 184

表　目　次

第１表　遺跡概況 …… 3
第２表　現地説明会一覧 …… 6
第３表　松阪・多気バイパス調査経過、予定表 … 7
第４表　発掘調査遺跡一覧 …… 8
第５表　遺跡一覧 …… 15～16
第６表　掘建柱建物・柱列一覧表 …… 24
第７表　第１次調査出土遺物観察表 …… 33～39
第８表　第２次調査出土遺物観察表 …… 44～45
第９表　第３次調査出土遺物観察表 …… 54～59
第10表　第４次調査出土遺物観察表 …… 100～123
第11表　第５次調査出土遺物観察表 …… 147～154
第12表　第６次調査出土遺物観察表 …… 167～170
第13表　リン・カルシウム分析試料 …… 171
第14表　リン・カルシウム分析結果 …… 174～175
第15表　中・近世墓一覧 …… 180
第16表　紡錘車・加工円盤数量対照表 …… 183
第17表　遺構番号対照表 …… 186～188

写　真　目　次

遺跡遠景 ……巻頭図版
朱書された土器 ……巻頭図版
調査前風景 …… 189
第１次調査区全景 …… 189
SD1 …… 190
SD18 …… 190
SD11 …… 191
SD11・12、SK25・26、SB33 …… 191
SB33 …… 192
SB34 …… 192
第２次調査作業風景 …… 193
第２次調査区前景 …… 193
第３次調査一次検出面前景 …… 194
第３次調査二次検出面 SD340 …… 194
第４次調査区前景 …… 195
第４次調査中・近世墓群 …… 195
第４次調査中・近世墓群 …… 196
SX4154～4165・4186 …… 196

SX4026 …… 197
SX4168 遺物出土状況 …… 197
SX4063 ・ 4060 …… 198
SX4086 …… 198
SX4103 …… 199
SX4142 …… 199
SX4132 ・ 4133、SZ4025 …… 200
SX4134～4136、SZ4199 …… 200
SX4147 ・ 4148 …… 201
SX4135 …… 201
SX4134 …… 202
SX4145 …… 202
SX4146 …… 203
SX4132 …… 204
SZ4108 ・ 4109、SD4101 ・ 4102 …… 204
SZ4198 …… 205
SE4149 …… 205
第 5 次調査区調査前風景 …… 206
第 5 次調査区前景 …… 206
SF524 …… 207
SZ533 …… 207
SX505 …… 208
SX505 土器出土状況近景 …… 208
SX507 …… 209
SX508 …… 209
SX516 …… 210
SX556 …… 210
SH502 …… 211
SH519 …… 211
SX526、SH520 ・ 521 …… 212
SF540 …… 212
SB536 …… 213
SH514 ・ 534、SB538 ・ 539 …… 213
第 6 次調査区前景 …… 214
SD603 …… 214
SH605 ・ 606 …… 215
SH606 …… 215
SD603 遺物出土状況 …… 216
SH606 貯蔵穴遺物出土状況 …… 216
第 1 次調査出土遺物 …… 217～219
第 2 次調査出土遺物 …… 220
第 3 次調査出土遺物 …… 220～223
第 4 次調査出土遺物 …… 224～239
第 5 次調査出土遺物 …… 240～243
第 6 次調査出土遺物 …… 244～246

Ⅰ．前　言

1．調査に至る経過

三重県松阪市は南北に細長い伊勢平野の中南部に位置し、人口約11万人を擁する近世城下町を母体とする都市である。近年、中南勢地方の中核都市として目ざましい発展を遂げつつあり、高速道路の開通や工業団地、住宅団地の造成など、各種の開発が盛んに行われている。

古くは都と伊勢神宮を結ぶ伊勢街道と、熊野街道の交差する交通の要所として重要な位置を占め、現在でも三重県南部や東紀州地域と南勢地域への幹線道路の交点に位置することに変わりはない。

(1) バイパスの建設計画

一般国道42号は和歌山県和歌山市を起点とし、紀伊半島沿岸の諸都市を連絡し、三重県津市に至る幹線道路である。東紀州方面から松阪市への入口には、櫛田川が東流する。この川に架かる両郡橋付近は、道路幅員が狭いため慢性的な交通渋滞に悩まされてきた。また、松阪市内も幹線道路の市街地集中のため、激しい交通渋滞が繰り返されており、交通環境が極度に悪化している。

これらの状況を抜本的に解消する方策として、多気郡多気町仁田から松阪市古井町に至る延長11.9 kmの、松阪市街地の環状機能も併せ持ち、さらに周辺の土地利用の拡大・工業開発の促進等、地域の活性化をも期待する一般国道42号松阪・多気バイパスが計画されたのである。

計画路線は第1図のように、9·10·11·12の4つの工区に分けられている。9工区は多気町仁田～松阪市中万町の3.1km、10工区は松阪市中万町～同市八太町の1.4km、11工区は松阪市八太町～上川町の5.0km、12工区は松阪市上川町～古井町の2.4kmである。

バイパス建設事業は昭和59(1984)年5月4日に11·12工区が、昭和62(1987)年2月3日に都市計画決定がなされた。昭和62年度中に9工区は事業化され、翌63(1988)年度には用地買収に着手、平成元(1989)年度には、10～12工区も事業化され用地買収も開始された。

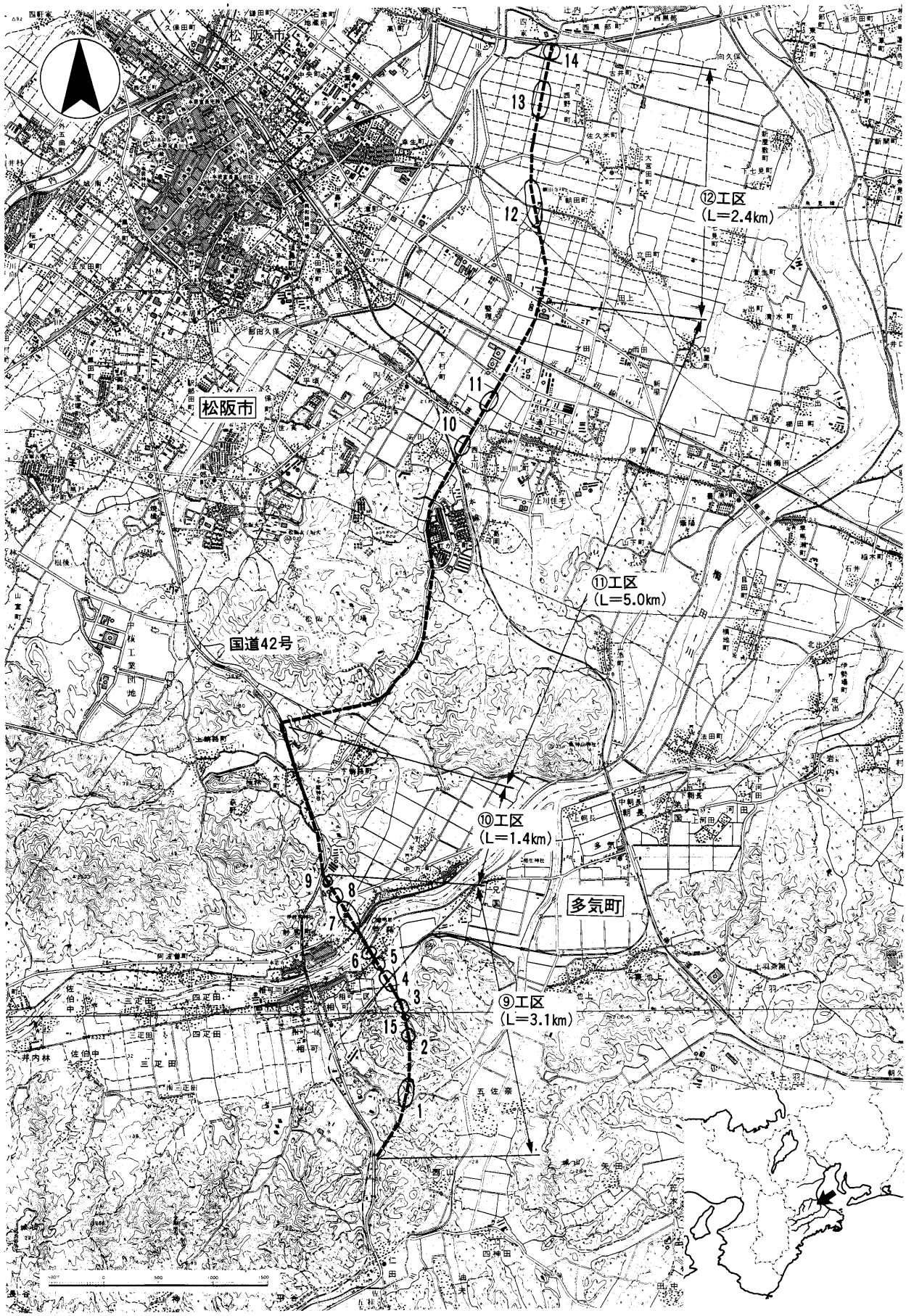
(2) 埋蔵文化財の保護協議

一方、この道路建設事業にかかる埋蔵文化財保護についての調整·協議は、昭和63年11月に建設省中部地方建設局紀勢国道工事事務所から、9工区の埋蔵文化財の有無について三重県教育委員会に照会があった。これを受けて、県教育委員会文化課では分布調査を実施、9工区(3.1km)内に9カ所、面積にして38,250㎡の埋蔵文化財が所在することが判明した。この結果をもとに紀勢国道工事事務所と第1回の協議を行い、事業の全体計画の説明を受けた。文化課からは、全面が遺跡とした場合の調査期間、調査経費、必要調査員数等の概略資料を提示した。この段階では用地買収も進んでおらず、平成元年度中の文化財調査はあり得ないと判断した。そして、昭和63年12月2日付け教文第1684号で、正式に分布調査結果を紀勢国道工事事務所長あてに通知した。この時点で10～12工区の計画図面が追加提示され、予定路線内の埋蔵文化財の有無について、分布調査依頼があった。

なお、建設省から出される文化財保護法57条3による文化庁への通知はこの間に行われている。

平成元年3月から4月にかけて、10～12工区(8.8km)内の埋蔵文化財分布調査を新設の三重県埋蔵文化財センターで実施した。その結果5カ所、29,300㎡の埋蔵文化財の所在を確認し、平成元年5月9日付け教埋第72号で紀勢国道工事事務所長あてに通知した。

このような経緯を経て、7月には第2回目の協議を行った。当センターから分布調査結果並びに各遺跡の状況等の説明を、建設省からは用地買収状況の説明が行われた。そして、建設省側は平成2年度から試掘調査を、3年度から本格的な調査を開始してほしい



第１図　路線・工区・遺跡位置図（１：50,000）　（国土地理院　松阪・国束山　１：25,000）

旨の要望が出された。

8月には当センターから、試掘調査の面積とその具体的方法について建設省に提示したが、しばらく進展はみられなかった。

年が改まった平成2(1990)年2月13日に第3回目の協議が行われた。この協議では9工区の用地買収状況が主課題となり、この場で建設省より再度、平成2年度からの文化財調査開始の要請があった。これを受けて、3月に当センターと建設省の間で全体計画や調査体制などの具体的な最終協議を行い、さし迫った期間と予算枠の中で、平成2年度から部分的に文化財調査を開始することを決定した。これによって、当面は第9工区の現地発掘調査のみを対象にし、2年度は試掘調査として2,000㎡と本調査を2,000㎡の計4,000㎡を発掘調査することとし、調査担当職員を2名あてることが決まった。

以上のような経過を経て、平成2年度には当埋文センター管理指導課内に2名の松阪・多気バイパス担当職員を配置し、事業地内の文化財調査を開始するに至った。

番号	遺跡名	所在地	確認面積㎡	現状	種類	時代	概要	工区
1	明気窯跡群	多気町相可字明気	2,000	山林	散布地 窯跡	古墳	平成4～5年度調査。須恵器窯5基、竪穴住居等を確認。	9工区
2	明気古墳群	多気町相可字明気	900	山林	古墳	古墳	平成3年度多気町教委試掘で7号墳確認。協議の結果、多気町教委が調査を実施。	
3	甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	2,650	畑	散布地 水田	中世	平成3年度試掘調査実施。後世の開墾等で削平され本調査除外地となる。	
4	巣護遺跡 (多気条里)	多気町荒蒔字巣護ほか	7,500	水田	散布地 条里	古墳～中世	平成5年度調査。明確な条里遺構は確認できず。前方後方周溝墓を検出したほか、石帯出土。	
5	上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外	6,000	畑 水田	散布地 集落跡	縄文 古墳～中世	平成5年度第1次、6年度第2次調査実施。縄文～中世の遺構・遺物。	
	栂ノ世古遺跡	多気町相可字栂ノ世古		宅地	散布地	中世	上ノ垣外遺跡3次調査として平成8年度に実施。弥生～古墳・平安・室町時代の遺物が出土。	
6	新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	2,400	畑 水田	散布地	縄文	平成6年度第1次、平成8年度第2次調査。縄文時代後期前葉の竪穴住居や土坑を多数確認。	
7	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	11,200	水田 宅地	集落跡	縄文 弥生～中世	平成2～6年度調査。縄文時代早期、弥生、奈良～平安時代の集落跡、墓跡等を確認。	
8	朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	5,200	水田	集落跡	縄文 古墳～中世	平成3年度調査。奈良～平安時代の集落跡確認。	
9	朱中古墳	松阪市射和町字朱中	400	山林	古墳	古墳	平成2年度試掘調査実施。後世の開墾等により墳形等不明。須恵器樽形、壺片、円筒埴輪片出土	
10	中野前遺跡 (石津)	松阪市下村町字石津	4,200	水田	散布地	中世	平成6年度試掘調査実施。遺構は確認できず、遺物は客土からのため、本調査にいたらず。	11工区
11	甘チ遺跡 (東牛込)	松阪市上川町字甘チ	3,700	水田	散布地	中世	平成7年度調査。ほ場整備時に削平を受け、遺構の残存わずか。	
	北上遺跡	松阪市上川町字北上		水田	散布地	古墳～奈良	古代官道の検出を目的に平成7年度確認調査。官道は検出できず。古墳～奈良の自然流水路検出。	
12	堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町	9,200	水田	散布地	弥生～中世	平成6～9年調査。弥生～室町時代の遺構を多数確認。同時代の土器・銅鐸形土製品・斎串出土。	12工区
13	御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	8,100	水田	散布地	奈良～中世	平成4年度試掘調査実施。遺構・遺物ともに確認できず、本調査除外地となる。	
14	山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	4,100	水田	散布地	中世	平成7年度調査。中世の遺構をわずかに検出。遺跡の周辺部と判断。	
15	大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	600	山林	古墳	古墳	平成5年度工事中発見。直径約20m、高さ約2mの円墳。主体部なし。他に丘陵斜面に主体部2基	9工区

第1表　遺跡概況

2．調査の体制

昭和61(1986)年度以降に一般国道1号亀山バイパスで、昭和63年度からの一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査事業で採用された、いわゆる三者体制を当該事業でも採り入れた。すなわち、三重県教育委員会（受託者）は建設省（委託者）と調査に関する委託契約を結ぶ一方、建設省（委託者）は外郭団体である（社）中部建設協会（受託者）と現場作業に係る作業員の任用や労務管理、各種機材の手配等といった土工部門に関した委託契約を結ぶ。そして、国・県・協会の三者間の協力関係を明らかにするため三者で協定を結ぶことで、当該事業を推進しようという方法である。

この三者体制については、【三重県埋蔵文化財発掘調査報告100-4『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター　1994・3,p.2～15】に詳しいので、それを参照されたい。

調査は三重県埋蔵文化財センターが担当した。平成２年度は現地調査担当が管理指導課内におかれたが、３年度以降は調査二課第二係として独立し、当該事業の調査に専念することになった。

平成５年度からは現地調査と並行して報告書作成も開始した。報告書作成は基本的にひとつの遺跡について２年間で整理・報告する形をとり、初年度に遺物整理を行い２年度で報告書の編集・印刷・刊行を行うことにした。

また、平成５年度からは「県教育委員会・市町村教育委員会職員人事交流実施要綱」に基づいて、松阪市および多気町の両教育委員会から各1名、計2名の職員を派遣していただいて調査体制を強化、充実した。以下は平成２年度～９年度の調査体制である。

【平成２年度】

所長　中林昭一
次長　森下和光
次長兼調査第二課長　山澤義貴
主査　新田　洋
管理指導課主事　河瀬信幸、小林　秀
総務課長　青木真一
主事 堀内念伸、寺前秀紀

【平成３年度】

所長　中林昭一
次長　東谷　勇
次長兼管理指導課長　山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
主査　田中喜久雄
技師　野原宏司
総務課長　青木真一
主事　堀内念伸、寺前秀紀

【平成４年度】

所長　久保富子
次長　東谷　勇、山澤義貴
調査第二課長　新田　洋
第二係長　田村陽一
主事　宇河雅之
総務課長　小柳　清
主事　堀内念伸、寺前秀紀

【平成５年度】

所長　久保富子
次長　若林祥男、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査　倉田直純
第二係長　田村陽一
主事　東　良樹、宇河雅之
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　小柳　清
主事　伊藤直樹、寺前秀紀

【平成６年度】

所長　川村政敬
次長　若林祥男、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　下平康弘、東　良樹
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　小柳　清
主事　伊藤直樹、橋川　功

【平成７年度】

所長　川村政敬
次長　田中　守、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　伊藤克幸
主査兼第二係長　田村陽一
主事　下平康弘、松本美先
小林　秀
西村修久（多気町より派遣）
小濵　学（松阪市より派遣）
総務課長　中西勝之
主事　伊藤直樹、橋川　功

【平成８年度】

所長　奥村敏夫
次長　田中　守、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　山田　猛
第二係長　森川常厚
主事　松本美先、小濵　学
兼古　愼（松阪市より派遣）
小山憲一（多気町より派遣）
総務課長　中西勝之
主事　尾崎嘉春、橋川　功

【平成９年度】

所長　奥村敏夫
次長　中口　孝、山澤義貴
主幹兼調査第二課長　山田　猛
第二係長　森川常厚
主事　小濵　学
兼古　愼（松阪市より派遣）
小山憲一（多気町より派遣）
総務課長
主事　尾崎嘉春、橋川　功

以上のほか、各種調査記録類の整理や出土遺物の整理、実測などで以下の方々の補助を得た。

調査補助作業員

奥明子（松阪女子高校）加藤里江（皇學館大学）
瀬野弥知世（皇學館大学）河角龍典（立命館大学）
高谷典子（松阪女子高校）塚田幸子（皇學館大学）
松井理栄子（橘女子大学）中島沙恵（佛教大学）

業務補助員

北川ゆき　白石みよ子　中里輝子　瀬野弥知世
中村敬子　服部美奈子　広瀬則代　谷久保美知代
廣田洋子　山路艶子　山分孝子　脇葉輝美

3．現地調査の方法

調査の対象となる遺跡には、縄文時代から中・近世にわたる集落遺跡や墓地跡、古墳群や須恵器窯跡群など多種多様なものがあった。そのため、統一的な調査方法をとることは不可能であり、各遺跡の性格に応じた調査方法を適宜採用したことでは、原則的な調査方法について示しておきたい。

(1) 地区割

バイパス計画路線は9工区および11･12工区においてはほぼ南北方向をとるため、４ｍ方眼で設定する地区杭は、各遺跡ごとに適切な道路中心杭２点を結ぶ延長方向に、北から南へ数字を、これと直行する方向には西から東へアルファベットを与え、各グリッドの北西杭をそのグリッドの名称とした。

なお、今回の調査では100m単位で設定する大地区は設定しなかった。

(2) 遺構カード

遺構カードは原則として４ｍ×４ｍのグリッドごとに作成する。略図は遺構検出後、掘り下げまでに記入することとし、遺構の重複関係、埋土の色調・状態等を明示することにした。

遺構番号はピットについては各グリッドごとに通し番号を付し、土坑、溝、竪穴住居跡などについては遺跡ごとの通し番号をつけることにした。

(3) 遺構略測図

遺構の検討や遺物の整理等のため、遺構カードをもとに、100分の１の遺構略測図を作成した。

(4) 写真撮影

遺構等の写真撮影は、原則として6×7㎝版（モノクロ、カラーポジ）を使用した。この他全景や特殊

遺構などについては４×５インチ版（モノクロ、カラーポジ）、報道依頼関係に使用するカラーネガ（35ミリ版）も必要に応じて使用した。

使用したカメラは、アサヒペンタックス6×7、ニコンＦ３０１、ウィスタＳＰ（４×５インチ版）、マミヤＲＺ６７である。

(5) 遺構実測

道路工事計画に関する杭は全て国土座標に基づいている。そのため、将来予想される隣接地での発掘調査との関連が把握できるように、遺構実測は国土座標に基づいておこなった。当地域は第Ⅵ座標系に属する。

遺構実測は現地調査期間の短縮のため、空中写真測量を原則としつつ、遣り方実測も随時実施した。また、各遺構の遺物出土状況図など詳細な実測図は全て手書きで行った。

(6) 公開・普及

現地調査が終了し、遺構実測も終了もしくはほぼ終わる段階で、一般住民を対象に調査成果の公開と、埋蔵文化財に対する認識を深めてもらうことを目的として、可能な限り現地説明会を実施した。これまでに、鴻ノ木遺跡・明気古窯跡群・上ノ垣外遺跡・新徳寺遺跡・堀町遺跡等で11件の説明会を行い、延べ1000人以上の参加を得た。

遺　跡　名	所　在　地	開催年月日	参加人員
鴻ノ木遺跡第１次	松阪市射和町	平成３年３月16日	６０
朱中遺跡	松阪市射和町	平成４年２月１日	１００
明気１・２号窯	多気郡多気町相可	平成５年２月13日	１５０
明気３～５号窯	多気郡多気町相可	平成５年７月31日	１５０
鴻ノ木遺跡第４次	松阪市射和町		
鴻ノ木遺跡第５次	松阪市中万町	平成５年12月４日	１４０
上ノ垣外遺跡第１次	多気郡多気町荒蒔		
巣護遺跡	多気郡多気町荒蒔		
上ノ垣外遺跡第２次	多気郡多気町荒蒔	平成６年７月30日	１２０
新徳寺遺跡第１次	多気郡多気町相可		
堀町遺跡第１次	松阪市朝田町	平成７年２月４日	１００
堀町遺跡第２次	松阪市朝田町	平成８年１月20日	１２０
新徳寺遺跡第２次	多気郡多気町相可	平成８年６月１日	１００
堀町遺跡第３次	松阪市朝田町	平成８年12月21日	１３０
堀町遺跡第４次	松阪市朝田町	平成９年11月１日	９０

第２表　現地説明会一覧表

なお、現地説明会の時には説明資料として『国道42号バイパス松阪・多気発掘調査だより』を刊行している。

また、小学校の依頼による体験発掘を実施し、津市立片田小学校が鴻ノ木遺跡の、多気町立相可小学校が新徳寺遺跡の発掘調査を体験した。さらに堀町遺跡では、松阪市教育委員会の依頼による『親子体験発掘』を実施し、16家族約60人が参加し、また、松阪市立徳和小学校が整理所見学に訪れている。

４．調査の経過

(1) 平成２年度

平成2年4月1日付けで三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で業務委託協定が結ばれ、同時に前二者と（社）中部建設協会理事長を交えた三者による業務分担協定も締結した。また、三重県知事と建設省中部地方建設局長との間で平成２年度の業務委託契約書を取り交わし、範囲確認調査４件（朱中古墳、朱中・鴻ノ木・上ノ垣内遺跡）計622㎡と本調査1件（鴻ノ木遺跡）1,500㎡を行なった。鴻ノ木遺跡については850㎡の下層調査を追加している。

なお、６月には松阪市中万町の県道脇バイパス用地内に仮説プレハブを建設し、『一般国道42号阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査整理所』として以後の日常的な調査活動の基地とした。

(2) 平成３年度

範囲確認調査３件（甘糟・巣護遺跡、明気古窯跡群）計1,352㎡、本調査２件（鴻ノ木・朱中遺跡）5,260㎡を行った。朱中遺跡については、調査中に下層遺構の存在が明らかになり、900㎡の調査を追加することとなった。明気古墳跡群は、計画予定路線と隣接する土地造成地内まで広がっており、建設省紀勢国道工事事務所と開発主体である多気町及び民

間開発業者が協議調整してきた経緯があり、埋蔵文化財の取扱いについて、範囲確認調査は先行する事業者側が行うものとなった。それを受けて多気町教育委員会が調査を行った結果、明気7号墳を含め5基の古墳が確認された。その後の協議で造成計画の延期変更は困難であるという先行業者側からの強い要請があり、多気町教育委員会が本調査を行うこととなった。

また、仮設プレハブを9月に廃止し、同市射和町の鴻ノ木遺跡第2次調査地跡地に、9工区全体の調査で出土する遺物量や、必要人員などを考慮した規模の整理所を建設した。

(3) 平成4年度

予備調査1件(明気窯跡群磁器探査)4,000㎡、範囲確認調査3件(御堂山・上ノ垣外遺跡、明気窯跡群)計850㎡、本調査2件(鴻ノ木遺跡・明気窯跡群)計5,000㎡を行い、鴻ノ木遺跡については2,321㎡の下層調査を追加している。

(4) 平成5年度

範囲確認調査2件(新徳寺・堀町遺跡)計452㎡、本調査4件(明気窯跡群・巣護・上ノ垣外・鴻ノ木遺跡)計11,450㎡を行い、上ノ垣外遺跡で112㎡、鴻ノ木遺跡で2,200㎡の下層調査を追加している。また、伐採工事中に大日山2号墳を発見し、協議の結果、平成6年度に調査を実施することとなった。

また、本年度より報告書作成業務を開始し、明気窯跡群、甘糟・巣護遺跡の遺物整理作業を行った。

工区	No	遺跡名	調査対象面積(㎡) 確認面積	5.4.1 協定	9.3.31現在	調査面積(㎡) 2	3	4	5	6	7	8	9	10	備考
9工区	1	明気窯跡群	2,000	2,900	2,900			範 1,500	1,400	報Ⅰ					
	2	明気古墳群	900	0	0										平成4年度多気町教委調査
	3	甘糟遺跡	2,650	0	0		範			報Ⅰ					試掘調査の結果、本調査の必要なし
	4	巣護遺跡	7,500	2,300	2,300		範		2,300	報Ⅰ					多気町条里遺構を名称変更
	5	上ノ垣外遺跡	6,000	5,000	5,000	範		範	1,950 ※112	3,050 ※64	報Ⅱ				
		椚ノ世古遺跡			50						範	50 報Ⅲ			上ノ垣外遺跡3次調査区を名称変更
	6	新徳寺遺跡	2,400	(2,400)	1,600				範	1,100 ※333	範	500 報Ⅲ ※114			
	7	鴻ノ木遺跡	11,200	13,800	12,560	範1,500 ※850	460	3,500 ※2,321	5,800 ※2,200	1,300			報Ⅳ	報Ⅳ印刷	遺構・遺物多数のため整理に3カ年
	8	朱中遺跡	5,200	5,200	5,200	範	4,800 ※900			400	報Ⅴ				
	9	朱中古墳	400	0	0	範					報Ⅴ				試掘調査の結果、本調査の必要なし
	15	大日山古墳群	600	—	600					600 報Ⅰ					平成5年度工事中新発見
11工区	10	中野前遺跡	4,200	4,200	0					範		報Ⅵ			石津遺跡を名称変更、本調査の必要なし
	11	廿チ遺跡	3,700	3,700	1,600					範	1,600	報Ⅵ			東牛込遺跡を名称変更
		北上遺跡													トレンチ調査
12工区	12	堀町遺跡	9,200	9,200	14,300				範	3,000	3,100	範4,700	3,500	報Ⅶ	報告書Ⅶの印刷は平成11年度
	13	御堂山遺跡	8,100	0	0			範				報Ⅵ			試掘調査の結果、本調査の必要なし
	14	山ノ花遺跡	4,100	4,100	1,300					範	1,300	報Ⅵ			
調査面積合計		範囲確認調査				622	1,052	850	452	496	96	270	—	—	総計 3,838
		本調査				1,500 ※850	5,260 ※900	5,000 ※2,321	11,450 ※2,312	9,450 —	6,000 —	5,250 ※114	3,500 —	—	47,410 6,497
		合計	68,150	52,800	47,410	2,122 ※850	6,312 ※900	5,850 ※2,321	11,902 ※2,312	9,946 —	6,096 —	5,520 ※114	3,500 —	0 —	51,248 ※6,497

第3表　松阪・多気バイパス調査経過、予定表　(範…範囲確認調査　報…報告書作成　※は下層面積)

番号		遺跡名	所在地	調査期間	調査面積（㎡）	担当者
1		みょうげ 明気窯跡群	多気町相可字明気	平成４（1992）年８月28日～９月30日〈試掘〉 〃　10月18日～平成５（1993）年２月28日 平成５（1993）年４月19日～10月29日 ＊平成４年６月17日～６月25日予備調査（磁気探査）	530 1,500 1,400 計 2,430	田村陽一・宇河雅之 田村陽一・宇河雅之 宇河雅之・西村修久
2		みょうげ 明気古墳群	多気町相可字明気		―――	多気町教育委員会
3	9	あまかす 甘糟遺跡	多気町荒蒔字甘糟	平成３（1991）年８月26日～10月11日〈試掘〉	144 計　144	田中喜久雄・野原宏司
4		すご 巣護遺跡	多気町荒蒔字巣護	平成３（1991）年８月26日～10月11日〈試掘〉 平成５（1993）年８月23日～平成６（1994）年１月27日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【多気郡条里遺構】	908 2,300 計 3,208	田中喜久雄・野原宏司 西村修久・東　良樹
5	工区	うえのがいと 上ノ垣外遺跡	多気町荒蒔字上ノ垣外ほか	平成２（1990）年７月23日～９月12日〈試掘〉 平成５（1993）年１月28日～２月１日〈試掘〉 平成５（1993）年８月23日～平成６（1994）年１月27日 平成６（1994）年４月18日～８月31日	68 96 1,950　＊112 3,050　＊64	河瀬信幸 田村陽一・宇河雅之 西村修久 東　良樹・下平康弘
		つがのせこ 栂ノ世古遺跡	多気町相可字栂ノ世古	平成８（1996）年２月６日　〈試掘〉 平成８（1996）年４月11日～５月10日 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【上ノ垣外遺跡３次調査】	48 50 計 5,262　＊176	田村陽一・松本美先 松本美先・小山憲一
6		しんとくじ 新徳寺遺跡	多気町相可字新徳寺	平成５（1993）年７月９日～７月12日〈試掘〉 平成６（1994）年５月23日～８月24日 平成８（1996）年２月６日　〈試掘〉 平成８（1996）年４月11日～６月27日	96 1,100　＊333 48 500　＊114 計 1,744　＊447	宇河雅之 小浜　学・西村修久 田村陽一・松本美先 松本美先・小山憲一
7		こうのき 鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木・水引場・久保田ほか	平成２（1990）年７月23日～９月12日〈試掘〉 平成２（1990）年10月11日～平成３（1991）年３月19日 平成３（1991）年４月23日～５月31日 平成４（1992）年５月11日～８月31日 平成５（1993）年４月19日～８月29日 平成５（1993）年８月23日～平成６（1994）年３月31日 平成６（1994）年８月23日～平成７（1995）年１月25日	272 1,500　＊850 460 3,500 ＊2,321 3,600　＊400 2,200 ＊1,800 1,300 計12,832 ＊5,371	河瀬信幸 河瀬信幸・小林　秀 田中喜久雄・野原宏司 宇河雅之・田村陽一 東　良樹・小浜　学 小浜　学・田村陽一 下平康弘
8		しゅなか 朱中遺跡	松阪市射和町字朱中	平成２（1990）年７月23日～９月12日〈試掘〉 平成３（1991）年６月１日～８月24日 平成３（1991）年10月14日～平成４（1992）年３月13日 平成６（1994）年９月５日～９月22日	184 2,300 2,500　＊900 400 計 5,384　＊900	河瀬信幸 田中喜久雄・野原宏司 田中喜久雄・野原宏司 東　良樹
9		しゅなか 朱中古墳	松阪市射和町字朱中	平成２（1990）年７月23日～９月12日〈試掘〉 平成５（1993）年６月25日～８月20日	98 1,000 計 1,098	河瀬信幸 西村修久
10	11	なかのまえ 中野前遺跡	松阪市上川町字中野前・八王子	平成６（1994）年９月26日～10月５日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【石津遺跡】	176	東　良樹
11	工区	はたち 甘チ遺跡	松阪市上川町字甘チほか	平成６（1994）年10月６日～10月14日〈試掘〉 ＊遺跡名を変更、旧遺跡名は【東牛込遺跡】	144	東　良樹
		きたかみ 北上遺跡	松阪市上川町字北上	平成７（1995）年６月７日～７月19日 〈範囲確認〉	1,600 計 1,744	下平康弘・小林　秀
12	12	ほりまち 堀町遺跡	松阪市朝田町字堀町・斎宮ほか	平成５（1993）年７月19日～７月23日〈試掘〉 平成６（1994）年８月26日～平成７（1995）年２月20日 平成７（1995）年８月７日～平成８（1996）年１月24日 平成８（1993）年７月15日・８月19日～21日〈試掘〉 平成８（1996）年７月15日～平成９（1997）年１月31日 平成９（1997）年５月６日～平成９（1997）年12月10日	356 3,000 3,100 270 4,700 3,500 計14,926	宇河雅之 小浜　学 小浜　学・松本美先 小浜　学・兼古慎 小浜　学・兼古慎 小浜　学・兼古慎
13	工区	みどうやま 御堂山遺跡	松阪市西野々町字御堂山	平成５（1993）年１月26日～１月27日〈試掘〉	224	宇河雅之
14		やまのはな 山ノ花遺跡	松阪市古井町字山ノ花	平成６（1994）年10月17日～10月20日〈試掘〉 平成７（1995）年５月10日～５月26日	176 1,300 計 1,476	東　良樹 松本美先・西村修久
15	9	だいにちやま 大日山古墳群	多気町荒蒔字大日山	平成６（1994）年４月７日～６月10日	600	西村修久・小浜　学

第４表　発掘調査遺跡一覧

すでに述べてきたように、計画されたバイパスは9～12工区というように全体が4つの工区に分けられており、全体の具体的計画や用地買収などについて、不確定要素が大きいまま発掘調査に入らねばならなかったことから、建設省との二者協定や（社）中部建設協会を交えた三者協定などについても、中途で見直しや変更が必要となった。つまり、当初の協定では事業の対象を、とりあえず第9工区の現地発掘調査のみに限定してスタートしたため、後の工事計画や用地買収の進展等に伴って新たに発掘調査が必要になった11･12工区については協定を変更せざるを得なくなった。そのため、4月1日付けで建設省との二者協定を変更した。その結果、現地発掘調査は松阪多気バイパスの全区間を対象に平成9(1997)年度まで実施し、並行して出土遺物の整理・報告書作成を平成5年度から同10(1998)年度まで実施することになった。この協定変更に伴って、建設省・三重県教育委員会・（社）中部建設協会の三者による業務分担に関する協定書の変更、および建設省・（社）中部建設協会の二者による協定変更も同時に行われている。

(5) 平成6年度

範囲確認調査3件（中野前・廿チ・山ノ花遺跡）計496㎡、本調査6件（大日山古墳群、上ノ垣外･新徳寺・鴻ノ木・朱中・堀町遺跡）計9,450㎡を行い、上ノ垣外遺跡で64㎡、新徳寺遺跡で333㎡の下層調査を追加している。

第2図　遺跡地形図（1:5,000）

報告書作成業務は、明気窯跡群、大日山古墳群、甘糟・巣護遺跡を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』として刊行し、上ノ垣外・新徳寺・朱中遺跡、朱中古墳群の遺物整理作業を行った。

(6) 平成7年度

範囲確認調査2件(栂ノ世古・新徳寺遺跡)計96㎡、本調査3件(山ノ花・廿チ・堀町遺跡)計6,000㎡を行い、廿チ遺跡の調査の際に、古道確認の目的で、北上遺跡のトレンチ調査を行っている。堀町遺跡では、調査区より遺跡が広がることが判明したため、平成8年度に試掘調査を行うこととなった。

報告書作成業務は、上ノ垣外遺跡を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ』、朱中遺跡・朱中古墳群を『一般国道松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅴ』として刊行し、中野前・廿チ・北上・御堂山・山ノ花・鴻ノ木遺跡の遺物整理作業を行った。

(7) 平成8年度

範囲確認調査1件(堀町遺跡)270㎡、本調査3件(栂ノ世古遺跡・新徳寺遺跡・堀町遺跡)計4,150㎡の調査を実施した。堀町遺跡の範囲確認調査では、新たに3,500㎡の調査が必要となり、平成9年度に第4次調査として行うこととなった。

報告書作成業務では、新徳寺・栂ノ世古・中野前・廿チ・北上・御堂山・山ノ花遺跡の報告書刊行と鴻ノ木遺跡の遺物整理作業を行っている。

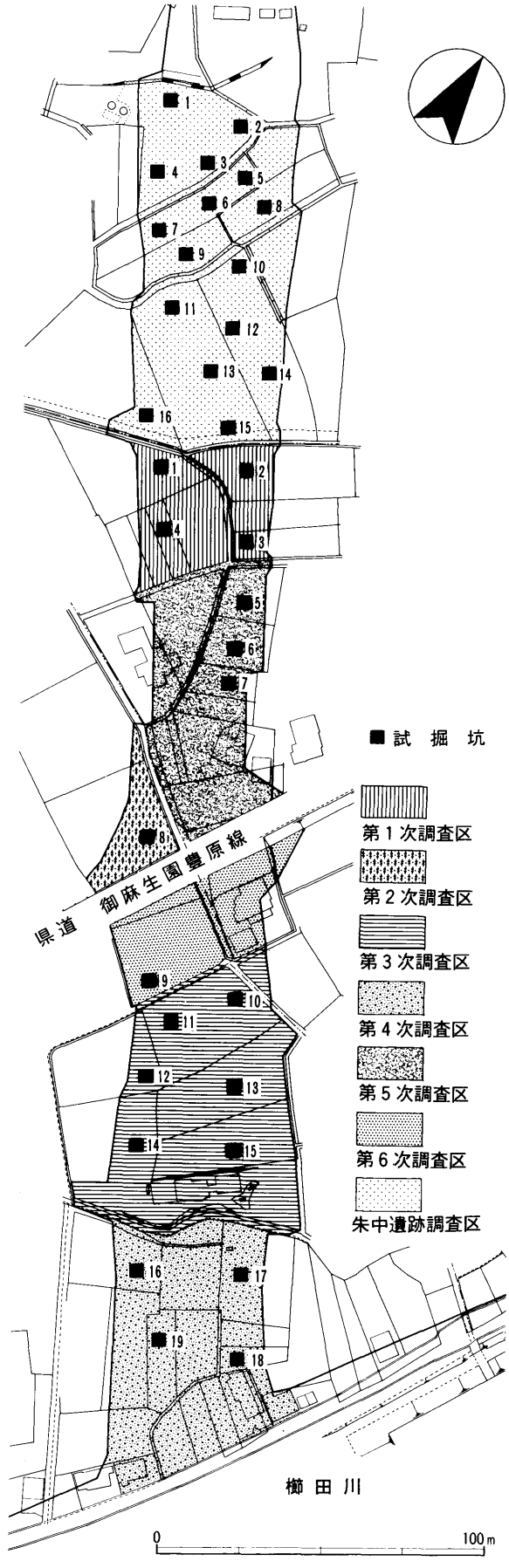
また、第9工区の工事進展に伴い、整理所の移転が必要となった。そこで、第10工区内の松阪市上川町に6月に移転し、平成10年の業務終了まで発掘調査や遺物整理の基地とした。

(8) 平成9年度

現地調査の最終年度にあたり、堀町遺跡(3,500㎡)の発掘調査1件のみである。

報告書作成業務では、鴻ノ木遺跡の報告書作成と堀町遺跡の遺物整理作業を行った。なお、鴻ノ木遺跡の報告書刊行は、業務量過多のため、平成10年度に延期した。

(田村陽一・森川常厚)



第3図　調査区位置図(1:2,000)

Ⅱ．位置と環境

1．位　置

国道42号線松阪・多気バイパスの第９工区は、松阪市中万町と多気町仁田を弓状に結ぶ3.1㎞のルートである。その間、櫛田川を横断することになるが、同時に、両岸の段丘、そして段丘を見下ろす低丘陵も横切ることになる。そのルート上は、適度の水、適度の平地、適度の山林というように、人々が生活するには条件の良好な場所であったようで、様々な遺跡が存在する地域である。

奈良県境の高見山に源をもつ櫛田川は、何回かの屈曲を重ねながら、東方向へと流れる。最初は山間を鋭く切るように流れるが、次第に両岸の段丘面を広げ、当バイパスが横切る付近ではまさしく中流域の様相である。しかし、そこから2.5㎞ほど東方で丘陵地東端の神山にぶつかり、伊勢平野へと流れ出して下流域となる。そのポイントはまた、多気町側から佐奈川が、松阪市側から孫川が合流する所でもある。さらに、以前は櫛田川の本流であったともされる祓川を分流する地点でもある。

2．歴史的環境

以下、櫛田川が中流から下流に流れを変えようかという当松阪・多気バイパス第９工区建設予定地域を中心にして、周辺の歴史を概観してみたい。

＜先土器時代＞

櫛田川流域における人々の足跡は、古くは、先土器時代にまで遡る。それは、主にナイフ形石器の存在で確認される。当バイパス路線の付近では、櫛田川左岸、松阪市中万町の上寺遺跡(46)でチャート製のナイフ形石器が発掘調査時に出土しているし、櫛田川に注ぐ佐奈川の流域では、上世古遺跡(130)で採集されている。しかし、数量としてはいずれも１点のみで、遺跡の規模は小さい。対して、櫛田川とは南におよそ７～８㎞離れて並行するように流れる宮川の流域には、当時の拠点的な遺跡ともされる大規模な出張遺跡が存在し、遺跡数も櫛田川流域よりは多い。櫛田川と宮川の間の外城田川流域には、踏査で数点のナイフが表採された平林遺跡(94)や三川遺跡(86)が所在し、大規模な遺跡と小規模な遺跡の中間的な規模を想定させる。

他に、先土器時代の遺物として、古墳群の調査の際に、多気町東谷Ｃ遺跡(河田古墳群)(76)で男女倉型の木葉形尖頭器が出土している。また、先土器時代の末期の細石刃が、上村池Ｂ遺跡(85)で表採されている。

＜縄文時代＞

やがて人々は、土器作りを学習し、土器を生活の中で活用し始める。その初期の時期、すなわち縄文時代草創期の土器として確実視されるものは、県内では今のところ見つかっていない。しかし、多気町坂倉遺跡(92)出土の土器片の中には、草創期末葉に位置付けられる可能性をもつものが見受けられる。一方、この時期の代表的な石器である神子柴型石斧・有舌尖頭器・木葉形尖頭器などの出土は、櫛田川中流域にも点々とみられる。例えば、近畿自動車道が櫛田川を横切る松阪側の段丘に上ノ広遺跡・王子広遺跡が所在し、この時期の石器がまとまって出土する。さらに、10㎞ほど下流の多気町側中位段丘上には牟山遺跡(64)が知られる。多気町佐奈川の流域では、フケ遺跡(101)で神子柴型石斧が、そして上タコリ遺跡(54)で完形の有舌尖頭器が単独ではあるが出土している。全国レベルでは土器の使用が確立される時期、櫛田川の中流域では、まだ土器の使用が一般的ではなかったのか、それとも単に見つかっていないだけなのか、とにかく現段階では、当時は

まだまだ石器のみの生活だったといえるようである。

しかし、縄文時代も早期になると、土器もさかんに活用されるようである。櫛田川流域での早期押型文土器の出土は県内でも目立つところである。当バイパス路線内の鴻ノ木遺跡(7)をはじめ、同じ段丘に並ぶ鐘突(47)・上寺・射原垣内(42)の各遺跡や対岸の牟山・坂倉両遺跡での、わりあい狭い範囲での出土は、当時の人々の生活の拠点地域を推測させる。もっとも、押型文土器の型式を考慮すると、これらの遺跡の盛衰に時間的な差があり、その点について奥義次氏は、坂倉→鐘突→鴻ノ木→射原垣内→上寺・牟山という順序を示されている[1]。また、鴻ノ木遺跡や坂倉遺跡では炉跡や円形土坑も検出され、遺構のうえでも縄文時代早期を今日に伝えている。

次の縄文時代前期は、全県的に確認遺跡数が少なくなる。櫛田川の流域でもその傾向には変わりなく、前述の早期の遺跡群が、そのまま前期にまで発展を続ける様相は見られない。しかし一方では、勢和村のアカリ遺跡など少数ながら安定した遺跡もみられる。

縄文時代中期は、遺跡数が増加し、また出土する土器は、関東系・瀬戸内系・北陸系・東海系などのものが入り交じり、活発な地域間交流がうかがえる時期である。後半になると、地方色を加味した土器も出現するようになる。ところが、個々の遺跡の規模を見ると、小さく不安定なものが多い。櫛田川流域にも中期の土器の出土・採集地は点々と有るが、いずれも少量の土器片で、例えば田中廻り遺跡(95)では、中期の土器は次時期の土器に混じって数片出土しているにすぎない。また、多気町ナゴサ遺跡(106)のように、大きな川筋から少しはずれた小さな尾根に立地する遺跡もみられる。以後の時期も含めて、このような、時期による遺跡数・遺跡規模の変化は、縄文社会の構造の変化によるものなのか、単に現在の調査の限界によるものなのか、興味深いところである。

やがて、沈線と磨消縄文で特徴づけられる瀬戸内系の中津式土器が登場し、縄文時代後期が始まる。福田Ｋ２式の時期を経て、北白川上層式などの西日本系の縁帯文土器が盛行する後期前葉にはまた、関東系の堀之内式の土器もよく見かける。この時期、櫛田川中流域ではその流れに沿って、勢和村宮切、松阪市王子広、多気町新徳寺（６）、松阪市射原垣内などの各遺跡が形成される。これらの遺跡は、出土土器の型式にほとんど差がなく、同時期にそれぞれの地区で集落を形成していたとも考えられる。石錘の出土が多くなり、人々は川岸に集まり、漁も始めたようである。

後期後葉になると遺跡数が減ってしまう反面、櫛田川流域では勢和村新神馬場遺跡、宮川流域では伊勢市佐八藤波遺跡など、現在でも多数の遺物が表採できる密度の濃い遺跡がみられるようにもなる。櫛田川と宮川の間、外城田川の流域に所在する多気町森荘川浦遺跡(108)もこの後期後葉から末葉にかけて繁栄した遺跡である。そして、つぎの晩期にまで続く様相を示す。

晩期の遺跡は、あまり目だったものは見当たらないが、当バイパス付近では下宮前Ａ遺跡(48)や射原垣内遺跡に土器の断片がみられる。また、櫛田川が沖積地に流れ出る地点の松阪市閑浄寺遺跡(30)でも土器が確認されている。

＜弥生時代＞

弥生時代になっても人々はやはり、櫛田川の段丘を好んだようである。上寺遺跡や鐘突遺跡では弥生前期の土器が出土し、また、鐘突遺跡では円形の竪穴住居も検出された。この、松阪市射和町・中万町における櫛田川から松阪丘陵の裾部にかけての段丘は、以後、古墳時代も奈良・平安時代も、中世においても、延々と人々の生活・居住に適した場所として活用されてきたことが、幾度かの発掘調査で確かめられてきている。

一方、櫛田川の右岸では、明和町神前山古墳群所在地で前期の甕や壺が出土している。そして、櫛田川をさかのぼると、近畿自動車道建設に関わって調査された花ノ木遺跡が中期の遺跡として存在する。竪穴住居と四隅の切れる方形周溝墓が検出され、東海系の縄文を施した土器が出土している。また、県立相可高校のグランド一帯(49)では、後期から古墳時代前期にかけての土器が昭和30年代の工事に伴って出土している。中流域の段丘上に、小規模なムラが形成されたのではないだろうか。

逆に川を下り沖積地が広がる祓川の流域に出ると、

明和町金剛坂遺跡(68)・寺垣内遺跡(69)・斎宮跡古里地区(67)・北野遺跡など、中期から後期にかけて大集落が営まれている。広い沖積地を背景に、大きなムラが形成されていったのであろう。同様の大集落の様相は、松阪市の草山遺跡(20)にも見られる。社会が広い範囲で組織化され、古墳を作り出す時期への準備が進んでいる現れといえよう。

さて、弥生時代の祭器として銅鐸の存在は良く知られるところであるが、多気町四疋田の丘陵裾(65)でも出土したといわれる[2]。銅鐸そのものが行方不明になっていることが残念である。

＜古墳時代＞

古墳時代は、主に古墳の分布で概観してみたい。

古墳時代前期の4世紀後半、古墳はまず松阪市街地に近い金剛川の流域に築かれる。久保古墳(21)、高田2号墳(24)、茶臼山古墳がそれである。また、わかっている出土品が少なく決定的な事はいえないものの、裾部で検出された円筒埴輪棺から坊山1号墳(23)もこの時期の古墳と考えられている。特に、久保・茶臼山の両墳は直径50mを越える規模で、三角縁神獣鏡をもつことが注目される。

5世紀になると、金剛川左岸（阪内川右岸）に宝塚1号墳(17)が築造される。この全長95mの前方後円墳は、大きさ、墳形ともまさしく首長墓の様相を示す。一方、櫛田川の右岸、多気町、明和町、玉城町にまたがる玉城丘陵にも5世紀になると古墳が出現する。辺長49×38mの方形で、滑石製小型丸底壺と半円透孔のある円筒埴輪が出土している権現山2号墳(82)がそれである。

5世紀後半には、宝塚1号墳の北隣に同2号墳が、金剛川流域には大塚山古墳が築かれる。そして玉城丘陵では高塚1号・大塚1号・神前山1号（77・75・73）の各帆立貝式古墳が築造される。

以上のような4～5世紀にかけての古墳の様相、そしてそこからうかがい知れる社会状況については、下村登良男氏の論考があるので参照されたい[3]。

6世紀になると、全国的にそうであるように、櫛田川流域でもやはり群集墳の形成が始まる。特に玉城丘陵には、7世紀にかけて400を越える古墳が造営されている。櫛田川と佐奈川に挟まれた丘陵地にも明気・立岡山・黒田山（2・61・56）などの古墳群がみられ、櫛田川左岸の松阪丘陵縁辺部にも尾だけ・中万大谷・やつで(43・38・35)等の古墳群が存在する。河川流域の広い生産基盤を背景に、古墳造営の可能な集団が多数存在していたわけである。これら群集墳の個々の古墳については、墳形のうえからは円墳と方墳に大別でき、両者を比較した場合方墳は概して新しい感がある。また、埋葬施設については主に木棺直葬と横穴式石室であるが、多気町内の櫛田川と佐奈川に挟まれた丘陵上の古墳には横穴式石室は現在のところ見られず、その採用については造営集団による片寄りがあるようである。

古墳の造営は7世紀中頃まで続くようで、多気町で発掘調査された女山4号墳(83)や森出7号墳(114)はその終末の時期の古墳である。

ところで、6世紀末ごろからはこの地域でも須恵器窯の操業がみられる。櫛田川以北では根後・分れ谷窯跡(19・27)が、以南では中尾・明気などの窯跡(63・1)が今日にそれを伝えるが、明気古墳群の付近には蜜柑園造成時に窯跡らしきものがあったとも聞く。特に櫛田川の右岸地域は、現在知られる窯跡以上の規模の須恵器生産地であったようだ。

このように、古墳造営や須恵器窯の操業をみると、この地域が古墳時代末、政治的・経済的・技術的に安定充実し、賑わいをみせていたように思える。しかし、当時の集落跡は当バイパス付近では今のところ見つかっていない。段丘の微高地にある現在の集落と重なるのかもしれないが、今後の発見が期待される。ともあれ、この社会的エネルギーは以後の櫛田川中流域の歴史に引き継がれる。

＜奈良・平安時代＞

須恵器窯は、7世紀後半、外城田川沿いで操業されるようになる。原・市寄窯跡群(120・121)は7世紀後半から8世紀前半にかけての計14基の窯跡であり、製品の供給地として「斎宮」をも想定できるようである[4]。

仏教の広まりに従い、8世紀には寺院の建立もなされた。松阪市では丹生寺廃寺や御麻生薗廃寺、大雷寺廃寺(29)、多気町では釈尊廃寺、逢鹿瀬廃寺(128)、四神田廃寺(佐奈山廃寺)(100)などで古瓦の出土を見る。同時に、瓦窯の存在もまた注目される。近畿自動車道の建設に伴い発掘調査された多気

第４図　遺跡位置図（１：50,000）　（国土地理院　大河内・松阪・横野・国束山　１：25,000）

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
1	明気窯跡群	須恵器窯5基	R42バイパス関連
2	明気古墳群	古墳12基	〃
3	甘糟遺跡	中世土師・陶器片	〃
4	巣護遺跡（多気条理）	平安末～鎌倉土器、石帯	〃
5	上ノ垣外遺跡	縄文～鎌倉土器、大珠	〃
6	新徳寺遺跡	縄文後期の竪穴住居・土器	〃
7	鴻ノ木遺跡	縄文早期炉跡、竪穴。押型文	〃
8	朱中遺跡	奈良～平安土器・掘立・竪穴	〃
9	朱中古墳	樽形※片	〃
10	中野前遺跡（石津遺跡）	山茶碗、天目茶碗等細片	〃
11	甘チ遺跡（東牛込遺跡）	山茶碗 、近世陶器等	〃
15	大日山古墳群	古墳4基	〃
16	長庄野遺跡	ナイフ	
17	宝塚古墳群	1号前方後円墳 全長95m。2号帆立貝式 径60m。	
18	上出遺跡	方形周溝、方墳、家型埴輪ナイフ、石鏃、石匙	S41年度発掘調査
19	根後窯址	1～3号窯、6～7C須恵	
20	草山遺跡	方形周溝墓、弥生竪穴・掘立、奈良～中世掘立	S57～S59年度発掘調査
21	久保古墳	径52.5、高 6m円墳	漢式鏡、車輪石等出土
22	権現山古墳群	円墳4基	
23	坊山古墳群	円墳3基。1号墳 径40m・神獣鏡・円筒埴輪棺。	S60年度1号墳発掘調査
24	高田古墳群	円墳3基。2号墳 径27m・銅鏡石釧・円筒埴輪棺。	
25	貴田寺廃寺	軒丸・軒平瓦	
26	分れ谷遺跡	縄文土器片（中期後半～後期初頭）。	
27	分れ谷窯	窯壁一部露呈	
28	西野々広古墳群	前方後円墳1基、円墳11基	
29	大雷寺廃寺	軒丸・軒平瓦	
30	閑浄寺遺跡	大溝、古墳竪穴、奈～平掘立	S62年度発掘調査
31	天王山古墳群	円墳10基 円筒埴輪・人物埴輪。須恵器	
32	西谷古墳群	円墳3基	
33	山添古墳群		S59年度発掘調査
34	山添遺跡	伊勢型鍋、井戸	S53年度発掘調査
35	やつで古墳群	円墳3基。3号墳横穴式石室	
36	長谷古墳	円墳、石室	
37	片田古墳		痕跡墳
38	中万大谷古墳群	円墳7基。3号墳横穴式石室	
39	弁天窟古墳	横穴式石室	
40	神山城跡	台状地、堀切	
41	八の坪遺跡	土師器	
42	射原垣内遺跡	縄文弥生古墳竪穴、室町掘立押型文土器、石斧、古式土師	S54年度発掘調査
43	尾だけ古墳群	円墳7基。5号墳須恵器杯身	
44	岡山古墳	円墳	
45	戸笠遺跡	弥生土器片、山茶碗片	S54年度発掘調査
46	上寺遺跡	弥生古墳奈良竪穴住居、ナイフ、押型文	S55年度発掘調査
47	鐘突遺跡	弥生奈良竪穴住居、押型文土器	S55年度発掘調査
48	下宮前A・B遺跡	石鏃・縄文土器片・須恵器片・土師器片	
49	校庭遺跡	台突壺等	
50	九十九戸遺跡	サヌカイト片、山茶碗片	
51	柚木元遺跡	サヌカイト片、山茶碗片	
52	中万前遺跡	サヌカイト片、須恵器片	
53	藪ノ下遺跡	サヌカイト片、須恵器片	
54	上タコリ遺跡	有舌尖頭器	
55	高寺遺跡	石鏃、須恵器片	
56	黒田山古墳群	古墳15基、石鏃	
57	宮ノ谷古墳群	円墳2基	
58	石山古墳群	円墳6基	
59	石塚谷古墳	円墳。銀象眼鉄刀	H3年度発掘調査
60	倉懸古墳群	円墳2基	H4年度発掘調査
61	立岡山遺跡群	円墳4基。中世墓群。	H3年度発掘調査
62	中尾古墳群	円墳2基	
63	中尾窯跡	須恵器窯	S50年度発掘調査
64	牟山遺跡	尖頭器、石斧、押型文土器	S38年度発掘調査
65	（伝）銅鐸出土地	S19年に銅鐸が出土したという。	
66	狐谷古墳群	須恵器（杯蓋身・※等）のスケッチが残るのみ。	
67	斎宮跡	官衙跡の他に方形周溝墓等	国史跡
68	金剛坂遺跡	縄文土器、方形周溝墓、竪穴住居	S44・59・60年度発掘調査
69	寺垣内遺跡	パレス壺、方形周溝墓、竪穴住居	S60・61年度発掘調査

第5－1表　遺跡一覧

No.	遺跡名	主な遺構・遺物	備考
70	神殿遺跡	方形周溝墓、竪穴住居、独鈷石	S60・61年度 発掘調査
71	川原口遺跡	竪穴住居、土器焼成壙	S61年度 発掘調査
72	コドノA・B遺跡	ナイフ、有舌・木葉尖頭器、 石鏃	
73	神前山古墳群	1号、帆立貝、画文帯神獣鏡 特殊※ 、埴輪、弥生土器	S47年度 発掘調査
74	天王山古墳群	6号前方後円墳。19号 径52m 円墳。	
75	大塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪	
76	河田古墳群	総数 100基 現在までに52基が発掘調査済	S48 ～50 57 60 H2年度発掘調査
77	高塚古墳群	1号帆立貝式、埴輪	
78	上村池古墳群	横穴式石室も多い。	
79	ユブミ古墳群	2号前方後円墳	
80	斎宮池古墳群	12号前方後円墳	
81	朝久田古墳群	円墳・方墳計24基	
82	権現山古墳群	方墳2基。2号から石製小型壺 埴輪	
83	女山古墳群	4号方墳、木棺直葬。須恵器	S47年度 発掘調査
84	坂倉古墳群	円墳4基	
85	上村池B遺跡	細石刃	
86	三川遺跡	ナイフ	
87	マイラ遺跡	石棒	
88	畑ノ田遺跡	有舌尖頭器	
89	東裏遺跡	掘立柱建物。須恵円面硯 緑釉風字硯、「中臣」墨書土器	S53年度 発掘調査
90	カウジデン遺跡	掘立柱建物、土馬、斎串 「中万」墨書土器	S54年度 発掘調査
91	多気遺跡	石鏃	
92	坂倉遺跡	縄文早期炉跡・土坑 押型文土器、尖頭器、耳飾	S49年度 発掘調査
93	長迫間A・B遺跡	掘立柱建物。須恵器、土師器	S47年度 発掘調査
94	平林遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器	
95	田中廻り遺跡	縄文後期土器	S52年度 発掘調査
96	五佐奈遺跡	井戸、斎串	S52年度 発掘調査
97	西山城跡	土塁、堀。伊勢型鍋	H 6年度 発掘調査
98	片倉氏館跡	山茶碗等	H 6年度 試掘
99	ミゾコ遺跡	井戸、石組遺構、伊勢型鍋	S59年度 発掘調査
100	四神田廃寺	軒丸、軒平瓦	
101	フケ遺跡	石斧、縄文早期土器	
102	サソダ遺跡	ナイフ	
103	矢田城跡	土塁、台状地	
104	向野遺跡	舟底形石器	
105	南山西窯跡群	須恵器窯2基。飛鳥以降	
106	ナゴサ遺跡	柳葉形尖頭器、石斧、 縄文中期土器	
107	二ツ山遺跡	木葉形尖頭器片、石剣片	
108	森荘川浦遺跡	石鏃、石斧、土偶片、 縄文後期土器	H元・6年度 発掘調査
109	林中遺跡	須恵器片	
110	長安寺窯跡群	須恵器窯跡2基。飛鳥以降	
111	南ノ山窯跡		
112	北の山B・C窯跡	須恵器	
113	北の山A窯跡	須恵器	
114	森出古墳群	7号方墳・木棺直葬・ 須恵器長頸壺等	S49年度7号墳 発掘調査
115	笠木館跡	多郭連続形式、土塁、空堀	S50～S51年 度測量調査
116	中村ノ内窯跡		
117	ぼうず山古墳群	円墳19基	
118	山神城跡	堀切、土塁、土橋	S2年度 発掘調査
119	泉貢窯跡	須恵器窯。10c前半	S2年度 発掘調査
120	原窯跡群	須恵器窯11基。飛鳥以降	S38年度10・11 号窯発掘調査
121	市寄窯跡群	須恵器窯3基。7c末～8c	
122	ハム谷窯跡群		
123	池ノ谷窯跡群	須恵器窯3基。古墳～奈良ごろ	
124	コノハタ遺跡	木葉形尖頭器	
125	ナゴ遺跡	石鏃、石匙、石斧	
126	牛ﾊｻﾏ A・B遺跡	押型文土器、有孔石製品	H元年度 発掘調査
127	西谷遺跡 (栃ケ池瓦窯)	軒丸、軒平瓦	
128	相鹿瀬廃寺	軒丸・軒平瓦	
129	五桂池遺跡群	石鏃、石匙、石斧	
130	上世古遺跡	ナイフ	
131	日向遺跡	ナイフ、木葉形尖頭器	
132	佐奈水銀鉱山跡	9ヵ所の坑口。S18年探鉱。	H元年度2基の 坑口測量調査

第5－2表　遺跡一覧

町牧瓦窯跡群は、８基の窯からなり、８世紀の初頭から中葉ごろにかけて操業していたと考えられる。４・８号窯で焼かれた瓦と丹生寺廃寺・御麻生薗廃寺で出土している瓦が同范であり、生産地と供給先の関係が明かとなっている。また、同様に、西谷遺跡（栃ヶ池瓦窯）（127）と逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺の関係も考察されている。なお、瓦片が採集され、現在四神田廃寺としている遺跡については、瓦窯跡ではないかという見方もある[5]。

ところで、櫛田川中流から下流にかけては、飯野・多気両郡に施行された条里制の地割りがみられるところである。条は北から南に区画され、多気町津田地区あたりは多気郡の第十六条となる。里は、西から東へ数えられ、現在残る三正田、四正田という地名は、里数を冠するものであることはよく知られている。しかし、当地域の条里地割りは、地域全体がひとつの碁盤目で区切られるのではなく、場所によって地割りの方向性をやや異にするようである。そのことが一つの特徴ともいえ、耕地が徐々に整備された証しともいわれている[6]。

９世紀の始め、この水田地域の一部は荘園として京都東寺に寄進された。川合荘、大国荘と称され、東寺にとっては重要な寺領であった。しかし、多気・飯野の両郡は度会郡とともに古来より神三郡といわれ、伊勢神宮支配の土地でもあった。東寺と神宮とのもめごとも少なからずあったようで、10・11世紀の記録に見られる。また、多気町内にあった成願寺（はっきりした所在地は不明）と東寺の紛争の記録も残る。当時の土地支配の複雑性を垣間見ることができるといえよう。

また、古代における様相の一部は発掘調査からもうかがえる。多気町河田の東裏遺跡（89）やカウジデン遺跡（90）、五佐奈遺跡（96）では奈良～平安時代ごろの土器や祭祀遺物（斎串・土馬）が出土し、掘立柱建物が検出されている。中でも、緑釉の風字硯や「中臣」と墨書された椀の出土には、この地域では一般的でない何か特別な意味合いを感じる。中央からの役人がいたのであろうか、荘園経営に関する“事務所”があったのであろうか？　また、カウジデン遺跡から出土した皿や椀の「中万」という墨書は、櫛田川を挟んだ松阪側の集落名である中万との関わり、同時に大国荘との関わりで興味深い。発掘調査報告書によると、中万の人々による出作の可能性も指摘されているようである。

＜鎌倉時代以降＞

武士が台頭した時代、北畠氏の支配下にあったこの地には、山城跡も所々にみられる。玉城町の田丸城の支城として重要な位置をしめた神山城（40）、また、多気町笠木の舌状台地には笠木館跡（115）が確認されている。この館跡は東西500m・南北400mの規模をもち、土塁や堀で区画された郭を連ねる構造のものである。この館の西南約1.5kmの山頂には矢田城跡（103）が所在し、山城と館の有機的な関連がうかがわれる。

神山城の北東の平地では、石積み井戸や掘立柱建物を検出し天目茶椀や土師器鍋・羽釜を多数出土した山添遺跡（34）が調査されており、また、射原垣内遺跡でも室町時代を主体とした集落跡が調査により明らかとなった。多気町側では、矢田城の南西の東の平地で鎌倉～室町時代にかけての遺跡であるミゾコ遺跡（99）が発掘調査されている。これら発掘調査された遺跡及びその周辺の水田・畑の他に、三正田や四正田の水田地、荒蒔や兄国の自然堤防上など、各所に鎌倉～室町期のものと思われる土師器細片が散布している。現在の地表とほとんど変わらないところで中世の人々も生活していたのであろう。集落などは、現在のものと多分に重なっているのではないだろうか。

＜水銀＞

ところで、勢和村丹生を中心として採取された水銀については、少し付記しておかなければならないであろう。８世紀末成立の『続日本紀』には、文武天皇二（698）年や和銅六（713）年に伊勢国からの朱砂（辰砂）・水銀の献上の記述が見られる。伊勢の地に、丹生のほかにまとまった水銀鉱山が知られていない以上、これらの記述の水銀（辰砂）は丹生のものとみて差支えないと思われる。奈良時代中頃の東大寺の盧舎那仏造営に際しては、大量の水銀が使用されているが、これも丹生産のものであろうことが定説となっている。平安時代後期に成立した『今昔物語集』にも伊勢国の水銀に関係する話がみられ当時丹生の水銀鉱はよく知れわたったものであった

ようだ。中世には全国唯一の水銀座が組織されていたことが知られている。そして、丹生から櫛田川筋に約８km下流の射和の地には、水銀を原料として白粉を生産する産業が興り、江戸時代を通しての射和の繁栄につながる。

これら文献に現れるはるか以前にも、辰砂は赤彩の原料として利用されている。縄文時代後期の松阪市王子広遺跡や多気町森荘川浦遺跡からは朱彩された土器が出土しているのである。勢和村の池の谷遺跡では、縄文晩期の朱彩土器とともに、辰砂原石も、出土している。

中央構造線に沿って存在する辰砂の鉱脈は、当地域に長い間“特産物”を供給し続けたのである。

（西村　修久）

〔註〕

① （参考文献１）
② 「伝銅鐸出土地」として、多気町の指定文化財となっている。1944(昭和19)年秋、流水文銅鐸が出土したとのことであるが、写真・図等も残されていない。
③ （参考文献11）
④ （参考文献12）
⑤ （参考文献13）
⑥ （参考文献14）

〔参考文献〕

1 『多気町史　通史』多気町　1992
2 『松阪市史　第二巻　資料編　考古』松阪市　1978
3 奥義次「多気町内の遺跡めぐり①～㉘」『広報たき』連載　1974～1976
4 『三重県多気郡明和町遺跡地図』明和町　1988
5 『第12回三重県埋蔵文化財展　三重の縄文時代』三重県埋蔵文化財センター　1992
6 『ふびと　34　－多気地域調査報告－』三重大学歴史研究会　1978
7 三重大学原始古代史部会「玉城丘陵上の古墳群について」『ふびと　36』三重大学歴史教室・同研究会　1979
8 『三重の中世城館』三重県教育委員会　1977
9 『三重県埋蔵文化財センター研究紀要　第２号』三重県埋蔵文化財センター　1993
10 「東大寺要録」『続々群書類従　第11巻』所収
11 下村登良男「南勢地方の大形古墳」『八重田古墳群発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1983
12 宇河雅之・瀬野弥知世・塚田幸子「市寄窯跡群出土の須恵器について」『Mie　history　vol.7』三重歴史文化研究会　1994
13 河北秀実「西谷遺跡（栃ヶ池瓦窯）・逢鹿瀬廃寺・四神田廃寺採集瓦の同笵関係と想定される供給パターン」『Mie　history　vol.7』三重歴史文化研究会　1994
14 倉田康夫「伊勢湾西岸地域における条里制の歴史地理学的考察」『条里制と荘園』　東京堂出版　1976
15 下村登良男・奥義次『上寺遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981
16 下村登良男・奥義次『鐘突遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会　1981
17 『射原垣内遺跡発掘調査概報』松阪市教育委員会　1980
18 新田洋『山添遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1979
19 『新神馬場遺跡発掘調査報告書』三重県立津高等学校地歴部　1972
20 下村登良男『大阪変圧器ＫＫ三重工場埋蔵文化財発掘調査報告』多気町教育委員会　1974
21 吉水康夫『河田古墳群発掘調査報告１』多気町教育委員会　1974
22 下村登良男『河田古墳群発掘調査報告Ⅲ』多気町教育委員会　1986
23 川村輝夫他『河田古墳群発掘調査報告Ⅳ』多気町教育委員会　1983
24 三ッ木貞夫・谷本鋭次「多気郡多気町カウジデン遺跡」『昭和54年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会　1980
25 増田安生『ミゾコ遺跡発掘調査報告』三重県教育委員会　1985
26 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊１－』三重県教育委員会　1989　・・・・上ノ広遺跡・花ノ木遺跡・浅間山北遺跡・釈尊寺遺跡・下村Ａ遺跡　他
27 『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊２－』三重県教育委員会　1989　・・・・牧瓦窯跡群・鍬形中世墓群
28 『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　－第１分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1992・・・・佐奈水銀鉱山跡・牛バサマＡ遺跡・牛バサマＢ遺跡
29 『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査報告　－第２分冊－』三重県埋蔵文化財センター　1992　・・・・泉貢窯跡・山神城跡
30 三ッ木貞夫・森田尚宏他『出張遺跡調査報告書』大台町出張遺跡調査会　1979
31 「多気ニュータウン埋蔵文化財ニュース」多気町教育委員会　1991［各戸配布資料］
32 「多気町　遺跡ニュース」多気町教育委員会　1992　［現地説明会資料］
その他、「三重県埋蔵文化財年報」三重県教育委員会（昭和63年度まで）及び「三重県埋蔵文化財センター年報」三重県埋蔵文化財センター（平成元年度以降）、関係各市町村の『遺跡台帳』を参考にした。

Ⅲ. 第1次調査

1. 遺　構

第1次調査区は、本遺跡の第6次調査にまで及ぶ調査区の最北端に位置し、南には第5次調査区が隣接する。基本的な層序は、耕作土である表土（茶灰褐色土）が厚さ10～40㎝、第2層（黒褐色土）が、5～30㎝、第3層（褐色土）が20～50㎝、そして、黄褐色砂質粘質土の地山に達する。黒褐色土の第2層が遺物包含層で、その直下の褐色土層の上面で遺構の検出を行った。以下、時代別に各遺構の報告を行う。

(1) 古墳時代の遺構

土坑

SK20　長軸2.2mの瓢箪状の土坑である。土坑中央やや東よりに段差があり、検出面からの深さが、土坑西側0.38m、東側0.55mある。出土遺物は僅かであるが、4世紀代のS字甕や6世紀代の土師器・高杯が出土している。

SK22　平安後期の溝SD5に西端部を切られ、全体像は不明。残存部分では、長辺1.2m、短辺0.5mの長方形で、検出面からの深さ0.21～0.57mあり、中程に0.3m程度の段差を持つ。土錘や4～5世紀代の台付き甕の脚部片が出土。

SK27　最大径1.8 m、検出面からの深さ0.22～0.41mの不整円形の土坑である。土坑西端に円形の窪みがあり、この地点が土坑最大深度となる。出土遺物として、弥生土器・壺（58）、土師器・壺（82）、同・甕（85）、同・台付き甕（86）があげられる。弥生土器は混入遺物である。

(2) 奈良時代の遺構

溝

SD2　ほぼ東西に延びる溝で、西端は平安後期の溝SD5に切られ、東端は調査区外に延長する。従って、全体の規模は不明であるが、検出した長さ13.2mの部分に限定すると、幅0.4～0.8m、深さ0.16～0.29m程度の規模である。8世紀代の土師器・皿の小片が出土している。

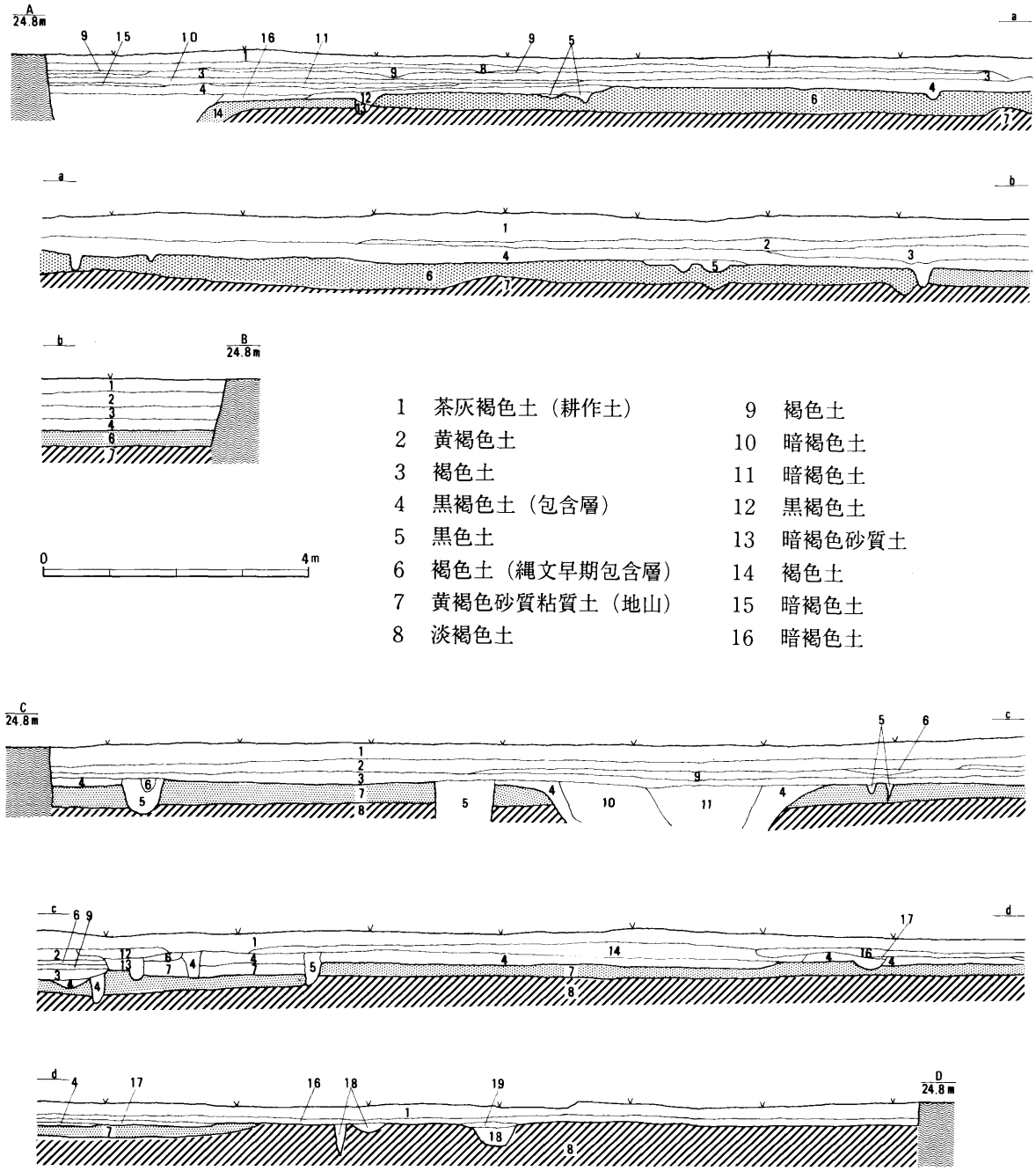
SD6　北西～南東方向に延びる短い溝で、南東端が平安後期の溝SD5に、溝中央付近が径約0.5mの2つのピットに切られているため、全体の規模は不明であるが、検出した長さ6.8mの部分に限定すると、幅0.8～1.2m、深さ0.2～0.24m程度の規模である。8世紀前半の須恵器・蓋の破片が出土している。

SD18　調査区の南西端に位置するSD18は、南西～北東方向に流れる旧流水路と考えられるが、その両端は調査区外へと延長しており、全体の規模は不明である。調査区内で検出した範囲では、南西～北東約18.4m、幅3.2～4.4m、深さ0.98～1.29mある。埋土は、水路中央が褐色砂、両岸に近いところが褐色砂質土であり、その底付近から縄文土器・深鉢片（25）、弥生土器・壺（31・35・36・40・45・・51・55）、同・甕（48・57・60）が出土している。その他、土師器・高杯（93）、同・甕、須恵器・蓋などが出土しているが、埋土が殆ど砂で、短時間に埋没した可能性もあり、縄文及び弥生土器は、流れ込み等による混入遺物であると思われる。

(3) 平安時代前期の遺構

土坑

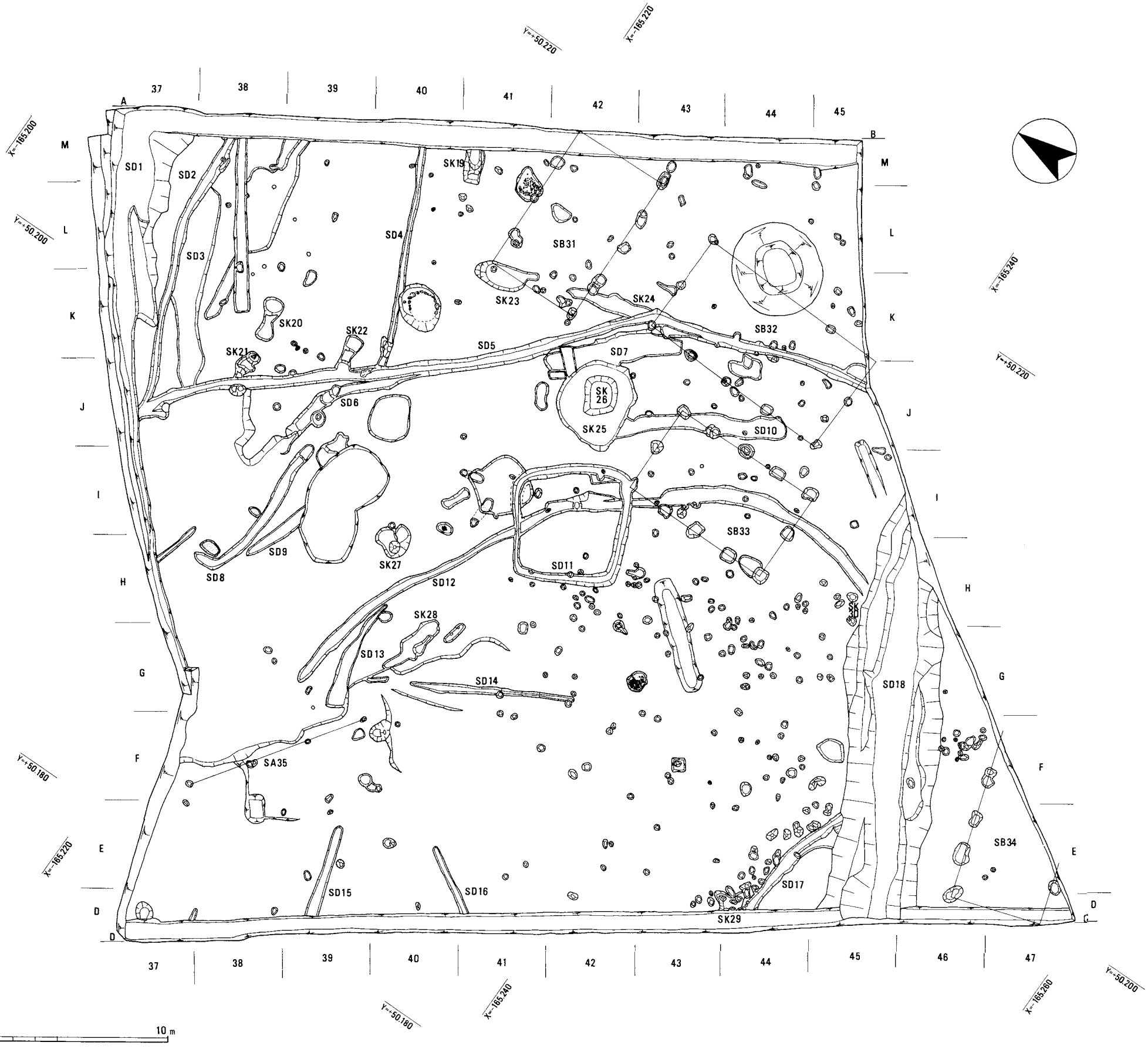
SK25・26　最大径4.2mの不整円形の土坑である。土坑底部中央に1.4m×1.8m程度の不整方形状の落ち込み（SK26）があり、検出面からの最大深度は0.78mある。出土遺物に、弥生土器・壺（59）、同・甕（54）、須恵器・杯（108）、同・蓋、同・椀、土師器・甕（1・2・87）、同・杯等があるが、土坑の形状や周辺の遺構との関係から、この2つの土坑は同一遺構で、平安前期の遺構と考えたい。



1 茶灰褐色土（耕作土）
2 黄褐色土
3 褐色土
4 黒褐色土（包含層）
5 黒色土
6 褐色土（縄文早期包含層）
7 黄褐色砂質粘質土（地山）
8 淡褐色土
9 褐色土
10 暗褐色土
11 暗褐色土
12 黒褐色土
13 暗褐色砂質土
14 褐色土
15 暗褐色土
16 暗褐色土

1 褐色土（耕作土）
2 暗褐色土
3 褐色土
4 黒褐色土
5 黒色土
6 黒褐色暗黄褐色混土
7 褐色土（縄文早期包含層）
8 黄褐色粘質土（地山）
9 暗褐色土
10 褐色砂質土
11 褐色砂土
12 褐色土
13 黒褐色暗黄褐色混土
14 褐色土
15 黄褐色砂質土
16 灰黄褐色土
17 暗灰黄褐色土
18 黒褐色土
19 暗褐色土

第5図　調査区土層断面図（上：東壁、下：西壁）（1：100）

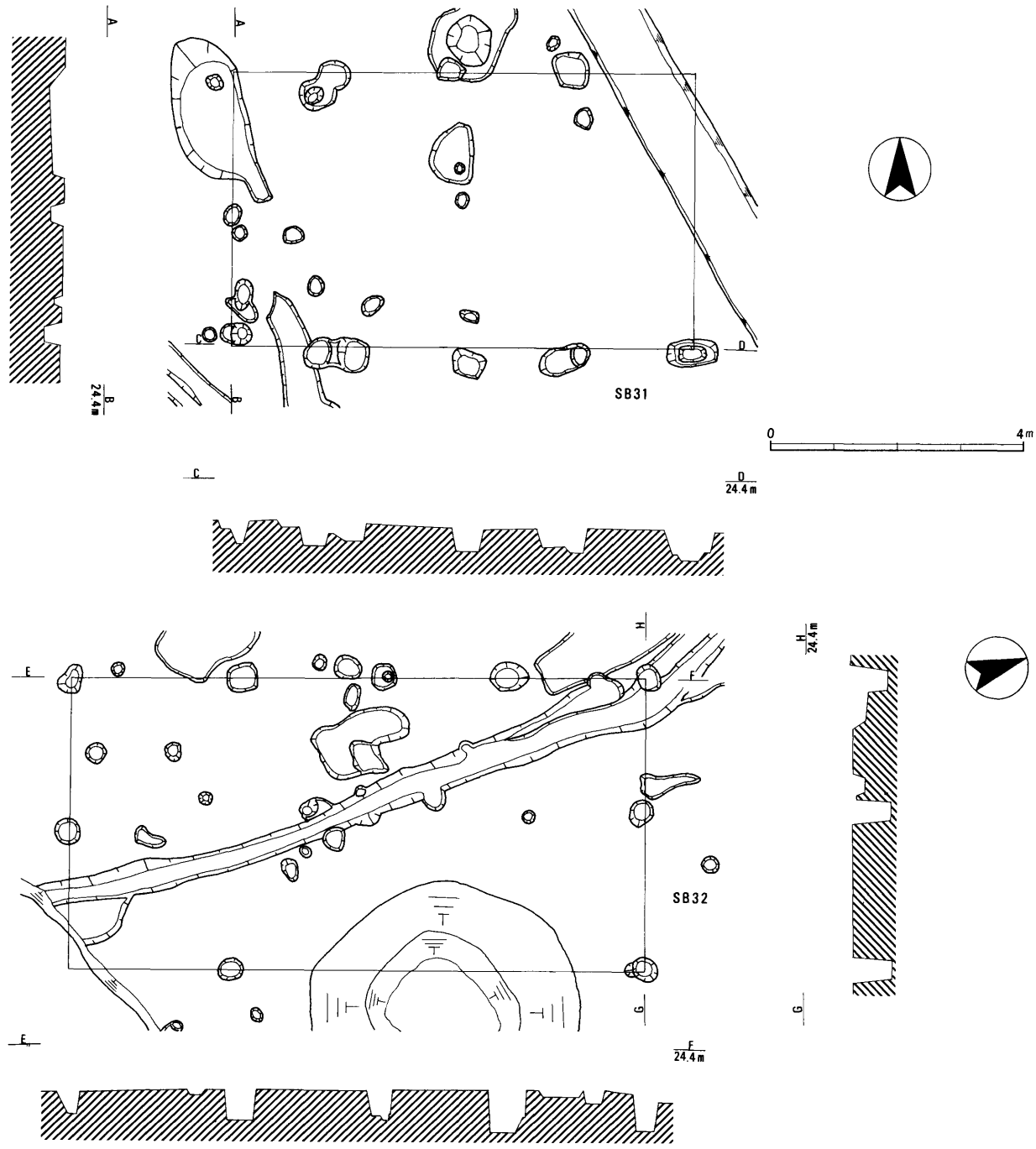


第６図　調査区平面図（1：200）

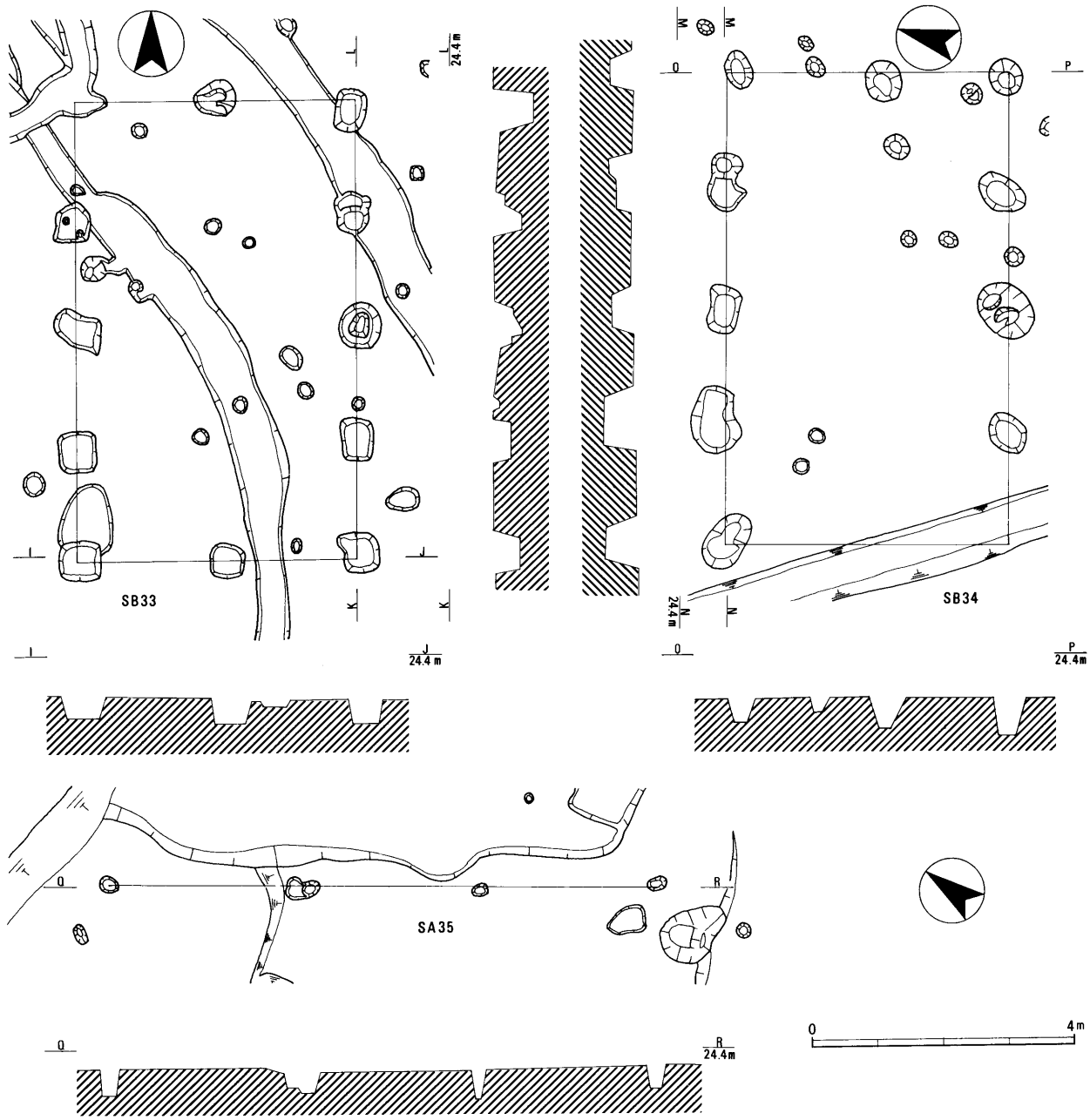
掘立柱建物（第６表参照）

SB31～33　それぞれ出土遺物が僅少で、時期決定の決め手に欠くが、いずれも6～8、9世紀代とみられる土師器片等が出土しており、また、棟方向も一致していることなどから、三棟はほぼ同時期のもので、平安前期と考えたい。規模は推定も含めると、いずれも２間×４間で、ＳＢ３１はＥ０°Ｓ、ＳＢ33は、Ｎ0°Ｅの正方位を示し、ＳＢ32でも、Ｎ３°Ｅで、僅か３°の擦れしかない。また、ＳＢ33は、他の2棟に比して、柱掘形が大きく、主屋的なものであった可能性が考えられる。この3棟の掘立柱建物に囲まれる形でSK25･26があるが、この遺構自体の性格は不明であるものの、何らかの関係を持つのかもしれない。

SB34　調査区南端部に位置し、調査区外に延びているが、隣接する同遺跡第5次調査の結果から、



第７図　ＳＢ３１・ＳＢ３２実測図（１：100）



第8図　SB33・SB34・SA35実測図（1：100）

遺構番号	規模 間数	桁行(m)	梁行(m)	面積(㎡)	棟方向	柱間寸法 桁行(m)	梁行(m)	時代	出土遺物	備考
SB31	4×2	7.2	4.4	31.68	E0°S	1.8+1.8+1.8+1.8	2.2+2.2	平安時代前期	土師器 甕	・調査区外に延びる。 ・北西角の柱穴はSK23に切られたか？
SB32	4×2	9.0	4.6	41.40	N3°E	2.1+2.0+2.2+2.7	2.1+2.5	平安時代前期	土師器 小片	・調査区外に延びる。 ・東側桁行方向は、攪乱土坑により柱穴消滅か？
SB33	4×2	7.0	4.2	29.40	N0°E	1.8+1.7+1.7+1.8	2.2+2.0	平安時代前期	土師器 小片	・北西角の柱穴はSD11に切られたか？
SB34	4×2	7.2	4.3	30.96	E16°N	1.8+1.8+1.8+1.8	2.4+1.9	平安時代前期	土師器 小片	・調査区外に延びる。 ・各数値は、南側に隣接する同遺跡第5次調査の結果との接合から計測。
SA35	3	8.3			E36°S	3.0+2.6+2.7		不明	なし	

第6表　掘立柱建物・柱列一覧表

2間×4間の規模であることが確認された。出土遺物が乏しく、時期決定の決め手に欠くが、6～9世紀代とみられる土師器片が出土しており、前述のSB31～33とも棟方向に大きな擦れもなく、大幅な時期差はないと思われるため、平安前期のものと考えたい。

(4) 平安時代後期の遺構

土坑

SK30　SD12がSD18の直前で途切れた部分の直ぐ西に位置し、ほぼ円形で、断面形態がU字形を呈する。最大径0.4m、深さ0.34m程度の小規模土坑である。ここでは、まとまった形で良好な土器が出土している。土師器・皿、同・杯（10・11）、同・椀(12)、同・甕（13～15)、黒色土器（16)、ロクロ土師器・椀、陶器・椀（17）等、遺構の規模に比して多数の出土が見られ、一括した良好な資料と言える。中でも、底部内面に「×」と朱書きされた土師器・杯（11）は出土例も少なく、注目される。ただ、周辺の遺構配置を勘案しても、本遺構と明確な関連性を見いだせるものは無く、単独で築かれたものであると思われる。また、遺物の出土状況からは埋納された可能性は低く、遺構の性格は不明である。

溝

SD1　調査区の北隅に位置し、その大部分が調査区外であるため、全体の規模は不明であるが、東西方向に流れていた旧流水路と考えられる。調査区内の範囲では、深さ0.6 m程度のものであるが、ここでは多数の出土遺物が見られ、弥生土器・壺（38・56)、須恵器・杯（109・111)、土師器・椀（62・63)、同・杯（66～72)、同・皿(73)、同・甕(89)、ロクロ土師器・椀(95)等が、主に灰褐色砂質の埋土の下層から出土した。弥生土器と須恵器は、上流からの流れ込み等の混入遺物であろう。

SD3　同時期の溝SD5と奈良時代の溝SD2と重複しているため、全体の規模は不明であるが、残存部分のみに限定すると、東西に約9m、幅約1.2m、深さ0.04～0.2mの規模である。奈良時代の土師器・皿と11世紀代の土師器・杯、同・甕の小片が出土している。

SD4　西端を同時期の溝SD5に切られ、東端は調査区外へ延長するため、全体の規模は不明。検出部分のみの規模が、東西に約10m、幅約0.4m、深さ0.06～0.22mである。

SD5　調査区をほぼ南北に貫くこの溝は、両端が共に調査区外に延長するため、全体の規模は不明であるが、検出範囲の規模で、全長約34m、幅0.4～1.2m、深さ0.11～0.4mあり、西側へやや内弯している。須恵器・蓋(110）や灰釉陶器・椀、ロクロ土師器の破片や、土錘(100）が出土した。須恵器は混入遺物である。

SD7　平安前期の土坑SK25・26と攪乱土坑に切られ、全体の規模は不明。残存部分のみの規模で、北西～南東に約6.4m、幅1.7m、深さ0.1～0.14mある。土師器・皿(78)や山茶椀、土錘(99)の出土が見られた。

SD10　北西端部が平安前期の土坑SK25・26に切られ、全体の規模は不明。残存部分のみの規模で、北西～南東に約8m、幅0.5～1.0m、深さ0.06～0.11mある。土師器・皿の破片が出土。

SD11　調査区のほぼ中央に位置し、幅0.2～0.5m、深さ0.17～0.36mの溝が巡る隅丸方形を呈した方形周溝遺構である。その規模は一辺約5.0～5.6mである。出土遺物として、灰釉陶器、土師器・皿、同・杯（3～5)、同・甕（6～8)、山茶椀（9）等があり、平安後期の遺構と認められる。

SD12　西から南へ湾曲しながらSD11の中央やや東寄りを貫き、調査区南端まで延長するが、SD18の直前で途切れている。全長約30m、幅0.4～0.8m、深さ0.05～0.14mの規模で、調査区のほぼ中央部に横たわっている。縄文土器・深鉢小片（20)、弥生土器・壺(50)、ロクロ土師器・椀(97)、山茶椀(115）等の出土遺物があるが、その他、ロクロ土師器片や山茶椀片が多数出土していることから、縄文及び弥生土器は混入遺物であり、本遺構は、平安後期の遺構と考えてよい。一方、SD11との関係では、出土遺物に大きな時期差はなく、両者はほぼ同時期の遺構であると言えよう。ただし、遺構掘削の結果、両者が交差する部分でSD11に切られていることから、若干の時間を置きSD11が築かれたと言える。

(5) 平安時代末期の遺構

溝

ＳＤ８　調査区の北端ほぼ中央に位置し、東西に約8.4 m、幅0.4 ～0.6m、深さ0.09～0.13mの規模で、遺構西端部が北へほぼ直角に屈曲している。東端部は底部が若干落ち込んでいる。12世紀初頭の山茶椀の破片が出土している。

ＳＤ１３　SD12の北端の西に隣接し、東西約5.2m、幅0.2～1.0m、深さ0.05～0.1m規模の溝である。両端から中央に進むに従い、徐々に底が深くなっている。１２世紀初頭の山茶椀の破片が出土している。

(6) 鎌倉時代の遺構

溝

ＳＤ１７　全体の規模は不明であるが、検出した東西約6mの範囲では、幅0.4～1.2m、深さ0.14～0.26m程度の遺構である。北側には多数のピットが集中して存在するが、これらからの出土遺物はほとんどなく、また、関連性も薄いと思われる。13世紀代の土師器・皿及び山茶椀の破片が出土した。

(7) 室町時代の遺構

溝

ＳＤ１４　調査区のやや西側にほぼ直線的に延びる溝である。北西～南東方向に約9.4m、幅0.2～0.4 m、深さ0.02～0.08mの浅いもので、土師器小片（鍋の破片か？）等が出土した。

(8) その他の遺構

土坑

ＳＫ１９　調査区東端で一部切られ、全体像は不明であるが、検出部分では長辺1.6m、短辺0.6mで深さ0.06～0.22mの不整方形の様相を呈する。土師器小片等が僅かに出土したのみで、決め手となる遺物がなく、時期は不明。

ＳＫ２１　平安後期の溝ＳＤ５に一部切られ、全容は不明。残存部は不整楕円形を呈し、長径1.4 m、短径0.4m、深さ0.12～0.44m程度の規模で、南北に４段階の段差が見られる。土師器の小片が出土しているが、時期決定の決め手に欠けるため、時期は不明。

ＳＫ２３　長径2.4m、短径1.2mの不整楕円形を呈する深さ0.23～0.31m程度の土坑である。出土遺物に、時期決定の決め手となるものが少ないが、６～８世紀あたりのものとみられる土師器・甕片があることから、概ねこの時期の遺構であろう。

ＳＫ２４　平安後期の溝ＳＤ５に一部切られ、全体の規模は不明であるが、残存部分では、長径3.8m、短径0.8 mの不整楕円形で、深さ0.1～0.17m程度の土坑である。土師器･甑（91）をはじめ、土師器片が数点出土しているが、これらから６～８世紀頃の遺構と考えられる。

ＳＫ２８　長径3.4 m、短径0.4mの不整楕円形で、深さが0.22mまでの浅い土坑である。土師器片が数点出土したのみで決め手に欠き、明確な時期決定はできなかった。

ＳＫ２９　調査区西端で切られ、全体の規模は不明。検出部分の規模は、長辺1.4m、短辺1.0mで深さ0.17～0.25m程の不整方形土坑である。SD17に隣接し、付近には多数のピットが集中しているが、関連遺構である可能性は低い。また、出土遺物が全くなく、時期は不明。

溝

ＳＤ１５　西側が調査区外に延長するので全体像は不明。検出した東西約4.2mの範囲では、幅0.4～0.6m、深さ0.05～0.09m程度の浅い溝である。土師器小片等が僅かに出土したのみで、決め手となる遺物がなく、時期は不明。

ＳＤ１６　西側が調査区外に延長し、全体像は不明。検出した北東～南西約3.4m範囲では、幅0.3～0.4m、深さ0.04～0.12m程度の浅い溝である。鎌倉～室町時代のものとみられる土師器・皿小片等が僅かに出土したのみで、決め手となる遺物に乏しく、時期は不明。

柱列（第６表参照）

ＳＡ３５　調査区東端に柱間３間の柱列が認められる。出土遺物が全くなく、時期は不明。他の遺構との関連性は認められず、また、関連遺構の検出もできなかったが、柱間寸法が均一に近く、直線で結べる配置ということから、意図的な柱列配置である可能性は残しておきたい。　（小山憲一）

2．遺　物

第１次調査では、下層からの出土遺物を除くと、遺物の出土量は比較的少ない。縄文時代後期から室町時代までの幅広い時期の遺物が出土しているものの、各遺構毎の一括資料となりうるものが少ないため、一部を除き器種別の報告としたい。なお、遺物の観察等の詳細は、遺物観察表に委ねることにする。

(1) ＳＫ２６出土の遺物

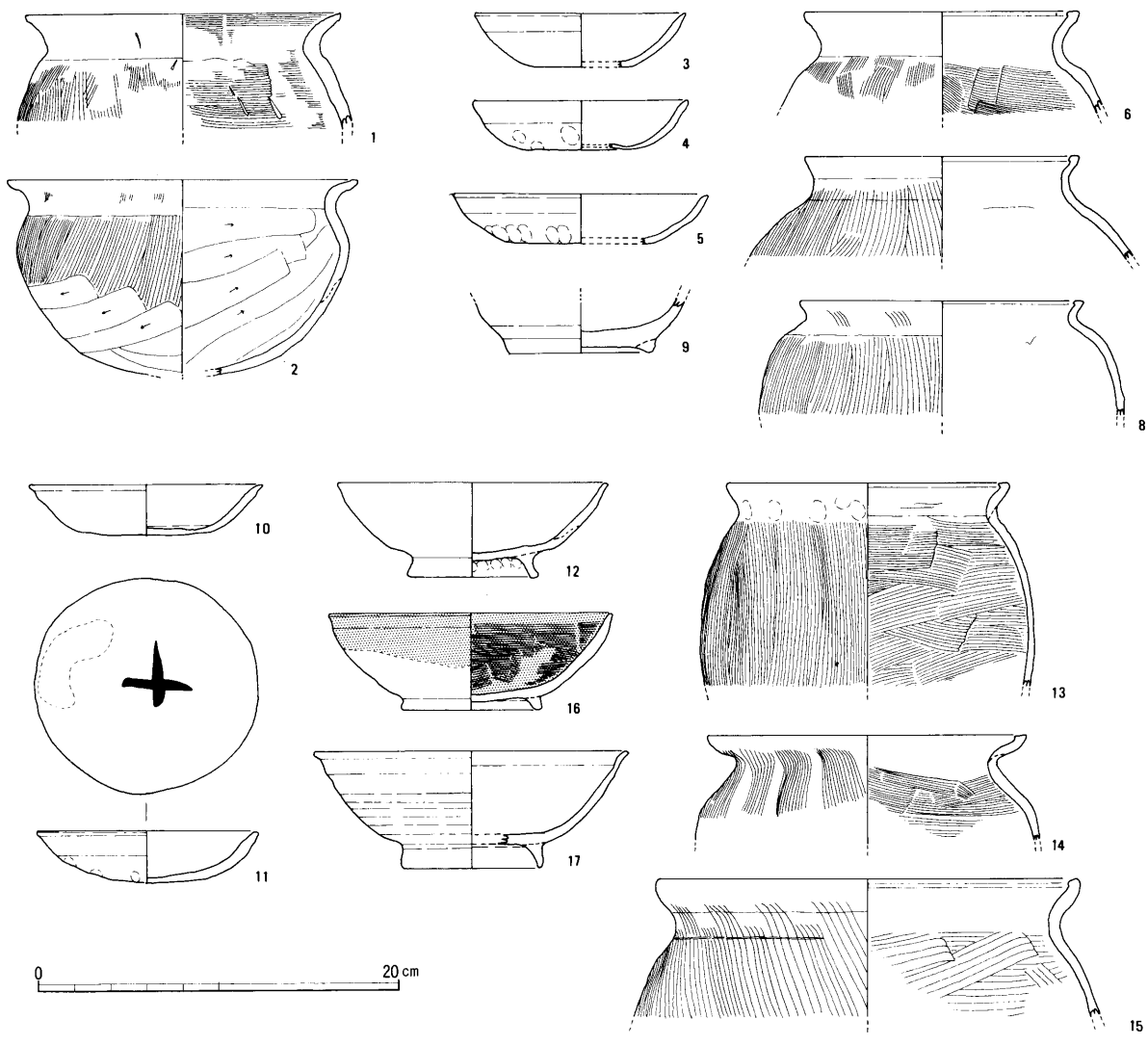
（1）は、6～8本／cm単位のハケメが内外面に施され、頸部内面には、粘土の継ぎ目痕跡や、調整具による傷も残されている。（2）は、外面頸部～底部にかけて６本／cm単位のハケメが施された後、体部下半に横方向のヘラケズリが施されている。また、内面にも頸部～底部にかけて、横方向のヘラケズリが施されている。口径に比して、器高が低いことから、むしろ鍋に近い形態を示している。

以上、ここで図示できるものは、土師器の甕２点のみであった。これらはいずれも平安前期のものと考えられるが、（1）は（2）より若干先行するものであろうか。

(2) ＳＤ１１出土の遺物

土師器

（3）～（5）は杯である。（3）・（4）はともに口径



第９図　SK26、SD11、SK30出土遺物実測図（１：４）

12cm弱、(5) は若干口径が大きく14cm強であるが、三者ともに器高3cm程度、口縁部外面の1/2 ～1/3にヨコナデが施されている。

(6)～(8) は甕である。これらは共に口縁端部を内に巻き込み、体部にハケメを施す。(6)は、6～8本／cm単位のハケメが内外面に施され、頸部下外面に明瞭な指圧痕が残る。(7) は、外面に4本／cm単位のハケメが体部に施され、調整前の指圧痕が残る。頸部には、調整具によるとみられる沈線状の傷が残されている。内面では、頸部に粘土の継ぎ目痕跡や、調整具による傷が残る。

以上6点の遺物は、概ね平安後期の様相を示すものと思われる。

山茶椀

内外面に自然釉がかかっている。貼り付けた高台端部に籾殻痕跡が残されている。残存部分が僅少のため時期は決しがたいが、混入遺物の可能性が高い。

(3) ＳＫ３０出土の遺物

本次調査の上層遺物の中で、唯一一括性が高いのが、この遺構の出土遺物である。以下、提示した遺物は、いずれも概ね平安後期の様相を示すものと考えられる。

土師器

(10)・(11)は杯、(12)は椀、(13)～(15)は甕である。

(10)は、ヨコナデの範囲が口縁端部のみであるのに対して、(11)は口縁部が一層外傾し、底部にかけて一連の緩やかな曲線を描き、口縁部の1/3 程度にヨコナデが施される。さらに特筆すべきは、底部内面に「×」と朱で書かれている点で、類例は少ない。(12)は、内外面ともにナデ調整。高台を貼りつけた後に、指オサエ・ナデ調整を施しているが、全体的にやや粗雑な印象を与える仕上がりである。

甕は、いずれも外面は縦方向、内面は横方向のハケ調整が施され、口縁端部を内に巻き込み、ヨコナデ調整がなされている。(13)・(14)は、ともに6本／cm単位のハケメで、特に(13)は念入りに調整が行われている。(15)はそれらに比して、3本／cm単位の粗いハケメで、調整がやや簡素化された印象を受ける。

黒色土器・椀

内面に13本／cm単位の細かいハケ調整が施され、その後燻しがかけられるＡ類の椀である。若干燻しが外面にはみ出て、上半に薄くかかっている。

陶器・椀

体部外面に、左回転のロクロケズリが施されている。施釉はみられない。

(4) その他の遺物

縄文土器

後期と思われる縄文施文土器7片(18～24)と、晩期後半の突帯文土器1片(25)及び底部3片(26～28) がある。

後期　(18)～(24)のいずれも単節斜縄文を施した体部片であり、後期前半に属するものと考えられる。(22)は、内面に炭化物が付着した底部近くの破片であり、破片を長方形に加工している。いわゆる加工円盤の一種であり、土器錘の可能性がある。

晩期　(25)は、晩期後半の突帯文土器であり、滋賀里Ⅴ式[1]（船橋式）[2]、あるいは五貫森式[3]に類似する。口唇部は、内斜面を痕跡的に残す。突帯はあまり太くなく、篦状具によるやや大きめのＤ字刻みを突帯の高さの半分余りまでの深さに施している。条痕調整は見られない。

底部　(26)～(28)は、いずれも立ち上がりを持った平底片である。(26) は小型であり、(27) もやや小型である。

弥生土器

前期 (29～49) と中期(50～52)、及び底部 (53～60) がある。

前期　中段階から新段階に属するものであり[4]、いわゆる遠賀川式と亜流と呼ばれるものが混在する。(29)～(46)は壺であり、(47)～(49)は甕である。

壺の破片の内、(29)～(33)は口縁部であり、(34)～(46) は頸部から体部である。

(29)や(30)は、赤褐色系を呈する無文の口縁部片である。(31)と(32)も淡い赤褐色系を呈するが、丸みのある口唇部に２条の沈線を持つ。これらは同一個体の可能性もある。(33)は、外面に二枚貝かと思われる原体の条痕を横位に施し、内面には同一原体の可能性もある３本沈線の連弧文を残す。灰褐色を

第10図　出土遺物実測図　（18～25・29～49・51～52＝1：3、26～28・50・53～60＝1：4）

呈する。

(34)は、削り出し突帯上に2本の篦描沈線を施す。上の削り出し突帯は幅広（a種）、下は幅狭（b種）である[5]。外面全体は良くヘラミガキされている。(35)～(39)は篦描沈線を持つ。遺存状態の良い(35)や(36)は赤褐色系を呈し、良くヘラミガキされている。一般に沈線は細いが、頸部片である(36)の沈線は太い。(40)は貼り付け突帯を2条残す。突帯上にはキザミを施すかとも思われるが、磨滅により判然としない。

(41)～(45)は条痕を施す。いずれもくすんだ灰褐色を呈する。この内、(41)は貼り付け突帯を残す。突帯上には、板状具によるらしいキザミを施す。なお、このキザミは体部の条痕と同じ原体らしい。突帯よりも上には、先端の尖った篦状具による沈線を9条垂下させている。(45)も同一個体の可能性もある。(46)は条痕を持たない別個体だが、やはりくすんだ灰褐色を呈し、同様な文様かと思われる。(42)の条痕原体も同様だが、(43)や(44)の原体は異なる。

(47)～(49)は甕の口縁部である。ゆるく外反し口唇部の端面か外角にキザミを施す。条痕は見られない。

中期　(50)～(52)は中期中葉の壺である。(50)は、わずかに受け口状を呈する口縁部の外面に斜縄文を1帯施す。体上半部には篦描沈線を3本残し、現存する最下段には斜縄文を持つ。尾張地方の貝田町式に相当する[6]。(51)と(52)は、櫛描横線帯を持つ体部片である。(51)は、細目の櫛描横線帯の下端に太い篦描沈線を1本伴う。(52)は、櫛描横線を3帯以上を重ねた頸部片であり、暗褐色を呈する。

底部　(53)～(60)は、壺の底部片である。いずれも所属期は不詳であるが、中期を中心としたものであろうか。(58) は古式土師器の可能性もある。

土師器

(61)～(64)は椀である。(62)・(63)がナデ主体の調整であるのに対し、(61)・(64)にはヘラケズリが施される。また、(64)には高台が付随する。

(65)～(72)は杯である。(65)と(66)は暗文が残る。器形等から、7世紀前半頃のものと思われる。(67)～(72)は器高2～3cmで、口縁部外面の1/3 程度にヨコナデ調整が施され、その部分が若干外反する。11世紀前半頃のものと考えられる。

(73)～(81)は皿である。(81)は底部小片であるが、内外面ともに墨書がある点で、比較的類例が少ない。(73)は口径22cmある大型の皿で、7世紀前半頃のものと考えられる。(74)～(76)は口径10～12cmで、11世紀前半頃のものだろう。(77)～(80)は口径10cm未満の小皿である。平安の末期に属するものと思われる。

(82)～(84)は壺。(83)は排土中からではあるが、第1次調査で唯一出土したミニチュア土器である。

(85)～(90)は甕である。(85)は、口縁端部がS字状の形態を持つのに対し、(87)は滑らかな曲線を描き、外に面を持つ。(88)～(90)は、端部を内に巻き込んでいる。(85)・(86)は古墳時代のものか。両者は同一個体の可能性が高い。(87)は平安前期、(88)～(90)は平安後期のものか。(91)は甑。内外面に念入りにハケ調整が行われている。

(92)・(93)は高杯。(92)はシャープな作りで、体部から口縁部が直線的に外反する。(93)では、脚下部が、鋭角的に外反している。

(94)は椀の高台で、中央に穿孔がある。紡錘車へと転用されたものであろう。

ロクロ土師器

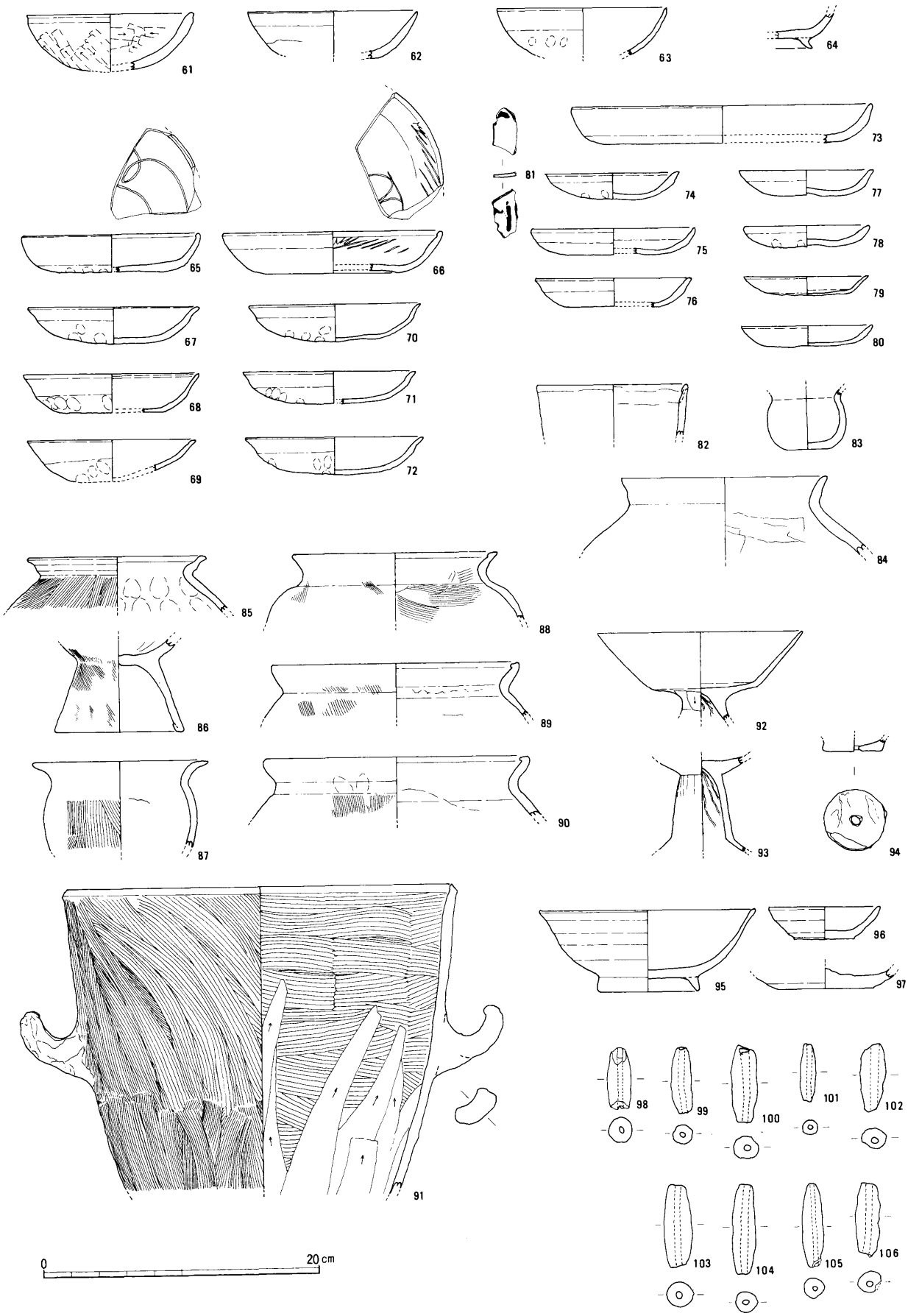
(95)・(97)は椀、(96)は皿で、いずれも11世紀前半頃のものと思われる。(95)は、断面三日月状の貼り付け高台が付随するのに対し、(97)は、粘土塊から切り離されたままである。底径を考慮すると、(95)よりもやや古いものになるか。(96)は、山皿の焼成不良の可能性があり、そうであれば12～13世紀まで降ることになろう。

土錘

(98～106)の土錘は、重量20g超～5g未満のものまであるが、一部を除き時期は不明。(99)はSD7から、(100) はSD5からそれぞれ出土したことから、いずれも平安後期頃のものと思われる。

須恵器

(107)は高杯、(108)・(109)は高台を伴わない杯で、口径に対し器高が高い。(111) は高台を伴う杯、(110) は蓋である。(107) は、杯部下半に波状のカキメが施されている。(108) は、底部の「×」記号の施文が特徴的である。(110) は、偏平で中央



第11図　出土遺物実測図（1：4）

にやや窪みを持つつまみが付き、平坦な天井部にロクロケズリが施される。(111) は、14.0cmの大きな高台径を持つもので、底端部に低い高台を貼り付けている。

灰釉・緑釉陶器

(112) は灰釉陶器で、外面に白色の釉薬が垂れた痕跡が残る。

(113)・(114)は、ともに緑釉陶器椀の底部小片であるが、(113) は硬質、(114) は軟質のものである。

山茶椀

(117) は山皿。(115)・(116)・(119) は転用硯である。これらは、それぞれ底部内面を転用している。(116)・(119)は、打ち欠きによる整形の後、破断面を磨くという、積極的な整形意図が窺える。(115)・(116)は、それぞれ底部糸きり後、高台を貼り付けているが、その断面が、前者は三日月状に内弯し、後者はハの字状に外反する。

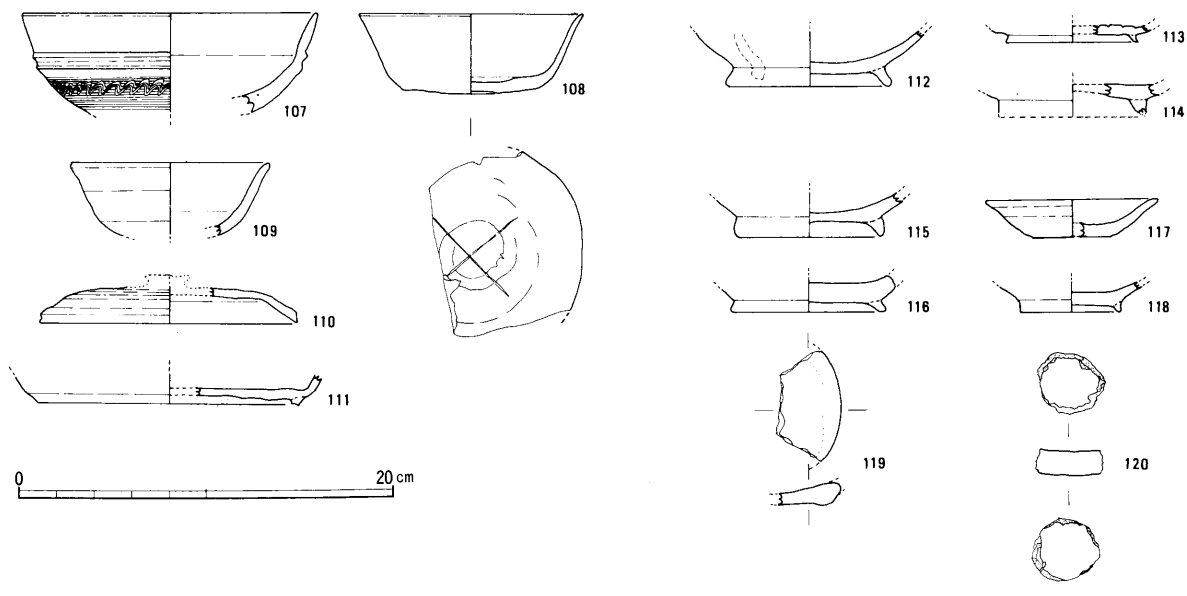
加工円盤

排土中からであるが、陶器の底部 (?) 小片で破断面を打ち欠き、粗雑であるが円形に加工されたと思われる加工円盤(120)もある。

(山田　猛・小山　憲一)

〔註〕

① 田辺昭三『湖西線関係遺跡調査報告』(1973年)
② 原口正三・田辺昭三・田中琢・佐原真「船橋遺跡の遺物の研究」(『船橋遺跡Ⅱ』平安学園考古学クラブ、1962年)
③ 杉原荘介「愛知県豊橋市五貫森遺跡」(『日本考古学年報3』日本考古学協会、1955年)
④ 田辺昭三・佐原真「弥生文化の発展と地域性— 3 近畿」(『日本の考古学Ⅲ 弥生時代』河出書房新社、1966年)
⑤ 佐原真「山城における弥生式文化の成立—畿内第Ⅰ様式の細別と雲ノ宮遺跡出土土器の占める位置—」(『史林』第50巻5号、1967年)
⑥ 杉原荘介「尾張西志賀遺跡調査概報」(『考古学集刊』第3冊、1949年)



第12図　出土遺物実測図 (1 : 4)

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1	003-04	土師器 甕	SK26	J42 SK1内部のSK	17.4	−	−	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部～体部ハケメ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 1／4	・外面煤付着
2	003-05	土師器 甕	SK26	J42 SK1内部のSK	19.4	−	−	外：口縁部ハケ調整後横ナデ、体部上半ハケメ、下半ヘラケズリ 内：口縁部横ナデ、体部ヘラケズリ	密 若干細砂粒を含	良	にぶい橙(10YR7/4)	口縁部 1／2	・外面胴部煤付着
3	004-01	土師器 杯	SD11	H42 SD1	11.8	3.0	−	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁端部横ナデ、口縁部～底部ナデ	やや粗 5㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1／4	
4	011-03	土師器 杯	SD11	H42 SD1	11.8	2.8	−	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえ 内：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	浅黄(7.5YR8/3)～黒褐(7.5YR3/1)	1／3	・外面煤付着 ・内面油煙付着
5	004-02	土師器 杯	SD11	H42 SD1	14.2	2.8	−	外：口縁部横ナデ、体部指押さえナデ 内：口縁部～体部横ナデ	密 2㎜以下の砂粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	口縁部 1／3	
6	003-02	土師器 甕	SD11	H42 SD1	15.2	−	−	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部ハケメ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 1／6	・口縁部外面煤付着
7	003-01	土師器 甕	SD11	H42 SD1	15.2	−	−	外：口縁部横ナデ、頸部ハケ調整後横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、頸部～体部未調整	密	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部 7／10	・全般的に煤付着
8	003-03	土師器 甕	SD11	H42 SD1	15.6	−	−	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部～体部横ナデ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	口縁部 1／9	・外面煤付着
9	011-02	山茶椀	SD11	H42 SD1	−	−	高台径 8.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ、底部未調整（糸切り痕有り） 内：ロクロナデ ※内外面自然釉かかる	密 2㎜以下の砂粒含	良	灰白(10Y7/1)〔釉〕外:灰オリーブ(7.5Y5/2)内:灰白(7.5Y7/2)	底部 1／2	・高台端部に籾殻痕有り
10	014-05	土師器 杯	SK30	H45 pit1	13.0	2.8	−	外：口縁部横ナデ、体部～底部ナデ 内：口縁部横ナデ、底部ナデ	密	並	灰白(10YR8/2)	口縁部 1／3	
11	013-01	土師器 杯	SK30	H45 pit1	12.2	2.9	−	外：口縁部横ナデ、底部指押さえ、 内：横ナデ、底部中央ナデ	粗	並	浅黄橙(10YR8/4)	完存	・「朱」の墨書…「×」記号
12	014-04	土師器 椀	SK30	H45 pit1	15.0	5.3	高台径 6.6	外：ナデ、高台貼り付け後指押さえ 内：ナデ	密	良	灰褐(7.5YR4/2)	口縁部 1／12	
13	015-01	土師器 甕	SK30	H45 pit1	15.6	−	−	外：口縁部横ナデ、指押さえ体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部ハケメ	やや粗 4㎜以下の砂粒含	並	浅黄(2.5Y7/3)	口縁部 1／4	・外面、頸部内面煤付着
14	014-06	土師器 甕	SK30	H45 pit1	17.8	−	−	外：口縁端部横ナデ、口縁部～体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、頸部～体部ハケメ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部 1／16	・外面煤付着
15	015-02	土師器 甕	SK30	H45 pit1	23.2	−	−	外：口縁部横ナデ、頸部～体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部ハケメ	密	良	外:灰白(10YR8/2) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 完存	・外面煤付着
16	014-02	黒色土器 椀	SK30	H45 pit1	15.6	5.4	高台径 7.4	外：口縁端部横ナデ、高台貼り付け後横ナデ、その他未調整 内：口縁端部横ナデ、口縁部～底部ハケメ	密	良	外:にぶい橙(10YR7/3) 内:黒褐(2.5Y3/1)	底部完存 口縁部 1／4	・内面全面、外面上半に燻し有り
17	014-03	陶器 椀	SK30	H45 pit1	17.4	6.5	高台径 7.4	外：口縁部ロクロナデ、体部ロクロケズリ、高台貼り付け後横ナデ、底部糸切り後ナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y8/2)	口縁部 1／12 底部微小	
18	016-01 016-02	縄文土器深鉢		EF44 包含層	−	−	−	外：縄文（LR） 内：指押さえ・ナデ	密 3㎜以下の砂粒、石英・長石粒含	良	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	体部 小片	・外面煤付着

第７－１表　第１次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
19	016-03	縄文土器深鉢		排土	—	—	—	外：縄文（ＬＲ） 内：横ナデ	密 3㎜以下の砂粒含	不良	灰白(2.5Y8／2)	体部 小片	
20	016-06	縄文土器深鉢	SD12	I44 SD1	—	—	—	外：縄文（ＬＲ？） 内：指押さえ・ナデ	粗 1.5㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:黒褐(10YR3／2) 内:黒褐(10YR3／1)	体部 小片	
21	016-07	縄文土器深鉢		J43 包含層	—	—	—	外：縄文（Ｌ或いはＬＲ、縦） 内：指押さえ・ナデ	粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:黒褐(7.5YR3／4) ・ 内:灰褐(7.5YR4／2)	体部 小片	
22	017-05	縄文土器深鉢		E44 包含層	—	—	—	外：縄文（ＲＬ？） 内：ナデ 破断面：ミガキ	密 0.5㎜以下の砂粒含	良	外:褐灰（10YR4／1） 内:灰黄褐(10YR5／2)	体部 小片	・破片を長方形に加工 ・内面炭化物付着
23	016-05	縄文土器深鉢		L42 トレンチ	—	—	—	外：縄文（ＲＬ） 内：ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	並	外:にぶい赤褐(5YR5／4) 内:にぶい黄橙(10YR6／4)	体部 小片	・外面煤付着
24	016-04	縄文土器深鉢		J45 包含層	—	—	—	外：縄文（ＬＲ） 内：横ナデ	密 2㎜以下の砂粒含	不良	外:にぶい褐(7.5YR5／4) 内:にぶい橙(7.5YR6／4)	体部 小片	
25	017-07	縄文土器深鉢	SD18	D45 旧流水路	—	—	—	外：Ｄ字ヘラ刻み突帯、口縁端部横、ナデ 内：ナデ、口縁端部横ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7／6) ＼ 淡橙(5YR8／3)	口縁部 小片	
26	016-09	縄文土器深鉢		G46 包含層	—	—	底部径 4.8	外：体部縦条線、体部～底部横ナデ、底部ナデ 内：ナデ	密 1.5㎜以下の砂粒含	良	外:灰黄褐(10YR5／2) 内:にぶい黄橙(10YR6／3)	底部 完存	
27	016-14	縄文土器深鉢		排土	—	—	底部径 7.0 (推定)	外：体部横ナデ、底部ナデ（砂粒圧痕残る） 内：ナデ（剥離有り）	密 2㎜以下の砂粒含	並	外:にぶい橙(7.5YR7／4) 内:にぶい褐(7.5YR5／3)	底部 1／6	
28	016-13	縄文土器深鉢		G46 包含層	—	—	底部径 7.8 (推定)	外：体部指押さえ・ナデ、ハケメ若干残る、底部ナデ（砂粒圧痕残る） 内：ナデ	密 1.5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:橙(5YR6／8) 内:にぶい黄橙(10YR7／4)	底部 1／8	
29	018-10	弥生土器　壺		I44 包含層	—	—	—	外：ミガキ 内：ミガキ	やや粗 1㎜以下の砂粒金雲母・石英含	良	外:明赤褐（5YR5／6） 内:にぶい橙(5YR6／4)	口縁部 小片	・内面一部に黒斑有り
30	018-11	弥生土器　壺		I45 包含層	—	—	—	外：ミガキ 内：ミガキ	やや粗 0.5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	明赤褐(2.5YR5／8)	口縁部 小片	
31	017-08	弥生土器　壺	SD18	D45 旧流水路	—	—	—	外：ミガキ 内：ミガキ 口縁端部２条平行沈線	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	外:淡橙(5YR8／3) 内:橙(5YR7／6)	口縁部 小片	
32	018-09	弥生土器　壺		F46 包含層	—	—	—	外：ミガキ 内：ミガキ、口縁端部２条沈線	やや粗 1㎜以下の砂粒金雲母・石英含	良	橙(7.5YR7／6)	口縁部 小片	
33	018-06	弥生土器　壺		F46 包含層	—	—	—	外：条痕 内：口縁端部連孤文、ナデ（一部剥離）	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙(10YR7／2)	口縁部片	
34	017-09	弥生土器　壺		E46 包含層	—	—	—	外：ミガキ、削り出し突帯、ヘラ沈線 内：ナデ	密 2㎜以下の砂粒、石英含	良	にぶい橙(7.5YR7／4)	体部 小片	
35	017-11	弥生土器　壺	SD18	E45 旧流水路	—	—	—	外：ヘラ沈線５条、ミガキ、ヘラ沈線３条 内：ナデ、指押さえ・ナデ、（一部剥離）	密 2㎜以下の砂粒、金雲母・石英含	良	外:にぶい赤褐（5YR4／3）～にぶい橙(5YR6／4) 内:橙(5YR6／8)	体部 小片	
36	017-10	弥生土器　壺	SD18	H45 旧流水路	—	—	—	外：ミガキ、太い沈線 内：指押さえ・ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	外:明赤褐(5YR5／6) 内:赤褐(5YR4／6)	体部 小片	

第７－２表　第１次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
37	018-01	弥生土器 壺		G45 包含層	−	−	−	外：ミガキ、ヘラ沈線２条 内：ナデ	密 2.5㎜以下の砂粒含	並	外:にぶい褐(7.5YR5/3)～にぶい橙(7.5YR7/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/3)	体部片	
38	018-04	弥生土器 壺	SD1	L37 旧流水路	−	−	−	外：４条沈線、ミガキ 内：ナデ	やや粗 1.5㎜以下の砂粒、石英・長石含	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内：褐灰(10YR5/1)	体部小片	
39	018-05	弥生土器 壺		F46 包含層	−	−	−	外：沈線、ミガキ 内：ナデ	密 1.5㎜以下の砂粒含	良	外：橙 (7.5YR7/6) 内：灰褐(7.5YR5/2)	体部小片	
40	017-06	弥生土器 壺	SD18	D45 旧流水路	−	−	−	外：突帯（磨滅）素文か？ ナデ？ 内：ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部?小片	
41	017-03	弥生土器 壺		E45 包含層	−	−	−	外：条痕＋条痕、突帯二枚貝刻み、ヘラ描き沈線 内：ナデ	やや粗 1.5㎜以下の砂粒含	良	外:灰黄褐(10YR4/2) 内:にぶい褐(7.5YR5/4)	体部小片	・45と同一個体の可能性有り
42	018-07	弥生土器 壺		F46 包含層	−	−	−	外：条痕 内：ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒含	良	灰褐(7.5YR6/2)	体部小片	
43	018-08	弥生土器 壺		H43 包含層	−	−	−	外：条痕 内：指押さえ、ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	不良	外：にぶい褐 (7.5YR5/4) 内：灰褐 (7.5YR5/2)	体部小片	
44	018-13	弥生土器 壺		D46 包含層	−	−	−	外：条痕 内：指押さえ・ナデ	粗 2㎜以下の砂粒含	良	外：灰褐 (7.5YR5/2) 内：灰黄褐(10YR6/2)	体部小片	
45	017-02	弥生土器 壺	SD18	D45 旧流水路	−	−	−	外：条痕地縦方位の条線 内：ナデ	やや粗 2.5㎜以下の砂粒含	良	外：灰白(10YR7/1)～褐灰(5/1)内:浅黄橙 (10YR 8/3)～灰黄褐(4/2)	体部小片	・41と同一個体の可能性有り
46	017-04	弥生土器 壺		F46 包含層	−	−	−	外：ナデ、条線（縦方向） 内：ナデ	やや粗 1.5㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙 (10YR7/3)	体部小片	
47	018-12	弥生土器 甕		G46 包含層	−	−	−	外：横ナデ、口縁端部ヘラ刻み？ 内：横ナデ、ハケメ？	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:にぶい黄橙(5YR5/4) 内：橙 (5 YR6/8)	口縁部小片	・外面煤付着
48	009-06	弥生土器 甕	SD18	G45 旧流水路	−	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部条痕 内：口縁端部横ナデ、口縁部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	橙 (5 YR6/6)	口縁部小片	
49	016-08	弥生土器 甕		F44 包含層	−	−	−	外：ナデ、口縁端部二枚貝？刻み 内：ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	外：にぶい褐 (7.5YR6/3) 内：橙 (7.5YR7/6)	口縁部小片	
50	012-01	弥生土器 壺	SD12	H41 SD1	8.4	−	−	外：口縁端部縄文、口縁部～頸部ナデ、頸部～体部ヘラ沈線（間ヘラミガキ・縄文） 内：口縁部横ナデ、頸部～体部ナデ	粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	にぶい橙 (5YR6/3) ※部分的に赤橙(10YR6/6)	口縁部9／10	
51	018-03	弥生土器 壺	SD18	G46 旧流水路	−	−	−	外：板状工具による横線、沈線、ミガキ 内：ハケメ？ 板ナデ？	密 1㎜以下の砂粒、石英・長石粒含	良	外：橙 (5YR6/6) 内:にぶい橙(5YR6/4)	体部片	・SD5(=I40/SD1)出土小片と接合
52	018-02	弥生土器 壺		G46 包含層	−	−	−	外：二条貝横線（2.4cm原体幅）、ハケメ後ミガキ 内：指押さえ・ナデ（所々剥離）	密 3㎜以下の砂粒、金雲母含	やや不良	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい褐 (7.5YR5/3)	体部片	
53	016-12	弥生土器 甕		F45 包含層	−	−	底部径 6.2	外：ナデ 内：ナデ	密 1.5㎜以下の砂粒多数含	良	外：橙 (5YR6/8) 内：明赤褐(5YR5/6)	体部1／4	・内面炭化物付着
54	016-10	弥生土器 甕	SK25	J42 SK1	−	−	−	外：ナデ 内：ナデ	密 3㎜以下の砂粒多数含	不良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内：浅黄橙 (7.5YR8/6)	体部完存	

第７－３表　第１次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
55	010-03	弥生土器 壺	SD18	H46 旧流水路	−	−	底部径 6.0	外：体部下半ハケメ、底部未調整 内：ナデ	粗 2㎜以下の砂粒含	不良	外:赤橙(10R6/6~6/8) 内:橙(7.5YR7/6)	体部 完存	
56	016-11	弥生土器 壺	SD1	L37 旧流水路	−	−	底部径 7.8	外：ナデ（全般的に磨耗） 内：？（剥離のため不明）	やや粗 2㎜以下の砂粒、8×5㎜の小石含	良	外:黄褐(7.5YR7/8) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)	底部 完存	
57	011-06	弥生土器 甕	SD18	F45 旧流水路	−	−	底部径 7.2	外：ナデ 内：ヘラ状工具によるナデ	粗 2㎜以下の砂粒多数含	並	外:赤橙(10R6/8) 内:にぶい橙(7.5YR7/4)~灰褐(7.5YR4/2)	底部 完存	
58	011-04	弥生土器 壺	SK27 SK1	H40	−	−	底部径 7.0	外：ナデ、底部貼り付け後ナデ 内：ヘラ状工具によるナデ、底部クモの巣状のハケメ	密 6㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8/3)	底部 完存	・外面に黒斑有り
59	016-15	弥生土器 壺	SK25 SK1	J42	−	−	底部径 9.0	外：ナデ 内：調整は有るが、具体物は不明	やや粗 5㎜以下の砂粒多数含	並	外:橙(7.5YR6/6) 内:橙(7.5YR7/6)	底部 1/2	
60	010-02	弥生土器 甕	SD18	E45 旧流水路	−	−	底部径 7.2	外：ナデ 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒含	並	黄灰(2.5Y6/1) 黒褐(2.5Y3/1)	底部 完存	
61	004-04	土師器 椀		H45 包含層	12.0	4.2 (推定)	−	外：口縁端部横ナデ、口縁部~底部ヘラケズリ 内：口縁端部横ナデ、口縁部~底部ヘラケズリ	粗 3㎜以下の砂粒多数含	良	明赤褐(5YR5/8)	口縁部 1/3	
62	002-02	土師器 椀	SD1	L37 旧流水路	12.4	−	−	外：口縁部横ナデ、体部~底部指押さえナデ 内：口縁部~体部横ナデ、底部ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	不良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1/4	・体部外面に粘土の継ぎ目痕有り
63	002-01	土師器 椀	SD1	L37 旧流水路	12.4	−	−	外：口縁部横ナデ、体部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、体部乱ナデ	密 5㎜以下の砂粒含	不良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部 1/6	
64	049-04	土師器 椀	SD1	L37 旧流水路	−	−	−	外：体部ヘラケズリ、底部ナデ、高台貼り付け後横ナデ 内：体部~底部横ナデ、底部中央ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/6) 底部外面:灰白(2.5Y7/1)	底部 小片	
65	009-07	土師器 杯		M38 包含層	12.7	2.7	−	外：口縁部横ナデ、底部指押さえ 内：口縁部横ナデ、底部ナデ ※ 暗文有り	密 2㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	1/5	
66	010-05	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	15.8	3.0	−	外：口縁部横ナデ、体部~底部ナデ 内：口縁部横ナデ ※ 暗文有り	密 2㎜以下の赤色砂粒含	良	橙(5YR6/8)	1/7	
67	011-01	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	12.3	2.2	−	外：口縁端部横ナデ、口縁部~底部指押さえ 内：口縁端部横ナデ、口縁部~底部ナデ	密 4㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	3/4	・内面に少量の油煙付着
68	002-04	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	12.8	2.8	−	外：口縁部横ナデ、体部~底部指押さえナデ 内：口縁部~体部横ナデ、底部ナデ	密	並	橙(5YR7/6)	口縁部 1/2	
69	002-05	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	12.2	3.1	−	外：口縁部横ナデ、体部指押さえ 内：口縁部横ナデ、体部乱ナデ	密 2㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8/3)	口縁部 2/3	
70	009-02	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	12.3	2.7	−	外：口縁部横ナデ、体部~底部指押さえ 内：口縁部横ナデ、体部~底部ナデ	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3~7/4)	ほぼ 完存	・外面1/6、内面1/3に油煙付着
71	002-03	土師器 杯	SD1	L37 旧流水路	13.0	2.3	−	外：口縁部横ナデ、体部~底部指押さえナデ 内：口縁部~底部横ナデ	密	良	淡黄(2.5Y8/3)	口縁部 1/3	
72	010-04	土師器 杯	SD1	K37 旧流水路	12.9	2.7	−	外：口縁端部横ナデ、口縁部~底部指押さえ 内：口縁端部横ナデ、口縁部~底部ナデ	密 1㎝以下の赤色砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/4)	ほぼ 完存	・歪み有り

第7－4表　第1次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
73	004-05	土師器 皿	SD1	L37 旧流水路	22.0	2.8	－	外：口縁部横ナデ、底部ナデ 内：口縁部～底部横ナデ	密	良	橙（5YR7／8）	口縁部 1／10	
74	001-03	土師器 皿		K41 包含層	10.0	2.0	－	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、体部～底部乱ナデ	密 3㎜以下の砂粒含	良	外：明赤褐(2.5YR5/6) 内：浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 2／3	
75	001-05	土師器 皿	SD1	L37 旧流水路	12.0	1.9	－	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、体部～底部乱ナデ	密	不良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1／2	
76	004-03	土師器 皿		H 45 包含層	11.4	2.1	－	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、体部～底部乱ナデ	やや粗 3㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁部 1／4	・歪み有り
77	001-04	土師器 皿		K41 包含層	9.8	1.9	－	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、体部指押さえナデ、底部乱ナデ	粗 3㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8／3)	9／10	
78	002-06	土師器 皿	SD7	K42 SD1	9.2	1.5	－	外：口縁部横ナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部～底部横ナデ	密 1㎜程度の砂粒含	不良	浅黄橙（10YR8／3）	口縁部 1／4	
79	001-01	土師器 皿		排土	9.2	1.4	－	外：口縁部横ナデ、底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、底部ナデ	密	良	橙(5YR7／6)	口縁部 1／2	
80	001-02	土師器 皿		排土	9.7	1.6	－	外：口縁部横ナデ、底部指押さえナデ 内：口縁部横ナデ、底部ナデ	密 1㎜程度の砂粒含	良	橙(5YR7／6)	ほぼ 完存	
81	049-01	土師器 皿		L39 包含層	－	－	－	外：底部未調整 内：底部ナデ	密	良	橙(5YR7／6)	底部 小片	・底部内外面に墨書有り
82	014-01	土師器 壺	SK27	H40 SK1	10.8	－	－	外：ナデ 内：口縁端部折り返し後ナデ	密	並	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部 1／2	
83	008-10	土師器 壺（ミニチュア土器）		排土	－	－	底部径 3.0	外：ナデ 内：ナデ	密	良	外：にぶい黄橙（7.5YR7／4） 内：褐灰(7.5YR5/1)	頸部以下 ほぼ完存	
84	008-11	土師器 壺		G45 包含層	14.8	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ナデ 内：口縁部横ナデ、体部ナデ	やや粗	良	浅黄橙（10YR8／3）	口縁部 1／6	・頸部下内面に調整具による傷及び粘土の継ぎ目痕跡有り
85	006-01	土師器 甕	SK27	H40 SK1	12.6	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部指押さえ？	やや粗	良	灰白(2.5Y8／2)	口縁部 1／6	・外面煤付着・頸部下内面指圧痕有・粘土の継ぎ目(凸線)有 ・85と同一個体の可能性有
86	006-02	土師器台付甕	SK27	H40 SK1	－	－	台部径 9.2	外：体部～台部ハケメ 内：底部ヘラケズリ、台部ナデ、端部折り返し	やや粗	並	灰白(2.5Y8／2)	台部 1／2	・85と同一個体の可能性有り
87	003-06	土師器 甕	SK25	J42 SK1	12.6	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部～体部横ナデ	密	良	浅黄橙（10YR8／3）	口縁部 1／6	・頸部下内外面に粘土の継ぎ目痕跡有り
88	007-03	土師器 甕		I43 包含層	14.6	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部ハケメ	密	並	灰白(10YR8／2)	口縁部 1／4	・外面かなり磨滅・内面ハケメ不規則、調整具による傷若干有り
89	007-01	土師器 甕	SD1	L37 旧流水路	17.6	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部横ナデ、体部ヘラ調整	密	良	浅黄橙（10YR8／3）	口縁部 1／5	・外面煤付着・内面粘土の継ぎ目痕跡有り
90	007-02	土師器 甕		F46 包含層	19.0	－	－	外：口縁部横ナデ、体部ハケメ 内：口縁部～頸部横ナデ	やや粗	良	浅黄橙（10YR8／3）	口縁部 1／6	・全般的に煤付着

第７－５表　第１次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
91	005-01	土師器 甑	SK24	K42 SK1	28.0	−	−	外：口縁端部横ナデ、口縁部～体部ハケメ、把手貼り付け後ナデ 内：口縁端部横ナデ、口縁部～体部ハケメ、ヘラ削り	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	橙(7.5YR7／6)	口縁部 1／4	・外面煤付着
92	011-05	土師器 高杯	SK27	H40 SK1	14.9	−	−	杯部：内外面ナデ 脚部：脚貼り付け後ヘラ状工具による押さえ・面取り	密 3㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8／3)	杯部 1／2	
93	011-07	土師器 高杯	SD18	F45 旧流水路	−	−	−	外：ヘラ磨き 内：絞り目有り	密 4㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/2)	脚部 3／4	
94	049-03	土師器 椀		試掘	−	−	高台径 4.0	外：体部横ナデ、底部未調整 内：底部ナデ	密	良	淡黄橙(10YR8／3)	底部 9／10	・底部中央に穿孔有り(砥錘車への転用か?)
95	009-03	ロクロ土師器 椀	SD1	L37 旧流水路	15.6	5.5	高台径 7.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 底部未調整（糸切り痕有り） 内：ロクロナデ	やや粗 5㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部 1／8 高台完存	
96	004-06	ロクロ土師器 Ⅲ		K37 包含層	8.2	2.4	−	外：口縁部～体部ロクロナデ、底部未調整（糸切り痕有り） 内：口縁部～底部ロクロナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部 1／3	・山皿の焼成不良（酸化焼成）の可能性もあり
97	005-04	ロクロ土師器 椀	SD12	I42 SD1	−	−	底部径 7.0	外：体部ロクロナデ、底部未調整（糸切り痕有り） 内：底部ロクロナデ	やや粗	不良	灰白(2.5YR8／2) ～ 灰(7.5Y6／1)	底部 完存	
98	008-01	土 錘		H45 包含層	最大径 1.6	残存長 4.6	重量 12.04g	———	密	不良	淡黄(2.5Y8／3)	上下端部 若干欠損	・全般的に表面はかなり剥離
99	008-02	土 錘	SD7	K42 SD1	最大径 1.5	4.8	重量 8.57g	———	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ 完存	
100	008-03	土 錘	SD5	J40 SD1	最大径 1.8	残存長 5.7	重量 16.40g	———	密	不良	浅黄橙(10YR8/3)	上端部 若干欠損	・剥離部分多い
101	008-04	土 錘		G38 包含層	最大径 1.1	4.2	重量 4.95g	———	密	良	灰白(10YR8／2)	ほぼ 完存	
102	008-05	土 錘		I40 包含層	最大径 1.9	残存長 5.0	重量 11.08g	———	密	良	灰白(10YR8／2)	上下端部 一部欠損	
103	008-06	土 錘		K39 包含層	最大径 1.9	6.1	重量 21.93g	———	密	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ 完存	
104	008-07	土 錘		K41 包含層	最大径 1.7	6.6	重量 15.80g	———	密	不良	淡黄(2.5Y8／4)	ほぼ 完存	・外面中央に1.3㎝×2.5㎝大の黒色斑点有り
105	008-08	土 錘		M37 包含層	最大径 1.5	残存長 6.1	重量 13.77g	———	密	良	灰白(2.5Y8／2)	上下端部 一部欠損	
106	008-09	土 錘		排土	最大径 1.7	残存長 5.4	重量 13.89g	———	密	良	灰黄(2.5Y7／2)	中央部 下端部 一部欠損	・外面に多数の傷有り
107	007-07	須恵器 高杯		F45 包含層	15.6	−	−	外：口縁部ロクロナデ、杯部下半カキメ 内：ロクロナデ	密	良	灰(5Y4／1)	口縁部 1／8	・内面自然釉かかる
108	010-01	須恵器 杯	SK25	J42 SK1	11.9	4.3	底部径 7.2	外：ロクロナデ、底部未調整（ヘラ切り痕有り） 内：ロクロナデ	密 3㎜以下の砂粒含	良	青灰(10BG6/1~5/1)	1／3	・底部外面に「×」の線刻有り

第７－６表　第１次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
109	006-04	須恵器 杯	SD1	L37 旧流水路	10.6	−	−	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰(7.5Y6／1)	口縁部 1／4	
110	005-02	須恵器 蓋	SD5	K44 SD1	13.6	2.6 (推定)	−	外：口縁部ロクロナデ 天井部ロクロケズリ 内：口縁部～天井部ロクロナデ	密	良	灰(N6／0)	口縁部 1／8	・ロクロ右回転
111	009-04	須恵器 杯	SD1	L37 旧流水路	−	−	高台径 14.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 底部未調整（ヘラ切り痕有り） 内：ロクロナデ、底部中央ナデ	密	良	青灰(10BG6／1)	底部 1／5	
112	007-06	灰釉陶器 椀		K37 包含層	−	−	高台径 8.4	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 底部未調整（糸切り痕有り） 内：ロクロナデ	密	良	灰白(N8／0)	底部 完存	・外面体部～底部に釉薬の垂れた部分有り（白色）
113	009-05	灰釉陶器 椀		L45 包含層	−	−	高台径 7.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 内：底部1㎜幅の沈線	密	良	青灰(10BG6／1) 〔釉〕:オリーブ灰 (10Y5／2～4／2)	底部 1／5	
114	005-03	緑釉陶器 椀		試掘	−	−	高台径 7.8	外：ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 内：ロクロナデ	密	良	にぶい橙(7.5YR7/4) 〔釉〕:オリーブ (7.5Y4／2)	底部 1／5	
115	009-01	山茶椀	SD12	I42 SD1	−	−	高台径 7.4	ロクロナデ、高台貼り付け後横ナデ 底部未調整（糸切り痕有り）	密 3㎜以下の砂粒含	良	灰白(5Y7／1)	底部 1／2	・転用硯
116	007-04	山茶椀		H40 包含層	−	−	高台径 8.0	高台貼り付け後横ナデ、底部未調整 破断面打ち欠き・磨き	密	良	灰白(2.5Y7／1)	底部 ほぼ 完存	・転用硯 ・不転用部に釉薬が残存
117	006-05	山皿		G39 包含層	9.0	2.0	底部径 4.2	外：口縁部～体部ロクロナデ、底部未調整（糸切り痕有り） 内：ロクロナデ	密	良	灰白(7.5Y7／1)	口縁部 1／12	
118	007-05	山茶椀		L38 包含層	−	−	高台径 5.2	外：高台貼り付け後横ナデ、底部未調整（糸切り痕有り） 内：底部ロクロナデ	密	良	灰白(N8／0)	底部 1／2	・内面自然釉かかる
119	006-06	山茶椀		K37 包含層	−	−	−	高台・体部打ち欠き、磨き	密	良	灰白(7.5Y7／1)	底部 1／4	・転用硯
120	049-02	陶器		排土	−	−	−	外：未調整 内：未調整 破断面打ち欠き	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	赤橙(10R6／6)	底部？ 小片	・加工円盤

第７－７表　第１次調査出土遺物観察表

Ⅳ. 第 2 次 調 査

県道御麻生園豊原線北側の460㎡が調査区である。北東側は、農道を挟んで第５次調査と、南東側は県道を挟んで第６次調査と隣接する。

層序は、地表から10cmほどの耕作土、その下10cmが茶灰色土で床土と考えられる。さらに厚さ６cmの灰褐色砂質土、厚さ４cmの黄灰色砂質土が続き、地表から計30cmで暗黒褐色砂礫混土にいたる。明確な包含層はなく、遺構は暗黒褐色砂礫混土上面で検出した。

1. 遺　構

土坑数基、自然流水路の他多数の小溝を検出したが、不定形や浅いものが多く、その性格は不明である。また、まとまった遺物の出土がなく、しかも小片のため、時期についても不確定なものである。

(1) 奈良時代の遺構

A. 土坑

ＳＫ２０７２　SK2071の東側で検出した長辺4m、短辺１mの溝状の遺構である。深さは15cmほどで、土師器蓋・皿・甕の小片が出土したのみである。

ＳＫ２０７６　ＳＫ２072の北側で検出した直径60cmの不整円形を呈するものである。深さは、15cmほどで遺物の出土はない。したがって、時期決定の根拠はないが、付近の遺構が奈良時代のため一応この時期としておく。

B. 溝

ＳＤ２０８９　調査区中央で検出した弧状に延びるものである。幅20cm、深さ10cm前後の小規模なものである。土師器片が出土するのみで、時期決定の根拠に乏しい。

(2) 平安時代後期の遺構

この時期は、出土遺物の中心であるが、検出した遺構は、自然流水路のみである。

ＳＤ２０９３　調査区西端で、自然流水路の東岸を検出した。検出面から40cmほどまで確認したのみで、完掘していない。埋土は、一部に灰色混砂土が認められる他は、黒色土である。西岸は、東岸から2.4、6、6.4、7.2mの4ヶ所で確認しているが、埋没段階のものと考えられ、本来の西岸は調査区外で、少なくとも幅15m以上であったものと考えられる。また、埋土に砂粒が少ないことから沼状のものであった可能性もある。縄文後期、飛鳥時代のものも埋土に含むが、最終埋没は、平安時代後期と考えられる。

(3) 鎌倉時代の遺構

ＳＫ２０７７　SD2093の東岸近くで検出したL字状を呈する土坑である。土坑の重複の可能性もあるが、切り合いは確認できなかった。深さは10cm足らずである。

(4) 室町時代の遺構

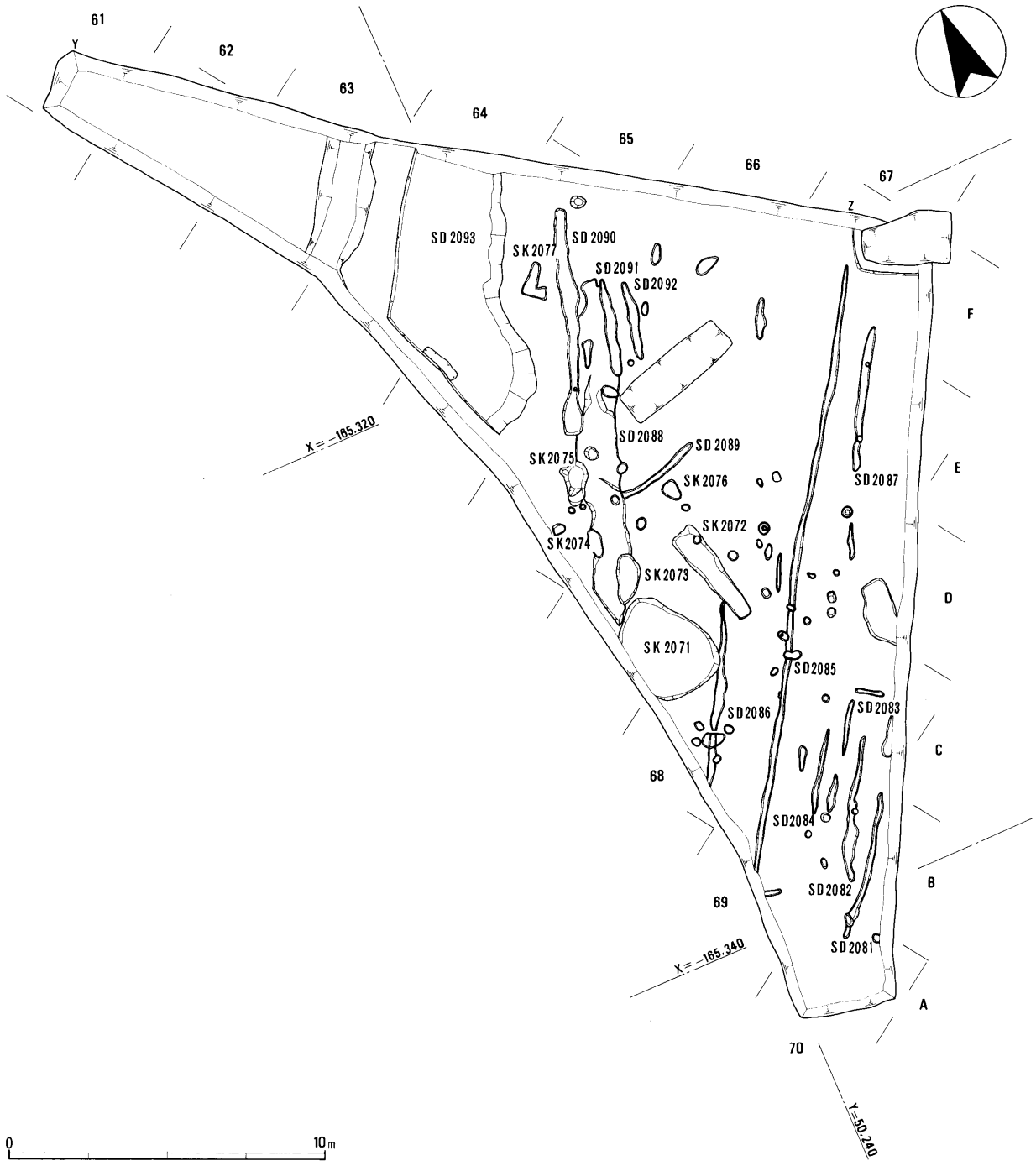
A. 土坑

ＳＫ２０７１　調査区西端で検出した直径25～30cm、深さ20cmの楕円形を呈する。SD2086に切られ、SD2088を切る。土師器椀・甕の小片が出土しているが、陶器の小片も１片混じる。したがって、近世に降る可能性もある。

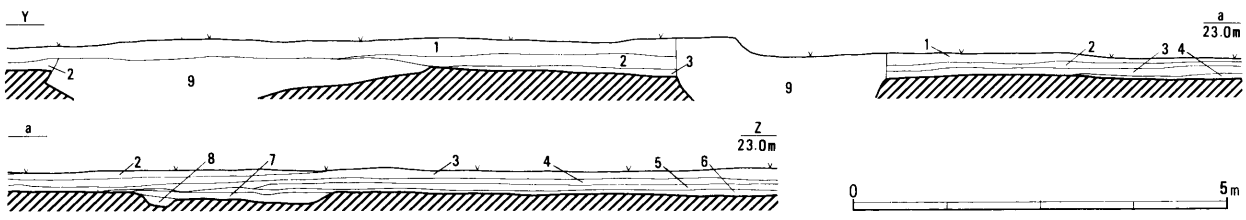
ＳＫ２０７３～２０７５　いずれもSD2088と重複して検出した長径1.6～0.9m、短径80～40cmの楕円形を呈するもので、SD2088を切る。深さが15cmほどで、SK2074がやや深いものの、他はSD2088と均一であるため、これらは一体のものであるかも知れない。

B. 溝

ＳＤ２０８１～２０８７　調査区南東部で検出し



第13図　遺構平面図（1：200）



1．茶褐色土（耕作土）
2．暗灰色土（耕作土）
3．灰色土（耕作土）
4．茶灰色土
5．灰褐色土
6．黄灰色砂質土
7．暗褐色砂礫混土
8．黒灰色粘質土
9．撹乱

第14図　土層断面図（1：100）

た幅20cm、深さ5cm未満の小溝群である。SD2081が、若干弧を描く他は、N33°Eの方向に並走する。耕作に伴うものかもしれない。

ＳＤ２０８８　調査区中央部を南北に延びるものである。幅1.2mを測るが、深さは20cm未満の浅いものである。同時期とした遺構SK2071・2073～2075、SD2090～2094に切られる。奈良時代の土師器杯・甕が出土しているが、SD2090・2091と沿うように延びることから、これらとの時期差は小さいものと考えられる。

ＳＤ２０９０　調査区中央部を南北に延びる溝である。幅60cmであるが一定でなく、深さ10cm未満の浅いもので、土師器皿片が出土している。

ＳＤ２０９１・２０９２　SD2090の東側を並走する溝である。幅はSD2090よりやや狭いものの、深さは同様である。SD2091からは、室町時代前半頃の土師器皿・鍋が出土している。

2．遺　物

縄文土器、土師器、須恵器、施釉陶器など多種多様な遺物が出土しているが、少量であり、遺構からの一括出土にも恵まれなかった。図示したものも小片が多く、(126,152)がSD2093、(129)がSK2071、(141)がSD2085、(150)がSD2087、(160)がＳＫ２０７７からの出土であるほかは、包含層等からの出土である。

(121～128)は縄文土器である。(122～124,126)は沈線を施し、(127,128)は口縁部外面に凸帯を巡らす。前者は後期、後者は晩期に属するものと考えられる。

(129)は弥生土器壺の底部、(130)は埴輪である。(130)は断面三角形状の凸帯を雑に張り付ける。

(131～142)は土師器で、(132)が皿、(136～142)は甕、他は椀である。椀では、(131)が杯にちかい形態、他は高台をもつものである。(133,134)が高台を張り付けるのに対し、(135)は底部を柱状に厚くするロクロ土師器的な形態である。小片のためロクロ使用の有無は判断し難いが、低部外面に糸切り痕が認められないため一応土師器としておく。この底部側面は、面取り風にヘラケズリされ、底部中央を穿孔し、紡錘車に転用されている。このヘラケズリは、転用時に行われたものと考えられる。甕では(142)のみが口縁端部を内に巻き込む他は、外に面をもつ。これらの土師器は、(131,136～141)が7～8世紀初頭、他は10世紀後半～11世紀に属するものと考える。

(143)は黒色土器A類椀、(144～146)はロクロ土師器椀である。(144)が断面三日月状の高台を張り付けるのに対し、(145,146)は粘土塊から切り放されたままである。

(147)は移動式竈としたが、小片であるため全体の形態が不明であり、竈とするに疑問も多い。ハケメは認められず、裾部側面にもアーチ状の空気穴を設けているようである。

(148～153)は須恵器で、(148,149)は蓋、(150,151)は杯、(152)は甕、(153)は摺鉢である。これらの須恵器は、(152)が口縁部外面に凸帯を巡らす古い要素を示すが、おおむね飛鳥時代に属するものと考える。

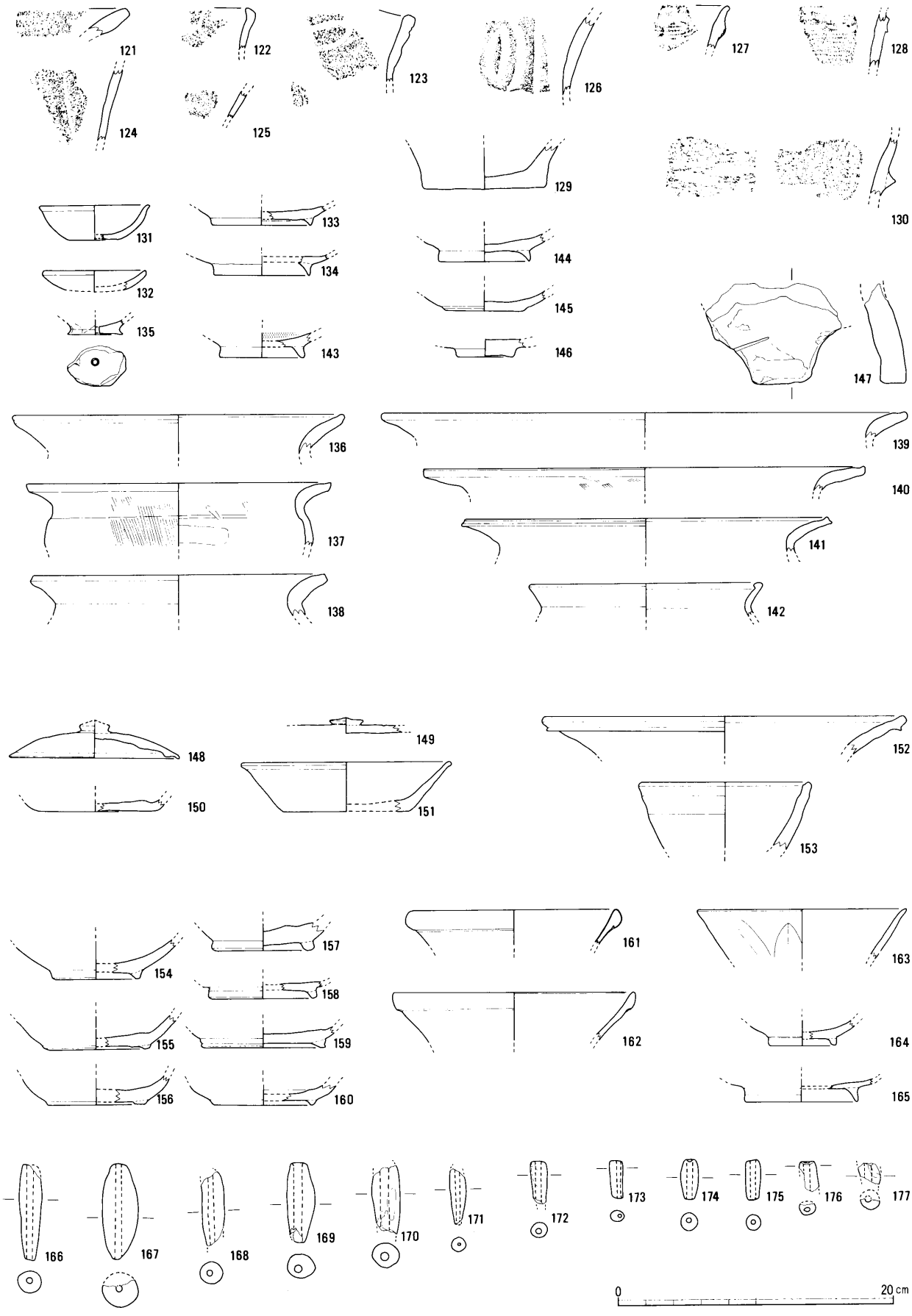
(154～160)は山茶椀である。(155,159)の高台には、籾殻痕が付着する。これらは、高台の特徴等から瀬戸の編年でいうⅢ段階[1]に属するものと考えられ、12世紀末～13世紀の時期と考えられる。

(161,162)は白磁椀、(163)は青磁椀、(164,165)は施釉陶器である。白磁は両者とも玉縁口縁をもち、青磁の外面には連弁文が施される。これらは、山茶椀と大きな時期差はないものと考えられるが、施釉陶器については15～16世紀に降るものと考えられる。

(166～177)は土錘である。直径1.6～2.4cmの太いもの(166～170)と、0.8～1.3cmの細いもの(171～177)がある。時期は不明であるが、出土遺物の多い平安時代後～末期に属する可能性が大きいものと考えられる。　(森川常厚)

【註】

① 藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館　1982



第15図　第2次調査出土遺物（1：4）

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
121	204 -05	SD2093	D-67 黒色土 上層	縄文土器 深鉢	—	—	——		7 mm以下の小石含	良	外；にぶい 橙(5YR6/3) 内；橙(5YR7/6)	口縁部 小片	磨滅のため調整不明
122	204 -07	SD2093	E-66 黒色土 上層	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；沈線	1.5 mm以下の砂粒多含	内面不良	外；橙(7.5YR7/6) 内；浅黄橙 (7.5YR8/3)	口縁部 小片	磨滅のため調整不明
123	204 -03	SD2093	D-67 黒色土 上層	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；沈線	2 mm以下の砂粒多含	内面不良	にぶい 黄橙 (10YR7/2)	口縁部 小片	磨滅のため調整不明
124	204 -04	SD2093	D-67 黒色土 上層	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；沈線	2.5 mm以下の砂粒多含	内面不良	灰白 (10YR8/2)	小片	磨滅のため調整不明
125	204 -08	SD2093	E-66 黒色土 上層	縄文土器 深鉢	—	—	——		1.5 mm以下の砂粒含	不良	にぶい 黄橙(10YR7/3)	小片	磨滅のため調整不明
126	205 -02	SD2093 上層	E-64 河道 灰色	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；沈線	3 mm以下の砂粒含	良	外；灰黄褐 (10YR5/2) 内；にぶい 黄橙 (10YR6/4)	小片	磨滅のため調整不明
127	207 -01		B-69 包含層	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；凸帯・押圧施文 内；ナデ	2 mm以下の砂粒多含	内面不良	外；橙 (5YR7/6) 内；淡黄 (2.5Y8/3)	口縁部 小片	磨滅のため調整不明
128	207 -02		D-69 包含層	縄文土器 深鉢	—	—	——	外；凸帯・条痕 内；ナデ	5 mm以下の小石多含	良	外；淡黄 (2.5Y8/3) 内；灰白 (2.5Y8/2)	口縁部 小片	
129	205 -01	SK2071	C-67 C-68 SK1	弥生土器 壺	—	—	底部径 8.6		3 mm以下の小石多含	内面不良	外；明赤褐 (2.5Y5/8) 内；灰白 (2.5Y8/2)	底部 1／7	磨滅のため調整不明
130	206 -05		外周トレンチ	埴輪	—	—	—	外；凸帯・ナデ 内；ナデ	2 mm以下の砂粒含	良	橙(7.5YR6/6) ～淡黄(2.5Y8/3)	小片	
131	204 -02	SD2093	D-68 黒色土 上層	土師器 椀	7.8	2.5		外；ナデ 内；ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	良	外；橙(5YR7/6)～灰白(2.5Y8/1) 内；浅黄褐 (7.5YR8/4) ～にぶい 褐色 (7.5YR5/4)	1／5	
132	207 -08		D-68 包含層	土師器 皿	7.3	1.5		外；ナデ 内；ナデ	1 mm以下の砂粒含	内面不良	灰白(2.5Y8/2) ～黄灰(2.5Y5/1)	1／4	
133	207 -06		B-70 包含層	土師器 椀	—	—	高台径 7.0	外；ナデ 内；不明	1 mm以下の砂粒含	良	外；にぶい 黄橙 (10YR6/3) 内；褐灰(10YR5/1)	底部 1／2	内面剝離多い
134	207 -07		D-68 包含層	土師器 椀	—	—	高台径 6.8	外；ナデ 内；ナデ	1 mm以下の砂粒含	良	外；黄灰 (2.5Y5/1) 内；淡黄 (2.5Y8/4)	底部 1／6	
135	207 -10		D-68 包含層	土師器 椀	—	—	高台径 4.0	外；ヘラケズリ (転用時) 内；ナデ	精良（赤色粒少量含）	内面不良	にぶい 黄橙 (10YR7/2)	底部 2／3	紡錘車に転用 残存重10.4g
136	205 -03		D-66 Pit2	土師器 甕	23.7	—		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	精良（赤色粒含）	良	浅黄橙 (7.5YR8/4)	口縁部 1／11	
137	204 -09	SD2093	E-66 黒色土 上層	土師器 甕	22.0	—		外；ハケメ 内；工具ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	内面不良	浅黄(2.5Y8/3)	口縁部 1／9	
138	207 -04		C-69 包含層	土師器 甕	21.0	—		外；ヨコナデ 内；ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	内面不良	にぶい 黄橙 (10YR7/3)	口縁部 1／10	
139	206 -06		外周トレンチ	土師器 甕	37.8	—		外；不明 内；ヨコナデ	1.5 mm以下の砂粒含	内面不良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1／18	外面剝離激しく調整不明
140	205 -04		D-67 Pit3	土師器 甕	31.8	—		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	赤色粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	口縁部 1／13	
141	205 -05	SD2085	C-68 C-69 SD 5	土師器 甕	26.0	—		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	精良	良	外；にぶい 橙 (7.5YR6/4) 内；にぶい 黄橙 (10YR7/3)	口縁部 1／12	
142	206 -04		外周トレンチ	土師器 甕	16.5	—		外；ヨコナデ 内；ヨコナデ	1.5 mm以下の砂粒含	内面不良	灰白(2.5Y8/2) ～暗黄灰(2.5Y5/2)	口縁部 1／15	
143	207 -09		D-68 包含層	黒色土器 椀		—	高台径 6.0	外；ナデ 内；ナデ	2 mm以下の砂粒含	良	浅黄(2.5Y8/3)	底部 1／5	A類
144	206 -03		外周トレンチ	ロクロ土師器 椀		—	高台径 6.6	ロクロナデ 底部外；未調整	1 mm以下の砂粒含	内面不良	浅黄(2.5Y8/3)	底部 1／5	糸切痕
145	207 -05		C-69 包含層	ロクロ土師器 椀	—	—	底部径 5.5	ロクロナデ 底部外；未調整	2.5 mm以下の小石含	内面不良	外；淡赤橙 (2.5YR7/3) 内；灰白 (2.5Y8/2 ～7/1)	底部 完存	
146	208 -04		外周トレンチ	ロクロ土師器 椀	—	—	底部径 4.0	ロクロナデ 底部外；未調整	精良（細赤色粒含）	良	外；淡黄(2.5Y8/3) 内；にぶい 橙(5YR7/4)	底部 完存	
147	206 -07		外周トレンチ	土師質 移動式竈	—	—	—	ナデ	3 mm以下の小石含	良	橙(5YR7/6)～淡橙(5YR8/3)	裾部 小片	

第８－1表　第２次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
148	207-03		C-69 包含層	須恵器 蓋	12.2	2.8	－		1㎜以下の砂粒少量含	良	にぶい 橙(7.5YR7/4) 口縁部；明青灰(5BG7/1)	1／6	磨滅が激しく調整不明、遺方からの流入か
149	201-06		D-66 包含層	須恵器 蓋	－	－	－	外；ロクロケズリ 内；ロクロナデ	3㎜以下の小石含	良好	灰 (N6/)	天井部小片	ロクロ右回転
150	203-05	SD2087	E-68 SD 7 東側	須恵器 杯	－	－	底部径 7.8	外；未調整 内；ロクロナデ	2.5㎜以下の小石含	良好	外；灰白(N7/) 内；明赤灰(5R7/1)	底部 1／4	内面自然釉
151	202-08		F-67 遺構上面	須恵器 杯	14.9	3.6	底部径 9.0	ロクロナデ 底部外；ロクロケズリ	3.5㎜以下の小石含	良好	青灰(5B5/1)	1／7	
152	203-01	SD2093 上層	D-65 河道灰色粘砂質土	須恵器 甕	25.0	－	－	ロクロナデ	1.5㎜以下の小石含	良好	青灰(5PB5/)	口縁部小片	
153	202-03		F-68 包含層	須恵器 摺鉢	12.2	－	－	ロクロナデ	2㎜以下の小石含	良好	外；明青灰(5B7/1) 内；暗青灰(5B4/1)	口縁部 1／7	
154	201-01		C-69 包含層	山茶椀	－	－	高台径 5.6	ロクロナデ	1.5㎜以下の小石含	良好	灰白(N8/)	底部 1／4	内面自然釉
155	202-01		F-68 包含層	山茶椀	－	－	高台径 6.8	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	灰白(N8/)	底部 1／4	高台に籾殻痕
156	201-02		C-69 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.0	ロクロナデ	0.5㎜以下の砂粒含	良好	灰白(N8/)	底部 1／3	ロクロ左回転
157	202-06		D-68 遺構上面	山茶椀	－	－	高台径 6.6	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	灰(N7/)	底部 1／2	内面自然釉
158	202-05		外周トレンチ	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	良好	灰白(7.5Y8/1)	底部 1／4	
159	201-04		D-66 包含層	山茶椀	－	－	高台径 8.6	ロクロナデ	1.5㎜以下の砂粒含	良好	灰白(N8/)	底部 1／4	高台に籾殻痕 内面一部自然釉
160	203-04	SK2077	D-65 SK 7	山茶椀	－	－	高台径 7.0	ロクロナデ	3㎜以下の小石含	良好	外；灰(N6/) 内；灰(5Y5/1)	底部小片	
161	201-09		D-68 包含層	白磁 椀	14.7	－	－	ロクロナデ	細砂粒含	良好	灰白(N7/) 釉；明ｵﾘｰﾌﾞ灰(2.5GY7/1)	口縁部 1／8	
162	202-07		F-67 遺構上面	白磁 椀	17.4	－	－	ロクロナデ	細砂粒含	良好	灰白(N7/) 釉；明ｵﾘｰﾌﾞ灰(5GY7/1)	口縁部 1／6	
163	202-04		外周トレンチ	青磁 椀	15.0	－	－	ロクロナデ	精良	良好	釉；ｵﾘｰﾌﾞ黄(7.5Y6/3)	口縁部 1／9	
164	201-10		E-65 包含層	施釉陶器 椀	－	－	高台径 4.8	ロクロナデ	精良	良好	灰白(5Y8/1) 釉；ｵﾘｰﾌﾞ灰(10Y4/2)	底部 1／4	付け高台
165	206-02		外周トレンチ	施釉陶器 椀	－	－	高台径 8.0	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	灰白(2.5Y8/2)	底部 1／4	付け高台
166	208-14		E-67 包含層	土錘	径 1.6	長 7.0	残存重 16.2g	ナデ	1.5㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)～黄灰(2.5Y6/1)	3／4	
167	208-06		表採	土錘	径 2.4	長 7.0	残存重 30.0g	ナデ	3㎜以下の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3)～黄灰(2.5Y6/1)	1／2	
168	208-05		表採	土錘	径 1.6	残長 5.4	残存重 12.4g	ナデ	0.5㎜以下の砂粒含	内部不良	灰白(2.5Y8/2)～淡黄(2.5Y8/3)	両端欠損	
169	208-08		C-67 包含層	土錘	径 1.6	長 5.8	残存重 19.1g	ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	橙(7.5Y7/6)～灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	
170	208-15		F-68 包含層	土錘	径 1.8	残長 5.0	残存重 15.9g	ナデ	1.5㎜以下の砂粒多含	良	淡黄(2.5Y8/3)	2／3	
171	208-13		E-66 包含層	土錘	径 1.0	残長 4.0	残存重 4.5g	ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	暗灰黄(2.5Y5/2)	2／3	
172	208-16		F-68 包含層	土錘	径 1.0	残長 3.0	残存重 4.2g	ナデ	1㎜以下の砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	2／3	
173	208-07		A-70 包含層	土錘	径 0.8	長 2.7	重 3.2g	ナデ	1.5㎜以下の砂粒含	良	浅黄(2.5Y7/3)	ほぼ完形	
174	208-12		D-65 包含層	土錘	径 1.3	長 2.9	重 4.4g	ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	
175	208-09		C-69 包含層	土錘	径 1.1	長 3.0	重 3.8g	ナデ	0.5㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/4)	ほぼ完形	
176	208-10	SD2093	C-69 黒色土上層	土錘	径 1.2	残長 2.2	残存重 2.1g	ナデ	細砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1／4	
177	208-11	SD2093	C-69 黒色土上層	土錘	径 1.3	残長 1.6	残存重 1.5g	ナデ	細砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	小片	

第8－2表　第2次調査出土遺物観察表

V. 第 3 次 調 査

県道御麻生園豊原線の南側、第6次調査区と第4次調査区の間に位置する。北方から順次高度を下げてきた段丘面が、櫛田川の形成した自然堤防に接する地点の3,500㎡が調査区である。

1. 遺　構

表土下50㎝のにぶい橙色土上面（1次検出面）と、表土下110㎝の灰黄褐色とにぶい黄色土が混じる粘質土上面（2次検出面）で遺構検出を試みた。しかし、明確な遺構は少なく、自然流水路、不定形な土坑、小溝を多数検出したのみである。さらに遺構からの出土遺物の大半が小片であるため、遺構の時期は不確定なものである。

(1) 平安時代後期の遺構

ＳＤ３３８・３３９　調査区南部で検出した溝である。SD339はほぼ真北に延び、SD338はそれと並走するもののやや東へ弯曲する。両者とも幅70㎝～1m、深さ10～15㎝である。遺物の出土はなく、時期決定の根拠に乏しいが、2次検出面での検出であるため、一応ＳＤ340と同時期としておく。

ＳＤ３４０　調査区中央を北から南へ蛇行して流れる自然流水路である。1次検出面の落ち込みが、そのまま西岸とすることも可能であろうが、主体は2次検出面での検出である。幅4m、深さ50㎝ほどであるが、調査区南部では不明瞭になる。埋土には多量の礫を含むため、洪水により一気に埋没したものと考えられる。古墳時代と平安時代の遺物が出土している。後者は、11世紀前後のものが主体で、緑釉陶器耳皿（248）が出土している。

(2) 平安末～鎌倉時代の遺構

A. 土坑

ＳＫ３２１・３２５～３２７　調査区北部で検出した不定形な土坑である。SK321以外のものは、付近の溝と同じ性格のものととらえることも可能であろう。深さは、いずれも20㎝未満の浅いものであるが、SK326の西側は柱穴状に30㎝の深さをもつ。SK321からは遺物の出土がないが、付近の状況からこの時期とした。したがって、室町時代に降る可能性も残る。

ＳＫ３２８～３３０・３３２　調査区東部で検出した不定形な土坑である。深さは20㎝であるが、SK328は10㎝ほどしかなく、SK332は30㎝を測る。SK332からは、平安時代以前の土師器小片が出土しているが、付近の状況からこの時代とした。したがって、時期が遡る可能性も残る。

B. 溝

ＳＤ３０１　調査区北端部をE10°Nの方向に真っ直ぐ延びる溝である。幅40㎝、深さ20㎝で、他の溝とは、性格が異なるものかもしれない。

ＳＤ３２０　調査区南端で検出した幅60㎝、深さ10㎝の溝である。西端は途切れるように終わり、東端は調査区外である。

ＳＤ３２２～３２４　調査区北部で検出した蛇行する溝である。深さは10～15㎝の浅いもので、幅は、SD324が20～60㎝、SD322は1m～20㎝の不定形なもの、SD323は広く、最大幅1.2mである。この地点から山皿（277）が2/3の残存で出土した。土坑の重複であるかもしれない。

ＳＤ３３４　SK330南東角から南東方向に3mほど延びる溝である。深さはSK330と同様20㎝であるため、両者は一体のものと考えられる。

ＳＤ３３６　調査区南東部で4mほどを検出した。幅50㎝、深さ5㎝程度の浅いもので、両端は深さをさらに減じ、消滅する。出土遺物からこの時期としたが、室町時代の溝と同様なものかもしれない。

(3) 室町時代の遺構

遺構出土遺物が小片のため詳細な時期は不明であ

るが、SK310、SD302·309から出土した土師器鍋は4段階に属し16世紀前後のもである。[1]

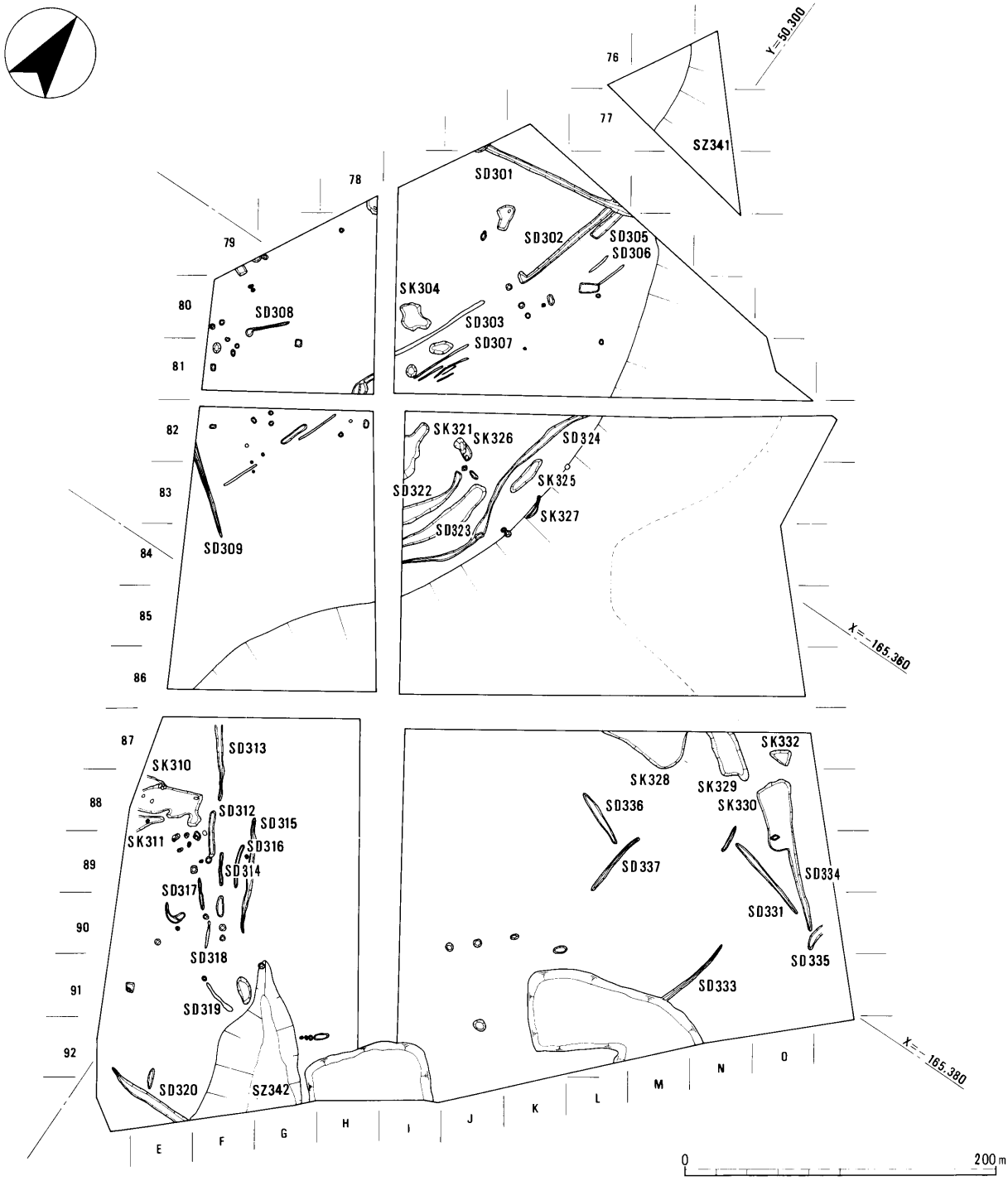
A．土坑

SK304　調査区北部で検出した不整方形を呈するものである。深さは10cm未満の浅いもので、土師器皿小片が出土したのみである。

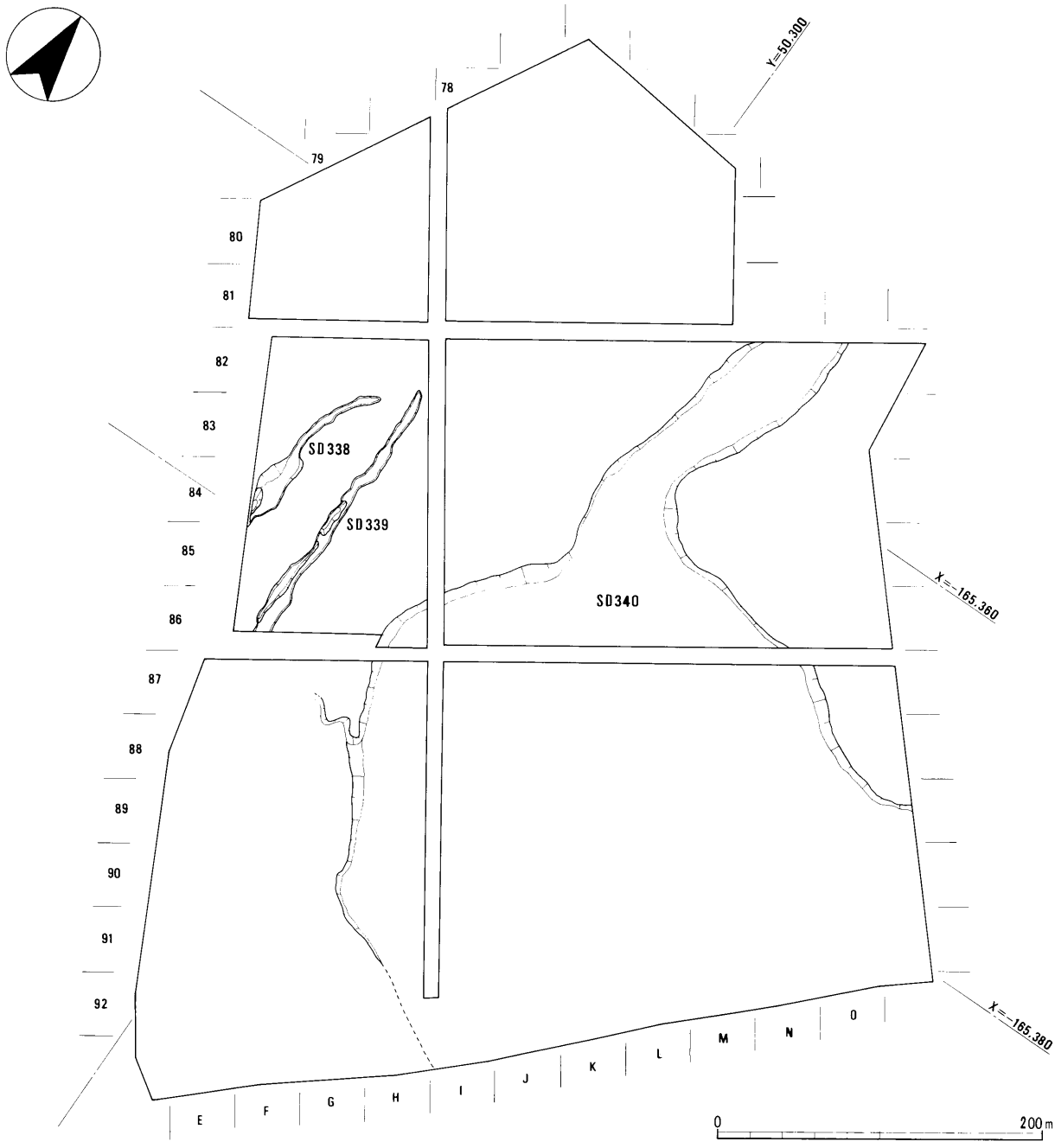
SK310・311　調査区南東端で検出した不整形なものである。SK311は深さ5cm程度であるが、SK310は25cmを測り、西壁には拳大の石が4個集められていた。

B．溝

SD302・303・305～308　調査区北部をN16°Eの方向に、途切れがちに並走する小溝群である。幅10～40cm、深さは15cmを測るものもあるが、おおむね5cm程度ある。現況では、これらの溝の直上に同方向に延びる農道が位置しており、



第16図　遺構平面図（1次検出面）（1：400）



第17図　遺構平面図（２次検出面）（１：400）

それに関連するものとと考えられる。SD308はやや方向が異なるため、性格の異なるものかも知れない。その場合、この溝からは遺物の出土がないため、この時期とする根拠も失う。

ＳＤ３０９　調査区東端で検出した幅30㎝、深さ10㎝未満のものである。２条の溝が重複しており、方向はN52°Wである。耕作に伴うものと考えられるが、同じ方向のものがなく、疑問も残る。

ＳＤ３１２～３１９　調査区南部をＮ33°Ｗの方向に、途切れがちに並走する小溝群であるが、SD319はやや弯曲する。幅20～40㎝、深さは10㎝未満の浅いもので、耕作に伴うものと考えられる。SD315からは鎌倉時代の遺物が、SD317からは須恵器が、SD316･318からは中世以前の土師器片が出土しているが、一連の遺構としてこの時期とした。

ＳＤ３３１　調査区西部をN75°Wの方向に延びるものである。幅40㎝未満であるが、深さは20㎝を測る。耕作に伴うものとしてこの時期としたが、平安時代前期の土師器甕片が出土していることや、

他のものより深く、同方向のものがない等、時期、性格に疑問も多い。

SD333・337　調査区南東部をN12°Eの方向に並走する小溝である。幅30cm未満、深さ5～10cmで、耕作に伴うものと考えられる。

2．遺　物

縄文時代晩期から近世までの多種・多様な遺物が出土しているが、ほとんどが包含層や自然流水路からのもので、一括資料として扱えるものはない。

縄文土器　(178・179)ともに晩期に属するもので、凸帯上を二枚貝により押圧する。

弥生土器　(180・181)は壺の底部、(182～184)は高杯である。(183・184)は穿孔されるが、(184)には櫛描文が認められない。

土師器　(185～196)は古墳時代に属するものと考えられ、壺(185～189)、甕(190・191)、椀(192～195)、高杯(196)等多様な器種がある。(186)は甕とすべきかもしれず、(188～191)は古式土師器とすべき時期であろう。

(197～214)は皿である。(197～207)は、外面をナデる(198・205)を除き全て外面未調整である。法量が一定ではないものの、新田氏の分類[2]のA$_1$にちかい要素をもち、平安時代末期に属するものと考えられる。(208)は小皿で、前者と同様な時期か。(209)は同じくA$_6$に近いもので15世紀代に属するものである。(210)はA$_7$で16世紀、(211)は新田氏の分類に該当しないが、室町時代のものと考えられる。(212～214)は他のものと異なり、赤褐色を呈し、堅く焼成されていることから近世に属するものであろう。

(215～217)は椀である。高台をもつもの(215・216)ともたないもの(217)がある。(216)の高台外面にはヘラによる刺突痕が認められる。装飾として施された可能性がある。

(218～222)は甕であが、いずれも口縁部片で全体の器形がわかるものはない。(222)は口縁端部を内に巻き込む平安時代中期に属するもので、他は内側のハケメがナデ消されていること等古い要素をもち、確証はないものの6～7世紀のものと思われる。

(223)は口径に比べ器高が低い鍋で、その結果、外面のハケメはなく、底部のヘラケズリが頸部近くまで及んでいる。室町時代後半のものか。

(224・225)は甑である。両者とも口縁部片であるが、(225)内面のヘラケズリは口縁部近くまで及ぶ。

ロクロ土師器　(226～236)は椀、(237)は皿である。椀は全て底部付近のみで、全体の器形がわかるものはないが、山茶椀と似た高台をもつもの(226～233)、高い高台のもの(235・236)、高台をもたないもの(234)がある。

黒色土器　(238)のみで、A類の椀である。

須恵器　(239・240)は杯、(241)は椀、(242)は平瓶、(243・244)は甕である。(241)は、口縁部を玉縁状に折り返す一見白磁のような形態を示す。

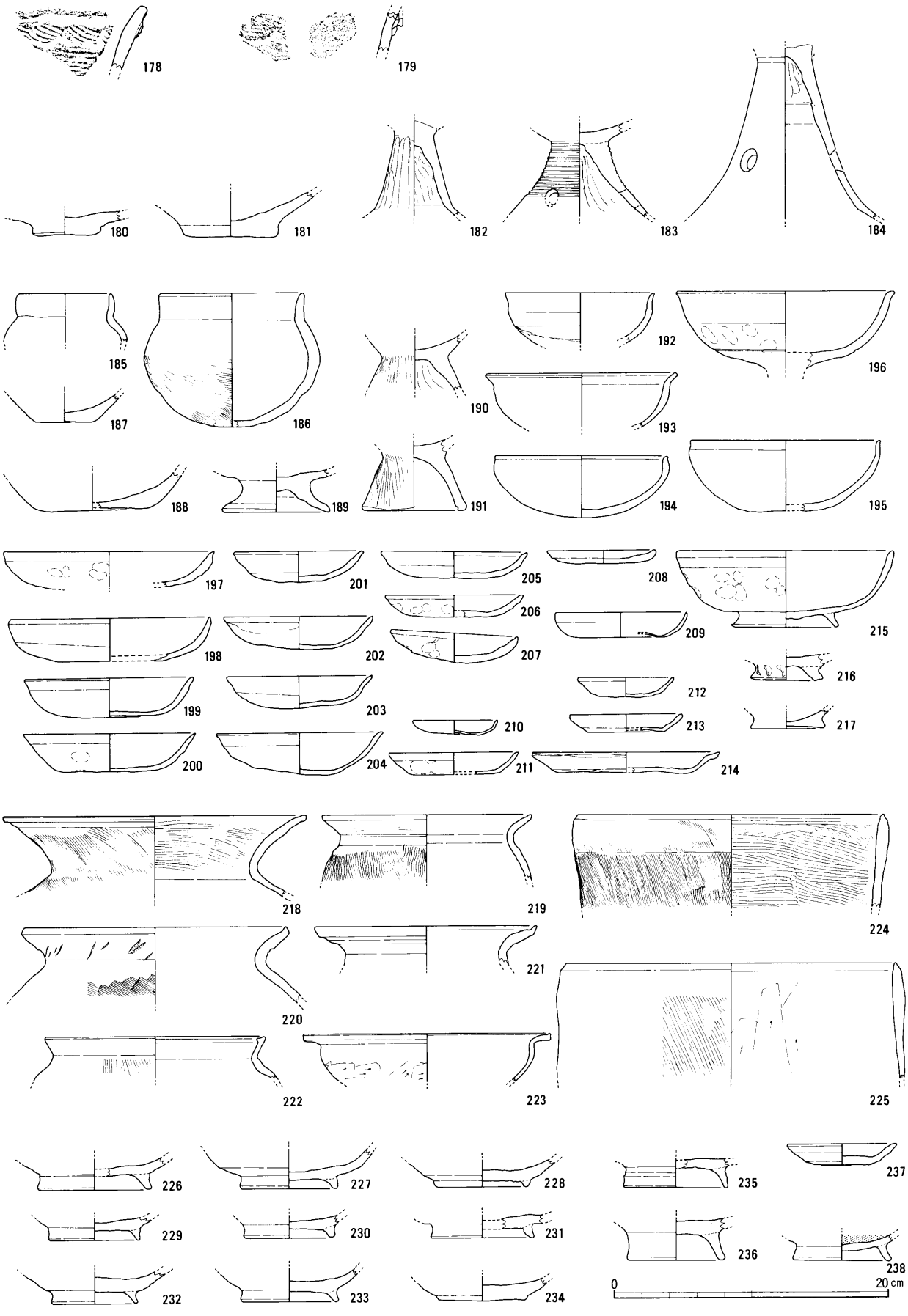
緑釉陶器　(245)は椀、(246～248)は耳皿であるが、(247)は皿かもしれない。(245・248)は軟質、他は硬質である。

灰釉陶器　図示したものは(249)のみである。灰釉は漬け掛け、底部外面は未調整である。

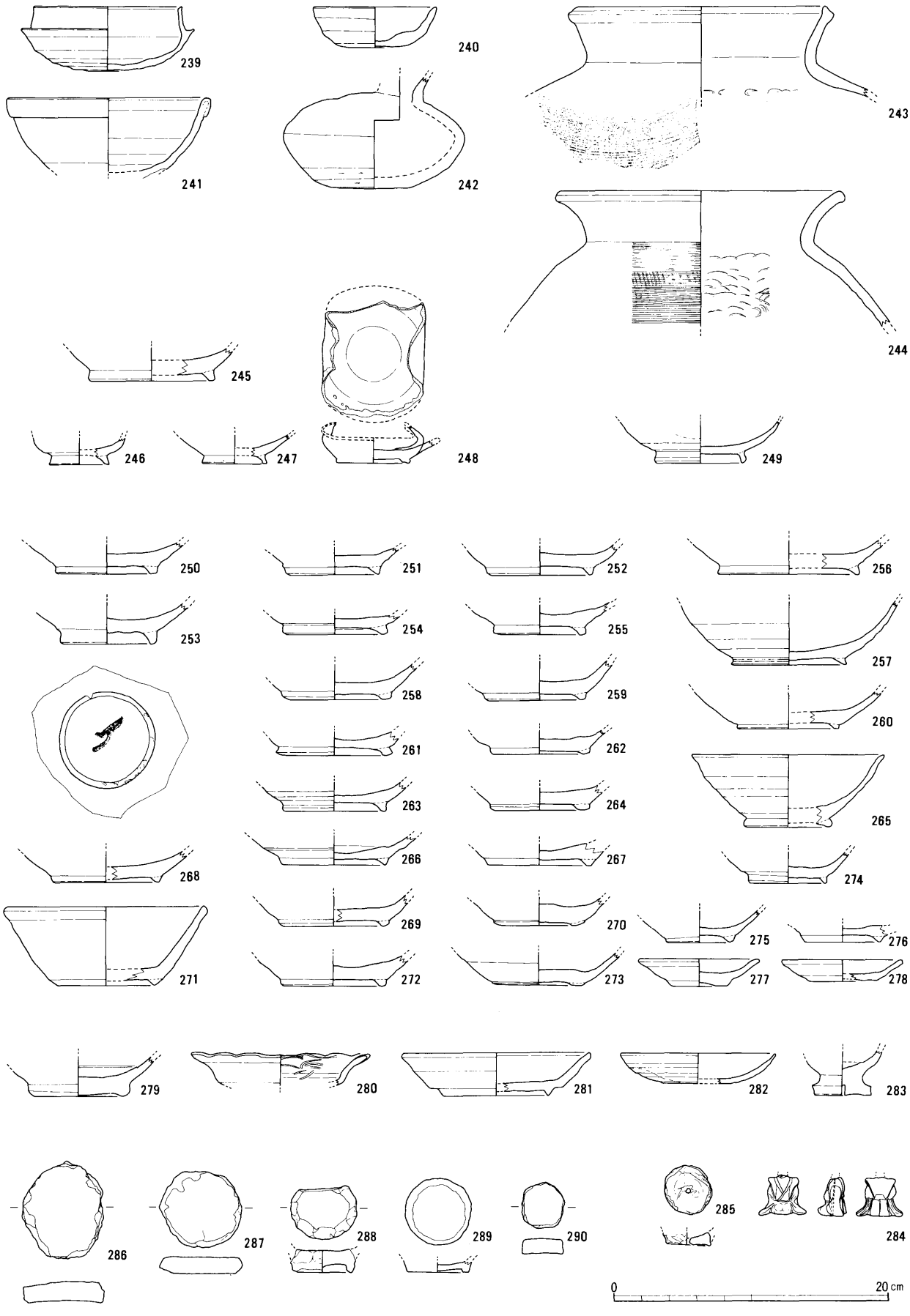
山茶椀　ほとんどが底部片で、全体の器形がわかるものは少ないが、(250～273)は椀、(274～276)は小椀、(277・278)は小皿である。比較的高く均整な高台をもつ古手のもの(250～255)と小椀は、瀬戸の編年[3]のⅡ段階に、他はⅢ段階に相当するものと思われる。高台に籾殻痕が認められるもの(252・253・260・261・264・269・271・272・275・276)と砂痕のもの(258・259・262・273)があり、(250・254・258・259・262)は渥美産、(276)は知多産と考えられる。また、硯に転用されているものも多く、(254・256・257・267・272)がこれに該当する。

(270)は、高台のみが異常に摩滅しており、特殊な用途に使用されたものかもしれず、(263)は2次焼成を受けたものか、外面の一部が赤変し、内面には炭素が吸着している。

白磁　出土量が極めて少なく、図示したものは(279)のみである。玉縁口縁をもつものと思われ



第18図　第3次調査出土遺物（1：4）



第19図　第3次調査出土遺物（1：4）

る。

青磁　白磁と同様出土量が極めて少なく、図示したものは(280)のみである。波状口縁を呈し、陰刻文が施される。

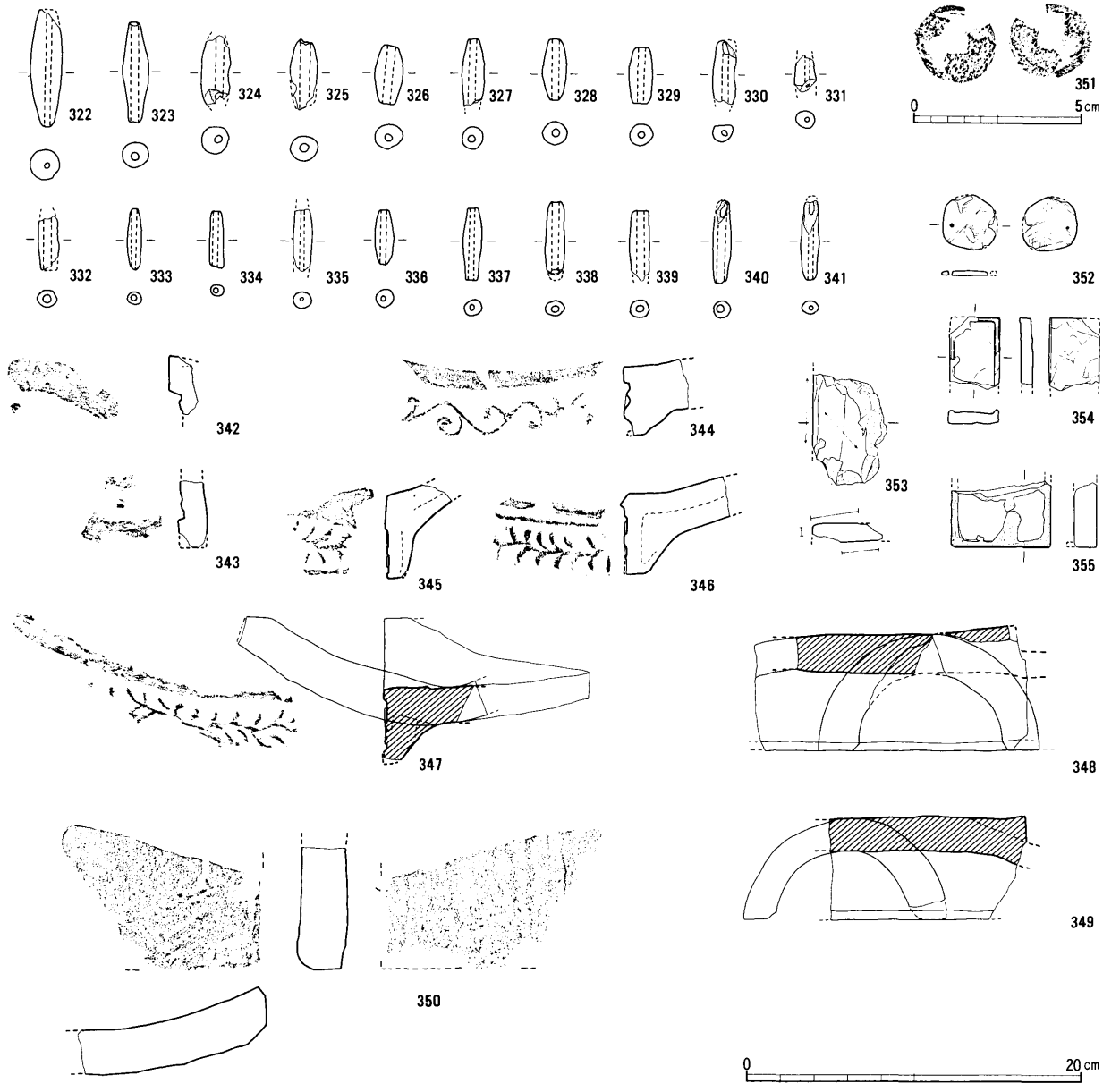
施釉陶器　(281)は皿で、削り出し高台をもつ。大窯期（16世紀代）のものであろう。

近世陶器　(282)は皿、(283)は花瓶の底部か。両者とも鉄釉が施されるが、(283)の底部外面には直径4㎜の円孔が施される。器台等と連結して使用されるためであろうか。

人形　(284)は土師質で、武人の裃姿を表しているものと思われる。久留米城外郭遺跡から同様なものが出土している。前型と後型を合わせるかたちで製作されており、型の合わせ目から粘土が凸帯状にはみ出ている。中央に径1㎜の空洞がある。乾燥までの間、芯が入れられていたのかもしれない。

紡錘車　(285)のみである。土師器椀底部を打ち欠き、転用している。

加工円盤　36点が出土したが、図示したものは5点のみで、他は観察表と写真のみを掲載した。直径4.7cm～6cmの大型のもの(286～289･291･296･299･302･303･319)、3.7～4.2cmの中型のもの(293～295･298･300･304･306～308･310･311･315～317･320)、3.4～2.7cmの小型のもの(290･292･297･



第20図　第3次調査出土遺物（1：4）　　351＝1:2

301・305・309・312～314・318・321）の3種に分類できる。素材としては、土師器椀の底部、陶器甕の胴部を加工するものが多いが、近世磁器徳利の底部や天目茶椀底部を用いるものもある。

土錘　20点を図示し、これはほぼ出土量に相当する。最大径は0.8～1.8cmまでのものがあり器高も3.2～7.0cmと様々であるが、太く長いもの（322・323）、太く短いもの（324～332）、細いもの（333～341）に大別できそうである。

瓦　（342・343）は巴文軒丸瓦、（344～347）は唐草文軒平瓦、（348・349）は玉縁式丸瓦、（350）は平瓦である。軒平瓦はすべて曲線顎である。（344）は均整唐草文で、他のものより古い要素をもち、南光寺出土のもの[5]と同笵の可能性がある[6]。瓦当全面に自然釉が掛かり、焼き割れが認められる。（346）の上外区には、笵からはみ出た痕跡がある。丸瓦の玉縁は、段のみ粘土を加えて成形している。（350）は凹面の布目が側面まで回り込む箇所があり、したがって一枚作りと考えられる。

銭貨　（351）のみであるが、腐食が激しく方孔円形である他は不明である。

有孔円盤　（352）一点のみの出土である。古墳時代のものか。

砥石　図示したものは（353）のみであるが、他に同石材の小片が数片あり、同一個体と考えられる。

硯　（354）は陶製、（355）は石製である。（354）は小型品で携帯を目的としたものかもしれない。近世に属すると考えられるが確証はない。

【註】

① 伊藤裕偉　「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history vol. 1』　三重歴史文化研究会　1990.5
② 新田洋　「中・南勢における中世土師器－特に「在地系」皿－の変遷と地域色解明への一視点」『マージナル　No 9』　愛知考古学談話会 1988.10
③ 藤澤良祐「瀬戸古窯址群」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市　歴史民俗資料館 1982
④ 園井正隆　『久留米城外郭松田屋敷跡』　久留米市教育委員会　1997
⑤ 鈴木敏雄　『三重県古瓦図録』　楽山文庫　昭和8年8月25日
⑥ 河北秀実氏の御教示による。

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
178	309-07		M－77 包含層	縄文土器 深鉢	－	—	——	外；2枚貝条痕 内；ナデ	1.5 mm以下の砂粒多含	良	外；灰黄褐(10YR5/2) 内；褐灰(10YR5/1)	口縁部小片	
179	317-11		H－91 包含層	縄文土器 深鉢	－	—	——	外；凸帯上を2枚貝押し引き 内；2枚貝条痕	1 mm以下の砂粒含	良	外；にぶい黄褐(10YR5/3) 内；褐灰(10YR5/1)	小片	
180	324-05		L－86 淡黄灰色土	弥生土器 壺	－	—	底部径 5.0	ナデ	4 mm以下の小石多含	良	外；にぶい橙(7.5YR7/4) 内；橙(7.5YR7/6)	底部完存	外面一部黒斑
181	322-02	SD 340	N－82 SD 40 礫直上	弥生土器 壺	－	—	底部径 6.8	外；ナデ 内；未調整	2 mm以下の砂粒多含	良	外；にぶい橙(5YR7/4) 内；黄灰(2.5Y6/1)	底部完存	底部外面一部黒斑
182	323-06	SD 340	M－83 SD 40 礫直上	弥生土器 高杯	－	—	——	外；ヘラミガキ 内；絞り痕	2 mm以下の砂粒含	良	灰白(7.5YR8/1)～浅黄橙(7.5YR8/3)	筒部完存	
183	302-06		O－82 包含層	弥生土器 高杯	－	—	——	外；櫛描横線文 内；絞り痕	2.5 mm以下の砂粒含	良	外；赤褐(5YR4/8) 内；橙(5YR6/6)	脚上部完存	
184	320-01		C地区東側排土下層	弥生土器 高杯	－	—	——	外；ヘラミガキ？ 内；ナデ	2 mmの小石多含	やや不良	灰白(10YR8/2)～淡橙(5YR8/3)	筒部完存	磨滅のため調整不明
185	306-08	SD 340	H－90 SD 40 礫直上	土師器 壺	6.6	—	——	ナデ	3 mm以下の小石含	良	外；にぶい橙(7.5YR7/4) 内；淡黄(2.5Y8/3)	口縁部1/8残	
186	306-07		O－89 下層灰褐色土礫直上	土師器 壺	10.2	9.8		外；ハケメ 内；ナデ	4 mm以下の小石含	良	浅黄褐(10YR8/3)～にぶい褐(7.5YR5/4)	1/3	
187	306-05		I－92 トレンチ東側	土師器 壺	－	—	底部径 4.0	ナデ	2 mm以下の小石含	内面不良	外；にぶい黄橙(10YR6/4) 内；橙(7.5YR7/6)	底部1/2	
188	322-03		H－91 褐色土	土師器 壺	－	－	底部径 8.0	ナデ	3 mm以下の砂粒多含	良	外；浅黄橙(7.5YR8/4) 内；灰白(5Y7/1)	底部完存	底部外面に黒斑
189	323-05	SD 340	K－86 SD 40 礫直上	土師器 壺	－	－	脚部径 7.4	ナデ	4 mm以下の小石含	良	赤橙(10R6/6)～浅黄橙(10YR8/3)	脚部完存	
190	303-01		H－89 包含層	土師器 台付甕	－	－	－	外；ハケメ 内；ナデ	5 mm以下の小石含	良	淡赤橙(2.5YR7/3)～灰白(2.5Y8/2)	脚上部完存	
191	302-05		J－83 包含層	土師器 台付甕	－	－	脚部径 13.0	外；ナデ 内；工具ナデ	2 mm以下の砂粒含	内面不良	外；淡橙(5YR8/4) 内；灰白(10YR7/1)	脚部完存	
192	318-05		M－82	土師器 椀	10.8	－		ナデ	1 mmの砂粒多含	やや不良	橙 (7.5YR7/6)	1/2	外面にヘラ状工具痕
193	323-04	SD 340	M－83 SD 40 礫直上	土師器 椀	13.6	－		ナデ	細砂粒含	やや不良	外；橙(5YR6/8) 内；橙(7.5YR6/6)	口縁部1/8	黒斑？
194	306-09		南北畦南端	土師器 椀	12.5	4.5		ナデ	2 mm以下小石粒含	良	橙(5YR6/6)～明赤褐(2.5YR5/6)	口縁部1/4	
195	319-03		トレンチ東側礫直上	土師器 椀	13.8	5.2		外；未調整 内；ナデ	精良	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/4)～橙(5YR6/8)	口縁部1/8	磨滅のため調整不明確
196	322-01	SD 340	M－83 SD 40 礫直上	土師器 高杯	16.0	－		外；未調整 内；ナデ	2 mm以下の砂粒多含	良	橙(5YR7/8)	杯部1/4	
197	319-02		N－77 包含層	土師器 皿	15.2	－		外；未調整 内；ナデ	5mmの小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)～灰褐(10YR6/1)	口縁部1/6	
198	301-06		O－83 包含層	土師器 皿	14.8	3.2		ナデ	精良	内面不良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/6	
199	306-01	SD 340	G－91 SD 40 礫直上	土師器 皿	11.9～12.9	3.0		外；未調整 内；ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)～浅黄橙(7.5YR8/4)	ほぼ完形	
200	319-07		G－87 包含層	土師器 皿	11.0	2.8		外；未調整 内；ナデ	1 mmの砂粒若干含	不良	外；灰白(10Y8/1) 内；灰白(7.5YR8/2)	1/4	磨滅が激しく調整不明確
201	301-04		K－86 北側トレンチ	土師器 皿	9.4	2.3		外；未調整 内；ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	内面不良	外；淡黄(2.5Y8/3) 内；灰黄(2.5Y7/2)	完形	
202	318-09		N－87 包含層	土師器 皿	10.8	2.5		外；未調整 内；ナデ	1 mmの砂粒多含	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/2	磨滅が激しく調整不明確
203	301-07		L－86 褐灰色土	土師器 皿	10.6	2.4		外；未調整 内；ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)～にぶい黄橙(10YR7/4)	ほぼ完形	
204	306-04	SD 340	G－91 SD 40 礫直上	土師器 皿	11.9	3.0		外；未調整 内；ナデ	精良	良	外；淡黄(2.5Y8/3) 内；暗赤褐(5YR3/4)	ほぼ完形	

第9－1表　第3次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
205	301 -05		L－86 北側トレンチ	土師器 皿	10.6	1.9		ナデ	1㎜以下の砂粒含	内面不良	浅黄橙(10YR8/3) ～橙(5YR7/6)	1/5	
206	318 -07		N－76 包含層	土師器 皿	10.0	1.6	－	外；未調整 内；ナデ	1㎜の砂粒含	良	外；淡黄(5Y8/2) 内；淡黄(2.5Y8/3)	1/4	
207	318 -08		O－85 包含層	土師器 皿	10.2	2.2		外；未調整 内；ナデ	1㎜の砂粒多含	良	外；浅黄橙 (10YR8/3) 内；淡黄(2.5Y8/2)	1/3	
208	318 -02		L－83 包含層	土師器 皿	7.9	1.0		外；未調整 内；ナデ	1㎜の砂粒含	良	褐灰(7.5YR5/1)	1/2	
209	318 -03		N－92 包含層	土師器 皿	10.6	1.9		外；未調整 内；ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	
210	301 -02		G－82 包含層	土師器 皿	6.2	1.2		ナデ	精良（赤色粒含）	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	3/5	歪みが大きい
211	318 -01		M－82 包含層	土師器 皿	9.4	2.6		外；未調整 内；ナデ	精良	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1/3	
212	301 -01		J－78 包含層	土師器 皿	7.0	1.5		ナデ	精良（赤色粒含）	内面不良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	口縁端部に油煙付着
213	301 -03		G－82 包含層	土師器 皿	8.2	1.3		ナデ	精良（赤色粒含）	内面不良	にぶい 橙(5YR7/4) ～橙(5YR7/6)	1/5	口縁端部に油煙付着
214	319 -01		E－91 包含層	土師器 皿	13.6	2.1		外；未調整 内；ナデ	精良	やや不良	橙(5YR7/8)	1/6	口縁部外面にヘラ状工具痕
215	323 -01	SD 340	K－85 SD 40 礫直上	土師器 椀	15.6	5.6	高台径 7.8	外；未調整 内；ナデ	1㎜以下の砂粒多含	やや不良	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	外面炭化物付着
216	324 -04		O－84 包含層 礫層	土師器 椀	－	－	高台径 4.4	ナデ	2㎜以下の砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	底部 3/4	高台外面にヘラによる刺突痕 内面煤付着
217	317 -08		G－92 包含層	土師器 椀	－	－	底部径 5.3	ナデ	精良	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	底部完存	外面全面煤付着
218	306 -02		I－92 トレンチNo.4	土師器 甕	21.5	－	－	ハケメ	2㎜以下の砂粒含	内面不良	灰白(2.5Y8/2) ～明黄褐(10YR6/6)	口縁部 1/6	
219	320 -04		B地区 東側	土師器 甕	15.2	－	－	外；ハケメ 内；ナデ	1㎜の砂粒若干含	やや不良	外；橙白(10Y8/1) 内；灰白(7.5YR8/2)	口縁部 1/4	
220	321 -02	SD 340	K－86 SD 40 礫直上	土師器 甕	19.0	－	－	外；ハケメ 内；ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部 1/4	
221	305 -03		M－76 包含層	土師器 甕	16.0	－	－	ヨコナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	口縁部 ＊＊＊	
222	309 -05		H－87 包含層	土師器 甕	15.8	－		外；ハケメ 内；板状工具ナデ	1㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄褐(10YR5/4)	口縁部 1/10	
223	309 -04		F－79 包含層	土師器 鍋	19.8	－		外；ヘラケズリ 内；ナデ	2㎜以下の砂粒含	内面不良	浅黄橙(7.5YR8/4) ～ にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 1/7	
224	323 -02	SD 340	N－82 SD 40	土師器 甑	22.0	－	－	ハケメ	細砂粒含	不良	灰白(10YR8/2)	口縁部 1/6	
225	309 -06		L－83 礫層	土師器 甑	24.0	－	－	外；ハケメ 内；ヘラケズリ	2㎜以下の砂粒含	内面不良	灰白(7.5YR8/2) ～ にぶい褐(7.5YR7/4)	口縁部 1/10	
226	303 -04		N－83 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 8.0	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	外；黄灰(2.5Y5/1) 内；灰黄褐 (10YR6/2)	底部 2/5	山茶椀の酸化焼成か？
227	302 -01		M－77 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.8	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	内面不良	外；浅黄橙 (10YR8/3) 内；灰白(2.5Y8/2)	底部完存	
228	303 -03		H－88 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.4	ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	良	外；淡黄(2.5Y8/4) 内；灰白(2.5Y8/2)	底部完存	底部外面糸切り後沈線一周
229	324 -01		N－83 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.4	ロクロナデ	4㎜以下の小石多含	やや不良	外；灰白(2.5Y8/2) 内；にぶい橙 (7.5YR7/4)	底部 3/4	
230	303 -07		－ 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.2	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	底部完存	
231	303 -02		N－77 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 7.5	ロクロナデ	1.5 ㎜以下の砂粒含	内面不良	外；淡黄(2.5Y8/3) 内；灰白(2.5Y8/2)	底部 1/3	
232	303 -05		G－90 包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.0	ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	底部完存	
233	302 -03	SZ 342	G－92 落ち込み	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径 6.8	ロクロナデ	4 ㎜以下の小石含	良	外；淡黄(2.5Y8/3) 内；灰白(2.5Y8/2)	底部完存	磨滅が激しく調整不明瞭
234	302 -04	SZ 342	G－91 落ち込み	ロクロ土師器 椀	－	－	底部径 6.2	ロクロナデ	5 ㎜以下の小石含	良	外； にぶい橙 (7.5Y7/4) 内；浅黄橙 (7.5YR8/4)	底部完存	磨滅が激しく調整不明瞭 ロクロ右回転

第９－２表　第３次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
235	303-06		N－76包含層	ロクロ土師器 椀	－	－	高台径7.4	ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	良	灰白(2.5Y8/2)	底部2/5	
236	302-02	SZ 342	G－92落ち込み	ロクロ土師器椀	－	－	高台径6.8	ロクロナデ	3㎜以下の砂粒含	内面やや不良	外；灰白(2.5Y8/2) 内；灰白(2.5Y7/1)	底部完存	ロクロ右回転
237	318-10		M－85包含層	ロクロ土師器 皿	8.0	1.6	底部径3.8	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒多含	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	1/4	底部内面若干磨耗
238	324-02		G－92礫層直上	黒色土器椀	－	－	高台径6.8	ナデ	3.5㎜以下の小石含	良	外；にぶい橙(7.5YR7/4) 内；にぶい橙(7.5YR7/3)	底部2/3	A類
239	306-06		南北畦南端	須恵器杯	10.7	4.7		ロクロナデ 底部外面ロクロケズリ	2.5㎜以下の砂粒含	良	灰白(N7)～灰(N6)	1/2	
240	319-04	SD 340	J－86 SD 40 灰色土	須恵器杯	9.0	3.0		ロクロナデ 底部外面未調整	1㎜の砂粒多含	良	外；灰白(N7/0) 内；灰白(7.5Y7/1)	1/6	
241	323-03	SD 340	K－84 SD 40 礫直上	須恵器椀	14.1	－		ロクロナデ	細砂粒含	良	外；灰白(N8/0) 内；灰(N4/0)	1/8	
242	310-03	SD 340	M－83 SD 40 堆積土	須恵器平瓶	－	－		ロクロナデ 底部外面ロクロケズリ	1.5㎜以下の砂粒含	不良	灰白(2.5Y8/1)	口縁部欠損	
243	310-01	SD 340	G－91 SD 40 礫直上	須恵器 甕	18.0	－		外；カキメ 内；ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	不良	灰白(5Y8/1)	口縁部1/9	
244	321-01	SD 340	N－82 SD 40 礫	須恵器 甕	21.0	－		外；カキメ 内；ロクロナデ	2㎜以下の砂粒含	良	灰白(N7)～灰(N6)	口縁部1/4	
245	307-05		H－90包含層	緑釉陶器椀	－	－	高台径9.0	ロクロナデ？	0.5㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	底部1/5	軟質
246	320-03	SZ 342	G－92落ち込み	緑釉陶器耳皿	－	－	高台径4.2	ロクロナデ？	精良	良	灰(N6/1) 釉；オリーブ灰(10Y4/2)	底部1/3	硬質
247	307-06		E－92包含層	緑釉陶器耳皿	－	－	高台径4.6	ロクロナデ？	1㎜以下の砂粒含	良好	灰(N6)	底部1/3	硬質
248	310-02	SD 340	L－86 SD 40 礫直上	緑釉陶器耳皿	－	3.0	高台径5.2	ロクロナデ？	精良	良好	灰白(5Y8/2) 釉；暗オリーブ(7.5Y4/3)	2/3	軟質
249	319-06	SD 340	J－86 SD 40 灰色土	灰釉陶器椀	－	－	高台径6.6	ロクロナデ 底部外面未調整	精良	良好	灰白(5Y7/1) 釉；オリーブ黄(5Y6/3)	底部1/4	灰釉漬け掛け
250	305-01		N－76包含層	山茶椀	－	－	高台径6.4	ロクロナデ	精良	良	灰白(7.5Y7/1)	底部完存	渥美産か？
251	304-09		N－80包含層	山茶椀	－	－	高台径6.4	ロクロナデ	5㎜以下の小石含	良好	灰白(N7)	底部完存	
252	304-06		N－76包含層	山茶椀	－	－	高台径7.1	ロクロナデ	0.5㎜以下の砂粒若干含	良好	明青灰(5B7)	底部完存	高台に籾殻痕
253	307-01		N－77包含層	山茶椀	－	－	高台径6.2	ロクロナデ	3㎜以下の砂粒含	良好	灰白(5Y8/1)	底部完存	高台に籾殻痕 内外面に自然釉 底部外面に墨書
254	305-04		G－92包含層	山茶椀	－	－	高台径7.0	ロクロナデ	精良	良	灰白(5Y7/1)	底部1/2	渥美産 転用硯
255	305-05		－	山茶椀	－	－	高台径5.8	ロクロナデ	精良	良	灰白(2.5YR8/1)	底部1/3	
256	303-08		G－90包含層	山茶椀	－	－	高台径10.0	ロクロナデ	1㎜の砂粒含	良	外；灰白(2.5Y8/2) 内；灰白(2.5Y8/1)	底部完存	転用硯
257	309-01	SZ 342	F－92落ち込み	山茶椀	－	－	高台径8.0	ロクロナデ	3㎜の以下の砂粒含	良好	明青灰(5B7/1)～赤灰(5R6/1)	1/2	転用硯
258	304-05		M－76包含層	山茶椀	－	－	高台径6.9	ロクロナデ	1㎜の以下の砂粒含	良好	灰白(2.5Y7/1)	底部完存	高台に砂底 渥美産か？
259	304-10		N－76包含層	山茶椀	－	－	高台径6.6	ロクロナデ	1㎜の以下の砂粒含	良好	灰白(N7)	底部完存	高台に砂底 渥美産か？
260	304-03		K－83包含層	山茶椀	－	－	高台径7.2	ロクロナデ	0.5㎜の以下の砂粒含	良好	灰白(7.5Y7/1)	底部1/4	高台に籾殻痕 内面に自然釉 ロクロ右回転
261	305-07		E－93包含層	山茶椀	－	－	高台径7.0	ロクロナデ	精良	良好	灰白(5Y8/1)	底部1/4	高台に籾殻痕
262	304-02		D－93包含層	山茶椀	－	－	高台径6.5	ロクロナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	外；灰白(2.5Y8/1) 内；灰白(N8)	底部完存	高台に砂底 渥美産か？

第９－３表　第３次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
263	324 -03		M－86 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	2.5 mm以下の砂粒含	良	外；灰白(2.5Y8/1) 内；黒褐(10YR3/1)	底部 1/6	被熱のためか内面黒変、外面一部赤変
264	304 -12		N－76 包含層	山茶椀	－	－	高台径 6.4	ロクロナデ	1 mm以下の砂粒若干含	良好	灰白(N8)	底部 完存	高台に籾殻痕 内面に自然釉
265	319 -05		O－82 包含層	山茶椀	14.0	5.3	高台径 5.8	ロクロナデ	0.5 mm以下の砂粒含	良	灰白(7.5Y7/1)	1/6	内面に薄く自然釉
266	305 -06		F－90 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	精良	良	灰白(5Y8/1)	底部 1/3	
267	305 -02		M－82 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/1)	底部 完存	転用硯
268	304 -08		G－85 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.6	ロクロナデ	3.5 mm以下の小石含	良好	灰白(N7)	底部 1/3	ロクロ右回転
269	304 -04		F－93 包含層	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	2.5 mm以下の砂粒含	良好	明青灰(5B7/1)	底部 1/2	高台に籾殻痕
270	304 -11		K－83 包含層	山茶椀	－	－	高台径 5.0	ロクロナデ	3 mm以下の小石含	良好	明青灰(5B7/1)	底部 2/3	高台の磨滅が非常に激しい。特殊用途のためか
271	307 -03		J－84 包含層	山茶椀	14.2	5.8	高台径 7.0	ロクロナデ	4.5 mm以下の小石含	良好	外；灰白(N8) 内；灰白(2.5Y8/1)	底部 1/7	高台に籾殻痕
272	309 -03		F－92 検出面	山茶椀	－	－	高台径 7.2	ロクロナデ	2 mm以下の砂粒含	良好	灰白(N8)	底部 完存	高台に籾殻痕 転用硯
273	304 -07		K－83 包含層	山茶椀	－	－	高台径 5.8	ロクロナデ	0.5 mm以下の砂粒含	やや不良	灰白(N8)	底部 2/3	高台に砂底 ロクロ左回転
274	309 -02	SZ 342	G－93 落ち込み	山茶椀 小椀	－	－	高台径 5.4	ロクロナデ	1.5 mm以下の砂粒含	良好	灰白(5Y8/1)	底部 完存	
275	307 -07		M－80 包含層	山茶椀 小椀	－	－	高台径 4.5	ロクロナデ	1 mm以下の砂粒含	良好	灰白(7.5Y8/1)	底部 完存	高台に籾殻痕
276	304 -01		M－81 包含層	山茶椀 小椀	－	－	高台径 5.4	ロクロナデ	1.5 mm以下の砂粒含	良好	灰白(N8)	底部 2/3	高台に籾殻痕 知多産
277	307 -04	SD 323	J－83 SD 23	山茶椀 小皿	8.6	2.0	底部径 3.8	ロクロナデ	1 mm以下の砂粒含	良	灰白(N8)～(N7)	2/3	煤付着
278	318 -04		O－84 包含層	山茶椀 小皿	8.8	1.6	底部径 4.7	ロクロナデ	1.5 mmの砂粒含	良	灰(5Y6/1)	3/4	
279	307 -02		O－83 包含層	白磁 椀	－	－	高台径 6.4	底部ロクロケズリ 他はロクロナデ	精良	良好	灰白(7.5Y8/1) 釉；明緑灰 (7.5GY8/1)	底部 完存	
280	320 -02		－ 包含層	青磁 皿	13.0	－		ロクロナデ	精良	良好	灰白(5Y7/1) 釉；オリーブ灰 (10Y5/2)	1/4	内面に陰刻文
281	307 -08		F－88 包含層	施釉陶器 皿	13.5	3.1 －	高台径 7.6	底部外面ロクロケズリ 他はロクロナデ	精良	良好	灰白(2.5Y7/1) 釉；オリーブ黄 (7.5Y6/3)	1/4	削り出し高台
282	318 -06		G－98 包含層	近世陶器 皿	11.2	2.2		ロクロナデ	精良	良好	灰黄(2.5Y7/2) 釉；灰赤(2.5YR5/2)	1/3	
283	307 -09		O－83 包含層	近世陶器 花瓶	－	－	底部径 4.0	ロクロナデ	細砂粒含	良好	褐(7.5YR4/4) 釉；黒(N1.5)	底部 完存	底部外面に径4 mmの円孔あり (焼成前)
284	317 -10		F－93 包含層	人形 武人神姿 座像	最大幅 3.4 最大厚 2.1			型作り	精良 (土師質)	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)	頭部 欠損	前後の型を合わせる。中央に径1 mmの空洞あり
285	324 -08		E－89 包含層	紡錘車	3.4	1.0	重量 9.8g	側；打ち欠き 他はナデ	細砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	完形	土師器椀底部を転用
286	317 -09		G－86 包含層	加工円盤	5.8	1.4	重量 84.2g	側；打ち欠き 他はロクロナデ	2 mm以下の砂粒含	良	外；灰赤(2.5YR5/2) 内；灰褐(5YR4/2)	完形	陶器甕胴部を転用
287	308 -05		H－85 包含層	加工円盤	6.0	1.2	重量 55.1g	側；打ち欠き 他はロクロナデ	2.5 mm以下の砂粒含	良好	明赤褐(2.5YR5/6)	完形	陶器甕胴部を転用
288	308 -03		N－80 包含層	加工円盤	4.7	1.6	残重量 33.2g	側；打ち欠き 他はロクロナデ	精良	良好	灰白(N8) 釉；明青灰(5B7/1)	3/4	近世磁器椀底部を転用
289	317 -07		F－81 包含層	加工円盤	4.8	0.8	重量 25.9g	側；打ち欠き 他はロクロケズリ	精良	良好	灰白(2.5Y8/2) 釉；黒(10YR2/1)	完形	天目茶椀底部を転用
290	308 -04		N－76 包含層	加工円盤	3.0	1.1	重量 16.3g	側；打ち欠き 他はロクロナデ	1 mm以下の砂粒含	良	灰赤(10YR6/2)	完形	陶器甕胴部を転用。A面が平滑に磨耗。
291	－		J－85 包含層	加工円盤	5.0	1.1	重量 32.5g	ナデ	1 mm以下の砂粒若干含	良好	灰白(10YR8/2)	完形	土師器椀底部を転用
292	－		H－87 包含層	加工円盤	3.1	0.9	重量 7.6g	側；打ち欠き 他はナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	土師器椀底部を転用
293	－		N－78 包含層	加工円盤	4.0	0.7	重量 13.5g	ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	完形	土師器椀底部を転用

第９－４表　第３次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
294	－		E－91 包含層	加工円盤	4.2	1.1	重量 19.9g	A面；ナデ B面；未調整	精良	良好	A面；灰白 (10YR8/2) B面；淡橙(5YR8/4)	完形	土師器椀底部を転用
295	－		M－77 包含層	加工円盤	4.2	0.9	重量 15.1g	ナデ	精良	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/2)	完形	土師器椀底部を転用。B面平滑に磨耗。
296	－		F－87 包含層	加工円盤	5.0	1.0	残重量 9.4g	ナデ	精良	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/2)	1/2	土師器椀底部を転用。
297	－		G－87 包含層	加工円盤	3.1	0.6	重量 6.7g	側；打ち欠き 他はナデ	1㎜の砂粒若干含	良好	淡橙(5YR8/3)	完形	磨滅が激しい。土師器（器種不明）を転用
298	－		E－92 包含層	加工円盤	4.0	0.6	重量 11.6g	側；打ち欠き 他はナデ	精良	良好	灰白(10YR8/2)	完形	土師器甕胴部を転用
299	－		E－93 包含層	加工円盤	5.4	1.3	残重量 23.5g	ナデ	1㎜の砂粒若干含	良好	にぶい黄褐(10YR7/3)	1/2	土師器椀底部を転用。紡錘車の可能性あり。
300	－		G－89 包含層	加工円盤	3.5	1.1	重量 13.5g	側；ケズリ 他はナデ	精良	不良	灰白(10Y8/1)	完形	土師器椀底部を転用。側面を不整7角形に面取
301	－		K－84 包含層	加工円盤	3.2	0.8	重量 9.2g	ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	完形	土師器椀底部を転用。
302	－		F－90 包含層	加工円盤	5.0	1.0	重量 21.9g	ナデ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3)	完形	土師器椀底部を転用。
303	－		M－81 包含層	加工円盤	5.0	1.6	残重量 30.6g	ロクロナデ	精良	良好	灰白(10Y8/1) 釉；灰白(7.5Y7/1)	4/5	近世磁器徳利底部を転用
304	－		E－91 包含層	加工円盤	4.1	1.2	残重量 16.1g	A面；ロクロナデ B面； ロクロケズリ	精良	良好	灰白(7.5Y8/1) 釉；暗赤褐(10R3/3)	1/2	近世陶器椀底部を転用
305	－		－ 表土	加工円盤	2.6	0.4	重量 4.0g	ロクロナデ	0.5㎜の白色微砂含	良好	灰白(2.5Y8/2) 釉；暗赤褐(10R3/3)	完形	近世陶器椀底部を転用
306	－		G－86 包含層	加工円盤	3.7	1.0	重量 17.5g	A面；ロクロナデ B面； ロクロケズリ	1㎜の砂粒若干含	良好	灰白(2.5Y8/2) 釉；暗赤褐 (7.5R3/2)	ほぼ完形	天目茶椀底部を転用 ロクロ右回転
307	－		G－84 包含層	加工円盤	4.1	1.2	重量 21.7g	A面；ロクロナデ B面； ロクロケズリ	0.5㎜の砂粒若干含	良好	淡黄(2.5Y8/3) 釉；黒(5YR1.7/1)	完形	天目茶椀底部を転用
308	－		F－90 包含層	加工円盤	3.9	1.2	重量 21.3g	A面；ロクロナデ B面； ロクロケズリ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3) 釉；黒(5YR1.7/1)	ほぼ完形	天目茶椀底部を転用
309	－		E－91 包含層	加工円盤	3.1	1.3	重量 14.8g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	2㎜の砂粒含	良好	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	完形	陶器甕胴部を転用
310	－		F－90 包含層	加工円盤	4.3	1.0	重量 19.2g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	0.5㎜の白色微砂粒含	良好	赤黒(10R2/1)	完形	陶器甕胴部を転用
311	－		F－82 包含層	4.1 ～ 3.1	1.2	重量 20.5g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	0.5㎜の白色微砂粒含	良好	極暗赤褐(7.5R2/3)	完形	陶器甕胴部を転用 楕円形
312	－		L－83 包含層	3.4	1.2	重量 16.0g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	2㎜の白色砂粒含	良好	赤黒(7.5R1.7/3)	完形	陶器甕胴部を転用
313	－		L－84 包含層	2.7	1.4	重量 12.7g	側面；ケズリ 他はロクロナデ	0.5㎜の白色微砂粒含	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	陶器甕胴部を転用
314	－		G－83 包含層	2.9	1.2	重量 13.8g	側面；ケズリ 他はロクロナデ	2㎜の白色砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/3) 釉；暗赤褐 (7.5R3/3)	完形	陶器甕胴部を転用
315	－		G－89 包含層	加工円盤	3.7	1.1	重量 18.5g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	1㎜の白色砂粒含	良好	淡橙(5YR8/4) 釉；赤褐(10R4/3)	完形	陶器甕胴部を転用
316	－		H－86 包含層	加工円盤	3.9	1.2	重量 24.6g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	1㎜の砂粒含	良好	赤(10R5/6)	完形	陶器甕胴部を転用
317	－		F－79 包含層	加工円盤	4.3	1.1	重量 21.9g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	0.5㎜の白色微砂粒含	良好	橙(2.5YR6/6)	完形	陶器甕胴部を転用
318	－		H－81 包含層	加工円盤	3.1	0.7	残重量 5.7g	側面；打ち欠き 他はナデ	精良	良好	橙(2.5YR6/6)	4/5	土師器椀底部を転用
319	－		M－77 包含層	加工円盤	5.0	1.0	残重量 27.4g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	1㎜の砂粒含	良好	赤橙(10R6/6)	4/5	陶器甕胴部を転用
320	－		M－77 包含層	加工円盤	4.1	1.1	重量 21.0g	側面；ケズリ 他はロクロナデ	3㎜の小石含	良好	赤橙(10R6/8)	完形	陶器甕胴部を転用
321	－		K－80 包含層	加工円盤	2.7	1.0	重量 9.6g	側面；打ち欠き 他はロクロナデ	0.5㎜の白色微砂粒含	良好	灰赤(10R4/2)	完形	陶器甕胴部を転用
322	317 -01	SD 340	J－85 SD 40 礫直上	土錘	1.8	7.0	残重量 21.0g	ナデ	2㎜の砂粒多含	良好	浅黄橙(10YR8/3) ～灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	円孔径 3㎜
323	308 -07		F－92 包含層	土錘	1.6	6.0	重量 11.7g	ナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2) ～黄灰(2.5Y5/1)	完形	円孔径 5㎜

第9－5表　第3次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
324	317-06		F－85包含層	土錘	1.6	－	残重量12.7g	ナデ	1㎜の砂粒多含	良	にぶい黄(10YR6/4)	3/4	円孔径 5㎜
325	316-12		F－79包含層	土錘	1.6	4.2	残重量5.9g	ナデ	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	3/4	円孔径 6㎜
326	316-09		I－81包含層	土錘	1.7	3.5	重量8.5g	ナデ	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/6)	完形	円孔径 5㎜
327	316-03		O－89包含層	土錘	1.3	－	残重量6.8g	ナデ	精良	やや不良	灰褐(10YR5/1)	ほぼ完形	円孔径 4㎜
328	308-06		L－83包含層	土錘	1.5	3.6	重量6.8g	ナデ	0.5㎜以下の砂粒含	良	灰白(2.5Y7/1)～黄灰(2.5Y5/1)	完形	円孔径 4㎜
329	317-02	SZ 342	F－93落ち込み	土錘	1.4	3.3	重量6.7g	ナデ	1㎜の砂粒多含	不良	褐灰(10YR4/1)～灰黄褐(10YR4/2)	完形	円孔径 4㎜
330	317-05		K－83包含層	土錘	1.3	－	残重量6.5g	ナデ	精良	良好	淡黄(1.5Y8/3)	3/4	円孔径 4㎜
331	317-03	SZ 342	F－93落ち込み	土錘	1.2	－	残重量2.8g	ナデ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/4)	1/4	円孔径 3㎜
332	316-10		I－81包含層	土錘	1.1	－	残重量4.4g	ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	1/3	円孔径 5㎜
333	316-01		H－81包含層	土錘	0.8	3.7	重量2.3g	ナデ	精良	良好	灰白(2.5Y8/2)	完形	円孔径 3㎜
334	316-07		G－85包含層	土錘	0.8	3.4	重量2.5g	ナデ	精良	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)～黄灰(2.5Y5/1)	完形	円孔径 3㎜
335	317-04		N－82包含層	土錘	1.1	－	残重量4.1g	ナデ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3)	3/4	円孔径 3㎜
336	316-02		M－81包含層	土錘	1.1	3.2	重量3.9g	ナデ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3)	完形	円孔径 3㎜
337	316-08		－排土	土錘	1.1	4.3	残重量5.0g	ナデ	精良	良好	灰白(10YR8/2)	完形	円孔径 3㎜
338	316-06		I－84包含層	土錘	1.2	4.7	残重量5.5g	ナデ	2㎜の白色砂粒含	良好	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	円孔径 4㎜
339	316-11		N－81包含層	土錘	1.2	－	残重量6.4g	ナデ	精良	良	明黄褐(10YR6/6)	4/5	円孔径 5㎜
340	316-04		M－76包含層	土錘	1.1	5.0	残重量4.4g	ナデ	精良	良好	灰白(2.5Y8/2)～灰白(7.5Y8/1)	ほぼ完形	円孔径 5㎜
341	316-05		N－76包含層	土錘	1.1	5.0	残重量5.1g	ナデ	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3)	4/5	円孔径 3㎜
342	312-01		E－85包含層	瓦軒丸瓦	－	－		――	精良	良	灰(N6)	瓦当部小片	巴文。外区素文
343	312-02		G－84包含層	瓦軒丸瓦	－	－		――	精良	良	灰白(N8)	瓦当部小片	巴文。外区素文
344	311-02		I－84包含層	瓦軒平瓦	－	－		凹面；布目・糸切凸面；ナデ	細砂粒含	良好	灰(N6)	瓦当部1/2	均整唐草文瓦当面焼き割れ瓦当全面自然釉
345	312-04		K－85包含層	瓦軒平瓦	－	－	瓦当厚4.9	凸面；ヘラケズリ	細砂粒含	やや不良	灰(N6)	瓦当部小片	唐草文外区素文
346	312-03		K－34包含層	瓦軒平瓦	－	－	瓦当厚4.0	凹面；布目凸面；ナデ	細砂粒含	やや不良	灰(N6)	瓦当部1/3	唐草文外区素文
347	311-01		N－82包含層	瓦軒平瓦	－	－	瓦当厚4.6	凹面；布目凸面；ナデ	細砂粒含	やや不良	灰白(N7)	瓦当部1/2	唐草文外区素文
348	315-01		K－83包含層	瓦丸瓦	－	－	厚2.2	凹面；布目凸面；縄タタキ後ナデ	砂粒含	やや不良	灰(N6)	1/4	玉縁式玉縁部段のみ別粘土成形
349	314-01		N－82包含層	瓦丸瓦	－	－	厚2.0	凹面；自然釉凸面；ケズリ後ナデ	精良	良好	灰(N6)	1/4	玉縁式玉縁部段のみ別粘土成形
350	313-01		I－84包含層	瓦平瓦	－	－	厚2.8	凹面；布目・糸切凸面；自然釉	砂粒含	良	灰(N6)	1/6	1枚作り
351	324-09		N－81包含層	銭貨―	2.2	－	重量0.9g	――	銅	―	――	ほぼ完形	腐食が激しい
352	308-02		G－85包含層	有孔円盤	3.3	0.3	残重量5.6g	――	滑石	―	淡黄(5Y7/3)～黄褐(10YR5/6)	ほぼ完形	
353	324-07		G－85包含層	砥石	－	－		――	粘板岩	―	にぶい黄橙(10YR7/3)	小片	
354	308-01		O－86包含層	硯	－	0.8	幅3.0	――	精良	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/4)～にぶい橙(7.5YR7/4)	4/5	陶製
355	324-06		F－91包含層	硯	－	－	幅6.0	――	粘板岩	良	灰白(10Y7/1)	1/3	

第9－6表　第3次調査出土遺物観察表

Ⅵ. 第 4 次 調 査

第４次調査区は、遺跡の最南端に位置し、櫛田川が形成した自然堤防と、その南側の氾濫源からなる。北側は小河川を介して第３次調査区と接する。面積は、3,600㎡で、400㎡の下層確認調査を行っている。基本層序は、第１層:耕作土、第２層:オリーブ褐色土の包含層で、その直下の褐色土上面で遺構検出を行った。検出面までの深さは、最も浅い自然堤防頂部で10cm、他は40～50cmである。また、この褐色土は、縄文時代の包含層に相当し、若干の後期の遺物を含んでいる。この層の厚さは20～30cmで、その下は黒ボク土となっている。

1. 遺 構

他の調査区と異なり、室町時代から近世の遺構が中心である。多数の土坑墓や集石墓を検出したが、土坑を伴わない集石墓については、時期決定の資料に乏しく、全て近世に降る可能性も残る。また、多数のピット状遺構を検出したが、その多くは浅いもので、建物としてまとまるものは１棟のみである。

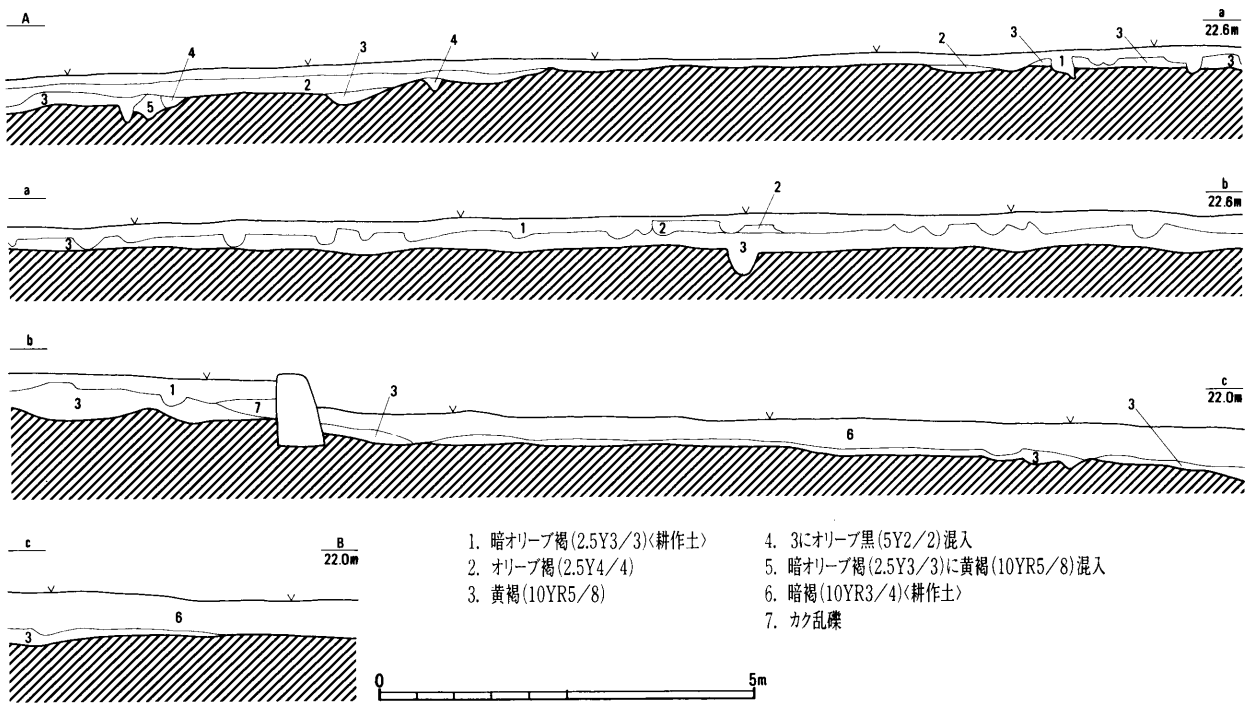
(1) 平安時代末期の遺構

A. 墓

ＳＸ４０２６（第22図） 調査区中央部で検出した50×30cmの不整方形を呈する。深さは12cm程度で底部は平、埋土は褐色土である。土壙内南寄りで土師器皿を４枚、底部に接した状態で検出した。皿は（360）の上に（362）を重ね、さらにその上に（361）をあたかも蓋をするかの様にうつ伏せに置いている。墓と考えられるが、確証はない。

B. 土坑

ＳＫ４１２７・４１２８ 調査区西部で検出した。SK4127は一辺2.5～3mの不整方形を、SK4128は南部を近世の小溝SD4116に切られるが、



第21図 土層断面図（１：100）

第22図　遺構平面図（1：200）

直径2.3～1mの不整長円形呈する。深さは、両者とも5cm未満の浅いものである。両者は、一つの大きな遺構の痕跡かも知れない。

C．溝

ＳＤ４０９５　調査区中央西寄りで検出した幅60cm、深さ10cm未満の小溝である。南北方向に5mほど検出したにとどまる。近世の小溝群と方向が一致するが、室町時代の土坑SK4096に切られることからこの時代とした。完形の土師器皿（390）が出土しているため、単なる小溝ではないのかも知れない。

ＳＤ４１０１　調査区北部を南北に延びる溝で、幅1.8m、深さ40～70cmを測り、北端部は自然流水路SD4090に流れ込む。SD4130と溝芯芯で4.5m（約15間）の間隔で並行する。古墳時代や室町時代をはじめ多くの時期の遺物が混在し、時期決定に疑問を残す。「宇」か「中」と墨書された土師器椀（379）が出土している。混入遺物と考えられ、（380）とともに平安時代初期まで遡るものと考えられる。

ＳＤ４１３０　調査区北西隅で検出した。調査区西端から6mほどで北へ鋭角に屈曲し、SD4101と並走する。北端部は二股に分かれSD4190に流れ込む。幅70cm、深さ30cmで、SD4101よりやや小規模である。屈曲部を中心に、20cm程度の石が多数埋土に含まれる。

ＳＤ４１３１　調査区北西隅で検出した幅40cm、深さ10cm未満の小溝である。SD4130と直行するが、それより後出である。南北方向に4mの長さであるが、土師器やロクロ土師器の皿等が比較的多数出土した。（375）は完形であり、SD4095と同様な性格の遺構かも知れない。

ＳＤ４１９０　調査区北端部の自然流水路と考えられる落ち込みである。南岸を検出したことになり、北岸は、第3次調査のSZ342がその一部と考える。その場合、川幅は10m程度のものである。現在も両調査区間には、小河川が流れており、完掘はできなかった。土師器やロクロ土師器の皿が多量に出土し、それらは完形あるいは完形ちかくに復元できるものが多い。この流水路で何らかの祭祀が行われていたか、祭祀の後投棄されたものと考えられる。

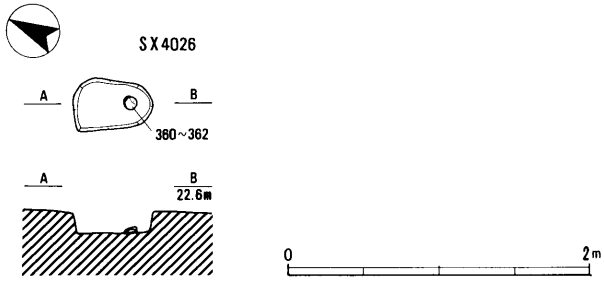
D．特殊遺構

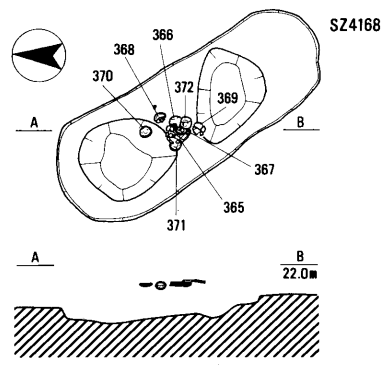
ＳＺ４１６８（第22図）　調査区北部で検出した2×0.7mの溝状の土坑である。深さは10cm程度の浅いもので、底部に2ヶ所、直径60～40cmの不整円形の落ち込みがある。検出面と同じ高さで、土師器の皿を8枚検出した。大型皿が1枚、他は小型で、全て正立状態である。その配置には規則性がなく、埋納されたとするよりは、投棄に近い状態である。また、土坑底部よりかなり浮いた状態であるため、これらの土器群と土坑が別遺構の可能性もある。

(2) 室町時代の遺構

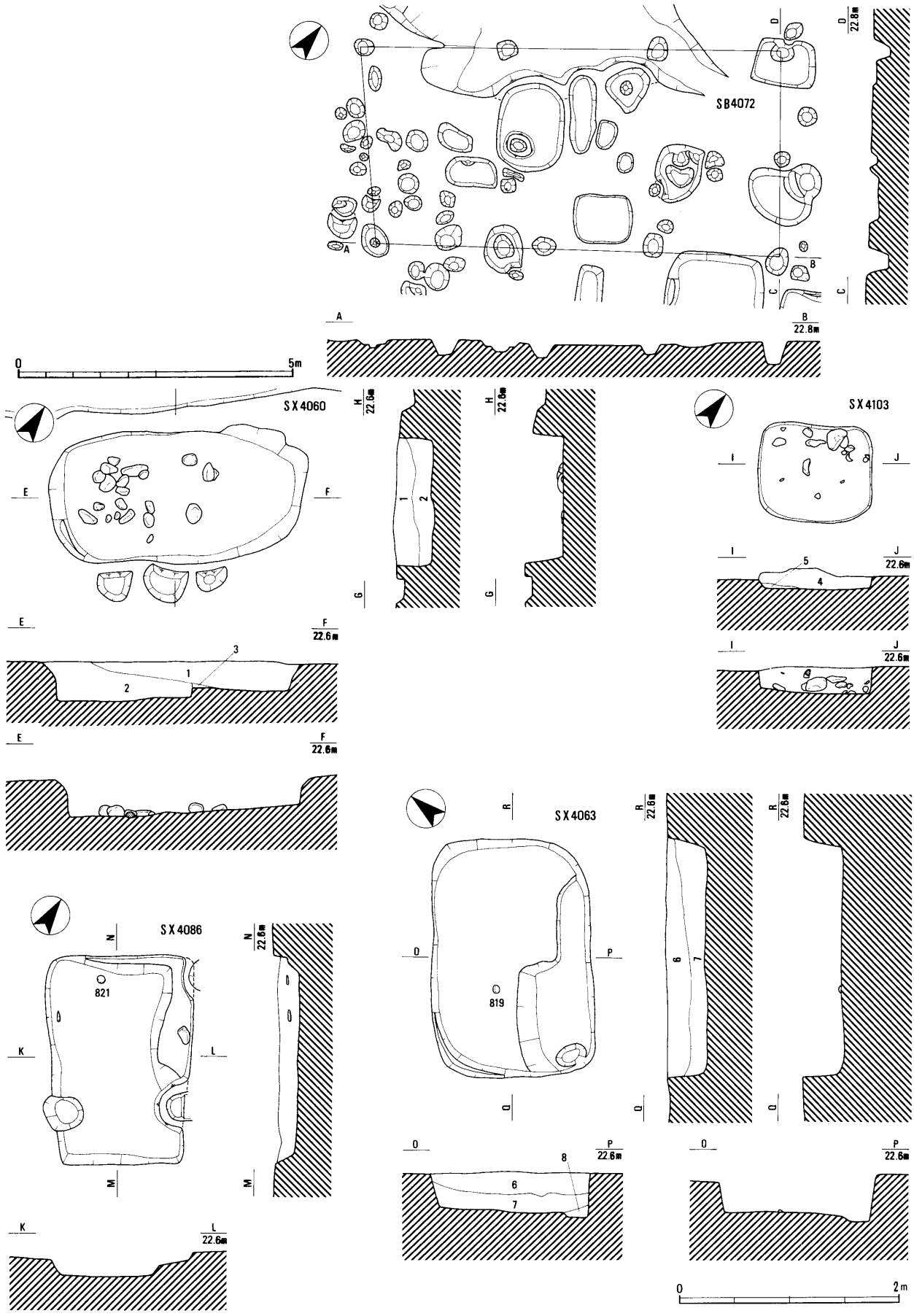
A．掘立柱建物

ＳＢ４０７２（第24図）　多数のピット状遺構の中で、唯一建物としてまとまったものである。3間×2間の東西棟で、棟方向はE39°Nである。桁行は、2.7+2.7+2.25mの7.65mであるが、南側は入り口があるためか1間多く、1.35+1.65+2.1+2.25mの7.35mで、北側より30cm短い。梁行も西側が1.8mの等間であるのに対し東側は1.95+





第23図　SX4026、SZ4168実測図（1：50）



第24図　SB4072、SX4060・4063・4086・4103実測図（SB4072＝1：100、他は1：50）

1.8mの不等間で、15cm長くなっている。この様に歪みが大きく、南東隅の柱穴が極端に浅いこと等、建物とするに疑問の多いものである。

B．墓

ＳＸ４００８　調査区北東部で検出した直径1.3mの円形を呈する土坑である。深さは検出面から5cm未満の浅いもので、埋土に炭を含む。埋納された遺物はないが、一応墓としておく。

ＳＸ４０６０（第24図）　調査区中央部で検出した2.2×1.2mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは検出面から25cmであるが、南西部はやや深い。埋土の上半部には炭を含み、床面に接して10～20cmの小石を多数検出した。土師器鍋、青磁、硯片等が出土しているが、埋納と考えられる土器はない。

ＳＸ４０６３（第24図）　調査区中央部で検出した2×1.5mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さは、検出面から40cmを測る深いもので、埋土は2層に分かれる。上層：小石の混じる黒褐色土、下層：褐色土の混じる黄橙色土で、南東側は4cmほどさらに深くなり、この部分の埋土は褐色土である。中央部の底に接して土師器皿(819)が倒立状態で出土した。その他、腐食の激しい鉄片も出土している。

ＳＸ４０８６（第24図）　調査区中央部で検出した1.9×1.1～1.2mの長方形を呈する土坑である。深さは検出面から20cmで、底部は平坦である。埋土は、黄色土の混入した褐色土で、焼土や炭は認められないが、腐食の激しい鉄片が出土している。壁際の底部から10cmほど浮いた状態で、土師器皿(821)が正立状態で検出された。埋納されたものであろう。

ＳＸ４０８７　調査区中央部、SX4086の西側で検出した一辺1.8mのほぼ正方形を呈する土坑である。深さは15cmで底部は平坦である。埋土は黄色土の混じる暗褐色土で、炭や焼土は認められない。土師器鍋片等が出土しているが、埋納されたものはない。ＳＸ4086と並ぶように位置していることもあって、一応墓としておく。

ＳＸ４０８８　SX4087の南東側に近接し、壁を揃えて検出された。規模や形態はSX4087とほぼ同じであるが、一辺1.5～1.9mの方形を呈する。埋土は褐色土で、埋納遺物や炭等は認められない。

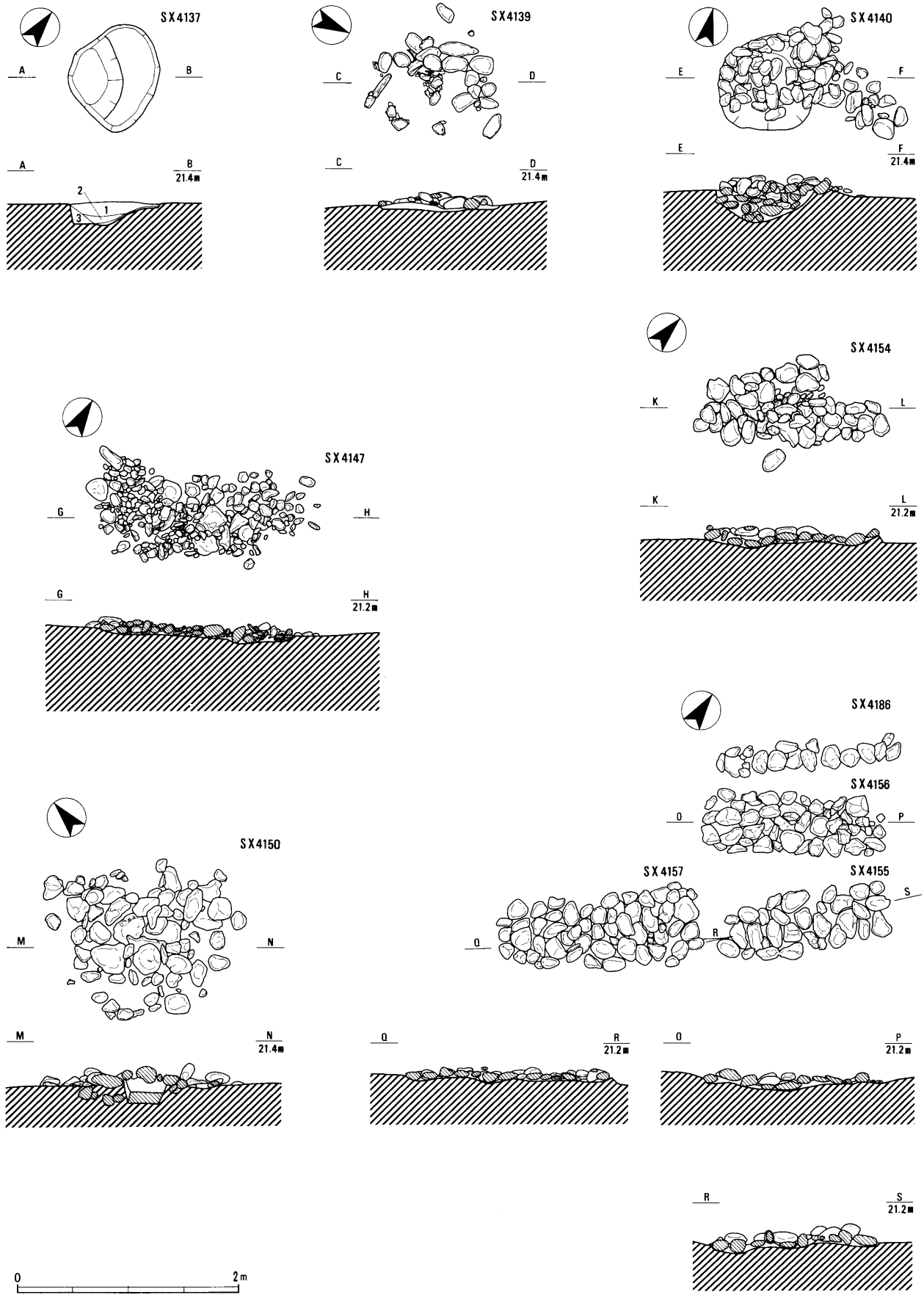
ＳＸ４１０３（第24図）　調査区中央部で検出した長辺1m、短辺90cmの正方形にちかい方形を呈する。深さは検出面から10cm程度であるが、炭や焼土を含む埋土は検出面よりかなり浮いた地点から検出されており、本来は20cm以上の深さがあったものと考えられる。埋土には炭・焼土の他に5～20cmの大小様々な石を含むが、規則性は認められず、また、土坑自体に焼けた痕跡はない。土師器皿、天目茶椀等が出土しているが、完形のものはなく、埋納とは考えられない。自然科学分析の結果リン酸の濃集が認められた。

ＳＸ４１３７（第25図）　調査区南西部で検出した直径80cmの不整円形を呈する土坑である。北側の壁は緩やかに傾斜するが、南側は垂直にちかい角度で、最深部の深さは20cmである。埋土は大きく2層に分かれ、両者とも焼土を含む。上層には、8～3cm程度の小石が多く含まれ、下層には土器や瓦片を含むが埋納されたものはない。

ＳＸ４１３９（第25図）　調査区南西部で検出した集石遺構である。直径1.2mの円形に10～20cmの石を雑然と配置しているが、東側は抜き取られたためか閑散とした状態である。配石の下は、若干窪む程度で土坑を伴わない。土師器鍋、皿片が出土したが、墓とする根拠に乏しく、自然科学分析からも、その様な結果は得られていない。

ＳＸ４１４０（第25図）　調査区南西部で検出した集石遺構である。直径80cmの円形に10～20cmの石を雑然と配置しているが、近世の遺構ＳＸ4141･SZ4196と一連の状態であり、室町時代の土師器鍋片が出土しているものの、近世に降る可能性も大きい。配石の下は、直径80cm、深さ25cmの摺鉢状の土坑となっており、土坑内も同様な石で埋めつくされている。焼土や、埋納された遺物は認められず、自然科学分析の結果からも墓とする根拠は得られなかった。

ＳＸ４１４７（第25図）　調査区南部中央で検出した集石遺構である。2×0.8mの長方形状に30～数cmの大小様々な石を雑然と配置している。集石の下は若干窪む程度で、土坑は伴わない。室町時



第25図　SX 4137・4139・4140・4147・4150・4154～4157・4186実測図（1：50）

代の土師器鍋片が多く出土しているが、時期決定及び墓とする根拠に乏しい。

ＳＸ４１５０（第25図）　調査区南部中央で検出した集石遺構である。直径1.4ｍの円形に10～30cmの様々な石を雑然と配置する。集石の下には土坑は伴わず、自然礫の多い地面に直接配置している。埋納された土器もなく、時期や墓とする根拠に乏しい。

ＳＸ４１５４（第25図）　調査区南西隅で検出した集石である。1.8×0.9ｍの長円形に20cm前後の石を雑然と配置する。集石の下は若干窪む程度で、土坑は伴わない。埋納された遺物もなく、自然科学分析の結果からも、時期決定及び墓とする根拠に乏しいが、付近の集石と並んで配置されることから同時期の墓とした。

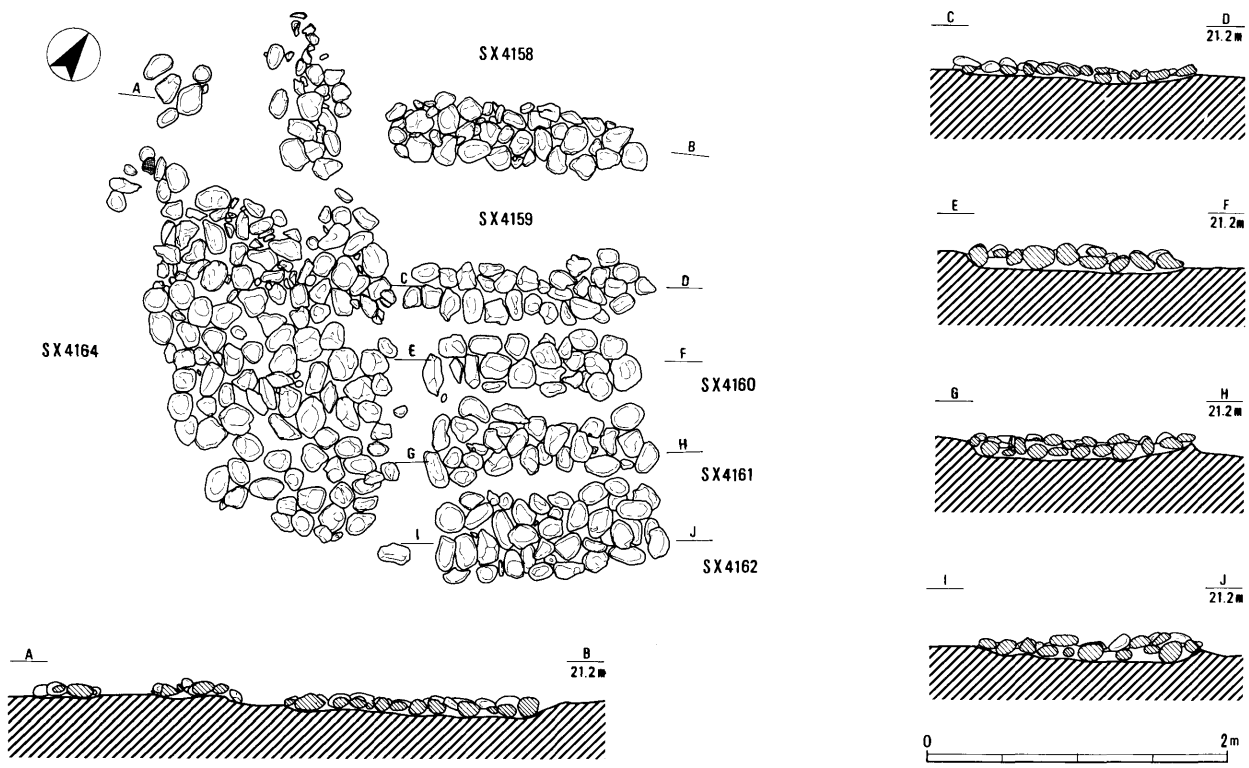
ＳＸ４１５５（第25図）　調査区南西隅で検出した集石である。1.6×0.6ｍの長方形状に20cm程度の石を雑然と配置する。石は地面に直接置かれていて、土坑は伴わない。SX4157と直列に並び、SX4156･4186とは若干方向が異なるものの並列に配置される。これらは同時期の墓と推測するが、根拠に乏しい。

ＳＸ４１５６（第25図）　調査区南西隅で検出した集石である。規模や状態はSX4155と同様で、SX4186とは並列に並んで配置される。時期決定や墓とする根拠に乏しい。

ＳＸ４１５７（第25図）　調査区南西隅で検出した集石である。規模や状態はSX4155と同様で、それとは直列に並んで配置される。室町時代の土師器鍋片が出土しているが、時期決定や墓とする根拠に乏しく、自然科学分析からも、その様な根拠は得られていない。

ＳＸ４１５８（第26図）　調査区南西隅で検出した集石であ。1.7×0.4ｍの長方形状に20cm程度の石を雑然と配置する。SX4159～4163とは同様な規模・形態で、並列に整然と並んだ状態である。さらに、やや離れるがSX4186とは、直列に列んだ位置にある。集石は土坑を伴わず、出土遺物もないことから、時期決定や墓とする根拠に乏しい。

ＳＸ４１５９～４１６２（第26図）　調査区南西隅で検出した4列に並ぶ集石である。4基とも1.5×0.3～0.5ｍの方形に10～20cmの石を雑然と配置する同様なもので、10cm程度の間隔で整然と並列に配置されている。近接するSX4163～4165･4158



第26図　SX4158～4162・4164　実測図（1：50）

や、やや離れたSX4155～4157·4186とも方向等を揃える。集石の下は、若干窪む程度で土坑は伴わない。集石間から室町時代の土師器鍋片が出土しているため、一応この時期とした。墓とする根拠に乏しく、自然科学分析からもその結果は得られていない。

ＳＸ４１６３　調査区南西端で検出した集石である。調査区外へ延びるため全体の規模や形態は不明であるが、石の大きさや土坑を伴わない等ＳＸ4159～4162と一連のものである可能性が大きい。

ＳＸ４１６４（第26図）　調査区南西隅で検出した集石である。2.2×1.6mの方形に20cm程度の石を雑然と配置する。近接する集石とは、整然と配置された状態にあり、同様に土坑は伴わない。室町時代の陶器・土師器片が出土している。また、複数の集石が重複している可能性もある。

ＳＸ４１６５　調査区南西端で検出した集石である。調査区外へ延びるため、全体の規模・形態は不明であるが、近接する集石と同様なものであろう。

ＳＸ４１６７（第２８図）　調査区南西部で検出した。近世の遺構SX4138に切られるが、直径80cmの円形を呈し、深さは30cmほどである。土坑壁は緩やかでレンズ状を呈し、埋土は黄灰色土であるが、底から5cm以外では橙色が混じる。埋納された土器や、焼土は無い。

ＳＸ４１６９　調査区北部で検出した土坑である。1.4～0.6mの不整楕円形を呈し、深さは30cm程度である。土師器鍋、椀等比較的まとまって出土しているが、埋納されたと考えられるものはない。しかし自然科学分析の結果、リン酸の濃集が認められたため一応墓としておく。

ＳＸ４１７１　調査区南部中央で検出した集石である。直径1.2mほどの円形に10～20cmの様々な石を配置するが、土坑は伴わない。集石間から土師器鍋・椀、天目茶椀等多種・多様な遺物が出土しているが、埋納されたものはない。

ＳＸ４１８６（第25図）　調査区南西隅で検出した集石である。SX4156とは並列に並んで配置されるが、集石の幅は他のものより狭く20cm程度で、石列状の部分もある。時期決定や墓とする根拠に乏しい。

C．土坑

ＳＫ４０１７　調査区中央東側で検出した３×２mの方形を呈する土坑である。深さは検出面から40cmで、埋土は淡褐色土である。土坑内には10～２０cmの石を多量に含み、墓の可能性も残るが、埋納された遺物もなく、他のものより大規模であるため、土坑とした。

ＳＫ４０１８　SK4017の北東部に接するようなかたちで検出された一辺80cmの方形を呈する土坑である。深さは50cm以上を測る深いもので、南側はＳＫ4019を切る。埋土は灰褐色土で、土師器の小片が出土したのみである。

ＳＫ４０１９　SK4018の南側で検出した。0.8×2mの溝状を呈し深さ20cmであるが、北端部はSK4018に切られるため長辺については推定である。西側はSK4017に接するような状態であるため、2者は同時に存在した可能性がある。埋土は、灰褐色土や黄色土の混じる褐色土で、土師器や陶器の小片が出土したのみである。

ＳＫ４０７６　調査区北部で検出した３×８mの長方形を呈する大型の土坑である。深さは、最新部の北東端で１m、比較的浅い南西端でも50cmを測る深いものである。灰釉陶器、施釉陶器、青磁・香炉、土師器、鉄塊等多種多様な遺物が出土しているが、いずれも小片である。

ＳＫ４０８４　調査区中央部で検出した方形の土坑である。南～東側が後出の遺構により切られるため、全体の規模や、形態は不明であるが、一辺４mの正方形を呈するものと推定される。深さ４cmしかなく、遺構とするに疑問もある。土師器や火舎の小片が出土している。

ＳＫ４０９０　調査区中央部で検出した0.8×1.1mの方形の土坑である。深さ2～3cmしかなく、遺構とするに疑問もある。

ＳＫ４０９２　調査区中央西側で検出した直径1.6～1.2mの楕円形を呈する土坑である。深さは15cmでSZ4109を切る。埋土は褐色土で、土師器小片が出土したのみである。

ＳＫ４０９３　SK4092の南西部に近接して検出した直径0.5～1mの隅丸長方形を呈する土坑である。深さ10cm未満の浅いもので、遺構とするに

疑問もある。埋土は褐色土で、土師器小片が出土したのみである。

SK4094　SK4092の東側に近接して検出した0.4×1.4mの溝状を呈する土坑である。SZ4109を切り、深さは15cm、埋土は暗褐色土で、土師器小片が出土したのみである。

SK4096　調査区中央西側で検出した一辺1mの方形を呈する土坑である。深さ10cmで、埋土は淡灰褐色である。

SK4099　調査区中央西側で検出した直径0.9～1mの不整方形を呈する土坑である。深さ30cmで、4基のピットと重複するが、底部は平坦と考えられる。

SK4143　調査区南部で検出した直径1.6～1.9mの楕円形を呈する。深さは、70cmを測る深いもので、埋土は5mm以下の砂利である。土師器鍋片の出土によりこの時代としたが、近世以降に下る可能性もある。

SK4193　調査区中央で検出した0.6×2mの溝状の土坑である。深さ20cmで、土師器や天目茶椀の小片が出土するのみである。

D．溝

SD4014・4037・4041・4045・4046　これらの溝は連続していないが、一連のものと仮定すると、蛇行して流れる自然流水路の痕跡と考えられる。北端は、幅50cm、深さ20cmであるが、しだいに幅を広げ、調査区中央部では幅1.5m、深さ30cmを測り、自然堤防南端のSD4037では、幅7mにまで拡大し、沖積地に流れ込んでいる。埋土は茶褐色土で、砂は含まないため、流れは緩やかであったものと考えられる。

SD4030　調査区南東部で検出した幅50cm、深さ5cm未満の痕跡程度を検出した溝である。南に50cm離れて石列SZ4191が並行し、両者は関連するものかも知れない。

SD4032・4033・4049　調査区南東部で検出した幅40cm、深さ10cm未満の溝であるが、SD4032は撹乱溝SD4031に大半を切られるため規模は推定である。室町時代の土師器片が出土してるが、SD4031との関係や方向等から近世以降に降る可能性もある。

SD4034・4057　調査区北東部で検出した幅30～50cm、深さ5cm未満の溝である。SD4034は調査区外から9mほど西進し、約100°の角度で北に屈曲しSD4057となる。SZ4197を意識するかのように並走することから、両者は同時期の区画を示すものであったと考えられる。

SD4056　調査区北部で検出した幅50cm、深さ20cmの溝である。この時期の他のものとは方向が異なり、撹乱溝SD4066と比較的方向が揃うため、近世以降に降る可能性もある。

SD4085　調査区中央部で検出した幅20cm、深さ10cm未満の小溝である。SD4045の延長上に位置するため、これも自然流水路の痕跡かもしれない。

SD4100　SB4072の西側で検出した幅50cm、深さ10cm未満の溝である。SB4072の西側梁行と約80cmの間隔で並走し、南側桁行より1.5m南で止まる。北側も不鮮明ではあるものの、南側と同様と考えられる。灯明皿として利用された土師器皿(840)が、ほぼ完形で出土している。

SD4102　調査区北西部で検出した幅0.6～1m、深さ20～40cmの緩やかなS字状に延びる溝である。自然流水路のようでもあるが確証はない。南端はSZ4109を横断し調査区中央部へ延びる様子を示して消滅する。SZ4109との前後関係は不明である。埋土には10～30cmの石や土師器・陶器片を含み、特に土師器鍋片が多量に出土している。

SD4129　調査区北西端で検出した幅70cm、深さ20cm前後の溝で、調査区外から東へ5mほど延びて止まる。SD4102と並行するものと考えることも可能で、また、SD4187とともに区画施設とすることも考えられる。火舎・土師器茶釜等、比較的多くの遺物が出土している。

SD4187　調査区西部を南北に直線状に延びる溝で、区画施設と考えられる。その場合SD4129が、北を限る可能性がある。幅80cm、深さ60cmを測るが、南へいくほど幅や深さを減じ消滅する。方向はN40°Wで、SB4072ともほぼ揃う。

E．特殊・不明遺構

SZ4108　調査区北西部で検出した直径2mの円形を呈する集石であるが、SZ4197の石列と

重複するため、全体の形態は不明確である。直径10～30cmの石を雑然と配置するが、集石の範囲は土坑SZ4109内に納まり、両者は一体の可能性もある。集石間からは、土師器や陶器が多量に出土しており、接合の結果ほぼ完形に復元できた茶釜(783)もある。

SZ4109　調査区北西部で検出した3×11mの不整長方形を呈し、深さ50cmを測る大型の土坑である。南西隅には、20cmほどの石の集中がみられるが、集石SZ4108や石列SZ4197、溝SD4102の一部とすることもでき、また、SZ4108・4109・4197の三者は一体とする可能性もある。

SZ4151　調査区北西端で検出した整地面とそれを限る石列である。石列は、30cmの石をE16°Nの方向に5mほど一列に列べたもので、さらに南へ屈曲し3mほど続く。整地面は、バラスを敷きつめたもので、南へは5mほどを確認したが、本来の南限は不明である。SZ4188と揃うため、一連のものの可能性もありる。

SZ4172　調査区北部で検出した直径20cm、深さ15cmを測る柱穴状の遺構である。埋土から銭貨が4枚出土している。判読不明な1枚を除き、「永楽通宝」、「皇宋通宝」、「元符通宝」が各1枚づつである。埋納されたものと考えられるが、遺構の性格は不明である。

SZ4188　調査区西部で検出した整地面とそれを限る石列である。石列は、30cmの石を東に面を揃えて6mほど列べたもので、その方向はN35°Wである。SZ4151とは東側を揃える位置となる。整地面はSZ4151と同様、バラスを敷きつめたもので、南北26mの広がりをもつ。整地面に先行する近世の耕作溝を検出していることから、一応このこの時代とした。

SZ4191　調査区南東部を直線状に延びる石列である。石列は、10cm程度の小石の集中が、幅50cmでN34°Eの方向に調査区外から14mほど延びるものである。何らかの境界を示すものと考えられるが、詳細は不明である。

SZ4197　調査区北部で検出した幅50cm、深さ20～40cmの溝である。緩やかな弧を描くように東西に延び、東端は直角に南へ屈曲する。西端は、他の遺構との重複のため不明確であるが、やはり直角に南へ屈曲するものと考えられる。この場合溝の内側で測って東西25mの範囲を区画することになる。溝の埋土には、10～20cmの石が多量に含まれることから何らかの施設の基礎であるかもしれない。

(3) 江戸時代の遺構

A. 墓

SX4132（第27図）　調査区北端部で検出した。検出面から30cmほどの深さの土坑にちょうどおさまる納まるように陶器甕(882)の底部を据え、その上を同一個体の甕片や10～20cmの石で覆っている。この甕は、接合の結果ほぼ完形に復元でき、このことから本来完全な形のものが据えられていた可能性もある。しかし、器高88cmを測る大型のもので、しかも破片がよく残ること、集石と甕の破片がかみ合うように堆積していること等から、削平により破壊されたものとは考えにくい。遺体を入れた甕を据えた後、甕の上半部を打ち欠き、石とともに蓋をするように配置したものと推測したい。甕内部に堆積した土の自然科学分析の結果、リン酸の濃集が認められた。

SX4133（第27図）　調査区北部で検出した集石である。1.9×0.8mの長方形状に10～20cmの石を雑然と配置する。土坑は伴わず、自然科学分析の結果でも墓とする根拠は得られていない。

SX4134（第27図）　調査区南西部で検出した。20cm程度の石を1×0.7mの長方形状に並べ、その内側は深さ20cm程度の浅い土坑となっている。土坑壁は緩やかでレンズ状を呈し、埋土にも同様な石が多数含まれる。近世土師器皿が出土しているが、埋納されたものはない。自然科学分析の結果、土坑埋土にはリン酸の濃集が認められた。

SX4135（第28図）　調査区南西部で、SX4134と並んで検出された。一辺80cmの方形の土坑で、底から10cm浮いた位置で20cm程度の石を壁に沿って2段に積み上げている。土坑内は同様な石や瓦で埋め尽くされ、瓦は石と同様に扱われているようである。しかし、石組最下段以下にはこれらは含まれず、オリーブ灰色の砂質土である。土坑中央部から土師器把手付茶釜片(879)が出土した。接

合の結果ほぼ完形となり、蔵骨器等として埋納されたものかも知れない。自然科学分析の結果、茶釜内部と土坑上部の埋土でリン酸の濃集が認められたが、埋土下層では目立った変化は認められなかった。これらから、石組最下段が遺構床面の可能性もある。

ＳＸ４１３６（第28図）　調査区南西部で検出した。直径1.1ｍ、深さ20㎝の円形の土坑で、埋土は黄褐色混じりの暗褐色土である。しかし土坑内から上部にかけて5～20㎝の大小様々な石で埋め尽くされ、その結果、土坑上部は円形の集石となる。集石間から瓦片等が出土しているが、埋納されたものはない。

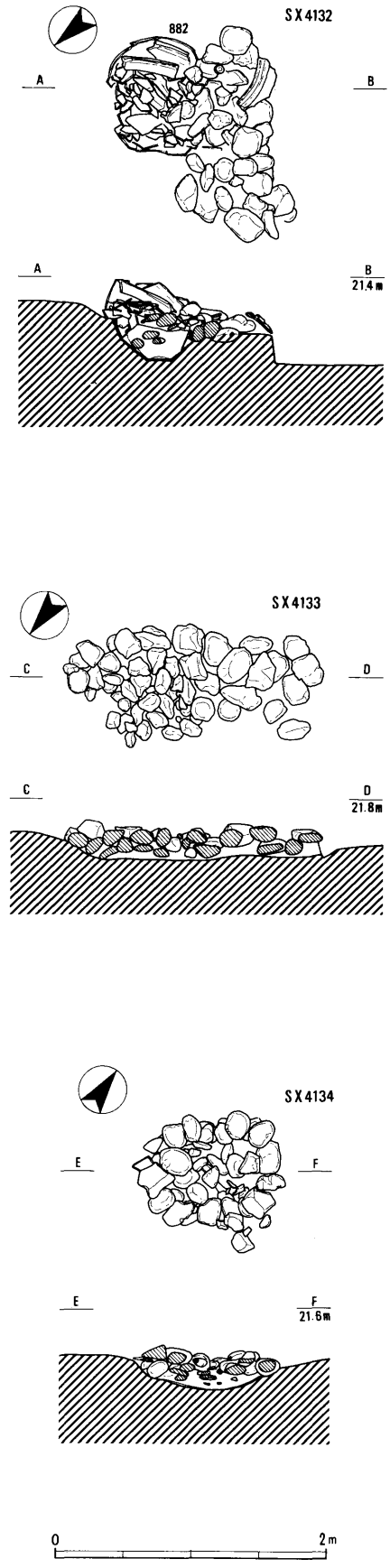
ＳＸ４１３８（第28図）　調査区南西部でＳＫ4167を切るかたちで検出した。直径80㎝の円形の土坑を10㎝程度の石や瓦片で埋め尽くし、その結果、土坑上部は円形の集石となる。土坑壁は緩やかで、レンズ状を呈する。埋納された遺物はないが、自然科学分析の結果、土坑内にはリン酸の濃集が認められた。

ＳＸ４１４１（第29図）　調査区南西部で検出した0.7×1ｍの楕円形を呈する集石である。集石は、直径20㎝程度の石もあるが、大半は5㎝未満の小石で構成されている。集石は土坑を伴わず、埋納された遺物もないが、自然科学分析の結果、リン酸の濃集が認められた。

ＳＸ４１４２（第29図）　調査区南端で検出した直径1～1.2ｍの円形を呈する土坑である。深さ35㎝で、土坑壁は緩やかである。埋土は3層に分かれ、上から第1層～第2層には2㎝以下の小石を含み、第2層～第3層は焼土を含む。埋納された遺物はないが、土坑底部には直径30㎝、厚さ2㎝ほどの炭の堆積があり、自然科学分析の結果、リン酸の濃集が認められた。

ＳＸ４１４４（第29図）　調査区中央南端で検出した1.2×1ｍの長方形を呈する土坑である。深さは検出面から35㎝を測るやや深いもので、埋土は橙褐色土の混じる褐色粘質土である。底から20㎝浮いて土師器皿(897)が倒立状態で出土した。この他にも、埋土には土器や陶器の破片が比較的多く含まれ、腐食の激しい鉄片も出土している。

ＳＸ４１４５（第29図）　調査区中央南端で検



第27図　SX4132～4134実測図（1：50）

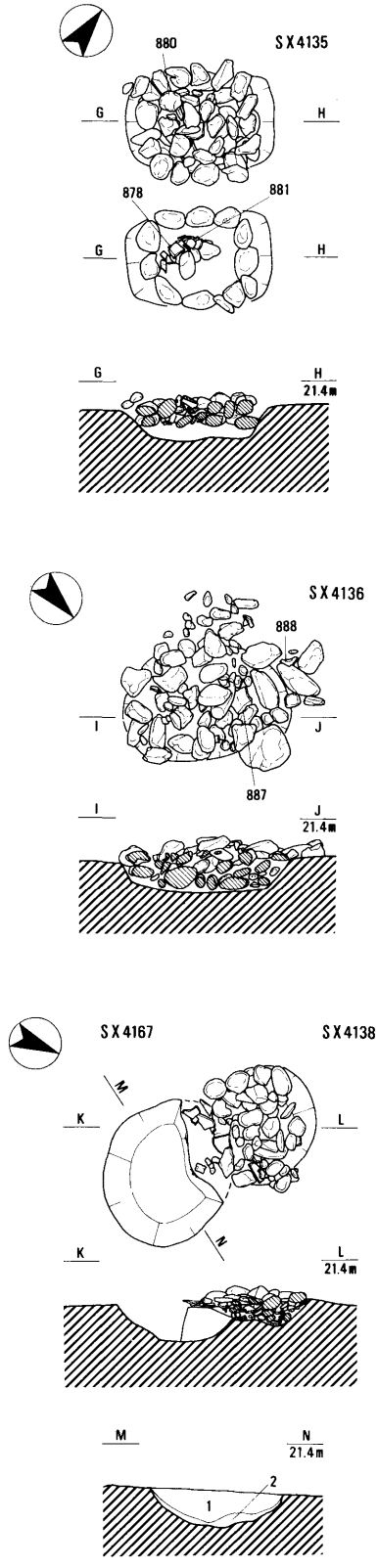
出した0.8×1mの楕円形を呈する集石である。集石は、主に20～50cmの石で構成されており、他の集石より大きいものを使用している。集石間から完形の土師器皿（946）が出土しており、埋納されたものかもしれない。集石の下は、深さ20cmの土坑になっており、壁は緩やか、底部は丸味をもつ。集石間や土坑埋土の自然科学分析の結果、リン酸の濃集が認められた。

ＳＸ４１４６（第29図）　調査区中央南端で検出した直径0.8～0.9mの楕円形を呈する集石である。集石直下は直径1m、深さ40cmの土坑となっている。集石は直径10～20cmの大小様々な石で構成されており、土坑内にも充満する。土坑埋土は褐色砂質土で炭を含むが、埋納された遺物はない。土坑埋土の自然科学分析では、墓とする根拠は得られなかった。

ＳＸ４１４８（第29図）　調査区南部中央で検出した0.9×1.3mの楕円形を呈する集石である。集石は30～5cmの大小様々な石を雑然と配置した状態で、土坑を伴い、土坑内も石が充満している。土坑は深さ20cmで、壁から底部は緩やかな円錐形を呈する。土師器皿、陶器鉢・秉燭、磁器椀等多くの遺物が出土している。土師器皿にほぼ完形のもの（908）があるが、埋納とは断定できない。さらに、破片で出土した陶器甕（910）は接合の結果ほぼ完形となったが、出土状況からは埋納された様子がなく、理解に苦しむ。自然科学分析の結果、土坑底部ではリン酸の濃集が認められた。

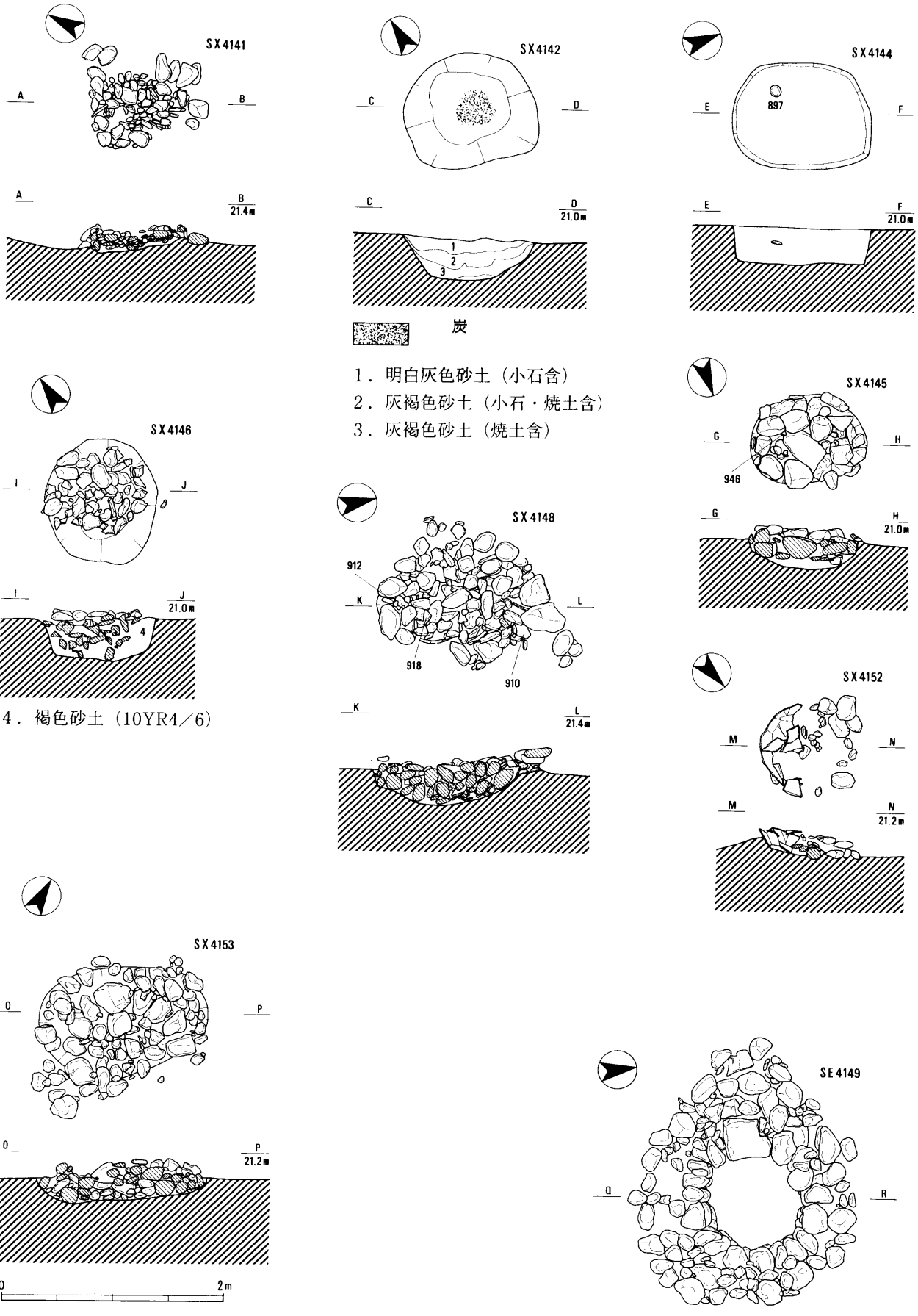
ＳＸ４１５２（第29図）　調査区南部中央で検出した陶器甕と石を直径0.9mの円周状に配置したものである。甕は、大型のものの胴部を用い西側1/3周を構成する。他は5～20cmの大小様々な石を列べ、中央部は5～10cm程度の石や甕片が一部に集中する状態である。土坑は伴わず、埋納遺物もなく、自然科学分析の結果からも墓とする根拠は得られなかった。

ＳＸ４１５３（第29図）　調査区中央南部で検出した1.5×1mの長方形を呈する集石である。集石は10～30cmの大小様々な石を雑然と配置したもので、土坑を伴う。土坑は深さ20cmの浅いもので、内部も同様な石が充満している。埋納された遺物は



1．黄灰色土（2.5Y5／1）〈含橙色〉
2．黄灰色土（2.5Y5／1）

第28図　SX4135～4138実測図（1：50）



1．明白灰色砂土（小石含）
2．灰褐色砂土（小石・焼土含）
3．灰褐色砂土（焼土含）
4．褐色砂土（10YR4／6）

第29図　SX 4141・4142・4144～4146・4148・4152・4153・EX4149実測図（1：50）

ないが、自然科学分析の結果リン酸の濃集が認められた。

B．土坑

ＳＫ４００３　調査区東端で検出した1×0.9mの方形を呈し、深さは30㎝を測る。埋土は明黄色土混入の暗黄褐色土で、近世陶器等の小片が出土したのみである。

ＳＫ４０８９　調査区中央西寄りで検出した直径1.5～2mの不整円形を呈し、深さは40㎝を測る。埋土には、比較的残りのよい山茶椀を含むが、近世陶器片によりこの時期とした。

C．井戸

ＳＥ４１４９（第29図）　調査区中央南部で検出した石組の井戸である。井戸内面は直径80㎝の円形を呈し、深さは、３mほどであるが、崩落のため、詳細な観察や記録はできなかった。

D．溝

耕作溝　調査区中央部の自然堤防上全面で検出された。大きく３群に分けることができ、北部のもの（SD4001･4002･4004･4006･4009～4012･4015･4016･4020･4023･4024･4027～4029･4036･4038～4040･4044･4050～4055･4058･4059･4064･4065･4068～4071･4073～4075･4082･4083･4091･4097･4098･4104～4105･4182～4185）は南北に、一部東西に延びる一群で、幅50㎝、深さ10㎝程度を測るものが多く、溝芯芯で約1.5mの間隔で並行するものが多い。東西方向のものは南北のものより後出で、溝幅はやや狭い。

中央部のもの（SD4042･4043･4047･4048･4077～4081）は、東西に延びる一群で、幅30㎝、深さ10㎝未満で、小規模であるが、それぞれの規模は比較的揃っている。間隔も溝芯芯で1.2ｍを測り、一定である。

西部のもの（SD4106･4110～4126･4189）は、東西に延びる一群で、幅50～30㎝、深さ10㎝未満のものが多く、南北方向のものと比べ溝幅は一定でなく、全体にやや小規模である。さらに、溝の間隔も一定でない。

ＳＤ４０２２　調査区北東端で検出した。ＳＤ4021にその大部分を切られるため、南岸を検出したにとどまり、土坑となる可能性も残る。深さ20㎝である。

ＳＤ４０６２　調査区中央部を東西に延びる溝で、幅80㎝、深さ20㎝程度を測る。耕作溝群と方向を揃えるが、規模が大きいため、別の性格をもつものと考えるが確証はない。

ＳＤ４１０７　調査区西端で検出した。幅60㎝、深さ20㎝で、調査区外から東へ10mほどで直角に南へ屈曲して消滅する。屈曲点は、室町時代の区画溝ＳＤ4187上にあたり、近世に至ってもこの区画線が守られていたとするならば、これも区画溝と考えられる。

E．特殊・不明遺構

ＳＺ４０２５　調査区北端部で検出した集石である。集石は幅50㎝で、N49°Eの方向に5mほど、30㎝程度の石を集めたもので、石列状になる部分もある。また、集石墓状に円形を呈する部分もあるが、確証はない。遺物の出土もなく、時期決定の根拠に欠けるが、一応この時期の区画を意図したものと考えておく。

ＳＺ４１６６　調査区南西部で検出した石列である。20㎝の石を一列に列べたもので、Ｅ38°Ｓの方向に2mほど検出した。ＳＺ4199とはほぼ直角となり、一連の区画施設であるかもしれない。

ＳＺ４１７０　調査区南部で検出した集石である。1.5×3mの長円形状に10㎝程度の石を配置したものであるが、集石墓とするほどの密集した様子は認められない。集石間から近世磁器が出土するが、室町時代の土師器も多いことから、当時代の集石が破壊された様子を示すものか、複数の遺構の重複かもしれない。

ＳＺ４１９２　調査区南部で検出した石列である。10～20㎝の石を7mほどN39°Eの方向に列べたものであるが、面を揃えた様子は認められない。何らかの区画施設と考えられるが、自然堤防南端に沿うように延びることから、地形に制約されたものであったと考えられる。

ＳＺ４１９４　調査区南部で検出した石列である。30㎝の石を一列にN6°Wの方向に3.5ｍほど列べ、東側に面を揃えている。地形の傾斜とは方向が異なるが、ＳＺ4192が屈曲してつながっていた可能性もある。

ＳＺ４１９５　調査区南部で検出した1.5×3mの不整長円形を呈する集石である。10～20cmの石を雑然と配置する。複数の集石墓の重複と考えられなくもないが、まとまりが不明確で、土坑も伴わないため、一応集石に止める。

ＳＺ４１９６　調査区南部で検出した４×５mの楕円形の範囲に広がる集石である。5～20cmの石を雑然と配置するが、他の集石より疎らな状態である。したがって、集石墓の重複である可能性は低いものと考えられる。集石の東側で、Ｎ９°Ｅの方向に３mほど延びる石列を検出した。20cmほどの石を一列に列べたもので、これを境に集石が途絶える。このことから、これらは何らかの石敷広場と考えたいが、その場合、付近の集石墓（SX4153）との兼ね合いが疑問である。

ＳＺ４１９８　調査区南部をN40°Wの方向に延びる石列で、7mほどを検出した。20cmほどの石を東側に面を揃え、一列に列べている。一部２段に積まれた様子を伺うことができるため、石垣の基底部の可能性が強い。

ＳＺ４１９９　調査区南西端から、自然堤防に沿って延びる集石である。30cmほどの石を一列に列べ、蛇行しながら延びる石列を軸に、それよりやや小さい石による集石が付属する形態である。勿論、石列と集石は別遺構の可能性が高く、前者は地形に沿うことからＳＺ4192と一連のもの、あるいは同性格のものと考えられる。後者は集石墓とするには、まとまりが弱く、その性格は不明である。

(4) 近代の遺構

土坑4基（SK4005・4013・4035・4061）、溝5条（SD4007・4021・4031・4066・4067）があるが、SK4035以外の性格は不明であり、時期も近代としたものの、現代にまで降る可能性も否定できない。

SK4035は、円形の土坑に陶器の大甕を正立に据えたもので、現代ちかくまで使用されていたものである。調査区の現況が畑地であることから耕作に伴う肥壺等に使用されていたものであろう。

2．遺　物

今回の調査のうちで、第４次調査区から最も多くの遺物が出土している。SD4190から平安時代末期の土師器皿が、完形ちかい状態で多量に出土したのをはじめ、室町時代や近世の遺物が中心である。しかし、その多くは、明確な土坑から一括して出土したものは少なく、河道や包含層出土にちかいものが多い。

(1) 平安時代末期の遺物

A．ＳＸ４０２６出土の遺物（第30図）

全て土師器の皿である。口径13.5～14cmの大型のもの（356～358）と8～9cmの小型のもの（359～364）がある。小型のものは、器高1.5cm以上のやや深いもの（359～362）と1cm前後の浅く偏平なものに不明瞭ながらも分かれる可能性がある。（359～362）は、土坑底に重ねられて埋納されていたものである。したがって、混入と考えられる他のものとは、若干の時期差があるかもしれない。

大型のもの（356）の口縁端部ちかくの外面は、強い指押さえにより屈曲気味になる。（357）も同様であるが、ヘラ状工具により意識的に外へ屈曲させている。これらに対し（358）の口縁端部には屈曲はなく、底部外面に藁圧痕が認められ、製作方法等に違いが認められる。

小型のもの（360・362・364）の口縁端部外面は強いヨコナデのため凹面を形成している。（361）には、煤の付着が認められ、（364）の胎土には赤茶色の土粒が点在する。

B．ＳＺ４１６８出土の遺物（第30図）

全て土師器の皿である。土坑からかなり浮いて正立状態で出土したもので、完形あるいはそれにちかい残存である。やはり大型のもの（365）、小型のやや深いもの（366～371）、小型の浅く偏平なもの（372）がある。小型のものの内面に、回転台によりナデられたと考えられるもの（366～368・370・372）が多く、（367）は、外面もナデにより調整する。（371・372）の口縁部外面には浅い沈線が巡り、（371）には煤の付着が認められる。

C．ＳＤ４１３１出土の遺物（第30図）

（373～375）は土師器の皿、（376･377）はロクロ土師器の皿、（378）は山茶椀の小椀である。土師器の皿には、大型のもの（373）と小型のもの（374･375）があるが、小型のものは、いずれも浅く偏平なもので、器高1.5cm以上のやや深いものはない。大型のものも、SX4026やSZ4168のものと比べ、やや浅い。

D．ＳＤ４１０１出土の遺物（第30図）

（379）は土師器の椀、（380）は杯、（381）は皿、（382）は山茶椀、（383）は土錘、（384）は縄文土器の深鉢、（385）は須恵器の蓋である。混入遺物が多く、この時期を表すものは（381･382）のみか。（380）は底部外面をナデにより調整しており、平安時代初期に属するものと考えられ、（379）もそれと同様な時期のものであろうか。底部外面に「宇」か「中」と読める墨書があり、完形にちかい残存である。したがって、混入遺物とするよりは、平安時代初期の遺構が重複していた可能性を示すものかもしれない。

E．ＳＤ４１３０出土の遺物（第30図）

（386･387）は、土師器の皿である。大型の（386）と小型の（387）があり、小型のものは、器高1.6cmを測るやや深いものである。

F．ＳＫ４１２７出土の遺物（第30図）

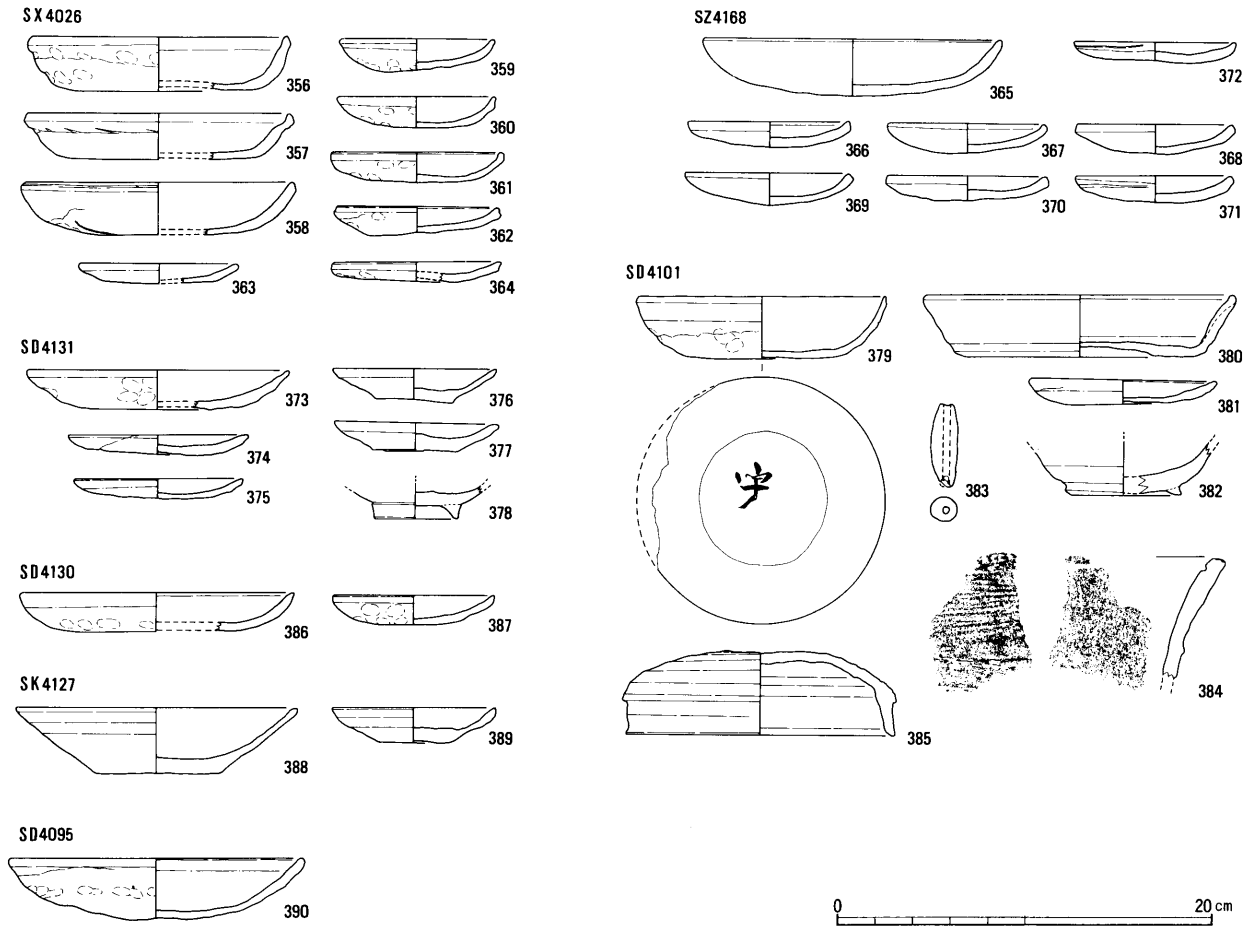
（388･389）は、ロクロ土師器で、前者は椀、後者は皿である。（389）の底部は、高台を意識したためか、非常に厚く作られている。

G．ＳＤ４０９５出土の遺物（第30図）

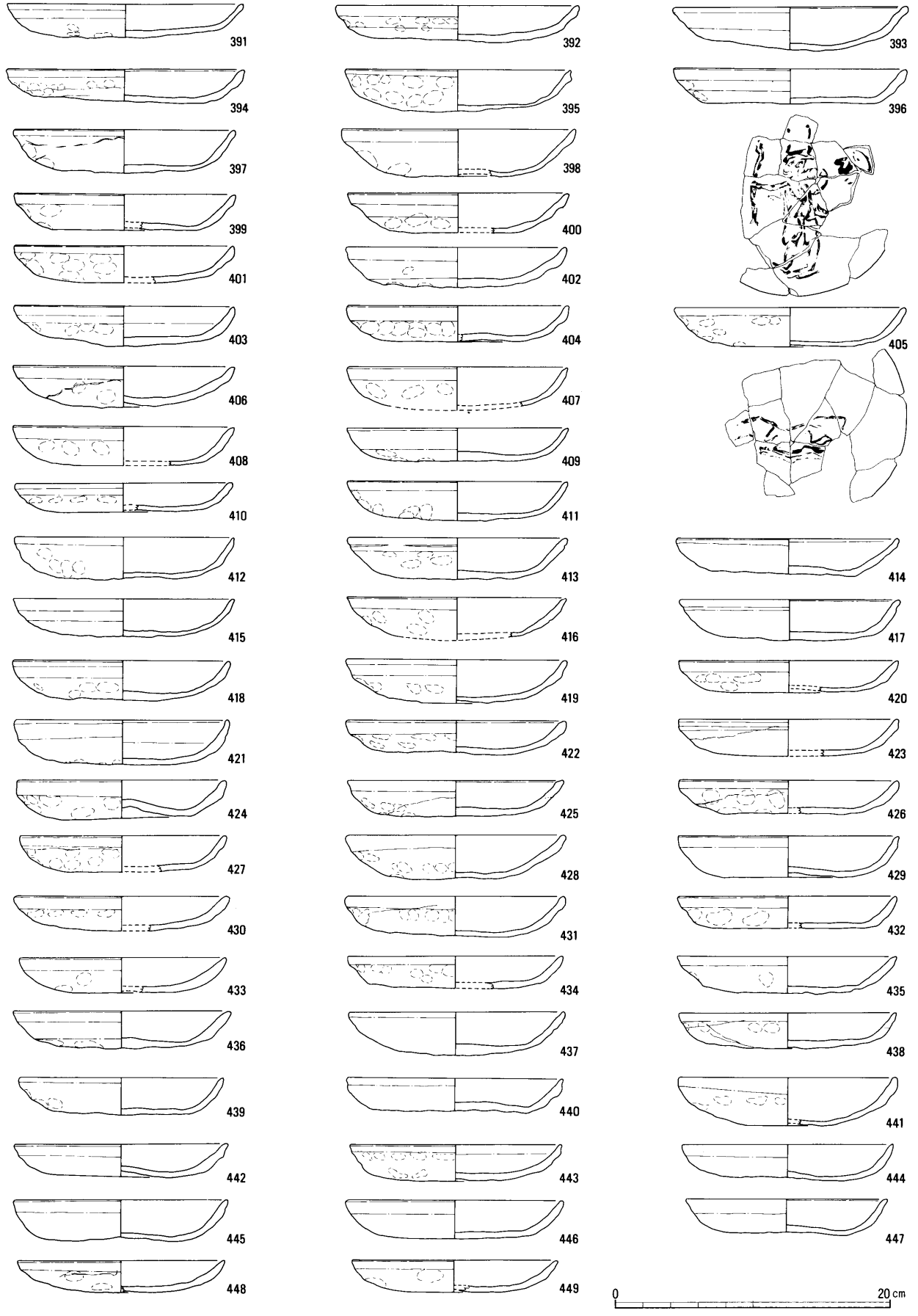
図示したものは、土師器の皿（390）のみである。底部から内弯して口縁部に至る器形で、この時期の他のもより、いっそう口縁部と底部の境が不明瞭である。

H．ＳＤ４１９０出土遺物（第31～34図）

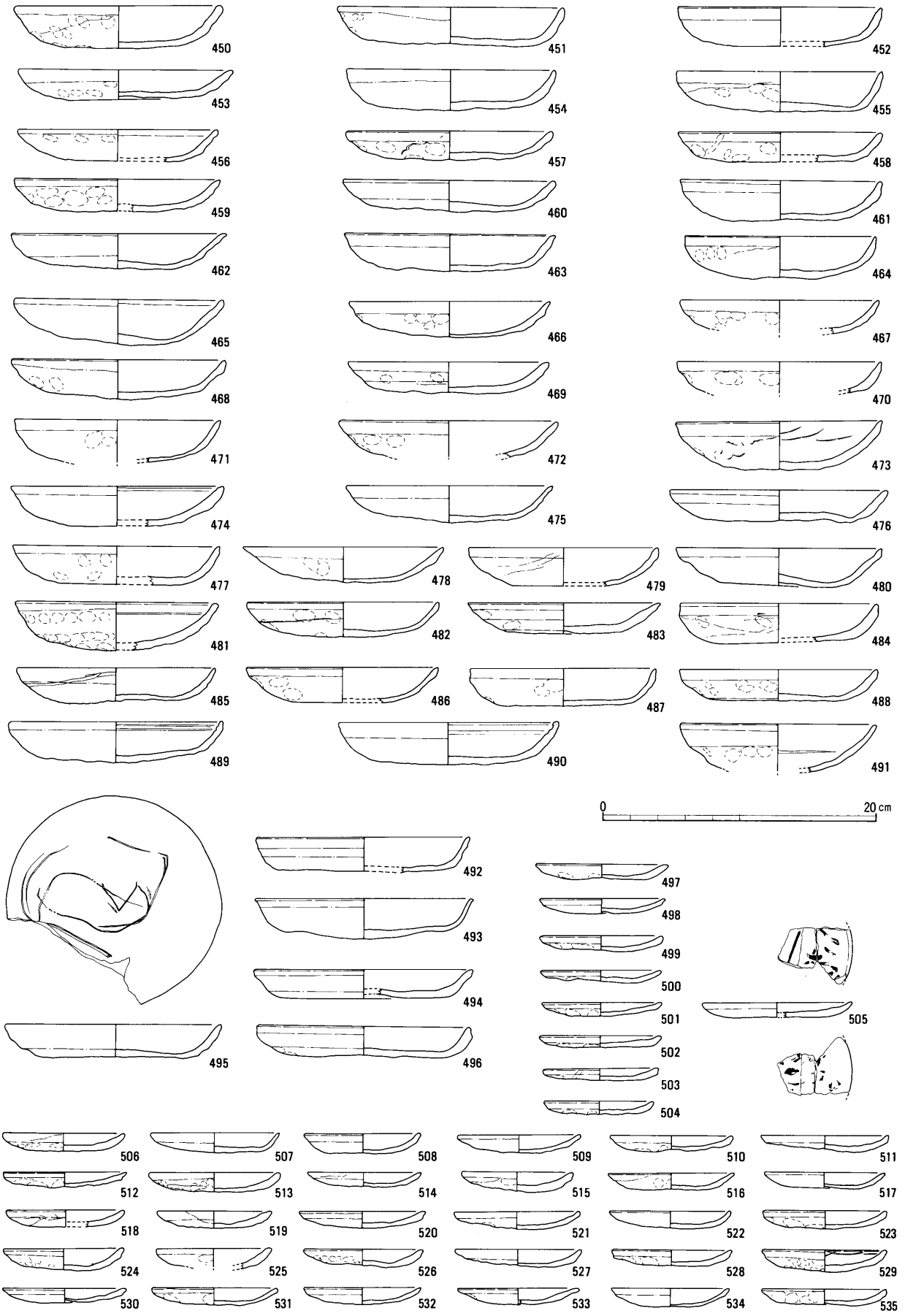
自然流水路の南岸の一角から土師器の皿を中心として多量の遺物が出土した。



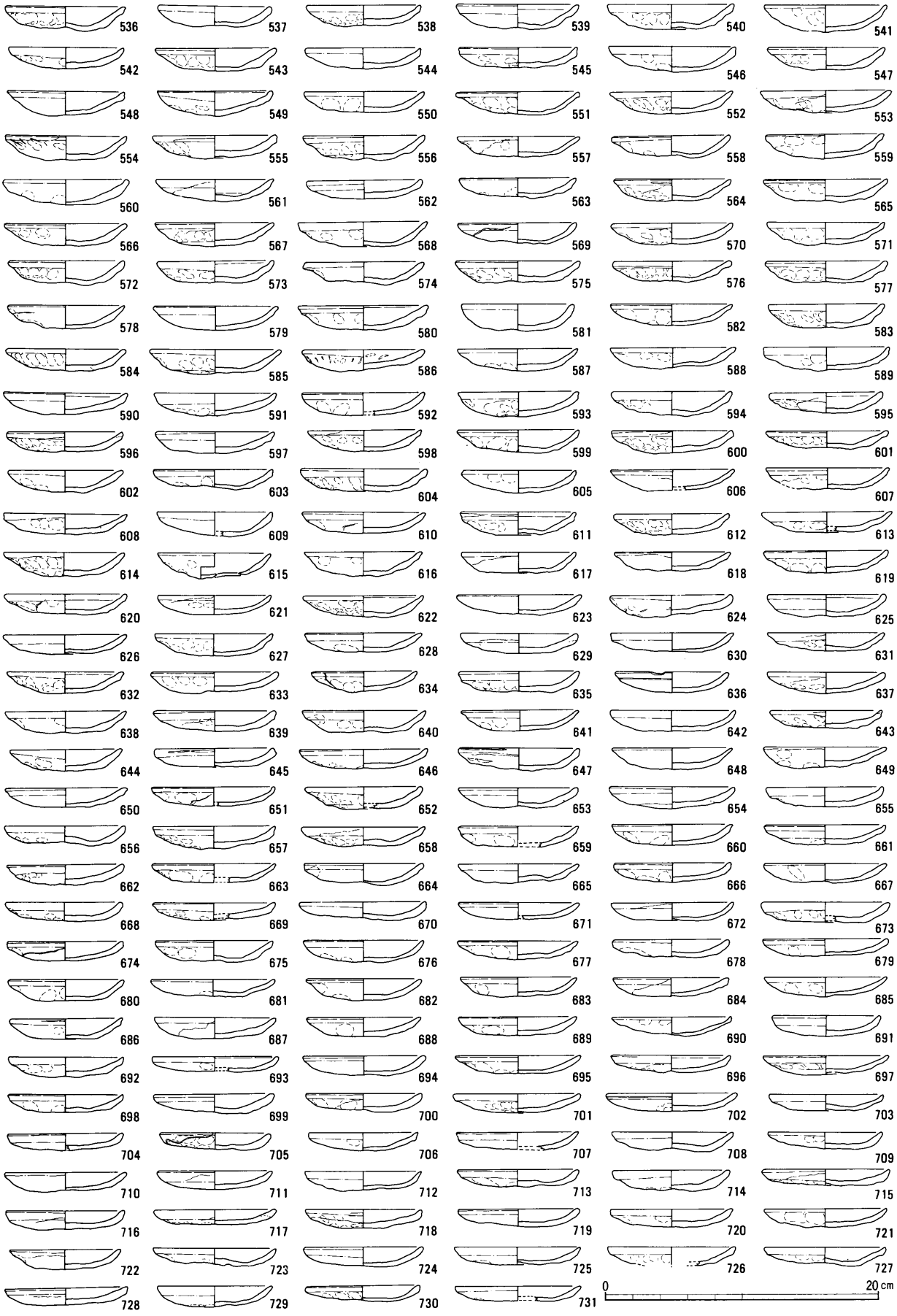
第30図　SX4026、SZ4168、SK4127、SD4095・4101・4130・4131出土遺物実測図（1：4）



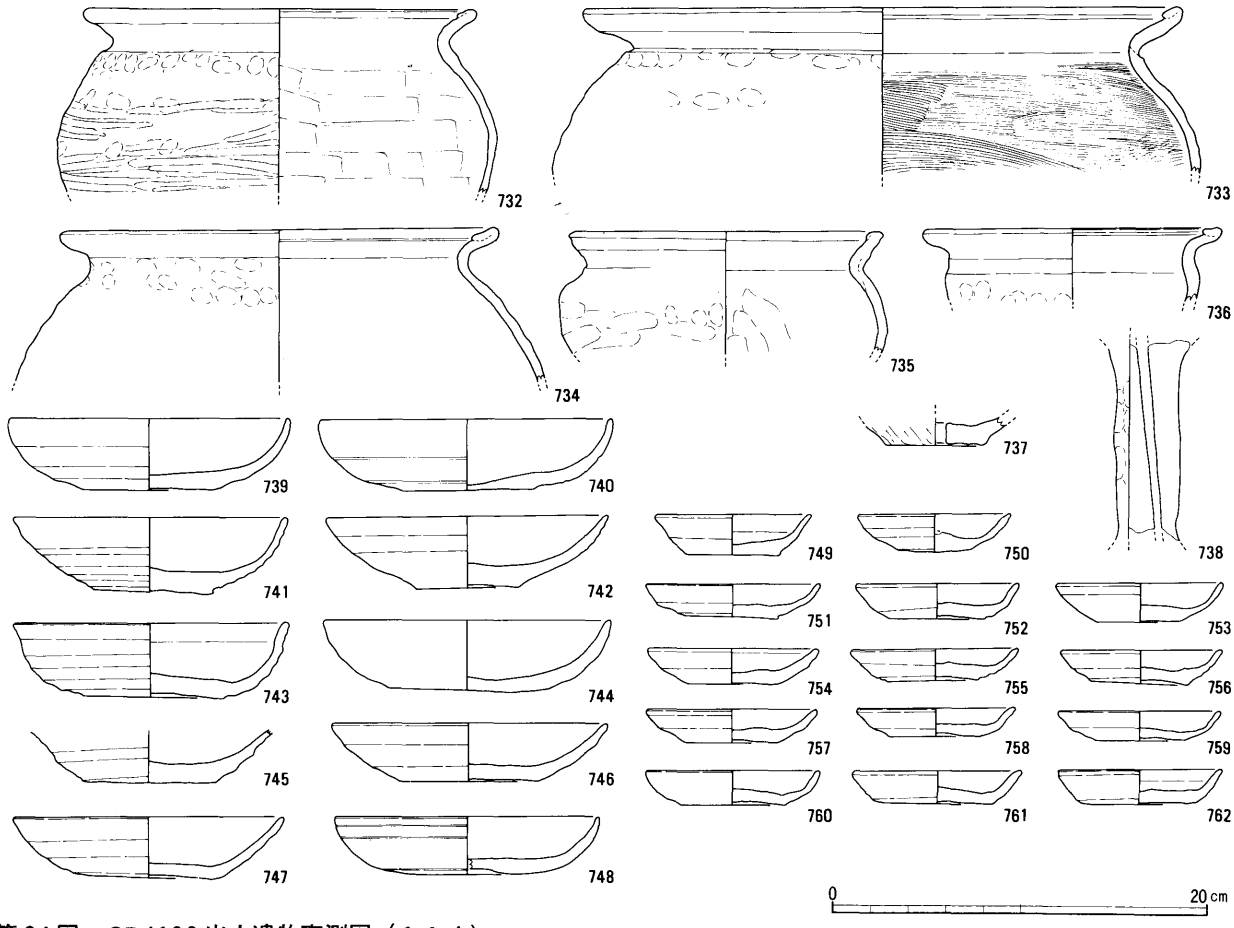
第31図　SX4190出土遺物実測図（1：4）



第 32 図　SD4190 出土遺物実測図（1：4）



第33図　SD4190出土遺物実測図（1：4）



第34図　SD4190出土遺物実測図（1：4）

土師器　出土遺物の大半が土師器である。その内、大部分を皿が占める。皿は、口径15～16cmの大型のもので杯とすべきかもしれないもの（391～496）と、10cm以下の小型のもの（497～731）に大きく分かれる。

大型のものは、簡単なヨコナデと外面の指頭圧痕が明瞭で、そのために器形の歪みが激しく底部と口縁部の境が不明瞭なもの（391～490）を皿A、ヨコナデが比較的丁寧で、底部から口縁部への屈曲が明瞭な古い要素の強いもの（492～496）を皿B、皿Aに似るが器壁が薄く、椀に近い形態のもの（491）を皿Cの3種に分類する。しかし、皿Cについては、1例しかなく皿Aの変形とした方がよいかもしれない。逆に（398・428・437・473・481）は器高がやや高く、皿Aとは区別した方がよいかもしれない。他にも、（392・415・442・474）のヨコナデは、比較的広い範囲に行われ、いわいる2段ナデに近い状態である。内側を工具でナデるもの（473）、口縁端部外面に沈線を巡らすもの（413・485）や内面に巡らすもの（474・481・490）、（490）については、口縁部を内に折り返し、端部内面を強くヨコナデする等、細部については様々な調整が認められる。（392・400・420・432）の一部は、2次焼成を受けたように赤く変色している。

皿Bでは、口縁部を2段状にナデるもの（492）、強いヨコナデにより口縁部が外反気味になるもの（493・494）等があり、後者は、底部外面までをナデにより調整する。（495）の内面には、未乾燥時に枝状のもので軽くナデた様な痕跡がある。

小型の皿では、器高1cm程度の偏平なものを皿D（497～505）とそれ以外のやや深いものの皿E（506～731）に、分類するが、（505）は、口径　10.8cmを測るやや大きなもので、底部外面までをナデにより調整すること、（673）は全体に厚手であること等、古い要素をもち、別種とすべきかもしれない。内外面に絵画と考えられるような墨書があるが、何を描いたのかは不明である。

調整はすべて内面ナデ、外面未調整であるが、口縁端部を工具によりヨコナデするもの（503・528・548・558・674）が散見される。特に（503）は、面

取状にヨコナデする。他にも、ヘラ状工具痕の認められるもの(554・582)、同様な工具によるものと思われる沈線が口縁部近くに巡るもの(636・645・647・686)があり、この器種の作成にあたっては、工具もかなり使用されている様である。

口縁部等に煤の付着するもの(508・527・534・554・607・620・668)、赤変するもの(523・559・568・593・646・670・681・646・681)があり、火に係わる使用があったものと推測される。また、(615)の底部は穿孔されており、他のものとは異なった利用(祭祀的な)がされたものと考えられる。

乾燥は重ねて行われたようで、(636)の口縁部には、乾燥不十分のためか、接着を防ぐために挟み込んだ棒状工具の痕跡が観察できる。

鍋は、口径31.6cmを測る大型のもの(733)、20～25cmの中型のもの(732・734)、15～16cmの小型のものがある。いずれも口縁端部を内に折り返し、外面は未調整、内面はナデで調整するが、(732)の外面には、雑なヘラケズリが、(733)の内面にはハケメが認められる。外面に煤が付着し、煮沸に利用されたものと推測されるが、煤が付着しない(736)は、小型であることもあり、容器としての利用も考えられる。

甑は、(737)のみであるが、小片であり、混入遺物の可能性もある。壺状の底部に棒状工具で、成形時に穿孔する。

(738)は、一応高杯の脚部としておくが、燭台等の可能性もある。棒状工具を芯にして成形し、後にその芯を抜き取ることにより長い脚部を作り上げている。

ロクロ土師器　椀(739～748)と皿(749～762)がある。

椀は、内弯する口縁部を呈するが、(747)は比較的直線状に立ち上がる。いずれもロクロにより成形・調整を行うが、(739)は、さらにナデにより調整している。(747)は、口縁部外面に2条の沈線が巡り、底部も他のものが糸切りであるのに対し、ヘラ切りで粘土塊から切り放されており、異質である。皿は、全て口径8～9cm程度の小皿である。(749・751・752)は、高台を意識して、粘土塊からの切り放しをやや厚くしている。内弯気味に立ち上がる口縁部をもつものが大半であるが、(761・762)は、直線的に立ち上がり、端部は若干外反気味である。

(2) 室町時代の遺物

A. SX4108出土遺物 (第35図)

比較的まとまった出土があるが、混入遺物も多く一括性に乏しい。

土師器　皿(763～765)、蓋(766・767)、鍋(768～775)、鉢(776・777)、急須(778)、羽釜(779・780)、茶釜(781～783)があり、多種多様である。

皿は、口径6cmの小型のもの(763)、8cmの中型のもの(764)、10cmの大型のもの(765)の3種あるが、歪みが激しく残存度が低いため明確ではない。(765)の口径はもっと大きいかもしれない。形態的には、浅く、内弯気味に立ち上がる口縁部をもつもの(763・764)と、深く、大きく外反するもの(765)の2種類あるようである。

蓋としたものは、両者とも中央部を欠損するが、偏平な把手が付くものと考えられる。(767)は、口縁部の外反が弱く、端部はやや内弯気味になることから、蓋とするに疑問も残る。あるいは皿の一種か。

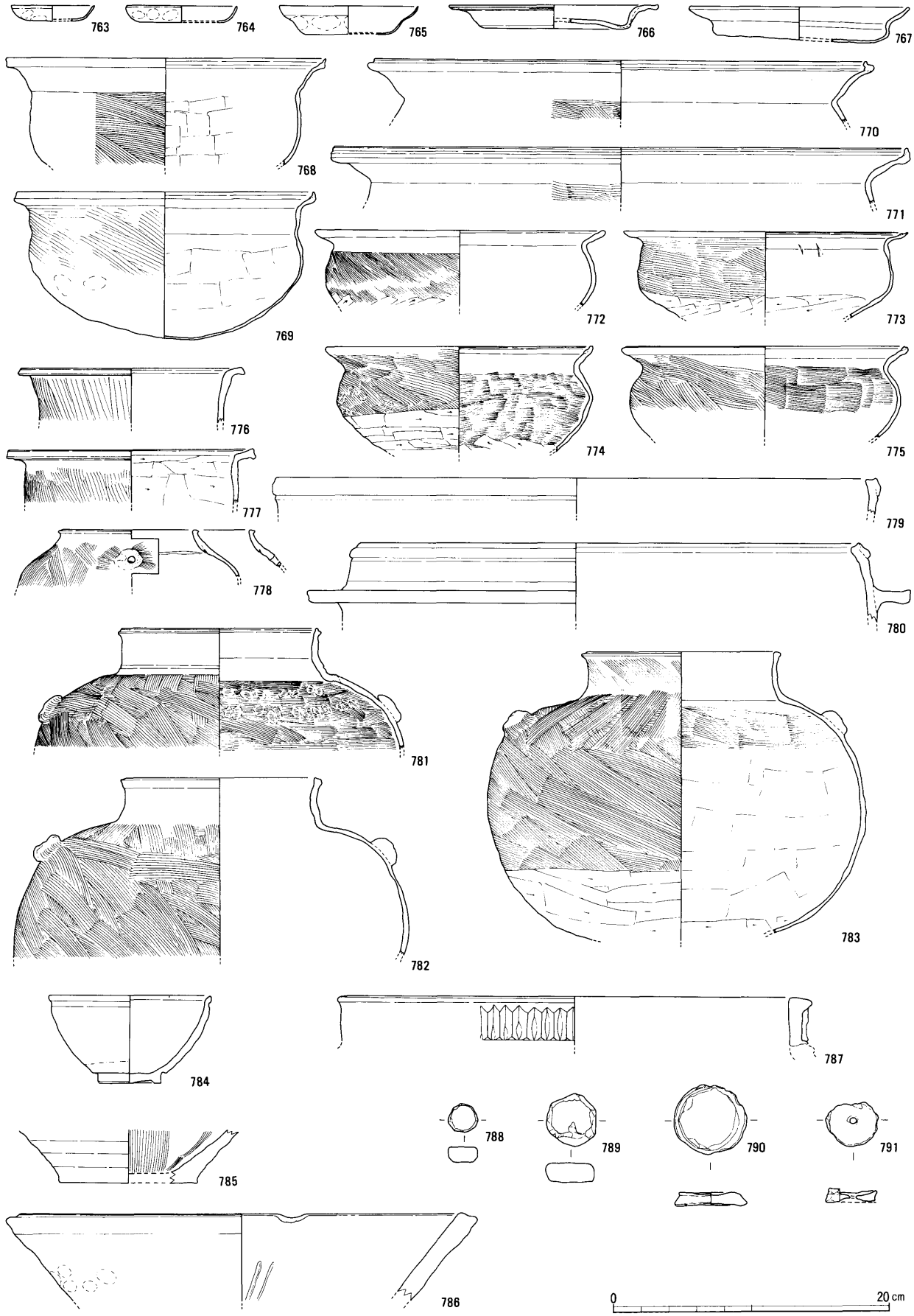
鍋は、口径35cm以上の大型のもの(770・771)と19～23cmの小型のもの(768・769・772～775)がある。口縁端部の形態では、折り返しが上方に立ち上がるもの(768～771)とナデにより抑え込まれ気味のもの(772～775)に分けられる。この場合後者には、大型のものは出土していない。調整は、外面過半をヘラケズリするものと考えられるが、(769・775)には認められない。ただ、(775)には煤が厚く付着しているため不明確である。内面は、ハケメのもの(774・775)とナデのもの(768～773)に分かれる。

鉢は、橙色を呈し、焼成良好のもので、近世に降るものの可能性がある。

(778)は、一応急須としておくが、注口部が欠損しており、確証はない。

茶釜は、3者とも同様な形態であるが、(782)の内部の調整には、ハケメは認められない。

陶器　(784)は天目茶椀、(785・786)は擂鉢、(787)は火舎である。(784)は底部まで錆釉が掛



第35図　SX4108出土遺物実測図（1：4）

かり、(787)は比較的軟質で土師器にちかい。

(785)の摺目は、16本1単位の櫛、(786)はヘラによるもので時期差がある。

加工円盤　(788～790)の3点ある。(790)は土師器椀の底部を、他は陶器甕の胴部を転用している。直径、重量とも様々である。

紡錘車　(791)のみである。土師器椀の底部を転用し、さらに周囲を打ち欠いて3.7cmほどの直径に加工している。

B．ＳＸ４１７１出土遺物（第36図）

(792～796)は土師器の皿、(797～799)は鍋、(800～802)は羽釜、(803～807)は椀、(808)は施釉陶器の椀、(809)は天目茶椀である。

土師器皿は、内弯する口縁部をもつが、(796)のみは直線的に立ち上がる。

土師器鍋は、いずれも口縁端部を内に折り返すが、(799)は三角形状に立ち上がる。

椀は、いずれも同様な形態・調整で、松阪市横尾墳墓群で類似のものが出土している他は、出土例を知らない。

C．ＳＸ４１３９出土遺物（第36図）

(810)は土師器の皿、(811～813)は鍋である。皿は、口縁部が2段状に立ち上がるもので、鍋は、いずれも口縁端部の折り返し部が三角形状に立ち上がるものである。(811)の頚部ちかくには、1条の沈線が巡る。

D．ＳＸ４１６９出土遺物（第36図）

(814～816)は土師器の椀、(817･818)は鍋である。椀は、SX4171出土のものと同種のものである。全体に雑な仕上げで、乾燥不十分時の作業のためか、ハケメの工具により粘土が引き延ばされた様子が明瞭に残る。

E．ＳＸ４０６３出土遺物（第36図）

(819)は土師器の皿、(820)は蓋である。蓋は、鍋に偏平な把手を付けただけの形態で、器形・調整は鍋と同一である。把手は、ハケメの工具でナデ付けて固定されており、残存の都合から1ヶ所を確認しただけである。(819)の底部外面には、浅い凹みが8個、円周状に並ぶが、何の痕跡かは不明である。

F．ＳＸ４０８６出土遺物（第36図）

図示したものは、内弯する口縁部をもつ土師器の皿（821）のみである。

G．ＳＸ４１０３出土遺物（第36図）

(822･823)は土師器の皿、(824)は天目茶椀である。土師器皿は、両者とも内弯する口縁部をもつ。

H．ＳＸ４１５０出土遺物（第36図）

(825･826)は土師器の皿であるが、(825)が内弯する口縁部をもつのに対し、(826)は直線的に外方へ立ち上がる。

I．ＳＸ４１６４出土遺物（第36図）

図示したものは施釉陶器の卸皿(827)のみである。卸目は、ヘラにより刻まれている。

J．ＳＫ４０７６出土遺物（第37図）

(828)は灰釉陶器の椀、(829)は青磁の香炉、(830)は土錘、(831～836)は銭貨である。(829)は小片であるため全体の形態は不明であるが、3脚が付くものと思われる。精製品である。銭貨は、「永楽通寶」が3点(831･832･836)で、他のものは錆や摩滅のため不明であるが、(834)については少なくとも「永楽通寶」ではない。(828)のみおおきく時期差があり、混入と考えられる。

K．ＳＫ４０９０出土遺物（第37図）

図示したものは土師器の皿(837)のみである。口縁部はわずかに2段状に立ち上がる。

L．ＳＢ４０７２出土遺物（第37図）

図示したものは土師器の皿(838)のみである。内弯する口縁部をもつ。

M．ＳＺ４１９７出土遺物（第37図）

図示したものは土師器の皿(839)のみである。形態的には、前述した(837)と(838)の中間的な要素をもつ。

N．ＳＤ４１００出土遺物（第37図）

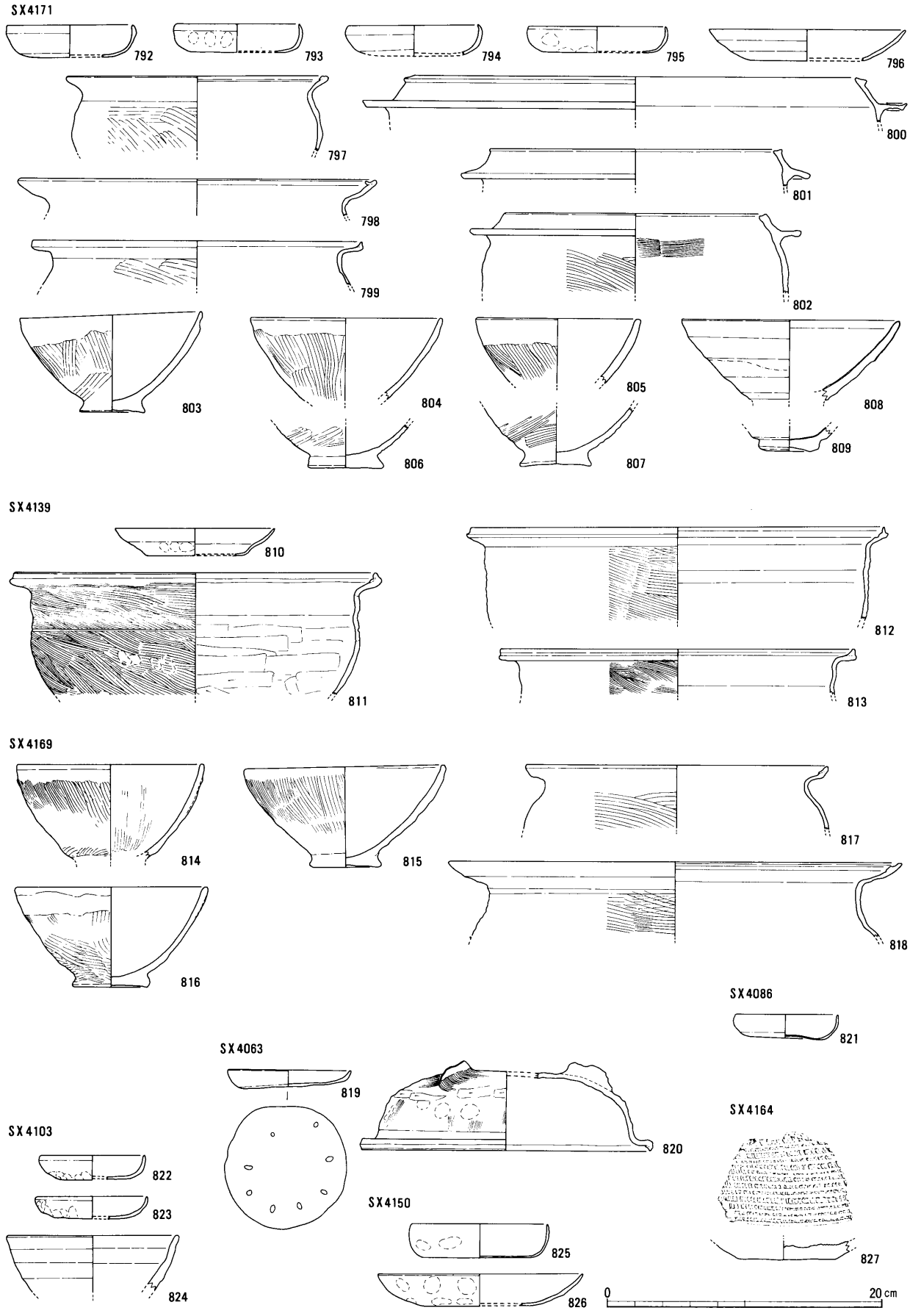
図示したものは土師器の皿(840)のみである。形態的には後述する近世のものと似るが、色調・焼成が異なり、むしろ中世のもに近いため、ここで扱うことにした。

O．ＳＺ４１０９出土遺物（第37図）

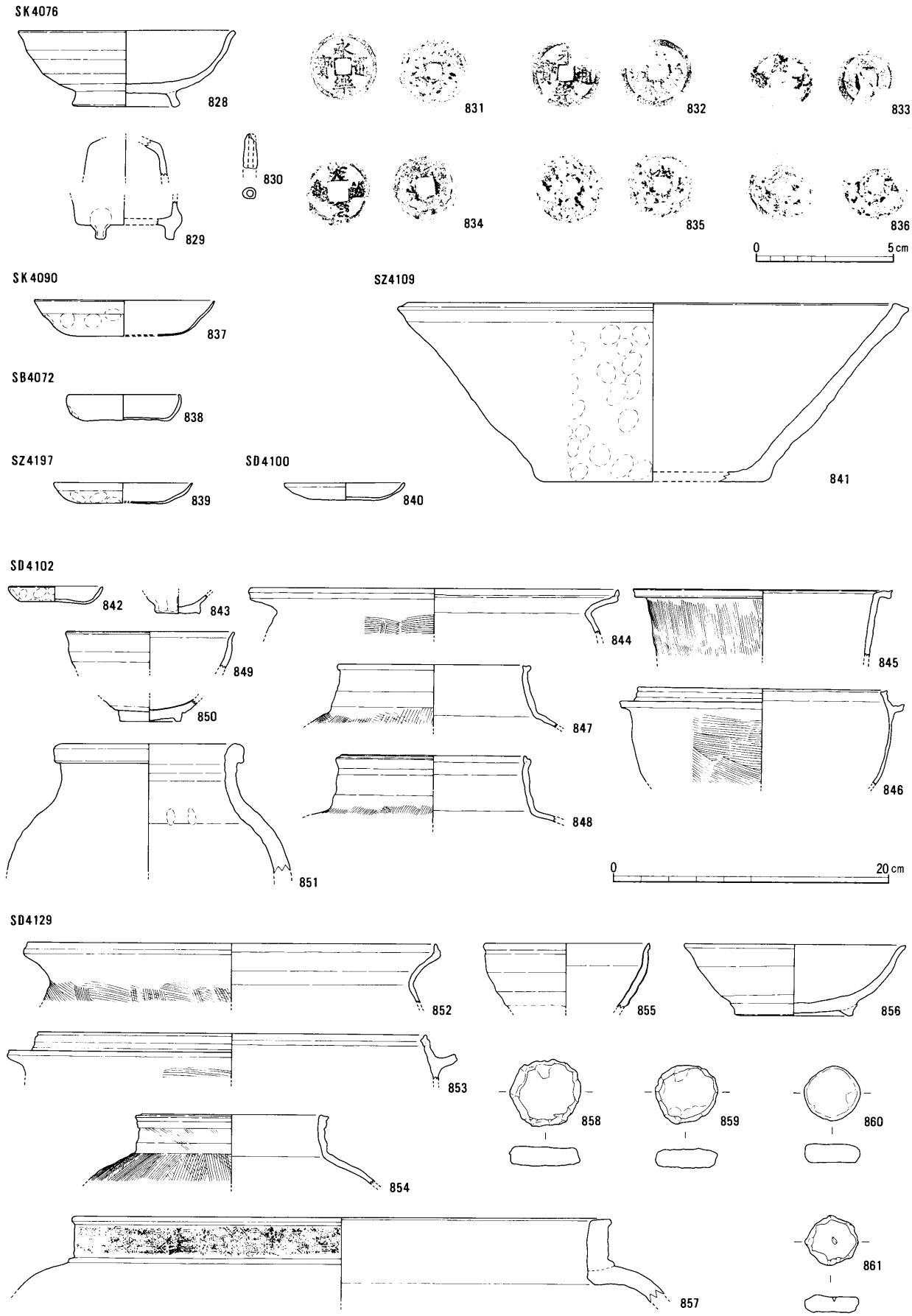
図示したものは陶器こね鉢(841)のみである。内面には、炭化物の付着があり、また、使用のためか底部近くの体部内面は平滑になっている。

P．ＳＤ４１０２出土遺物（第37図）

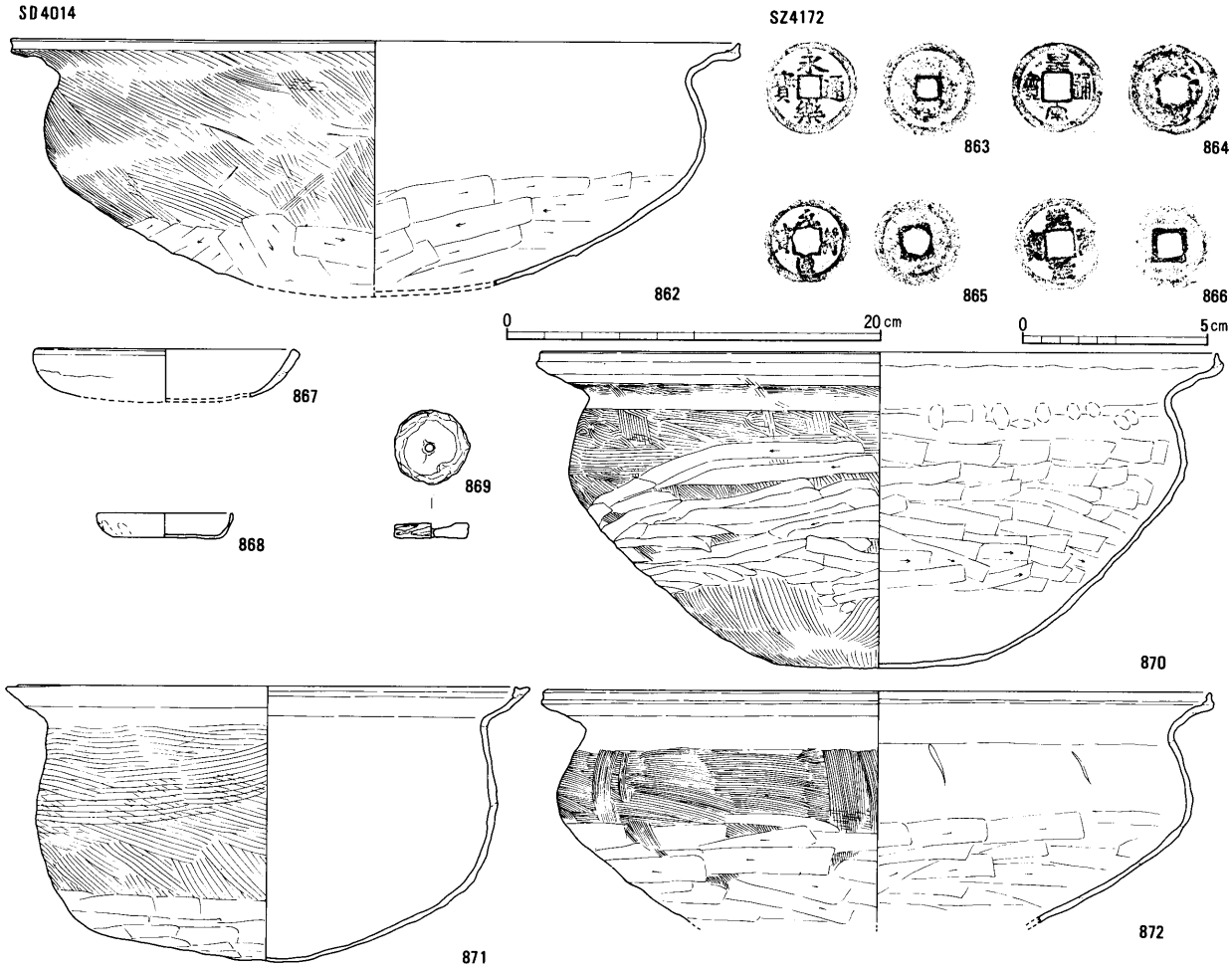
(842)は土師器の皿、(843)は壺、(844)は鍋、



第36図　SX4063、4086・4103・4139・4150・4164・4169・4171実測図（1：4）



第37図　SK4076・4090、SB4072、SZ4109・4197、SD4100・4102・4129出土遺物実測図（1：4）
831～836＝（1：2）



第38図　SD4014、SZ4172・小ピット出土遺物実測図（1：4）　　863～866＝(1:2)

(845)は鉢、(846)は羽釜、(847･848)は茶釜、(849･850)は天目茶椀、(851)は陶器の壺である。

(843)は一応壺としたが、底部のみの残存のため鉢や椀の可能性もある。指頭圧痕を残す雑な作りで、いずれにしても中世末期以降のものであろう。

土師器の調整は、皿、壺を除き、外面ハケメ、内面ナデであるが、(846)のナデは工具による。(845)は、既述したものと同様、焼成的には、近世の特徴を呈する。

Q．ＳＤ４１２９出土遺物（第37図）

(852)は土師器の鍋、(853)は羽釜、(854)は茶釜、(855)は天目茶椀、(856)は山茶椀、(857)は瓦質の火舎、(858～860)は加工円盤、(861)は紡錘車で、(856)は明らかに時期差があり、混入遺物と考えられる。

土師器の内面のナデは、(854)を除き工具による。

加工円盤は、いずれも陶器甕の胴部を転用している。円形に打ち欠いた雑な仕上げであるが、(860)は側縁部を平滑に磨いている。

紡錘車も陶器甕の転用で、加工円盤と大差ない。中央部に穿孔の意図が認められるため、一応、紡錘車とした。孔は、3㎜ほどの深さで、貫通はしない。したがって、未製品と考えられる。

R．ＳＤ４０１４出土遺物（第38図）

図示したものは、土師器の鍋(862)のみである。内面のヘラケズリは、ナデにちかい弱いものである。

S．ＳＺ４１７２出土遺物（第38図）

出土したものは全て銭貨である。(863)は「栄楽通寶」、(864)は「皇宋通寶」、(865)は「元符通寶」で、(866)は判読不可能である。初文字は、「元」か「天」、4文字目は「寶」であろう。いずれにしても4枚とも別種である。

T．その他小ピット出土遺物（第38図）

(867･868)は土師器の皿、(869)は紡錘車、(870～872)は土師器の鍋である。

土師器鍋外面の調整は、上半ハケメ、下半ヘラケ

ズリであるが、(870)の外面は、大部中央に雑なヘラケズリが認められる。内面も同様に、中央部にナデにちかいヘラケズリが認められるが、底部はナデである。(872)の内面のヘラケズリもナデにちかいものである。

紡錘車は、土師器椀の底部を転用したもので、側縁部を鋭利な工具で削られでいる。径を小さくする必要に迫られての行為であろう。

(3) 近世の遺物

A．ＳＸ４１３４出土遺物（第39図）

(873)は近世陶器の椀、(874～877)は土師器の皿である。土師器皿は、中世のものに比べ、橙色を呈し、焼成の良好なものである。指頭圧痕の目立つものは（876）だけで、全体に仕上げも丁寧なものとなっている。

B．ＳＸ４１３５出土遺物（第39図）

(878)は土師器の皿、(879)は把手付き壺、(880)は軒丸瓦、(881)は平瓦である。(879)は、茶釜に片手の把手を付けた形態である。

(880)は巴文で、圏線はなく、8㎜程度の珠文が10個付くものと考えられる。

C．ＳＸ４１３２出土遺物（第39図）

(882)は陶器の甕、(883･884)は土師器の皿である。(882)は、約14斗の容積をもつ大型のもので、内面には、指による押さえや、強く掻き取る様な痕跡が認められる。土師器皿は既述したものと同様、橙色を呈する焼成良好のものである。

D．ＳＸ４１３３出土遺物（第40図）

(885)は犬形土製品である。頭部と左前足を欠損している。室町時代の城館等から出土することが多いため、これもその時代のものの可能性もある。

E．ＳＸ４１３６出土遺物（第40図）

図示したものは全ていぶし焼きの瓦で、(886)は軒丸瓦、(887･888)は軒平瓦である。(886)は巴文で、圏線は無く、12個の珠文が巡る。

F．ＳＸ４１４６出土遺物（第40図）

(889)は近世陶器の椀、(890)は陶器の擂鉢、(891)は鉢である。(891)は雑な仕上げで、器壁も非常に厚い。

G．ＳＸ４１３８出土遺物（第40図）

(892)は土師器の皿、(893)は染付椀、(894)は平瓦、(895)熨斗瓦である。(892)は既述したものと同様、橙色を呈する焼成良好なものであるが、口径12.7㎝、器高2.5㎝を測り、他のものより大きい。

H．ＳＸ４１４４出土遺物（第40図）

(896･897)は土師器の皿、(898)は近世磁器の灯明皿、(899･900･901)は近世陶器の椀、(902)は紡錘車、(903)は加工円盤である。土師器皿は、(896)の口縁部は底部から屈曲して立ち上がるのに対し、(897)は屈曲が弱く内弯気味である。紡錘車、加工円盤は共に土師器椀底部の転用であるが、紡錘車は、中央の孔が貫通しておらず、未製品である。

I．ＳＸ４１４８出土遺物（第41図）

(904)は土師器の椀、(905～908)は皿、(909～911･913･914)は陶器で、(911･913･914)は釉が施される。(909)は鉢、(910)は甕、(911)はひょう燭、(913）は椀、(914）は皿である。(909)の内面は、使用のため平滑になっており、外面には荒い櫛状の工具痕がある。室町時代の混入である。(910)は容量約8斗を測る大型のものである。(913)の底部外面はロクロケズリで調整されるが、高台はその後には貼り付けられたものである。

(912)は磁器の染め付け椀、(916･917)は玉縁式の丸瓦、(918)は軒平瓦である。(916)には焼成後に釘穴が穿たれている。(916)の凹面は、吊り紐痕が明瞭であるのに対し、(917)は細い叩きである。

J．ＳＺ４１７０出土遺物（第42図）

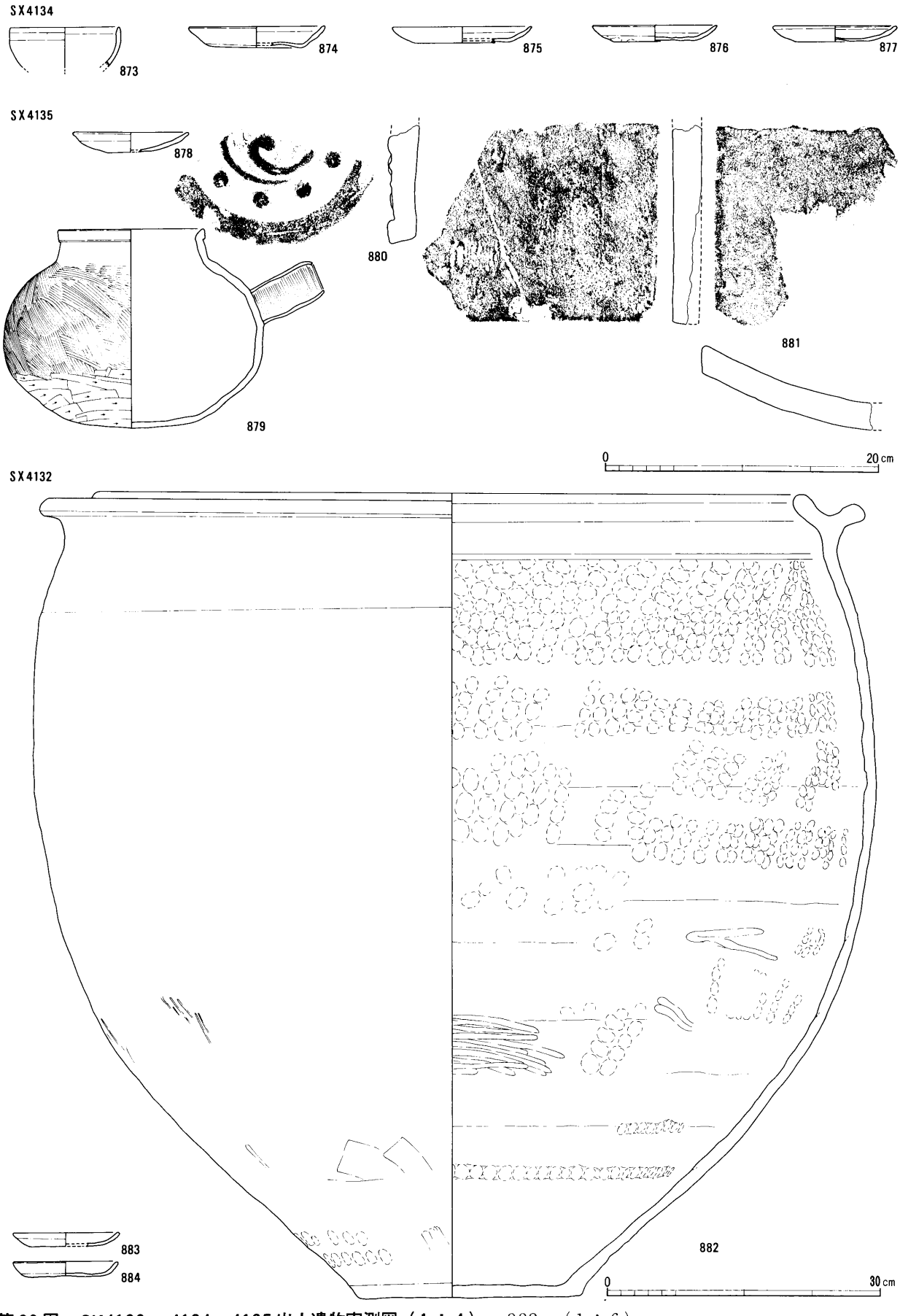
図示したもののほとんどが前時代の混入で、近世に属するものは、土師器鉢(923･924)、磁器の皿(931)だけである。(923･924)は出土例の少ないもので、土師器ではあるが、橙色を呈し硬質に焼成されている。(923)の底部内顔面はヘラケズリするが、(924)には認められない。

(919～921)は土師器の皿、(922)は椀、(925～930)は鍋、(932)は紡錘車である。(932)は(922)と同器種の底部を転用している。

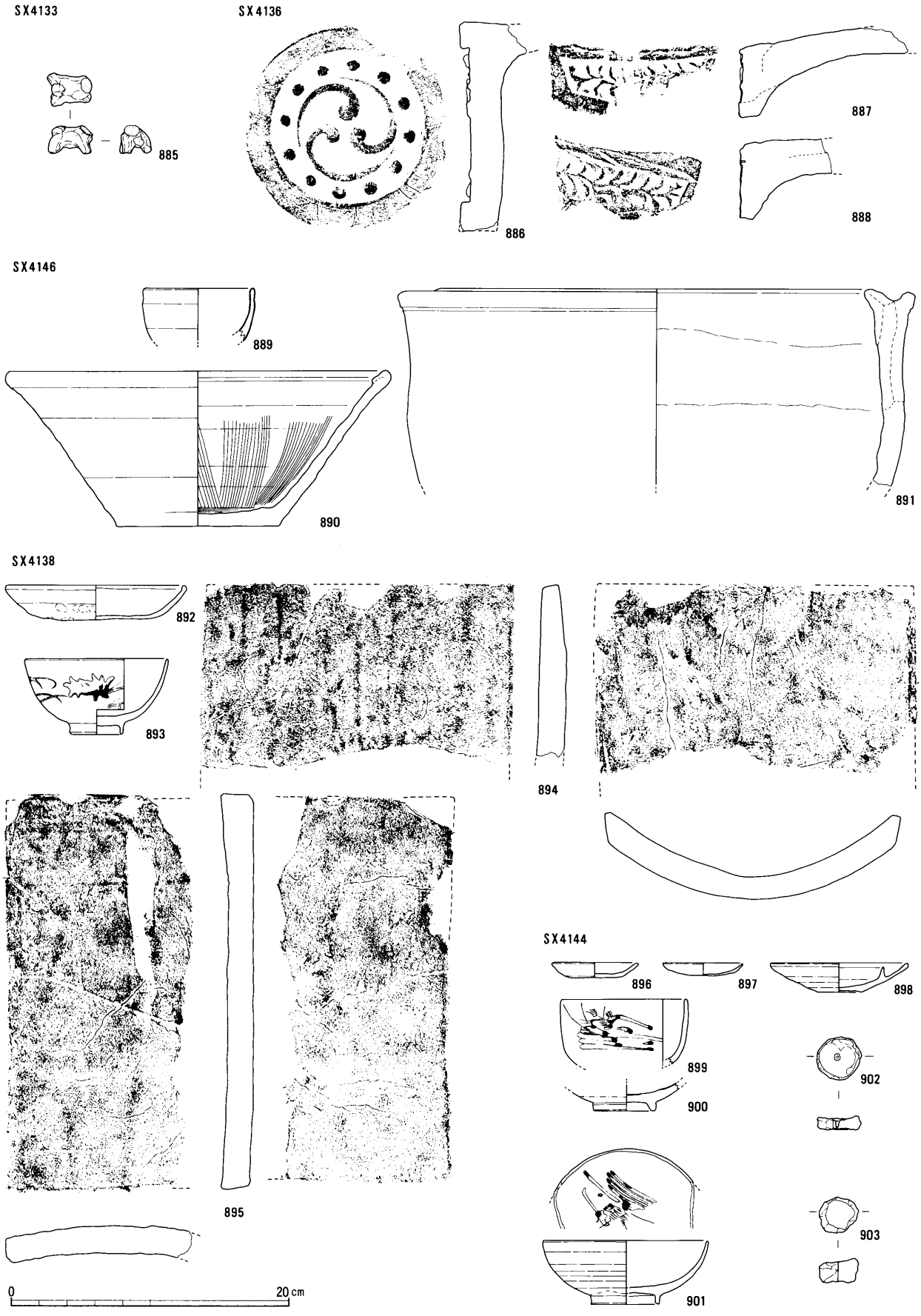
K．ＳＥ４１４９出土遺物（第42図）

図示したものは、風字硯(933)のみである。素材は、粘板岩である。

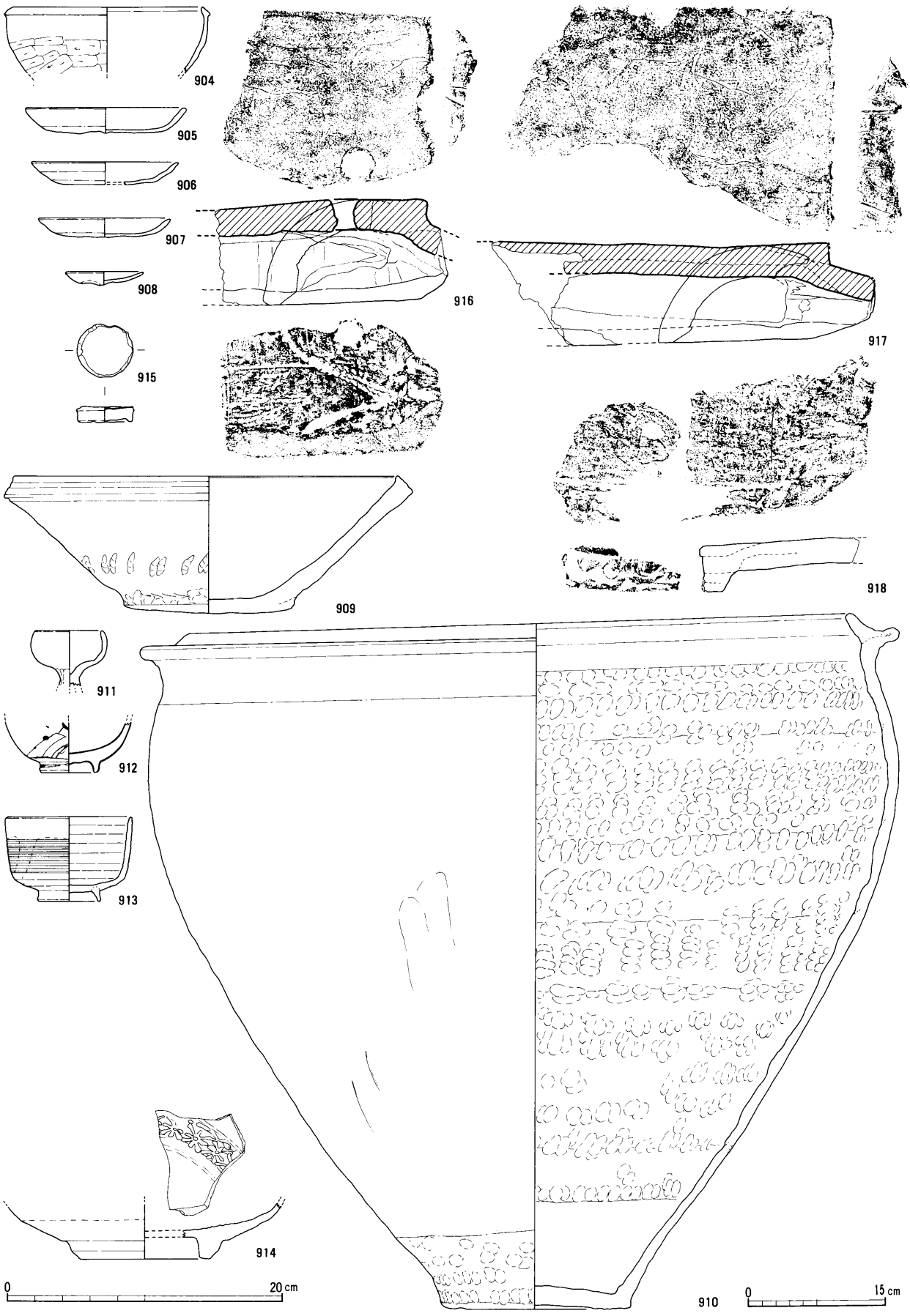
L．ＳＺ４１９５出土遺物（第42図）



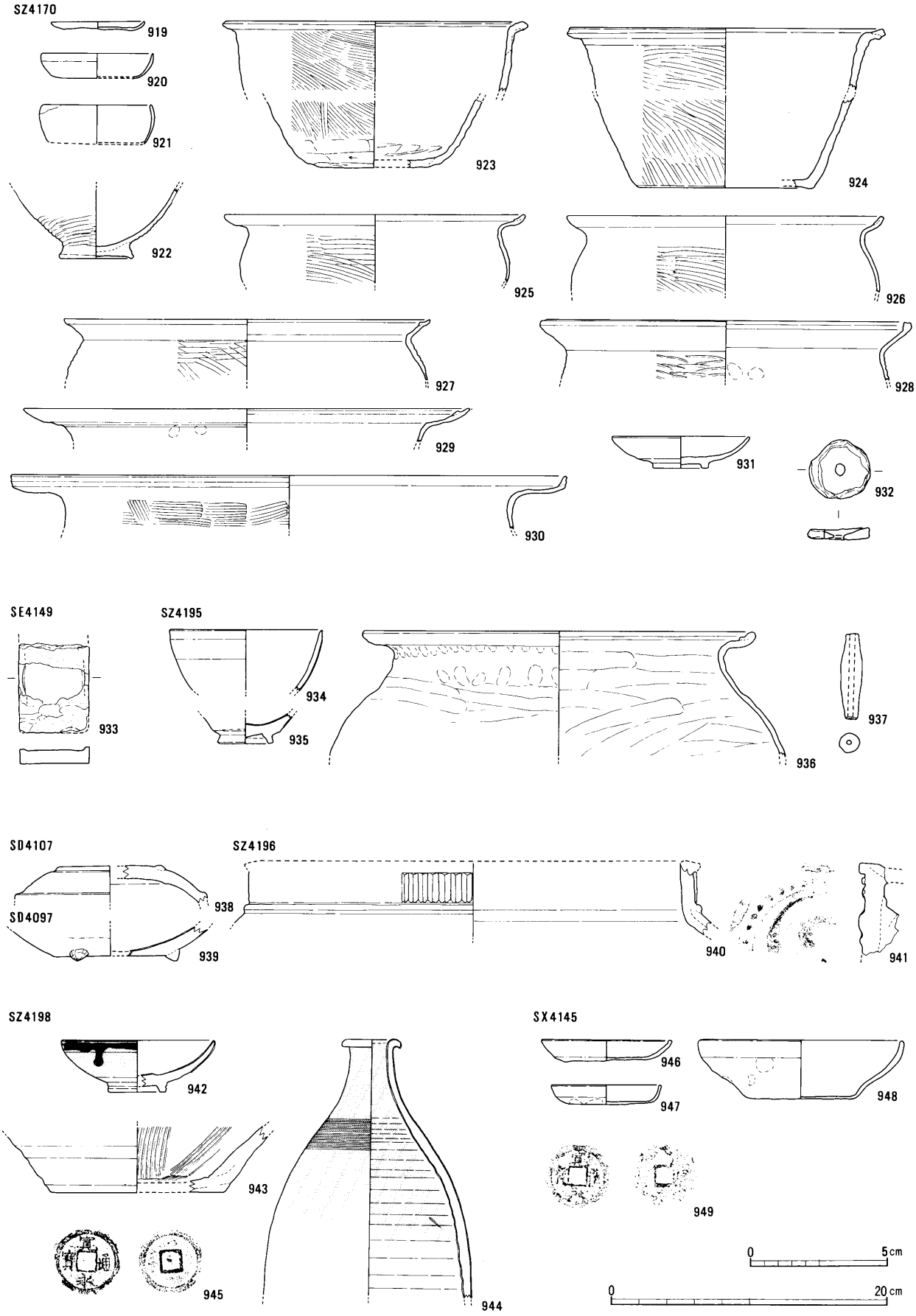
第39図　SK4132・4134・4135出土遺物実測図（1：4）　882=（1：6）



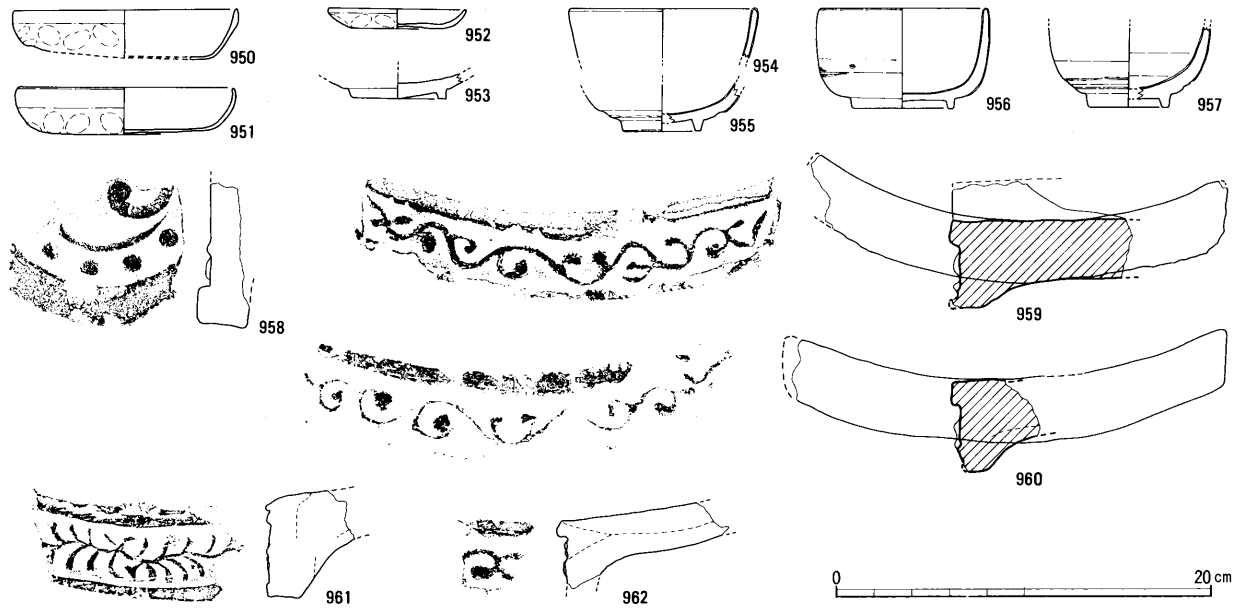
第40図　SK4133・4136・4138・4144・4146出土遺物実測図（1：4）



第41図　SX4148出土遺物実測図（1：4）　910=（1：6）



第42図　SX 4145、SZ4170・4195・4196・4198、SE4149、SD4097・4107出土遺物実測図
（945・949＝1：2、他は1：4）



第43図　ＳＺ4199出土遺物実測図（１：４）

(934)は磁器の椀、(935)は近世陶器椀底部で、天目茶椀の可能性がある。(936)は土師器鍋で、中世前半に遡るもので、明らかに混入遺物である。土錘(937)も混入遺物と考えられるが、確証はない。

M．ＳＤ４１０７出土遺物（第42図）

図示したものは近世陶器(938)のみである。蓋と推測するが、確証はない。全面に薄い錆釉が掛かる。

N．ＳＤ４０９７出土遺物（第42図）

図示したものは近世陶器(939)のみである。豆粒状の小さな脚が3方に付くものと考えられ、鉢であろう。

O．ＳＺ４１９６出土遺物（第42図）

(940)は陶器の火舎、(941)は軒丸瓦であるが、両者とも小片のため詳細は不明である。両者ともこの時期に属する確証はなく、前時代の混入遺物の可能性もある。(941)は巴文で、珠文と圏線を配する。巴の尾は圏線に接し、珠文は推定36個で一周するものと考えられる。

P．ＳＺ４１９８出土遺物（第42図）

(942)は近世陶器の椀、(944)は徳利、(945)は銭貨で「寛永通寶」である。(942)の高台は、削り出されるが、外面に１条の沈線が巡る。

(943)は、陶器の擂鉢で、大窯I期のものと考えられ、前時代の混入品であろう。

Q．ＳＸ４１４５出土遺物（第42図）

(946～948)は土師器の皿、(949)は銭貨である。土師器は、(946)は橙色を呈する焼成良好なものであるが、(947･948)は黄色味を帯び甘い焼成であることから、中世遺物の混入であろう。銭貨は、「寛永通寶」である。

R．ＳＺ４１９９出土遺物（第43図）

(950～952)は土師器の皿、(953)は施釉陶器の椀である。いずれも前時代の混入遺物と考えられ、(953)の底部内面には直接重ね焼きの痕跡が認められる。

(954～957)は近世陶器の椀で、(955～957)の高台は削り出されたものである。

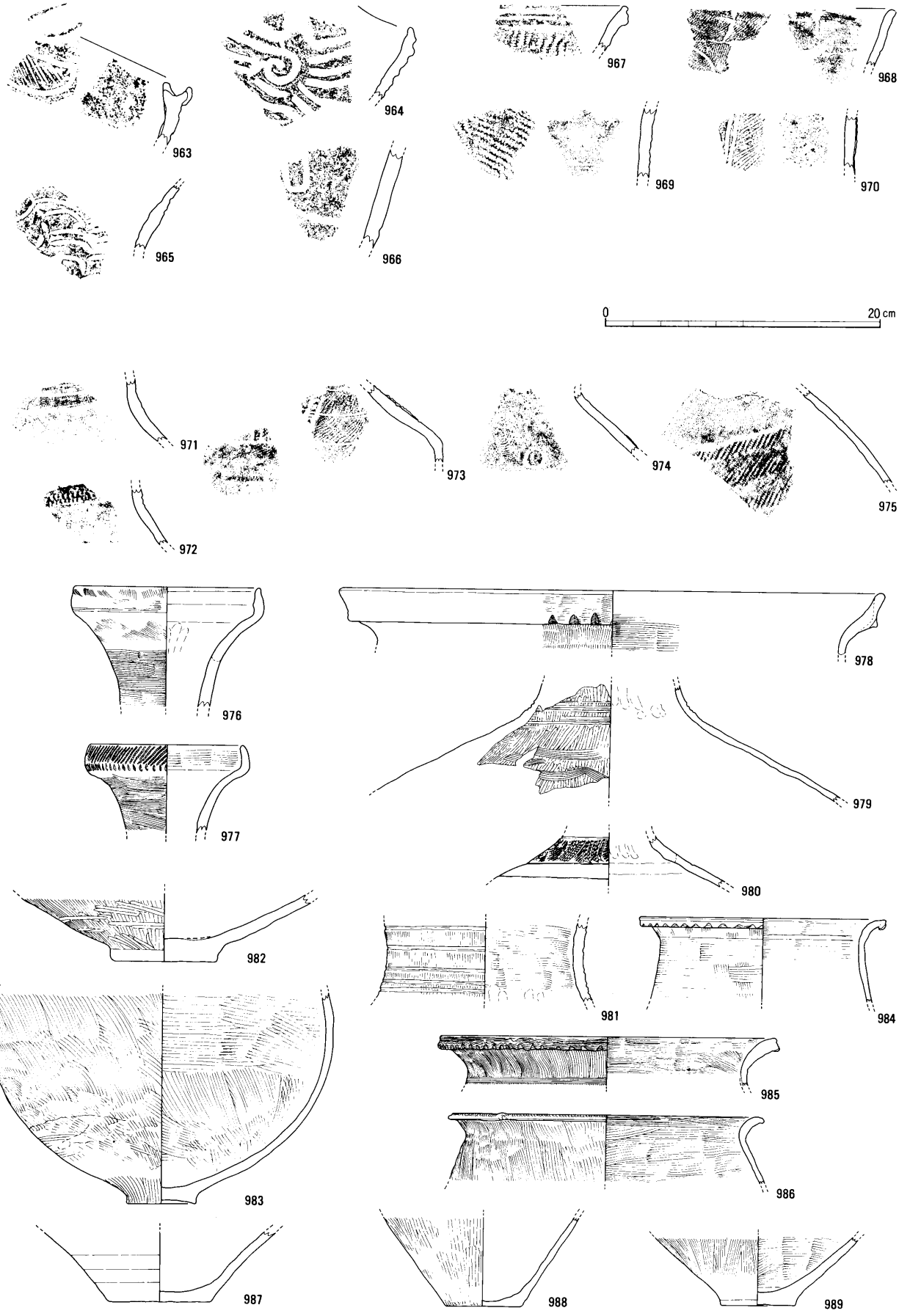
(958)は軒丸瓦、(959～962)は軒平瓦である。(958)は巴文で、珠文を配する。珠文は大粒のもので、推定12個で一周する。(959･960･962)は均整唐草文を施すが、燻しは認められず、平安時代にまで遡るものであろう。明らかに混入遺物である。

(4) 包含層出土遺物

A．縄文土器（第44図）

全て小片であり、全体の形態は不明であるが、(967)は浅鉢、(963～966･968～970)は深鉢で、(963･964)は口縁部が波状を呈するものである。

残存部の施文は、沈線で描くもの(964～966･970)、沈線による区画内に条線を施すもの(963)、縄文のもの(967･969)、縄文と沈線のもの(968)があり、多様である。全て中期末に相当するものであろう。



第44図　包含層出土遺物実測図（１：４）

B．弥生土器（第44図）

全て小片であり、全体の形態は不明であるが、(971～977･979～983)は壺、(984～986･989)は甕である。(978)は小片からの復元のため、口径等に不明確な部分が多いが、一応、甕としておく。(987･988)も甕の底部と考えられるが、(987)はナデ、(988)はヘラミガキで調整する。

壺には施文に縄文を用いるもの(973･975･977･980)が多くあり、濃尾平野方面の影響がうかがえる。

中期後半に相当するものと考えられるが、(971)はヘラによる沈線が施され、古相を示す。逆に(983)は、後期あるいは古式土師器まで降る可能性がある。

C．土師器（第45図）

皿　口径10cm以下の小型のもの(990～997)と15cm前後の大型のもの(998～1003)がある。

小型のものは、比較的厚手で器高が低いもの(990～993)、薄手で内弯する口縁部をもつもの(994･995)、橙色を呈し焼成良好なもの(997)がある。(990～993)は中世前半、(994･995)は中世後半、(997)は近世に属するものであろう。

大型のものは、内弯する口縁部をもつもの(998～1002)、大きく弯曲する口縁部で、鉢状の形態を呈するもの(1003)があり、前者は、比較的厚手のもの(998･1000･1002)と薄手のもの(999･1001)に分かれる。

甑　(1004)のみである。他の土師器よりかなり先行するものである。古墳時代後半から奈良時代までのものであろう。

鍋　胴部の張りが強いもの(1005～1009･1011)と張りのないもの(1010･1012･1013)がある。時期的には、(1005)が中世前半、その他は中世後半に属するものであろう。外面はハケメで調整するが、(1005･1010)はナデである。内面の調整は、全てナデであるが、工具を用いるものが多い。特に(1013)は、浅いハケメとすることもできる。

鉢　(1014)のみである。SZ4170出土のものと同様で、近世に属すると考えられる。内面全面に炭化物が付着しており、煮沸に使用されているようである。

羽釜　(1015)のみである。口径20cmで、この器種としては、小型のものである。

茶釜　(1016･1017)がある。図示していないが、(1017)にも一対の把手が付く可能性がある。(1017)の肩部には1条の浅い沈線が巡るが、1周に満たない。

D．須恵器（第46図）

蓋(1018)と杯(1019)を図示したにとどまり、全体の出土量は極めて少ない。蓋は、天井部と口縁部の境が明瞭で、鋭い稜をもつ。杯の口縁部も高く立ち上がり、両者の時期差は小さいものと考えられる。

E．山茶椀（第46図）

椀(1020～1022)と皿(1023･1024)がある。皿は、高台をもつ(1023)ともたない(1024)に分かれる。(1022)の低部外面には、焼成前に「妙」とヘラ書きされる。

F．白磁（第46図）

(1025･1026)があり、(1025)は玉縁状の口縁部をもつ。

G．青磁（第46図）

(1033～1037)があるが、いずれも底部片である。(1034)には、連弁文が陰刻される。

H．陶磁器（第46・47図）

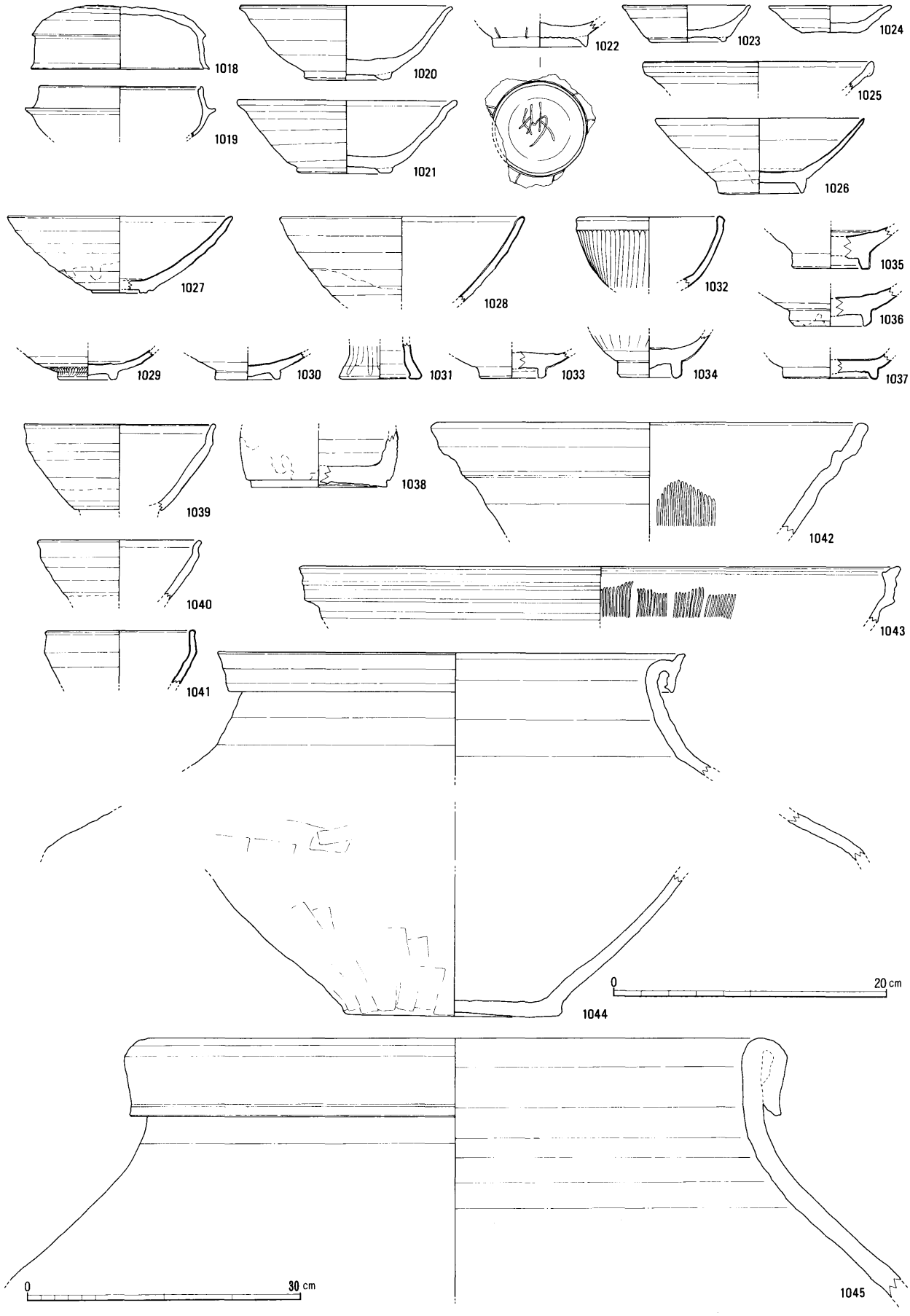
椀　(1027～1030･1032･1038～1041)は施釉陶器、(1046･1048･1049･1051)は近世陶器、(1047)は近世磁器である。(1032)は連弁文椀で16世紀初頭、(1038)は筒形椀、(1039～1041)は天目茶椀、(1047)は染付椀、(1049･1051)は丸椀で、(1041)は18世紀、(1049)は19世紀に降るものと考えられる。高台は、残存するものについては全て削り出しによる。

皿　(1050･1052)があり、(1050)は磁器、(1052)は陶器である。(1052)は灯明皿と考えられ、両者とも近世に属するものであろう。

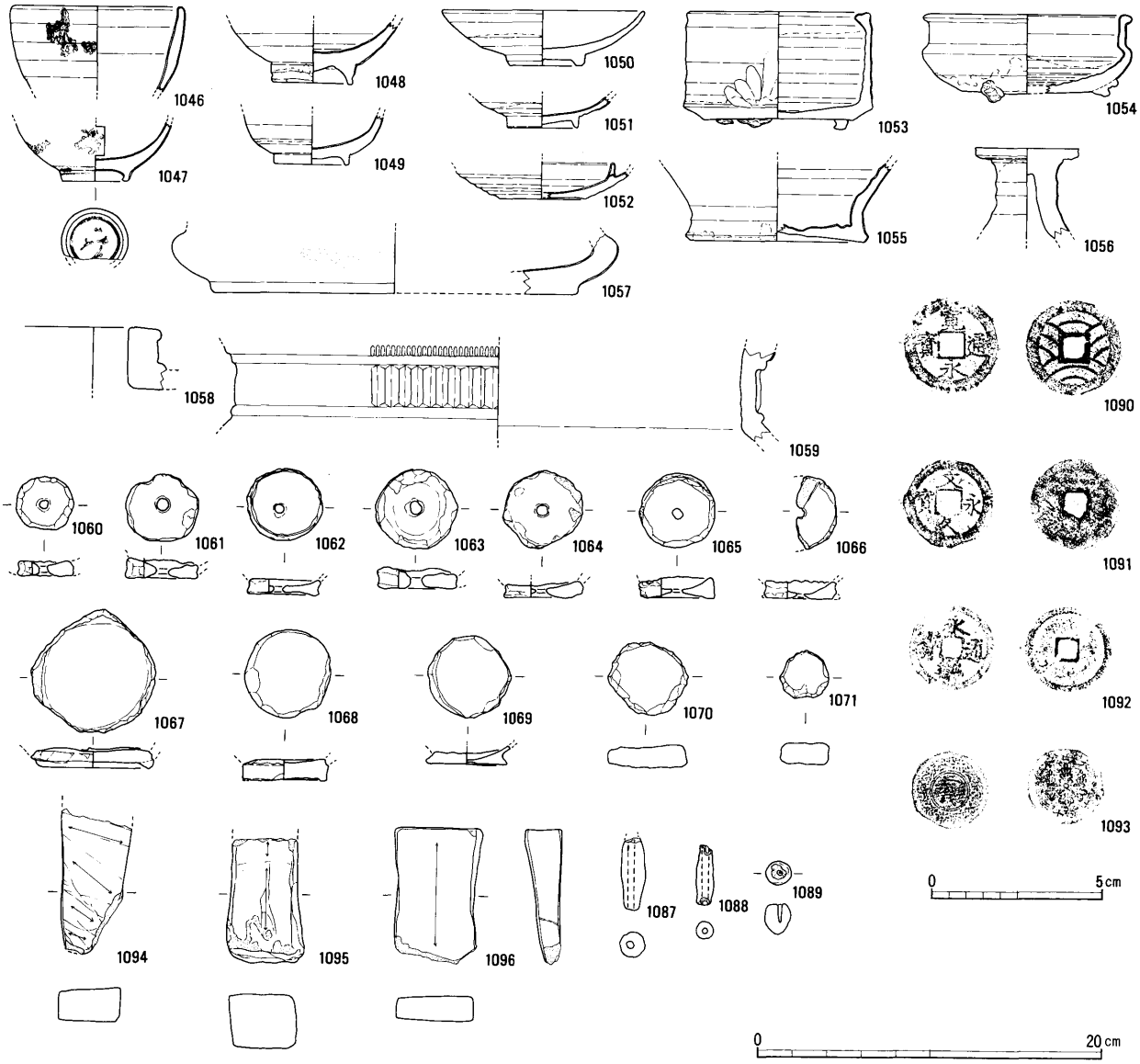
擂鉢　(1042･1043)がある。両者とも近世に属するものと考えられ、(1042)は18世紀後半に降るものであろう。

甕　(1044･1045)がある。両者とも口径40cm以上を測る大型のものであるが、(1044)は口縁部の縁帯が頚部と離れるが、(1045)は接するものである。(1044)は体部外面底部近くを縦方向のヘラケズリで調整する。前者は鎌倉、後者は室町時代に属するものか。

第45図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第46図　包含層出土遺物実測図（1：4）　1044・1045＝（1：6）



第47図　包含層出土遺物実測図（1：4） 1090～1093＝（1：2）

香炉　(1053·1054)がある。体部の形態は異なるが、両者とも短い脚が3方に付く。(1053)は、内外面にトチンの痕跡が認められる。(1054)は15世紀、(1053)は18世紀まで降るものと考えられる。

鉢　(1055·1057)があるが、全体の形態が不明なため、鉢とするに不正確である。両者とも近世に属するもので、仏具として利用されたものかもしれない。(1055)の内面にはトチンの痕跡がある。

燭台　(1031·1056)がある。両者とも脚部片で、(1056)は組合式である。(1031)は施釉陶器、(1056)は近世陶器である。

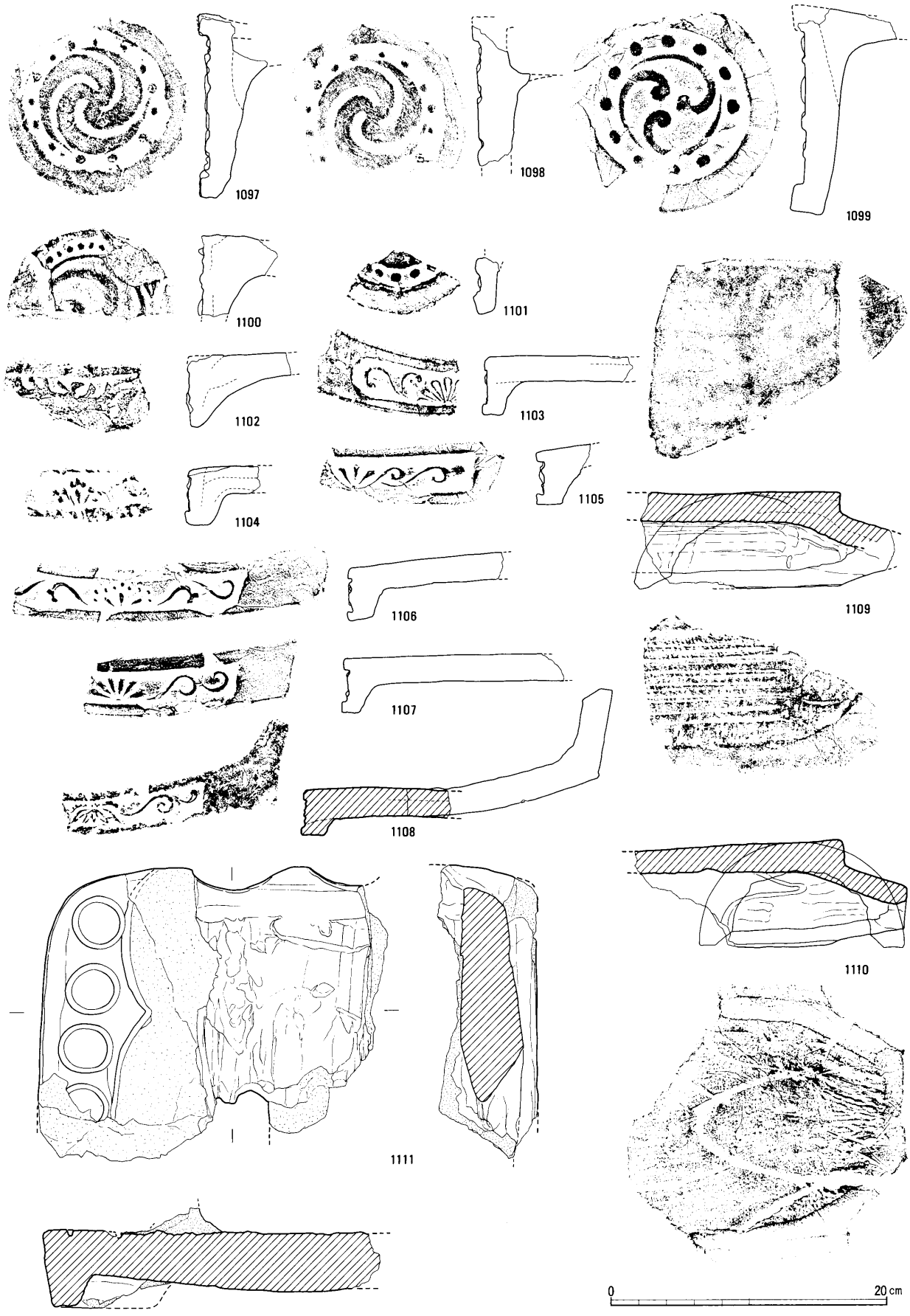
I．瓦器（第47図）

(1058·1059)があるが、両者とも火舎である。両者とも小片のため、詳細は不明である。

J．土製品（第47図）

紡錘車　(1060～1066)があるが、全て土師器椀底部を転用したものである。加工円盤の中央部に穿孔したもので、紡錘車とする確証はない。転用前の底部径をそのまま利用しているが、(1060)だけは周囲を打ち欠いて径を小さくしている。

加工円盤　20個出土しているが、図示したものは(1067～1071)の5基で、他のもの(1072～1086)は、写真と観察表のみを掲載した。陶器甕の胴～頸部を転用したものが最も多く10個(1070～1072·1075·1076·1079～1081·1083·1085)、次に土師器**椀**　(1069·1073·1078)と天目茶椀(1068·1077·



第48図　包含層出土遺物実測図（1：4）

1082)の底部で3個である。他には、陶器鉢の口縁部(1086)、山茶椀底部(1067)、土師器甕胴部(1074)、ロクロ土師器椀底部(1084)がある。直径や重量には統一を欠く。

土錘　(1087・1088)がある。両者とも端部を欠損する。

土玉　(1089)のみである。一応、土玉としたが確証はない。直径2㎜の孔を設けるが、貫通しない。

K．銭貨（第47図）

(1090)は「寛永通寶」、(1091)は「文久永寶」、(1092)は「永楽通寶」、(1093)は一銭玉で大正十年の銘がある。

L．石製品（第47図）

(1094～1096)の3点あり、全て砥石である。

M．瓦（第48図）

(1097～1101)は軒丸瓦、(1102～1107)は軒平瓦、(1108)は隅軒平瓦、(1109・1110)は丸瓦、(1111)は鬼瓦である。

軒丸瓦は、小片の(1101)を除き、全て珠文と左巻巴文で、(1100)のみ圏線をもつ。(1097・1098)は、巴の頭が連結し、断面台形を呈するもので、鎌倉時代にまで遡るものと考えられる。(1099・1101)は燻し焼きされ、近世に属するものであろう。

軒平瓦・隅軒平瓦は、全て燻し焼きされ、近世に属するものと考えられる。文様は、詳細の不明な(1102)を除き、全て均整唐草文であるが、中心飾や唐草の形態がそれぞれ異なる。

丸瓦は、両者とも玉縁をもつものであるが、(1110)の凹面には吊り紐の痕跡が明瞭であるのに対し、(1109)は細い叩き痕である。

鬼瓦は、鬼面の部分が欠損している。松坂城本丸から類似のものが出土している。

[註]

①．調査担当の田阪仁氏の御教示による。
②．西田尚史　『松坂城本丸土段発掘調査報告書』　松阪市教育委員会　平成4年3月

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
356	496-10	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	13.5	2.9		外：未調整 内：ナデ	4mm以下の小石粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	指頭圧痕・粘土紐接合痕明瞭
357	496-11	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	13.8	2.5		外：未調整 内：ナデ	2mm以下の小石粒含	良	褐灰(7.5YR6/1) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/5	外面ヘラ状工具痕跡
358	496-09	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	14.2	2.8		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	3/4	外面一部に墨圧痕
359	496-01	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	8.0	1.7		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	不良	灰白(2.5Y7/1) ～黄灰(7.5Y4/1)	完形	指頭圧痕・粘土紐接合痕明瞭
360	496-04	SX4026	G-104 P7 No. 3	土師器 皿	8.3	1.7		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	やや不良	灰白(10YR8/2) ～褐灰(10YR6/1)	1/2	指頭圧痕明瞭
361	496-02	SX4026	G-104 P7 No.1, No.4	土師器 皿	9.0	1.7		外：未調整 内：ナデ	2mm以下の小石粒含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3	ほぼ完形	1/4 に煤付着
362	496-03	SX4026	G-104 P7 No. 2	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	2mm以下の小石粒・植物繊維含	やや不良	灰白(10YR8/2)	完形	指頭圧痕・粘土紐接合痕明瞭
363	496-05	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	8.2	1.0		外：未調整 内：板ナデ	細砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/5	
364	496-06	SX4026	G-104 P7	土師器 皿	8.8	1.0		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	3/4	4mm以下の赤茶色の土粒点在
365	401-10	SZ4168	H-100 SD上面 No. 7	土師器 皿	15.8	3.0		ナデ	0.5 ～ 3mmの小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	ほぼ完形	
366	401-06	SZ4168	H-100 SD上面 No. 4	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：回転ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	2/3	口縁端部は工具によりるヨコナデ
367	401-08	SZ4168	H-100 SD上面 No. 6	土師器 皿	8.3	1.6		外：乱方向ナデ 内：回転ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	
368	401-04	SZ4168	H-100 SD上面 No. 2	土師器 皿	8.3	1.6		外：未調整 内：回転ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4) ～黄橙(2.5Y8/4)	完形	内外面剝離激しい
369	401-07	SZ4168	H-100 SD上面 No. 5	土師器 皿	8.6	1.6		外：乱方向ナデ 内：一方向ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	
370	401-03	SZ4168	H-100 SD上面 No. 1	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：回転ナデ	0.5 ～1.5 mmの小石含	良	灰白(10YR8/2) ～浅黄橙(10YR8/4)	完形	粘土紐接合痕明瞭、内外面剝離激しい
371	401-09	SZ4168	H-100 SD上面 No. 8	土師器 皿	8.2	1.3		外：未調整 内：回転ナデ	0.5 ～2 mmの小石含	良	灰白(10YR8/1)	完形	外面煤付着、口縁部外面浅い沈線
372	401-05	SZ4168	H-100 SD上面 No. 3	土師器 皿	8.5	1.0		外：未調整 内：回転ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	完形	口縁部外面浅い沈線
373	487-02	SD4131	E－99 SD131	土師器 皿	14.0	2.1		外：未調整 内：ナデ	2mmの砂粒含	良	明黄褐(10YR7/6)	1/4	指頭圧痕明瞭
374	487-04	SD4131	E－99 SD131	土師器 皿	9.6	1.1		外：未調整 内：ナデ	1mmの砂粒多含	良	浅黄(2.5Y7/3)	1/3	粘土紐接合痕明瞭
375	484-03	SD4131	E－99 SD131	土師器 皿	9.0	1.1		外：未調整 内：ナデ	2mmの砂粒植物繊維含	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	
376	487-03	SD4131	E－99 SD131	ロクロ土師器 皿	8.6	1.9	底径 4.2	ロクロナデ 底：糸切り痕	4mmの小石含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/2	
377	487-05	SD4131	E－99 SD131	ロクロ土師器 皿	8.7	1.5	底径 4.5	ロクロナデ 底：糸切り痕	4mmの小石含	不良	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1/8	磨滅が激しい
378	486-05	SD4131	E－99 SD131	山茶椀 小椀	—	—	高台径 4.4	ロクロナデ 底：糸切り痕？	精良	良	灰白(7N)	底部完存	内面自然釉が厚く掛かる
379	491-01	SD4101	F－99 SD101	土師器 椀	13.2	3.4		外：未調整 内：ナデ	1mmの砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	底部外面に墨書「宇」か「中」
380	477-04	SD4101	F-102 SD101	土師器 杯	16.4	3.3	底径 10.6	ナデ	細砂粒・植物繊維含	良	橙(5YR7/6)	底部 1/4	
381	477-05	SD4101	F-100 SD101	土師器 皿	9.7	1.3		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	橙(7.5YR7/6)	2/3	粘土紐接合痕明瞭
382	491-03	SD4101	E-105 SD101	山茶椀 椀	—	—	高台径 6.2	ロクロナデ	やや粗	良	灰白(5Y7/2)	底部 1/4	
383	491-02	SD4101	E-105 SD101	土師器 土錘	1.5	4.5	残存重 7.9	ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	穴径 0.4cm
384	356-02	SD4101	F-102 SD101	縄文土器 深鉢	—	—		外：条痕・ヘラケズリ 内：ナデ	3mmの砂粒含	良	外：にぶい黄褐(10YR5/3) 内：灰白(10YR8/2)	口縁部小片	口縁端部に刻目 内面に沈線１条
385	477-01	SD4101	E-102 SD101	須恵器 蓋	14.2	4.5		ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	5mmの小石含	良	灰(N5/0)	1/2	ロクロ右回転
386	477-07	SD4130	E－99 SD石列の横	土師器 皿	14.4	2.1		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	やや不良	灰白(2.5Y8/2) ～黄灰(2.5Y5/1)	1/8	

第10－1表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
387	479 -02	SD4130	E－99 SD石列の横	土師器 皿	8.6	1.6		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	3/4	
388	446 -02	SK4127	D-106 SK127	ロクロ土師器 椀	16.0	3.5	底径 6.6	ロクロナデ 底：糸切り未調整	2㎜の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/2	
389	445 -01	SK4127	D-106 SK127	ロクロ土師器 皿	8.7	1.9	底径 3.8	ロクロナデ 底：糸切り未調整	1.5㎜ の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	
390	477 -03	SD4095	G-105 SD95	土師器 皿	15.5	3.3		外：未調整 内：ナデ	2.5㎜ 以下の小石粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	完形	粘土紐接合痕、指頭圧痕明瞭
391	436 -08	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	17.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	1.5 ～2㎜ の小石粒含	やや不良	褐灰(10YR5/1) ～浅黄橙(10YR8/3)	1/6	指頭圧痕明瞭 外面黒斑
392	437 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	17.6	2.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(5YR7/6) ～浅黄橙(10YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭 一部赤変
393	407 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.9	3.1		外：未調整 内：ナデ	0.5㎜ 以下の小石粒含	良	にぶい橙(5YR7/4) ～淡橙(5YR8/4)	完形	
394	377 -02	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	17.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	不良	淡黄(2.5Y8/3)	2/3	粘土紐接合痕、指頭圧痕明瞭
395	479 -01	SD4190	E－99 落ち込みの下SD	土師器 皿	16.3	3.0		外：未調整 内：ナデ	5㎜ 以下の砂粒含	良	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：淡橙(5YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
396	442 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	17.0	2.5		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	淡橙(5YR8/4)	1/4	
397	440 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.1		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	淡橙(5YR8/4)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
398	438 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	17.0	3.4		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ 以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	
399	440 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の砂粒多含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/3	
400	444 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	3㎜ 以下の砂粒含	良	淡橙(5YR8/4) ～灰白(10YR8/2)	1/4	外面一部赤変 指頭圧痕明瞭
401	442 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.7		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
402	378 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	2/3	
403	441 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.9	3.0		外：未調整 内：ナデ	1.5 ㎜以下の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭
404	443 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
405	367 -05	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	16.6	2.9		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	内外面墨書絵画？
406	442 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.0		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/2	指頭圧痕・粘土紐接合痕明瞭
407	444 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.1		外：未調整 内：ナデ	0.5 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～淡橙(5YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭
408	444 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒含	やや不良	黄灰(2.5Y6/1)	1/4	指頭圧痕明瞭
409	440 -04	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭
410	415 -09	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.1		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(5YR7/3)	1/3	口縁部外面に強い指頭圧痕
411	440 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	1.5 ㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部に粘土紐接合痕
412	414 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.8	3.2		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3) ～灰(5Y5/1)	4/5	指頭圧痕明瞭
413	416 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	3.0		外：未調整 内：ナデ	砂粒、植物繊維含	不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭 口縁部外面に沈線
414	404 -07	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	0.5 ㎜以下の小石粒含	良	にぶい橙(7.5Y7/4) ～褐灰10YR(5/1)	3/4	
415	414 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.9	2.9		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(5YR7/6)	1/2	
416	444 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.1		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	橙(5YR7/6)	1/3	
417	404 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.1	3.0		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の小石含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	完形	
418	441 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.9		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
419	415 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.8	3.2		外：未調整 内：ナデ	砂粒、植物繊維含	やや不良	外：浅黄橙 (7.5YR8/3) ～明褐(7.5YR5/8) 内：灰白(7.5YR8/2)	1/4	指頭圧痕明瞭

第10－2表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
420	443 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.3		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部内面一部赤変
421	434 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.3	3.2		外：未調整一部簡単なナデ 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	不良	灰白(2.5Y8/2)	2/3	外面に黒斑
422	416 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.3		外：未調整 内：ナデ	砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	
423	415 -06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.8	2.7		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/3	粘土紐接合痕明瞭
424	442 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.8		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
425	416 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/5	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
426	443 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 口縁部外面黒斑
427	444 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	1.5 ㎜以下の砂粒植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 底部外面黒斑
428	378 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	3.3		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(5YR6/4) ～灰白(7.5YR8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭
429	442 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.0		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良	淡橙(5YR8/4)	1/4	底部に粘土紐接合痕
430	415 -08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.2	2.6		外：未調整 内：ナデ	3.5㎜ 以下の小砂粒含	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	1/2	口縁部外面に強い指頭圧痕
431	377 -03	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.9		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(5YR7/4)	1/5	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
432	443 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.3		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部一部赤変
433	439 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	14.8	2.6		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	灰白(7.5YR8/2)	1/3	
434	433 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜の砂粒多含	良	浅黄橙(7.5YR8/4) ～淡黄(2.5Y8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
435	435 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	2.7		外：未調整 内：ナデ	0.5㎜ の砂粒多含	良	橙(7.5YR7/6)	1/4	
436	438 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.6		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	2/3	底部一部赤変
437	404 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	3.1		外：未調整一部簡単なナデ 内：ナデ	1㎜ 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～灰白(10YR8/2)	3/4	
438	416 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.7	2.6		外：未調整 内：ナデ	2.5㎜ 以下の小石粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 底部外面凹圧痕
439	433 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	14.8	1.7		外：未調整 内：ナデ	1㎜ の砂粒多含	良	外：灰黄(2.5Y8/2) ～淡黄(2.5Y8/3) 内：浅黄橙 (10YR8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
440	407 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.4		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	4/5	
441	415 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	3.5		外：未調整 内：ナデ	3㎜ 以下の小石含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/3	
442	415 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.3	2.4		ナデ	4㎜ 以下の小石、植物繊維含	やや不良	灰白(7.5YR8/2)	1/2	
443	434 -02	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.3	2.7		外：未調整 内：ナデ	3㎜ 以下の小石含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/3	指頭圧痕明瞭 外面に工具痕
444	414 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.7		外：未調整 内：ナデ	精良	やや不良	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：橙(5YR7/6)	4/5	
445	407 -01	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.4	3.0		外：未調整一部簡単なナデ 内：ナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	
446	404 -04	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.8	2.8		外：未調整一部簡単なナデ 内：ナデ	4 ㎜以下の小石含	やや不良	外：灰白(2.5Y8/2) 内：灰黄(2.5Y7/2) ～黄灰(2.5Y6/1)	3/5	
447	436 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.6	2.4		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	外：淡黄(5YR8/4) ～浅黄橙(10YR8/3) 内：淡橙(5YR8/4)	1/2	
448	443 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.3		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒、植物繊維含	良	灰白(10YR8/2)	1/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 口縁部一部赤変
449	439 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒含	やや不良	明褐灰(7.5YR7/1)	1/3	

第10－3表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
450	416 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.8	3.1		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	指頭圧痕・粘土紐接合痕明瞭
451	378 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.3	3.8		外：未調整 内：ナデ	植物繊維含	良	外：にぶい橙 (7.5YR7/3) 内：淡黄(2.5YR8/3)	1/3	
452	444 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.8		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の砂粒、植物繊維含	良	淡橙(5YR8/4) ～灰白(2.5Y8/2)	1/4	
453	416 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.4	2.2		外：未調整 内：ナデ	3.5 mm以下の砂粒、植物繊維含	不良	灰白(2.5Y8/2) ～灰白(2.5Y7/1)	1/3	指頭圧痕明瞭
454	404 -03	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.7	3.0		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の小石含	良	外：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内：灰白(10YR8/2) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	2/3	底部底部外面に木の葉痕兼痕、
455	435 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	3.0		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
456	436 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	14.5	2.3		外：未調整 内：ナデ	1 ～2 mmの小石、植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/4	口縁部外面に指頭圧痕明瞭
457	442 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.1	2.1		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
458	443 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.0		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
459	440 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭
460	407 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4) ～浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	外面に爪圧痕
461	404 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.7	3.0		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の小石含	良	外：橙(2.5YR6/6) ～灰褐(5YR5/2) 内：灰褐(5YR4/2)	完形	
462	407 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.6		ナデ	2 mm以下の小石含	良	外：浅黄橙(10YR8/3) ～淡赤橙 (2.5YR7/4) 内：にぶい橙 (5YR7/4)	ほぼ完形	
463	404 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.7		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～淡橙(5YR8/4) 内：褐灰(7.5YR5/1) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	
464	441 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.0	3.0		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	2/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
465	407 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.1	3.4		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石含	良	外：橙(2.5YR6/6) ～浅黄橙(7.5YR8/3) 内：浅黄橙 (10YR8/3)	完形	外面外面に工具痕、繊維繊維痕
466	433 -03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	14.6	2.7		外：未調整 内：ナデ	2 mmの砂粒多含	やや不良	淡黄(2.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
467	433 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	14.6	2.4		外：未調整 内：ナデ	3 mmの小石含	不良	黄橙(10YR8/6)	1/2	指頭圧痕明瞭 剝離が激しい
468	415 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.4	2.9		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
469	436 -04	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	14.6	2.2		外：未調整 内：ナデ	1 ～2.5 mmの小石含	良	外：浅黄橙(10YR8/3) ～浅黄橙(10YR8/4) 内：淡黄(2.5Y8/3)	2/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
470	433 -04	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
471	433 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	3.1		外：未調整 内：ナデ	1 mmの砂粒多含	良	黄橙(10YR7/8)	1/2	指頭圧痕明瞭
472	440 -03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	16.0	—		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の砂粒含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
473	440 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	3.5		外：未調整 内：工具ナデ	植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/2	外面粘土紐接合痕明瞭、内面工具痕
474	415 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.2	2.9		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	不良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～灰褐(7.5YR4/2)	4/5	内面沈線1 条、煤付着 外面ヘラ状工具痕
475	435 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.7		外：未調整 内：ナデ	4 mmの小石含	良	淡黄(2.5YR8/4)	1/3	
476	407 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.8	2.3		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の小石含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/3) 内：にぶい橙(7.5YR7/3) ～灰褐(7.5YR5/2)	3/5	底部外面に繊維痕
477	436 -07	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.8		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
478	435 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	14.6	2.6		外：未調整 内：ナデ	1.5mm の砂粒多含	やや不良	にぶい黄橙 (10YR7/3)	1/4	指頭圧痕明瞭

第10－4表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
479	436-06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	13.8	2.8		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙（10YR8/4）	1/2	粘土紐接合痕明瞭
480	435-03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	精良	やや不良	淡黄（2.5Y8/4）	1/3	底部に黒斑
481	377-01	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	14.3	3.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	不良	にぶい黄橙（10YR7/2）	1/2	指頭圧痕明瞭
482	438-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	やや不良	浅黄橙　（7.5YR8/3）	1/8	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 底部に黒斑
483	438-05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	14.0	2.3		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙（7.5YR8/3）	1/4	指頭圧痕明瞭
484	436-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.4	2.8		外：未調整 内：ナデ	3㎜の小石植物繊維含	良	浅黄橙（7.5YR8/3）～浅黄橙（7.5YR8/4）	2/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
485	414-01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	14.4	2.7		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄（2.5Y8/3）	ほぼ完形	外面にヘラ状工具による沈線
486	438-06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	14.0	2.6		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙（2.5YR7/6）～浅黄橙（7.5YR8/3）	1/4	指頭圧痕明瞭
487	435-04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	13.6	2.8		外：未調整 内：ナデ	0.5 ㎜の砂粒若干含	やや不良	外：橙（5YR7/6） 内：浅黄橙（10YR8/4）	1/3	指頭圧痕明瞭 黒斑あり
488	378-01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.5	2.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙（10YR8/3）	1/2	指頭圧痕明瞭
489	404-05	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	15.4	3.0		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の小石含	良	にぶい橙（7.5YR7/3）～にぶい橙（7.5YR7/4）	3/5	口縁端部内面沈線2条
490	436-02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	16.0	3.1		外：未調整 内：ナデ	1 ～2 ㎜の小石含	良	外：淡黄（2.5Y8/3） 内：褐灰（10YR5/1）～灰白（2.5Y8/2）	1/2	口縁端部内面沈線1条
491	441-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	14.4	—		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙（7.5YR8/3）	1/2	指頭圧痕明瞭 内面沈線一条
492	441-06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.5		外：未調整 内：ナデ	0.1㎜ の砂粒含	良	灰白（10YR8/2）	2/3	口縁部2 段ナデ状
493	441-02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.8	3.4		ナデ	1.5㎜ 以下の砂粒含	良	灰白（7.5YR8/2）	1/3	
494	415-07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	15.8	2.2		ナデ	細砂粒、植物繊維含	やや不良	にぶい橙（7.5YR7/3）～褐灰（7.5YR5/1）	1/4	
495	407-02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.4		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ 以下の小石含	やや不良	外：灰白（5YR8/2）～灰（5Y4/1） 内：灰白（7.5YR8/2）～黄灰（2.5Y5/1）	4/5	底部外面黒斑 内面に枝先によるナデ痕？
496	440-08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	15.6	2.1		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	浅黄橙（10YR8/3）	1/2	
497	411-02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.7	1.0		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白（2.5Y8/2）	ほぼ完形	
498	432-01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.0		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	やや不良	淡黄（2.5Y8/3）	1/3	
499	422-07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.0		外：未調整 内：ナデ	3 ㎜以下の小石含	やや不良	淡黄橙（7.5YR8/3）	ほぼ完形	
500	421-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	0.8		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙（7.5YR8/3）	完形	
501	410-01	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.0		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白（10YR8/2）	ほぼ完形	
502	423-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	0.8		外：未調整 内：ナデ	5 ㎜の小石粒含	良好	淡黄（2.5Y8/3）	完形	
503	423-02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	0.9		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙（7.5YR8/4）	完形	口縁端部外面に工具ナデ
504	432-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.0		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒含	やや不良	淡黄（7.5Y8/3）	1/4	
505	380-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	10.8	1.1		ナデ	4 ㎜以下の小石含	良	灰白（10YR8/1）～にぶい橙（10YR7/3）	1/8	内外面墨書による絵画？
506	420-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.3		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	不良	灰白（10YR8/2）	完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
507	417-05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄（2.5Y8/4）	1/3	
508	423-07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	やや不良	黄灰（2.5Y6/1）	ほぼ完形	底部外面に煤付着
509	418-05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	5 ㎜の小石含	良	淡黄（5Y8/3）～灰（10Y5/1）	2/3	
510	419-10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.2		外：未調整 内：ナデ	3.5㎜ 以下の小石、植物繊維含	不良	淡黄（2.5Y8/3）	完形	
511	418-09	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	9.4	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰黄（2.5Y7/2）～黄灰（2.5Y5/1）	1/3	

第10－5表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
512	411 -01	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.1		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
513	420 -10	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.4		外：未調整 内：ナデ	砂粒含	不良	灰白(2.5Y8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭 底部外面に凹圧痕
514	428 -04	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.0		外：未調整 内：ナデ	1 mmの小石含	良	外：灰白(10YR7/1) ～浅黄橙(10YR8/3) 内：淡黄(2.5Y8/3)	1/2	粘土紐接合痕明瞭 口縁部に黒斑
515	424 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭 歪みが激しい
516	418 -10	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.3		外：未調整 内：ナデ	2 mmの砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4) ～橙(7.5YR7/6)	1/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
517	425 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.3		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒含	やや不良	黄灰(2.5Y5/1) ～淡黄(2.5Y8/3)	2/3	
518	432 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	粘土紐接合痕明瞭
519	428 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.3	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
520	410 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.2		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	淡橙(5YR8/4)	ほぼ完形	
521	418 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.6	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3) ～灰白(10Y7/1)	1/3	指頭圧痕明瞭
522	409 -07	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(5Y8/3)	ほぼ完形	
523	431 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の砂粒含	良	淡黄橙(7.5YR8/4)	1/4	一部赤変
524	403 -23	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の小石含	良	灰白(10YR8/2) ～浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
525	425 -12	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	橙(5YR7/6)	3/4	指頭圧痕明瞭
526	403 -11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.2		外：未調整 内：ナデ	0.5mm 以下の小石含	良	灰白(2.5Y8/2) ～灰白(10YR8/2)	完形	指頭圧痕明瞭
527	428 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.1		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/2	口縁部黒変
528	421 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.1		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の砂粒含	良好	灰白(10YR8/2)	完形	口縁端部外面工具ナデ
529	434 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	2.5 mm以下の小石含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭 内面工具痕
530	429 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.0		外：未調整 内：ナデ	2mm の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3) ～褐灰(10YR6/1)	1/4	外面工具痕
531	423 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.2		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	良好	淡黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形	
532	432 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.6	1.2		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/3	
533	432 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.1		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭
534	418 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2) ～灰(N6/1)	1/3	口縁端部黒変
535	424 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.3		外：未調整 内：ナデ	1 mmの砂粒含	良	淡黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
536	403 -16	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～橙(5YR6/6) 内：橙(5YR6/6) ～浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
537	413 -09	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	
538	426 -02	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/3	指頭圧痕明瞭
539	403 -21	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.7		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石含	良	外：灰白(7.5YR8/1) ～浅黄(2.5OY7/4) 内：灰白(10YR8/2)	完形	口縁端部強いヨコナデ
540	413 -04	SD4190	E－98 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.8		外：未調整 内：ナデ	砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	指頭指頭圧痕明瞭
541	418 -11	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	9.0	2.0		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/4)	2/3	指頭圧痕明瞭
542	427 -12	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.6		外：未調整 内：ナデ	精良	不良	灰白(10YR8/2) ～浅黄橙(7.5YR8/3)	3/4	底部外面黒斑 指頭圧痕明瞭
543	403 -17	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.7		外：未調整 内：ナデ	2.5mm 以下の小石含	良	灰白(10YR8/2) ～明黄褐(10YR7/6)	完形	指頭圧痕明瞭
544	417 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	2/3	
545	427 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	やや不良	灰白(7.5YR8/2)～ にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭

第10－6表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm)			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
546	425 -11	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.9		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
547	403 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3) ～灰黄(2.5Y7/2)	完形	指頭圧痕明瞭
548	410 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	口縁端部を工具によりヨコナデ
549	419 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.9		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石、植物繊維含	不良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	全体の2/3 が黒斑
550	410 -03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
551	422 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭 外面黒斑
552	426 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.6		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	灰白(7.5YR8/2) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
553	427 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.6		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(5YR7/4)	1/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
554	434 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.8		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	外面に工具痕 口縁端部に煤付着
555	420 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.7		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙 (7.5YR7/4)	完形	指頭圧痕明瞭
556	419 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.7		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
557	425 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4)	3/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
558	411 -08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良		1/2	指頭圧痕明瞭 口縁端部工具ナデ
559	430 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.7		外：未調整 内：ナデ	砂粒、植物繊維含	良	灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭、底部に黒斑、口縁部赤変
560	409 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.8		外：未調整 内：ナデ	精良	不良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭、底部全面黒斑
561	412 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.7		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/4) ～にぶい橙(7.5YR7/2)	3/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
562	403 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	2.5 mm以下の小石多含	良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	
563	424 -11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	0.5 mmの砂粒多含	良	褐灰(10YR6/1) ～にぶい黄橙(10YR7/3)	2/3	指頭圧痕明瞭
564	420 -08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.3	1.6		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石、植繊維含	不良	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 底部に黒斑
565	422 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の砂粒含	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
566	419 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/3	指頭圧痕明瞭
567	419 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.3		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
568	425 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.4	1.8		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡橙(5YR8/4)	3/4	指頭圧痕明瞭 口縁部赤変
569	409 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	粘土紐接合痕明瞭
570	426 -11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 内面に墓圧痕
571	417 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.7		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
572	403 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.1	1.6		外：未調整 内：ナデ	0.5 mm以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
573	420 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	完形	指頭圧痕明瞭
574	424 -10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.7		外：未調整 内：ナデ	1 mmの砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	
575	434 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	4/5	指頭圧痕明瞭
576	403 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	0.5mm 以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
577	403 -19	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～褐(7.5YR4/4) 内：浅黄橙(10YR8/3) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
578	411 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.7		外：未調整 内：ナデ	3mm 以下の小石含	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭

第10－7表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
579	431-06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.7		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	
580	403-15	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.7		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の小石含	良	外：灰白(7.5YR8/1)～明褐(7.5YR5/8) 内：灰白(10YR8/2)～明褐灰(7.5YR7/2)	完形	指頭圧痕明瞭、口縁端部強いヨコナデ
581	413-01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.9		ナデ	細砂粒含	良	外：灰白(10YR8/1) 内：灰白(10YR8/1)～褐灰(10YR6/1)	1/6	
582	422-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	1 mm以下の砂粒含	良好	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭 底部内面に工具痕
583	420-09	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.7		外：未調整 内：ナデ	3.5mm 以下の小石、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)～にぶい黄橙(10YR7/4)	2/3	指頭圧痕明瞭
584	412-07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の小石含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)～灰褐(7.5YR6/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
585	420-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.8		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)～灰白(7.5YR8/2)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
586	427-08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石、植物繊維含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)～浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭（爪）圧痕明瞭
587	417-06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.7		外：未調整 内：ナデ	微砂粒多含	良	淡黄(2.5Y8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
588	419-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	6 mm以下の小石含	不良	灰白(2.5Y8/2)	3/4	指頭圧痕明瞭 底部黒斑
589	425-07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.7		外：未調整 内：ナデ	3 mmの小石含	良	浅黄(2.5Y7/3)	2/3	指頭圧痕明瞭
590	403-08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.5		外：未調整 内：ナデ	2.5mm 以下の小石含	良	黄灰(2.5Y6/1)	完形	口縁端部内面強いヨコナデ
591	412-11	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.7		外：未調整 内：ナデ	2.5mm 以下の小石、植物繊維含	やや不良	灰白(2.5Y8/2)～黄灰(2.5Y5/1)	完形	指頭圧痕明瞭
592	431-07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	淡橙(5YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
593	426-08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.8		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	淡橙(5YR8/4)～灰(7.5YR8/2)	1/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭。一部赤変
594	412-01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.9		外：未調整 内：ナデ	植物繊維含	やや不良	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
595	412-03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：にぶい橙(7.5YR6/4)	1/3	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
596	427-07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	4/5	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
597	403-18	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の小石含	良	外：灰白(10YR8/2)～浅黄橙(10YR8/3) 内：淡橙(5YR8/4)～浅黄橙(10YR8/3)	完形	口縁端部外面強いヨコナデ
598	428-01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.3	1.5		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	外：浅黄橙(7.5YR8/4) 内：橙(7.5YR7/6)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭。内面に工具痕
599	410-02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭。
600	419-08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	細砂粒、植物繊維含	良	外：浅黄橙(7.5YR8/3)～にぶい橙(7.5YR7/4) 内：浅黄橙(10YR8/3)～褐灰(10YR6/1)	3/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭。
601	403-12	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.2		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭。
602	419-11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.6		外：未調整 内：ナデ	2.5mm 以下の小石、植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭。外面に工具痕
603	409-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭。
604	434-10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.7		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3)～浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭。
605	424-07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.7		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
606	429-02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5 mmの小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3)～灰白(2.5Y7/1) 内：淡黄(2.5Y8/3)～黄灰(2.5Y6/1)	1/2	外面に工具痕 底部黒斑
607	429-03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5 mmの小石含	良	にぶい黄橙（10YR7/4)内～黄灰(2.5Y5/1)	4/5	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 底部に黒煙付着
608	418-07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)～オリーブ黒(10Y3/1)	口縁部2/3 欠	指頭圧痕明瞭 内面ヘラ状工具痕

第10－8表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
609	427 -11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.7		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の小石、植物繊維含	やや不良	灰白(10YR8/2)	3/4	
610	430 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	0.5 ㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
611	412 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.3	1.7		外：未調整 内：ナデ	精良	良	外：灰白(10YR8/1) ～褐灰(10YR5/1) 内：灰白(2.5Y7/1)	2/5	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
612	420 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
613	417 -10	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	外：浅黄橙(10YR8/4) 内：淡黄(2.5Y8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
614	420 -12	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.7		外：未調整 内：ナデ	微砂粒、植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
615	425 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.9		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭 底部穿孔
616	417 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.8		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(7.5YR8/3)	4/5	指頭圧痕明瞭
617	413 -05	SD4190	E－98 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	砂粒含	良	外：にぶい橙 (7.5YR7/4) 内：灰白(10YR8/2)	2/5	粘土紐接合痕明瞭
618	403 -20	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	1.5 ㎜以下の小石含	良	外：にぶい橙(5YR7/4) ～淡黄(2.5Y8/3) 内：浅黄橙(10YR8/4) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	
619	431 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒、植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部赤変
620	412 -06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の小石含	良	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(7.5YR8/2) ～浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 口縁端部に油煙付着
621	428 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
622	420 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
623	403 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.5		外：未調整 内：ナデ	3.5 ㎜以下の小石含	不良	灰白(2.5Y8/1) ～暗灰(N3/0)	完形	大部分が黒斑
624	360 -04	SD4190	F-100 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	
625	403 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜の砂粒多含	良	灰白(10YR8/2) ～にぶい橙(5YR7/4)	完形	
626	413 -06	SD4190	E－98 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.4		外：未調整 内：ナデ	9 ㎜以下の小石含	不良	淡黄(2.5Y8/3) ～黄灰(2.5Y6/1)	1/3	
627	424 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.7		外：未調整 内：ナデ	微砂粒多含	良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	
628	422 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.3		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
629	419 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.3	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の砂粒・植物繊維含	良	灰白(10YR8/2)	完形	粘土紐接合痕明瞭
630	425 -02	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜の砂粒含	やや不良	外：灰(N6/1) 内：灰白(10YR7/1)	完形	
631	428 -03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.3		外：未調整 内：ナデ	0.5 ㎜の小石含	良	外：浅黄橙(10YR8/4) ～黄橙(10YR8/6) 内：浅黄橙(10YR8/4) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
632	412 -04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	1.5 ㎜以下の小石含	良	灰白(10YR8/2) ～灰白(10YR7/1)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
633	422 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	1 ㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
634	421 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	7.7	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 ㎜以下の小石含	良好	浅黄(2.5Y8/3)	完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
635	403 -24	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ 以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～浅黄橙(7.5YR8/4) 内：灰白(10YR8/2) ～橙(5YR6/6)	完形	指頭圧痕明瞭
636	403 -22	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	小石含	良	浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭 口縁外面に沈線1 条 口縁端部上面に浅い凹み1 ヶ所
637	426 -10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	微砂粒・植物繊維含	良	外：灰白(10YR8/1) ～にぶい橙(5YR6/6) 内：灰白(10YR8/2)	5/6	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭

第10－9表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
638	424 -08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.6		外：未調整 内：ナデ	3mm の小石含	不良	淡黄(2.5Y8/3) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
639	426 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒多含 植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
640	409 -06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.1	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
641	421 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
642	413 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		外：未調整 内：ナデ	砂粒・植物繊維含	良	外：灰白(10YR8/2) ～淡橙(5YR8/4) 内：浅黄橙(7.5YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	
643	427 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.1	1.3		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
644	412 -08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	7.9	1.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	灰白(7.5YR8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭
645	426 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.4		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石、植物繊維含	不良	灰白(2.5Y8/2) ～灰白10YR8/2)	2/3	口縁外面に沈線1 条 底部に黒斑
646	427 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～淡赤褐(2.5YR7/4)	2/3	指頭圧痕明瞭 底部一部赤変
647	434 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	3/4	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭 口縁外面に沈線1 条
648	424 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.6		外：未調整 内：ナデ	1.5mm の砂粒多含	良	淡橙(5YR8/4) ～灰白(10YR8/2)	完形	
649	430 -05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
650	403 -07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		ナデ	2.5mm 以下の小石含	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	完形	1/2 が黒斑
651	430 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	0.5mm 以下の砂粒含	良好	淡黄橙(7.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭、粘土紐接合痕明瞭
652	426 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含 赤色粒多含	良	灰白(10YR8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭、粘土紐接合痕明瞭
653	403 -10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石含	良	淡黄(2.5Y8/3) ～淡橙(5YR8/4)	ほぼ完形	
654	419 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.6		ナデ	砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/3	粘土紐接合痕明瞭
655	425 -06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	やや不良	浅黄(10YR8/4)	3/4	指頭圧痕明瞭
656	426 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	やや不良	にぶい橙(10YR7/4)	3/5	指頭圧痕明瞭
657	420 -11	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.6		外：未調整 内：ナデ	3 mm以下の小石多含。植物繊維含	不良	淡黄(2.5Y8/3)	3/4	指頭圧痕明瞭。強いヨコナデ
658	426 -09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.4		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の小石含	良	灰白(10YR8/2)	1/3	粘土紐接合痕明瞭
659	423 -08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.5		外：未調整 内：ナデ	2 mm以下の砂粒含	やや不良	灰(5/N)	3/4	指頭圧痕明瞭。
660	410 -04	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	褐灰(10YR6/1)	完形	指頭圧痕明瞭。
661	432 -07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の小石、植物繊維含	良	灰白(10YR8/2)	1/4	指頭圧痕明瞭。
662	434 -11	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(10YR7/4) ～橙(5YR6/6)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭。
663	432 -08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	0.5 mm以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭。
664	411 -03	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭。
665	412 -10	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.4		外：未調整 内：ナデ	1.5 mm以下の小石含	やや不良	外：淡橙(5YR8/3) 内：浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	
666	430 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.4		外：未調整 内：ナデ	1.5 mmの以の砂粒・植物繊維含	良	淡橙(5YR8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
667	409 -03	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙 (10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
668	426 -12	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.4		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	不良	浅黄橙 (10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部外面煤付着
669	434 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.3		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭

第10－10表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
670	425-04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	2/3	指頭圧痕明瞭 口縁部外面赤変
671	431-08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.2		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	やや不良	褐灰(7.5YR6/1)	1/2	
672	428-07	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.3		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の小石・植物繊維含	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
673	360-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/2	指頭圧痕明瞭
674	411-04	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	完形	指頭圧痕・紐接合痕明瞭 口縁部外面工具ナデ
675	421-04	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
676	411-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.6		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
677	421-01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
678	424-12	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/3)～褐灰(10YR6/1)	2/3	指頭圧痕明瞭
679	423-05	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.2		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
680	423-03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
681	425-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	淡黄(2.5Y8/3)	2/3	指頭圧痕明瞭 口縁部外面赤変
682	422-08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.6		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
683	430-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
684	434-09	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	3㎜以下の小石含	不良	灰白(2.5Y8/2)	3/4	粘土紐接合痕明瞭 底部内面黒斑
685	417-08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	4㎜の小石含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/3	指頭圧痕明瞭
686	412-12	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	3.5㎜以下の小石・植物繊維含	やや不良	外：灰白(10Y8/1) 内：淡黄(2.5Y8/3)～黄灰(2.5Y5/1)	3/5	口縁端部外面に浅い沈線
687	419-12	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	不良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	粘土紐接合痕明瞭 底部に黒斑
688	421-08	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：ナデ	1㎜以下の砂粒含	良好	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
689	431-01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.4		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	指頭圧痕明瞭
690	424-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
691	430-07	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.5		外：未調整 内：ナデ	1㎜の砂粒・植物繊維含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	
692	413-08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/3	指頭圧痕明瞭
693	428-08	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.0		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	外：浅黄橙(10YR8/3)～褐灰(10YR6/1) 内：浅黄橙(10YR8/3)～灰白(10YR7/1)	1/4	指頭圧痕明瞭
694	403-14	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	3.5㎜以下の小石含	不良	浅黄(2.5Y8/3)～黒褐(2.5Y3/1)	完形	大部分が黒斑
695	411-06	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(2.5Y7/1)	3/4	指頭圧痕明瞭
696	426-04	SD4190	F-98～99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.3		外：未調整 内：ナデ	4㎜以下の小石含	良	灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
697	434-03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.4		外：未調整 内：ナデ	2㎜以下の小石含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	2/3	指頭圧痕明瞭
698	423-06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：ナデ	7㎜の小石含	良好	褐灰(10YR6/1)	4/5	指頭圧痕明瞭
699	403-13	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	0.5㎜以下の小石含	良	灰白(2.5Y8/2)～淡橙(5Y8/4)	完形	
700	410-08	SD4190	F98～99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	褐灰(10YR5/1)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭 粘土紐接合痕明瞭
701	427-05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.1	1.4		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	灰白(7.5YR8/2)～にぶい橙(7.5YR7/3)	1/4	指頭圧痕明瞭

第10－11表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
702	427 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.1	1.3		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
703	417 -07	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄 (2.5Y8/3)	1/2	
704	432 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.2		外：未調整 内：ナデ	3mm 以下の砂粒含	やや不良	浅黄 (2.5Y8/3)	1/4	
705	421 -06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.2		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	良好	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕、粘土紐接合痕明瞭
706	418 -01	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	指頭圧痕明瞭
707	429 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.2		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	褐灰(10YR6/1) ～灰白(10YR7/1)	2/3	底部黒斑あり
708	403 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.4		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/4) ～灰白(7.5YR8/2)	完形	
709	417 -09	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/3	指頭圧痕明瞭
710	417 -03	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.5		外：未調整 内：ナデ	精白	良	灰白(5Y8/2) ～灰(5Y5/1)	2/3	
711	431 -05	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.3		外：未調整 内：ナデ	植物繊維含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
712	424 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.5		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
713	422 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.2		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良好	淡橙(5YR8/4) ～灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	口縁部黒斑、指頭圧痕明瞭
714	412 -09	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の小石、植物繊維含	良	橙(5YR6/6) ～浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
715	420 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.5	1.2		外：未調整 内：ナデ	3.5mm 以下の小石砂粒含	不良	淡黄(2.5Y8/3)	完形	指頭圧痕明瞭 粘土紐接合痕明瞭
716	419 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.3		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の小石含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/3	粘土紐接合痕明瞭
717	427 -04	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.1		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	3/5	指頭圧痕明瞭 粘土紐接合痕明瞭
718	413 -10	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.4	1.4		外：未調整 内：ナデ	4mm 以下の小石粒含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭 粘土紐接合痕明瞭
719	409 -05	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.6	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄橙(10YR8/3)	ほぼ完形	
720	424 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	3mmの小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
721	417 -12	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	3mmの砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/4) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/3	指頭圧痕明瞭
722	425 -10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.1	1.5		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒若干含	やや不良	内：明黄橙(2.5Y7/6) 外：浅黄橙(10YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
723	418 -08	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡橙(5YR8/4)	1/3	指頭圧痕明瞭。
724	410 -06	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.7	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	
725	418 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰黄(2.5Y6/2) ～灰(N4/0)	1/2	指頭圧痕明瞭
726	418 -12	SD4190	F－100 落ち込み	土師器 皿	9.3	1.4		外：未調整 内：ナデ	精良	やや不良	外：灰黄(2.5Y6/2) 内：灰(5Y4/1)	1/2	指頭圧痕明瞭
727	417 -11	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	8.8	1.4		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒多含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/3	指頭圧痕明瞭
728	429 -04	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 皿	8.9	1.2		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	外：浅黄橙(7.5YR8/4) ～淡橙(5YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/3) ～淡橙(5YR8/4)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
729	427 -10	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.5		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭 底部黒斑
730	409 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 皿	8.2	1.1		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭
731	418 -06	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 皿	9.2	1.1		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒若干含	良	灰N(4/1) ～灰白(5Y8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
732	379 -01	SD4190	F－98 落ち込み	土師器 鍋	20.4	-		外：ヘラケズリ 内：板ナデ	細砂粒含	良	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	1/4	指頭圧痕明瞭 頸部にスス付着
733	408 -03	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 鍋	31.6	-		外：未調整 内：ハケメ	小石粒含	やや不良	外：灰白(10Y8/1) 内：灰白(2.5Y8/2) ～淡黄(2.5Y8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭 外面煤付着

第10－12表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
734	408 -01	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 鍋	25.0	-		外：未調整 内：ナデ	5mm 以下の小石粒含	良	外：にぶい橙(10YR7/2) ～淡赤橙(2.5YR7/3) 内：灰黄褐(10YR6/2) ～浅黄橙(10YR8/3)	1/2	指頭圧痕明瞭 外～口縁部内面煤付着
735	367 -01	SD4190	F－100 落ち込み	土師器 鍋	16.0	-		外：未調整 内：ナデ	3.5mm 以下の小石・植物繊維含	良	灰白(2.5Y8/2)	2/3	指頭圧痕明瞭 外面煤付着
736	408 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 鍋	15.5	-		外：未調整 内：ナデ	2.5mm 以下の小石含	やや不良	灰白(2.5Y8/2) ～淡黄(2.5Y8/3)	1/6	指頭圧痕明瞭
737	380 -02	SD4190	E－99 落ち込み	土師器 甑	-	-	底径 5.0	外：ヘラケズリ 内：ナデ	2mm 以下の小石含	良	灰白(10YR8/1)	2/3	底部径1.5 cmの孔
738	367 -02	SD4190	F－99 落ち込み	土師器 高杯	-	-	脚径 3.4	外：未調整	微砂粒含	不良	灰白(10YR8/2)	脚柱完存	指頭圧痕明瞭
739	406 -05	SD4190	F98～99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.8	3.8	底径 6.8	体：ロクロナデ 底：未調整	2.5mm 以下の小石含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)	1/4	糸切り痕明瞭
740	406 -07	SD4190	F－98 落ち込み	ロクロ土師器 椀	15.4	3.8	底径 7.0	体：ロクロナデ 底：未調整	2mm 以下の小石含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/3	糸切り痕明瞭
741	406 -01	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.4	4.0	底径 6.3	体：ロクロナデ 底：未調整	2.5mm 以下の小石粒含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/4) ～褐灰(7.5YR4/1) 内：にぶい橙(7.5YR7/4) ～灰褐(7.5YR5/2)	3/4	糸切り痕明瞭
742	406 -08	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.9	3.8	底径 5.4	体：ロクロナデ 底：未調整	5mm 以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～黄灰(2.5Y6/1) 内：黄灰(2.5Y6/1)	1/2	糸切り痕明瞭
743	406 -02	SD4190	F－98 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.3	4.0	底径 7.5	体：ロクロナデ 底：未調整	5mm 以下の小石多含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	3/5	糸切り痕明瞭
744	406 -06	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	15.1	3.8	底径 8.4	体：ロクロナデ 底：未調整	2.5mm 以下の小石含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/3) ～灰褐(7.5YR5/2) 内：灰褐(7.5YR6/2)	ほぼ完形	糸切り痕明瞭
745	414 -05	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	-	-	底径 7.1	体：ロクロナデ 底：未調整	4mm の小石含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	底部完存	糸切り痕明瞭
746	406 -04	SD4190	F98～99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.5	3.2	底径 7.2	体：ロクロナデ 底：未調整	2.5mm 以下の小石多含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/5	糸切り痕明瞭
747	406 -03	SD4190	F98～99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14.2	3.2	底径 6.5	体：ロクロナデ 底：未調整	4.5mm 以下小石粒多含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/4) 内：橙(7.5YR7/6)	3/5	糸切り痕明瞭
748	438 -03	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 椀	14	3.1		体：ロクロナデ 底：未調整	1mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	ヘラ切り痕明瞭 口縁部外面に沈線2条
749	405 -04	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.0	2.2	底径 4.9	体：ロクロナデ 底：未調整	1.5mm の砂粒多含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	糸切り痕明瞭
750	431 -02	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.0	2	底径 3.9	体：ロクロナデ 底：未調整	3 mm以下の砂粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	1/2	糸切り痕明瞭
751	405 -09	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	9.1	1.8	底径 4.8	体：ロクロナデ 底：未調整	1.5mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/2	糸切り痕明瞭
752	405 -05	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.5	1.9	底径 4.9	体：ロクロナデ 底：未調整	1mm 以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)	3/4	糸切り痕明瞭
753	405 -10	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.7	2.1	底径 4.3	体：ロクロナデ 底：未調整	2mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	3/5	糸切り痕明瞭
754	405 -01	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.8	1.9	底径 4.4	体：ロクロナデ 底：未調整	4mm 以下の小石多含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	糸切り痕明瞭
755	405 -08	SD4190	F－98 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.6	1.7	底径 4.7	体：ロクロナデ 底：未調整	2mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	3/5	糸切り痕明瞭
756	405 -07	SD4190	F－98 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.4	1.8	底径 5.1	体：ロクロナデ 底：未調整	1.5 mm以下の小石含	良	外：淡黄(2.5Y8/3) ～浅黄橙(10YR8/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	完形	糸切り痕明瞭
757	430 -01	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	9	1.6	底径 4.7	体：ロクロナデ 底：未調整	3mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	1/3	糸切り痕明瞭
758	405 -02	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.2	1.5	底径 4.7	体：ロクロナデ 底：未調整	1.5mm 以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	糸切り痕明瞭
759	413 -02	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.6	1.6	底径 4.8	体：ロクロナデ 底：未調整	微砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	糸切り痕明瞭
760	413 -03	SD4190	E－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	9.2	1.8	底径 5.4	体：ロクロナデ 底：未調整	細砂粒・植物繊維含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	糸切り痕明瞭
761	405 -06	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.8	1.8	底径 5.8	体：ロクロナデ 底：未調整	1mm 以下の小石含	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	糸切り痕明瞭
762	405 -03	SD4190	F－99 落ち込み	ロクロ土師器 皿	8.6	1.9	底径 4.9	外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	完形	指頭圧痕明瞭
763	470 -03	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 皿	6.0	1.1		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
764	470 -04	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 皿	8.0	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/5	指頭圧痕明瞭

第10－13表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
765	470 -02	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 皿	10.0	2.0		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
766	467 -04	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 蓋	14.9	1.7	底径 10.0	ナデ	精良	良	にぶい褐(7.5YR6/3)	3/4	底部外面～口縁内面煤付着
767	473 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 蓋	16.0	2.6	底径 11.4	外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒多含	やや不良	外 :灰褐(7.5YR5/2) ～橙(2.5YR5/2) 内 :浅黄橙(10YR8/3)	1/4	外面炭化物付着
768	472 -02	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	23.0	-		外：ハケメ 内：工具ナデ	精良	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/4)	1/10	外面煤付着
769	473 -02	SZ4108	F－103 SZ108 石垣底	土師器 鍋	21.8	10.7		外：ハケメ 内：工具ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3) ～褐灰(7.5YR6/1)	3/4	頸部内面に炭化物付着
770	468 -02	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	35.6	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	1/12	外～口縁内面煤付着
771	468 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	41.4	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	1/12	外内煤付着
772	469 -03	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	20.6	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：ナデ	細砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/3	外～口縁内面煤付着
773	472 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	20.6	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：上半ナデ 下半ヘラケズリ	精良	やや不良	外：灰白(10YR8/1) 内：灰白(10YR8/2)	1/4	内外面煤付着 頸部内面に工具痕跡
774	469 -02	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	19.2	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：上半ナデ 下半ヘラケズリ	精良	やや不良	灰白(10YR8/2)	2/3	
775	468 -03	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鍋	20.2	-		内外：上半ハケメ、 下半ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	外面煤多く付着
776	467 -05	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鉢	15.8	-		外：ハケメ 内：ヘラケズリ?	3mm 以下のの小石多含 植物繊維含	良	橙(2.5YR6/6)	1/8	内面摩滅が激しい
777	467 -06	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 鉢	17.6	-		外：ハケメ 内：ヘラケズリ	細砂粒・植物繊維含	良	橙(2.5YR6/6) ～にぶい赤褐(2.5YR5/4)	1/8	
778	470 -05	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 急須	9.5	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/3	
779	470 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 羽釜	44.0	-		ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	口縁部小片	
780	467 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 羽釜	36.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	2.5mm 以下の小石含	不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/8	
781	469 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 茶釜	14.0	-		ハケメ	精良	不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	2/3	外～口縁内面煤付着
782	474 -01	SZ4108	F－103 SZ108	土師器 茶釜	13.6	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3) ～にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	外～口縁内面煤付着
783	474 -01	SZ4108	F－103 SZ108 石垣底	土師器 茶釜	13.5	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：上半ハケメ 下半工具ナデ ヘラケズリ	精良	やや不良	外: 灰白(2.5Y8/2) 内: 灰(5Y6/1)	ほぼ完形	外面煤付着
784	468 -04	SZ4108	F－103	天目茶椀	11.6	6.4	高台径 4.4	体：ロクロナデ 底：ロクロケズリ	4mm 以下の小石粒含	良	赤褐(5YR4/6)	底部完存	内外面鉄釉 底部サビ釉
785	467 -03	SZ4108	F－103 SZ108	摺鉢	-	-	底径 9.9	ロクロナデ	3mm 以下の小石含	良	黒褐(7.5YR3/1)	1/8	糸切り底明瞭 摺目16本/1単位
786	467 -02	SZ4108	F－103 SZ108	摺鉢	31.8	-		外：未調整 内：ナデ	4.5mm 以下小石含	良	淡赤橙(2.5YR7/4) ～灰赤(2.5YR4/2)	1/7	内面摩滅(使用痕) ヘラによる摺目
787	361 -01	SZ4108	F－103 石だまり	土師器 火舎	31.6	-		ロクロナデ	精良	良	にぶい橙(5YR7/4)	1/12	
788	374 -05	SZ4108	F－103 SZ108	加工円盤	2.2	1.1	重 6g	ロクロナデ	2mm 以下の砂粒含	良	橙(2.5YR7/6)	完形	陶器甕胴部を転用
789	356 -04	SZ4108	F－103 石留り	加工円盤	3.5	1.4	重 22.0g	ロクロナデ	精良	良好	にぶい橙(2.5YR6/4)	完形	陶器甕胴部を転用
790	372 -01	SZ4108	F－103 SZ108 石垣	加工円盤	5.2	0.9	重 24.5g	ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	土師器椀底部を転用
791	362 -06	SZ4108	F－103 石留り	紡錘車	3.7	1.0	重 7.6g	ナデ	精良	不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	2/3	土師器椀底部を転用
792	396 -01	SX4171	K－109 石溜り	土師器 皿	9.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/3	
793	455 -02	SX4171	K－109 SX171	土師器 皿	9.0	2.1		外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(7.5YR8/1)	1/4	指頭圧痕明瞭
794	396 -03	SX4171	K－109 石だまり	土師器 皿	9.6	2.3		外：未調整 内：ナデ	4mm 以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/5	

第10－14表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
795	455 -03	SX4171	K－109 SX171	土師器 皿	10.0	1.9		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	1/4	指頭圧痕明瞭
796	397 -02	SX4171	K－109 石だまり	土師器 皿	14.4	2.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/4	
797	455 -05	SX4171	K－109 SX171	土師器 鍋	19.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/4	
798	455 -06	SX4171	K－109 SX171	土師器 鍋	26.0	-		ナデ	0.5mm 以下の砂粒含	良	明褐灰(7.5YR7/2)	1/13	
799	455 -04	SX4171	K－109 SX171	土師器 鍋	24.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/12	
800	357 -01	SX4171	K－109 石の上	土師器 羽釜	32.0	-		ナデ	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)	小片	内外面煤付着
801	455 -07	SX4171	K－109 SX171	土師器 羽釜	20.0	-		ナデ	0.5mm 以下の小石含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	小片	鍔以下煤付着
802	457 -01	SX4171	K－109 SX171	土師器 羽釜	18.0	-		外：ハケメ 内：上半ハケメ 下半ナデ	精良	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/6	鍔以下煤付着
803	456 -04	SX4171	K－109 SX171	土師器 椀	13.2	7.1	底径 4.7	外：ハケメ 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒含	良	外：浅黄橙(10YR8/3) 内：灰白(10YR8/2)	3/4	
804	456 -01	SX4171	K－109 SX171	土師器 椀	14.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/4	
805	455 -08	SX4171	K－109 SX171	土師器 椀	12.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	1/3	
806	456 -03	SX4171	K－109 SX171	土師器 椀	-	-	底径 5.2	外：ハケメ 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	外：にぶい橙(7.5YR7/3) ～浅黄橙(10YR8/4) 内：浅黄橙(10YR8/4)	底部完存	
807	456 -02	SX4171	K－109 SX171	土師器 椀	-	-	底径 5.1	外：ハケメ 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒含	良	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	底部完存	
808	457 -03	SX4171	K－109 SX171	施釉陶器 椀	16.0	-		体：ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	釉：オリーブ黄(7.5Y7/3) 地：灰白(5Y7/1)	2/3	内面にトチン痕
809	457 -04	SX4171	K－109 SX171	天目茶碗	-	-	底径 3.2	体：ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	底部完存	
810	466 -03	SX4139	E－111 SX139	土師器 皿	11.5	2.0		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	灰白(7.5YR8/2)	1/10	指頭圧痕明瞭
811	466 -01	SX4139	E－111 SX139	土師器 鍋	26.1	-		外：ハケメ 内：上半工具ナデ 下半ヘラケズリ	細砂粒含	不良	灰白(10YR8/2)	1/8	体部外面に沈線 外面煤付着
812	458 -03	SX4139	E－111 SX139	土師器 鍋	30.0		底径 3.9	外：ハケメ 内：ナデ	精良	不良	灰白(10YR8/2)	1/10	外面煤付着
813	466 -02	SX4139	E－111 SX139	土師器 鍋	25.6	-		外：ハケメ 内：ナデ	微砂粒含	不良	灰白(10YR8/1)	1/7	外面煤付着
814	454 -04	SX4169	K－101 SX169	土師器 椀	13.4	-		外：ハケメ 内：ナデ	細砂粒含	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/4) ～にぶい橙(5YR6/3)	1/5	
815	451 -02	SX4169	K－101 SX169	土師器 椀	14.2	7.3	底径 4.8	外：ハケメ 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	やや不良	灰黄褐(10YR6/2) ～明赤褐(5YR5/8)	1/5	
816	454 -03	SX4169	K－101 SX169	土師器 椀	13.6	7.3	底径 5.4	外：ハケメ 内：ナデ	3mm 以下の小石粒含	良	にぶい橙(7.5Y7/3)	1/4	
817	448 -04	SX4169	K－101 SX169	土師器 甕	22.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	1mm 以下の小石含	良	灰白(10YR8/2)	小片	
818	451 -01	SX4169	K－101 SX169	土師器 甕	32.8	-		外：ハケメ 内：ナデ	2mm 以下の小石含	不良	灰白(10YR8/1)	1/5	
819	445 -05	SX4063	H－103 SK63	土師器 皿	8.9	2.2		ナデ	1mm の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	完形	
820	446 -07	SX4063	I－104 SK63	土師器 蓋	21.0	6.5		外：ハケメ 一部ヘラケズリ 内：ナデ	1.5mm の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/4	
821	446 -01	SX4086	H－105 SK86	土師器 皿	7.4	1.7		外：未調整 内：ナデ	1mm の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	4/5	
822	450 -02	SX4103	SX103	土師器 皿	7.5	1.8		外：未調整 内：ナデ	細砂粒・植物繊維含	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
823	450 -01	SX4103	SX103	土師器 皿	7.9	1.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒・植物繊維含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/2	外面煤付着 指頭圧痕明瞭
824	450 -03	SX4103	SX103	天目茶碗	12.3	-		ロクロナデ	精良	良	釉：オリーブ黒(7.5Y2/1) 地：灰(7.5Y4/1)	1/7	
825	448 -02	SX4150	SX150	土師器 皿	10.0	2.4		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭
826	448 -01	SX4150	SX150	土師器 皿	15.0	2.3		外：未調整 内：ナデ	2mm 以下の砂粒含	やや不良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	指頭圧痕明瞭

第10－15表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
827	448 -06	SX4164	C－114 SX164	施釉陶器 卸皿	7.3	-		ロクロナデ	精良	良	外 :灰白(10YR8/1) 内 :灰白(10YR8/2)	2/3	糸切痕明瞭
828	446 -03	SK4076	H－101 SK 76	灰釉陶器 椀	15.6	5.5	高台径 7.6	ロクロナデ	1.5mm の砂粒含	良	灰白(7.5Y7/2)	1/2	糸切痕明瞭
829	446 -06	SK4076	H－101 SK 76	青磁 香炉	-	-	底径 7.0	ロクロナデ	精良	良	緑灰(7.5GY6/1)	1/3	
830	445 -04	SK4076	H－101 SK 76	土師器 土錘	1.0	-	残存重 2.1g	ナデ	1mm の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	1/2	
831	355 -09	SK4076	H－101 SK 76	銭貨	2.5	-	重 2.4g	-	-	-	青灰(10BG5/1)	完形	永楽通宝
832	355 -07	SK4076	H－101 SK 76	銭貨	2.5	-	重 1.6g	-	-	-	青灰(5B5/1)	完形	永楽通宝
833	355 -12	SK4076	I－101 SK 76	銭貨	2.3	-	重 1.1g	-	-	-	青灰(5B6/1)	完形	摩滅が激しく銭種不明
834	355 -11	SK4076	I－101 SK 76	銭貨	2.4	-	重 2.3g	-	-	-	緑黒(5G2/1)	ほぼ完形	錆が激しく銭種不明
835	355 -10	SK4076	H－101 SK 76	銭貨	2.5	-	重 2.8g	-	-	-	青灰(5B6/1)	完形	摩滅が激しく銭種不明
836	355 -08	SK4076	H－101 SK 76	銭貨	2.5	-	重 1.9g	-	-	-	青灰(5B6/1)	2/3	永楽通宝
837	445 -02	SK4090	H－104 SK 90	土師器 皿	13.0	2.6	-	外：未調整 内：ナデ	1.5mm の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	1/8	指頭圧痕明瞭
838	496 -08	SB4072	F－105 P 27	土師器 皿	8.0	1.9		外：未調整 内：ナデ	細砂粒多含 植物繊維含	良	灰白(10YR8/1)	2/3	指頭圧痕明瞭
839	369 -04	SZ4197	I－100 石垣	土師器 皿	10.0	1.5	-	外：未調整 内：ナデ	精良	良	灰白(7.5YR8/2)	1/2	指頭圧痕明瞭
840	477 -06	SD4100	E－104 SD100	土師器 皿	8.6	1.3	-	外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	やや不良	灰白(2.5Y8/2)	ほぼ完形	口縁端部に煤付着
841	371 -01	SZ4109	F－104 石垣	陶器 擂鉢	37.0	13.0	底径 17.3	外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい橙(5YR7/6)	1/6	内面炭化物付着
842	484 -04	SD4102	F－103 SD102	土師器 皿	7.0	1.1		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	2/3	指頭圧痕明瞭
843	494 -02	SD4102	E－103 SD102	土師器 壺	3.0	-		外：未調整 内：ナデ	精良	不良	外 :灰白(7.5YR8/2) 内 :橙(7.5YR6/6)	底部完存	指頭圧痕明瞭
844	492 -03	SD4102	E－103 SD102	土師器 鍋	26.6	-		外：ハケメ 内：ナデ	1.5mm の砂粒含	良	外 :褐灰(7.5YR4/1) 内 :淡黄(2.5Y8/3)	1/8	外面全面煤付着
845	493 -01	SD4102	E－103 SD102	土師器 鉢	18.8	-		外：ハケメ 内：ナデ	やや粗	良	橙(2.5Y7/6)	1/8	
846	493 -02	SD4102	E－103 SD102	土師器 羽釜	18.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	不良	外: にぶい橙(7.5YR7/3) 内: 褐灰(10YR4/1)	3/4	外面全面煤付着
847	492 -01	SD4102	F－103 SD102	土師器 茶釜	13.8	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	不良	灰白(YR8/2)	1/4	外面若干煤付着
848	492 -02	SD4102	F－103 SD102	土師器 茶釜	13.2	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/4	外面煤付着
849	477 -08	SD4102	F－103 SD102	天目茶椀	12.0	-		ロクロナデ	精良	良	地 :灰白(10YR8/1) 釉 :黒(10YR1.7/1)	1/10	
850	494 -01	SD4102	E－103 SD102	天目茶椀	-	-	高台径 4.4	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	釉 :赤黒(7.5YR1.7/1) ～にぶい橙(2.5YR6/4)	底部完存	底部外面錆釉がかかる
851	477 -02	SD4102	E－103 SD102	陶器 壺	12.5	-		ロクロナデ	3mm 以下の小石粒含	良	にぶい赤褐(5YR3/4)	1/7	
852	488 -03	SD4129	D－102 SD129	土師器 鍋	29.4	-		外：ハケハ 内：ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/5	
853	488 -02	SD4129	D－102 SD129	土師器 羽釜	28.0	-		外：ハケハ 内：ナデ	精良	不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1/5	内外面煤付着
854	488 -01	SD4129	D－102 SD129	土師器 茶釜	14.0	-		外：ハケハ 内：ナデ	精良	不良	浅黄橙(10YR8/3)	1/4	口縁部外面煤付着
855	485 -01	SD4129	D－102 SD129	天目茶碗	12.0	-		ロクロナデ	精良	良	地: 灰白(10YR8/1) 釉: 赤黒(10YR8/3)	1/12	
856	487 -01	SD4129	D－102 SD129	山茶椀	16.0	5.2	高台径 8.6	ロクロナデ	2mm の砂粒若干含	良	灰白(5Y8/1)	2/3	
857	489 -01	SD4129	D－102 SD129	瓦質土器 火舎	39.0	-		ロクロナデ	2mm の砂粒多含	良	外: 浅黄橙(10YR8/3) 内: 褐灰(10YR5/1)	1/6	
858	373 -03	SD4129	D－102 SD129	加工円盤	5.0	-	重 41.5g	ロクロナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	完形	陶器甕胴部を転用
859	373 -02	SD4129	D－102 SD129	加工円盤	4.5	-	重 30.0g	ロクロナデ	2mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/6)	完形	陶器甕胴部を転用
860	373 -01	SD4129	D－102 SD129	加工円盤	4.0	-	重 27.9g	ロクロナデ・ミガキ	精良	良	灰赤(2.5YR5/2)	完形	陶器甕胴部を転用

第10－16表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
861	374 -01	SD4129	D－102 SD129	紡錘車	3.9	-	重 18.9g	ロクロナデ	3㎜ 以下の小石含	良	にぶい橙(2.5YR6/4) ～赤灰(2.5YR5/1)	完形	陶器甕胴部を転用 未成品
862	475 -01	SD4014	L－103 SD14 上面	土師器 鍋	38.9	-		外：ハケメ 内：ナデ 底部内外面ヘラケズリ	2㎜ 以下の砂粒含	良	灰白(7.5YR8/2) ～灰褐(5YR6/2)	2/3	外面煤付着
863	355 -15	SZ4172	L－106 P4	銭貨	2.5	-	重 3.4g	-	-	-	青灰(5B6/1)	完形	永楽通宝
864	355 -16	SZ4172	L－106 P4	銭貨	2.5	-	重 3.1g	-	-	-	青灰(5B5/1)	完形	皇宋通宝
865	355 -14	SZ4172	L－106 P4	銭貨	2.4	-	重 3.3g	-	-	-	緑灰(10GY5/1)	完形	元符通宝
866	355 -13	SZ4172	L－106 P4	銭貨	2.5	-	重 3.0g	-	-	-	緑灰(5PB4/1)	完形	元(天)□□宝
867	393 -03	-	E－107 P4	土師器 皿	13.7	2.8		外：未調整 内：ナデ	砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/2	粘土紐接合痕明瞭
868	496 -07	-	I－106 P2	土師器 皿	7.1	1.3		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の小石含	良	明褐灰(7.5YR7/1) ～灰褐 (7.5YR6/2)	完形	指頭圧痕明瞭 外面煤付着
869	496 -12	-	F－106 P13	紡垂車	4.0	-	重 13.2g	ナデ	精良	良	灰白(2.5Y7/1)	完形	土師器椀底部を転用 側縁に鋭利な工具痕
870	499 -01	-	D－103 P11	土師器 鍋	36.1	17.0		外：ハケメ・ヘラケズリ 内：ナデ	微砂粒含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	2/5	外面煤付着
871	353 -01	-	M－108 P4	土師器 鍋	28.0	14.7		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：ナデ	2㎜ 以下の小石多含・植物繊維含	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/4	外面煤多量に付着
872	352 -01	-	E－106 P1	土師器 鍋	35.6	- -		外：ハケメ 内：ナデ 底部内外面ヘラケズリ	精良	良	灰白(10YR7/2)	1/6	外面煤付着
873	450 -05	SX4134	C－111 SX134 最下段	近世陶器 椀	7.8	-		ロクロナデ	精良	良	灰白(10Y8/1)	1/7	
874	450 -06	SX4134	SX134 No.4	土師器 皿	9.7	1.5		ナデ	微砂粒・植物繊維含	良	橙(5YR6/6)	2/3	口縁端部に油煙付着
875	450 -09	SX4134	C－111 SX134	土師器 皿	10.0	1.2		ナデ	微砂粒含	良	橙(7.5YR7/6)	1/4	
876	450 -07	SX4134	C－111 SX134 最下段	土師器 皿	9.0	1.2		外：未調整 内：ナデ	細砂粒含	良	橙(5YR6/6)	1/5	指頭圧痕明瞭
877	450 -08	SX4134	C－111 SX134 最下段	土師器 皿	8.9	1.2		外：未調整 内：ナデ	微砂粒・植物繊維含	良	橙(5YR6/6)	1/3	
878	450 -10	SX4135	D－111 SX135 No.9	土師器 皿	8.1	1.5		ナデ	精良	良	橙(7.5YR6/6)	1/4	
879	402 -01	SX4135	D－111 SX135	土師器 把手付壺	10.5	14.6		外：上半ハケメ 内：下半ヘラケズリ 内：ナデ	精良	良好	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	
880	464 -02	SX4135	D－111 SX135 No.5	軒丸瓦	-	-		ナデ	2.5㎜ 以下の小石粒多含 植物繊維含	良	灰白(5Y7/1)	1/3	いぶし焼き
881	463 -01	SX4135	D－111 SX135 No.6.7	軒平瓦	-	-		側縁 ：ケズリ	6㎜ 以下の小石粒含	やや不良	灰白(N8/0)	1/3	いぶし焼き
882	363 -01	SX4132	I－108 SX132	陶器 甕	76.6	88.2	底径 24.0	外：ナデ 内：未調整	精良	良好	明赤褐(5YR5/8)	完形	指頭圧痕明瞭
883	450 -04	SX4132	SX132	土師器 皿	7.6	1.0		ナデ	精良	良	橙(5YR6/6)	1/3	
884	455 -01	SX4132	J－97 SX※	土師器 皿	7.6	1.1		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	橙(2.5YR6/6)	完形	
885	370 -02	SX4133	K－98 SX周囲 石組	犬形土製品	-	1.9		手づくね	精良	良	淡黄(2.5Y8/4)	頭部左前足欠損	
886	464 -01	SX4136	D－111 SX136	軒丸瓦	15.0	-		ナデ	2.5㎜ 以下の小石含	良	灰白(5Y8/2)	瓦頭部完存	いぶし焼き
887	465 -01	SX4136	E－111 SX136 No.7	軒平瓦	-	4.9		凹面：未調整 凸面：ナデ	7㎜ の小石含	良	灰白(5Y7/2)	1/3	いぶし焼き
888	465 -02	SX4136	D－111 SX136 No.5	軒平瓦	-	4.9		凹面：未調整 凸面：ナデ	1.5㎜ 以下の小石粒含	良	灰白(5Y7/1)	1/3	いぶし焼き
889	485 -04	SX4146	J－113 石だまり	近世陶器 椀	8.0	-		ロクロナデ	精良	良	地 ：淡黄(2.5YR8/3) 釉 ：褐(10YR4/6)	1/6	美濃

第10－17表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
890	452 -02	SX4146	J－113 SX146	陶器 擂鉢	27.0	11.2	高台径 11.6	ロクロナデ	3㎜ 以下の小石含	不良	地：にぶい黄橙 (10YR7/4) 釉：暗赤褐(2.5YR3/2)	2/3	瀬戸
891	453 -01	SX4146	J－113 SX146	陶器 鉢	31.2	-		ロクロナデ	3㎜ 以下の小石含	良	橙(7.5YR6/6)	1/8	内面煤付着
892	466 -04	SX4138	E－111 SX138	土師器 皿	12.7	2.5		外： 未調整 内： ナデ	微砂粒含	良	橙(7.5YR6/6)	1/3	指頭圧痕明瞭
893	459 -04	SX4138	E－111 SX138	磁器 染付椀	10.2	5.5	高台径 3.9	ロクロナデ	精良	良	地：灰白(10Y8/1) 釉：灰白(7.5Y8/1)	1/3	
894	460 -01	SX4138	E－111 SX138 No.11	平瓦	-	-	幅 21.3	凹面：ナデ 凸面：未調整	1㎜ の砂粒多含	良	凹面：灰(N6/1) 凸面：青灰(5B6/1)	1/3	いぶし焼き
895	461 -01	SX4138	E－111 SX138 No.5	熨斗瓦	-	-	長 28.5	凸面：ナデ 凹面：未調整	精良	やや不良	灰白(5Y8/1)	3/4	いぶし焼き
896	447 -05	SX4144	H－113 SX144	土師器 皿	6.3	1.1		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	外：橙(5YR7/6) 内：橙(7.5YR7/6)	2/3	
897	447 -04	SX4144	H－113 SX144	土師器 皿	5.8	0.9		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ の砂粒含	良	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：浅黄橙(10YR8/4)	完形	
898	446 -04	SX4144	H－113 SKア	近世磁器 灯明皿	10.0	2.1		外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/4)	1/5	
899	446 -05	SX4144	H－113 SKア	近世陶器 椀	9.0	-		ロクロナデ	精良	良	淡黄(2.5Y7/4)	1/3	
900	449 -01	SX4144	H－113 SX144	近世陶器 椀	-	-	高台径 4.4	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	底部完存	削り出し高台、内面に重ね焼きの痕跡
901	449 -04	SX4144	H－113 SX144	近世陶器 椀	12.0	4.6	高台径 4.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/3	
902	374 -02	SX4144	H－113 SX144	紡錘車	3.1	-	重量 8.9g	ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	灰(6/N)	完形	土師器椀底部を転用未成品
903	374 -04	SX4144	H－113 SX144	加工円盤	2.8	-	重量 13.0 g	ナデ	精良	良	灰(5/N)	完形	土師器椀底部を転用
904	448 -03	SX4148	H－111 SX148	土師器 椀	14.0	-		外：ヘラケズリ 内：ナデ	0.5㎜ 以下の砂粒含	良	橙(7.5YR7/6)	1/8	
905	447 -01	SX4148	I－111 SX148	土師器 皿	11.6	1.9		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ 以下の砂粒含	良	橙(7.5YR7/6) ～浅黄橙(7.5YR8/4)	1/4	
906	447 -08	SX4148	I－111 SX148	土師器 皿	10.6	1.6		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	1/2	口縁端部に煤付着
907	447 -03	SX4148	I－111 SX148	土師器 皿	9.6	1.4		外：未調整 内：ナデ	1㎜ 以下の砂粒含	良	橙(2.5YR7/6) ～橙(5YR7/6)	1/4	
908	447 -06	SX4148	I－111 SX148	土師器 皿	5.6	1.0		外：未調整 内：ナデ	1.5㎜ 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4) ～橙(2.5YR7/6)	ほぼ完形	
909	452 -01	SX4148	SX148	陶器 擂鉢	27.7	10.0	底径 12.0	外：未調整 内：ロクロナデ	3㎜ 以下の小石含	良	赤褐(10R5/3) ～灰褐(5YR5/6)	1/3	外面に櫛状工具痕
910	351 -01	SX4148	H～I -111 SX148 No.1.2.7	陶器 甕	71.4	74.5	底径 20.0	外：ナデ 内：未調整	8㎜ 以下の小石含	良	灰白(10YR8/2) ～明赤褐(5YR5/6)	4/5	指頭圧痕明瞭
911	449 -06	SX4148	I－111 SX148	近世陶器 ヒョウソク	4.7	-		ロクロナデ	精良	良好	褐(7.5YR4/6)	上部完存	
912	449 -03	SX4148	H-111 SX148 No.9	近世磁器 染付椀	-	-	高台径 4.0	ロクロナデ	精良	良好		底部完存	
913	449 -05	SX4148	I－111 SX148	近世陶器 椀	9.0	6.2	高台径 4.5	底部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	良	にぶい赤褐(5YR5/4) ～明オリーブ灰(5GY7/1)	1/2	外面に櫛状工具による横線
914	449 -02	SX4148	I－111 SX148	近世陶器 皿	-	-	高台径 9.4	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	1/8	
915	372 -03	SX4148	I－111 SX148	加工円盤	4.0	-	重 21.0g	A面：ロクロナデ B面：ロクロケズリ	精良	良	灰黄(2.5Y7/2)	完形	天目茶碗底部を転用
916	498 -01	SX4148	I－111 SX148	丸瓦	-	7.5		凸面：ナデ 凹面：未調整	細砂粒含	良	灰白(7.5Y7/1)	1/4	
917	497 -01	SX4148	I－111 SX148	丸瓦	-	8.2		凸面：縄叩き痕 凹面：叩き	2.5㎜ 以下の小石粒含	やや不良	灰(N4/0)	2/3	
918	498 -02	SX4148	H－111 SX148 No.11	軒平瓦	-	-		ナデ	3.5㎜ 以下の小石粒含		灰白(7.5Y7/1)	1/3	
919	383 -04	SZ4170	J－109 石だまり	土師器 皿	6.6	0.6		外：未調整 内：ナデ	微砂粒含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/2	
920	458 -04	SZ4170	J－109 SX170	土師器 皿	8.0	1.8		外：未調整 内：ナデ	0.5㎜ の砂粒若干含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/6	

第10－18表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
921	454 -05	SZ4170	J－109 SX168	土師器 皿	7.7	3.0		ナデ	2mm の小石含	不良	灰白(2.5Y8/2)	1/6	
922	454 -06	SZ4170	J－109 SX168	土師器 椀	-	-	底径 5.0	外 :ハケメ 内：ナデ	1mm 以下の小石含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/4)	底部完存	
923	361 -03	SZ4170	J－109 石だまり	土師器 鉢	21.4	-		外 :ハケメ 内：ナデ 底部内外へラケズリ	細砂粒含	良	橙(2.5YR7/6)	1/8	
924	361 -04	SZ4170	J－109 石だまり	土師器 鉢	22.6	-		外 :ハケメ 内：ナデ	細砂粒含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/8	
925	454 -02	SZ4170	J－109 SX168	土師器 鍋	21.5	-		外 :ハケメ 内：ナデ	細砂粒含	不良	灰白(10YR8/1)	1/3	
926	454 -01	SZ4170	J－109 SX168	土師器 鍋	22.8	-		外 :ハケメ 内：ナデ	2.5mm 以下の小石粒含	やや不良	灰白(10YR8/2)	1/8	内面煤付着
927	458 -02	SZ4170	J－109 SX170	土師器 鍋	26.4	-		外 :ハケメ 内：ナデ	1mm の砂粒含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/10	
928	458 -01	SZ4170	K－109 SX170	土師器 鍋	26.0	-		外 :ハケメ 内：ナデ	精良	良	灰黄褐(10YR6/2)	1/10	外面煤付着
929	459 -01	SZ4170	J－109 SX170	土師器 鍋	32.2	-		ナデ	1mm の砂粒多含	不良	灰白(2.5Y8/2)	1/6	外面煤付着
930	457 -02	SZ4170	K－109 SX170	土師器 鍋	40.0	-		外：ハケメ 内 :ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2)	1/8	外面煤付着
931	459 -02	SZ4170	J－109 SX170	磁器 皿	10.0	4.0	高台径 2.3	体：ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(2.5GY8/1) 釉：灰白(10Y8/1)	1/3	
932	356 -03	SZ4170	J－109 石だまり	紡錘車	4.5	-	重量 13.8g	ナデ	精良	良好	橙(2.5YR7/6) ～浅黄橙(10YR8/3)	完形	土師器椀底部を転用
933	364 -05	SE4149	H－111 井戸上	石製品 硯	-	1.3	幅 5.0	-	粘板岩	-		1/2	
934	484 -06	SZ4195	H－110 石だまり	磁器 椀	11.0	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰白(10Y8/1) 釉：明緑灰(5G7/1)	1/4	
935	486 -01	SX4195	H－110 石列	近世陶器 椀	-	-	高台径 3.9	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：黒褐(2.5Y3/1)	1/2	天目茶碗か?
936	360 -01	SX4195	G－110 石だまり	土師器 鍋	28.0	-		ナデ	小石多含	不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/4	外面煤付着
937	364 -01	SX4195	G－110 石溜	土錘	1.5	6.2	重量 10g	ナデ	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/6)	ほぼ完形	
938	484 -05	SD4107	E－109 SD107	近世陶器 蓋	-	-	天井 7.5	ロクロナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	1/4	全面錆釉
939	486 -04	SD4097	H－ 99 SD97	近世陶器 鉢	-	-	底径 8.0	ロクロナデ	精良	良	地：灰白(5Y8/1) 釉：にぶい赤褐(5Y5/3)	1/8	
940	361 -02	SZ4196	F－111 石だまり	陶器 火舎	33.0	-	-	ロクロナデ	微砂粒含	良	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：灰白(2.5Y8/2)	1/12	
941	362 -02	SZ4196	F－111 石だまり	軒丸瓦	-	-		ナデ	3mm 以下の小石粒含	良	灰(N6/0)	1/4	珠文推定36個
942	480 -03	SZ4198	F列 石垣	近世陶器 椀	10.9	3.8	高台径 4.0	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：浅黄橙(7.5YR8/2) 釉：緑灰(5G5/1)	1/3	
943	362 -01	SZ4198	F列 石垣	陶器 擂鉢	-	-	底径 12.3	ロクロナデ	精良	良	灰白(7.5Y8/1)	小片	瀬戸
944	483 -03	SZ4198	F列 石垣	陶器 徳利	3.5	-	-	ロクロナデ、一部カキメ	1mm 以下の砂粒含	良	地：浅黄橙(10YR8/3) 釉：明黄褐(10YR7/6)	2/3	美濃
945	355 -01	SZ4198	F列 石垣	銭貨	2.4	-		-	-	-	黒(7.5YR1.7/1)	完形	寛永通宝
946	447 -02	SX4145	H－113 SX145	土師器 皿	9.4	1.5		外：未調整 内：ナデ	0.5mm 以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	完形	
947	447 -07	SX4145	I－113 SX145	土師器 皿	8.0	1.4		外：未調整 内：ナデ	1.5mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3)	1/2	口縁内部に工具痕 指頭圧痕明瞭
948	448 -05	SX4145	I－113 SX145	土師器 皿	15.0	4.2		外：未調整 内：ナデ	3mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/3) ～淡橙(5YR8/4)	小片	指頭圧痕明瞭
949	355 -03	SX4145	I－113 石だまり	銭貨	2.4	-	重量 2.1g	-	-	-	青灰(5B6/1)	完形	寛永通宝
950	369 -02	SZ4199	F-110 石垣	土師器 皿	12.0	2.5		外：未調整 内：ナデ	3mm 以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部完存	指頭圧痕明瞭
951	369 -01	SZ4199	F-110 石垣	土師器 皿	11.6	2.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
952	369 -03	SZ4199	F-110 石垣	土師器 皿	7.3	1.1		外：未調整 内：ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
953	400 -02	SZ4199	C～F －111 石だまり	施釉陶器 椀	-	-		ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(5Y7/2) 釉：オリーブ黄(7.5Y6/3)	底部完存	直接重ね焼き痕

第10－19表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
954	481 -04	SZ4199	C～F －111 石垣	近世陶器 丸椀	10.0	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰白(2.5Y8/2) 釉：にぶい赤褐 (5YR4/3)	1/16	
955	481 -03	SZ4199	C～F －111 石垣	近世陶器 椀	-	-	高台径 4.2	ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(7.5Y8/1) 釉：灰白(7.5Y7/1)	1/4	
956	370 -01	SZ4199	F－110 石垣	近世陶器 椀	9.0	5.3	高台径 5.5	ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/2	
957	480 -06	SZ4199	C～F －111 石垣	近世陶器 椀	-	-	高台径 4.2	ロクロナデ 底外：ロクロケズリ	精良	良	地 ：灰白(5Y8/1) 釉 ：灰白(7.5Y8/2)	1/3	瀬戸美濃
958	362 -03	SZ4199	C～F －111 石だまり	軒丸瓦	-	-		-	3mm 以下の小石含	良	灰(N4/0)	1/4	珠文推定12個
959	370 -03	SZ4199	F－110 石垣	軒平瓦	-	-	幅 12.2	凹面：布目 凸面：ヘラケズリ	3mm 以下の小石含	良	灰(6/N)	1/2	
960	358 -01	SZ4199	F－110 石垣	軒平瓦	-	-		凹面：布目 凸面：ヘラケズリ	4mm の小石含	良好	灰白(5Y7/1)	1/2	
961	362 -04	SZ4199	C～F －111 石だまり	軒平瓦	-	-		凹面：布目 凸面：ナデ	1mm 以下の小石含	良	灰白(N7/0)	1/8	
962	362 -05	SZ4199	C～F －111 石だまり	軒平瓦	-	-		凹面：布目 凸面：ナデ	5mm 以下の小石粒含	良	灰白(N7/0)	小片	
963	365 -03	包含層	C－105 ～106 トレンチ 拡張	縄文土器 深鉢	-	-		ミガキ	2mm の砂粒含む	やや不良	明褐灰(7.5YR7/1)	小片	沈線区画内に条線で施文
964	490 -01	包含層	下層褐色土下部	縄文土器 深鉢	-	-		ナデ	粗	やや不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	小片	沈線で施文
965	490 -03	包含層	下層褐色土下部	縄文土器 深鉢	-	-		ナデ	粗	良	外：灰褐(7.5YR6/2) 内：にぶい黄橙 (10YR7/2)	小片	沈線で施文
966	356 -01	包含層	H－107 SK	縄文土器 深鉢	-	-		ナデ	2mm の砂粒含	やや不良	明褐灰(7.5YR7/1)	小片	沈線で施文
967	490 -02	包含層	下層褐色土下部	縄文土器 浅鉢	-	-		ナデ	粗	良	褐灰(7.5YR4/1) ～橙(7.5YR6/6)	小片	縄文で施文
968	365 -04	包含層	N-106 トレンチ	縄文土器	-	-		外：縄文 内：ヘラミガキ	0.5mm の砂粒含	やや不良	灰黄褐(10YR6/2)	小片	縄文と沈線で施文
969	365 -02	包含層	C－105 ～106 トレンチ 拡張	縄文土器 深鉢	-	-		外：縄文 内：ヘラミガキ	2mm の砂粒含む	やや不良	外：灰褐(7.5YR5/2) 内：にぶい橙(5YR7/4)	小片	縄文で施文
970	365 -01	包含層	C－105 ～106 トレンチ 拡張	縄文土器 深鉢	-	-		外：沈線 内：ヘラミガキ	2mm の砂粒含む	やや不良	浅黄橙(7.5YR8/3)	小片	沈線で施文
971	359 -03	-		弥生土器 壺	-	-		外：ナデ・ハケメ 内：ナデ	2mm の砂粒含む	良	外：淡黄(2.5YR8/3) 内：褐灰(10YR4/1)	小片	沈線で施文
972	359 -04	-		弥生土器 壺	-	-		ナデ	2mm の砂粒含	良	外：灰白(10YR8/1) 内：灰白(5Y8/1)	小片	刺突で施文
973	359 -06	-		弥生土器 壺	-	-		外：ヘラミガキ 内：ナデ	2mm の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	小片	沈線・縄文・垂下隆帯・刺突で施文
974	359 -05	-		弥生土器 壺	-	-		ナデ	2mm の砂粒含	良	外：明黄褐(10YR7/6) 内：橙(5YR7/6)	小片	扇形櫛描文と円形浮文
975	359 -02	-		弥生土器 壺	-	-		ナデ	3mmの砂粒含	良	外：灰白(7.5YR8/2) 内：灰白(2.5YR8/1)	小片	沈線と縄文で施文
976	375 -03	-		弥生土器 細頸壺	13.2	-		外：ハケメ 内：ナデ	6mm 以下の小石多含	不良	灰白(10YR8/2)	1/3	
977	375 -01	-		弥生土器 細頸壺	11.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	5mm 以下の小石多含	不良	灰白(7.5YR8/2) ～にぶい橙(7.5YR6/4)	1/4	縄文と刺突で施文
978	376 -05	-		弥生土器 甕	39.0	-		ハケメ	細砂粒含	良	黄灰(2.5Y6/1) ～灰白(2.5Y8/2)	小片	口縁部に刻目
979	375 -04	-		弥生土器 壺	-	-		外：ヘラミガキ 内：ナデ	細砂粒含	不良	灰白(10YR8/1)	小片	櫛描横線文
980	376 -02	-		弥生土器 壺	-	-		外：ヘラミガキ 内：ナデ	5.5mm 以下の小石多含	不良	外：灰白(7.5YR8/1) ～にぶい橙(7.5YR7/3) 内：灰白(N8/0) ～灰(4/0)	1/4	縄文・沈線で施文
981	376 -03	-		弥生土器 壺	-	-		ハケメ	6mm 以下の砂粒多含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	1/4	沈線で施文
982	357 -02	-		弥生土器 壺	-	-	底径 7.8	外：ヘラミガキ 内：ナデ	2mm の砂粒含	良	灰白(10YR8/2)	底部完存	

第10－20表　第４次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
983	476 -01	SD4001 混入	N-102 SD1	弥生土器 壺	-	-	底径 4.8	ハケメ	2㎜ の砂粒含	良	外：浅黄橙(7.5YR8/3) 内：淡黄(2.5Y8/3) ～灰4(N)	1/3	
984	359 -01	-		弥生土器 甕	18.0	-		ハケメ	2㎜ の砂粒含	やや不良	灰白(7.5YR8/2)	1/8	口縁端部に刻目
985	375 -02	-		弥生土器 甕	24.0	-		ハケメ	1.5㎜ 以下の小石粒多含	良	外：橙(2.5YR6/6) 内：灰白(7.5YR8/2)	1/6	口縁端部に刻目
986	376 -01	-		弥生土器 甕	17.0	-		ハケメ	3㎜ 以下の砂粒多含	不良	灰白(7.5YR8/1)	1/8	口縁端部に刺突文
987	397 -03	-		弥生土器 甕	-	-	底径 7.4	ナデ	2㎜ 以下の砂粒多含	良	外：灰白(2.5Y8/2) 内：淡黄(2.5Y8/3)	底部完存	
988	376 -04	-		弥生土器 甕	-	-	底径 5.0	ヘラミガキ	細砂粒多含	良	橙(2.5YR6/6) ～にぶい赤褐(2.5YR5/3)	底部完存	
989	357 -03	-		弥生土器 甕	-	-	底径 5.4	ハケメ	2㎜ の砂粒含	良	外：灰白(10YR8/2) 内：灰白(2.5Y8/2)	1/2	
990	500 -04		表土	土師器 皿	9.0	1.2		外：未調整 内：ナデ	精良	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ完形	
991	401 -01	包含層	H－100 遺構上面	土師器 皿	8.0	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	橙(7.5YR7/6)	完形	
992	401 -02	包含層	H－100 地山直上	土師器 皿	8.1	1.3		外：未調整 内：ナデ	精良	良	淡黄(2.5YR8/3)	1/2	
993	500 -01	包含層	D－98 地山直上	土師器 皿	9.2	1.6		外：未調整 内：ナデ	精良	良	褐灰(10YR6/1)	ほぼ完形	指頭圧痕明瞭
994	399 -04	包含層	J－105 包	土師器 皿	9.8	1.8		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	
995	399 -03	包含層	J－108 包 一段下	土師器 皿	7.6	1.9		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄(2.5YR7/3)	1/3	
996	384 -02	包含層	J－105 包	土師器 皿	-	-		外：未調整 内：ナデ	0.5㎜ 以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	2/3	底部穿孔
997	500 -05	包含層	F－112 包	土師器 皿	10.0	1.7		外：未調整 内：ナデ	やや粗	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完形	口縁端部に油煙
998	400 -01	包含層	G－105 包 No.5	土師器 皿	15.0	2.9		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	2/3	
999	364 -06	包含層	D－98 砂利の上	土師器 皿	14.2	2.6		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4)	2/3	
1000	484 -01	包含層	D－100 地山直上	土師器 皿	14.1	3.1		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の砂粒・植物繊維含	やや不良	浅黄橙(10YR8/3)	完形	指頭圧痕明瞭 粘土紐明瞭
1001	397 -01	包含層	D－107 遺構上面	土師器 皿	13.2	2.5		外：未調整 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/4)	ほぼ完形	
1002	484 -02	包含層	G－108 坪堀り	土師器 皿	15.0	2.1		外：未調整 内：ナデ	2㎜ 以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/4) ～淡黄(5YR8/4)	完形	
1003	393 -02	包含層	E－113 包	土師器 皿	16.6	-		ナデ	微砂粒含	不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	1/10	
1004	398 -01		表土	土師器 甑	17.8	-		ハケメ	2㎜ 以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/6	
1005	366 -02	包含層	発掘区東壁トレンチ	土師器 鍋	25.0	-		ナデ	0.5㎜ 以下の砂粒含	良	外：灰褐(7.5YR4/2) 内：にぶい褐(7.5YR6/3)	1/3	
1006	383 -02	包含層	K－110 包	土師器 鍋	22.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	2㎜ 以下の小石含	不良	浅黄橙(7.5R8/4)	1/6	外面煤付着
1007	398 -02	包含層	M－100 遺構上面	土師器 鍋	20.0	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：工具ナデ	精良	良	外：黒(7.5YR2/1) 内：浅黄橙(10YR8/4)	1/2	
1008	360 -03	包含層	I－109 地上石のまわり	土師器 鍋	21.8	- -		外：上半ハケメ 下半未調整 内：工具ナデ	細砂粒含	やや不良	にぶい橙(7.5YR6/4)	1/5	外面下半煤付着
1009	495 -01	包含層	I－105 地山直上	土師器 鍋	23.2	-		外：上半ハケメ 下半ヘラケズリ 内：工具ナデ	2㎜ の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	1/4	
1010	392 -01	包含層	E－112 包	土師器 鍋	28.0	-		外：ナデ 内：工具ナデ	細砂粒含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/2	外面煤付着
1011	478 -01	SD4070 混入	H－101 SD70	土師器 鍋	37.5	-		外：ハケメ 内：ナデ	微砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	1/3	内外面煤付着
1012	392 -02	包含層	E－112 包	土師器 鍋	25.1	-		外：ハケメ 内：工具ナデ	微砂粒含	やや不良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部完存	外面煤付着
1013	392 -03	包含層	E－112 包	土師器 鍋	24.7	-		外：ハケメ 内：工具ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/4	外面煤付着
1014	394 -01	包含層	E－112 包	土師器 鉢	19.8	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	にぶい橙(10YR7/3)	1/12	内面煤付着

第10－21表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1015	388 -02	包含層	J－111 包	土師器 羽釜	20.0	-		外：ハケメ 内：ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/6	鍔以下煤付着
1016	360 -02	包含層	I－109 地山石のまわり	土師器 茶釜	12.9	-		外：ハケメ 内：ヘラケズリ	2.5mm 以下の小石含	不良	灰白(10YR8/2)	1/3	
1017	383 -01	包含層	G－104	土師器 茶釜	14.2	-		外：ハケメ 内：ナデ	植物繊維含	やや不良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/8	肩部に沈線1条
1018	397 -04	包含層	L－106 地山直上	須恵器 蓋	13.0	4.6		天井部外面ロクロケズリ、他はロクロナデ	精良	良	灰(N5/)	ほぼ完形	
1019	389 -01	包含層	E－103 包	須恵器 杯	12.0	-		ロクロナデ	精良	良	灰(6/N)	1/8	
1020	400 -03	包含層	G－104 包	山茶椀	15.6	5.5	高台径 4.9	ロクロナデ	精良	良	浅黄(2.5Y7/3)	1/3	高台に籾殻痕
1021	396 -02	包含層	D－98 砂利上面	山茶椀	16.0	5.4	高台径 6.2	ロクロナデ	精良	良	外：灰白(5Y7/2) 内：灰白(5Y)	4/5	
1022	494 -03	包含層	G－110 包 石垣	山茶椀	-	-	高台径 6.9	ロクロナデ	1mm の砂粒含	良	灰白(5Y8/2)	底部ほぼ完存	底部外面にヘラ書き文字「妙」
1023	400 -05	包含層	J－99 包	山茶椀 皿	9.4	2.7	高台径 4.7	ロクロナデ	やや精良	良	灰白(5Y7/2)	2/3	
1024	500 -02	包含層	D-105 地山直上	山茶椀 皿	9.0	2.0	高台径 4.2	ロクロナデ	1mm の砂粒含	良	浅黄(2.5Y7/3)	ほぼ完形	
1025	383 -05	包含層	H－98 包	白磁 椀	16.5	-		ロクロナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	1/10	
1026	399 -02	包含層	G－100 包	白磁 椀	15.4	5.5	高台径 5.7	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	釉：灰オリーブ (7.5Y6/2) 地：灰白(2.5Y8/1)	ほぼ完形	内面に直接重ね焼きの痕跡
1027	388 -01	包含層	K－110 包	施釉陶器 椀	18.4	5.5	高台径 4.0	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	0.5mm 以下の砂粒含	やや不良	地：灰白(2.5Y8/1) 釉：オリーブ黄 (7.5Y6/3)	1/4	内面にトチン痕
1028	481 -05	包含層	E－107 包	施釉陶器 椀	18.0	-		ロクロナデ	1 ～3mm の砂粒含	良	地：灰黄(2.5Y7/2) 釉：オリーブ黄 (7.5Y6/3)	1/12	内面にトチン痕
1029	485 -02	包含層	G－111 包	施釉陶器 椀	-	-	高台径 4.4	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：青灰(10BG5/1)	1/2	内面に直接重ね焼の痕跡
1030	485 -03	包含層	G－110 包	施釉陶器 椀	-	-	高台径 4.7	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：灰白(2.5Y8/2) 釉：緑灰(10G5/1)	1/2	内面に直接重ね焼の痕跡
1031	482 -01	表土	M－107 表土	施釉陶器 燭台?	-	-	脚径 6.0	ロクロナデ	精良	良	地：灰白(2.5Y7/1) 釉：灰白(7.5Y7/2)	1/5	瀬戸か美濃
1032	485 -05	SD4091 混入	G－103 SD91	施釉陶器 蓮弁文椀	11.0	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰白(5Y8/1) 釉：灰白(5Y8/2)	1/8	
1033	486 -03	包含層	M－108 包	青磁 椀	-	-	高台径 5.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：灰褐(5YR6/2) ～灰白(5Y8/1) 釉：淡黄(2.5Y8/3)	1/2	
1034	480 -04	包含層	F－104 包	青磁 椀	-	-	底径 4.7	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：褐灰(5YR5/1) 釉：緑灰(5G6/1)	小片	蓮弁文陰刻
1035	480 -02	包含層	D－114 配石	青磁 椀	-	-	底径 5.6	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：明褐灰(7.5YR7/2) 釉：灰オリーブ(5Y6/2)	1/2	
1036	480 -01	包含層	N－108 包	青磁 椀	-	-	底径 6.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：灰白(5Y7/1) 釉：オリーブ灰 (2.5GY6/1)	1/3	
1037	485 -06	SD4070 混入	H－101 SD70	青磁 椀	-	-	底径 7.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	1mm 以下の砂粒含	良	地：灰白(8/N) 釉：明緑灰(7.5GY7/1)	1/4	
1038	486 -06	包含層	L－108 地山直上	施釉陶器 筒形椀	-	-	底径 10.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	地：灰白(N8/) 釉：オリーブ灰(10Y6/2)	1/3	
1039	393 -01	包含層	E－106 包	天目茶碗	13.8	-		ロクロナデ	微砂粒・植物繊維含	良	にぶい褐(7.5YR6/3)	1/5	
1040	383 -03	包含層	F－112 包 集石の間	天目茶碗	11.7	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰黄(2.5Y7/2) 釉：赤褐(5YR4/6)	1/4	
1041	481 -06	包含層	L－98 包	天目茶碗	11.0	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰白(2.5Y8/2) 釉：黒(N1.5/0)	1/8	瀬戸
1042	387 -01	包含層	F－116 包	陶器 擂鉢	32.0	-		ロクロナデ	2mm 以下の砂粒含	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：にぶい赤褐 (2.5YR4/3)	1/8	瀬戸
1043	394 -02	包含層	J－111 包	陶器 擂鉢	43.4	-		ロクロナデ	精良	良	地：灰白(7.5Y8/1) 釉：にぶい赤褐(5YR4/3)	小片	
1044	354 -01	包含層	K－104 包	陶器 甕	50.0	-	底径 23.8	外：ヘラケズリ 内：ナデ	2mm の砂粒多含	良	外：褐灰(10YR6/1) 内：にぶい橙(7.5YR7/3)	底部完存他は小片	常滑
1045	381 -01	包含層	K－110 包	陶器 甕	44.8	-		ロクロナデ	4mm 以下の小石多含	良	灰赤(10YR4/2)	小片	常滑

第10－22表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1046	482-02	包含層	G－110 トレンチ	近世陶器 椀	10.0	-		ロクロナデ	精良	良	釉：にぶい赤褐(5YR4/4)	1/8	
1047	482-03	包含層	H－111 包	近世磁器 染付椀	-	-	高台径 4.0	ロクロナデ	精良	良	明緑灰(10GY8/1)	底部ほぼ完存	
1048	480-05	包含層	J－108 包	近世陶器 椀	-	-	高台径 4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(10YR8/1) 釉：灰オリーブ (7.5Y5/3)	底部 1/2	
1049	481-01	包含層	G－110 トレンチ	近世陶器 丸椀	-	-	高台径 4.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(2.5Y8/1) 釉：にぶい赤褐(5YR4/3)	底部完存	
1050	399-01	包含層	H－13 包	近世磁器 皿	11.8	3.2	高台径 4.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(7.5YR8/1) 釉：緑灰(5G6/1)	1/3	内面に直接重ね焼痕
1051	481-02	包含層	G－110 トレンチ	近世陶器 丸椀	-	-	高台径 4.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：灰白(2.5Y8/1) 釉：にぶい赤褐(5YR4/3)	底部完存	
1052	483-01	包含層	G－114 包	近世陶器 灯明皿	内側 8.4	-	底径 5.0	外：ロクロケズリ 内：ロクロナデ	精良	良	灰白(2.5Y8/2)	1/8	
1053	482-05	包含層	G－114 トレンチ	近世陶器 香炉	10.7	6.2	底径 8.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	1mm 以下の砂粒含	良	外：灰白(2.5Y8/2) 内：橙(7.5YR6/6) 釉：明黄褐(7.5YR6/6)	1/3	内外面にトチン痕
1054	482-04	包含層	K－103 包	施釉陶器 香炉	11.2	4.6	底径 7.5	ロクロナデ	1mm 以下の砂粒含	良	地：灰黄(7.5YR6/3) 釉：オリーブ黄 (7.5Y6/3)	1/3	
1055	482-06	包含層	G－110 トレンチ	近世陶器 鉢?	-	-	底径 10.6	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：赤黒(10R2/1) ～暗赤褐(5YR3/3)	1/3	内面にトレンチ痕
1056	483-02	包含層	L－99 包	近世陶器 燭台脚	6.0	-		ロクロナデ	3mm 以下の砂粒含	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：灰赤(2.5YR5/2)	2/3	組合式の脚
1057	486-02	SK4035	K－106 SK35	近世陶器 鉢?	-	-	底径 26.0	ロクロナデ	精良	良	地：淡黄(2.5Y8/3) 釉：灰白(5Y8/1)	1/12	瀬戸
1058	365-05	包含層	M－100 遺構上面	瓦器 火舎	-	-		ロクロナデ	精良	良	灰白(5Y8/1)	小片	
1059	384-04	包含層	F－111 包	瓦器 火舎	-	-	頸部 32.0	ナデ	精良	良	灰(N4/)	小片	
1060	385-04	包含層	J－106 包	紡錘車	3.3	0.8	重量 9.2g	ナデ	精良	良	褐灰(10YR5/1)	完形	土師器椀底部を転用
1061	364-03	包含層	F－107 地山直上	紡錘車	4.2	1.1	重量 15.5g	ナデ	精良	良	橙(5YR7/6)	完形	土師器椀底部を転用
1062	385-03	包含層	G－108 包	紡錘車	4.2	0.9	重量 15.1g	A面：ナデ B面：未調整	精良	良	にぶい橙 (5YR7/4)	完形	土師器椀底部を転用
1063	364-04	包含層	L－109 地山直上	紡錘車	4.5	1.2	重量 22.7g	ナデ	精良	良	橙(7.5YR7/6)	完形	土師器椀底部を転用
1064	385-01	包含層	F－106 包	紡錘車	4.6	0.9	重量 17.2g	ナデ	精良	良	灰白(10YR8/2) ～褐灰810YR6/1)	完形	土師器椀底部を転用
1065	367-03	包含層	C－111 包	紡錘車	4.4	1.2	重量 15.7g	A面：ナデ B面：未調整	精良	良	灰白(7.5YR8/2) ～灰白(7.5YR7/3)	完形	土師器椀底部を転用
1066	384-01	包含層	F－103 包	紡錘車	4.2	1.0	残重量 7.8g	ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	1/2	土師器椀底部を転用
1067	364-02	包含層	G－110 トレンチ	加工円盤	7.1	1.2	重量 50.6g	A面：ナデ B面：未調整	0.5mm の砂粒含	良好	灰白(2.5Y8/2)	完形	山茶椀底部を転用
1068	372-02	包含層	G－104 包	加工円盤	4.9	1.2	重量 37.3g	A面：ナデ B面：ロクロケズリ	精良	良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	天目茶椀底部を転用
1069	372-04	包含層	J－99 包	加工円盤	4.7	1.0	重量 16.3g	ナデ	精良	良	浅黄橙(10YR8/3) ～淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完形	土師器椀底部を転用
1070	373-04	包含層	L－99 包	加工円盤	4.7	1.3	重量 29.4g	ナデ	2mm 以下の砂粒含	良	赤橙(10R6/6)	完形	陶器甕胴部を転用
1071	374-03	包含層	J－105 包	加工円盤	2.7	1.2	重量 11.1g	ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	にぶい橙(5YR7/4)	完形	陶器甕胴部を転用
1072	-	-	K－109 P14	加工円盤	5.0	1.0	重量 36.5g	ロクロナデ	0.5mm の砂粒若干含	良	橙(7.5YR7/6)	完形	陶器甕胴部を転用
1073	-	-	K－102 P1	加工円盤	4.4	1.0	重量 15.6g	A面：ナデ B面：未調整	精良	良好	にぶい橙(7.5YR7/3)	完形	土師器椀底部を転用
1074	-	包含層	G－114 包	加工円盤	3.5	0.5	重量 9.1g	A面：ハケメ B面：ナデ	精良	良好	にぶい橙(7.5YR7/4)	完形	土師器甕胴部を転用
1075	-	包含層	L－109 包	加工円盤	5.2	1.2	重量 48.7g	ナデ	0.1mm の白色微砂含	良好	橙(5YR7/6)	完形	陶器甕胴部を転用
1076	-	包含層	L－109 包	加工円盤	4.8	1.3	重量 38.8g	ロクロナデ	2mm の砂粒若干含	良好	にぶい赤褐(2.5YR5/4)	完形	陶器甕頸部を転用
1077	-	包含層	E－106 地山直上	加工円盤	4.0	1.2	重量 24.6g	A面：ロクロナデ B面：ロクロケズリ	精良	良好	地：灰白(10YR8/2) 釉：赤黒(10R2/1)	完形	天目茶碗底部を転用
1078	-	包含層	J－109 地山直上 石の周り	加工円盤	6.1	1.1	重量 32.0g	A面：ナデ B面：未調整	精良	良好	浅黄橙(7.5YR8/4)	4/5	土師器椀底部を転用

第10－23表　第4次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種	法量 (cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1079	-	包含層	I－109 地上石の周囲	加工円盤	3.2	1.4	重量 16.5g	ロクロナデ	0.1mm 白色微砂若干含	良好	赤(10R5/6)	完形	陶器甕胴部を転用
1080	-	包含層	N－108 包	加工円盤	4.2	1.1	重量 22.8g	ロクロナデ	0.1mm 白色微砂若干含	良好	にぶい赤褐(7.5R4/3)	完形	陶器甕胴部を転用
1081	-	包含層	E－114 集石間	加工円盤	3.4	1.0	重量 19.6g	ロクロナデ	0.1mm 白色微妙若干含	良好	灰赤(10R4/2)	完形	陶器甕胴部を転用
1082	-	包含層	G－114 包	加工円盤	5.2	1.2	重量 35.7g	A面：ロクロナデ B面：ロクロケズリ	精良	良好	地：浅黄橙 (10YR8/3) 釉：黒(7.5YR1.7/1)	完形	天目茶椀底部を転用
1083	-	包含層	E－103 包	加工円盤	5.5	1.2	重量 46.8g	ナデ	0.1mm の白色微砂若干含	良好	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	完形	陶器甕胴部を転用
1084	-	包含層	G－99 包	加工円盤	7.5	1.7	重量 64.7g	A面：ロクロナデ B面：未調整	精良	良好	淡黄(2.5Y8/3)	完形	ロクロ土師器椀底部を転用
1085	-	包含層	J－107 包	加工円盤	3.9	1.2	重量 18.0g	ロクロナデ	1mm 以下の白色微砂含	良好	赤褐(10R5/4)	完形	陶器甕胴部を転用
1086	-	包含層	J－109 包	加工円盤	4.6	1.0	重量 28.2g	ロクロナデ	1mm 以下の白色微砂含	良好	灰赤(2.5YR4/2)	完形	陶器鉢口縁部を転用
1087	393 -04	包含層	N－108 包	土錘	1.4	-	残重量 8.7g	ナデ	1.5mm 以下の小石粒含	良	灰白(10YR8/1)	ほぼ完形	
1088	367 -04	包含層	D－98 包	土錘	1.0	3.5	残重量 2.8g	ナデ	微砂粒含	不良	灰白(10YR8/2)	ほぼ完形	
1089	384 -03	包含層	K－107 包	土玉	1.4	1.7	重量 4.0g	ナデ	精良	良	にぶい橙(7.5YR7/3)	完形	
1090	355 -05	包含層	K－101 包	銭貨	2.8	-	重量 4.7g	-	-	-	黒(7.5Y2/1)	完形	寛永通宝
1091	355 -04	包含層	J－98 包	銭貨	2.6	-	重量 3.4g	-	-	-	暗灰黄(2.5Y4/2)	完形	文久永宝
1092	355 -02	包含層	F－104 包	銭貨	2.5	-	重量 2.0g	-	-	-	青灰(5B5/1)	完形	永楽通宝
1093	355 -06	表土	L～N －18 土堤	銭貨	2.3	-	重量 3.4g	-	-	-	黒(7.5YR1.7/1)	完形	一銭
1094	393 -05	包含層	E－106 包	砥石	幅 4.1	厚 2.0		-	-	-	にぶい黄橙(10YR7/2) ～にぶい褐(7.5YR5/4)	1/2	
1095	383 -06	包含層	G－109 包	砥石	幅 3.9	厚 3.2	残重量 171.9g	-	-	-	明褐灰(7.5YR7/2)	1/2	
1096	385 -02	包含層	K－98 包	砥石	幅 5.0	厚 1.4	残重量 92.8g	-	-	-	灰(5/N)	1/2	
1097	382 -01	包含層	G－110 包・石垣	軒丸瓦	13.3	-		ナデ	5mm 以下の小石含	良	灰白(N5/0)	瓦当完存	
1098	366 -01	包含層	E－104 地山直上	軒丸瓦	13.6	-		ナデ	精良	良	灰(5Y6/1)	瓦当ほぼ完存	
1099	386 -02	包含層	F－112 包 集石の間	軒丸瓦	15.0	-		ナデ・ヘラケズリ	3mm 以下の砂粒含	やや不良	灰(5/N)	瓦当ほぼ完存	
1100	386 -01	包含層	F－98 包	軒丸瓦	12.0	-		ナデ・ヘラケズリ	2mm 以下の砂粒含	やや不良	灰(6/N)	1/2	
1101	389 -02	包含層	E－103 包	軒丸瓦	-	-		ナデ・ヘラケズリ	1mm 以下の砂粒・植物繊維含	良	灰白(2.5Y7/1) ～灰白(7/N)	1/6	
1102	387 -02	包含層	G－110 包	軒平瓦	-	-		凹面：布目 凸面：ナデ	3mm 以下の砂粒含	やや不良	灰(N6/1)	1/3	
1103	382 -03	包含層	L－98 包	軒平瓦	-	-		ナデ	精良	良	灰白(N8/0)	1/3	
1104	380 -01	包含層	L－98 包	軒平瓦	-	-		ナデ	2mm 以下の小石含	不良	灰(N6/0)	1/3	
1105	389 -03	包含層	E－98 包	軒平瓦	-	-		ナデ	8mm 以下の小石・植物繊維含	良	灰白(2.5Y8/2)	1/2	
1106	390 -02	包含層	E－98 包	軒平瓦	-	-		ナデ	2mm 以下の砂粒含	やや不良	灰(6/N)	2/3	
1107	390 -01	包含層	E－98 包	軒平瓦	-	-		ナデ	1mm 以下の砂粒含	良	灰(4/N)	1/2	
1108	382 -02	包含層	I－112 包	隅軒平瓦	-	-		凹面：ナデ 凸面：ヘラケズリ	4mm 以下の小石含	良	灰白(N8/0)	1/2	
1109	395 -01	包含層	E－98 包	丸瓦	-	6.9		凹面：タタキ 凸面：ナデ	4mm 以下の小石含	良	灰白(N8/0)	2/3	
1110	391 -01	包含層	E－98 包	丸瓦	-	7.5		凹面：吊り紐痕 凸面：ヘラケズリ	3mm 以下の砂粒含	やや不良	灰(5/N)	3/4	
1111	368 -01	包含層	E－98 包	鬼瓦	-	-			2mm 以下の小石粒含	良	灰白(N7/0) ～灰(N4/0)	1/3	

第10－24表　第4次調査出土遺物観察表

Ⅶ. 第５次調査

１．基本層序

基本的には、５層からなる。上から第１層・第２層は、表土である。但し、住宅建築や耕作などにより現況をとどめておらず、土色についても場所によって変わる。第３層は、上層遺物包含層である。土色及び土質は黒褐色やや粘質土(7.5YR3/1)で、縄文時代早期から近代までの遺物を包含する。第４層は、灰黄褐色粘質砂混土(10YR4/2)で、この土層の上面において上層遺構を検出した。また、場所によっては遺構検出面から押型文土器が顔を出しており、下層遺物包含層であることも理解できた。第５層は、浅黄色粘質砂混土(2.5Y7/4) で上面で下層遺構を検出した。場所によっては、第４層がなく、第５層が上層遺構検出面のレベルまで上がっているところもある。

２．遺　構

遺構については、他の調査との混同を避けるため、遺構番号の前に５を付けることにした。例えばＳＨ20はSH520となる。これ以外の遺構については、遺構対照表を参照されたい。

(1) 縄文時代後期の遺構

A．石囲炉

ＳＦ 524　2辺がSD550によって切られて、原形をとどめていないが、一辺が40㎝程の方形の石囲炉と考えられる。竪穴住居等を検出できず屋内炉か屋外炉かは判別できなかった。時期については、直近の包含層より中津式期[1]の深鉢片が出土しており、縄文時代後期と判断した。

B．配石遺構

ＳＺ 533　大小の河原石10数個を無造作に配している。配石の上面は、ほぼ水平になっていた。掘り形は、長径1.1ｍ、短径0.8ｍ、深さ8㎝であった。一志郡嬉野町天白遺跡[2]、度会郡度会町森添遺跡[3]においても同様の遺構がみられる。

(2) 弥生時代中期の遺構

ＳＸ505・ＳＸ507・ＳＸ508・ＳＸ526の遺構埋土については、自然科学分析を実施している。報文に若干の記述があるが、詳細についてはⅨに譲りたい[4]。

A．土坑

ＳＫ 509　長軸5.1ｍ、短軸1.2ｍ、深さ10～15㎝の南北に細長い土坑である。ＳＸ516 と切り合っているが、切り合いは不明である。埋土中より弥生土器片が若干出土している。

ＳＫ 510　長軸5.1ｍ、短軸1.2ｍ、深さ25～59㎝の東西に細長い土坑である。調査区外東側に、遺構は延びる。埋土は、上層黒褐色土(10YR1.7/1)、下層にぶい黄橙色砂混土(10YR4/3) の2層である。埋土中より弥生土器片が若干出土している。

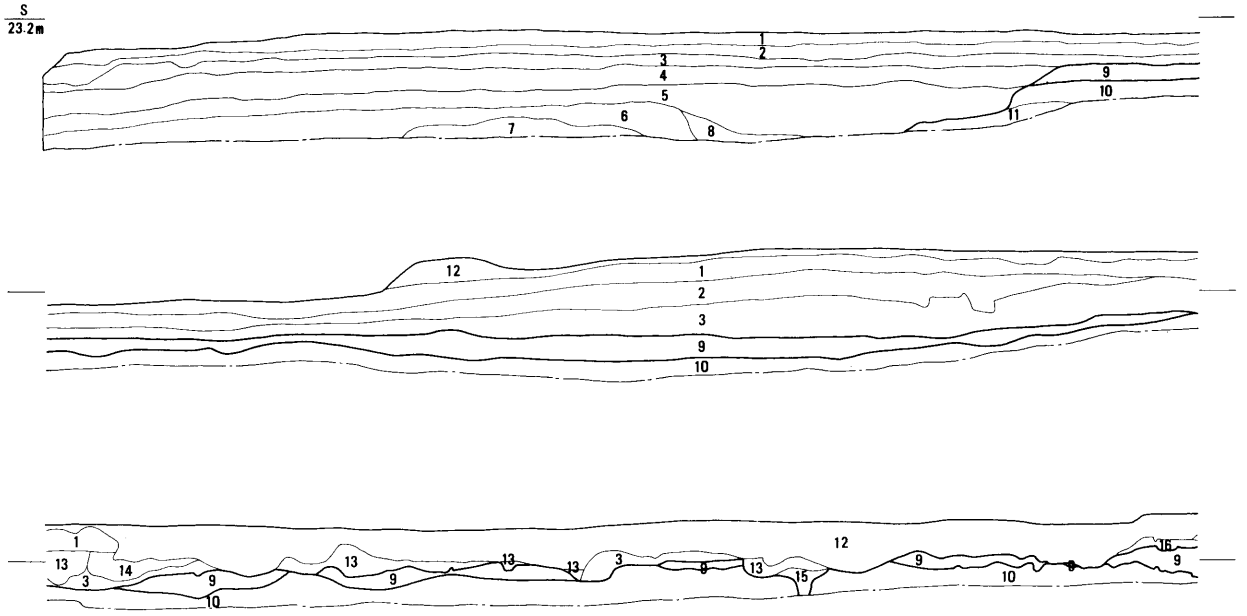
B．土坑墓

ＳＸ 505　長軸方向に2.5ｍ、短軸方向に1.0ｍ、深さ56～59㎝の平面だ円形の土坑墓である。断面は袋状を呈している。遺構のほぼ中央、底部より約20㎝上に完形の甕が埋設されている。埋土は黒褐色土である。なお、埋土からサンプルを採取し自然科学分析を行った。分析結果は、リン酸の濃集が認められ、土坑墓と考えられる数値であった。

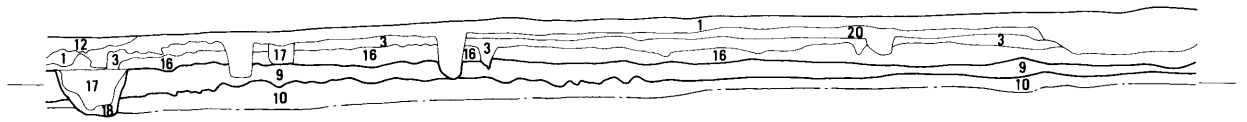
ＳＸ 507　長軸方向に2.3ｍ、短軸方向に1.5ｍ、深さ38～42㎝の隅丸方形の土坑墓である。埋土は、黒褐色土である。底部の南半に弥生土器片が集中していた。量的にはそれほど多くない。なお、埋土の自然科学分析を行ったところ、リン酸の濃集とカルシウ

第 49 図　調査区遺構平面図（1：200）

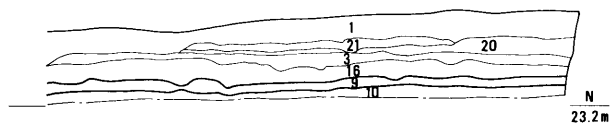
調査区西壁



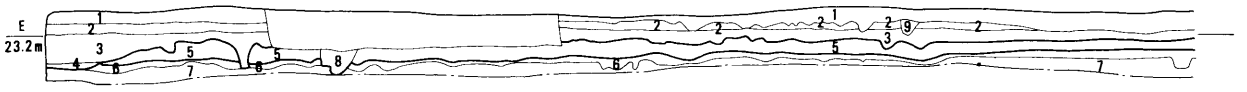
① 暗褐色礫混土（10YR3／4）
② 灰褐色砂利混土（7.5YR4／1）
③ 黒褐色やや粘質土（7.5YR3／1、上層遺物包含層）
④ 黒褐色粘質土（2.5YR3／1）
⑤ 黒色粘質土（10YR1.7／1）
⑥ 灰オリーブ色粘質砂混土（5Y4／2）
⑦ 灰色砂質土（10Y5／1）
⑧ にぶい黄褐色粘質砂混土（10YR5／3）
⑨ 灰黄褐色粘質砂混土（10YR4／2、上層検出面）



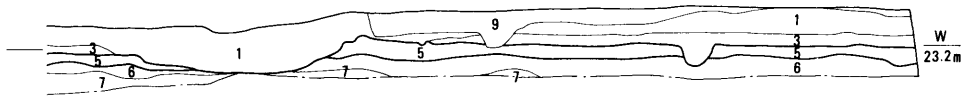
⑩ 浅黄色粘質砂混土（2.5Y7／4、下層検出面）
⑪ 黄褐色粘土（2.5Y6／4）
⑫ 黄橙礫混土（7.5YR7／8）
⑬ 黒褐色やや粘質土（7.5YR3／1）に黒色土（5Y3／1）混る
⑭ 黒褐色やや粘質土（7.5YR3／1）に黄橙色礫混土（7.5YR7／8）混る
⑮ 黒色土（5YR1.7／1）に黒褐色土（5YR2／1）混る
⑯ 黒褐色粘質砂混土（10YR2／2、上層包含層）
⑰ 黒色土（10YR1.7／1）ににぶい黄褐色砂混土（10YR4／3）混る
⑱ にぶい黄褐色砂混土（10YR4／3）に黄橙色土（10YR8／6）混る
⑲ 暗褐色礫混土（10YR3／4）に黒褐色やや粘質土（7.5Y3／1）混る
⑳ 灰褐色礫混土（7.5YR4／2）
㉑ 褐灰色土（7.5Y4／1）に褐色土（10YR4／4）混る

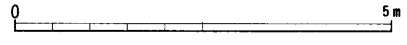


調査区内セクション



① 暗褐色礫混土（10YR3／4）
② 黒褐色礫混土（10YR3／2）
③ 黒褐色やや粘質土（7.5YR3／1、上層遺物包含層）
④ 黒色粘質土（10YR1.7／1）
⑤ 灰黄褐色粘質砂混土（10YR4／2、上層検出面）
⑥ 浅黄色粘質砂混土（2.5Y7／4、下層検出面）
⑦ 暗灰黄色粘質砂混土（2.5Y4／2）
⑧ 黒褐色礫混土（10YR2／2）に暗褐色礫混土（10YR3／4）混る
⑨ 黒褐色礫混土（10YR3／2）に黒褐色礫混土（10YR2／2）混る





第50図　土層断面図（1：100）

ム含量がやや高値という分析結果をえた。

S X 508　長軸方向に2.1m、短軸方向に1.0m、深さ48～50cmの平面だ円形の土坑墓である。埋土は、黒褐色土である。SX507 直近の東に位置している。遺構ほぼ中央の底部から遺物が少量出土している。埋土については自然科学分析を行った。リン酸含量とカルシゥム含量が高値という分析結果であった。

S X 516　長軸方向に1.9m、短軸方向に0.7m、深さ46～59cmの平面方形の土坑墓である。遺構の上の方、南西端から弥生土器壺が逆位の状態で出土した。遺構が埋まる過程で投げ入れられたのであろうか。

S X 517　長軸方向に1.9m、短軸方向に0.4m、深さ41～54cmの平面だ円形の土坑墓である。遺構埋土は、ほとんどが黒色粘質土（10YR2/1）で、底部付近で若干の土色の違いがみられた。埋土中より弥生土器片が若干出土している。

S X 526　長軸方向に3.0m、短軸方向に1.0m、深さ75cmの平面だ円形の土坑墓である。断面は袋状を呈している。SH520とSH521に切られている。遺構の南から若干弥生土器片が出土している。埋土については自然科学分析を行った。分析結果は、リン酸の濃集とカルシゥム含量がやや高値であった。

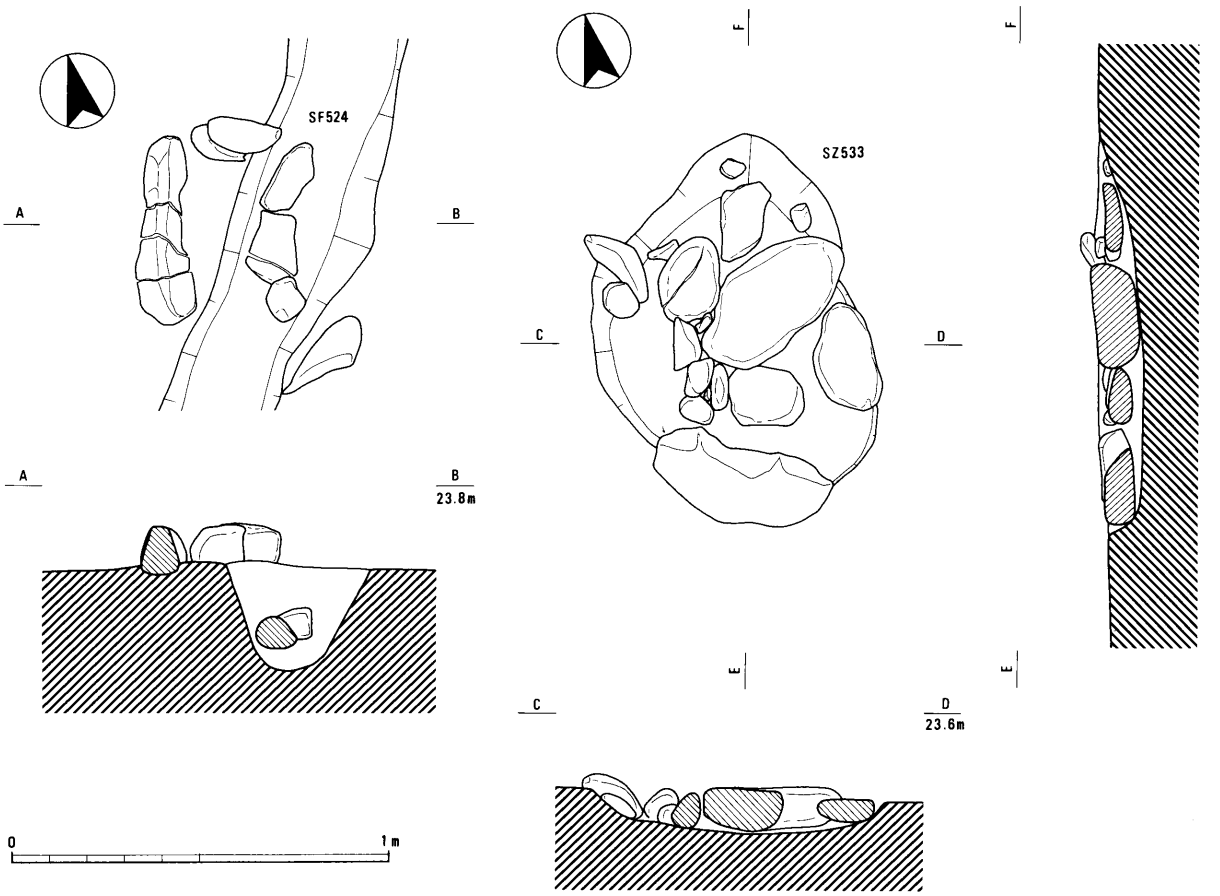
C．方形周溝墓

S X 556　東西に9.4m、南北に8.4mの方形周溝墓である。削平されているため周溝も浅い。深さについては10cm～21cmであった。四隅が切れているようにみえるが、周溝の浅い部分が大きく削平されている可能性も考えられる。SK523・528、SD522・535に切られている。主体部は検出することはできなかった。周溝の埋土から少量の弥生土器片が出土した。

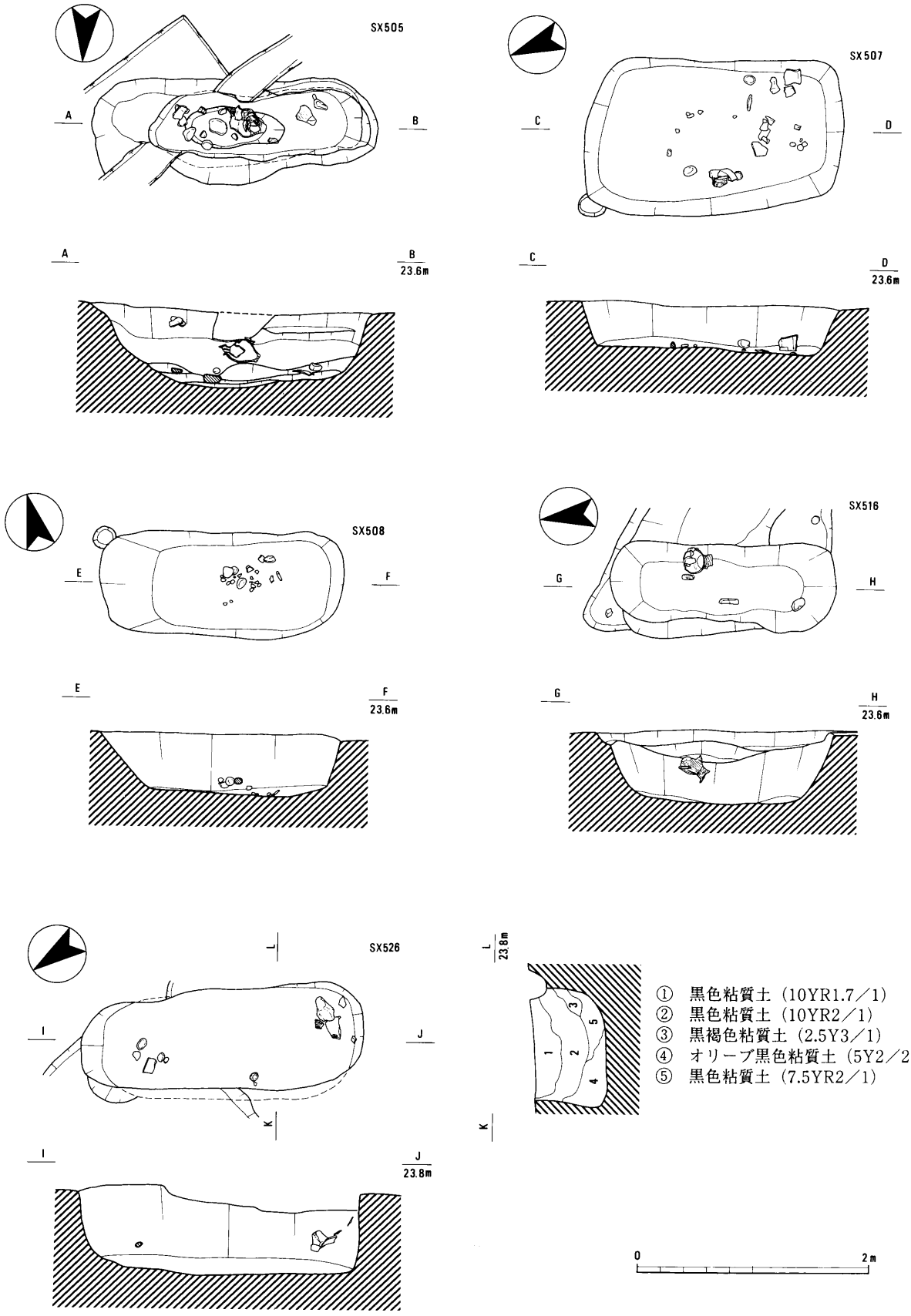
(3) 奈良時代の遺構

A．竪穴住居

S H 502　平面形は隅丸方形で、一辺が3.3mで6～11cmの深さがある。南東隅に竈の痕跡の焼土塊がみられる。埋土は、黒褐色土の1層である。土師器片が若干出土している。



第51図　SF524・SZ533実測図（1：20）



第52図　SX505・507・508・516・526実測図（1：50）

ＳＨ514　東側の一辺が３ｍ、深さ３～４㎝である。削平により西から南西にかけてプランがとんでいるが、平面形は隅丸方形であろう。北に竈の痕跡と考えられる焼土塊がみられる。土師器片が少量出土している。

ＳＨ519　東西2.7m、南北4.5m、深さ6～10㎝で平面形は台形状である。南東部分に竈の痕跡と思われる焼土塊がみられる。なお、焼土塊の中央部分に支石を確認した。南西部分の一部に貼床が残存していた。遺構埋土から土師器片と須恵器片が出土している。

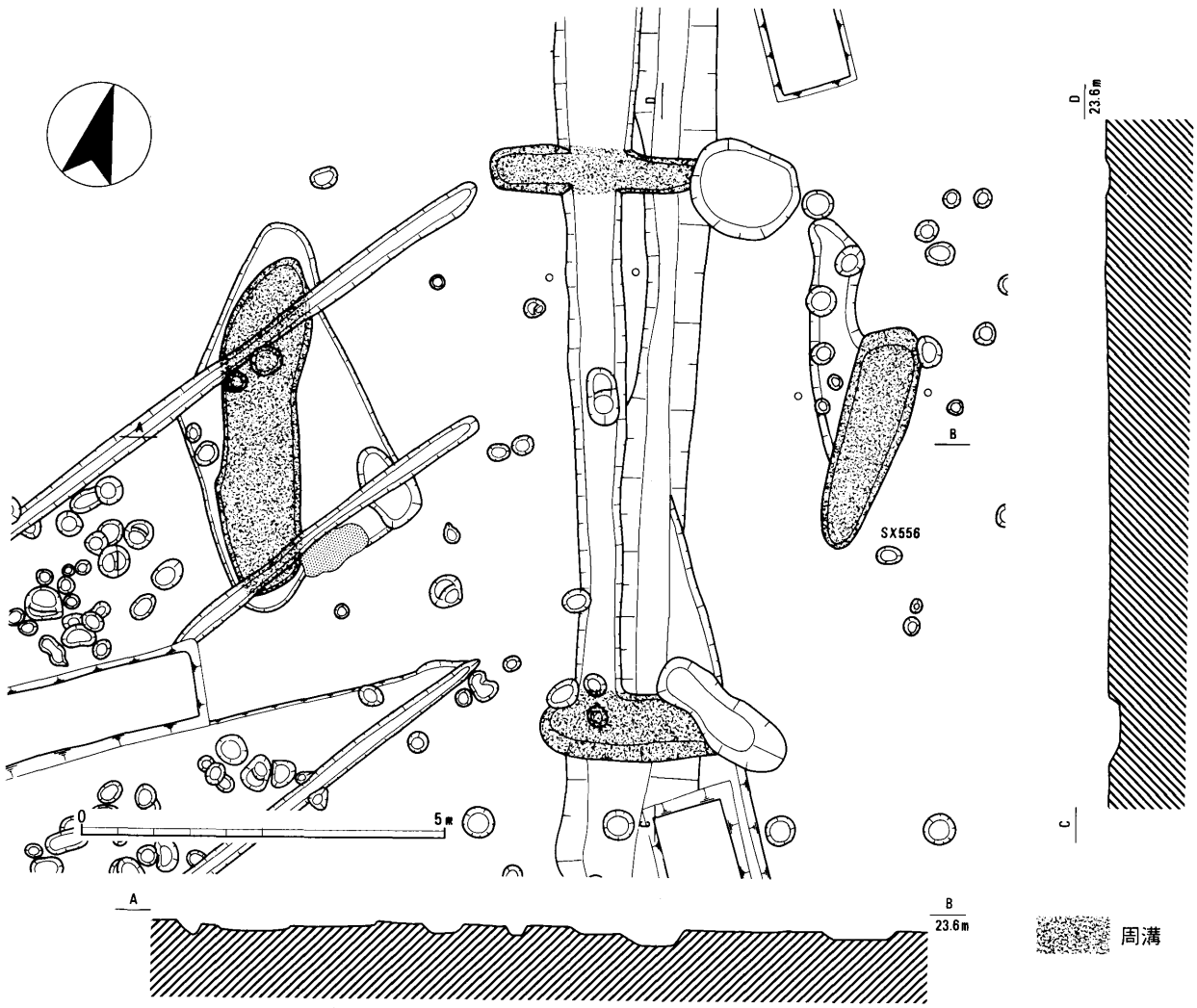
ＳＨ520　東西3.4m、南北4.3m、深さ10㎝で平面形は南北にやや細長い隅丸方形である。南東部分に竈の痕跡と思われる焼土塊がみられた。なお、遺構埋土からは土師器小片と須恵器小片が出土した。

ＳＨ521　東西3.7m、南北4.5m、深さ10～17㎝で平面形は南北にやや細長い隅丸方形である。南東部分に竈の痕跡と思われる焼土塊がみられた。床面のすべてが貼床であった。遺構埋土からは土師器小片と須恵器小片が出土した。なお、南東隅には貯蔵穴を検出した。貯蔵穴の埋土から「☆」の線刻が施された土師器杯が出土した。魔除け等のためにこの貯蔵穴にいれられたものか。[5]

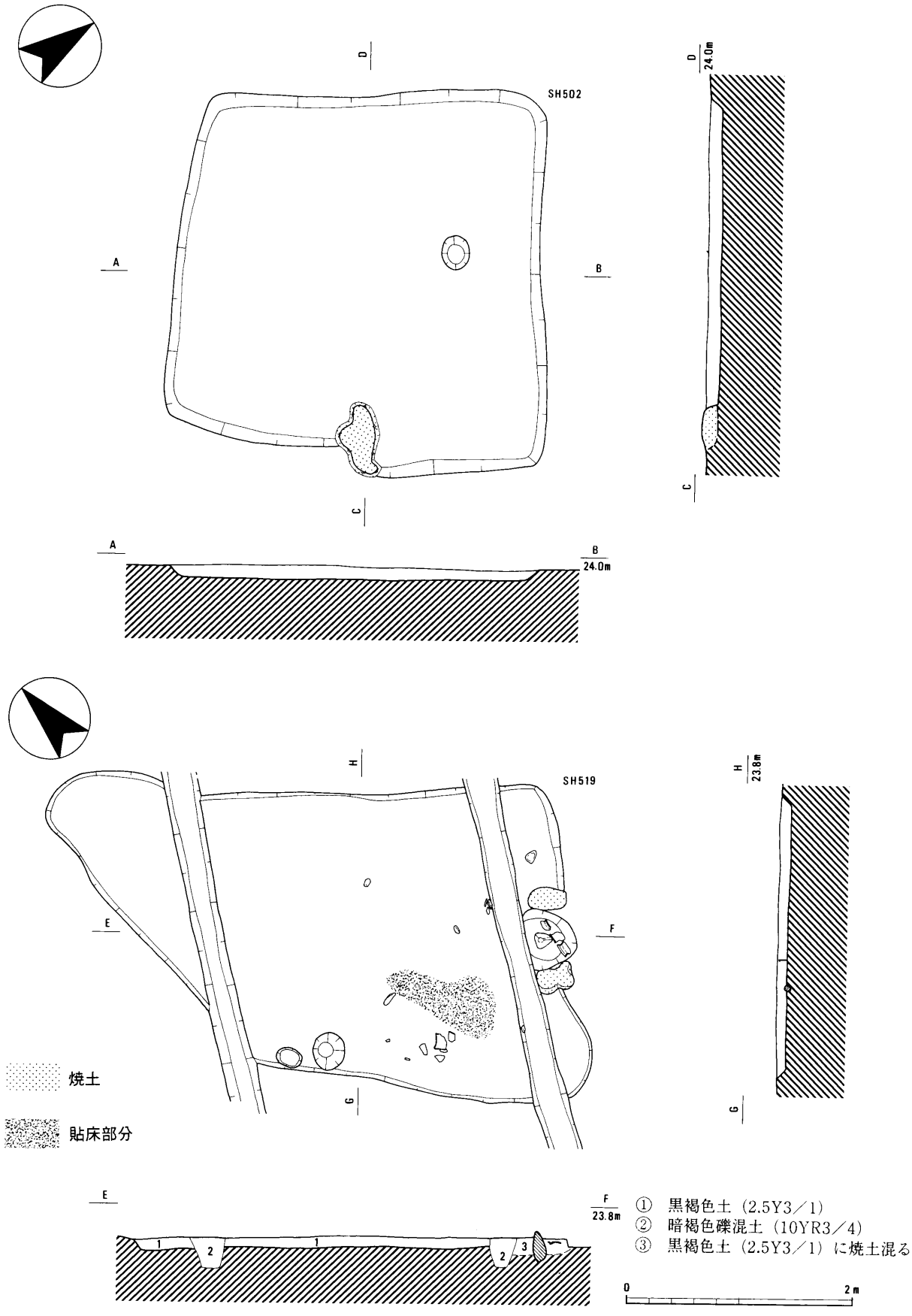
ＳＨ534　北側の一辺3.0mが残っているだけで、あとは削平などにより検出ができなかった。残った１辺の中央に竈の痕跡と考えられる焼土塊がみられた。埋土からは、少量の土師器小片が出土した。

Ｂ．掘立柱建物

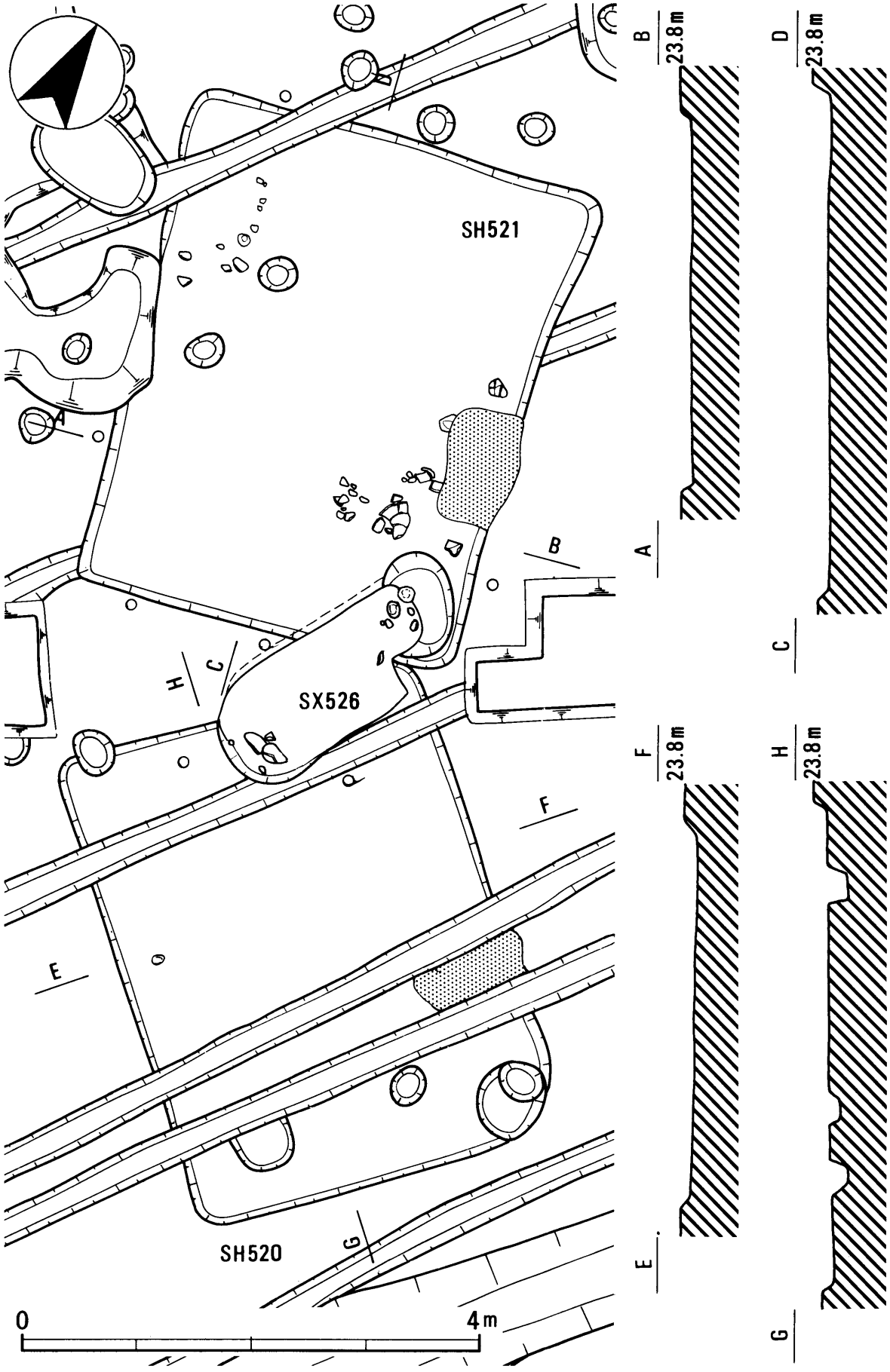
ＳＢ536　桁行2間、梁行3間の掘立柱建物である。桁行3.6mで柱間は1.8m、梁行6.3mで柱間は2.1mの規模がある。棟方向はE20°Nである。柱穴からの出土遺物は破片が多く、土師器甕体部片が出土してい



第53図　SX556実測図（１：100）



第54図　SH 502・519実測図（1：50）



第55図　SH520・521実測図（1：50）

る。

C．竈跡

ＳＦ 540　SH502 の西側直近にある焼土塊である。遺構検出面より20㎝程焼土だけが盛り上がり、粘質の焼土に黒褐色土が混入していた。竈の痕跡と思われる。住居跡等を検出することはできなかった。なお、焼土塊からは土師器皿や甕が折り重なるように出土した。そのなかには、底部外面に陰陽五行説の影響とも考えられる[6]「☆」の線刻のある土師器皿がみられた。

(4) 平安時代の遺構

A．掘立柱建物

ＳＢ 538　桁行2間、梁行3間の掘立柱建物である。桁行4.4ｍで柱間は2.7ｍ･2.2ｍ･1.7ｍ、梁行6.6ｍで柱間は2.2ｍの規模がある。棟方向はE21.2°Nである。柱穴からの出土遺物は、ほとんどが土師器片であったが、若干の須恵器片もみられた。

ＳＢ 539　SB538 の直ぐ東隣に位置する。桁行2間、梁行１間以上の掘立柱建物である。調査区外の東側に遺構は延びる。桁行2.6ｍで柱間は1.3ｍ、梁行1.6ｍ以上で柱間は1.3ｍの規模がある。棟方向についてはE34°Nである。柱穴からの出土遺物は、ほとんどが土師器片であったが、縄文時代早期の押型文土器が１点混入していた。

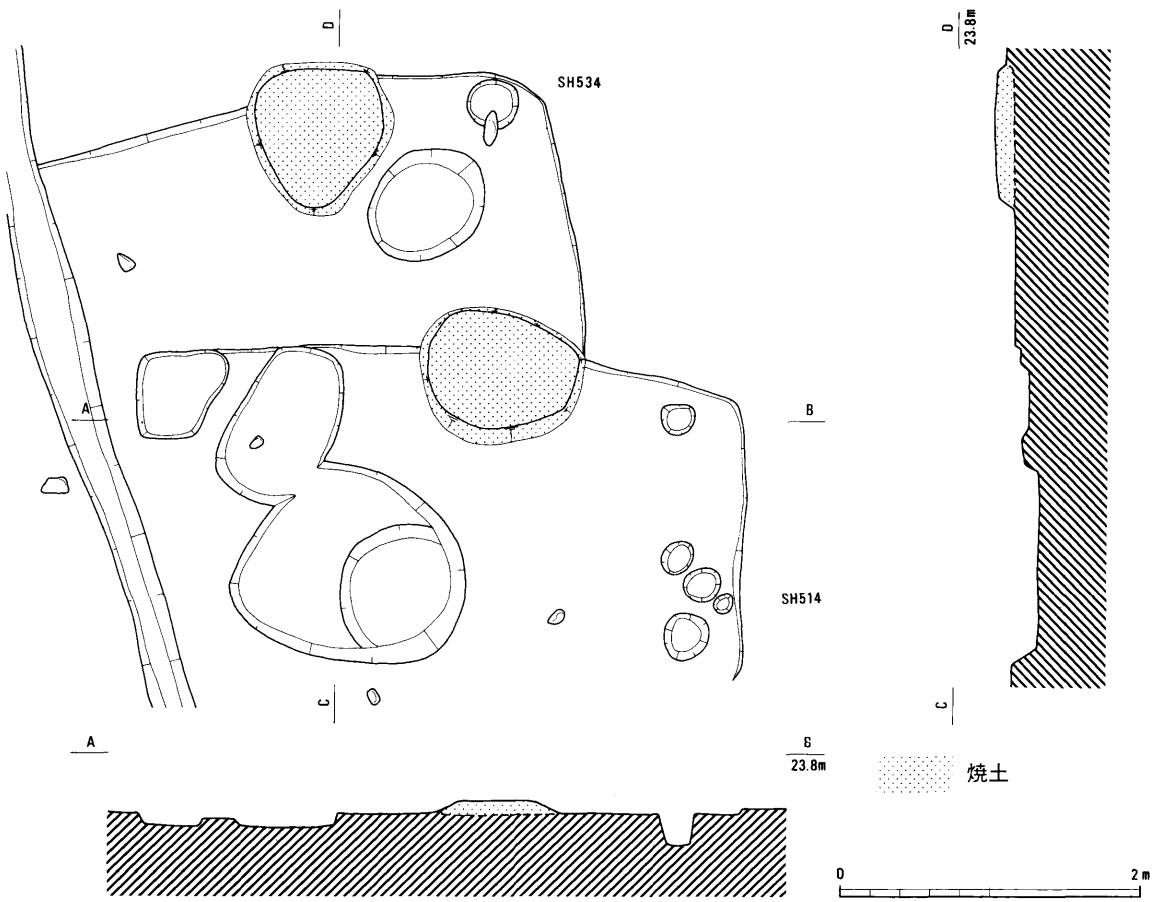
B．溝

ＳＤ 503　調査区のほぼ中央に位置する幅1.4m、深さ7～10㎝の溝である。少しずつ浅くなり消失するものと考えられる。土師器片、須恵器片、山茶椀片が埋土より出土している。

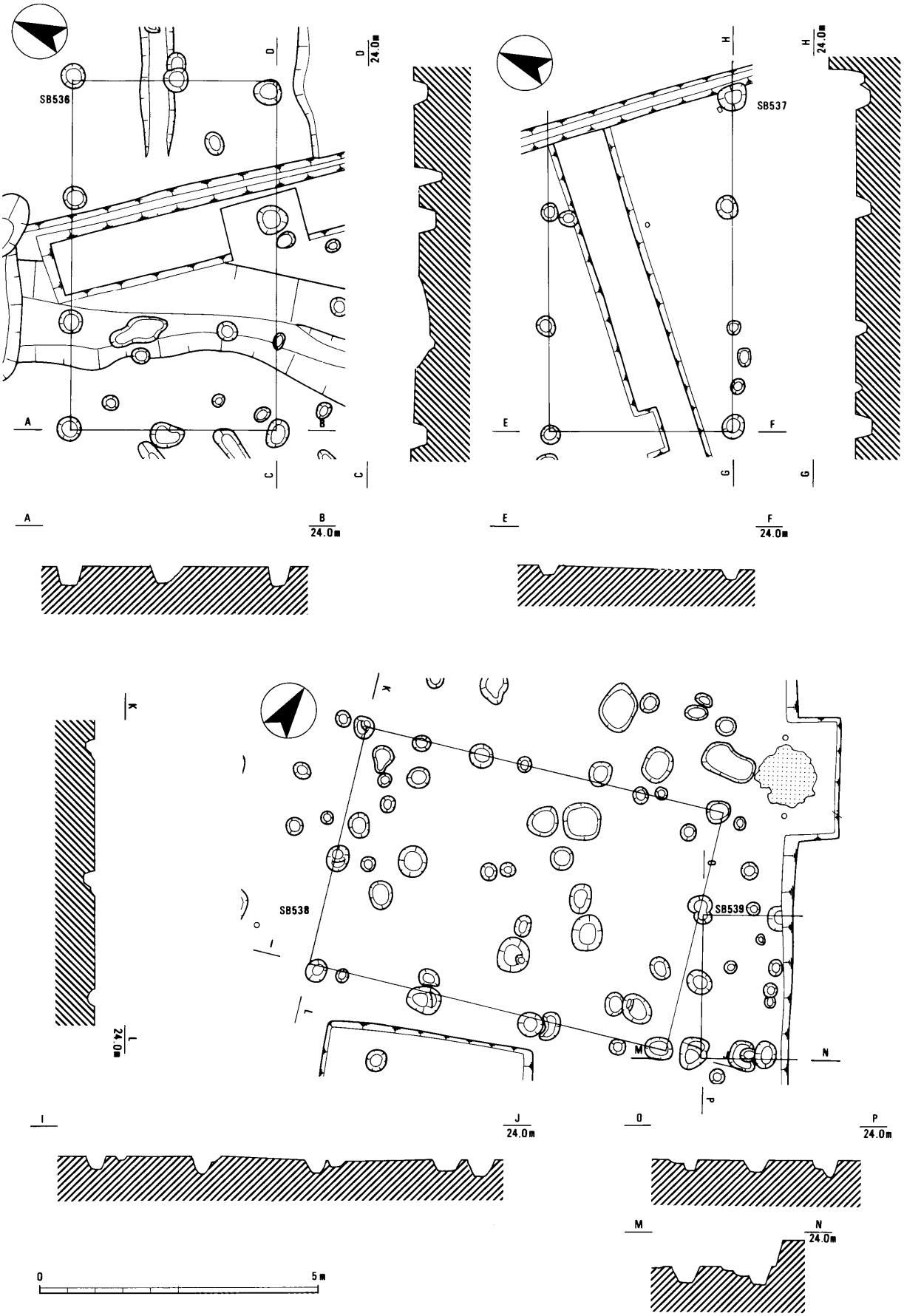
(5) 鎌倉時代以降の遺構

A．掘立柱建物

ＳＢ 537　桁行1間、梁行3間以上の掘立柱建物である。桁行3.1ｍで柱間は3.1ｍ、梁行6.0ｍで柱間は2.0ｍの規模がある。棟方向はE16.5°Nである。調



第56図　SH514・534実測図（１：50）



第57図　SB536・537・538・539実測図（1：100）

査区外の東側に延びる。柱穴からは、土師器の小片が若干出土している。鎌倉時代の遺構か。

B．井戸

ＳＥ 525　長径2.6m、短径1.8m、深さ1.2mの素掘りの井戸である。SD522、535を切っている。遺構埋土からは、山茶椀片が少量出土した。時期は鎌倉時代と考えられる。

ＳＥ 541　長径3.2m以上、短径2.9mの方形の素掘り井戸である。遺構は若干調査区外の東側に延びる。遺構埋土からは、土師器鍋が出土している。時期は鎌倉時代と考えられる。

C．溝

ＳＤ 512　調査区を東西に横切る幅1.1m、深さ65～80cmの溝である。断面形はU字を呈している。土師器片、山茶椀片、陶器片が埋土より出土している。時期は室町時代以降か。　（小濵　学）

2．遺　物

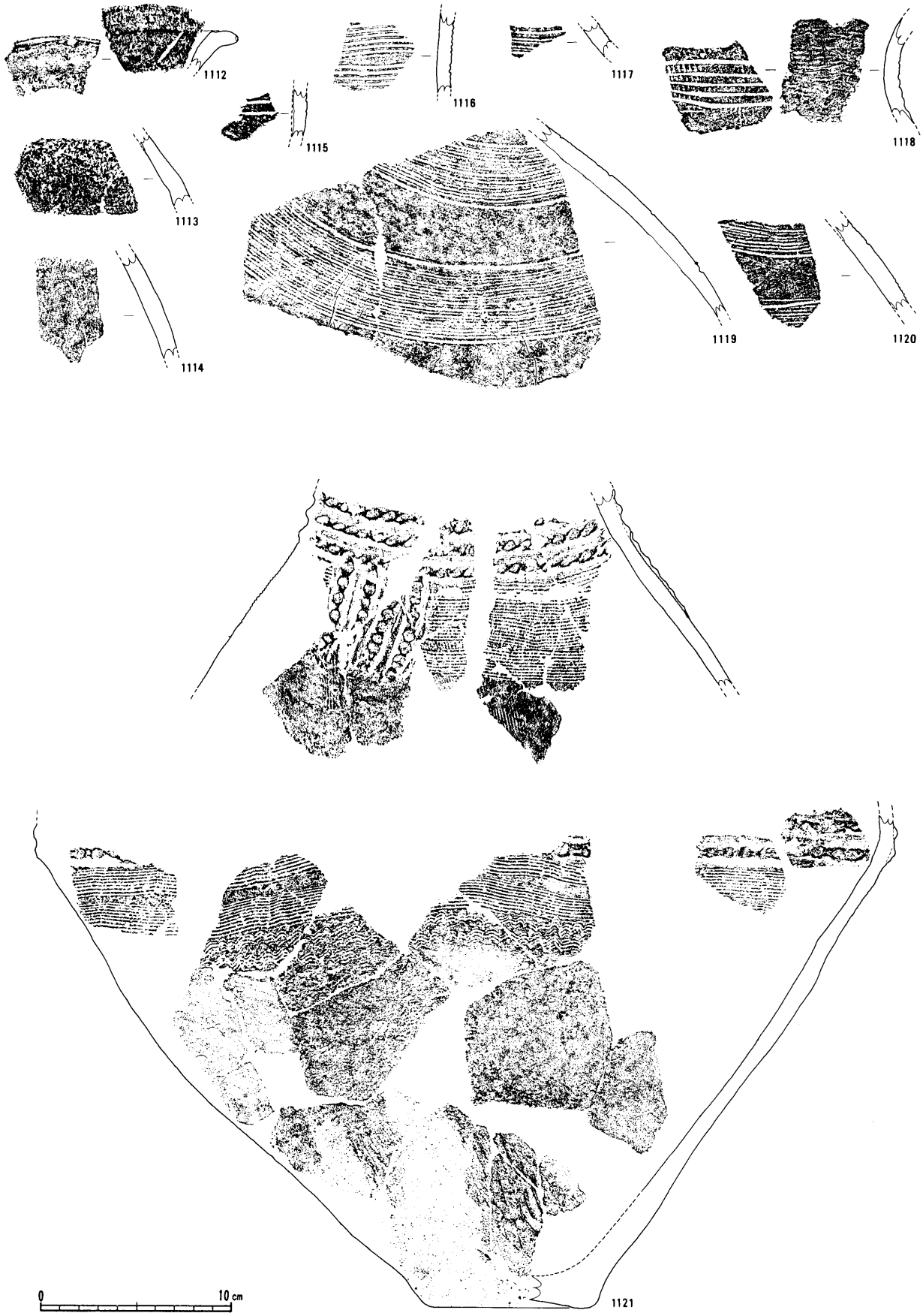
第５次調査では、遺物の出土量は比較的少量であったものの、縄文時代後期から室町時代までの幅広い時期の遺物が出土している。特に、弥生時代中期の土坑墓や、奈良時代の竪穴住居跡からは、一括資料となる遺物が、比較的良好な遺存状態で出土している。以下、遺構別に報告を行うが、遺物の観察等の詳細は、遺物観察表に委ねることとする。

(1) ＳＸ５０５出土の遺物

本遺構からは、弥生時代中期の壺・甕が出土した。(1112)～(1121)は壺、(1122)～(1129)は甕である。

(1112)は、口縁部内面がほぼ水平な面を形成し、端部には横位の沈線を持つ。(1113)は肩部片で、文様等は認められない。(1114)も肩部片ではあるが、その外面には、横方向のハケ調整後にミガキが施されている可能性が高い。(1115)・(1118)はともに頸部片で、ヘラ描き横線が施されている。(1118)の内外面には、何らかの工具によるとみられるハケメ状の痕跡が残る。(1116)は頸部、(1117)は肩部の小片で、共に櫛描き横線文が施されている。肩部片である(1119)・(1120)は、いずれも櫛描き横線文が施された後に、沈線で無文部との区画が行われていることが、観察の結果見て取れる。これらは、東海地方の編年では貝田町式に相当する。(1121)は大型の壺で、推定器高60～70cmに及ぶものと考えられる。文様構成は、キザミ隆帯と櫛描き文が中心となる。残存部分では、頸部と胴部の接点に横位のキザミ隆帯が３条貼付され、さらに最下位の隆帯に接続するように、縦位のキザミ隆帯が４条貼付されているが、この隆帯は５cm足らずで途切れている。また、これに呼応するかたちで、横位の最下位置隆帯の直下から縦位の隆帯末端部にかけて、地の部分に櫛描き横線文が４単位施されている。一方、体部下半から底部にかけては、胴部最大径位置に横位のキザミ隆帯が２条貼付されている。また、その直下には櫛描き横線文が２単位、さらに櫛描き波状文が２単位続く。無文部には、ハケ調整後にミガキが施されている。

(1122)～(1126)は全て口縁部片である。(1122)・(1126)は共に内外面にハケ調整が施されるが、(1126)の端部には沈線が認められる。(1123)～(1125)は、口縁部がいずれも緩やかに外反し、端部に面を持つ。また、(1123)は端部にキザミが残る。(1127)・(1128)は底部である。(1127)は上げ底、(1128)は平底で、(1127)の外面は、ハケ或いは板状工具によるナデ調整が認められる。(1129)は器高27cmあまりの甕で、遺存状態も良い。径６cm余りの小底部から、胴部に向けて一気に膨らみを持たせた器形で、口縁部はほぼ直角に外反している。口縁端部に面を持ち、半載竹管による波状文が施されている。内外面にはハケ調整がなされているが、外面は粗いハケメがほぼ全面に、内面には細かいハケメが、疎らな状態で残る。



第58図　SX505出土遺物実測図（1：3）

(2) ＳＸ５０７出土の遺物

(1130)は壺である。口縁端部にほぼ垂直な面を持ち、非常に緻密な波状文が残る。口縁部～頸部外面は、ハケ調整が行われた後、頸部に櫛描き文が施される。櫛描き原体は、幅2.1cm内に10本で、上部から下部へと動く施文動作が確認できる。また、頸部の一周に、施文動作を三度に分割している。

(1131)～(1133)は甕である。これらはいずれも、器形の成形・調整方法ともに同種のものと考えられる。口縁端部にキザミを入れ、内外面にハケ調整を行うが、磨滅が激しく調整範囲は判然としない。

(3) ＳＸ５０８出土の遺物

(1134)は壺、(1135)～(1140)は甕である。(1134)は端部に面を持ち、櫛による刺突が微かに認められるが、剝離が激しく不明瞭である。また、口縁部にはヘラ描き文が施されている。(1135)は口唇部が若干肥厚し、端部に丸みを持つ。また、内面に僅かながらハケメが確認できる。(1136)～(1139)の4点は、前述のSX507出土の甕と同種のものと思われる。遺存状態は良好で、口縁端部のキザミ、内外面のハケメが明瞭に観察できる。いずれも橙色からややそれをくすませた色調を呈しており、(1136)と(1137)は同一個体の可能性が高い。(1140)は平底の底部片で、外面にハケメとヘラミガキの痕跡が残る。ハケ調整後に、ヘラで器面を磨いたものと考えられる。

(4) ＳＸ５１６・５２６出土の遺物

(1141)～(1143)がSX526出土の遺物、(1144)がSX516出土の遺物で、(1143)は甕、その他は壺である。(1143)は口縁端部に2個対のキザミが施され、外面には僅かにハケメの痕跡が残る。３点の壺はいずれも口縁端部に面を有し、(1142)を除く2点には、端部に波状文、頸部に櫛描き横線文が施される。さらに、(1144)は体部にハケ調整がなされる。(1142)については、残存部分が小片のため、施文の有無など詳細は不明。

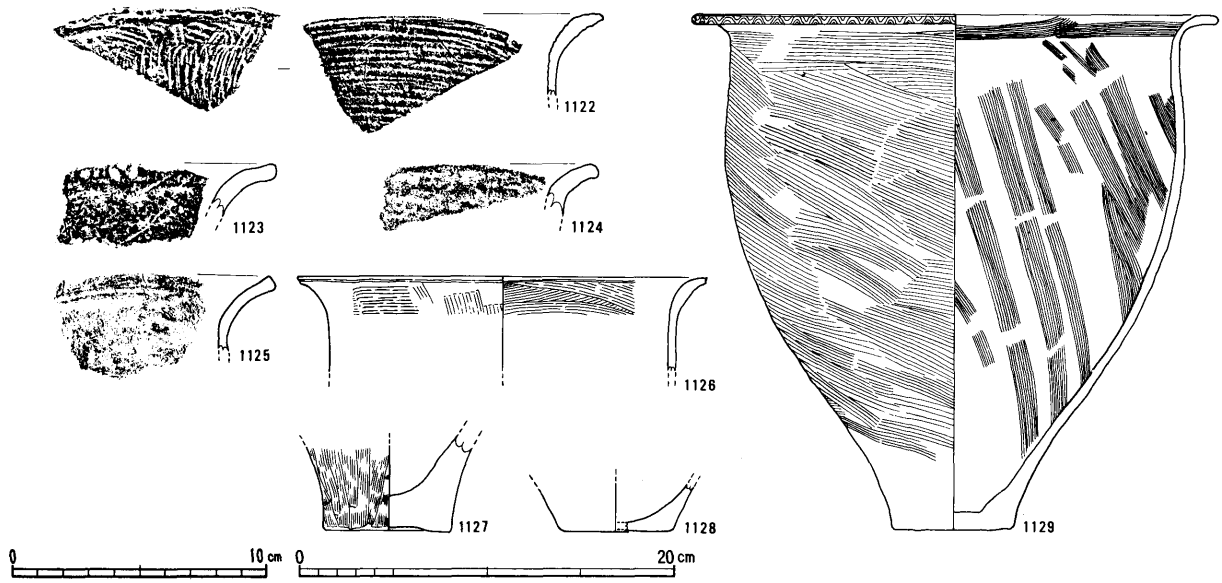
(5) ＳＨ５１４出土の遺物

(1145)は土師器・皿である。橙色を呈した器壁は比較的厚く、焼成状態も良い。口縁端部は内面が剝離しているため、詳細は不明であるが、口縁部はやや内弯気味に立ち上がり、底部外面にはヘラケズリが施される。奈良時代の遺物である。

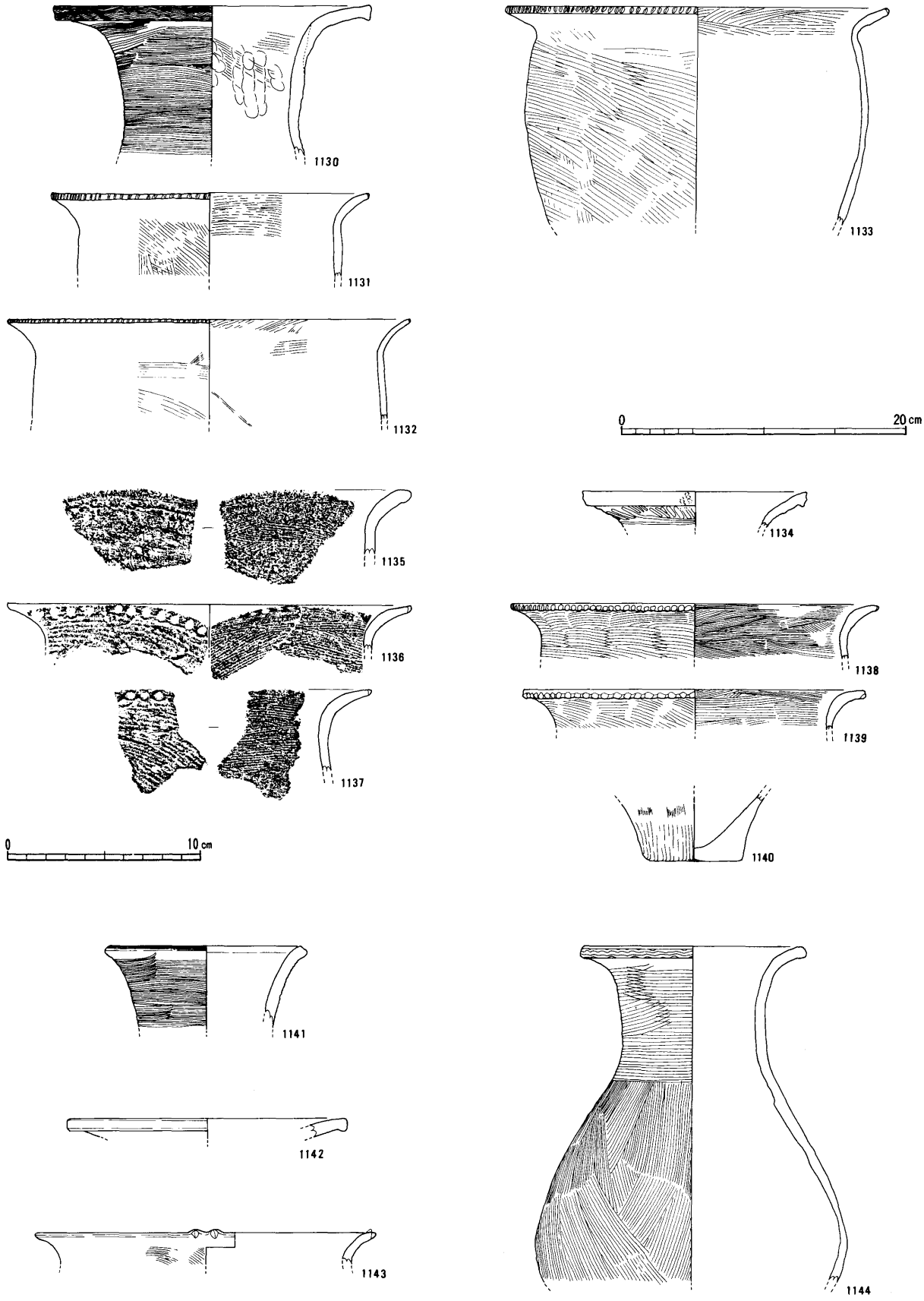
(1146)・(1147)は土師器・甕である。体部内外面はハケ調整を、口縁部はヨコナデを受ける。口縁部外面はヨコナデによる若干の膨らみが見られる。端部に面を持ち、陵を形成する。(1147)の体部内面には、工具によるとみられる痕跡が多数残されている。

(6) ＳＦ５４０出土の遺物

(1148)は皿、(1149)～(1152)は杯である。(1148)は口縁部が緩やかに外傾し、端部に丸みを持つ。底



第59図　ＳＸ505出土遺物実測図（1122～1125＝1：3、1126～1129＝1：4）



第60図　出土遺物実測図 SX507(1130～1133) SX508(1134～1140) SX526(1141～1143) SX516(1144)
(1135～1137=1:3、1130～1134・1138～1144=1:4)

部外面にはヘラケズリが施され、「☆」の線刻が明瞭に残る。(1149) は、口縁部が緩やかな外傾ラインを描き、丸みを帯びた端部には1条の沈線が認められる。ヘラケズリが施された底部外面には、線刻が残されている。(1150)は、口縁部が緩やかに外傾し、内外面にヨコナデ、底部外面にヘラケズリが施される。後の検討の結果、(1149)と接合したため、両者は同一個体と考えられる。(1151)・(1152)は口縁端部に面を持ち、陵を有する。また、口縁部の1／2～2／3にヨコナデが施され、いずれも橙色を中心とした色調を呈する。底部のヘラケズリは認められない。

(1153)は、口径13cm足らずの小型の甕である。口縁端部に面を持ち、陵を有する。ナデ主体の調整で、くすんだ橙色を呈する。

(7) ＳＨ５２１出土の遺物

(1154)・(1155)は杯、(1156)・(1157)は椀である。杯の2点は共に橙色を呈し、外面にヘラケズリを施す。口縁部は緩やかに外傾し、端部が微妙に外反する。(1155)は口径に比して器高が若干高く、底部内面には線刻が残る。残存部が1／2で線刻の全体像は不明。椀の2点は、共にヘラケズリは認められず、口縁部の1／3程度にヨコナデが施され、指押さえ痕跡も残す。(1156) は、前述のSF540出土の皿と同様の「☆」の線刻が、底部外面に認められる。

(1158) は脚付き壺、或いは盤の脚部である。鮮やかな橙色を呈し、胎土もきめ細かい。焼成状態も良く、ナデのみの調整であるが、器壁は滑らかである。

(1159)・(1160)は甕である。(1159)は口縁端部が欠損しており、詳細は不明であるが、頸部径が小さく、頸部が比較的くびれている器形から、古墳時代に属するものであろうか。体部外面に若干のハケメが認められるが、調整範囲等判然としない。(1160)は口縁端部に面を持ち、陵を有す。体部外面にはハケメが若干認められ、内面には板状工具によるものであろうか、比較的工具が強く当たった痕跡が残る。

(8) ＳＨ５１９出土の遺物

(1163)は椀である。浅黄橙色を呈し、比較的胎土は密である。口縁部は内弯気味に立ち上がり、ヨコナデにより端部が極端に薄くなる。そのため、端部内面には陵が生じる。

(1164)～(1168)は甕である。(1164)・(1165)は口縁端部が大きく外反し、端部内面が水平に近くなる。また、ヨコナデにより端部が若干薄くなる。(1166)・(1167)は長胴甕で、内外面にハケ調整がなされる。(1166)は胴部下半にヘラケズリが施される。(1168)は体部外面ハケメ、内面は口縁部のみに横方向のハケ調整がなされ、体部に工具痕跡が残る。

(1169)は筒状土器である。外面は念入りにハケ調整が施され、内面は体部上半にハケメ、下半には粘土紐接合痕跡や、接合時の指圧痕跡が明瞭に残る。

(9) その他の遺構の出土遺物

(1161)・(1162)は、I－51グリッドのピットから出土した長胴甕である。共に外面は、胴部全面ハケ調整、内面は胴部上半板ナデ、下半ヘラケズリが施される。(1162)は口縁部がより外反し、胴部径に比して口径が大きい点で、若干の差異が認められる。

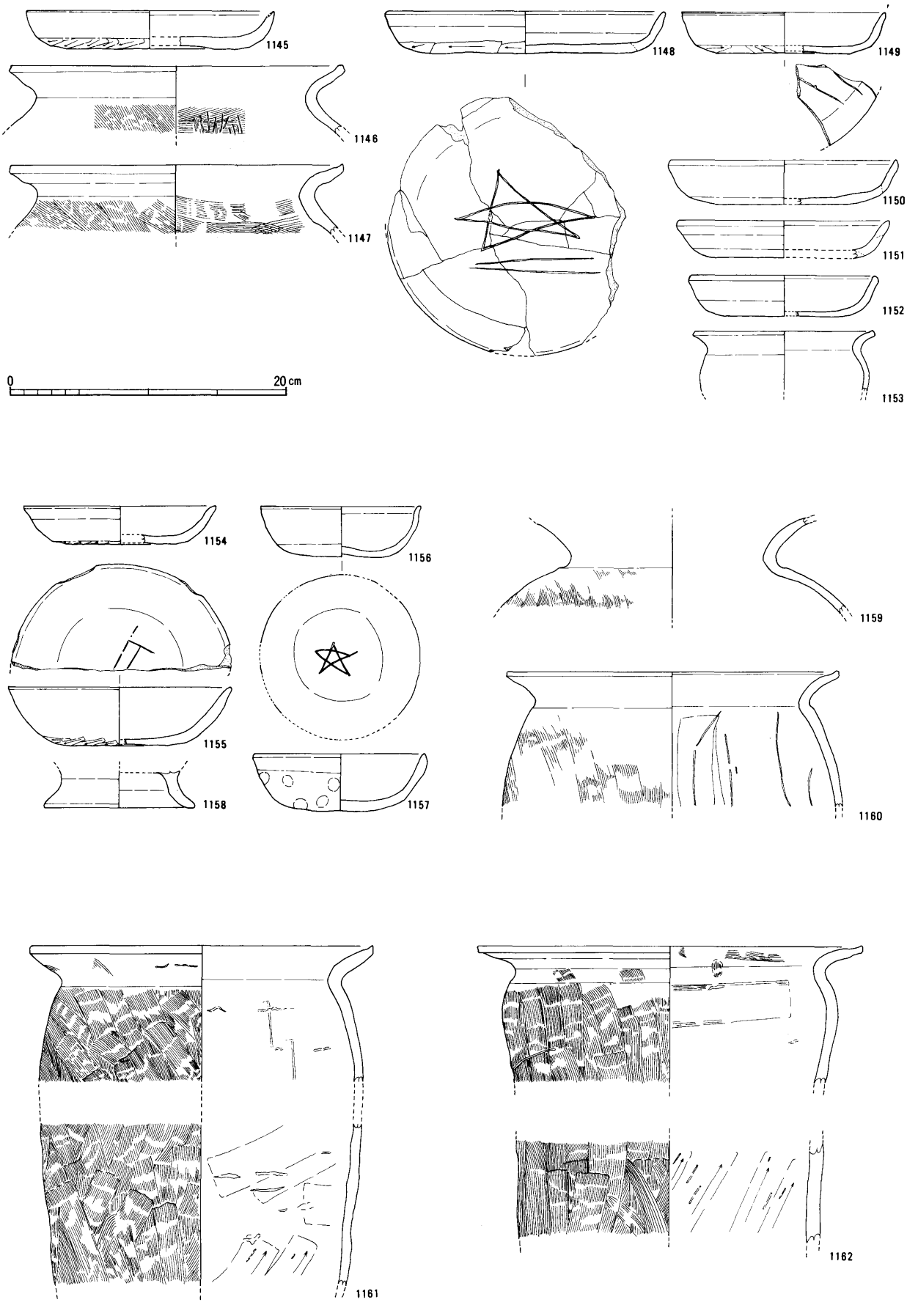
(1170)・(1171)は、いずれもSH520出土の粗製椀である。(1170)は、口縁部の1／2にヨコナデがなされるが、端部はヨコナデによって内外面に陵が生じ、やや外反する。また、外面には粘土紐接合痕跡が目立つ。(1171)は、口縁部の1／2弱にヨコナデがなされ、内弯気味に立ち上がった口縁部が、ヨコナデ部分で外反に転じる。両者共に、外面の未調整部分の指圧痕跡が、明瞭に観察できる。

(1172)は、SD522出土の土師器・皿である。口縁端部のみヨコナデし、内面はナデ、外面は未調整。口縁部の外傾が著しく、器高も低い。平安時代末期のものであろう。

(1173)は、M－48グリッドのピット10出土のロクロ土師器・皿である。灰白色を呈し、焼成もよい。11世紀前半頃に属するものか。

(1174)は、SH534出土の土師器・甕である。口縁部のヨコナデにより、外面に若干の膨らみを持ち、陵が生じる。外面に明瞭なハケメが存在するが、内面の頸部にある痕跡もハケ調整によるものか。また、外面の頸部～体部上半にかけて、何らかの工具によるとみられる窪み状の痕跡が認められる。

(1175)は、H－48グリッドのピット8出土の土

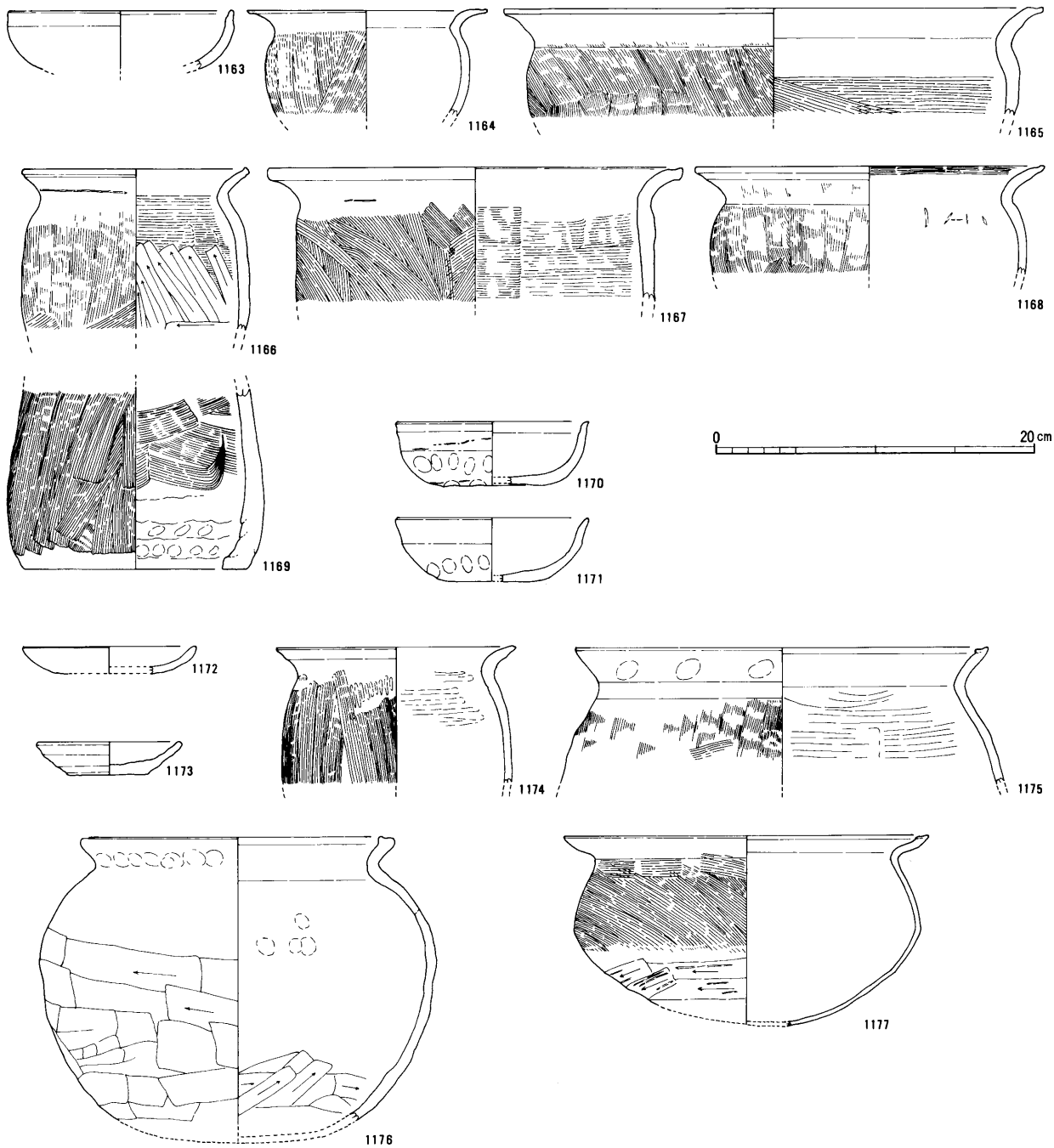


第61図　出土遺物実測図 SH514(1145～1147) SF540(1148～1153) SH521(1154～1160) I53Pit2(1161·1162)(1:4)

師器・甕である。口縁端部を折り返し、内面に陵が明瞭に生じる。口縁部外面には指圧痕跡が残され、体部内外面にはハケメが認められるが、不明瞭で判然としない。

（1176）は、G－57グリッドのピット1出土の土師器・甕である。器壁の調整にはハケの使用がなされず、外面は底部から体部上半にかけて、また、内面には底部に、それぞれヘラケズリが施されている。口縁部は徐々に肥厚し、外面に指圧痕跡を残す。端部は内面に膨らみを持ち、陵を形成する。内面の一部が焼成不良となっている。

（1177）は、SE541出土の土師器・鍋である。口径が器高の2倍以上有り、器壁が非常に薄い。口縁端部が内面に折り込まれ、明瞭な陵が生じている。外面は体部上半にハケ調整がなされ、下半にはヘラケズリが施される。その一方で、内面にはナデ程度の調整しか認められない。内外面に大量の炭化物が付着している。15世紀前後のものであろうか。



第62図　出土遺物実測図　SH519（1163～1169）　SH520（1170・1171）　SD522（1172）　M48Pit10（1173）　SH534（1174）　H48Pit8（1175）　G57Pit1（1176）　SE 541（1177）　（1:4）

(10) 包含層出土の遺物

A．縄文土器

(1178)は後期の深鉢の口縁部である。波状口縁で、口縁部が肥厚し、端部内面に膨らみを、外面に面を持つ。縄文施文後に沈線による区画を行い、区画内の縄文を磨り消す、いわゆる磨消縄文が外面に施されている。また、口縁端部から内面にかけてミガキが施されている。

B．弥生土器

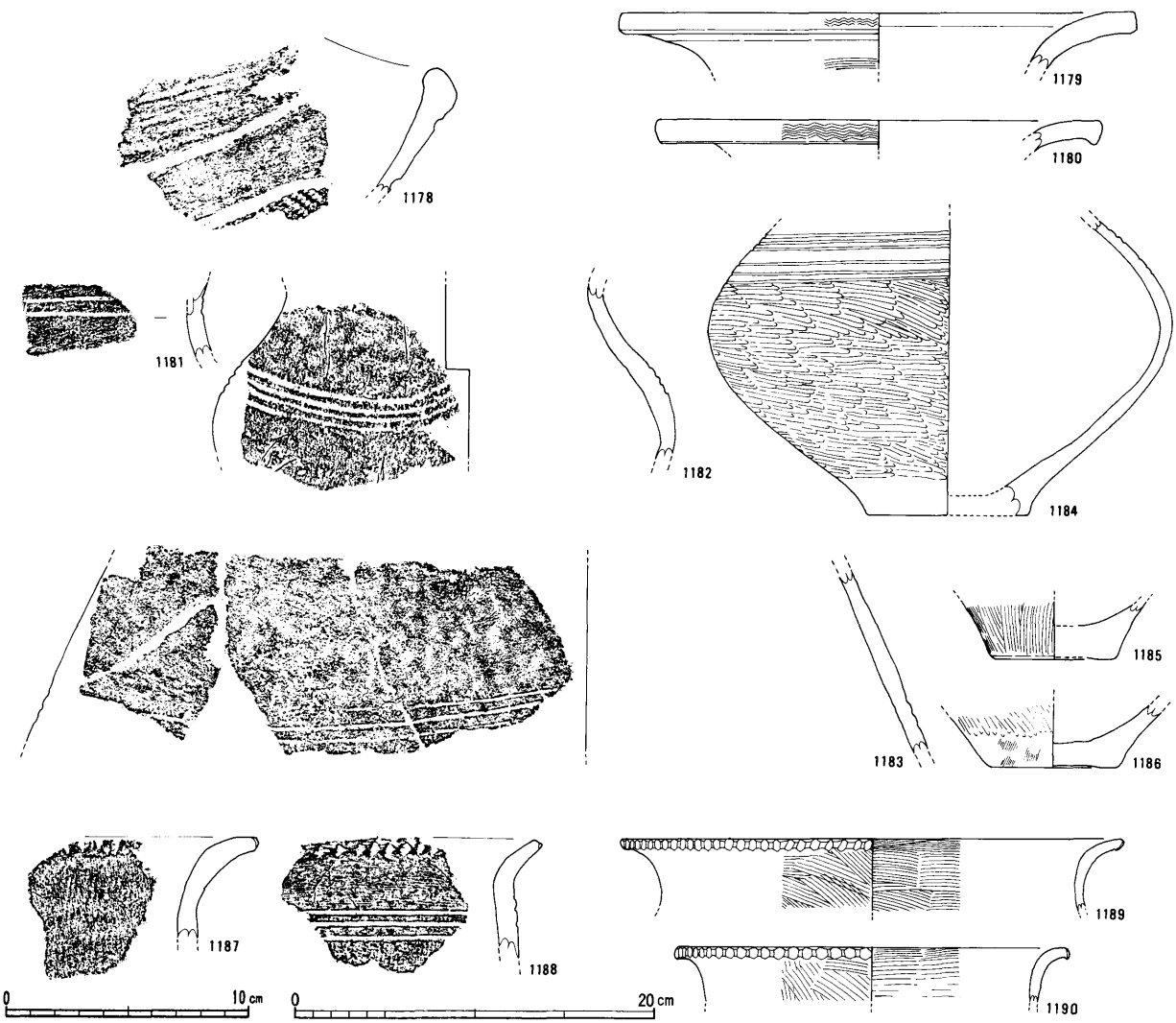
(1179)～(1186)は壺、(1187)～(1190)は甕である。(1179)・(1180)は中期の広口壺で、口縁部が大きく外反し、水平となる。端部に面を持ち、そこに波状文が施される。(1179)の頸部にはハケメが存在する。(1180)は小片のため、頸部の状態は不明。端部の波状文の密度は、(1179)は疎、(1180)は密である。

(1181)～(1183)は、ヘラ描き沈線を施したもので、前期に属する。(1181)は頸部小片で、2条の沈線、(1182)・(1183)は体部片で、肩部にそれぞれ4条、3条の沈線が認められる。(1181)・(1183)は外面を磨いているが、(1182)は未調整である。

(1184)は中期の壺である。肩部に3条の櫛描き沈線を2単位持ち、沈線直下から底部にかけて、念入りにヘラミガキがなされている。沈線間にはヘラミガキの痕跡が認められないため、沈線施文後に、その直下からヘラミガキが施されたものと考えられる。

(1185)・(1186)の壺底部である。(1185)は5本／cm単位のハケメが残る。(1186)はハケ調整後にヘラミガキされたと考えられる。

(1187)～(1190)の甕は、すべて口縁端部にキザミ



第63図　包含層出土遺物実測図（1178・1181～1183・1187・1188＝1:3、1179・1180・1184～1186・1189・1190＝1:4）

を持つ。(1188)は口縁部が緩やかに外反し、器厚はほぼ一定。外面にはハケ調整、ヘラミガキの後に、3条のヘラ描き沈線が施される。前期に属するものであろう。(1187)・(1189)・(1190)は、口縁部が端部に向かうに従い、肥厚する傾向がある。口縁部が緩やかに且つ大きく外反し、水平に近くなる。また、ハケ調整がなされているが、(1187)は判然としない。中期に属するものであろうか。

C．土師器

(1191)・(1192)は古墳時代の壺、(1193)～(1195)は甕である。(1191)は淡黄色を呈し、口径18cmのナデ調整主体の壺である。一方、(1192)は口径8cmのいわゆるミニチュア土器で、橙色を呈し、胎土・焼成ともに良好である。(1193)は口径16cmで、口縁端部に面を持ち、陵を形成する。ヨコナデ調整により、口縁部外面には、調整に呼応したラインが形成される。(1194)は丸底の底部で、内外面にヘラケズリが施され、外面には煤が付着している。(1195)は台付きの甕で、淡黄色を呈する。胎土は非常に粗く、金雲母を多数含む。口縁端部内面に面を持つが、若干の窪みが残る。体部外面にはハケ調整が施されるが、非常に深く粗いハケメが残る。

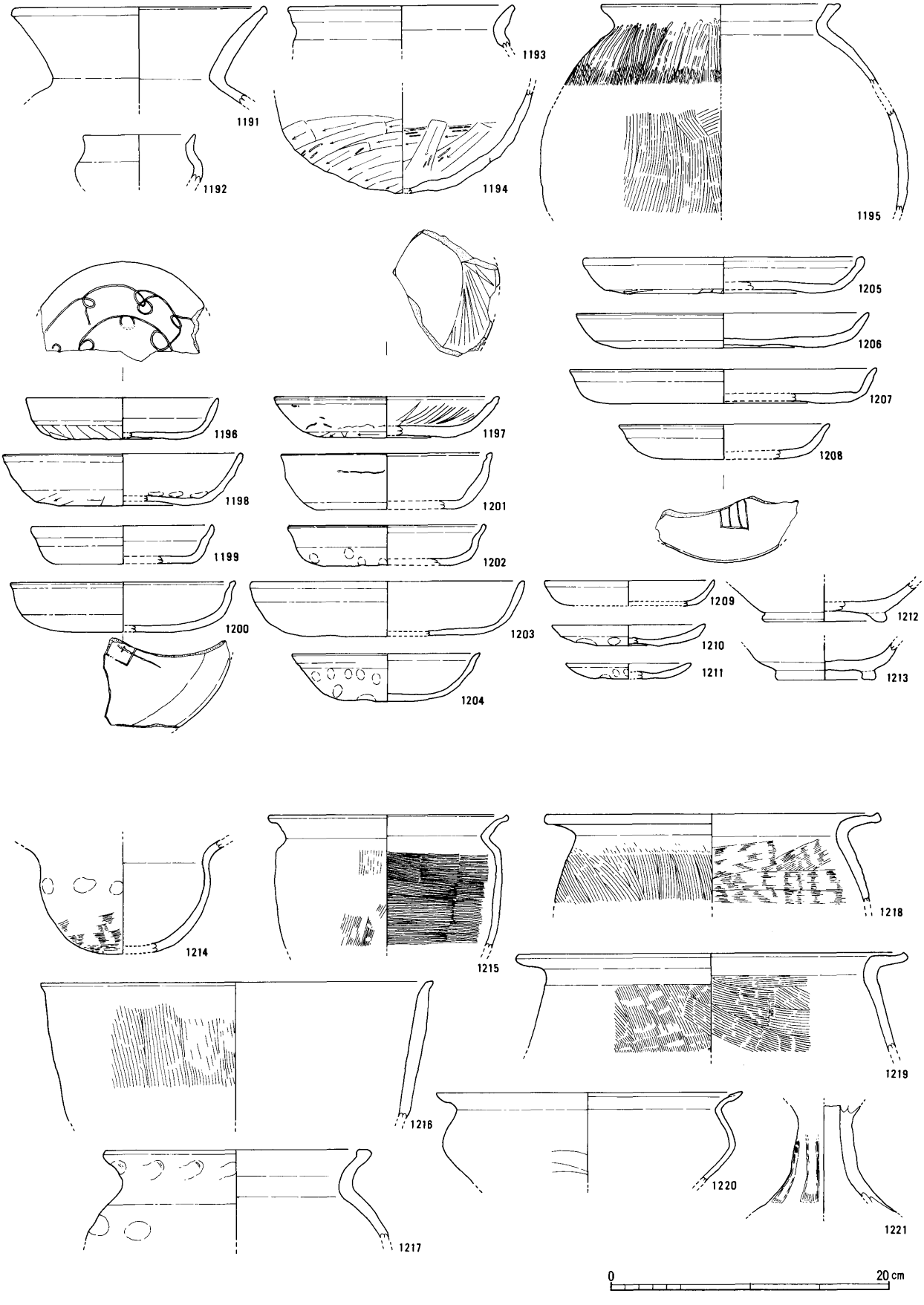
(1196)～(1204)は杯である。(1196)・(1197)は内面にそれぞれ螺旋暗文、放射暗文が残る。両者は共に底部外面にヘラケズリが施される。(1197)は器壁が比較的厚く、口縁部がより外傾する。口縁端部には、ヨコナデ調整により、内外面共に陵が生じる。いずれも奈良時代のものである。(1198)は底部外面にヘラケズリが施され、内面には指圧痕跡が残る。(1199)は口縁部の1／2にヨコナデが施され、口縁部と底部の境が比較的明瞭である。平安時代初期に属するものであろうか。(1200)は口縁部が内弯気味に立ち上がるが、端部付近が外反する。口縁部の1／2にヨコナデが施され、端部に陵が生じる。底部外面には線刻が認められるが、小片のため全体像は不明。(1201)は口縁部内外面の全域にヨコナデが施され、器高も若干高い。また、口縁部と底部の境が比較的明瞭な器形に仕上がっている。(1202)は、口縁部の1／2にヨコナデが施されている。ヨコナデを受ける部分は、外反しながら立ち上がり、端部は内弯する。口縁部下半には指押さえ痕跡が残る。(1203)は口径20cm近い大型の杯で、口縁部の1／3にヨコナデが施されている。口縁部が若干肥厚し、端部に丸みを持つ。(1204)は口縁部がより外傾する。口縁部の1／3弱にヨコナデがなされ、その部分がさらに外反する。平安時代後期に属するものであろう。

(1205)～(1211)は皿である。(1205)～(1207)は口径20cmを超える大型の皿で、いずれも奈良時代に属するものと考えられるが、(1205)のみ底部外面にヘラケズリが施され、口縁端部が内弯し、丸みを帯びる。一方、(1206)は口縁部外面の全域に、(1207)は1／2にヨコナデが施され、以下ナデ調整がなされる。口縁部は素直な外傾ラインを形成する。(1208)は口径15cmで、口縁部の1／2にヨコナデが施され、底部外面には線刻が認められる。(1209)～(1211)は器高2cm未満の浅い皿で、鎌倉時代以降のものと考えられる。(1209)は器壁が薄く、口縁端部のみにヨコナデ調整を受ける。(1210)・(1211)は、より低器高となり、口縁部と底部の境が曖昧となる。器壁は厚く、口縁端部のみがヨコナデ調整を受け、外面は指押さえ痕跡が明瞭に残る。

(1212)・(1213)は椀である。共に高台貼り付け後、接合部をヨコナデし、内面ナデ、外面未調整で仕上げている。(1212)は、高台がハの字状に接地し、口縁部は緩やかに立ち上がる。(1213)は、高台が直立して接地し、口縁部と底部の境には陵が認められる。

(1214)・(1215)、(1217)～(1219)は甕、(1216)は甑、(1220)は鍋である。(1214)は丸底で、器形はむしろ鉢に近い。体部上半に指圧痕、下半にはハケメが残るが、磨滅のため判然としない。(1215)は体部内外面にハケメが残るが、内面調整に、より入念さが窺える。(1217)にはハケ調整は無く、指押さえ後ナデ調整で仕上げられる。口縁部には明瞭な指圧痕跡が残る。(1218)・(1219)は、口縁部が鋭角的に外傾し、口縁部がほぼ水平になる。調整は口縁部ヨコナデ、体部は内外面ともにハケ或いは板状工具による。(1220)にハケ調整は認められない。体部下半に、僅かに板ナデ或いはヘラケズリの痕跡が認められるが、判然としない。16世紀頃のものと思われる。

(1221)は高杯の脚部である。外面には調整痕跡が明瞭に残るが、ハケ調整か板ナデか判別し難い。



第64図　包含層出土遺物実測図（1：4）

D．須恵器

(1222)・(1224)は杯、(1223)は蓋、(1225)は甕である。(1222)は高台の伴わない杯で、底部外面は未調整である。平底で、口縁部がやや外反気味に立ち上がる。(1223)は外面に明瞭な回転ナデ調整の痕跡を残す。口径に対し器高が低く、端部を下方へ屈曲させ、段をなす。8世紀後半頃のものと思われる。(1224)は高台を伴う杯で、高台は底端部に近い位置で貼付される。また、底部の器壁が厚く、中央部が接地している。口縁部は、微妙な外反ラインを描きながら立ち上がる。(1223)とほぼ同時期のものであろうか。(1225)は口縁端部がやや受け口状になり、外面に断面三角形状の段を形成し、シャープな陵が生じる。また、肩部外面にはカキメが施され、タタキ、或いは何らかの工具痕跡が僅かに認められる。

E．緑釉陶器

(1226)・(1227)は共に軟質のもので、ロクロ成形、高台貼り付け後にヨコナデを受ける。残存部が小片或いは磨滅のため、詳細は不明。(1226)は高台が比較的低く、底部内面に一条の沈線が認められる。

F．灰釉陶器

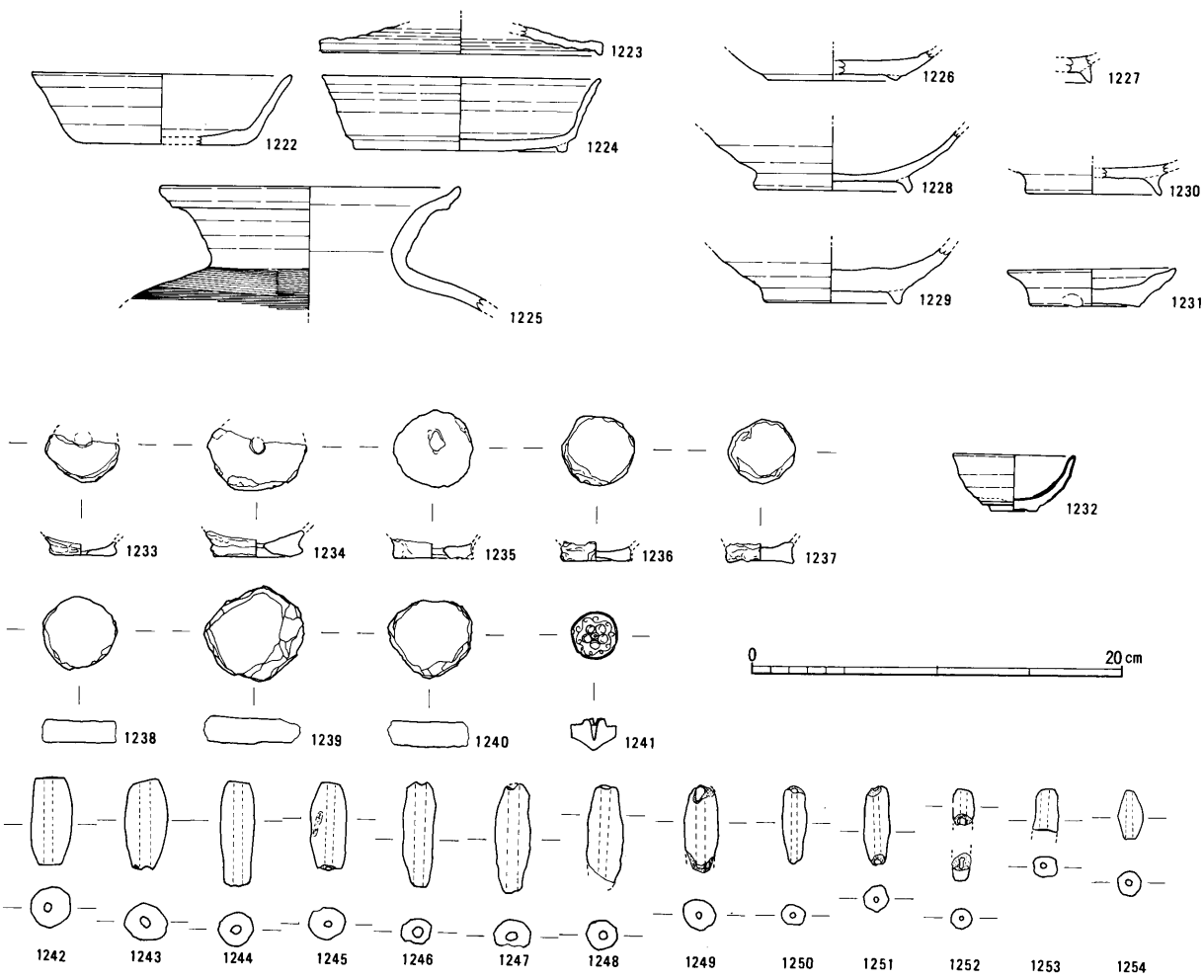
(1228)は高台径8cmの椀である。貼り付けた高台は、ヨコナデ調整により、やや内弯気味に仕上がっている。胎土・焼成共に良好で、底部外面には糸切り痕跡が明瞭に残る。

G．山茶椀

(1229)は高台径7cmの椀で、断面三角形状の高台が外傾気味に接着する。内面には自然釉がかかり、底部内面には、重ね焼きの痕跡が明瞭に残る。

H．ロクロ土師器

(1230)は椀、(1231)は皿である。(1230)は高台貼付後、接着面へのヨコナデ調整が観察できるが、底部外面は未調整で、糸切り痕跡が残る。底部内面には炭素が吸着しているが、製作時に意図的に吸着さ



第65図　包含層出土遺物実測図（1：4）

せたものか否かは、残存部が限られているため不明。(1231)は底部を高台風に、柱状に成形した皿である。底部は粘土塊から切り離したままで、整形はやや粗雑である。底部側面には、指圧痕跡が明瞭に残る。

I．天目茶碗

(1232)は口径6.6cmの小型の椀で、削り出し高台を伴う。内外面に錆釉を施釉後、さらに鉄釉が施される。内面には錆状の酸化物がこびりついているが、地中に埋没する以前にこの状態にあったのか、或いは埋没中に土壌の影響を受けた結果なのか判断がつかない。所属期は15世紀末～16世紀初頭とみられる。

J．加工円盤

(1233)～(1237)は土師器･椀の高台部分を加工したもので、中央部穿孔の(1233)～(1235)は紡錘車への転用と考えられる。(1238)～(1240)は陶器片を加工したもので、器種は不明。部位は体部と考えるか。

K．土製品

(1241)は橙色を呈し、胎土･焼成共に良好で、ほぼ完形である。何かを挿入する中央部の穴の存在や、器形を考慮すると、土製の独楽の可能性が強い。

L．土錘

(1242)～(1254)は重量24g超～4g未満、全長6cm超～3cm未満に及ぶ土錘である。(1242)は両端部を、(1243)～(1245)は一端部を意図的に平坦成形した珍しい事例である。(1243)～(1245)は、欠損している端部も平坦成形されていた可能性が十分ある。また、(1254)は平面形が菱形を呈している点で、他の土錘との差異が認められる。

(小山　憲一)

〔註〕

①玉田芳英「中津・福田KⅡ土器様式」P.262(『縄文土器大観4』小学館、1989)
②森川幸雄「天白遺跡の配石遺構」P.45(『シンポジュームー石を並べた縄文人』第6回埋蔵文化財調査研究会、1995)
③奥　義次ほか「Ⅲ．調査の概要」P.13(『森添遺跡発掘調査概報Ⅱ』度会町遺跡調査会、1988)
④Ⅸ。(株)パリノ・サーヴェイの分析による。
⑤(財)千葉県文化財センター郷堀英司氏のご教示による。
⑥小林　秀「5．結語　蘇民将来の呪符について」P.169(『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1992)

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量（cm）			調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
					口径	器高	その他						
1112	512-06	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5	－	－	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 口縁端部沈線	密 3㎜以下の砂粒含	良	外:にぶい橙(7.5YR7/3) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部小片	
1113	513-01	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5	－	－	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	粗 5㎜以下の砂粒含	並	橙(5YR6/6) にぶい赤褐(5YR4/4)	体部小片	
1114	514-02	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5	－	－	－	外：ハケ調整後ミガキか？ 内：ヨコナデ	粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	明赤褐(5YR5/6) 灰褐(5YR4/2)	体部小片	
1115	512-09	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5	－	－	－	外：ヨコナデ、沈線２条 内：剥離の為不明	並 5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3) 内:灰白(2.5Y7/1)	頸部小片	・内面煤付着
1116	512-04	弥生土器 壺	SX 505	M54 SK 5	－	－	－	外：櫛描き文 内：ハケメ	並 3㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:橙(5YR6/6) 内:明赤褐(5YR5/6)	頸部小片	
1117	512-08	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5	－	－	－	外：櫛描き文 内：ナデ	並 1㎜以下の砂粒、金雲母含	やや不良	外:褐(7.5YR4/3) 内:灰白(10YR8/2)	体部小片	
1118	564-02	弥生土器 壺	SX 505	M53 SK 5	－	－	－	外：ヘラ描き沈線５条 内：ヘラミガキ？工具痕？	粗 3㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	頸部片	
1119	512-01	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK 5 No.7	－	－	－	外：ヘラミガキ、沈線、櫛描き文 内：ヨコナデ（剥離部分多い）	並 3.5㎜以下の砂粒含	良	外:にぶい褐～灰褐(7.5YR 5/3～4/2) 内:にぶい褐～明褐灰(7.5YR6/3～7/1)	体部片	
1120	564-01	弥生土器 壺	SX 505	L53 M53 SK 5	－	－	－	外：ナデ、沈線、櫛描き文 内：ナデ（一部剥離）	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:黄橙(10YR8/6) 内:橙(5YR6/6)	体部片	
1121	513-02 ·03·04 ·05 514-01 520-01	弥生土器 壺	SX 505	L53 SK5 No.2·3 4·14 · 15·17	－	－	底部径 8.0	外：体部上半／キザミ隆帯文（縦横）、櫛描き文　下半／キザミ隆帯文（横）、櫛描き文、波状文、ハケ調整後ミガキ 内：体部上半／指押さえナデ、下半～底部／ナデ	粗 5㎜以下の砂粒、金雲母含	やや不良	体部上半:橙～黒褐(5YR6/8～3/1) 体部下半～底部:橙～にぶい赤褐(5YR6/6～4/4)	体部～底部片	
1122	512-05	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK 5 埋土	－	－	－	外：ハケメ（３本／cm） 内：ハケメ（３本／cm）	密 5㎜以下の砂粒含	並	にぶい橙(7.5YR7/3)～褐(7.5YR4/3)	口縁部小片	
1123	512-10	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5	－	－	－	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 口縁端部キザミ	並 2.5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:にぶい橙(7.5YR7/4～5YR7/4)	口縁部小片	・外面煤付着
1124	512-07	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5 No.6	－	－	－	外：ナデ 内：ナデ	並 4.5㎜以下の砂粒含	良	外:暗褐(7.5YR3/3) 内:明赤褐(2.5YR5/8)	口縁部小片	
1125	512-03	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5 No.11	－	－	－	外：ヨコナデ 内：櫛描き文	並 4.5㎜以下の砂粒含	良	外:にぶい褐～褐(7.5YR 5/3～4/3) 内:にぶい橙(7.5YR6/4)	口縁部小片	
1126	564-03	弥生土器 甕	SX 505	M53 SK5	－	－	－	外：ハケメ（５本／cm） 内：ハケメ（５本／cm） 口縁端部沈線	やや粗 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁部片	・外面煤付着
1127	512-02	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5 No.10	－	－	底部径 6.4	外：板状工具によるナデか？底部ナデ 内：ナデ	密 4㎜以下の砂粒含	良	外:明赤褐(2.5YR5/6) 内:褐(7.5YR4/3)	底部完存	
1128	564-04	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5	－	－	底部径 6.0	外：ナデ、底部未調整 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒多数含	並	外:黄橙(7.5YR7/8) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	底部 1／4	
1129	511-01	弥生土器 甕	SX 505	L53 SK5 No.9 No.20	28.0	27.6	底部径 6.2	外：口縁端部波状文（半截竹管）、口縁部ナデ、体部ハケメ（５本／cm）、底部ナデ 内：口縁部ナデ、体部ハケメ（14本／cm）、底部指押さえ・ナデ	粗 5㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(5YR6／8)	口縁部若干、体部上半2/3、体部下半～底部はぼ完存	・胴部内外面煤付着

第11－1表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1130	510-01	弥生土器 壺	SX 507	SK7 No.7・8	22.0	−	−	外：口縁端部波状文、口縁部～頸部ハケ調整後口縁部ナデ、頸部櫛描き文 内：ハケ調整後指押さえ	密 4㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:にぶい黄橙(10YR7/3～6/3 内:浅黄橙～にぶい橙(7.5YR8/3～7/4)	口縁部～頸部 1/2	・全体的に煤付着 ・櫛描き原体幅=10本/2.1㎝、3回で1回転、上部～下部へ移動
1131	565-02	弥生土器 甕	SX 507	J52 SK7	22.0	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（6本/㎝） 内：口縁部ハケメ（6本/㎝）、体部ナデ？ハケメ？磨滅・剥離共に激しく、調整不明瞭	粗 4㎜以下の砂粒多数含	並	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁部～体部片	・外面煤付着
1132	565-01	弥生土器 甕	SX 507	SK7 No.13	28.0	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（5本/㎝） 内：ハケメ（8本/㎝） 磨滅・剥離共に激しく、調整不明瞭	粗 4㎜以下の砂粒多数含	並	橙(7.5YR7/6)	口縁部～体部 1/8	・外面煤付着
1133	501-01	弥生土器 甕	SX 507	SK7 No.2・5・12	27.0	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（4本/㎝） 内：口縁部ハケメ（4本/㎝）、体部ナデ	粗 2㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい褐(7.5YR5/3)	口縁部～体部 1/4	・外面煤付着
1134	502-04	弥生土器 壺	SX 508	K52・K53 SK8	15.8	−	−	外：口縁端部櫛による刺突（剥離が激しく不明瞭）、口縁部ヘラ描き文 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部 1/6	・外面煤付着
1135	566-01	弥生土器 甕	SX 508	K52・K53 SK8	−	−	−	外：ヨコナデ 内：口縁端部ヨコナデ、口縁部ハケメ（10本/㎝）	粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(7.5YR7/6) ↕ 褐(7.5YR4/3)	口縁部 小片	・内外面に黒斑有り
1136	566-02	弥生土器 甕	SX 508	SK8 No.7	21.0	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ハケメ？ 内：ハケメ（10本/㎝）	粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:灰褐(5YR4/2) 内:橙(5YR6/8)	口縁部 片	・1137と同一個体の可能性大
1137	566-04	弥生土器 甕	SX 508	SK8 No.21	−	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ハケメ（6本/㎝） 内：ハケメ（10本/㎝）	粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(5YR6/8)	口縁部 小片	・1136と同一個体の可能性大 ・外面に黒斑有り
1138	501-02	弥生土器 甕	SX 508	SK8 N0.12	25.8	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ハケメ（5本/㎝） 内：ハケメ（8本/㎝）	粗 3㎜以下の砂粒多数含	良	橙(2.5Y6/6)	口縁部 1/9	・外面煤付着
1139	502-02	弥生土器 甕	SX 508	K52・K53 SK8	24.1	−	−	外：口縁端部キザミ、口縁部ハケメ（5本/㎝） 内：ハケメ（5本/㎝）	並 1㎝以下の砂粒多数含	良	にぶい黄橙(10YR6/3～7/3)	口縁部 1/11	
1140	566-03	弥生土器 甕	SX 508	SK8 No.13	−	−	底部径 6.0	外：ハケメ（10本/㎝）、ヘラミガキ、底部未調整 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒、金雲母多数含	不良	にぶい褐(7.5YR5/4) 底部外面:橙(7.5YR6/6)	底部 2/3	・外面に黒斑有り
1141	502-01	弥生土器 壺	SX 526	SK26 No.1	14.2	−	−	外：口縁端部波状文、ナデ、口縁部櫛描き横線文（5本/㎝） 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 1/2	
1142	502-03	弥生土器 壺	SX 526	SK26	19.7	−	−	外：ナデ 内：ナデ 口縁端部ヨコナデ	並 1㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい赤褐(5YR5/4)	口縁部 1/8	
1143	501-03	弥生土器 甕	SX 526	F50・G50 SK26	24.0	−	−	外：口縁端部キザミ2個対、口縁部ハケメ（7本/㎝） 内：ヨコナデ	粗 3㎜以下の砂粒多数含	良	橙(7.5YR6/6)	口縁部 1/8	・外面煤付着
1144	505-01	弥生土器 壺	SX 516	L51 SK16 No.11	15.9	−	−	外：口縁端部波状文、口縁部ナデ、頸部櫛描き横線文（4本/㎝）、体部上半ハケメ（6本/㎝）内：口縁部～頸部ナデ、体部上半磨滅激しく調整不明	並 1㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部～体部 2/3	
1145	547-01	土師器 皿	SH 514	K47 SH14	18.0	2.7	−	外：口縁端部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	1/4	
1146	547-03	土師器 甕	SH 514	SH14 No.3	24.0	−	−	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本/㎝） 内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本/㎝）	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	浅黄橙(10YR8/3) ↕ 橙(5YR7/6)	口縁部 1/6	・体部内面に工具痕跡残る
1147	547-02	土師器 甕	SH 514	J48 SH14 No.1	24.0	−	−	外：口縁部ヨコナデ、頸部ハケ調整後ヨコナデ、体部ハケメ（9本/㎝）内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（9本/㎝）	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部 1/8	

第11－2表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1148	507-01	土師器 皿	SF 540	H57 焼土中	20.2	3.1	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	明赤褐(5YR5/8)	3/4	・底部外面に線刻有り
1149	545-02	土師器 杯	SF 540	H57 焼土中	15.0	3.0	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 口縁端部沈線	密 1㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	口縁部 1/8	・底部外面に線刻有り ・1150と同一個体
1150	507-02	土師器 杯	SF 540	H57 焼土中	16.4	3.2	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	外:橙(5YR6/6) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁部 1/4	・1149と同一個体
1151	507-05	土師器 杯	SF 540	H57 焼土中	15.4	2.7	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	並 1.5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	灰白(10YR8/1) ～ にぶい橙(5YR7/3)	1/4	・内面煤付着
1152	507-04	土師器 杯	SF 540	H57 焼土中	13.4	3.0	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	並 3㎜以下の砂粒、金雲母含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部 1/4	・外面煤付着
1153	507-03	土師器 甕	SF 540	H57 焼土中	12.8	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並 3.5㎜以下の砂粒、金雲母含	良	灰白(7.5YR8/2) ～ にぶい橙(7.5YR7/4)	口縁部 1/4	
1154	553-03	土師器 杯	SH 521	SH21 No.16	14.0	2.8	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(5YR7/8)	1/6	
1155	552-02	土師器 杯	SH 521	SH21 No.11	16.0	4.3	–	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや密 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(5YR7/6)	1/2	・内外面に黒斑有り ・底部内面に線刻有り
1156	506-01	土師器 椀	SH 521	SH21 貯蔵穴	11.5	3.7	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ヨコナデ後指押さえ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	並 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:灰白(10YR8/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部 1/3 のみ欠損	・外面～口縁部内面に煤付着
1157	553-02	土師器 椀	SH 521	SH21 No.14	12.0	4.2	–	外：口縁部ヨコナデ、体部～底部指押さえ未調整 内：口縁部～体部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	浅黄橙(7.5YR8/4) 底部外面:灰白(5Y7/2)	4/5	・底部外面焼成不良
1158	553-01	土師器 脚付壺又は盤	SH 521	SH21 No.12	–	–	脚部径 11.0	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密	良	橙(5YR7/8)	脚部 ほぼ完存	
1159	551-01	土師器 甕	SH 521	SH21 No.4	–	–	頸部径 13.0	外：頸部ヨコナデ、体部上半ハケメ（12本/cm） 内：頸部ヨコナデ、体部上半ナデ	粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	浅黄橙(10YR8/3)	頸部～体部上半 1/2	
1160	552-01	土師器 甕	SH 521	SH21 No.6	24.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（10本/cm）、磨滅の為不明瞭 内：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ？	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	浅黄橙(10YR8/4)	口縁部～体部上半 1/3	・体部内面に工具痕跡残る
1161	561-01	土師器長胴甕	I53 Pit2	I53 Pit2	25.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ（12本/cm）内：口縁部ヨコナデ、胴部上半板ナデ、胴部下半ヘラケズリ	やや粗 3㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部～胴部 1/2	・内外面に煤付着 ・口縁部内面、頸部～胴部内面に粘土紐接合痕跡残る
1162	563-01	土師器長胴甕	I53 Pit2	I53 Pit2	28.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ(10本/cm) 内：口縁部ヨコナデ、胴部上半板ナデ、胴部下半ヘラケズリ	やや粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	にぶい黄橙(10YR7/3)	口縁部～胴部 1/8	・胴部外面に煤若干付着 ・胴部上半外面にヘラ沈線(線刻か)有り
1163	548-03	土師器 椀	SH 519	G52 SH19 No.3	14.0	–	–	外：口縁端部ヨコナデ、口縁部～体部指押さえナデ 内：口縁部～体部ヨコナデ	やや密 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:浅黄橙(7.5YR8/6) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1/6	・内外面に黒斑有り
1164	548-01	土師器 甕	SH 519	G52 SH19 No.1	15.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本/cm）、磨滅の為不明瞭 内：口縁部～体部ヨコナデ	やや粗 4㎜以下の砂粒含	並	外:橙(5YR7/6) 内:灰黄褐(10YR5/2)	口縁部～体部 1/2	
1165	549-01	土師器 甕	SH 519	SH19 焼土 No.1	34.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本/cm）内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（6本/cm）	やや粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部～体部 1/8	・内外面に煤付着

第11－3表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1166	549-02	土師器長胴甕	SH 519	SH19 焼土 No.2	14.0	–	–	外：口縁端部沈線？口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ（6本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、胴部上半ハケメ（8本／cm）、胴部下半ヘラケズリ	やや粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:浅黄橙(10YR8/4)～淡橙(5YR8/4) 内:にぶい黄橙(10YR6/3)	口縁部～胴部 1／4	・内面煤付着 ・頸部外面に沈線状の工具痕跡？残る
1167	550-01	土師器長胴甕	SH 519	SH19 焼土 No.3	26.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ（10本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、胴部ハケメ（8本／cm）	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:橙(5YR7/6)～にぶい黄橙(10YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～胴部 1／8	・内面煤付着 ・頸部外面に工具痕跡残る
1168	550-02	土師器 甕	SH 519	H52 SH19 貯蔵穴	22.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ口縁端部ハケメの痕跡残る	やや粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	灰黄褐(10YR6/2)	口縁部～体部 1／6	・外面煤付着 ・体部内面に工具痕跡残る
1169	548-02	土師器 筒状土器	SH 519	G52 SH19 No.2	–	–	底部径 14.0	外：体部ハケメ（9本／cm）、底部未調整 内：体部ハケメ（9本／cm）、底部指押さえ未調整	やや粗 4㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	にぶい黄橙(10YR7/3)	体部～底部 1／4	・底部内面に粘土紐接合痕跡が明瞭に残る
1170	554-01	土師器粗製椀	SH 520	SH20	12.0	4.0	–	外：口縁部ヨコナデ、体部～底部指押さえナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	にぶい黄橙(10YR7/4)	1／2	・外面全体的に黒斑有り ・口縁部内面に粘土紐接合痕跡残る
1171	554-02	土師器粗製椀	SH 520	G50 SH20 焼土	12.0	4.0	–	外：口縁部ヨコナデ、体部～底部指押さえ未調整 内：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	浅黄橙(10YR8/4)	1／4	
1172	545-03	土師器 皿	SD 522	J47 SD22	11.0	1.7 (推定)	–	外：未調整 内：ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	橙(7.5YR7/6) 浅黄橙(10YR8/4)	口縁部 1／6	
1173	507-06	ロクロ土師器 皿	M48 Pit 10	M48 Pit 10	9.0	2.1	–	外：ロクロナデ、底部糸切り痕跡残る 内：ロクロナデ	並 2㎜以下の砂粒含	良	灰白(10YR8/1～8/2)	完存	・口縁端部に油煙付着
1174	554-03	土師器 甕	SH 534	SH34 No.1	15.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（8本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ？体部上半ナデ	やや密	良	外:にぶい黄橙(10YR7/2) 内:浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～体部上半 1／4	・外面に黒斑有り ・頸部外面、体部外面に工具痕跡残る
1175	568-01	土師器 甕	H48 Pit8	H48 Pit 8	26.0	–	–	外：口縁部ヨコナデ（指圧痕跡残る）、体部ハケメ（10本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ？	やや密 2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	口縁部～体部 1／4	・内外面に煤付着
1176	509-01	土師器 甕	G57 Pit1	G57 Pit1	20.0	19.3 (推定)	–	外：口縁部～体部上半ヨコナデ、体部下半ヨコナデ後ヘラケズリ、頸部指圧痕跡残る 内：口縁部～頸部ヨコナデ、体部上半指押さえナデ、体部下半ヘラケズリ	密 3㎜以下の砂粒含	内面一部焼成不良	外:黄灰(2.5Y6/1)～灰黄(2.5Y7/2) 内:にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部～体部 2／3	
1177	562-01	土師器 鍋	SE 541	K58 SE41	23.0	12.0	–	外：口縁部ヨコナデ、体部上半ハケメ（8本／cm）、体部下半ヘラケズリ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、頸部～底部ナデ	やや密 5㎜以下の砂粒含	良	にぶい黄橙(10YR7/3)	1／2	・内外面に大量の煤付着
1178	519-01	縄文土器深鉢		F59 包含層	–	–	–	外：口縁部磨消縄文（単節ＬＲ）、口縁端部ミガキ 内：ミガキ	密 4.5㎜以下の砂粒、金雲母含	やや不良	褐灰(10YR6/1) 灰黄褐(10YR6/2)	口縁部 小片	
1179	504-01	弥生土器 壺		J59 包含層	29.0	–	–	外：口縁端部波状文（3本／cm）、口縁部ヨコナデ、頸部ハケメ（10本／cm） 内：ヨコナデ	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	橙(7.5YR7/6～6/6)	口縁部 1／10	
1180	503-03	弥生土器 壺		L51 包含層	25.0	–	–	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ 口縁端部波状文（6本／cm）	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部 1／12	
1181	543-01	弥生土器 壺		I48 包含層	–	–	–	外：ヘラ描き沈線、ミガキ 内：未調整	粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:黄橙(7.5YR7/8) 内:黄橙(10YR8/6)	頸部 小片	
1182	560-02	弥生土器 壺	SD18 混入遺物	I46 SD15 上面	–	–	胴部最大径 18.0	外：未調整、体部上半ヘラ描き沈線4条 内：未調整	粗 4㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	外:にぶい黄(2.5Y6/3)～明褐(7.5YR5/8) 内:灰黄褐(10YR5/2)	体部 片	
1183	558-01	弥生土器 壺		K57 包含層	–	–	–	外：ミガキ、ヘラ描き沈線 内：未調整	粗 5㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	にぶい黄橙(10YR7/4)	体部 片	・外面煤付着

第11－4表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1184	559-01	弥生土器 壺		G55 包含層	—	—	底部径9.0 胴部最大径 26.0	外：体部上半櫛描き沈線3条（3本／cm）を2単位、沈線直下～底部ヘラミガキ 内：ナデ	粗 4㎜以下の砂粒多数含	並	褐灰(10YR4／1) 明褐(7.5YR5／6)	体部 1／3	
1185	504-03	弥生土器 壺		J59 包含層	—	—	底部径 7.2	外：ハケメ（5本／cm）、底部未調整 内：ナデ？磨滅激しく調整不明瞭	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	橙(7.5YR7/6~6/6)	底部 1／4	
1186	560-03	弥生土器 壺	SD18 混入遺物	K46 SD15	—	—	底部径 7.0	外：ヘラミガキ、ハケメ？底部未調整 内：指押さえ未調整	粗 5㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	外:にぶい黄橙(10YR7/3)~橙(7.5YR7/6) 内:にぶい黄橙(10YR7/3~6/3)	底部 完存	・内面煤付着 ・外面黒斑有り
1187	504-02	弥生土器 甕		L57 包含層	—	—	—	外：ハケメ（5本／cm） 内：ナデ 口縁端部ヨコナデ、キザミ	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	外:にぶい褐(7.5YR5/4) 内:橙(7.5YR7/6)	口縁部 小片	
1188	560-01	弥生土器 甕	SD18 混入遺物	K46 SD15	—	—	—	外：ハケメ（10本／cm）、ヘラミガキ後ヘラ描き沈線3条 内：ナデ	粗 3㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	褐灰(10YR6／1)	口縁部 小片	・外面煤付着
1189	503-02	弥生土器 甕		L51 包含層	18.2	—	—	外：ハケメ（6本／cm） 内：ハケメ（6本／cm） 口縁端部キザミ	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部 1／16	
1190	503-01	弥生土器 甕		K57 包含層	22.2	—	—	外：ハケメ（5本／cm） 内：ハケメ（5本／cm）磨滅激しい 口縁端部キザミ	並 2㎜以下の砂粒多数含	良	にぶい黄橙(10YR6/4)	口縁部 1／8	・外面煤付着
1191	544-01	土師器 壺		H56 包含層	18.0	—	—	外：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、体部未調整	やや粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	良	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部～頸部 1／4	
1192	543-02	土師器 壺 (ミニチュア土器)		排土	8.0	—	—	外：口縁部ヨコナデ、体部未調整 内：口縁部ヨコナデ、体部未調整	密 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	橙(5YR6／8)	口縁部～体部片	
1193	567-01	土師器 甕	SD 503 混入遺物	K55 SD3	16.0	—	—	外：ヨコナデ 内：ヨコナデ	やや密 1㎜以下の砂粒、金雲母含	良	外:浅黄橙(7.5YR8/4) 内:灰褐(7.5YR5/2)	口縁部 1／8	
1194	567-04	土師器 甕	SD 503 混入遺物	K55 S D 3	—	—	—	外：体部ナデ、体部下半～底部ヘラケズリ 内：体部ナデ、体部下半ヘラケズリ、底部未調整	やや粗 4㎜以下の砂粒、金雲母含	不良	外:淡黄(2.5Y8/4)~黄灰(2.5Y5/1) 内:灰褐(7.5YR4/2)	底部 3／4	・外面煤付着
1195	557-02	土師器台付甕		G61 包含層	17.0	—	—	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（5本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、体部ナデ未調整	粗 4㎜以下の砂粒、金雲母多数含	並	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部 1／2 体部小片	
1196	508-01	土師器 杯		試掘 No.4	13.8	2.8	—	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	良	にぶい赤褐(5YR4/4)	1／3	・底部内面暗文有り
1197	540-04	土師器 杯		K56 包含層	16.0	2.8	—	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	良	橙(5YR7／6)	1／5	・口縁部内面に暗文有り ・口縁部外面に粘土紐接合痕跡残る
1198	541-02	土師器 杯		J63 包含層	17.0	3.7	—	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部指押さえナデ	やや粗	並	にぶい赤褐(5YR5/3)	1／4	
1199	542-02	土師器 杯		F59 包含層	13.0	2.7	—	外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒多数含	並	浅黄橙(7.5YR8/6)	1／4	
1200	540-03	土師器 杯		G59 包含層	16.0	3.6	—	外：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	良	橙(5YR7／8)	1／5	・底部外面に籾痕有り ・底部内面中央部成形不良
1201	541-03	土師器 杯		J63 包含層	15.0	4.0	—	外：口縁部ヨコナデ、底部未調整 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	灰褐(7.5YR5／2)	1／4	・口縁部外面粘土紐接合痕跡残る

第11－5表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1202	541-01	土師器 杯		G62 包含層	14.0	2.9	－	外：口縁部ヨコナデ、底部指押さえ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 口縁端部沈線	密	良	橙(5YR7／8)	1／8	
1203	508-02	土師器 杯		試掘 N0.4	19.8	4.0	－	外：口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ 内：ナデ	密	良	にぶい褐(7.5YR5/4)	1／4	
1204	542-01	土師器 杯		K48 表土	13.5	3.5	－	外：口縁部ヨコナデ、体部～底部指押さえ未調整 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	浅黄橙(10YR8／4)	3／4	
1205	541-04	土師器 皿		J57 包含層	20.0	2.6	－	外：口縁部ヨコナデ、底部ヘラケズリ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗	並	にぶい赤褐(5YR5/4)	1／3	・底部内面に若干の煤付着
1206	540-01	土師器 皿		H56 包含層	21.0	2.5	－	外：口縁部ヨコナデ、底部未調整、底部中央ナデ 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	良	黄橙(7.5YR8／8)	1／6	・底部外面煤付着
1207	540-02	土師器 皿		G62 包含層	22.0	2.5	－	外：口縁部ヨコナデ、底部未調整 内：ヨコナデ	密	良	黄橙(7.5YR8／8)	1／8	・底部外面黒斑有り ・外面に工具痕跡多数残る
1208	540-05	土師器 皿		J63 包含層	15.0	2.5	－	外：口縁部ヨコナデ、底部未調整 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	密	並	橙(5YR7／6)	1／6	・底部外面に線刻有り
1209	542-05	土師器 皿		I63 包含層	12.0	1.8 (推定)	－	外：口縁端部ヨコナデ、口縁部～底部未調整 内：ヨコナデ	密 2㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8／3)	1／6	
1210	542-03	土師器 皿		J62 包含層	11.0	1.5	－	外：口縁部ヨコナデ、底部指押さえ未調整 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗	並	淡黄(2.5Y8／3)	1／4	
1211	542-04	土師器 皿		I62 包含層	9.0	1.1	－	外：口縁部ヨコナデ、底部指押さえ未調整 内：口縁部ヨコナデ、底部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8／4)	1／3	・口縁部内面に粘土紐接合痕跡残る
1212	545-01	土師器 椀		F58 包含層	－	－	底部径 8.0	外：未調整、高台貼り付け後ヨコナデ 内：ナデ	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	外:淡黄(2.5Y8／3) 内:黄灰(2.5Y6／1)	底部 1／2	・底部内面に黒斑有り
1213	508-04	土師器 椀		試掘 N0.3	－	－	底部径 7.0	外：ナデ、高台貼り付け後ヨコナデ、底部未調整 内：ナデ	密 金雲母多数含	並	黄褐(2.5Y5／3)	底部 完存	・底部内面煤付着
1214	557-01	土師器 甕		H57 包含層	－	－	胴部最大径 11.0	外：頸部ヨコナデ、体部上半指押さえ未調整、体部下半～底部ハケメ（12本／cm） 内：頸部ヨコナデ、体部～底部未調整	やや粗 3㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:浅黄橙(10YR8/4) 内:浅黄橙(7.5YR8/4)	頸部～底部 1／3	・底部外面に黒斑有り
1215	543-04	土師器 甕		H56 包含層	17.0	－	－	外：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ（10本／cm）、磨滅の為不明瞭 内：口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ（13本／cm）	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	外:にぶい橙(7.5YR7/4) 内:浅黄橙(10YR8/4)	口縁部～体部 1／4	・内外面煤付着
1216	544-02	土師器 甑		H56 包含層	28.0	－	－	外：ハケメ（5本／cm） 内：ナデ 口縁端部ヨコナデ	やや粗 1㎜以下の砂粒、金雲母含	並	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部 1／6	・内外面に黒斑有り
1217	556-01	土師器 甕		H57 包含層	19.0	－	－	外：口縁部ヨコナデ（指圧痕跡残る）、体部指押さえ未調整 内：口縁部ヨコナデ、頸部～体部ナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	にぶい黄橙(10YR7/4)	口縁部～体部 1／4	
1218	555-01	土師器 甕		G61 包含層	24.0	－	－	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（5本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、体部板状工具によるナデ	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8／3)	口縁部～体部 1／6	
1219	555-02	土師器 甕		H56 包含層	28.0	－	－	外：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（9本／cm） 内：口縁部ヨコナデ、体部ハケメ（9本／cm）	やや粗 2㎜以下の砂粒、金雲母含	並	浅黄橙(10YR8／3)	口縁部～体部 1／6	

第11－6表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1220	556-02	土師器 鍋		H54 包含層	22.0	—	—	外：口縁部～頸部ヨコナデ、体部上半ナデ、下半板ナデ？ヘラケズリ？ 内：口縁部～体部上半ヨコナデ、体部下半ナデ	やや密 1㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	口縁部～体部 1/6	
1221	543-03	土師器 高杯		H61 包含層	—	—	—	外：脚上部ナデ、脚部ハケメ？板状工具によるナデ？ 内：脚上半ナデ、下半未調整	密 2㎜以下の砂粒含	良	外:浅黄橙(10YR8/3) 内:淡黄(2.5Y8/3)	口縁部 2/3	
1222	546-03	須恵器 杯		J47 包含層	14.0	3.8	—	外：ロクロナデ、底部ナデ未調整 内：ロクロナデ	密 4㎜以下の砂粒含	良	灰(N4/0)	1/6	
1223	546-02	須恵器 蓋		H61 包含層	15.0	—	—	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	黄灰(2.5Y5/1)～灰(5Y5/1)	1/6	
1224	508-03	須恵器 杯		H60 包含層	15.0	4.0	高台径 11.6	外：ロクロナデ 内：ロクロナデ	密	良	灰(N4/0)	2/3	
1225	546-01	須恵器 甕		G60 G61 包含層	16.0	—	—	外：口縁部ロクロナデ、肩部カキメ（11本/cm） 内：ロクロナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	灰(N4/0)	口縁部～肩部 1/3	・肩部外面にタタキ又は工具痕跡残る
1226	545-07	緑釉陶器 椀		H60 包含層	—	—	高台径 7.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後ヨコナデ（磨滅のため不明瞭）、底部未調整 内：ロクロナデ、沈線	密	良	灰白(10YR8/1)	底部 1/4	
1227	545-06	緑釉陶器 椀		F59 包含層	—	—	—	外：高台貼り付け後ヨコナデ 内：ロクロナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	底部 小片	
1228	546-04	灰釉陶器 椀		試掘 No.3	—	—	高台径 8.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後ヨコナデ、底部未調整（糸切り痕跡残る） 内：ロクロナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	灰白(2.5Y8/1)	底部 1/8	
1229	546-05	山茶椀		F58 包含層	—	—	高台径 7.0	外：ロクロナデ、高台貼り付け後ヨコナデ、底部未調整（糸切り痕跡残る） 内：ロクロナデ	密	良	灰白(2.5Y7/1)	底部 ほぼ完存	・内面自然釉かかる ・底部内面に重ね焼きの痕跡残る
1230	545-05	ロクロ土師器 椀		試掘 No.3	—	—	高台径 7.0	外：高台貼り付け後ヨコナデ、底部未調整（糸切り痕跡残る） 内：ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	並	外:灰黄褐(10YR6/2) 内:褐灰(10YR4/1)	底部 1/2	・内面に燻し？
1231	545-04	ロクロ土師器 Ⅲ		H62 包含層	9.0	2.1	高台径 6.0	外：ロクロナデ、底部未調整（糸切り痕跡残る）、高台外面に指圧痕跡残る 内：ロクロナデ	やや粗 4㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	1/2	・歪み大
1232	571-05	天目茶碗		I53 包含層	6.6	3.1	高台径 2.6	外：ロクロナデ、高台削り出し、底部未調整 内：ロクロナデ 錆釉施釉後鉄釉施釉	密 1㎜以下の砂粒含	良	にぶい橙(2.5YR6/4) [釉]にぶい赤褐(5YR5/4) 黒褐(5YR2/1)	ほぼ完存	・内面に錆？付着
1233	570-01	加工円盤		G57 包含層	最大径 3.9	—	残存重 4.69g	外：高台側面ヨコナデ、打ち欠き、底部未調整 内：ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	1/2	・土師器椀の底部を転用 ・中央に穿孔有り（紡錘車への転用か？）
1234	570-02	加工円盤		L62 包含層	最大径 5.3	—	残存重 13.47g	外：高台側面ヨコナデ、打ち欠き、底部未調整 内：ナデ	密	良	淡橙(5YR8/3) 灰白(2.5GY8/1)	1/2	・土師器椀の底部を転用 ・中央に穿孔有り（紡錘車への転用か？）
1235	570-03	加工円盤		試掘 No.2	最大径 4.2	—	重量 13.18g	外：高台側面ヨコナデ、打ち欠き、底部未調整 内：ナデ	密	良	浅黄橙(10YR8/3)	一部欠損	・土師器椀の底部を転用 ・中央に穿孔有り（紡錘車への転用か？）
1236	570-04	加工円盤		J64 包含層	最大径 3.8	—	重量 12.41g	外：高台側面ヨコナデ、打ち欠き、底部未調整 内：ナデ	密 1㎜以下の砂粒含	良	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完存	・土師器椀の底部を転用
1237	570-05	加工円盤		K54 包含層	最大径 3.6	—	重量 11.86g	外：高台側面ヨコナデ、打ち欠き、底部未調整 内：ナデ	密	良	浅黄橙(7.5YR8/4)	一部欠損	・土師器椀の底部を転用

第11－7表　第5次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	器種	遺構	出土位置	法量(cm) 口径	器高	その他	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存	備考
1238	571-01	加工円盤		I 57 包含層	最大径 3.9	−	重量 21.82g	外：ナデ 内：未調整 破断面打ち欠き	やや粗 1㎜以下の砂粒含	並	外：褐灰(5YR5/1) 内：橙(5YR7/8)	体部片?	・陶器の体部片の転用か？
1239	571-02	加工円盤		K57 包含層	最大径 5.3	−	重量 44.65g	外：未調整 内：未調整 破断面打ち欠き	やや粗 3㎜以下の砂粒含	並	灰褐(5YR5/2)	体部片?	・陶器の体部片の転用か？
1240	571-03	加工円盤		L62 包含層	最大径 4.4	−	重量 29.40g	外：未調整 内：未調整 破断面打ち欠き	粗 4㎜以下の砂粒含	並	外：にぶい橙(5YR7/4) 内：灰褐(5YR5/2)	体部片?	・陶器の体部片の転用か？
1241	571-04	土製品（独楽？）		J47 攪乱土坑	最大径 2.6	1.7	重量 6.21g	――――	密 1㎜以下の砂粒含	良	橙(5YR7/6)	ほぼ完存	・中央に何かを挿入する穴有り
1242	569-03	土錘		G59 包含層	最大径 2.2	全長 4.8	重量 24.33g	――――	やや粗 2㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙(10YR7/2)	完存	・両端部を平坦に成形
1243	569-06	土錘		H61 包含層	最大径 2.3	残存長 4.9	残存重 19.21g	――――	やや密 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙(10YR7/3)	ほぼ完存	・一端部を平坦に成形
1244	569-07	土錘		J64 包含層	最大径 1.8	残存長 6.6	残存重 19.32g	――――	密 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙(10YR7/2)	ほぼ完存	・一端部を平坦に成形
1245	569-09	土錘		M51 包含層	最大径 1.9	残存長 5.7	残存重 15.45g	――――	密 1㎜以下の砂粒含	良	にぶい橙(10YR7/4)	ほぼ完存	・一端部を平坦に成形
1246	569-01	土錘		G54 包含層	最大径 1.8	残存長 5.7	残存重 12.37g	――――	並 2㎜以下の砂粒含	良	浅黄橙(10YR8/3)	ほぼ完存	
1247	569-02	土錘		G58 包含層	最大径 1.9	残存長 5.8	残存重 17.57g	――――	粗 3㎜以下の砂粒多数含	並	灰白(10YR8/2)	一部欠損	
1248	569-05	土錘		H60 包含層	最大径 1.9	残存長 5.2	残存重 13.94g	――――	やや密 1㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8/3)	2/3	
1249	569-08	土錘		K54 包含層	最大径 1.8	残存長 5.6	残存重 12.84g	――――	やや粗 1㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8/4)	両端部欠損	
1250	569-10	土錘		試掘 No.2	最大径 1.3	残存長 5.2	残存重 5.14g	――――	並 1㎜以下の砂粒含	並	にぶい黄橙(10YR7/3)	両端部欠損	
1251	567-02	土錘	SD 503 混入遺物	K55 SD3	最大径 1.4	残存長 4.3	残存重 7.81g	――――	密 金雲母含	良	淡黄(2.5Y8/3) ＼ 黄灰(2.5Y5/1)	両端部欠損	
1252	569-11	土錘		試掘 No.2	最大径 −	残存長 1.5 +2.0	残存重 1.15+ 2.09g	――――	やや粗 1㎜以下の砂粒含	並	橙(5YR7/6)	両端部のみ残存	
1253	567-03	土錘	SD 503 混入遺物	K55 SD3	最大径 −	残存長 2.3	残存重 3.46g	――――	密	良	淡黄(2.5Y8/4)	1/2	
1254	569-04	土錘		G60 包含層	最大径 1.3	残存長 2.7	残存重 3.89g	――――	並 1㎜以下の砂粒含	並	淡黄(2.5Y8/3)	ほぼ完存	

第11－8表　第5次調査出土遺物観察表

Ⅷ．第６次調査

鴻ノ木遺跡の発掘調査は、平成 2年度から始まり、第 6次調査は最終年度として、松阪市中万町字水引場から射和町字鴻ノ木にかけての宅地（1300㎡）を対象として実施した。第6次調査区は県道御生薗・豊原線沿いで第３次調査区に北接し、第２次調査区、第5次調査区に県道を挟んで南接する。平成6年 8月23日から調査にはいり、家屋の立ち退きの関係からいったん11月15日に調査を中断し、年が改まった平成７年1月18日から再開し、1月25日をもって終了した。調査区内は前期 8月23日～11月15日迄の作業区域をＡ地区とし、後期 1月18日～ 1月25日迄の作業区域をＢ地区とした。

１．Ａ地区の遺構

(1) 概略及び土層

Ａ地区の標高は約21.5ｍで、南から北にかけて僅かな傾斜がみられる。調査区の中央部から東辺中央と、調査区の南隅周辺から北辺にかけて、十文字を形づくるように暗渠排水がひろがっていることから、調査区の東辺央付近では遺構の削平がみられた。

主な遺構として、古墳時代前期の溝 1条と中～後期にかけての竪穴住居２棟が検出された。土層の基本層序は、0.15ｍ～0.50ｍの盛土層（褐色土）、0.35ｍ～0.40ｍの耕作土層（灰黄色土）、0.20ｍ～0.30ｍの遺物包含層（灰オリーブ土）、地山（黒褐色土）となっている。

(2) 遺 構

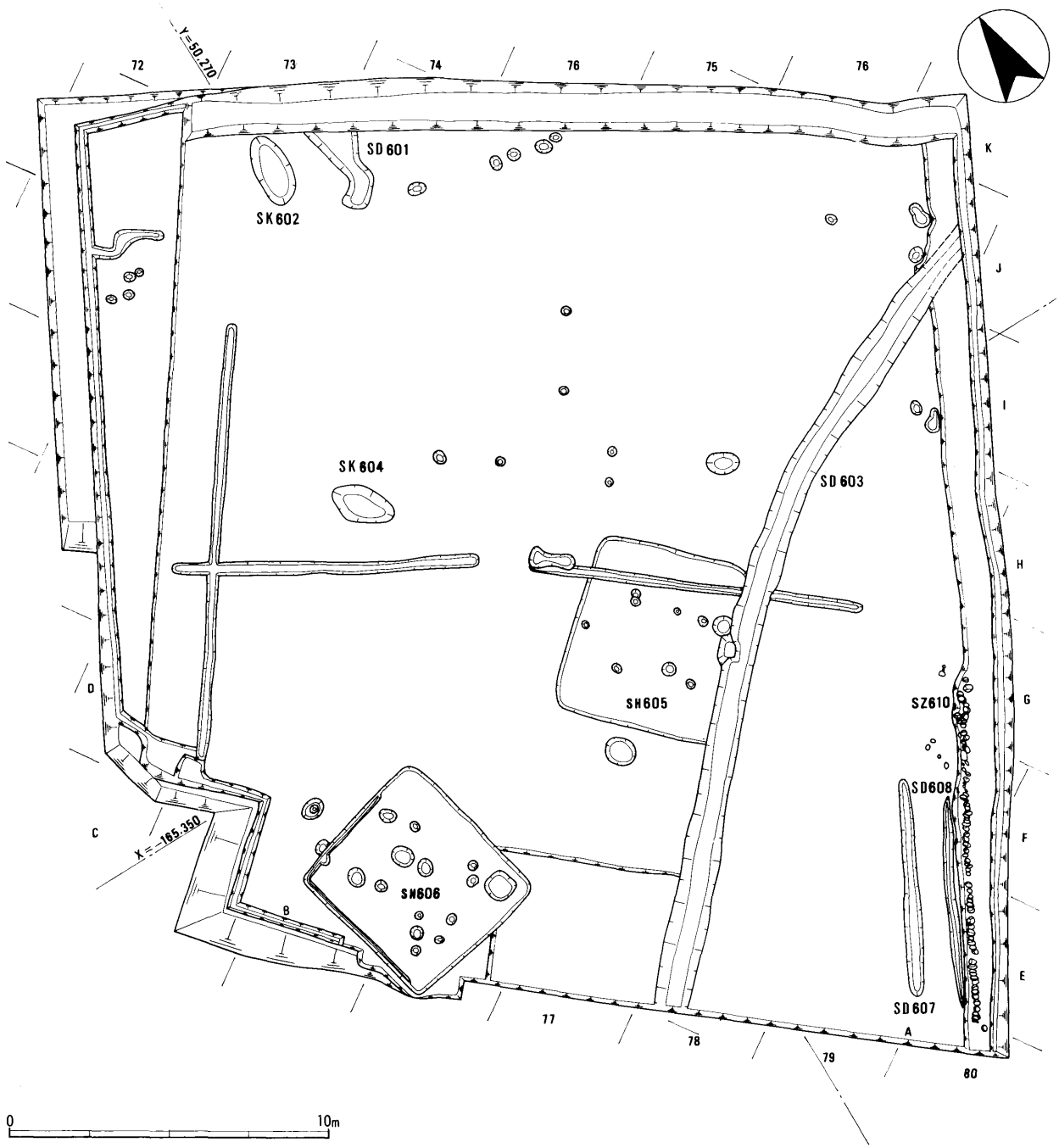
Ａ．古墳時代初頭の遺構

ＳＤ６０３　調査区南東部にかけて東辺を南流し、調査区外へ続くしっかりとした溝で、幅1ｍ、深さは1.3ｍ～1.5ｍである。断面形は逆台形を呈し、埋土の状況は5 層からなっている。遺物は埋土の第2 層（黄褐色混黒褐色土）の下部から土師器高杯（1266・1268）、台付甕（1257～1262）を中心として出土した。これらの遺物は、SH605 付近の約10ｍ幅の間に底面から約0.8ｍ浮いた状態で出土している。それぞれの遺物はレベルがほぼ同じでまとまりをもつことから、一括投棄されたものと考えられる。

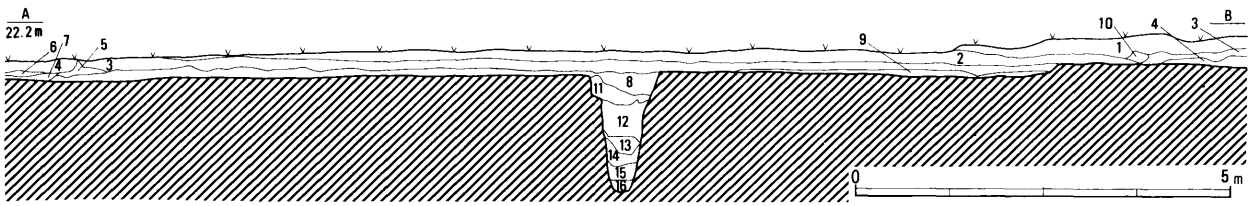
Ｂ．古墳時代中期～後期の遺構

ＳＨ６０５　調査区のほぼ中央部で検出された竪穴住居で、古墳時代前期の溝（SD603）を切る。方向は長軸を中心としてN55°Wで、東辺のプランは検出できなかったがSD603以東にはのびない。規模は5.4ｍ×5.4ｍのやや隅丸の残る方形のプランを呈していると考えられ、深さは0.12～0.15ｍであった。北辺中央やや東寄りに焼土面（0.8ｍ×1.1ｍ）を検出し、東辺中央付近で規模が0.4ｍ×0.5ｍ、深さが0.3ｍ～0.4ｍの長方形に近い貯蔵穴を検出した。また、4 個の主柱穴を検出したが、周溝は認められなかった。貯蔵穴から土師器高杯（1271・1274）が、南辺中央付近から土師器椀（1270）が出土した。南東隅から石製模造品の剣形品（1288）が出土し、さらに、遺構埋土を洗浄した結果、臼玉（1277～1284）が出土している。

ＳＨ６０６　調査区南西隅付近で検出された竪穴住居で、5.0ｍ×5.0ｍのほぼ方形を呈し、方向は長軸を中心としてN32°Wとなっている。また、南寄りには、1.3ｍ×1.8ｍの焼面が検出された。東辺と南辺のコーナー部から0.9ｍ×0.85ｍの正方形に近い貯蔵穴が検出されている。柱穴は明確ではないが、北辺から西辺にかけて幅0.1ｍ～0.15ｍ、深さ0.05ｍ～0.08ｍの周溝が認められた。さらに、西辺南隅から北辺を経て東辺に厚みが0.09ｍ～0.11ｍの貼床があり、その内の東辺中央付近から横たわるようにして土師器高杯（1291）が出土した。焼土上面からは土師器高杯（1289）や土師器甕（1295）が出土し、貯蔵穴からは土師器甕（1294）が完形に近い形で出土している。さらに、西辺付近のピット内から管玉

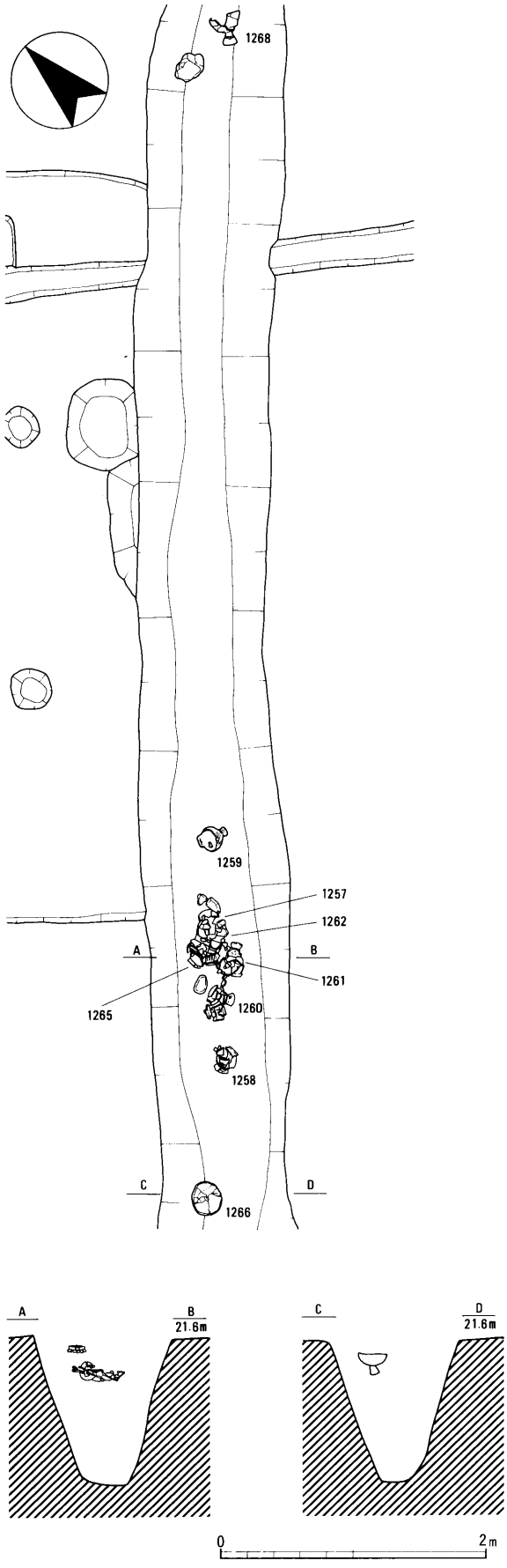


第66図　A地区平面図（1：200）



1．明黄褐（10YR6／6）〈客土〉
2．褐灰（10YR4／1）
3．黄褐（2.5Y5／3）
4．黒褐（10YR3／1）
5．灰黄褐（10YR5／2）
6．にぶい黄褐（10YR5／4）
7．暗褐（10YR3／3）
8．黒褐（10YR2／3）
9．にぶい黄褐（10YR5／3）
10．明黄褐（10YR6／8）
11．にぶい黄褐（10YR5／3）〈SD603埋土〉
12．黒褐（10YR3／1）に褐灰（10YR4／1）混入〈SD603埋土〉
13．褐（10YR4／4）〈SD603埋土〉
14．黒（10YR2／1）〈SD603埋土〉
15．黒褐（10YR3／1）に灰黄褐（10YR4／2）混入〈SD603埋土〉
16．灰オリーブ（5Y6／2）〈SD603埋土〉

第67図　A地区土層断面図（1：100）



第68図　SD603遺物出土状況図（1：50）

（1315）が出土し、遺構埋土の洗浄の結果、臼玉（1298～1314）が出土している。

C．時期不明の遺構

ＳＫ６０２　調査区北西端部に位置し、2.3m×1.2mのほぼ楕円形の土坑で深さは0.3mを測る。埋土は明褐灰色粘質土一層と考えられるが、遺物は出土していない。

ＳＫ６０４　調査区南半分ほぼ中央部西で検出された2.0m×1.2mのほぼ楕円形の土坑で、深さは0.3mを測る。埋土は灰褐色粘質土一層と考えられるが、遺物は出土していない。

ＳＤ６０１　調査区の北西隅に位置し、北流すると考えられる溝である。幅1.2m～1.7mで深さは0.2mを計る。埋土は明褐灰色層であるが、遺物は出土していない。

ＳＤ６０７　調査区南東端部に位置し、幅0.6mで深さ0.1mを測る溝である。埋土は灰黄褐色土一層と考えられる。遺物は細片が3～4個程度で、時期は断定できない。

ＳＤ６０８　調査区南東端部のSD607と平行状に位置し、幅0.4mで、深さは0.1mを測る。埋土は黄褐色土一層と考えられ、遺物は細片が4～5個程度で、時期は断定できない。

ＳＺ６１０　調査区南東端部に位置するSD608の東辺に隣接する石列である。石列の長さは南北に約11m続いている。検出面から0.05m～0.1mで石の頂部に達する。出土遺物もなく遺構の性格もよくわからないが、何らかの区画のために使用されたと考えられる。

2．B地区の遺構

A地区に北接し、標高は約20.8mである。地形はA地区から0.7m前後、僅かに傾斜しているも、地山はA地区と同じ黒褐色土である。遺構が希薄であったため、順次検出面を下げながら調査を実施した。調査区中央部から北端部にかけての緩やかな落ち込みのなかから溝（SD609）を検出した。調査区外に流れていくものとと考えられるが、埋土からは遺物は出土していない。

3．遺　物

遺物は整理箱にして22箱程出土した。その大半は竪穴住居、溝などの遺構からの出土で、弥生時代末～古墳時代の遺物が多数出土した。その種類は壺、高杯、甕等である。

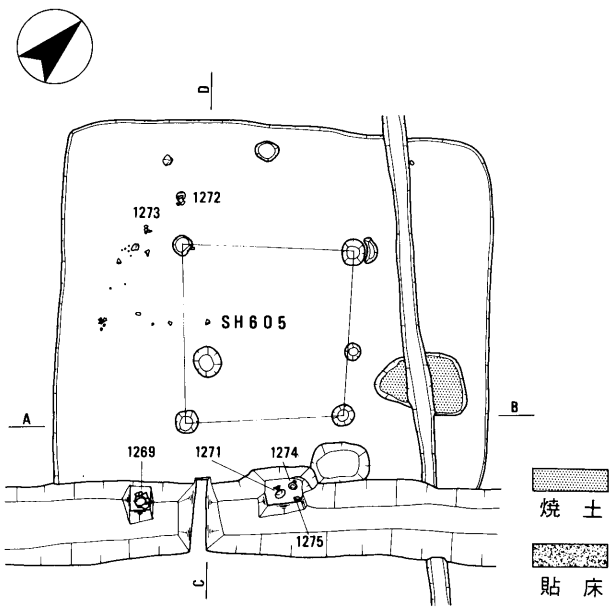
包含層からは縄文時代以降の各時代の各種の遺物が多数出土したが、大半が細片である。

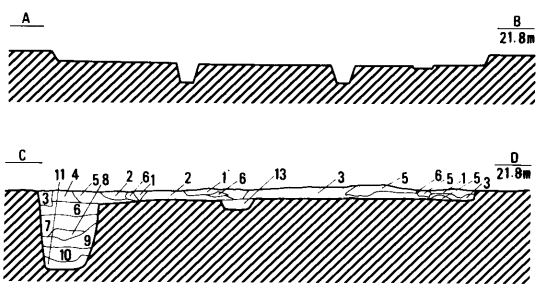
(1) ＳＤ６０３出土遺物

出土遺物には弥生土器が一部含まれてはいるが、大半は古墳時代初頭の土師器である。

(1255･1256)は弥生土器の広口壺である。

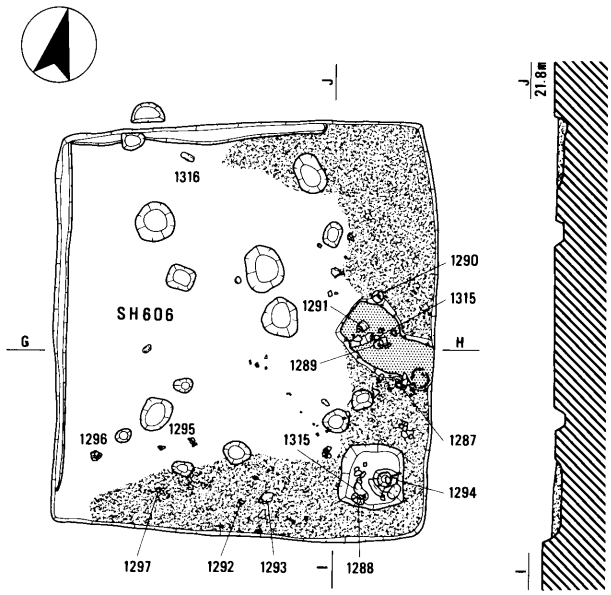
(1256)は体部外面に廉状文等がみられることから、

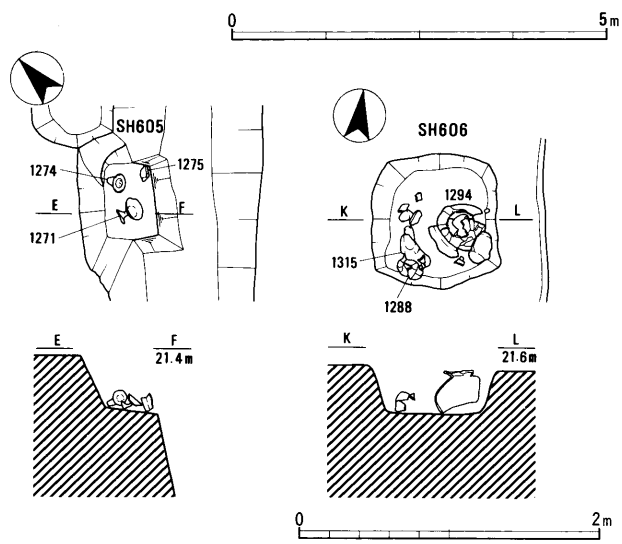




1．にぶい黄橙（10YR6／3）に灰黄褐色（10YR4／2）混入
2．黒褐色（10YR3／2）に褐灰（10YR5／1）混入
3．褐灰（10YR5／1）に灰黄褐（10YR5／2）混入
4．黒褐（10YR3／2）粘質土
5．灰黄褐（10YR6／2）に明黄褐（10YR6／6）混入
6．にぶい黄褐（10YR5／4）に明黄褐（10YR6／8）混入
7．黒褐（10YR3／1）に褐灰（10YR4／1）混入
8．黒褐（10YR3／1）に黄褐（10YR6／6）混入
9．褐（10YR4／4）に黄褐（10YR5／8）混入
10．黒褐（10YR3／1）に灰黄褐（10YR4／2）混入
11．黒褐（10YR3／1）に黒（10YR2／1）混入
12．にぶい褐（7.5YR6／3）
13．不詳

第69図　SH605・606実測図（1：100）

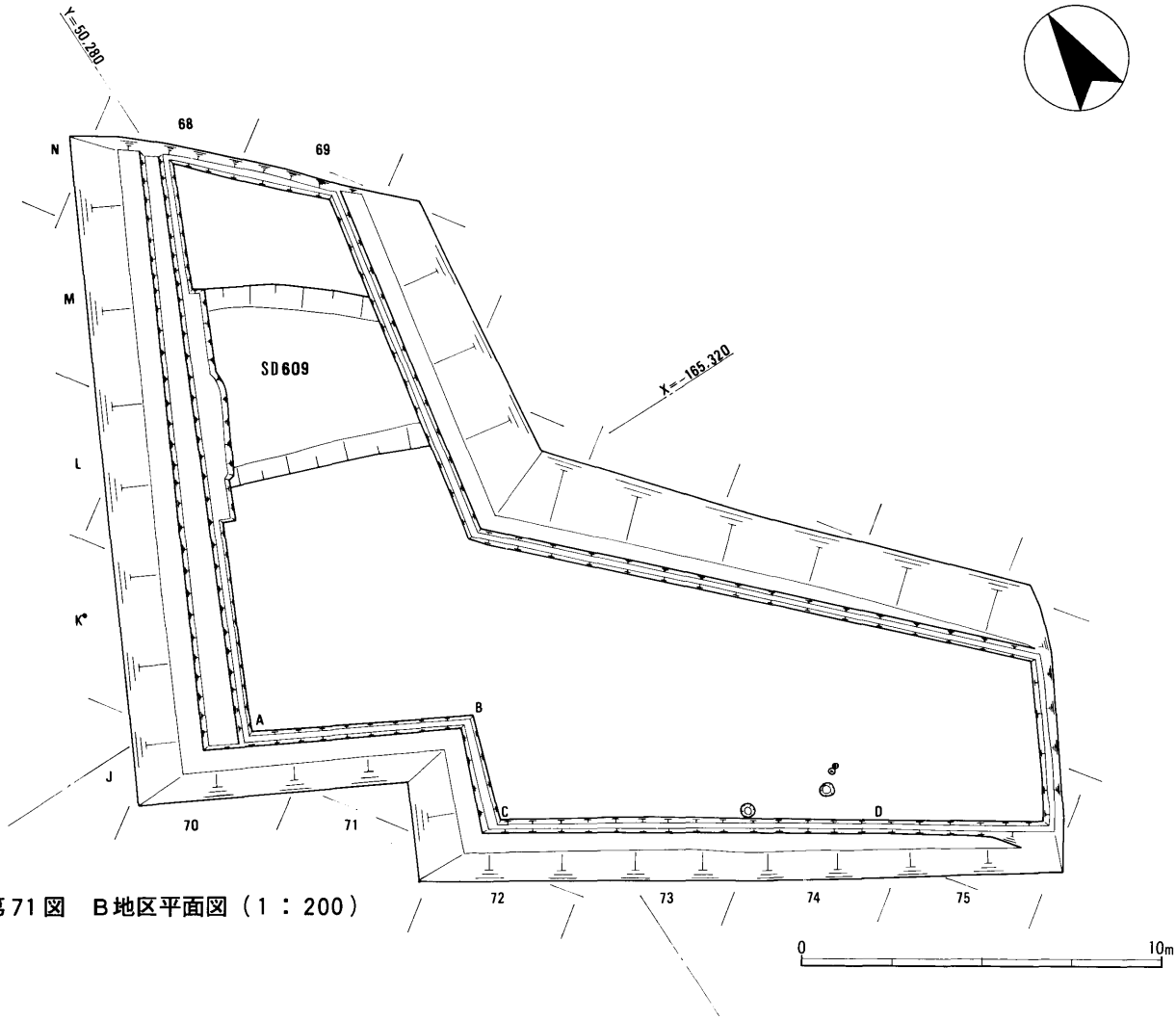




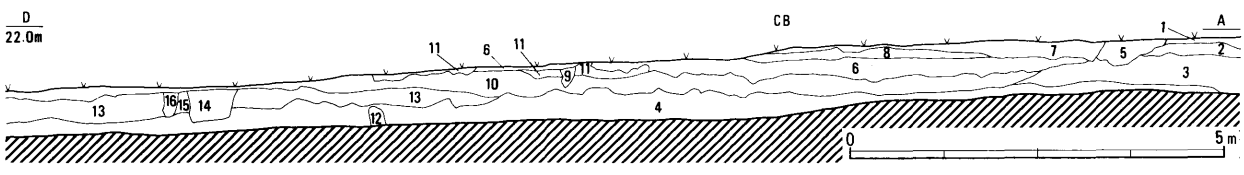
第70図　SH605･606貯蔵穴遺物出土状況図（1:50）

畿内第3 様式後半の影響をかんじることができる。(1255)は口縁部がラッパ状に開き稜をもつ。内外面は磨滅がすすんでいるが、口縁部に刺突文を確認することができた。第5様式中頃に並行し、西ケ広期[11]に比定できるようである。

(1266～1268)は高杯てあるが、(1267)は脚部外面にヘラミガキを多用し、櫛刺突文が施されている。透孔は4 ケ所みられ、松阪市、阿形遺跡の高杯A類[12]に比定できようが、脚部のみの残存であり時期決定は難しい。(1266)は(1268)に比べて脚部内面にハケメがみられものの、ゆるやかに内弯する口縁部の端に斜目の面をもち、脚部上方に数帯の櫛描沈線をもつが、脚部は直線にのびていることから欠山式新段階に比定したい。

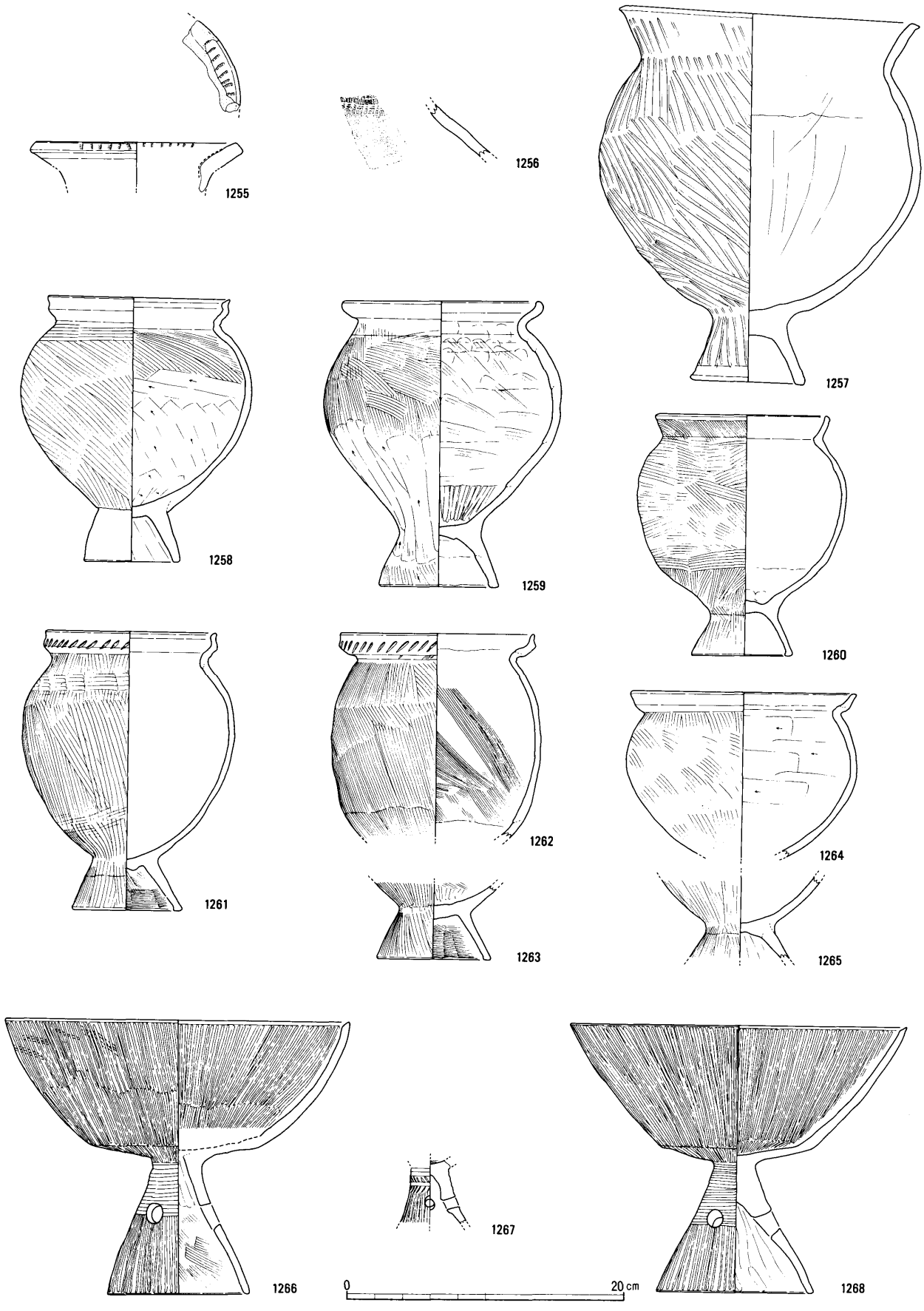


第71図　B地区平面図（1：200）



1．オリーブ（5Y5／4）
2．灰オリーブ（5Y5／2）
3．褐灰（7.5YR4／1）
4．暗灰黄（2.5Y4／2）
5．灰（5Y5／1）
6．黒褐（10YR3／1）
7．灰（5Y4／1）
8．灰オリーブ（5Y4／2）
9．黒褐（10YR3／2）
10．黒褐（10YR2／2）
11．黒褐（10YR3／1）に粘質土
12．黒（10YR2／1）
13．暗灰黄（2.5Y4／2）
14．黒褐（2.5Y3／1）
15．暗オリーブ（5Y4／3）
16．暗オリーブ（5Y4／3）にオリーブ黒（5Y3／1）混入

第72図　B地区土層断面図（1：100）



第73図　SD603出土遺物実測図（1：4）

(1257～1265)は土師器台付甕であるが、(1259～1262・1264)は赤塚編年[3]で述べられている受口系口縁台付甕に、(1257・1258)はク字状口縁台付甕に類似する。

(1261)は受口部外面に刺突文が見られる。体部外面は黒変していて調整は不明瞭であるが、外面調整にはヨコハケがみられる。(1262)も受口部外面に刺突文列がみられ、内外面にハケメ調整がみられる。　(1259・1260・1264)の台付甕からは刺突文が省略されるが、外面はハケメ調整、内面にヘラケズリが施されるものもある。(1259)の口縁部はS字に類するが、まだ受口系口縁台付甕の範疇に相当していると考えられる。(1260)は外面調整として体部上半部にハケメがみられるが、体部下半部にはハケメ痕跡さえも、ほとんどみられなくなる。板状工具による動作単位がみられ、ハケメをナデ消すような調整になっている。(1257)は口径が21cmをこえる大型品である。外面にはハケメが、内面は板状工具によるナデが施されれている。(1258)は逆に口径が12cm程の小型品で、外面調整にはハケメがみられる。

(2) ＳＨ６０５出土遺物

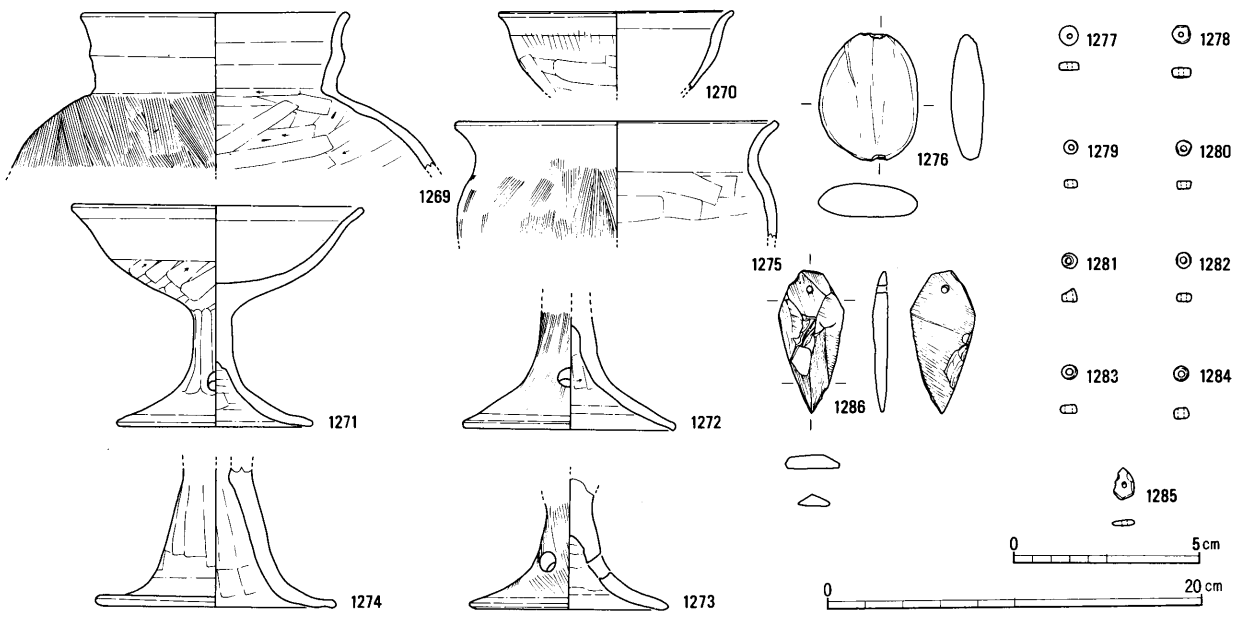
古墳時代の土師器椀、高杯、甕、石製模造品（剣形）や遺構埋土の洗浄の結果、臼玉を確認した。さらに、遺構埋土に混入したと思われる石錘が 1点出土している。

(1269)は二重口縁壺で、口縁部の段は丸みをもち無飾であり、体部の外面調整にはハケメがみられる。内面には体部最上部からケズリが施されている。

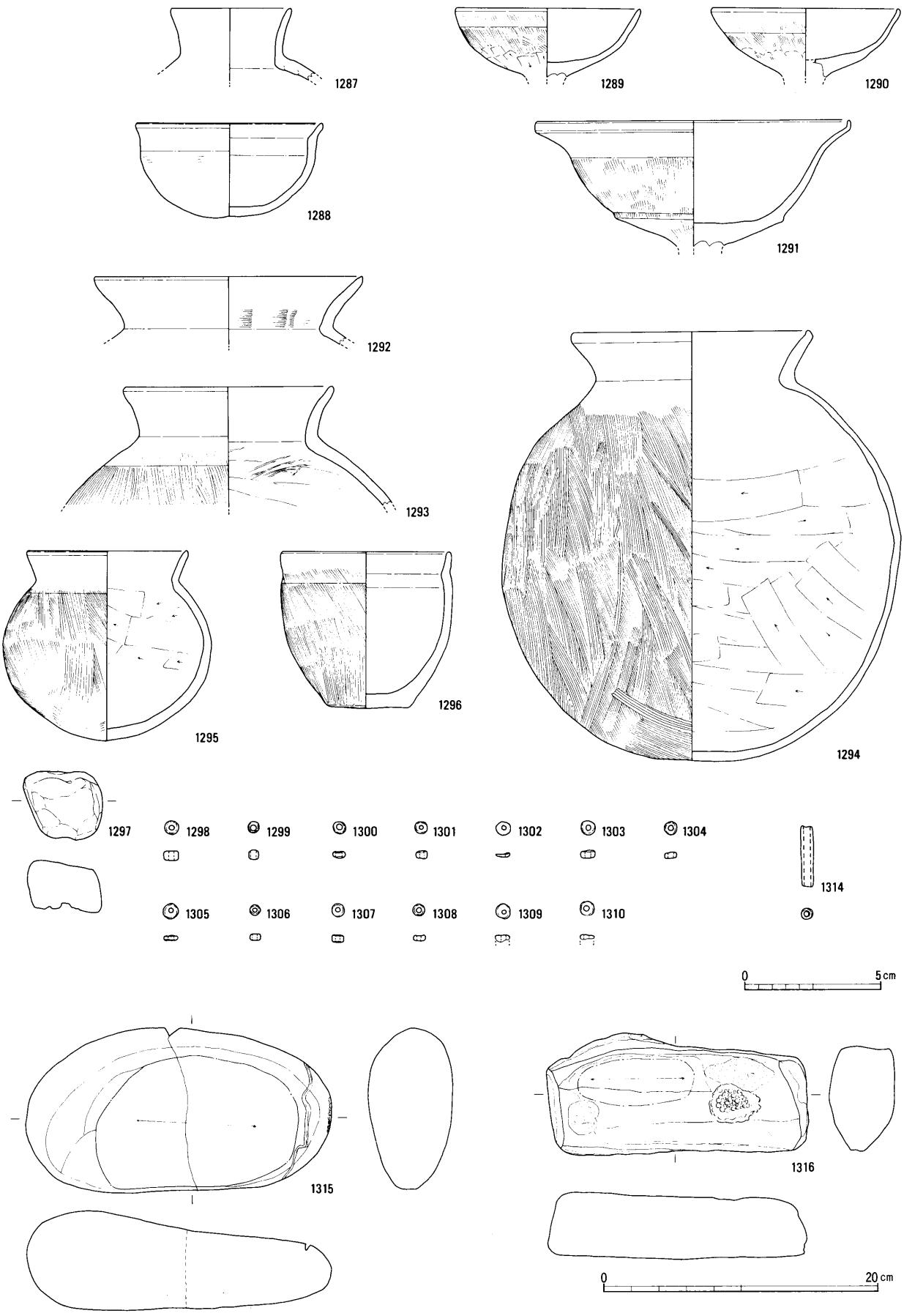
(1270)は土師器椀であり、口縁部は緩く開いている。外面体部上半部にハケメが、下半部にはヘラケズリがみられる。しかし、底部が遺存していないことから丸底、平底の判断は難しいが、この場合は丸底と判断した。

(1271～1274)は土師器高杯であるが、欠山様式などにみられるような櫛描沈線やヘラミガキは施されていない。(1217・1272・1273)は脚柱部から裾部になだらかにつづく。(1273)は外面がハケメ調整で、しかも透孔が3 ケ所みられた。(1272)は外面がハケメ調整で、内面は脚裾部にヘラケズリがおこなわれ、透孔は1 ケ所みられた。(1271)は杯部、脚部とも大半が遺存している。外面は杯部下部にヘラケズリがおこなわれ、杯部上半部や内面にはナデが、さらに透孔は1 ケ所みられた。土師器高杯の型式変遷から考察すれば、(1271・1272・1273)の高杯は透孔が消失していく過渡期に位置づけられる。(1274)は(1217・1272・1273)と異なり、透孔は存在していない。さらに脚部はやや膨らみ気味で、なだらかに裾部につづく。外面には強いナデが、脚裾部の内面にはヘラケズリがおこなわれている。

(1275)は土師器甕である。口縁は屈折し、直線



第74図　SH605出土遺物実測図（1269～1276＝1：4　1277～1286＝1：2）



第75図　SH606出土遺物実測図（1287～1297、1315・1316＝1：4、1298～1314＝1：2）

的に外傾している。外面にはハケメが、内面にはナデが施されている。

(1276)は石錘であるが、混入遺物と考えられる。長軸の両端部に打ち欠きがみられる。長さ6.9cm、幅5.3cm、厚さ1.8cm、重さ90.49gである。

(1277～1285)は臼玉である。個々の臼玉は同一の竪穴住居内においても、径の広いものや狭いもの、厚いものや薄いものなど大きさに若干のばらつきがある。(1277)は暗青灰色、(1278)はにぶい橙色、(1285)はにぶい褐色、(1279)は青灰色、(1280)は灰黄色、(1281)は灰オリーブ色、(1282)は灰黄色、(1283)は灰白色、(1284)は灰色となっていて、色調個々に違いをみせている。

(1286)は石製模造品(剣形)である。鏑は片面にしかみられないが、精巧さもみられる。長さ3.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cm、重さ2.71gである。

(3) SH606出土遺物

古墳時代の土師器壺、高杯、甕、椀、管玉等が出土し、焼土内から竈を支えていたと考えられる支柱石が存在している。さらに、SH605と同じように遺構埋土を洗浄した結果、臼玉が出土した。一方、遺構埋土に混入したと考えられる石鏃や竪穴住居の時代に位置づけられる砥石や軽石がある。(1287)は口縁部が遺存している。内外面にヨコナデが若干確認できるが、磨滅が激しい。口縁部が長く、しかも直線的にのびているため土師器直口壺と考えたい。

(1288)は土師器椀である。口縁部は緩く開き、底部は丸底である。体部外面にはハケメがみられ、体部内面にはナデが施されている。

(1289～1291)は土師器高杯であり、杯部が遺存している。(1291)は大型品である。杯底部から屈折して立ち上がり、杯の口縁部と底部との稜を強調している。外面にハケメがみられるほか、ナデが施されている。(1289･1290)は共に小型品であり、(1289)は杯部がゆるやかな丸みをもち、外面上半部にハケメがみられるほか、内面にはナデが施されている。(1290)は(1289)と比べて、より杯部が丸みをおびている。外面上半部にハケメが、下半部にケズリが若干確認され、内面にはナデが施される。

(1292～1295)は土師器甕であり、(1292)は口縁部しか遺存していない。口縁部は外反し、内外面にヨコナデが施される。(1294)は貯蔵穴から出土し、ほぼ完形である。口縁部は外反し、体部外面にはハケメがやや不定方向にみられ、内面は体部上部にナデが、下部にはヘラケズリが施される。(1295)は土師器小型甕で、体部外面にはハケメ、内面にはヘラケズリが施されている。

(1296)は土師器鉢であるが、甕とすべきかもしれない。体部外面にはハケメがみられ、内面にはナデが施されている。口縁端部にはやや丸みがあり、底はやや厚くなっている

(1297)は軽石であるが詳細は不明である。

(1314)は管玉で、筒状を呈し、色調は暗灰色である。

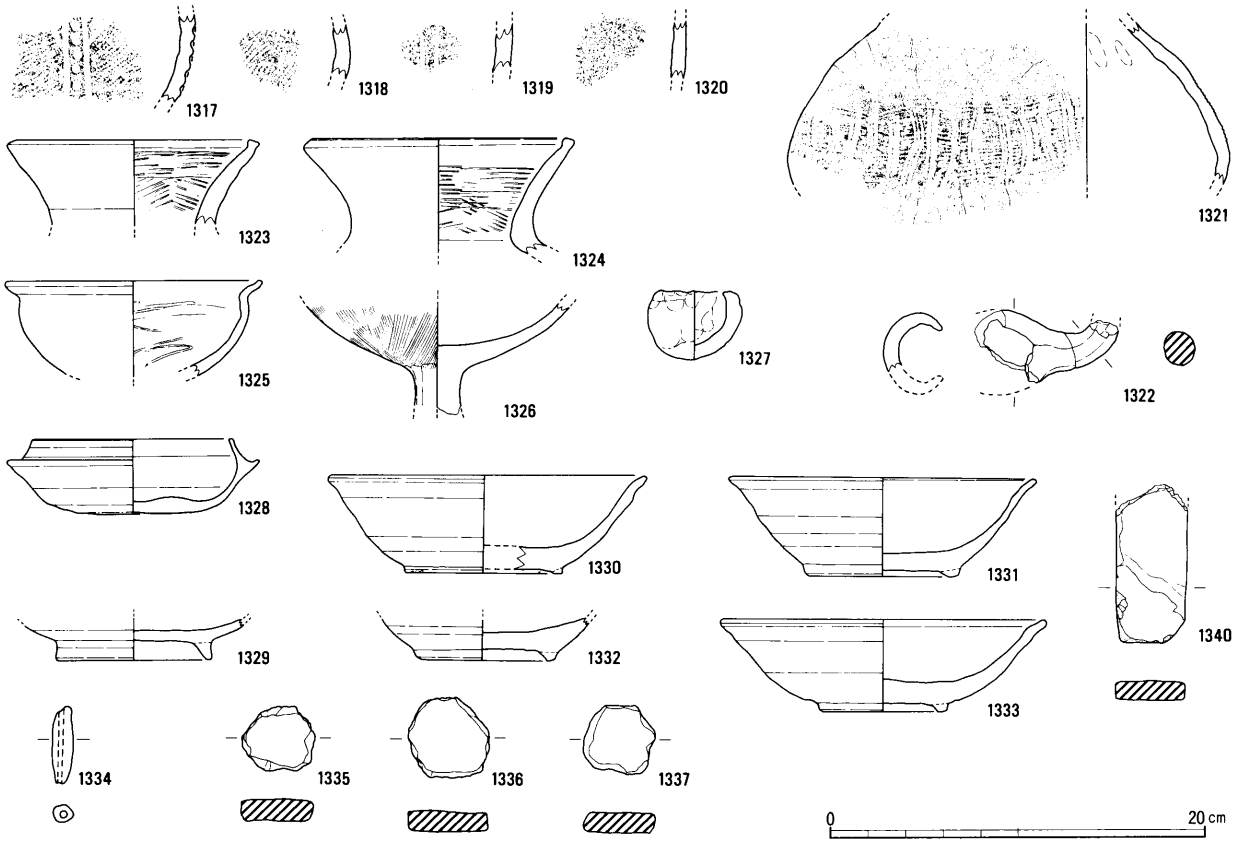
(1298～1313)は臼玉で、(1298～1310)を図示し、(1311～1313)は観察表のみを掲載した。SH605出土の臼玉と同様に個々に若干のばらつきがみられる。色調は(1300･1302･1303･1306 ･1307･1308･1309･1310)が青灰色、(1298･1304)は灰色、(1299･1311) は灰オリーブ色、(1301) は緑灰色、(1305 ･ 1312) は暗青灰色で、(1313) は暗緑灰色である。

(1315･1304)は砥石であるが、敲石を転用したものと考えられる。ともに中央部付近に使用の痕跡が認められる。

(4) 包含層出土遺物

(1317～1320)は縄文土器である。深鉢の体部片と考えたが、小片であるため器形は判断しにくい。縄文時代中期末葉から縄文時代後期前葉に比定されると考えた。(1317) は外面に刺突文がほぼ規則正しく施され、刺突文以外では縄文がみられる。内面はナデが施されている。(1319)は外面に沈線が2 条確認でき、内面にはケズリがみられる。(1320)も外面に沈線が2 条確認できるものの、内面は磨滅が激しく調整は不明瞭である。(1318) は外面は縄文で、内面はナデ調整となっている。

(1321)は弥生土器壺の体部片である。伊藤納所編年[4]第3 様式前半の広口壺のように腹部は上半で肩の張る器形に類似している。腹部は櫛状具による縦方向の粗いハケメや横方向に細かなハケメがみら



第76図　包含層出土遺物実測図（１：４）

れる。(1322)は杓子形土器に類似しているが、両端部とも残存していないため、分類は難かしい。弥生土器としたが、包含層からであるもののSH605に近い地点からの出土であるため、土師器の可能性もある。

(1323･1324)は土師器壺で、口縁部片の残存である。(1323)は外面はナデ調整され、内面にはナデにちかいハケメが見られる。(1324)は内外面ともにナデの後オサエがみられ、一部内面にナデにちかいハケメが確認された。両者は同一固体の可能性がある。

(1325)は土師器椀であり、磨滅がみられるために調整はやや不明瞭であるが、内外面ともナデが確認できる。外面体部下部にヘラケズリが施されているかもしれないが、不明確である。内面に、棒状工具によるヘラミガキ状の痕跡が疎らに認められる。

(1326)は土師器高杯で、杯底部にかけてハケメ調整されており、ヘラミガキは確認できない。また、内面全体が黒変していて調整がやや不明瞭である。

(1327)は土師器のミニチュア土器である。椀形の手づくね土器であり、外面上部から内面にかけて、ユビオサエがみられる。外面下部にはナデが施され、底部には黒斑がみられる。

(1328)は須恵器杯身である。体部内外面ロクロナデ、外面底部にヘラ切りの後一周軽くロクロケズリを施し、内面底部にはナデが施される。たちあがりが短く、内傾している陶邑編年[5]のＴＫ43に比定されると考える。

(1329)はロクロ土師器である。内外面ロクロナデや外面底部に糸切り痕がみられる。

(1330～1333)は山茶椀である。藤沢編年[6]の第4型式から第5型式の範疇に属すると考えた。

(1332)は底部のみの残存である。外面底部に糸切り、内面底部から体部にかけて、自然釉が残存している。(1330)も同様の調整になっているが、自然釉が認められず、高台部にはモミガラ痕跡がみられる。(1333)は内外面ロクロナデがみられるが、器壁が全体的に厚く、やや口縁部に外反がみられる。(1331)は(1333)と同様に口縁部に外反がみられるものの、(1333)に比べて体部下方がかなり直線化し、体部の丸みは失われている。(1330･1331･1333)の内面には墨が付着しており、硯として利

用されたことがわかる。

（1334）は土錘である。紡錘状のものであるが、小さい。長さは4.15㎝、径が1.05㎝、重さは5.13gである。

（1335～1340）は加工円盤であるが、図示したものは（1335～1337）で、（1338）は観察表のみを掲載した。形状が円形を志向し、２次的な加工（打ち欠き）が施され、その素材は厚手の常滑甕の体部片や摺鉢を利用している。

（1339）は砥石である。残存部分は偏平で長方形状を呈している。

4．小　結

第6 次調査は鴻ノ木遺跡の最終年度に当たる。下層編で報告した第１次調査や第５次調査から検出された縄文時代早期の押型文土器や関連する遺構は今回の調査区から全く認められなかった。したがって、縄文時代早期の遺構、遺物の南限が判明することとなった。

今回の調査では、はじめて竪穴住居、溝等の古墳時代の遺構を検出した。竪穴住居と溝は出土した土器から時期差を知ることができる。

溝（SD603）から出土した古式土師器は、三河、西遠江の欠山様式[7]、濃尾平野の廻間Ⅰ式[8]、畿内では庄内式前半期[9]の土器型式編年を参考にし考察した。２棟の竪穴住居から出土した古式土師器は、SD603 出土の古式土師器と時間を同じくするものは認められず、欠山様式、廻間Ⅰ式等の範疇には比定しない。これらは、山田編年[10]の山城Ⅰ式、伊藤編年[11]の納所古墳時代Ⅱ期、布留式Ⅰ期[12]等の土器型式編年を参考にして考察した。

まず、SD603出土土器に弥生時代中期～後期にかけてよくみられる廉状文が施されている土器片が一点みられるが、大半は欠山新段階に比定される高杯（1266･1268）や同時期前後に位置づけられる台付甕である。高杯（1266･1268）は口唇部に内斜面を持ち、杯底部の径はやや小さく、底部以上に長い口縁部は内弯するなど、欠山中段階的な要素を感るものの、脚部が直線的になっていることなどから欠山新段階に比定される。赤塚編年でも廻間Ⅱ式2段階にはⅠ式時期の特徴を残しながらも脚部の内弯がみられるものもあれば、脚部が直線化の傾向をたどるものもある。一方の台付甕も赤塚編年の廻間遺跡の資料を中心に考察をすすめた。ただ、赤塚編年の廻間遺跡の資料は、濃尾平野を中心とした土器様式を設定するもので、伊勢湾岸、或いは東海地域全てを網羅するものではない。しかしSD603の台付甕は、廻間遺跡の器種組成とその調整法の変遷に類似している。廻間遺跡の受口状口縁台付甕は、口縁各段は外反し、刺突文は細かく、内面調整はハケメを多用する。次の段階では刺突文間隔が粗になり、やがて文様は省略される。一方、く字状口縁台付甕は外面調整はタテ方向のハケメで、内面はケズリが施され、次の段階からケズリが減少していく。SD603出土の受口状口縁台付甕に目を向けると、（1261･1262）の体部は長胴化し、受口部にみられる刺突文列も粗い。廻間遺跡の資料にもこれほど長胴化している受口状口縁台付甕をみつけにくい。伊勢湾西岸の北・中勢にもほとんどみられないが、調整手法が若干ことなるものの、県内最南端に近い、津の森遺跡（熊野市）[13]に類似しているものが確認される。

（1260･1264）は体部内面にケズリが強調され、（1259）は体部内面上部にハケメ、下部にはケズリが施される。く字状口縁台付甕（1257･1258）の内面には板ナデが施されていることや脚部をコップのようにして、体部と接合したようなくぼみが確認できる。このように、調整手法等に若干の時期差を確認できるため、廻間Ⅰ式3段階～同式4段階と廻間Ⅱ式2 段階に比定できる。

次に、竪穴住居出土土器であるが、SH605 出土の土師器高杯には（1271～1273）のように透孔がみられるものと、（1274）の土師器高杯のように脚部はやや膨らみ気味で透孔はみられないものがある。透孔の残る土師器高杯は山田編年の山城Ⅱ式に、透孔のみられない土師器高杯（1274）は山城Ⅲ式に比定できよう。

SH606 出土の土師器高杯（1289～1291）は杯部

しか遺存していないが、SH605 出土の土師器高杯（1271～1273）と比較して時期差があり、SH606出土の方が新しい時期に位置づけられる。（1289・1290）の杯部は丸味をおびて、粗雑化傾向を示している。さらに、（1294）は貯蔵穴から出土した土師器甕であるが、体部外面にはハケメが縦方向にみられ、内面体部最上部にナデ、他はヘラケズリが施されている。山城遺跡、D1類に近似していることなどから、山城Ⅲ式以降、ほぼ山城Ⅳ式に比定できると考える。

また、SH605・606の埋土を洗浄した結果、26個の滑石製臼玉、剣形石製模造品を確認し、一方、住居内のピットから管玉を検出した。他に出土地不明の臼玉1 個（1339）があるが、これもどちらかの竪穴住居から出土した可能性が強い。これらの遺物が、具体的にどのような意図をもっていたかは定かではないが、祭祀行為に供された可能性がある。

「祭祀」は先史時代から脈々と続いているが、古墳時代の中で、次第に滑石や蝋石などでつくられた石製模造品や銅、鉄、金銅などの金属製模造品なども加わったことにより祭祀遺物は豊富になっていくようである。県内を概観すると、鈴鹿市伊那富遺跡[14]、亀山市大鼻遺跡[15]、上野市北堀池遺跡[16]から臼玉が、古墳時代後期に位置づけられる竪穴住居から出土している。古墳時代後期には、石製模造品として、有孔円板・剣形品・臼玉・偏平勾玉などが多くみられるが、全体的に粗製化し、剣形品では、古式のものが精巧につくられ、両面に鎬のあるもの、片面だけに鎬のあるもの、鎬のない偏平ものに移り変わっていくようである。SH605出土の剣形品は、片面に鎬がみえ、やや精巧さも残り、共伴土師器と同時期に比定される。上記に記述した県内の遺跡と比較して、若干先行するものである。臼玉を含めて、これらの祭祀遺物は、カミへの供献品としての役割を果たしていたと考えられる。竪穴住居SH605と606は出土土器に時期差があり、SH606のほうが新しい時期に位置づけられることから、「祭祀行為」がSH605の時期から606の時期へ脈々と続き、行われていたと考えられるのである。

さて、弥生時代から古墳時代前半期にかけて、竪穴住居の形式等の変化は緩やかであるといわれている。しかし、古墳時代後期になると壁際に竈を取立て、隣に貯蔵穴を設けるのが一般住居の平均的な構造のようである。SH605は、各隅に若干の丸味を残しながらも方形で、床面の深さは浅い。SH606は、ほぼ方形を呈し、SH605同様に床面は浅い。

SH606 は山田考察の竪穴住居（四等分型）[17]に類似している。貯蔵穴は南東隅に位置し、この隣に竈の可能性を秘めた焼土を壁際で確認している。貯蔵穴と竈までが4 分の1区画単位に配置されている。SH606出土土器の大半は布留氏式期Ⅳ、山城Ⅳ式等に比定されることから考察して、竈の存在は難しいと考えるものの、遺構の形式、焼土上からの遺物出土状態等から可能性を見いだしている。一方のSH605は、焼土と貯蔵穴が離れ、焼土も壁に接しないため、炉の可能性を考えておく。良好な残存ではないものの、これらの住居は竈導入時の様相を示す貴重な資料と考えられる。

（下平康弘）

【註】

① 谷本鋭次ほか 「西ヶ広遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財発掘調査文化財調査報告』 三重県文化財連盟 1970 年
② 福田哲也ほか 「阿形遺跡」『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』 三重県埋蔵文化財センター 1992.3
③ 赤塚次郎「「S字甕」覚書'85」『年報昭和60年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1986
④ 伊藤久嗣 『納所遺跡－遺構と遺物－』 三重県教育委員会 1980
⑤ 田辺昭三 『陶邑古窯跡址群Ⅰ』 平安学園考古クラブ 1966
⑥ 藤澤良祐 「瀬戸古窯址群Ⅰ」『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』 瀬戸市歴史民俗資料館 1991年
⑦ 川崎みどり 「三河における「欠山式土器」とその前後」『欠山式土器とその前後 研究．報告編』 第3回 東海埋蔵文化財研究会 1986
⑧ 赤塚次郎 『間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター 1990
⑨ 寺沢 薫 「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」『矢部遺跡』 奈良県立橿原考古学研究所 昭和61年3月
⑩ 山田 猛・岸田早苗 「山城遺跡」『山城遺跡・北瀬古遺跡』 三重県埋蔵文化財センター 1994.3
⑪ 前掲④に同じ
⑫ 前掲⑨に同じ
⑬ 嶋 正央ほか 『津の森遺跡調査概要』 熊野市教育委員会 1980
嶋 正央ほか 『津の森遺跡調査概要Ⅱ』 熊野市教育委員会 1982
⑭ 小玉道明 「伊那富遺跡」『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』 鈴鹿市教育委員会 1966
⑮ 森川幸雄ほか 『大鼻遺跡』 三重県埋蔵文化財センター 1994.3
⑯ 三重県教育委員会 『北堀池遺跡発掘調査概要（3）』 1979
⑰ 前掲⑩に同じ

番号	実測番号	遺構	位置	器種 器形	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1255	611-02	SD 603	A-G77 SD3	弥生土器 広口壺	口径 15.3	外面口縁部クシによる刺突文列5/5㎜ ラッパ上に開く 内外面磨滅進み調整不明瞭	やや粗 ～2㎜の細砂粒含	良	橙 7.5YR7/4	口縁部 1/8	
1256	611-03	SD 603	A-G77 SD3	弥生土器 広口壺		外面簾状文7/cm、ハケメ10/cm 内面ハケメ10/cm 、オサエ	やや粗 ～1㎜の微砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	肩部小片	
1257	603-01	SD 603	A-G77 SD3 No,6	土師器 台付甕	口径 21.7 器高 27.2 底径 8.3	外面体部、脚台部にハケメ2/cm 内面板状工具によるナデ	やや粗 細砂粒含	良	にぶい褐 7.5YR6/3	体部2/3 口辺部3/8	体部一部復原
1258	602-02	SD 603	A-G77 SD3 No,7	土師器 台付甕	口径 12.8 器高 19.1 底径 6.9	外面脚台部ヨコナデ、体部にハケメ5/cm 内面体部上半部ハケメ、下部ヘラケズリ	やや粗 ～2㎜の細砂粒含	並	黒褐7.5YR3/1 明褐灰 7.5YR7/2	3/5	外面スス付着
1259	606-01	SD 603	A-E77 SD3 No,3	土師器 台付甕	口径 14.5 器高 20.6～20.8	外面脚台部～体部ハケメ状ケズリ、体部上部ハケメ6/cm、内面体部上部にオサエ 内面脚台部から体部に工具による板ナデ	やや粗 ～2㎜の細砂粒含	良	浅黄橙 10YR8/3	完形	内面脚台部に粘土接合痕
1260	602-01	SD 603	A-E77 SD3 No,2	土師器 台付甕	口径 12.0 器高 17.4 底径 7.2	外面脚台部～体部ハケメ 内面体部にナデ、オサエ、接合痕	やや密 ～1㎜の微砂粒含	並	灰褐7.5YR5/2 黒褐7.5YR3/1	4/5	
1261	606-02	SD 603	A-F77 SD3 No,4	土師器 台付甕	口径 12.3 器高 20.2 底径 7.5～8.0	外面脚台部～体部にハケメ4/cm、口縁部に刺突文列 内面体部オサエ下部ナデ 内面脚台部ハケメ11,cm 、棒状工具ナデ	やや密 ～2㎜の細砂粒含	並	にぶい黄橙 7.5YR7/3	体部2/3 脚台部完存	全体スス付着
1262	603-02	SD 603	A-G77 SD3 No,6	土師器 台付甕	口径 14.0 器高 (推) 21 底径 8.0 ～8.4	外面脚台部～体部にハケメ4 ～5/cm、内面脚台部ハケメ11/cm 口縁部に刺突文	やや粗 ～2㎜の細砂粒含	良	脚部にぶい橙 7.5YR7/3 体部灰褐 7.5YR4/2	体部3/5 脚台部完存	8 ・9 は同一個体
1263	607-02		A-F77 SD3 No,5								
1264	607-01	SD 603	A-F77 SD3 No,5	土師器 台付甕	口径 16.0～16.4 脚部上端径 5.0	外面ハケメ4 ～5cm 内面体部上半部ケズリ、下半部ナデ 脚部内面ナデ?	やや密 ～2㎜の細砂粒含	良	にぶい黄橙 10YR7/3	体部2/3 脚部1/5	口縁部に粘土接合痕 脚部外面一部黒変 10・11は同一個体
1265	607-04						粗		浅黄橙 2.5YR7/4		
1266	605-01	SD 603	A-E77 SD3 No,1	土師器 高杯	口径 24.6 器高 19.9 底径 10.2	杯部内外面ミガキ、口縁部ヨコナデ、外面脚部ミガキ後櫛描横線 4段、透孔 3ケ所、内面脚部ハケメ	やや粗 ～2㎜の小石含	並	にぶい橙 10YR7/2	完形	杯部一部分ハクリ
1267	611-01	SD 603	A-D78 SD3 No,12	弥生土器 高杯	脚径 2.8 ～3.1 透孔径 0.8	外面ミガキ 内面杯部ミガキの痕跡、透孔 4ケ所	やや粗 ～2㎜の細砂粒含	良	橙 7.5YR7/6	脚部のみ1/3	
1268	604-02	SD 603	A-G77 SD3 No,11	土師器 高杯	口径 24.2 器高 19.3 底径 11.3	杯部内外面ヘラミガキ口縁部ヨコナデ 外面脚部ミガキ後櫛描横線 4段透孔 3ケ所、内面脚部工具によるナデ	やや密 ～3㎜の小石少含	並	にぶい黄橙 10YR7/4	完形	
1269	604-01	SH 605	A-G77 SD3 No,8	土師器 二重口縁壺	口径 14.0	外面体部ハケメ 口縁部ヨコナデ 内面体部ヘラケズリ	やや密 ～1㎜の微細粒含	並	灰黄 2.5Y7/2	口縁部完存	
1270	609-03	SH 605	A-F76 SH5	土師器 椀	口径 12.6	外面体部上部ハケメ7/2cm 、体部下部ヘラケズリ 内面ナデ	やや粗 細砂粒多	良	にぶい橙 5YR6/3	1/4	
1271	609-01	SH 605 貯蔵穴	A-F77 SH5 P6 No,9	土師器 高杯	口径 15.6 器高 11.9 底径 10.5	外面脚部面取風の強いナデ 杯部下部ヘラケズリ 杯部上部～口辺部ヨコナデ 内面脚部～杯部ナデ 透孔1 ケ所	やや粗 細砂粒多	良	にぶい橙 5YR6/3	4/5	
1272	609-02	SH 605	A-F76 SH5 No,1	土師器 高杯	底径 11.4	外面ハケメ透孔1 ケ所 内面脚部ヘラケズリ、脚部上部ナデ	やや密 細砂粒多	良	にぶい黄橙 10YR7/2	脚部のみ2/3	
1273	609-05	SH 605	A-F77 SH5 No,2	土師器 高杯	底径 10.6	外面ハケメ6/cm 透孔3 ケ所 内面脚部下部に粘土接合痕	やや粗 細砂粒多	良	橙 5YR7/6	脚部のみ3/5	
1274	609-04	SH 605 貯蔵穴	A-F77 SH5 P6 No,14	土師器 高杯	底径 12.8	外面強いナデ 内面下部ヘラケズリ、上部オサエ 透孔なし	やや粗 細砂粒多	良	橙 5YR6/6	脚部のみ3/5	
1275	609-06	SH 605 貯蔵穴	A-F77 SH5 P6 No,15	土師器 甕	口径 17.3	外面ハケメ8/cm 内面工具によるナデ	やや粗 細砂粒多	並	橙 5YR6/6	口縁部など 1/6	
1276	615-03	SH 605 混入	A-G76 SH5 No,18	石錘	長 6.9 幅 5.3 厚 1.8	—	—	—	灰白 2.5Y7/1	完形	打ち欠き 重さ 90.5g

第12−1表　第6次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種器形	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1277	615-05	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.5 長 3.8 穴径 0.15	—	滑石	—	暗青灰 5B3/1	完形	重さ 0.10g
1278	615-06	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.45 長 0.2 穴径 0.15	—	滑石	—	にぶい橙 7.5YR7/3	完形	重さ 0.05g
1279	615-08	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.35 長 0.2 穴径 0.15	—	滑石	—	青灰 5BG5/1	完形	重さ 0.05g
1280	615-09	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.2 穴径 0.15	—	滑石	—	灰黄 2.5Y6/2	完形	重さ 0.05g
1281	615-10	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.35 穴径 0.15	—	滑石	—	灰オリーブ 5Y6/2	完形	重さ 0.06g
1282	615-11	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.40 長 0.20 穴径 0.20	—	滑石	—	灰黄 2.5Y6/2	完形	重さ 0.05g
1283	615-12	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.45 長 0.25 穴径 0.20	—	滑石	—	灰白 5Y7/2	完形	重さ 0.06g
1284	615-13	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.40 長 0.30 穴径 0.15	—	滑石	—	灰 5Y6/1	完形	重さ 0.05g
1285	615-07	SH 605	A-SH5	石製品 臼玉	径 0.5～0.85 長 0.15 穴径 0.1	—	滑石	—	にぶい褐 7.5YR5/3	完形	重さ 0.08g
1286	615-04	SH 605	A-F77 SH5	石製模造品 剣形	長 3.8 幅 1.7 厚 0.4	—	滑石	—	緑灰 10GY5/1	完形	重さ 2.71g
1287	614-02	SH 606	A-D76 SH6 No,44	土師器 直口壺	口径 8.5	内外面ヨコナデ 磨滅の為、調整不明瞭	やや粗～3mmの細砂粒含	並	橙 5YR6/6 6/8	口縁部のみ完存	
1288	610-01	SH 606 貯蔵穴	A-D76 SH6 P3 No,50	土師器 椀	口径 13.6 器高 6.9	外面体部ハケメ(薄く残る) 内面ナデ 磨滅多	細砂粒含	良	橙 7.5YR7/6		
1289	614-03	SH 606	A-D76 SH6 No,32	土師器 高杯	口径 13.3	外面杯部上半部ハケメ6/cm下半部ケズリ 内面杯部ナデ	やや粗～2mmの細砂粒含	並	にぶい黄橙 10Y7/2 7/3	杯部のみほぼ完存	
1290	614-01	SH 606	A-D76 SH6 No,28	土師器 高杯	口径 13.5	外面杯部上半部ハケメ6/cm下半部ナデ 内面杯部ナデ	やや粗～2mmの細砂粒含	並	にぶい黄橙 10YR 7/3	杯部のみ完存	
1291	601-02	SH 606	A-D76 SH6 No,57 No,62	土師器 高杯	口径 22.8	外面杯部ハケメ8/cm 後ナデ 内面杯部ナデ	やや密～1mmの細砂粒含	並	内面橙 5YR7/8 外面浅黄橙 10YR8/3	杯部4/5	
1292	614-04	SH 606	A-D76 SH6 No,16	土師器 甕	口径 19.4	口縁部内外面ヨコナデデ 内面ハケメ10/cm 、口縁部から体部にかけてオサエ、ナデ	やや密～2mmの微砂粒含	並	にぶい橙 5YR7/4 橙 5YR7/6	口縁部1/6	
1293	601-01	SH 606	A-C76 SH6 No,19	土師器 甕	口径 15.0	外面体部ハケメ6/cm 内面体部ナデ	やや粗～2mmの細砂粒含	並	にぶい褐 7.5YR6/3 5/3	口縁部 体部1/8	
1294	608-01	SH 606 貯蔵穴	A-D76 SH6 P3 No,51	土師器 甕	口径 17.6 器高 31.2	外面体部ハケメ8/cm 内面体部上部にナデ、体部下部にヘラケズリ	やや粗～2mmの細砂粒含	並	にぶい褐 7.5YR5/4	ほぼ完形	
1295	610-02	SH 606	A-C76 A-D75 A-D76 SH6 No,3,5 11,12, 23	土師器 甕	口径 11.8 器高 13.9	外面体部ハケメ7/cm 内部体部ケズリ	細砂粒含	良	にぶい橙 5YR7/3 褐灰 10YR6/1 5YR4/1	体部など1/2	
1296	610-03	SH 606	A-C76 SH6 No,23	土師器 鉢	口径 12.4 器高 11.5	外面体部ハケメ6/cm、底部ナデ 内面ナデ	やや密～2mmの細砂粒含	良	にぶい橙 7.5YR7/4	体部2/3	

第12－2表　第6次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種 器形	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1297	614-05	SH 606	A-C76 SH6 No,13		長 5.0 幅 5.7 厚 3.5	—	軽石	—	灰黄褐 10YR6/2	完形	
1298	610-04	SH 606	A- SH6	玉類 臼玉	径 0.5 長 0.4 穴径 0.2	—	滑石	—	灰 N5/0	完形	重 0.13g
1299	610-05	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.35 穴径 0.2	—	滑石	—	灰オリーブ 7.5Y6/2	完形	重 0.06g
1300	610-06	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.25 穴径 0.2	—	滑石	—	青灰 5BG5/1	完形	重 0.07g
1301	610-07	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.3 穴径 0.2	—	滑石	—	緑灰 10GY5/1	完形	重 0.07g
1302	610-09	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.15 穴径 0.2	—	滑石	—	青灰 5BG5/1	完形	重 0.02g
1303	610-08	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.25 穴径 0.2	—	滑石	—	青灰 10BG6/1	完形	重 0.08g
1304	616-02	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.45 長 0.2 穴径 0.2	—	滑石	—	灰 2.5GY4/1	完形	重 0.06g
1305	616-03	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.55 長 0.15 穴径 0.2	—	滑石	—	暗青灰 5B4/1	完形	重 0.03g
1306	616-04	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.25 穴径 0.2	—	滑石	—	青灰 10BG5/1	完形	重 0.03g
1307	616-05	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.45 長 0.25 穴径 0.2	—	滑石	—	オリーブ灰 5GY4/1	完形	重 0.07g
1308	616-06	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.2 穴径 0.15	—	滑石	—	青灰 10BG5/1	完形	重 0.06g
1309	616-07	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.25 穴径 0.15	—	滑石	—	青灰 5BG6/1	完形	重 0.07g
1310	616-08	SH 606	A- SH6	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.15 穴径 0.2	—	滑石	—	青灰 5B5/1	完形	重 0.05g
1311	——	SH 606 (?)	底	石製品 臼玉	径 0.5 長 0.2 穴径 0.2	—	滑石	—	灰オリーブ 7.5Y5/2	完形	重 0.07g
1312	——	SH 606 (?)	底	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.2 穴径 0.1	—	滑石	—	暗青灰 5BG3/1	完形	重 0.05g
1313	——	SH 606 (?)	底	石製品 臼玉	径 0.4 長 0.1 穴径 0.1	—	滑石	—	暗緑灰 5G4/1	完形	重 0.01g
1314	616-09	SH 606	A-D75 SH6 P5	石製品 管玉	径 0.4 長 2.2 穴径 0.25	—	—	—	暗青灰 5B4/1	完形	滑石 重 0.52g
1315	618-01	SH 606 貯蔵穴	A-D76 SH6 No,59 No,66	砥石 (敲石を転用)	長 22.0 厚 3.4～5.8	—	—	—	灰褐 7.5Y6/2	完形	使用面の痕跡あり 重 2.690kg
1316	616-01	SH 606	A-D75 SH6 No,1	砥石 (敲石を転用)	長 18.6 厚 4.6	—	—	—	明緑灰 7.5GY7/1	完形	使用面の痕跡あり 重 1.395kg
1317	613-04	—	A-E74 包含層	縄文土器 深鉢	—	外面刺突文、縄文 内面ナデ	やや粗～2mm 長石微細粒多	良	にぶい黄褐 10YR7/4	小片	
1318	613-07	—	A-D75 包含層	縄文土器 深鉢?	—	外面縄文 LR 内面ヘラミガキ	粗 雲母 長石 微細粒多	やや弱	にぶい橙 7.5YR6/4 褐 7.5YR4/2	小片	

第12－3表　第6次調査出土遺物観察表

番号	実測番号	遺構	位置	器種器形	法量(cm)	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1319	613-05	—	A-H73 包含層	縄文土器 深鉢?	—	外面沈線2条 他はヘラミガキ?	粗～2mm 長石 微細粒多	やや弱	にぶい橙 7.5YR7/3 灰白7.5YR8/2	小片	
1320	613-06	—	A-I76 包含層	縄文土器 深鉢?	—	外面沈線2条	粗～2mm 長石 微細粒多	やや弱	灰褐7.5YR6/2 浅黄橙 7.5YR8/3	小片	
1321	620-01	—	A-E79 包含層	弥生土器 壺	体部最大径 23.6	外面 櫛状具による施文 縦方向=3本/0.6cm(原体)、横方向=8本/1.8cm(原体)、内面未調整	粗～2mmの微細粒多	並	灰褐 7.5YR4/2 褐 7.5YR4/3	体部 僅少	
1322	615-02	—	A-G76 包含層	土製品	残存部長 7.7 杓子径 1.8	ナデ	やや粗 細砂粒多い	良	にぶい黄橙 10YR7/2～8/2		両端部欠損
1323	612-03	—	A-G71 包含層	土師器 甕	口径 13.4	外面ナデ 内面ナデか浅いハケメ8/cm	やや密 ～0.5mm 細砂粒含	良	明黄褐 10YR7/6	口縁部のみ 1/3	67と同一個体か
1324	612-02	—	A-G72 包含層	土師器 甕	口径 13.4	外内面ナデの後オサエ 内面ハケメ7/cm	やや密 ～0.5mm 細砂粒含	良	にぶい褐 7.5YR5/4	口縁部のみ 1/5	66と同一個体か
1325	612-04	—	A-G76 包含層	土師器 椀	口径 13.6	外面ナデ 内面棒状工具によるナデかヘラミガキ	やや密 0.5mm程の細砂含	良	明褐 7.5YR5/8	1/3	やや磨滅が見られる
1326	607-03	攪乱	A-G77 SD3 No,10	土師器 高杯	脚部径 2.4	杯部外面ハケメ9/cm、内面ナデ? 脚部外面ヘラケズリ	やや粗 ～3mmの細砂粒含	並	浅黄橙 10YR8/3	杯部から脚部に1/4	内面全体黒変
1327	615-01	—	A-G76 包含層	ミニチュア土器	体部径 5～5.3 器高 3.7	外面上部～内面ユビオサエ 外面下部ナデ 外面底部に黒斑	やや密 ～0.5mm 細砂粒多	良	にぶい黄橙 10YR7/3	完形	
1328	612-01	—	A-G72 包含層	須恵器 杯身	口径 10.6 受部径 13.4 器高 3.9	内外面ロクロナデ、外面底部未調整、軽く一周ロクロケズリ、内面底部ナデ	密 ～0.5mm 細砂粒含	良	外面 灰N4/ 内面 灰N5/	ほぼ1/2	
1329	617-06	—	B-N69 東側トレンチ	ロクロ土師器 椀	高台径 8.3	内外面ロクロナデ 外面底部糸切り、高台はりつけ、ナデ	やや粗 3mm長石 砂粒含	並	淡黄 2.5Y8/3	底部のみ	反転復元
1330	613-01	—	B-N69 包含層	陶器 山茶椀	口径 16.6 器高 5.2 高台径 8.2	内外面ロクロナデ 外面底部に糸切り、高台はりつけ、ナデ 高台にモミガラ痕跡あり	密 ～1mmの細砂粒含	良	灰白 2.5Y7/1	底部など1/3	反転復元 内面墨付着
1331	613-03	—	B-北東端表土	陶器 山茶椀	口径 16.5 器高 5.35 高台径 8.1	内外面ロクロナデ 外面底部に糸切り、高台はりつけ、ナデ	密 ～2mmの微細粒含	良	灰白 2.5Y7/1 灰黄 2.5Y6/2	底部ほぼ完存 口縁部1/8以下	反転復元 内面墨付着
1332	617-07	—	B-北東端表土	陶器 山茶椀	高台径 7.4	内外面ロクロナデ 外面底部に糸切り、高台はりつけ、ナデ 内面底部～体部に自然釉残	密 3mm 小石 1mmの細砂粒	良	灰白 2.5Y7/1	底部1/2	反転復元
1333	613-02	—	B-N69 包含層	陶器 山茶碗	口径 17.4 器高 4.9 高台径 6.9	内外面ロクロナデ 外面底部に糸切り、高台はりつけ、ナデ	密 ～2mmの微細粒含	良	灰白 2.5Y7/1	2/3 但し口縁部1/4以下	反転復元 内面墨付着
1334	617-04	—	A-G71 包含層	土製品 土錘	長 4.15 径 1.05		やや粗 ～2mmの細砂粒含	良	橙 7.5YR7/6 暗オリーブ 5Y4/4		重 5.13g
1335	617-01	—	A-G71 包含層	加工円盤	径 3.45～3.80 厚 1.20	常滑甕の体部片を転用	やや密 2mm小石 微砂粒含	良	灰褐 7.5YR5/2		重 24.44g
1336	617-02	—	A-F78 包含層	加工円盤	径 4.25 厚 1.15	常滑甕の体部片を転用	やや密 1mm小石 細砂粒含	良	灰赤 2.5YR5/2		重 30.31g
1337	617-03	—	A-G78 包含層	加工円盤	径 3.70～3.75 厚 1.10	常滑甕の体部片を転用	やや密 1mm小石 細砂粒含	良	にぶい橙 5YR6/3 黄橙10YR8/6		重 22.95g
1338	——	—	A-F72 包含層	加工円盤	径 2.4～2.0 厚 1.1	常滑甕の体部片を転用	やや密 1mm小石 微砂粒含	良	橙 2.5YR6/6		重 11.74g
1339	——	—	不明	石製品 臼玉	径 0.6 長 0.2 穴径 0.2		滑石		オリーブ黒 10Y3/1		重 0.13g
1340	617-05	—	A-F74 攪乱	砥石	長 8.4 幅 3.7 厚 1.1		粘板岩		浅黄 2.5YR8/4		重 50.10g

第12－4表　第6次調査出土遺物観察表

Ⅸ. 自然科学分析

三重県内では、これまでいくつかの遺跡で樹種同定等の自然科学分析が行われ、過去の生業や古環境等の一端が明らかになってきている。しかし、様々な調査課題を解明するためには、今後さらに資料を蓄積する必要があることが指摘されている。

本報告では、第４次調査区と第５次調査区の上層の各遺構の内容物についてリン・カルシウム分析を行い、過去の生業や環境等に関する資料を得る。

(1) 試料

第4次調査区と第5次調査区の分析試料は、第13表に示した遺構26ヵ所の計80点である。リン･カルシウム分析により、その内容について検討する。

(2) 方法

リン、カルシウムの測定は、土壌標準分析・測定法委員会(1986)、土壌養分測定法委員会(1981)、京都大学農学部農芸化学教室(1957)などを参考として、次の操作行程で行った。

試料を風乾後、軽く粉砕して2.0㎜の篩を通過させる（風乾細土試料)。風乾細土試料の水分を加熱減量法(105℃、5時間）により測定する。風乾細土試料2.00ｇをケルダールフラスコに秤とり、はじめに硝酸(HNO_3)5㎖を加えて加熱分解する。放冷後、過塩素酸($HClO_4$)10㎖を加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で、100㎖に定容してろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液を加えて分光光度計によりリン酸(P_2O_5)濃度を測定する。別にろ液の一定量を試験管に採取し、干渉抑制剤を加えた後に原子吸光光度計によりカルシウム(CaO)濃度を測定する。これら測定値と加熱減量法で求めた水分量から、乾土あたりのリン含量(P_2O_5mg/ｇ)とカルシウム含量(CaOmg/ｇ)を求める。

(3) 結果

リン酸、カルシウム分析の結果を第14表に示す。

・ＳＸ4103

対照試料とした遺構外、土坑床面の試料のリン酸

	遺構名	番号	出土位置
第4次調査区	SX4103	1	土坑中（淡褐色に焼土）
		2	床面（灰褐色土）
		3	遺構外
	SX4132	4	窪の中（中央）
		5	窪の中（底）
		6	遺構外
	SX4133	7	土坑の中（石の下）
		8	遺構外
	SX4134	9	第一層（褐色砂土）
		10	第二層（第一層の下）
		11	第二層（配石の周囲）
		12	遺構外（ＳＸ135 共通）
	SX4135	13	第一層（褐色砂土）
		14	第二層（第一層の下）
		15	第二層（配石の周囲）
		16	上器の中
	SX4138	17	第一層（明赤褐色土）
		18	第二層（配石の下）
		19	遺構外
	SX4139	20	第一層（褐色土）
		21	第二層（暗褐色土）
		22	遺構外
	SX4140	23	土坑中
		24	遺構外
	SX4141	25	第一層（石の間）
		26	第二層（石の底）
		27	遺構外

	遺構名	番号	出土位置
第4次調査区	SX4142	28	床面の炭
		29	遺構外
	SX4145	30	第一層（石の間）
		31	第一層（石の底）
		32	第二層
		33	遺構外
	SX4146	34	第一層（石の底）
		35	第二層
		36	遺構外
		37	遺構の下５cm
		38	遺構外
	SX4148	39	遺構内（石の間）
		40	遺構の下
		41	遺構外
	SX4152	42	遺構の床
		43	遺構外
	SX4153	44	遺構内（石の間）
		45	遺構の下
		46	遺構外
	SX4154	47	遺構の床
		48	遺構外
	SX4157	49	遺構の床
		50	遺構外
	SX4159	51	遺構の底
		52	遺構の下
		53	遺構外
	SX4160	54	遺構内（石の間）

	遺構名	番号	出土位置
第4次調査区	SX4160	55	遺構の下
		56	遺構外
	SX4161	57	遺構内（石の間）
		58	遺構の下
		59	遺構外
	SX4162	60	遺構内
		61	遺構の下
		62	遺構外
	SX4169	63	第一層
		64	第二層
		65	遺構外
第5次調査区	SX505	1	上坑内埋土・土器直下
		2	土器内充填土Ａ
		3	土器内充填土Ｂ
		4	土器内充填土Ｃ
		5	直近の包含層
		6	直近の遺構検出面
	SX507	7	土坑内埋土　中央部
		8	直近の遺構検出面
		9	直近の包含層
	SX508	10	土坑内埋土　中央部
		11	直近の包含層
	SX526	12	上坑内埋土　①
		13	土坑内埋土　②
		14	直近の包含層
		15	直近の遺構検出面

第13表　リン・カルシウム分析試料

含量1.46、1.38P_2O_5mg/gに対し、土坑中の試料は、2.58P_2O_5mg/gで高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4132

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.92P_2O_5mg/gに対し、甕中の中央、底の試料では3.00、3.50P_2O_5mg/gで高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4133

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.71P_2O_5mg/gに対し、土坑中の試料は2.09P_2O_5mg/gでほぼ同じ値を示す。カルシウム含量も、対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4134

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.48P_2O_5mg/gに対し、第一層(褐色砂土)は2.94P_2O_5mg/gと高い値を示すが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。カルシウム含量は、対照試料2.19CaOmg/gに対し、第一層2.91CaOmg/gとやや高いが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4135

対照試料の遺構外試料(SX134共通)のリン酸含量1.48P_2O_5mg/gに対し、第一層(褐色砂土)、土器内の試料は2.96、3.25P_2O_5mg/gで高い値を示すが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。カルシウム含量は、対照試料2.19CaOmg/gに対し、第一層、土器内の試料は3.22、3.87CaOmg/gでやや高いが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4138

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.09P_2O_5mg/gに対し、第一層、第二層では3.18、3.34P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料3.48CaOmg/gに対し、第一層4.98CaOmg/gとやや高いが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4139

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.85P_2O_5mg/gに対し、第一層、第二層では、2.51、2.89P_2O_5mg/gとほぼ同じ値を示す。カルシウム含量は、対照試料4.60CaOmg/gに対し、第一層、第二層ともに対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4140

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.37P_2O_5mg/gに対し、土坑中の試料は2.20P_2O_5mg/gでほぼ同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4141

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.18P_2O_5mg/gに対し、第一層(石の間)は3.10P_2O_5mg/gと高い値を示すが、第二層では対照試料と同じ値である。カルシウム含量も、対照試料4.31CaOmg/gに対し、第一層5.03CaOmg/gとやや高いが、第二層では対照試料とほぼ同じ値である。

・SX 4142

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.99P_2O_5mg/gに対し、床面の炭試料は3.61P_2O_5mg/gと高い値を示し、カルシウム含量も、対照試料3.98CaOmg/gに対し4.58CaOmg/gとやや高い値である。

・SX 4145

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.74P_2O_5mg/gに対し、第一層(石の間)、(石の底)、第二層の試料では3.14、2.98、2.50P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料4.48CaOmg/gに対し、第一層(石の間)は4.10CaOmg/gと低いが、第一層(石の底)、第二層では5.20、5.39CaOmg/gと対照試料よりやや高い値を示す。

・SX 4146

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.89、2.87P_2O_5mg/gに対し、第一層(石の底)、第二層、遺構の下5cmの試料では2.99、3.03、2.60P_2O_5mg/gと対照試料とほぼ同じ値を示す。カルシウム含量も、対照試料4.20、4.13CaOmg/gに対し、4.07～5.24CaOmg/gであり、遺構の下5cmの試料でやや高い値を示す。

・SX 4148

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.73P_2O_5mg/gに対し、遺構内(石の間)の試料は対照試料と同じ値を示すが、遺構の下の試料では5.15P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料3.98CaOmg/gとほぼ同じ値を示す。

・SX 4152

対照試料の遺構外試料のリン酸含量5.78P_2O_5mg/gに対し、遺構の床の試料は3.57P_2O_5mg/gと対照試料より低い値を示す。カルシウム含量も対照試料とほ

ぼ同じ値である。

・S X 4153

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.42P_2O_5mg/gに対し、遺構内（石の間）、遺構の下の試料では、2.41、4.48P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料2.84CaOmg/gに対し、3.59、3.84CaOmg/gとやや高い値を示す。

・S X 4154

対照試料の遺構外試料のリン酸含量1.99P_2O_5mg/gに対し、遺構の床の試料は2.26P_2O_5mg/gとほぼ同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料と同じ値を示す。

・S X 4157

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.34P_2O_5mg/gに対し、遺構の床の試料は2.26P_2O_5mg/gとほぼ同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料と同じ値を示す。

・S X 4159

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.24P_2O_5mg/gに対し、遺構の底、遺構の下の試料では2.07、2.05P_2O_5mg/gと同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料と同じである。

・S X 4160

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.25P_2O_5mg/gに対し、遺構内（石の間）、遺構の下の試料では、2.23、2.22P_2O_5mg/gと同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料と同じである。

・S X 4161

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.33P_2O_5mg/gに対し、遺構の底、遺構の下の試料では2.68、2.05P_2O_5mg/gとほぼ同じ値を示す。カルシウム含量は、対照試料3.73CaOmg/gに対し、4.84、4.66CaOmg/gとやや高い値を示す。

・S X 4162

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.37P_2O_5mg/gに対し、遺構内、遺構の下の試料では2.42、2.30P_2O_5mg/gと同じ値を示す。カルシウム含量も対照試料と同じである。

・S X 4169

対照試料の遺構外試料のリン酸含量2.59P_2O_5mg/gに対し、第一層、第二層では3.17、3.99 P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料4.00CaOmg/gよりやや低い値を示す。

・S X 505

対照試料とした土坑直近の遺構検出面試料のリン酸含量2.12P_2O_5mg/gに対し、土坑内埋土土器直下、土器内充填土A、B、C、直近の包含層の試料では3.84、4.77、4.00、2.69、2.59、2.58P_2O_5mg/gと、いずれも高い値を示し、土器直下、土器内充填土A、Bの試料でリンの濃集が認められる。カルシウム含量は、対照試料2.52CaOmg/gよりいずれもやや高い値を示す。

・S X 507

対照試料とした直近の包含層試料のリン酸含量2.42P_2O_5mg/gに対し、土坑内埋土中央部の試料は、3.15P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料と同じ値を示す。

・S X 508

対照試料とした、直近の包含層試料のリン酸含量1.95P_2O_5mg/gに対し、土坑内埋土中央部の試料は、2.84P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量は、対照試料4.03CaOmg/gに対し8.32CaOmg/gと高い値を示す。

・S X 526

対照試料とした土坑直近の遺構検出面試料のリン酸含量2.23P_2O_5mg/gに対し、土坑内埋土①、②の試料では3.33、4.05P_2O_5mg/gと高い値を示す。カルシウム含量も、対照試料3.01CaOmg/gに対し、4.04、6.27CaOmg/gとやや高い値を示す。

(4) 考察

各遺構のリン酸、カルシウムの濃集について次のことが考えられる。

今回の調査26ヵ所のうち15ヵ所:SX4103、SX4132、SX4134、SX4135、SX4138、SX4141、SX4142、SX4145、SX4148、SX4153、SX4169、SX505、SX507、SX508、SX526の土坑、埋甕、集石遺構でリン酸の濃集が認められ、それらの遺構にリン酸成分を多く含有したもの（動・植物遺体等）が存在したことが推測される。カルシウムについては、いずれの遺構でも自然賦存量の値であり、これが動物遺体かどうか植物由来の炭素含量を測定し、リン酸含量との回帰分析を行うのも有効であろう。

（パリノ・サーヴェイ株式会社）

	遺構名	試料名	リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g	土色・土性	備　　考
第4次調査区	SX4103	1	2.58	3.11	10YR3/4 暗褐・L	>>7.5YR5/8明赤褐の固形物混在
		2	1.38	2.63	2.5Y4/4 ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
		3	1.46	3.29	2.5Y4/4 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	SX4132	4	3.00	3.44	2.5Y4/4 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
		5	3.50	3.91	2.5Y4/4 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>根
		6	1.92	3.30	2.5Y4/4 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>根
	SX4133	7	2.09	3.19	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>根
		8	1.71	2.73	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>根
	SX4134	9	2.94	2.91	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL～L	>>礫、>>5YR5/8明赤褐の固形物混在
		10	1.20	1.60	5Y4/4 暗ｵﾘｰﾌﾞ・S	>>礫
		11	1.68	2.06	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・S	>>礫
		12	1.48	2.19	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL～L	
	SX4135	13	2.96	3.22	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL	＞炭化材
		14	1.99	1.77	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・S	
		15	1.58	2.60	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL	>>礫
		16	3.25	3.87	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
	SX4138	17	3.18	4.98	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
		18	3.34	3.61	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
		19	2.09	3.48	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	SX4139	20	2.51	3.93	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	>>礫、>>炭化材
		21	2.89	4.99	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>炭化材
		22	2.85	4.60	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	SX4140	23	2.20	4.19	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	>>礫、>>炭化材
		24	2.37	4.58	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ SiL～CL	
	SX4141	25	3.10	5.03	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ SiL～CL	>>根
		26	2.19	4.50	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ SiL～CL	
		27	2.18	4.31	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
	SX4142	28	3.61	4.58	10YR2/2 黒褐・SL～L	
		29	1.99	3.98	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
	SX4145	30	3.14	4.10	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ L～SiL	
		31	2.98	5.20	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ L～SiL	
		32	2.50	5.39	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ L～SiL	
		33	1.74	4.48	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL	
	SX4146	34	2.99	4.07	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
		35	3.03	4.58	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・ L～SiL	
		36	1.89	4.20	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SL	
		37	2.60	5.24	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・SiL	>>炭化材
		38	2.87	4.13	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL	
	SX4148	39	2.49	3.82	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・L	
		40	5.15	4.34	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL～HC	
		41	2.73	3.98	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL～HC	
	SX4152	42	3.57	3.69	2.5Y3/3 暗ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL～HC	
		43	5.78	3.79	2.5Y4/3 ｵﾘｰﾌﾞ褐・CL～HC	

第14－1表　リン・カルシウム分析結果（1）

	遺構名	試料名	リン酸含量 P_2O_5mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g	土色・土性	備考
第4次調査区	SX4153	44	2.41	3.59	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		45	4.48	3.84	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
		46	1.42	2.84	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・L	
	SX4154	47	2.26	3.57	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・L	
		48	1.99	3.95	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・L	
	SX4157	49	2.26	3.99	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・SiL	
		50	2.34	4.48	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
	SX4159	51	2.07	3.74	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		52	2.05	3.86	2.5Y4/4 オリーブ褐・CL～HC	
		53	2.24	3.90	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
	SX4160	54	2.23	4.25	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		55	2.22	4.10	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		56	2.25	4.37	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
	SX4161	57	2.68	4.84	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		58	2.05	4.66	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
		59	2.33	3.73	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
	SX4162	60	2.42	3.61	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
		61	2.30	3.82	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
		62	2.37	3.90	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
	SX4169	63	3.17	3.62	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL	
		64	3.99	3.43	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	
		65	2.59	4.00	2.5Y3/3 暗オリーブ褐・CL～HC	>>炭化材
第5次調査区	SX505	1	3.84	4.85	10YR1.7/1 黒・ L～SiL	
		2	4.77	5.41	10YR1.7/1 黒・ L～SiL	
		3	4.00	5.09	10YR1.7/1 黒・ L～SiL	
		4	2.69	3.71	10YR2/1 黒・ L～SiL	
		5	2.59	4.11	10YR1.7/1 黒・ L～SiL	
		6	2.12	2.52	10YR1.7/1 黒・ L～SiL	
	SX507	7	3.15	5.60	10YR1.7/1 黒・ L	
		8	2.38	3.47	10YR1.7/1 黒・ L	
		9	2.42	5.84	10YR1.7/1 黒・ L	
	SX508	10	2.84	8.32	10YR1.7/1 黒・ L	
		11	1.95	4.03	10YR1.7/1 黒・ L	
	SX526	12	3.33	4.04	10YR1.7/1 黒・ L	
		13	4.05	6.27	10YR1.7/1 黒・ L	
		14	2.54	4.08	10YR1.7/1 黒・ L	
		15	2.23	3.01	10YR1.7/1 黒・ L	

注．（1）土　色：マンセル表色系に準じた新版標準土色帖（農林省農林水産技術会議監修，1967）による。

（2）土　性：土壌調査ハンドブック（ペドロジスト懇談改編，1984）の野外土性の判定法による。

L・・・壌土（ある程度砂を感じ、粘り気もある。砂と粘土が同じくらいに感じられる。）

SiL・・・シルト質壌土（砂はあまり感じないが、サラサラした小麦粉のような感触がある。）

第14−2表　リン・カルシウム分析結果（2）

X. 結　語

1. 遺構の変遷

(1) 時代による変遷

櫛田川左岸の鴻ノ木遺跡近辺では、これまでに鐘突遺跡、上寺遺跡、射原垣内遺跡、朱中遺跡の4遺跡で発掘調査が実施されている。特に朱中遺跡の調査区は、鴻ノ木遺跡第1次調査区の北側に接し、全体として一つの調査区域を形成する。そのため、北側の丘陵裾から櫛田川にかけて、幅30～50m、長さ400m以上の巨大な長方形状の区域を調査した結果となった。ここでは、朱中遺跡の調査結果[1]を含め、近隣の鐘突遺跡・上寺遺跡の調査結果[2]を参考にしながら、当遺跡の時代による遺構変遷を概観していきたい。

当遺跡では、縄文時代早期から集落の形成が始まるが、詳細は下層編に詳しい。前期においては、遺構・遺物とも無く、中期では遺物が散在する程度である。後期にはいると、丘陵近くの小規模扇状地で、配石炉や配石遺構が若干検出されている。この様に縄文時代では、早期に豊富な遺構・遺物を出土するものの、前期には断絶し、中期以降晩期までは散在的な小規模集落の可能性を示す程度の様相である。この状態は弥生時代においても継続され、前期の遺物が出土するものの、遺構は検出されておらず、鐘突遺跡で竪穴住居が1棟検出されたに止まっている。この様に、縄文時代から弥生時代への大きな時代の転換期にも、当遺跡周辺では大した変化も無く小規模集落が継続していた可能性が推測される。

弥生時代中期になると、出土遺物も比較的多くなり、方形周溝墓や土坑墓が検出されるなど、当調査区は、墓域として利用されていた様子がうかがえる。上寺遺跡では、竪穴住居も検出されており、比較的広範囲に集落域が広がっていたようである。しかし、当遺跡の遺物は施文に縄文を用いるものが多いのに対し、上寺・鐘突遺跡では出土しておらず、両遺跡は別集団であった可能性もある。

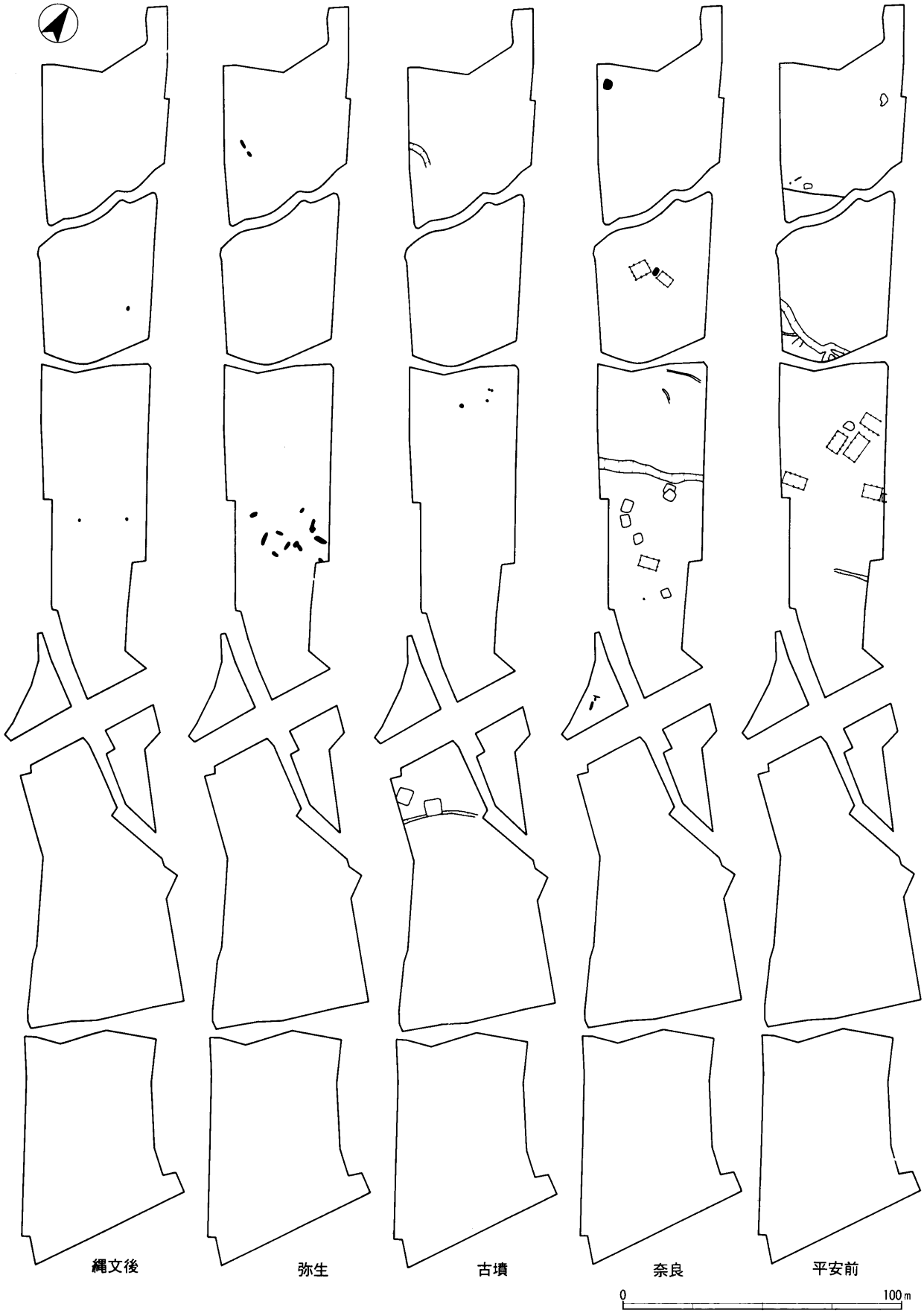
古墳時代では、前期の環濠状の溝1条、中期の竪穴住居2棟、後期の土坑3基を検出したに止まり、遺構の集中は無い。朱中遺跡では前期の溝が1条、上寺遺跡では後期の竪穴住居1棟を検出し、やはり同様な状態であり、広範囲に散在的な集落であったようである。

奈良時代には、竪穴住居と掘建柱建物が混在して検出され、この頃、当遺跡では竪穴住居から掘建柱建物へ移行したものと考えられる。掘建柱建物は小規模で、規則的な配置は認められない。また、建て替えもなく、居住は比較的短い期間に限定される。

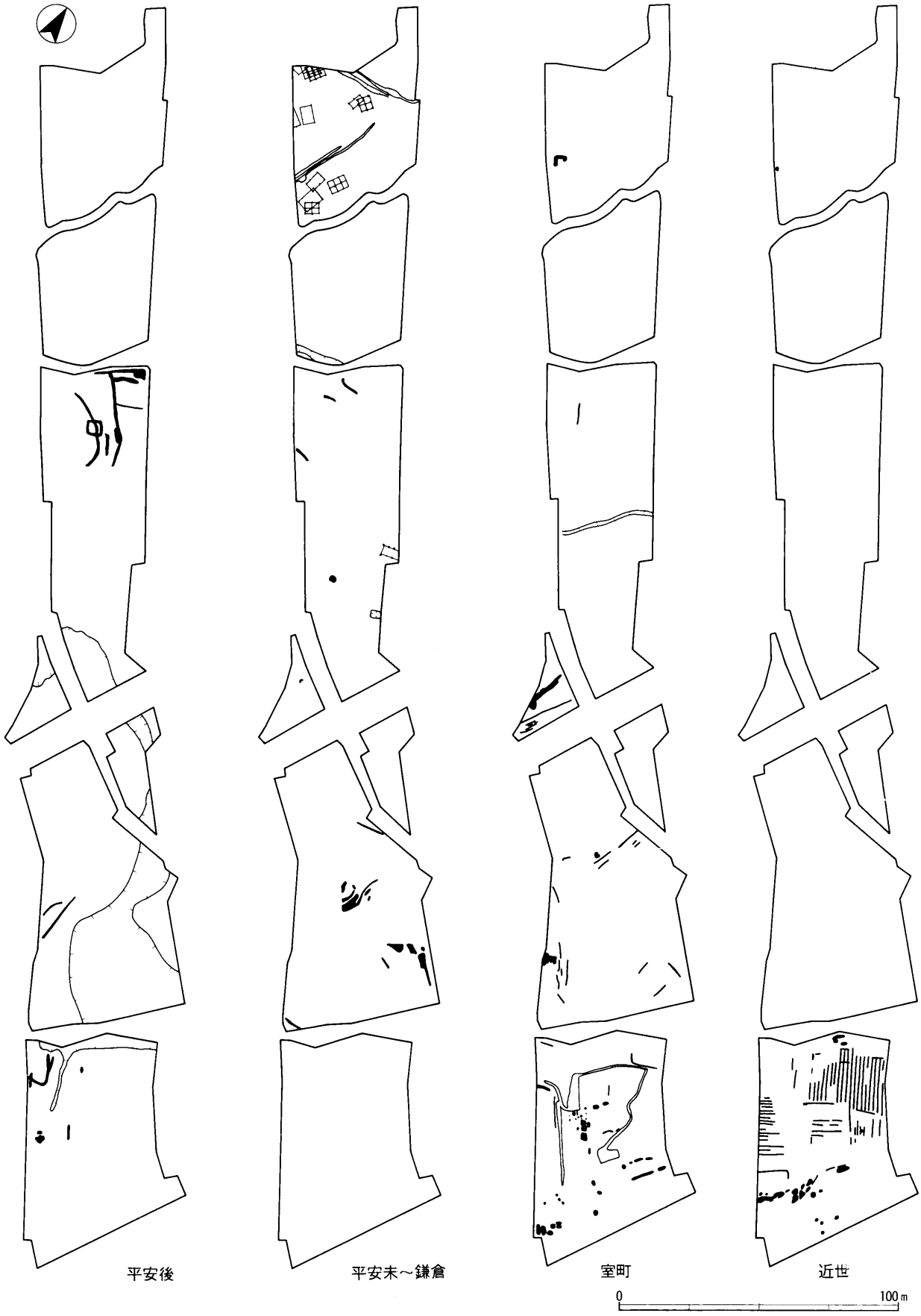
平安時代前期には、竪穴住居はなくなり、比較的大規模な掘建柱建物が出現する。官衙にみられるような整然としたものではないが、棟方向を概ねそろえる意図がうかがわれる。墨書土器の出土があることから、ある程度の識字層の存在が予想でき、同階層の居宅であろうか。建て替えが無いことは前時代と同様で、居住期間はやはり短いのではないだろうか。

平安時代後期では、建物の検出はなく、調査区中央部の扇状地扇端部は、自然流水路となる。この自然流水路からは、土師器やロクロ土師器の皿が完形か、それに近い状態で多量に出土しており、何らかの祭祀に利用されていたようである。未調査区に、これらの祭祀を行った人々の住居がある可能性もあるが、この時期の遺物は、流水路付近以外ではほとんど出土していない。したがって、調査区周辺には集落の中心を想定し難い。鐘突・上寺遺跡では、この時期の掘建柱建物を検出していることから、その周辺が集落の中心で、集落外れにあるこの流水路で祭祀を行ったことも想定できるのではないだろうか。

平安時代末期から鎌倉時代では、調査区北端の朱中遺跡で掘建柱建物の集中が見られる。丘陵裾野で



第77−1図　遺構変遷図（1：2,000）



第77－2図　遺構変遷図（1：2,000）

標高の最も高いこの位置に、比較的長時間住居を構えていたことが、掘建柱建物の建て替えから覗える。

室町時代には、調査区南部の自然堤防上に遺跡は移行する。建物跡はなく、墓域として利用されている。この様子は近世にも引き継がれ、その後、畑に変化していったようである。鐘突・上寺遺跡でもこの時期の建物は検出しておらず、居住域はおそらく現集落と重複するものと考えられる。

この様に、朱中・鴻ノ木遺跡では散在的な集落であることが多く、建物の同一場所での建て替えはほとんど無い。このことは鐘突・上寺遺跡でも同様である。この様に、この付近の集落は散在的であり、居住時間も短いことが特徴である。安定した居住が認められるのは、高地に居住域を設けた鎌倉時代や室町時代以降である。当地は、櫛田川が沖積平野へ流れ出る位置に相当することから、この川の氾濫や治水の技術が、集落形成に影響しているのかもしれない。

(2) 中・近世墓

第4次調査区で、43基の墓と考えられる遺構を検出した。形態や状況は、平面形、土坑や集石の有無、炭・焼土の有無等第15表に示すとおり多種多様である。全体的に埋納遺物をもつものが少なく、集石間から出土した小片を時期決定の有力資料とせざるを得ないものも多くあり、時期決定に疑問を残す遺構も多い。ここでは、詳細な時期を検討しうる遺物を出土した24基について、多少の危険を承知のうえで、あえて詳細な時期を検証することにより、時期による形態的特徴の変遷に迫りたい。時期の検証においては、土師器皿については新田氏[3]の、鍋については伊藤氏[41]の、瀬戸産の陶器については藤澤氏[5]の、常滑産の陶器については中野氏[6]の、瓦類については小林・佐川氏[7]両の研究をもとに行った。

第Ⅰ期の土師器皿を出土する遺構は、A2類を出土するSX4026のみである。第Ⅱ期に属するものは、A5類を出土するSX4150(825)・SX4171(792～795)、B5類のSX4167がある。第Ⅲ期は、A6類のSX4063(819)・SX4086(821)・SX4103(822・823)がある。第Ⅳ期は、C3類のSX4139(810)・SX4169をあげることができる。

次に土師器鍋では、第3段階のものを出土する遺構は、SX4150・SX4167・SX4169(818)の3基ある。第4段階のものは多く、SX4008・SX4060・SX4086・SX4087・SX4137・SX4139(811～813)・SX4140・SX4147・SX4157・SX4164・SX4171(799)がある。

陶器類では、SX4103から大窯Ⅰ期に属する天目茶椀(824)が、SX4171では大窯Ⅰ期の施釉陶器(808)とⅡ期の天目茶椀(809)が出土している。SX4132とSX4148から出土した常滑産の大甕(882・910)は、自證院遺跡の分類[5]に従えばB類で18世紀に属する。18世紀前半とされる美濃産陶器を出土するものにはSX4132・4146(889)があり、19世紀とされるものを出土するのはSX4153である。SX4146では18世紀前半とされる瀬戸産の擂鉢(890)も出土している。SX4148からは17世紀後半の天目茶椀か丸椀の底部を利用した加工円盤(915)が出土している。

瓦類では、SX4135・4136から軒丸瓦(880・886)が出土している。両者とも圏線をもたず、巴や珠文の形態から17世紀とされるものである。

以上の結果から、これらの中・近世墓を6期に分けて、その変遷を考えることにする。

Ⅰ期　12世紀末頃を想定する。該当するものはSX4026のみである。土坑をもち集石は伴わない。

Ⅱ期　14世紀後半から15世紀中頃を想定し、Ⅰ期からは100年ほどの断絶がある。該当するものはSX4063・4150・4167の3基である。SX6063・4167は集石のみ、SX4150は土坑のみを伴う。

Ⅲ期　15世紀後半から16世紀を想定する。該当するものは最も多く、13基である。これらは、北側の一群と南側の一群に別れており、北群はSX4008・4060・4086～4088・4130・4169の7基で、すべて土坑をもち集石を伴わないものである。南群は、SX4137・4139・4140・4147・4157・6164の6基で、集石のみを伴うものが4基、土坑のみが1基、両方伴うものが1基で、集石のみで形成しているものが中心である。

Ⅳ期　17世紀前半を想定する。該当するものはSX4135・4136の2基で、両者とも土坑・集石を伴うものである。

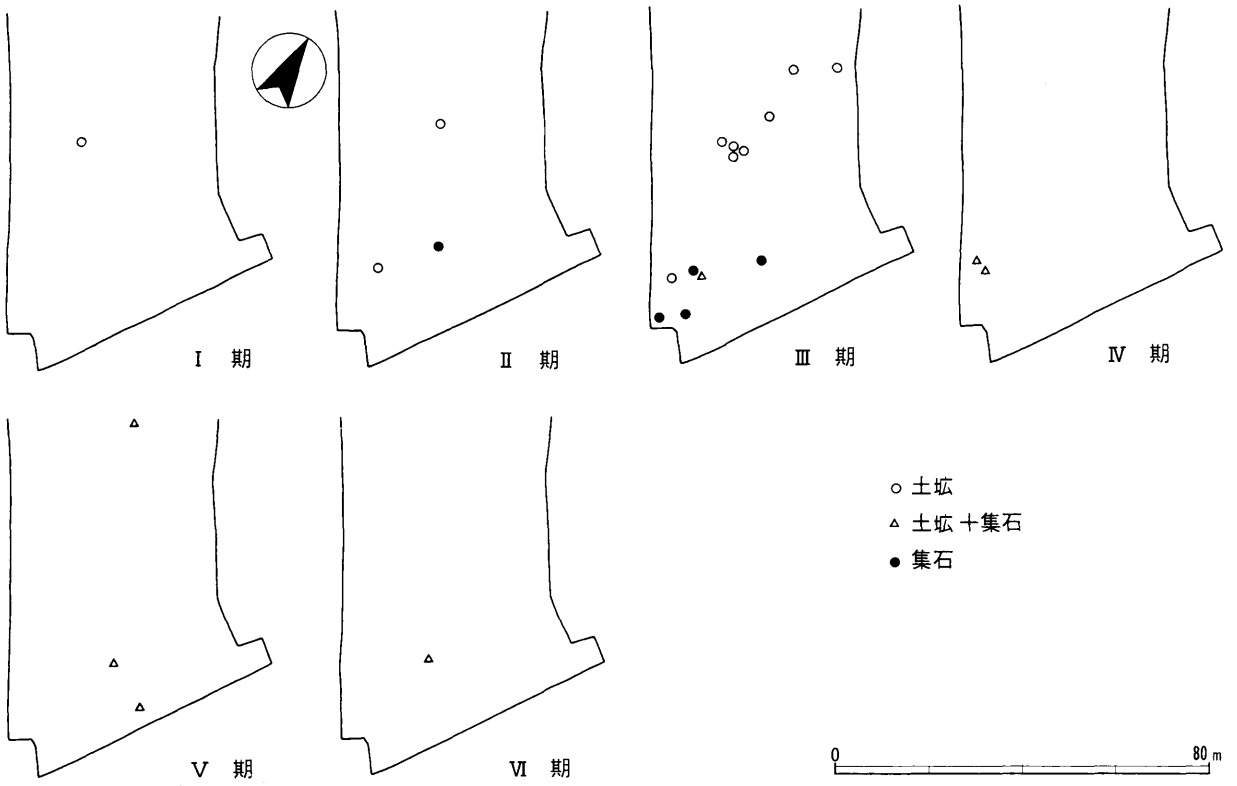
Ⅴ期　17世紀後半から18世紀を想定する。該当するものはSX4132・4146・4148の3基である。すべて土坑・集石を伴うものである。

Ⅵ期　19世紀を想定する。該当するものは、SX4153のみで、土坑・集石を伴う。

集石のみを伴うSX4171については、出土遺物

遺構	番号	平面形	土壙	集石	埋納遺物	炭・焼土	時　期
SX	4008	円	○	×	×	炭	室町(16世紀)
SX	4026	長方形	○	×	土師器皿3枚	×	平安末(12世紀末)
SX	4060	長方形	○	×	×	炭	室町(16世紀)
SX	4063	長方形	○	×	土師器皿1枚	×	室町(15世紀中)
SX	4086	長方形	○	×	土師器皿1枚	×	室町(15世紀後)
SX	4087	方形	○	×	×	×	室町(16世紀)
SX	4088	方形	○	×	×	×	室町(16世紀前)
SX	4103	方形	○	×	×	炭・焼土	室町(15世紀後～16世紀初)
SX	4132	円	○	○	陶器甕(棺)	×	江戸(18世紀前)
SX	4133	長方形	×	○	×	×	江戸
SX	4134	長方形	○	○	×	×	江戸
SX	4135	長方形	○	○	土師器把手付茶釜(蔵骨器)	×	江戸(17世紀前)
SX	4136	円	○	○	×	×	江戸(17世紀前)
SX	4137	円	○	×	×	焼土	室町(16世紀)
SX	4138	円	○	○	×	×	江戸
SX	4139	円	×	○	×	×	室町(16世紀中)
SX	4140	円	○	○	×	×	室町(16世紀)
SX	4141	楕円	×	○	×	×	江戸
SX	4142	円	○	×	×	炭	江戸
SX	4144	長方形	○	×	土師器皿1枚	×	江戸
SX	4145	楕円	○	○	土師器皿1枚	×	江戸
SX	4146	楕円	○	○	×	×	江戸(18世紀前)
SX	4147	長方形	×	○	×	×	室町(16世紀)
SX	4148	楕円	○	○	土師器皿1枚・陶器甕(棺？)	×	江戸(17世紀後～18世紀)
SX	4150	円	×	○	×	×	室町(14世紀後)
SX	4152	円	×	○	×	×	江戸
SX	4153	長方形	○	○	×	×	江戸(19世紀)
SX	4154	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4155	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4156	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4157	長方形	×	○	×	×	室町(16世紀)
SX	4158	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4159	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4160	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4161	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4162	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4163	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4164	方形	×	○	×	×	室町(16世紀)
SX	4165	長方形	×	○	×	×	室町
SX	4167	円	○	×	×	×	室町(14世紀～15世紀)
SX	4169	楕円	○	×	×	×	室町(15世紀末～16世紀初)
SX	4171	円	×	○	×	×	室町(14世紀後～16世紀中)
SX	4186	長方形	×	○	×	×	室町

第15表　中・近世墓一覧表



第78図　中・近世墓変遷図（1：1,600）

の時期差が大きく、14世紀後半から16世紀の広い範囲とせざるを得ず、今回の検討から除外した。

これらの変遷を図示したのが第78図である。墓の形態は、土坑のみのもの、集石のみのもの、土坑と集石を伴うものの3形態である。土坑のみのものはⅠ～Ⅲ期までの室町時代のもので、Ⅳ期以降の江戸時代のものは土坑に集石を伴っている。土坑を伴わない集石のみのものはⅡ期とⅢ期に限定される。Ⅲ期は、北群と南群に別れ、土坑のみの北群が不正確ではあるものの時期的にやや先行する可能性がある。このことから墓の形態は、土坑のみ→集石のみ→土坑＋集石へと変化するものと考えられる。このことは、詳細な時期決定が困難なために今回の検討から除外した中・近世墓を含めても、大まかな傾向としてとらえることが可能である。

さて、墓を造る労力の最も簡易なものは、土坑を掘らず集石のみで造るものであろう。川に近い当地であれば、容易に石を集めることが可能である。この簡単な墓は、江戸時代にも若干存在するが、Ⅱ期とⅢ期の室町時代を中心に造られる。この時代の後半は戦国時代として有名である。当遺跡の場合、副葬遺物から考え、被葬者の階層は高いとはいえない。しかし、天目茶椀や火舎、犬形土製品の出土は、中世城館の調査を連想させるものである。これらの遺物は副葬されたものではく、被葬者には直結しないものの、武士団と無縁の人々ではないようである。下剋上という秩序の乱れが、造墓に微妙な影響を与えていたのではないだろうか。そして江戸時代にはいり、世の中が安定してくると、当遺跡の人々は、再び土坑を掘り、埋葬を行ったものと考えられる。

以上、埋納遺物が少ないなかでの不確実な時期決定から大胆な推測を試みた。これは当遺跡のみの結果であり、他の事例との比較検討は、今後の課題としたい。また、集石については、墓標としての機能にはあえて触れなかった。これは、木製の墓標であれば当遺跡では残存する可能性が極めて低く、土坑のみのものに墓標が伴うのかどうかが不明となる。したがて、集石について墓標の機能からの検討は避けたのである。しかし避けることが妥当でないことは明白であり、中・近世墓の課題は山積された状態である。

2．遺　物

(1) SD4150出土の土師器皿

自然流水路と考えられるSD4150から多量の土師器皿が出土した。そのほとんどが土師器の皿で、完形もしくは接合の結果完形近くまで復元できるものであった。したがって、単なる投棄とは考えられず、何らかの祭祀的背景があるものと推定される。

SD4150出土遺物のほとんどを占める土師器とロクロ土師器の皿に限り個体数の計測を試みた。計測は、口縁部片の残存率を合計する方法で行った。既述したように、土師器の大型のものは皿A～Cの3分類、小型のものは皿D・Eの2分類を行ったが、そのほとんどが皿AとEであること、小片においては識別が困難なことなどから大型のものと小型のもの2分類とした。

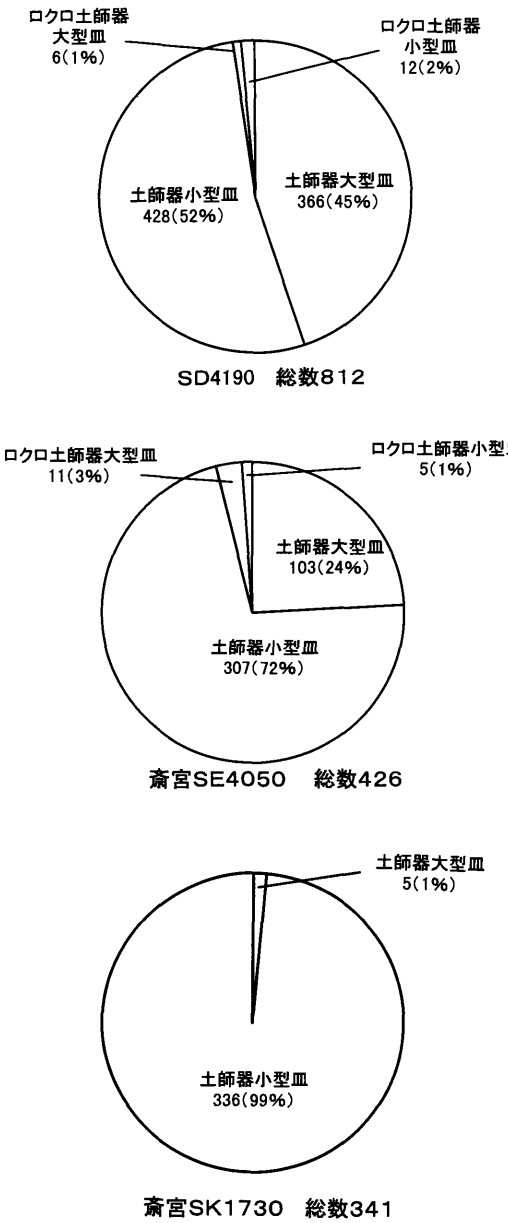
第79図は、その結果を表したものである。合計812個体の内ロクロ土師器は大小合わせても僅か18個体で3％にすぎない。土師器皿は、大小間に大きな個体数差は認められず、おおまかにいえば、大型のものと小型のものがほぼ同数であったと推定される。

平安時代には、このように土師器の皿を多量に投棄した遺構が県内でも多く検出されている。斎宮跡では、15,000固体以上の土師器皿が検出された[9]SK2650をはじめ、土坑内に多量の土師器皿を投棄する事例が多く報告されて、その多くで個体数の計測が行われている。ここでは、時期的に比較的ちかいSK1730とSE4050の計測結果から土師器とロクロ土師器の無高台皿に限りその比率を表した。

斎宮跡SK1730は、ほとんどが小型の土師器皿であり、ロクロ土師器は1個体も無かった。小型土師器皿の半数以上には油煙が付着しており、灯明皿として利用された後投棄されたもの[10]とされている。破損していない灯明皿の投棄であるため、何らかの祭祀のなかで灯明皿として使用されたものと推定できる。

それに対し、斎宮跡SE4050は井戸上層埋土という祭祀的な要因を想定でき難い状態で出土したものであり、日常の様相に近いものを表すと考えられる。ロクロ土師器の比率はSD4190とほぼ同じで、土師器皿は、大：小＝1：3の比率である[11]。

SD4190は、全体として大型皿の比率がやや異なるものの斎宮跡SE4050と似た状態にあるものと考えられ、これからは祭祀的な要因を導き出すことはできず、むしろ日常の使用様相を示すものと考



第79図　土師器皿・ロクロ土師器皿の数量

えざるを得ない。土師器皿には、油煙の付着するもの、2次焼成によるためか一部が赤変するものもみられるが、いずれも散見される程度である。しかし、完形品をむやみに投棄するとは考えられず、斎宮とは異なった祭祀の形態があるのかもしれない。ここでは、大型皿の比率が高いことにを指摘するに止め、類例の増加を待つことにしたい。

最後に、ロクロ土師器であるが、この時期には普遍的に出土する遺物である。しかし、その個体数は土師器皿と比べ、その約2～3％と非常に少ないものであったことが浮かび上がってくる。また、なかには、山茶椀と形態的に酷似するものがあり、特に小型皿で著しい。今後、山茶椀との関係に注意していく必要があるものと考えられる。

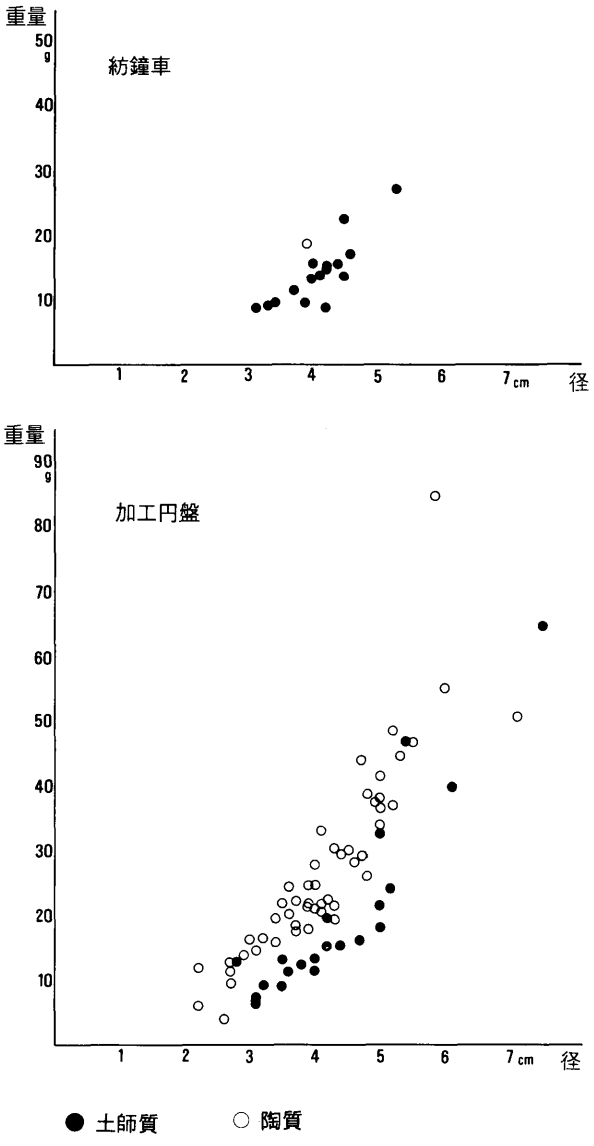
(2) 紡錘車と加工円盤

県内において、加工円盤に最初に着目したのは山崎恒哉氏である。氏は、加工部位により「加工高台」と「加工円盤」に大きく分類し、合計15遺跡38点を集成[12]している。しかし、遺跡別にみれば、多く出土した遺跡でも10点以下という状況であった。これ以降、加工円盤の報告例は徐々に増加したが、平成8年度に安濃津遺跡群から推定500固体以上が出土したことは、突出した事例である。ここから出土した遺物については、報告書[13]において分類検討が加えられている。朱中・鴻ノ木遺跡では紡錘車を含め192点が出土し、安濃津遺跡群とともに県内の大量出土遺跡と位置づけることが可能である。ここでは、安濃津遺跡群との比較を行いながら両遺跡の共通点、相違点を明らかにし、この遺物の用途解明の一助としたい。

そのまえに、紡錘車についてふれておかなければならない。当遺跡では、加工円盤の中央部に穿孔を施した遺物が目立つ。合計31点あり、穿孔することを除けば、加工円盤と全く同じ手法で成形されている。本書では、これらを紡錘車として報告した。これは、形態から短絡的に導き出した結果であり、紡錘車とする根拠が極めて乏しいことは十分承知している。したがって、紡錘車と呼称するものの、加工円盤の一種として、ここで含めて検討することにした。

器種	素材	加工部位	数量		
			朱中遺跡	鴻ノ木遺跡	計
紡錘車	土師質	底	12	17	29
		高台付底	1	0	1
		胴	0	0	0
		不明	0	0	0
	陶質	底	0	0	0
		高台付底	0	0	0
		胴	0	1	1
		不明	0	0	0
加工円盤	土師質	底	40	19	59
		高台付底	0	0	0
		胴	5	2	7
		不明	12	1	13
	陶質	底	0	1	1
		高台付底	9	13	22
		胴	21	38	59
		不明	0	0	0
計			100	92	192

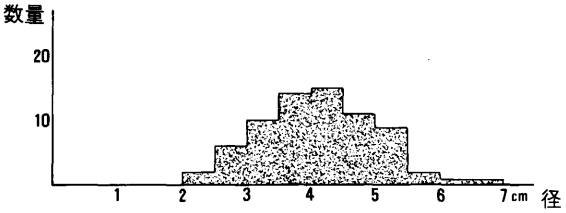
第16表　紡錘車・加工円盤数量対照表



第80図　紡錘車・加工円盤の重量と径の相関

朱中・鴻ノ木遺跡出土の紡錘車・加工円盤は、第16表に示した。素材は、中世土師器椀、鍋、ロクロ土師器椀、中世陶器甕、山茶椀、天目茶椀、近世陶磁器等がある。土師質のものは、紡錘車、加工円盤共に土師器の椀底部を利用し、陶質のものは陶器甕の胴部を利用しているものがほとんどである。ロクロ土師器と山茶椀を利用したものは各1点のみであった。

第80図は、鴻ノ木遺跡出土のものについて直径と重量の相関を示したものである。加工円盤については、4cm20g、5cm37g付近に多少の集中がみられなくもないが、全体としては右肩上がりに直線的に分布し、特に特徴を見出すことはできない。それに対し紡錘車では、直径3～4.5cm、重量10～15gに大半が集中している。直径と重量を重視して作成されていることは、紡錘車とする傍証となるであろう。このような紡錘車は県内に出土例のないもので、河北氏の集成[14]ではB種とされているが、堂ノ城遺跡[15]で瓦を転用したものが1例あるのみである。当遺跡では、ほとんどが土師器椀を利用している。陶器甕の胴部を利用したものが1点あるが、穿孔は貫通しておらず、穿孔困難から放棄されたものであろうか。この例からも穿孔の容易な土師器を素材とすることは当然である。土師器を素材とするものでは、高台をもつものが1点あるほかは、すべて無高台の、たとえば(803)の様な椀の底部を利用している。既述したように、この土師器椀は、県内において出土例がほとんど無いものである。したがって、当遺跡のみがこの椀の底部を利用できたもので、言い換えれば、この椀の底部が最も紡錘車の素材として適していたものと考えることができる。したがって、多くが土師器椀底部径をそのまま利用している。そのなかで、(791・1060)は周囲を打ち欠き、前者は3.7cm、後者は3.3cmに加工し、直径に対する強い意識が覗われる。この様な紡錘車は安濃津遺跡群からは出土しておらず、大きな相違点となる。



第81図　陶質加工円盤の直径による分布

加工円盤の用途の一説に銭貨の模倣とする[16]ものがある。当遺跡出土の紡錘車とした中央を穿孔したものは、一見銭貨を忠実に模倣した結果とすることもできる。永楽通宝の径は2.5cm程度であり、やや差がある。また、安濃津遺跡群をはじめ、他遺跡からの出土例もないことから、現時点では積極的に肯定できない。

次に加工円盤であるが、土師器椀底部を加工したものが朱中遺跡をあわせ59点ある。この大部分は、紡錘車穿孔の有無を除けば、全く同じ様相を呈する。したがって、これらは紡錘車への加工途中のものである可能性も高い。そこで第81図では、土師質のものを除き、鴻ノ木遺跡と、朱中遺跡の計測値が公表されている陶質のもの71点について、0.5cm単位での直径と数量を表したものである。0.5cm単位としたのは、不整円の固体に対する測定値の誤差を考慮したものである。また、(1086)のように口縁部片をそのまま残し、およその円形で成形を完了しているものもあることから、微妙な直径の差は意味の無いものと考えたからである。

グラフは、直径4cmを頂点に正規分布を示している。(860)は、敲打した側縁部を研磨し、直径4cmに加工していることからも直径4cmが意識にある遺物といえるであろう。安濃津遺跡群では、直径により4区分が可能とされ、当遺跡とやや異なる様相である。特に、極端に出土数の多い2～2.4cm程度のものは、当遺跡では2点のみであり、両遺跡の大きな相違点である。ただ、4cm程度のものは安濃津遺跡群の4区分の一つに相当し、両遺跡共に共通点した遺物とすることができよう。

この様に、多量な加工円盤を出土した両遺跡であるが、その内容は異なる部分も多く、加工円盤の用途解明をさらに複雑なものとしている。このことは、伊藤氏が示唆するように、別用途に用いられるものが同様な形態として成立し得るうる結果を表すものであろう。当遺跡の土師質加工円盤が紡錘車の未製品であるとしたら、その一例となる。加工円盤がこの様な複雑な様相を示すなかで、直径4cm前後の一群が両遺跡に存在する。その素材は、硬質な焼成が

重視されたのか、その器厚のためかは不明であるが、圧倒的に陶器甕である。

最後に両遺跡の立地についてみることにする。櫛田川をさかのぼる船は当地まで航行可能であったらしく、当遺跡付近には射和津が成立した。「氏経卿引付」には15世紀後半に射和津料の収取権をめぐり神宮と北畠氏が対立した[17]ことがみられ、中世には、かなり繁栄していたようである。したがって、当遺跡と安濃津遺跡群は港という物流の拠点に立地するという大きな共通点がある。ただし、鴻ノ木遺跡調査区は墓域にあたり、安濃津は町屋の調査であることは、留意しておかなければならない。

以上、朱中・鴻ノ木遺跡出土の加工円盤を安濃津遺跡群のものと比較しながら検討を行ったが、明確な結論を導き出すことはできなかった。港という物流の拠点で加工円盤が多量に出土し、直径4㎝程度の陶質のものが共通すること。2㎝程度のものは安濃津の、紡錘車は射和津の特有のものと考えられることをまとめとしておきたい。

（森川常厚）

［註］

① 小濵学『朱中遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター 1996.3
② 下村登良男・奥義次『鐘突遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981.
下村登良男・奥義次『上寺遺跡発掘調査報告書』松阪市教育委員会 1981.3
③ 新田洋「中・南勢における中世土師器―特に「在地系」皿―の変遷と地域色解明への一視点」『マージナル No.9』愛知考古学談話会 1988.10
④ 伊藤裕偉「中世南伊勢系土師器に関する一試論」『Miehistory vol.1』三重歴史文化研究会 1990.5
⑤ 藤澤良祐『瀬戸市史 陶磁史篇 四』愛知県瀬戸市 平成五年九月
⑥ 中野晴久「赤羽・中野「生産地における編年について」『全国シンポジウム「中世常滑焼きをおって」資料集』日本福祉大学知多半島総合研究所
⑦ 小林謙一・佐川正敏「平安～近世の軒丸瓦」『伊珂留我 法隆寺昭和資材帳調査概報⑩』小学館 1989.5
⑧ 扇浦正義「常滑大甕の編年的考察」『自證院遺跡』東京都新宿区教育委員会 1987
⑨ 三重県教育委員会・斎宮跡調査事務所『史跡 斎宮跡』昭和58年3月
⑩ 三重県教育委員会・斎宮跡調査事務所『史跡 斎宮跡』昭和56年3月
⑪ 三重県教育委員会・斎宮跡調査事務所『史跡 斎宮跡』昭和61年3月
⑫ 山崎恒哉「円形加工陶磁製品について」『近畿自動車道（勢和～伊勢）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅵ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター 1990.3
⑬ 伊藤裕偉「加工円盤に関する基礎作業」『安濃津』三重県埋蔵文化財センター 1997.3
⑭ 河北秀実「三重県出土のいわゆる紡錘車の形態とその時期」『Mie history vol. 3』三重歴史文化研究会 1991.9
⑮ 増田安夫「堂ノ城遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会 1989.3
⑯ 辻村泰圓・水野正好「南都元興寺極楽坊中世信仰資料包蔵坑発掘調査概要」『大和文化研究7-1』1962
⑰ 平松令三監修『日本歴史地名体系第二十四巻 三重の地名』平凡社 1983年5月20日

遺構	番号	概報時	調査時	備考
SD	1	北旧流水路	J～M37 旧流水路	第1次調査
SD	2	溝11	J～L37, L·M38 SD1	第1次調査
SD	3	—	L38 SD1 J·K37·38, L37 SD2	第1次調査
SD	4	—	J～M40 SD1	第1次調査
SD	5	溝12	J37·38·40·41·44·45 J39 SD2, K40～45SD1	第1次調査
SD	6	—	J39·40 SD1	第1次調査
SD	7	—	J·K41～43 SD1	第1次調査
SD	8	—	H·I38, I·J39 SD1	第1次調査
SD	9	—	H·I38·39 SD2	第1次調査
SD	10	—	J42～44 SD1	第1次調査
SD	11	方形周溝遺構	H42, I41 SD1 H41, I42～43 SD2	第1次調査
SD	12	溝13	G·H39, H40·41·45 I41～45 SD1	第1次調査
SD	13	—	G·H39·40 SD1	第1次調査
SD	14	—	G40～42 SD1	第1次調査
SD	15	—	D·E39 SD1	第1次調査
SD	16	—	D40·41, E40 SD1	第1次調査
SD	17	溝14	D·E44·45 SD1	第1次調査
SD	18	南旧流水路	D～I45·46 旧流水路 SD15(第5次調査)	第1次調査
SK	19	—	L·M41 SK1	第1次調査
SK	20	—	K38 SK1	第1次調査
SK	21	—	J·K38 SK1	第1次調査
SK	22	—	J·K39 SK1	第1次調査
SK	23	—	K·L41 SK1	第1次調査
SK	24	土坑9	K12·13 SK1	第1次調査
SK	25	土坑10	I42, J42·43 SK1	第1次調査
SK	26	土坑10	J42 SK1内SK	第1次調査
SK	27	土坑8	H·I40 SK1	第1次調査
SK	28	—	G·H40 SK1	第1次調査
SK	29	—	D43·44, E44 SK1	第1次調査
SK	30	Pit22	H45 Pit1	第1次調査
SB	31	掘建柱建物1	I41 Pit1·Pit3, I43 Pit1 M42·43 Pit1	第1次調査
SB	32	掘建柱建物2	J44 Pit1·Pit2, J45 Pit1 K43 Pit1·Pit2·Pit3	第1次調査
SB	33	掘建柱建物3	H44 Pit1, I43·44 Pit1 J43 Pit3, I·J43 Pit4 I·J44 Pit4、I44·45 Pit2	第1次調査
SB	34	掘建柱建物4	D46 Pit1, E46·47 Pit1	第1次調査
SA	35	柱列15	—	第1次調査
SZ	200	—	SZ200	第5次調査下層
SK	201	—	SK201	第5次調査下層
SH	202	土坑2	SK202	第5次調査下層
SH	203	土坑3	SK203	第5次調査下層
SF	204	炉6	SK204	第5次調査下層
SH	205	土坑4	SK205	第5次調査下層
SK	206	土坑5	SK206	第5次調査下層
SK	207	土坑6	SK207	第5次調査下層
SH	208	土坑7	SK208	第5次調査下層
SH	209	土坑9	SK209	第5次調査下層
SH	210	土坑8	SK210	第5次調査下層
SH	211	土坑10	SK211	第5次調査下層
SH	212	土坑11	SK212	第5次調査下層
SK	213	焼土坑1	SK213	第5次調査下層
SH	214	土坑17	SK214	第5次調査下層
SZ	215	—	SZ215	第5次調査下層
SF	216	炉7	SF216	第5次調査下層
SK	217	土坑10(1次) 焼土坑3(5次)	SK217	第1·5次調査 境界下層
SH	218	土坑14	SK218	第5次調査下層
SH	219	土坑16	SK219	第5次調査下層
SH	220	土坑15	SK220	第5次調査下層
SK	221	焼土坑2	SK221	第5次調査下層
SK	222	焼土坑4	SK222	第5次調査下層
SH	223	土坑12	SK223	第5次調査下層
SH	224	土坑13	SK224	第5次調査下層
SK	225	焼土坑5	SK225	第5次調査下層
SF	226	炉1	SK201内SF1	第5次調査下層
SF	227	炉2	SK201内SF2	第5次調査下層
SF	228	炉3	SK201内SF3	第5次調査下層
SF	229	炉4	SK201内SF4	第5次調査下層
SF	230	炉5	SK201内SF5	第5次調査下層
SF	231	炉8	SK221	第5次調査下層
SF	232	炉9	SK222	第5次調査下層
SF	233	炉10	G48 SK220	第5次調査下層
SH	234	竪穴住居1	K42 SB1	第1次調査下層
SH	235	竪穴住居2	M42 SB1	第1次調査下層
SK	236	土坑5	J43 SK1	第1次調査下層
SK	237	土坑6	H43 SK1	第1次調査下層
SK	238	土坑7	H45 SK1	第1次調査下層
SK	239	土坑8	E42·43 SK1	第1次調査下層
SK	240	土坑9	E45 SK1	第1次調査下層
SK	241	土坑3	L42 SK1	第1次調査下層
SK	242	土坑4	L43 SK1	第1次調査下層
SK	243	Pit16	H44 SK2	第1次調査下層
SF	244	—	F46 Pit埋土黒褐色	第1次調査下層
SF	245	屋外炉13	L42 SB1焼土	第1次調査下層
SF	246	炉14	K42 SB1焼土	第1次調査下層
SF	247	炉15	K43 SB1焼土	第1次調査下層
SF	248	屋外炉11	L39 SX1 焼土	第1次調査下層
SF	249	屋外炉12	M39 SK1	第1次調査下層
SF	250	—	J39 焼土	第1次調査下層
SH	251	1次面土坑6	I41 SK1	第1次調査下層
SF	252		I41 SK1焼土	第1次調査下層
SF	253		I41 SK1焼土	第1次調査下層
SK	254	1次面土坑5	F45 SK1	第1次調査下層
SK	255	1次面土坑7	H44 SK1	第1次調査下層
SK	256	1次面Pit20	I40 Pit1	第1次調査下層
SK	257	1次面Pit21	—	第1次調査下層
SK	258	1次面Pit18	H38 Pit1	第1次調査下層
SK	259	1次面Pit19	—	第1次調査下層
SZ	260	1次面集石炉16	L41 SK1	第1次調査下層
SZ	261	1次面集石炉17	G43 集石	第1次調査下層
SZ	262	1次面集石遺構1	SZ4	第5次調査下層
SZ	263	1次面集石遺構2	SZ18	第5次調査下層
SZ	264	1次面集石遺構3	SZ11	第5次調査下層
SZ	265	1次面集石遺構4	SZ13	第5次調査下層
SZ	266	1次面集石遺構5	SZ32	第5次調査下層
SF	267	—	J54 Pit2	第5次調査下層
SF	268	—	J54 Pit1	第5次調査下層
SF	269	—	—	第5次調査下層
SF	270	—	—	第5次調査下層
SK	271	—	I41 SK1焼土	第5次調査下層
Pit	272	—	E43 Pit1	第1次調査下層
Pit	273	—	D44 Pit1	第1次調査下層
Pit	274	—	J43 Pit1	第1次調査下層
SD	301	—	SD1	第3次調査
SD	302	—	SD2	第3次調査
SD	303	—	SD3	第3次調査
SK	304	—	SK4	第3次調査
SD	305	—	SD5	第3次調査
SD	306	—	SD6	第3次調査
SD	307	—	SD7	第3次調査
SD	308	—	SD8	第3次調査
SD	309	—	SD9	第3次調査
SK	310	—	SK10	第3次調査
SK	311	—	SK11	第3次調査
SD	312	—	SD12	第3次調査
SD	313	—	SD13	第3次調査
SD	314	—	SD14	第3次調査
SD	315	—	SD15	第3次調査
SD	316	—	SD16	第3次調査
SD	317	—	SD17	第3次調査
SD	318	—	SD18	第3次調査
SD	319	—	SD19	第3次調査
SD	320	—	SD20	第3次調査
SK	321	—	SK21	第3次調査
SD	322	—	SD22	第3次調査
SD	323	溝1	SD23	第3次調査
SD	324	—	SD24	第3次調査
SK	325	—	SK25	第3次調査

第17－1表　遺構番号対照表

遺構番号	概報時	調査時	備考
SK 326	—	SK26	第3次調査
SK 327	—	SK27	第3次調査
SK 328	—	SK28	第3次調査
SK 329	—	SK29	第3次調査
SK 330	—	SK30	第3次調査
SD 331	—	SD31	第3次調査
SK 332	—	SK32	第3次調査
SD 333	—	SD33	第3次調査
SD 334	—	SD34	第3次調査
SD 335	—	SD35	第3次調査
SD 336	—	SD36	第3次調査
SD 337	—	SD37	第3次調査
SD 338	—	—	第3次調査
SD 339	—	—	第3次調査
SD 340	溝3	SD40	第3次調査
SZ 341	—	—	第3次調査
SZ 342	落ち込み2	F92·93 落ち込み G90～92 落ち込み	第3次調査
SR 501	—	SD1	第5次調査
SH 502	竪穴住居1	SH2	第5次調査
SD 503	—	SD3	第5次調査
SX 505	土坑1	SK5	第5次調査
SD 506	—	SD6	第5次調査
SX 507	土坑3	SK7	第5次調査
SX 508	土坑4	SK8	第5次調査
SK 509	—	SK9	第5次調査
SK 510	—	SK10	第5次調査
SD 512	—	SD12	第5次調査
SH 514	—	SH14	第5次調査
SX 516	土坑5	SK16	第5次調査
SX 517	土坑7	SK17	第5次調査
SH 519	竪穴住居3	SH19	第5次調査
SH 520	竪穴住居4	SH20	第5次調査
SH 521	竪穴住居5	SH21	第5次調査
SD 522	—	SD22	第5次調査
SK 523	土坑2	SK23	第5次調査
SF 524	石囲炉	SF24	第5次調査
SE 525	井戸2	SE25	第5次調査
SX 526	土坑6	SK26	第5次調査
SK 528	—	SK28	第5次調査
SZ 533	配石遺構	SZ33	第5次調査
SH 534	—	SH34	第5次調査
SD 535	—	SD35	第5次調査
SB 536	掘建柱建物1	I54 Pit1·6·9	第5次調査
SB 537	掘建柱建物2	L52Pit3, L53 Pit6 M53 Pit2	第5次調査
SB 538	掘建柱建物4	K47 Pit2, L47 Pit3 L48 Pit8, M48 Pit2·13	第5次調査
SB 539	掘建柱建物5	M48 Pit1·3·6·8·13	第5次調査
SF 540	竪穴住居2	H57 焼土中	第5次調査
SE 541	井戸1	K58 土坑	第5次調査
SD 542	—	ミゾヤラレ1	第5次調査
SD 543	—	ミゾヤラレ2	第5次調査
SD 544	—	ミゾヤラレ3	第5次調査
SD 545	—	ミゾヤラレ4	第5次調査
SD 546	—	ミゾヤラレ5	第5次調査
SD 547	—	ミゾヤラレ6	第5次調査
SD 548	—	ミゾヤラレ7	第5次調査
SD 549	—	ミゾヤラレ8	第5次調査
SD 550	—	ミゾヤラレ9	第5次調査
SD 551	—	ミゾヤラレ10	第5次調査
SD 552	—	ミゾヤラレ11	第5次調査
SD 553	—	ミゾヤラレ12	第5次調査
SD 554	—	ミゾヤラレ13	第5次調査
SD 555	—	ミゾヤラレ14	第5次調査
SX 556	方形周溝墓1	SD27·31, SK29·30	第5次調査
SD 601	—	SD1	第6次調査
SK 602	—	SK2	第6次調査
SD 603	溝3	SD3	第6次調査
SK 604	—	SK4	第6次調査
SH 605	竪穴住居5	SH5	第6次調査
SH 606	竪穴住居6	SH6	第6次調査
SD 607	—	SD7	第6次調査

遺構番号	概報時	調査時	備考
SD 608	—	SD8	第6次調査
SD 609	—	SD9	第6次調査
SZ 610	—	—	第6次調査
SK 2071	土坑1	SK1	第2次調査
SK 2072	土坑2	SK2	第2次調査
SK 2073	—	SK3	第2次調査
SK 2074	—	SK4	第2次調査
SK 2075	—	SK5	第2次調査
SK 2076	—	SK6	第2次調査
SK 2077	—	SK7	第2次調査
SD 2081	—	SD1	第2次調査
SD 2082	—	SD2	第2次調査
SD 2083	—	SD3	第2次調査
SD 2084	—	SD4	第2次調査
SD 2085	溝4	SD5	第2次調査
SD 2086	溝3	SD6	第2次調査
SD 2087	—	SD7	第2次調査
SD 2088	溝1	SD8	第2次調査
SD 2089	—	SD9	第2次調査
SD 2090	溝2	SD10	第2次調査
SD 2091	—	SD11	第2次調査
SD 2092	—	SD12	第2次調査
SD 2093	旧河道	黒色土上層, 河道	第2次調査
SD 4021	—	SD21	第4次調査
SD 4022	—	SZ22	第4次調査
SD 4023	—	SD23	第4次調査
SD 4024	—	SD24	第4次調査
SZ 4025	—	—	第4次調査
SX 4026	—	G104 Pit7	第4次調査
SD 4027	—	SD27, K99SD72	第4次調査
SD 4028	—	SD28	第4次調査
SD 4029	—	SD29	第4次調査
SD 4030	—	SD30	第4次調査
SD 4031	—	SD31	第4次調査
SD 4032	—	SD32	第4次調査
SD 4033	—	SD33	第4次調査
SD 4034	—	SZ26, SD34	第4次調査
SK 4035	—	SK35	第4次調査
SD 4036	—	SD36	第4次調査
SD 4037	—	—	第4次調査
SD 4038	—	SD38	第4次調査
SD 4039	—	SD39	第4次調査
SD 4040	—	SD40	第4次調査
SD 4041	—	SD41	第4次調査
SD 4042	—	SD42	第4次調査
SD 4043	—	SD43	第4次調査
SD 4044	—	SD44	第4次調査
SD 4045	—	SD45	第4次調査
SD 4046	—	SD46, J106 SD K105 SZ37	第4次調査
SD 4047	—	SD47	第4次調査
SD 4048	—	SD48	第4次調査
SD 4049	—	SD49	第4次調査
SD 4050	—	SD50	第4次調査
SD 4051	—	SD51, J102 SD	第4次調査
SD 4052	—	SD52	第4次調査
SD 4053	—	SD53, J102 SD	第4次調査
SD 4054	—	SD54	第4次調査
SD 4055	—	SD55	第4次調査
SD 4056	—	SD56	第4次調査
SD 4057	—	SD57, L99 SD59	第4次調査
SD 4058	—	SD58	第4次調査
SD 4059	—	SD59	第4次調査
SX 4060	SK60	SK60	第4次調査
SK 4061	—	SZ61, SD61	第4次調査
SD 4062	—	SD62	第4次調査
SX 4063	SK63	SK63	第4次調査
SD 4064	—	SD64	第4次調査
SD 4065	—	SD65	第4次調査
SD 4066	—	SD66	第4次調査
SD 4067	—	SD67	第4次調査
SD 4068	—	SD68	第4次調査
SD 4069	—	SD69	第4次調査

第17－2表　遺構番号対照表

遺構番号	概報時	調査時	備考
SD 4070	—	SD70	第4次調査
SD 4071	—	SD71	第4次調査
SB 4072	—	F104 Pit1・12・20 F105 Pit3・27 G105 Pit1・3 H104 Pit18・25 H105 Pit12	第4次調査
SD 4073	—	SD73	第4次調査
SD 4074	—	SD74	第4次調査
SD 4075	—	SD75	第4次調査
SK 4076	—	SK76, G・H101 SK	第4次調査
SD 4077	—	SD77	第4次調査
SD 4078	—	SD78	第4次調査
SD 4079	—	SD79	第4次調査
SD 4080	—	SD80	第4次調査
SD 4081	—	SD81	第4次調査
SD 4082	—	SD82	第4次調査
SD 4083	—	SD83	第4次調査
SK 4084	—	SK84, SZ104	第4次調査
SD 4085	—	SD85	第4次調査
SX 4086	SK86	SK86	第4次調査
SX 4087	SK87	SK87	第4次調査
SX 4088	SK88	SK88	第4次調査
SK 4089	—	SK89	第4次調査
SK 4090	—	SK90	第4次調査
SD 4091	—	SD91	第4次調査
SK 4092	—	SK92	第4次調査
SK 4093	—	SK93	第4次調査
SK 4094	—	SK94	第4次調査
SD 4095	—	SD95	第4次調査
SK 4096	—	SK96	第4次調査
SD 4097	—	SD97	第4次調査
SD 4098	—	SD98	第4次調査
SK 4099	—	SK99	第4次調査
SD 4100	—	SD100, F105 SD	第4次調査
SD 4101	—	E108・109ミゾ F99～103 SD101	第4次調査
SD 4102	—	SD102	第4次調査
SX 4103	SK103	SK103	第4次調査
SD 4104	—	SD104, SD128	第4次調査
SD 4105	—	SD105	第4次調査
SD 4106	—	SD106	第4次調査
SD 4107	—	SD107	第4次調査
SZ 4108	—	SZ108, F103石溜・集石	第4次調査
SZ 4109	—	SZ106・109 G102・103 SD F104石垣・集石	第4次調査
SD 4110	—	SD110	第4次調査
SD 4111	—	SD111	第4次調査
SD 4112	—	SD112	第4次調査
SD 4113	—	SD113	第4次調査
SD 4114	—	SD114	第4次調査
SD 4115	—	SD115	第4次調査
SD 4116	—	SD116	第4次調査
SD 4117	—		第4次調査
SD 4118	—	SD118	第4次調査
SD 4119	—	SD119	第4次調査
SD 4120	—	SD120	第4次調査
SD 4121	—	SD121	第4次調査
SD 4122	—	SD122	第4次調査
SD 4123	—	SD123	第4次調査
SD 4124	—	SD124	第4次調査
SD 4125	—	SD125	第4次調査
SD 4125	—	SD126	第4次調査
SK 4127	—	SK127	第4次調査
SK 4128	—	SK128	第4次調査
SD 4129	—	SD129	第4次調査
SD 4130	—	D101, E99～101 SD130 E99石列の横	第4次調査
SD 4131	—	SD131	第4次調査
SX 4132	SZ132	SZ132, J97 SX※ J98 SX大甕	第4次調査

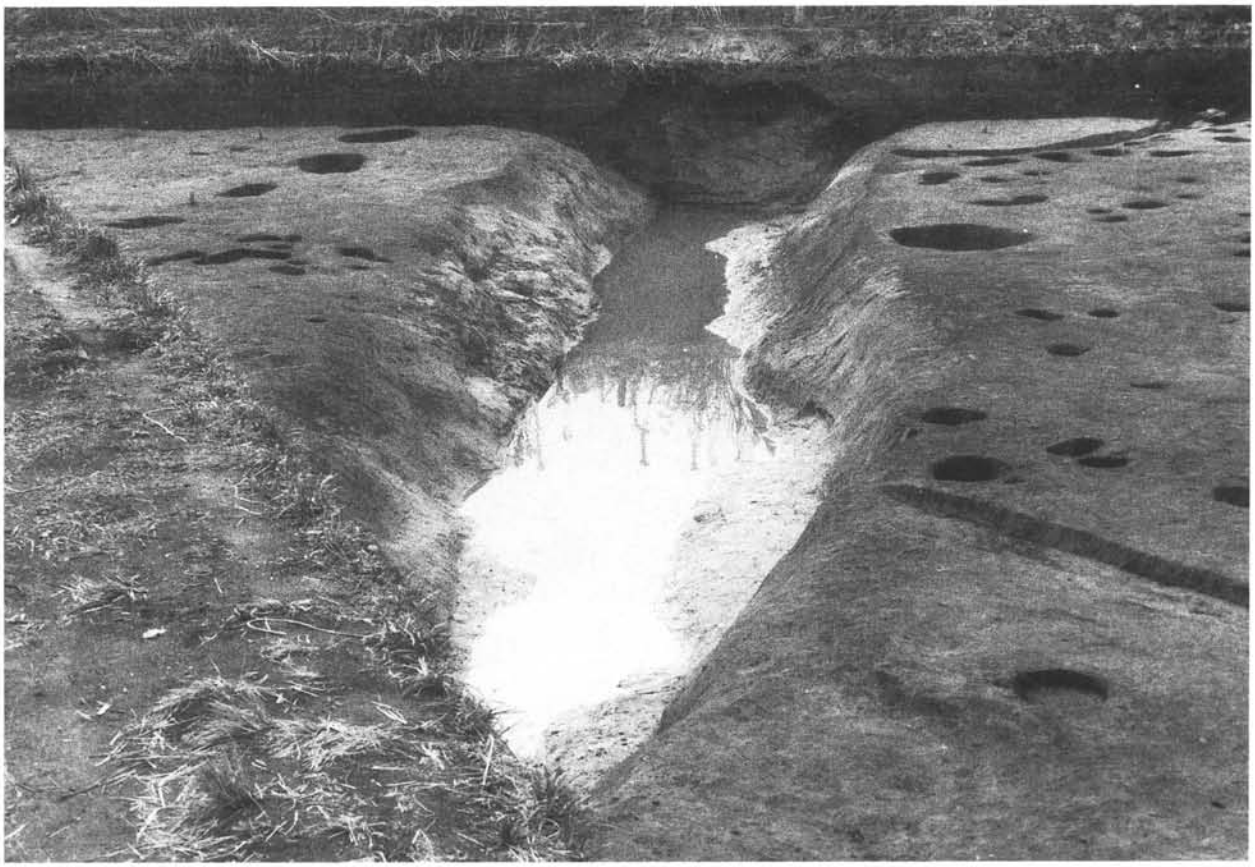
遺構番号	概報時	調査時	備考
SX 4133	SZ133	SX133 K98 SX9周囲の石組	第4次調査
SX 4134	SZ134	SX134	第4次調査
SX 4135	SZ135	SX135	第4次調査
SX 4136	SZ136	SX136	第4次調査
SX 4137	SK137	SK137	第4次調査
SX 4138	SZ138	SX138	第4次調査
SX 4139	SZ139	SX139	第4次調査
SX 4140	SZ140	SX140	第4次調査
SX 4141	SZ141	SX141	第4次調査
SX 4142	SK142	SK・SX142, I114SKイ I114 SX土壙墓	第4次調査
SK 4143	—	SK143, I113SKウ	第4次調査
SX 4144	SK144	SK144, H113 SK7	第4次調査
SX 4145	SZ145	SX145, I113・114配石 I113石溜	第4次調査
SX 4146	SZ146	SK146 J113 SX集石墓・石溜	第4次調査
SX 4147	SZ147	SZ147	第4次調査
SX 4148	SZ148	SZ148	第4次調査
SE 4149		SE149 H111井戸上・石列	第4次調査
SX 4150	SZ150	SX150	第4次調査
SZ 4151	整地面Ⅰ	—	第4次調査
SX 4152	SZ152	SX152	第4次調査
SX 4153	SZ153	SX153	第4次調査
SX 4154	SZ154	SX154, D114配石	第4次調査
SX 4155	SZ155	SX155	第4次調査
SX 4156	SZ156	SX156	第4次調査
SX 4157	SZ157	SX157	第4次調査
SX 4158	SZ158	SX158, D114配石	第4次調査
SX 4159	SZ159	SX159, D114配石	第4次調査
SX 4160	SZ160	SX160, D114配石	第4次調査
SX 4161	SZ161	SX161, D114配石	第4次調査
SX 4162	SZ162	SX162, D114配石	第4次調査
SX 4163	SZ163	SX163, D114配石	第4次調査
SX 4164	SZ164	SX164	第4次調査
SX 4165	SZ165	SX165	第4次調査
SZ 4166	—	—	第4次調査
SX 4167	—		第4次調査
SZ 4168	—	H100 SD・SD上面	第4次調査
SX 4169	SK169	SX169	第4次調査
SZ 4170		SX168, SX170 J109石溜	第4次調査
SX 4171	SZ167	SX171, K107石垣 K108・109石溜 K109石組・石の上	第4次調査
SZ 4172	—	L106 Pit4	第4次調査
SD 4182	—	SD17	第4次調査
SD 4183	—	SD18	第4次調査
SD 4184	—	SD19	第4次調査
SD 4185	—	SD61	第4次調査
SD 4186	—	—	第4次調査
SD 4187	—	E104～107 SD101 F108～110 SD101	第4次調査
SZ 4188	整地面Ⅱ	—	第4次調査
SD 4189	—	C・D104 SD130	第4次調査
SD 4190	SD173	落ち込み, E99 SD	第4次調査
SZ 4191	—	L110石垣上, N109石溜	第4次調査
SZ 4192	—	I109石列 J108・109石列	第4次調査 第4次調査
SK 4193	—	H107 SK	第4次調査
SZ 4194	—	H109・110 石列	第4次調査
SZ 4195	—	G・H110石溜, H110配石	第4次調査
SZ 4196	—	F・G111石溜	第4次調査
SZ 4197	—	F101・H～M100石垣 H・I100集石	第4次調査
SZ 4198	—	F列・F113石垣 F112～114石列	第4次調査
SZ 4199	—	C～F111石溜 C～F111・F110石垣	第4次調査

第17－3表　遺構番号対照表

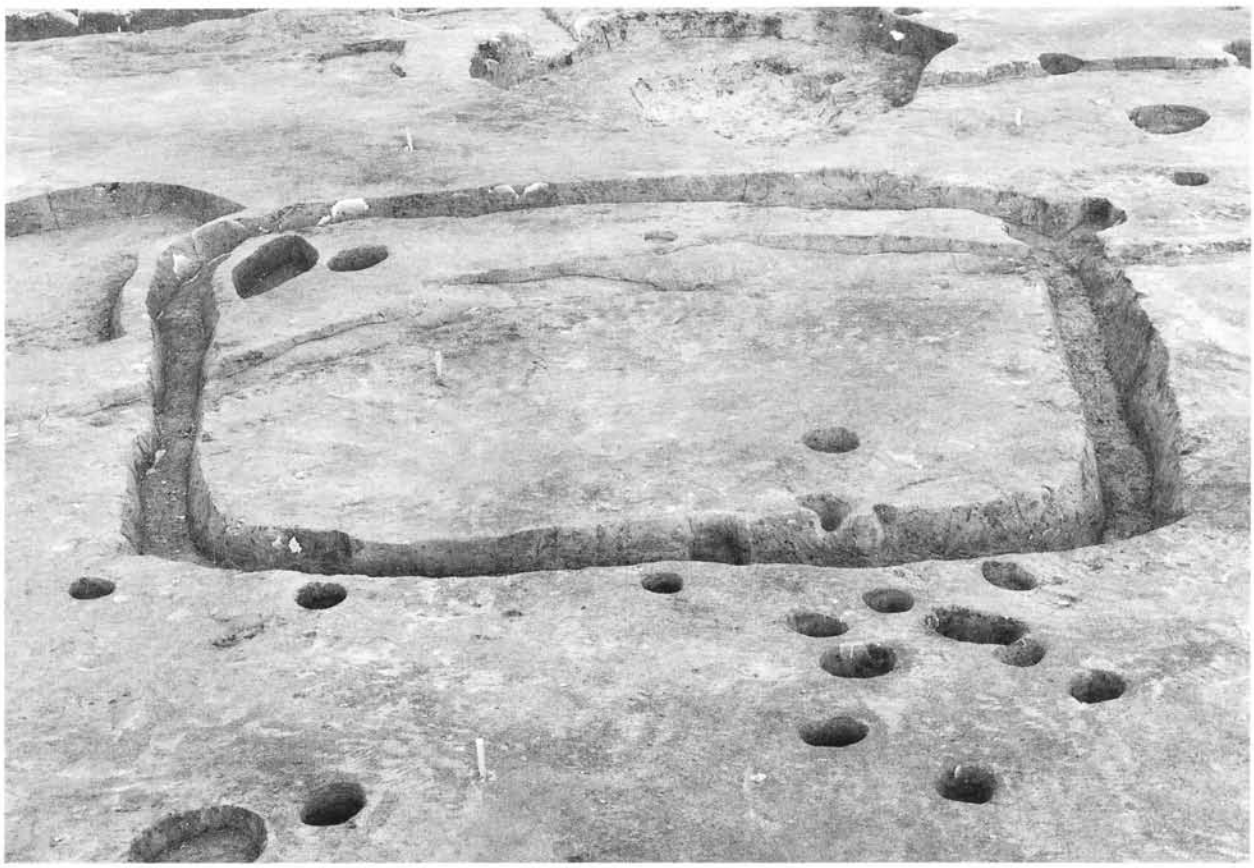
調査前風景（南から）

第１次調査区全景（東から）

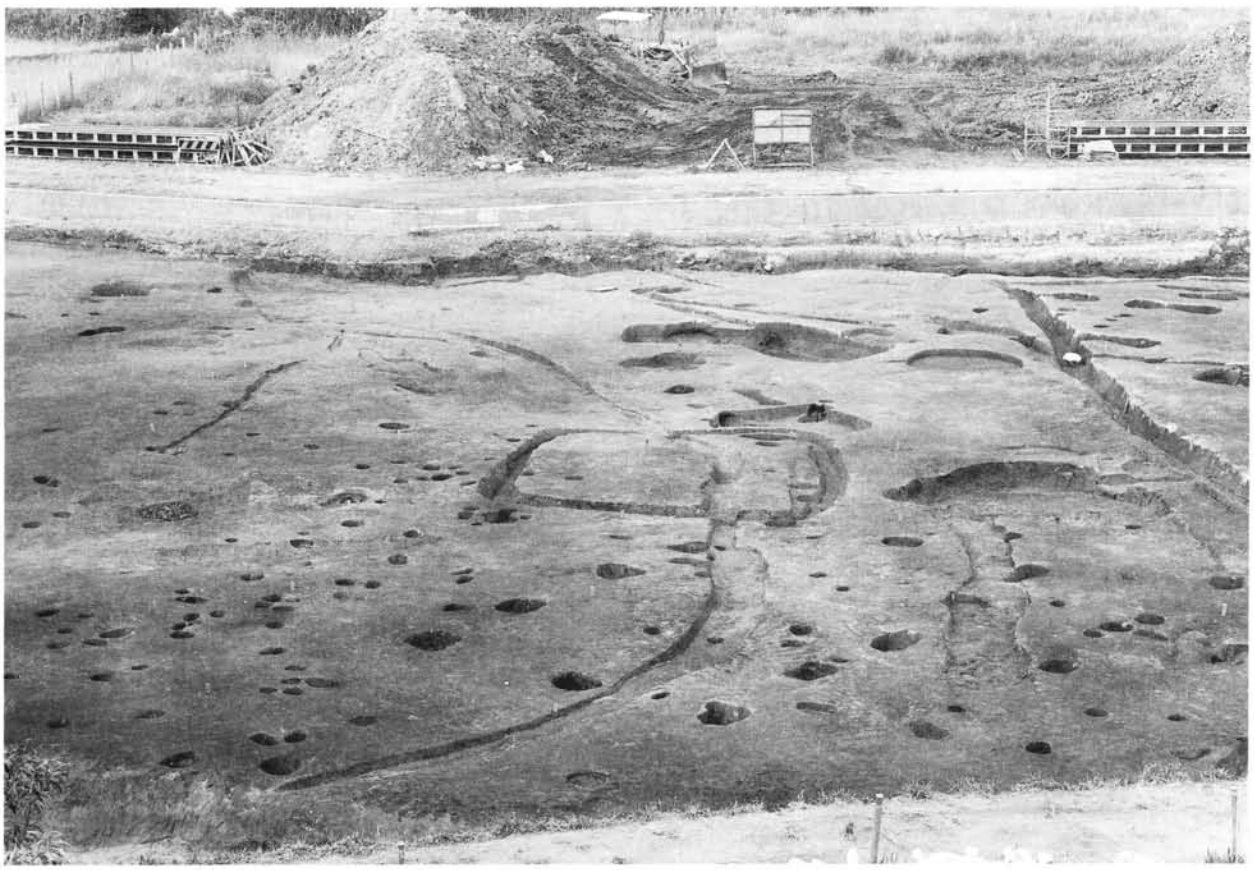
ＳＤ１（南西から）



ＳＤ18（東から）



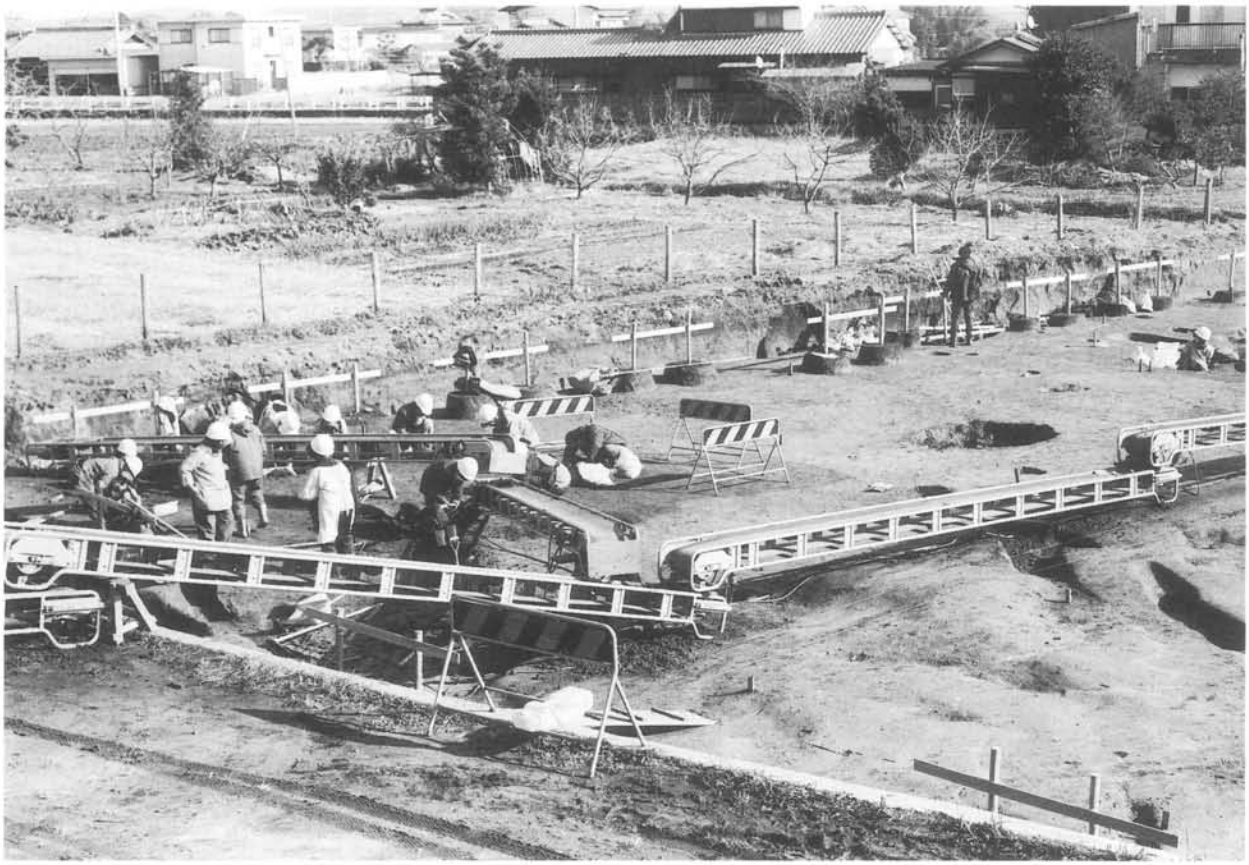
ＳＤ１１（西から）



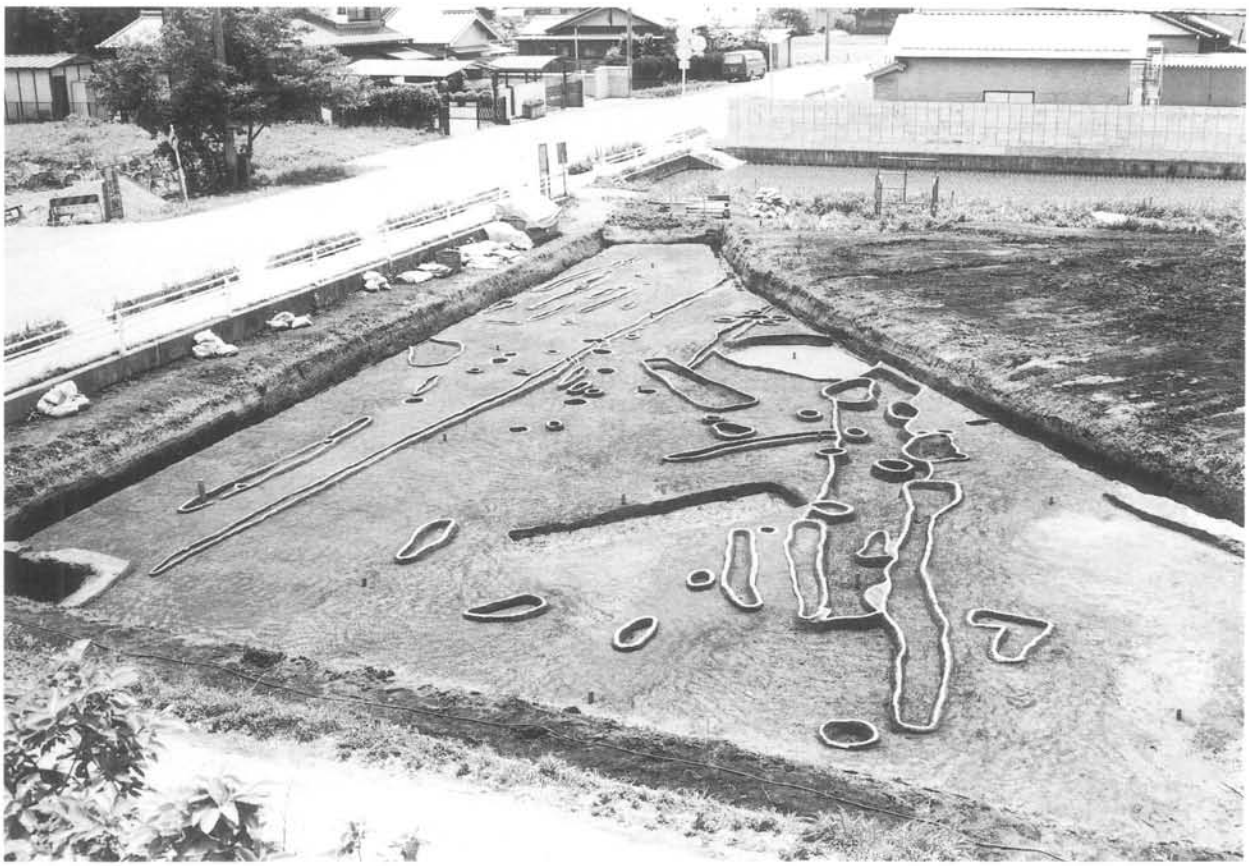
SD11、SD12、SK25・26、SB33（南から）

ＳＢ 33（南から）

ＳＢ 34（北から）



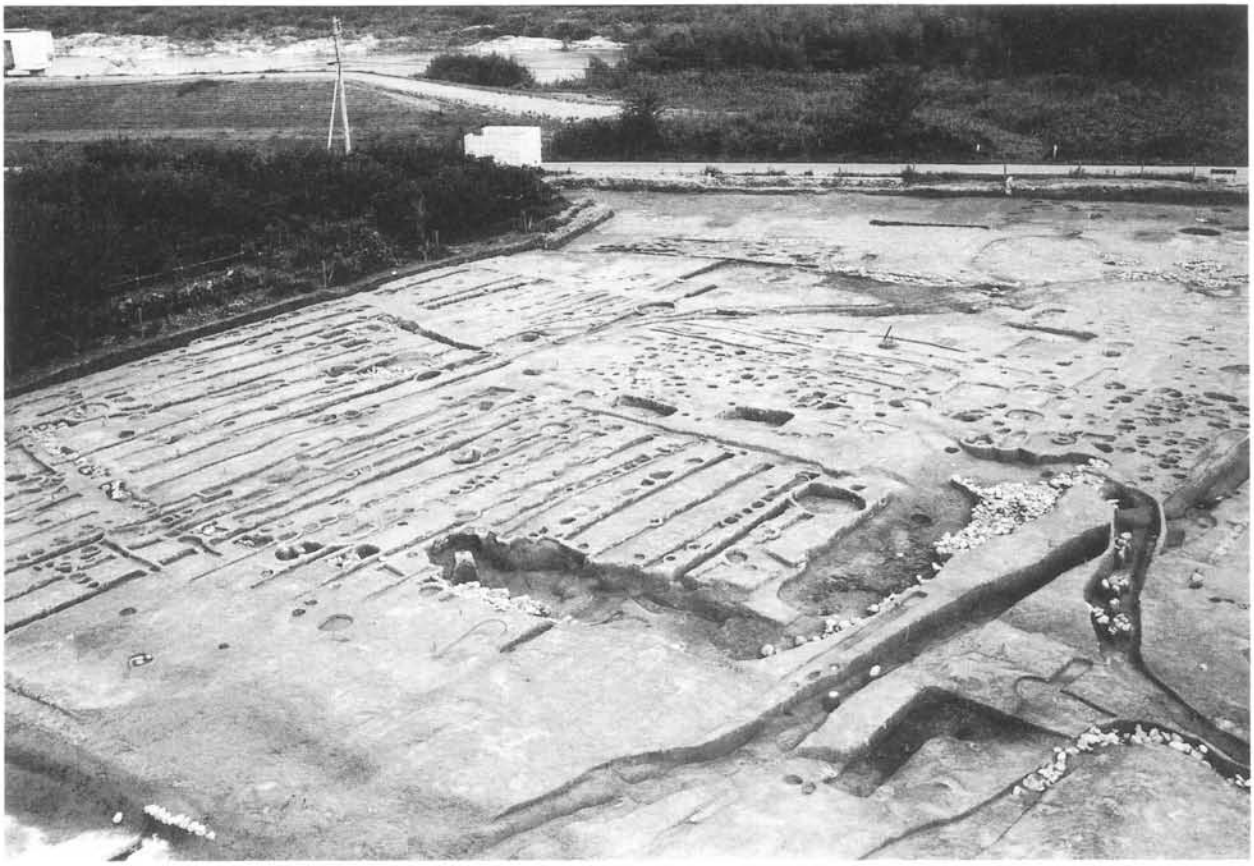
第２次調査作業風景（北から）



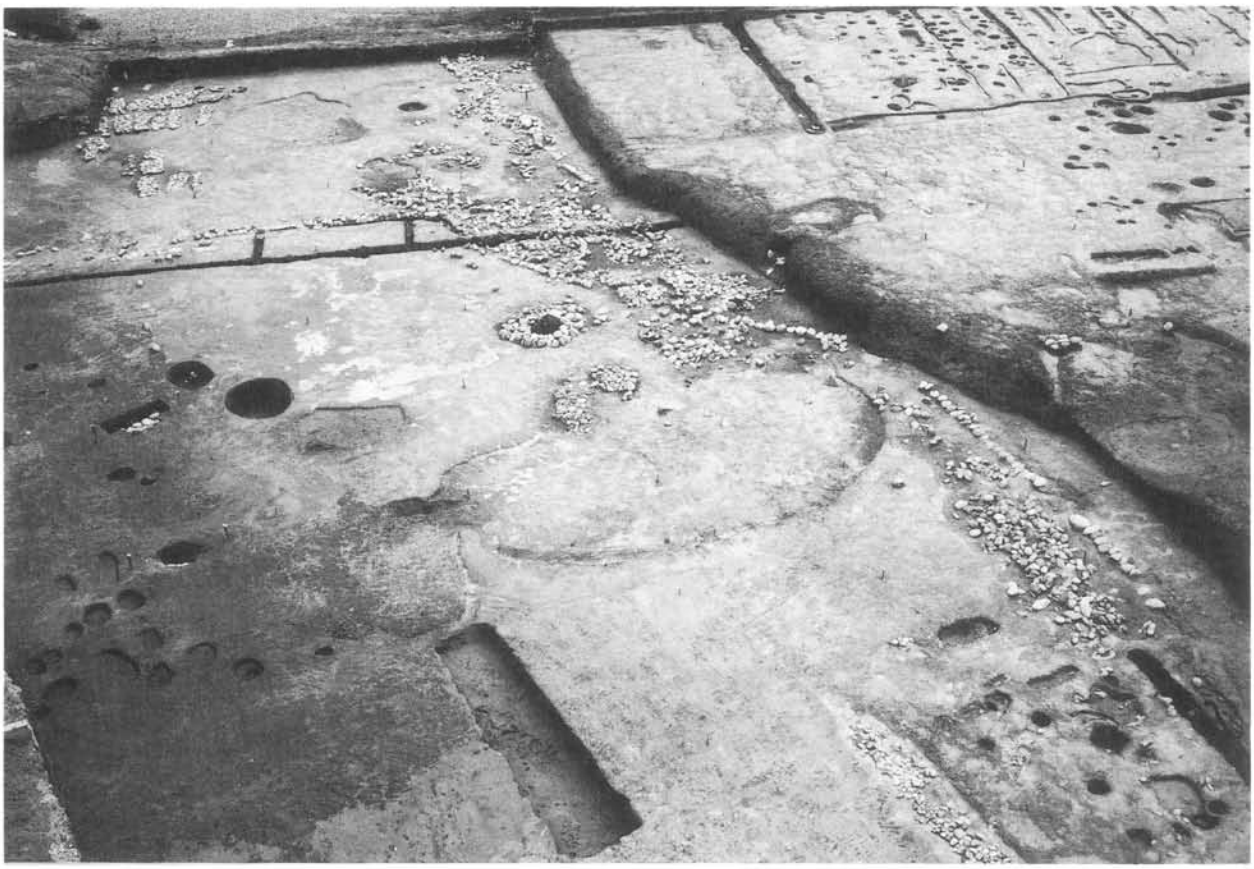
第２次調査区全景（北から）

第３次調査一次検出面全景（南から）

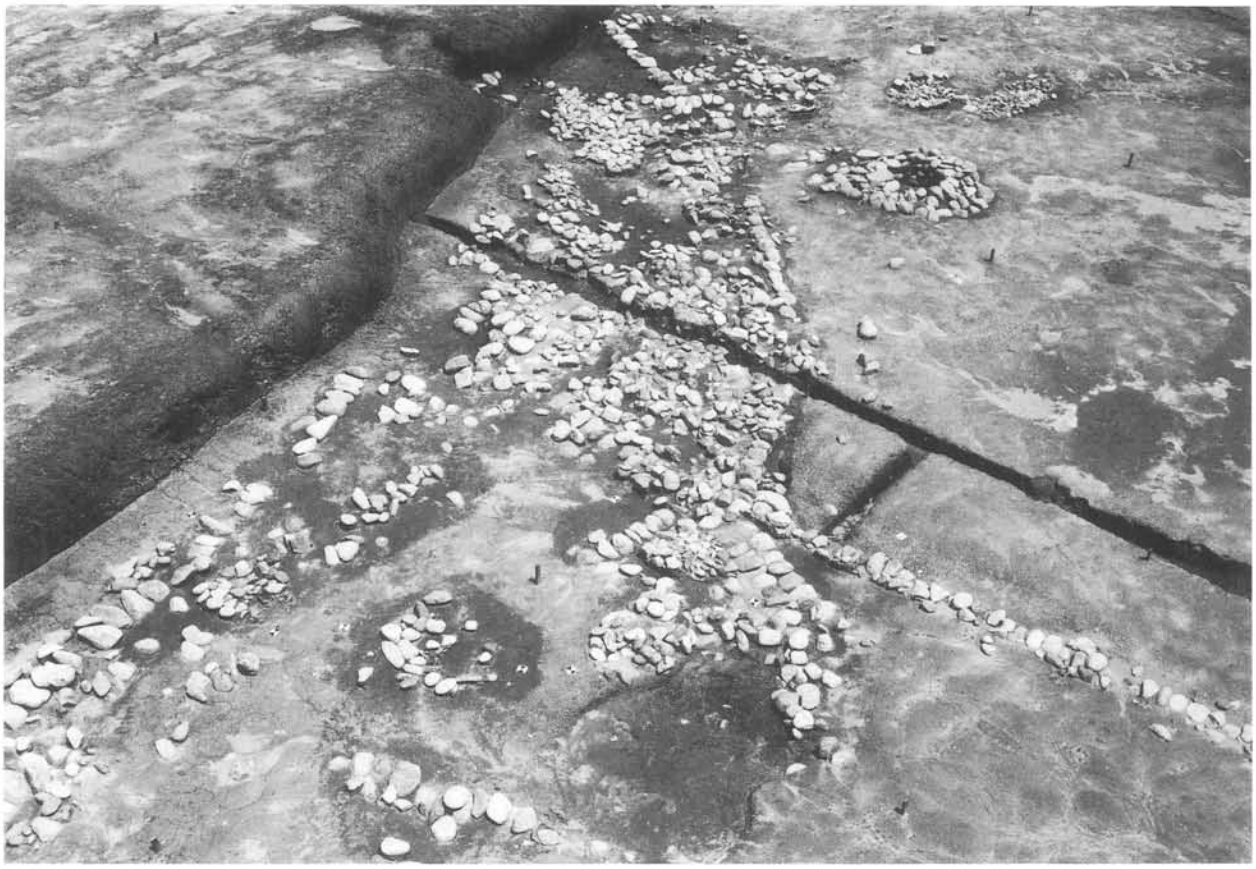
第３次調査二次検出面　SD340（南から）



第４次調査区全景（西から）



第４次調査中・近世墓群（東から）



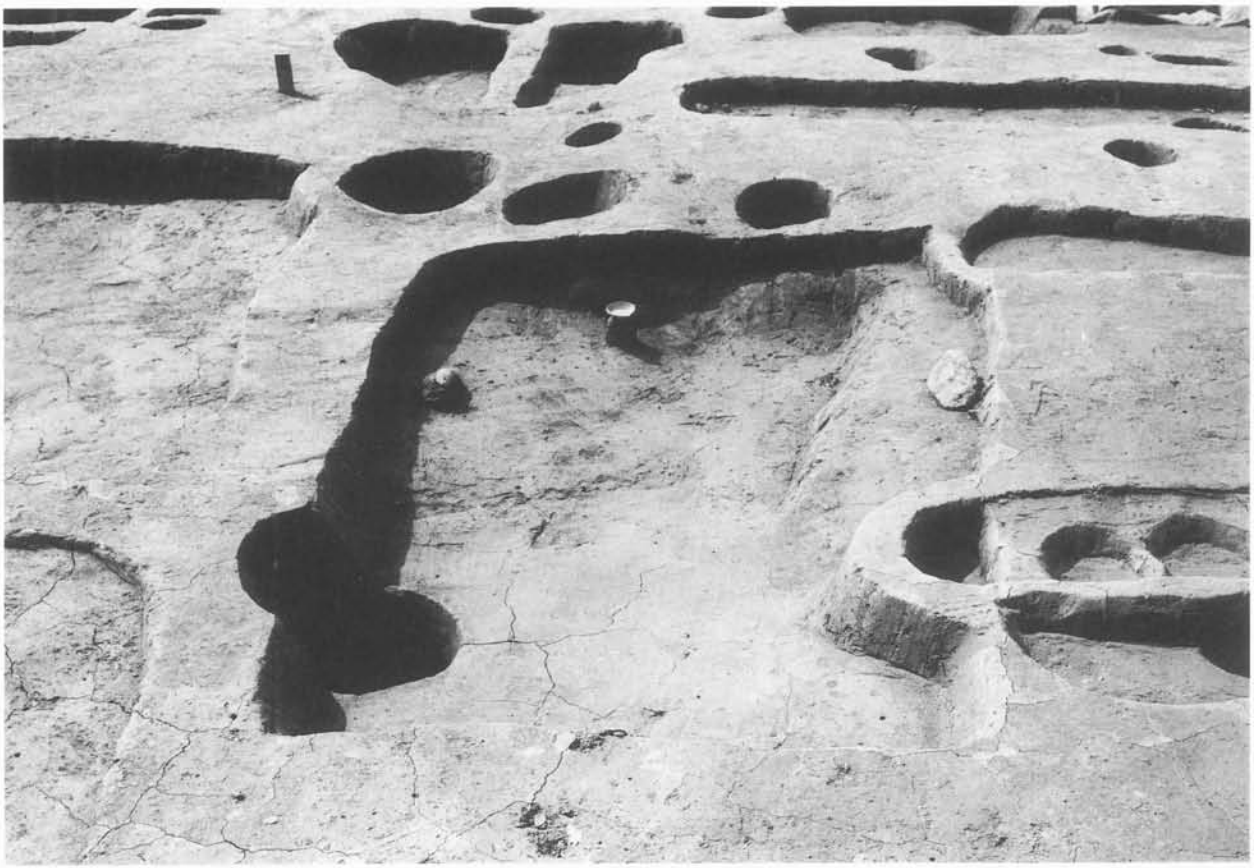
第４次調査中・近世墓群（南から）

ＳＸ 4154～4165・4186（西から）

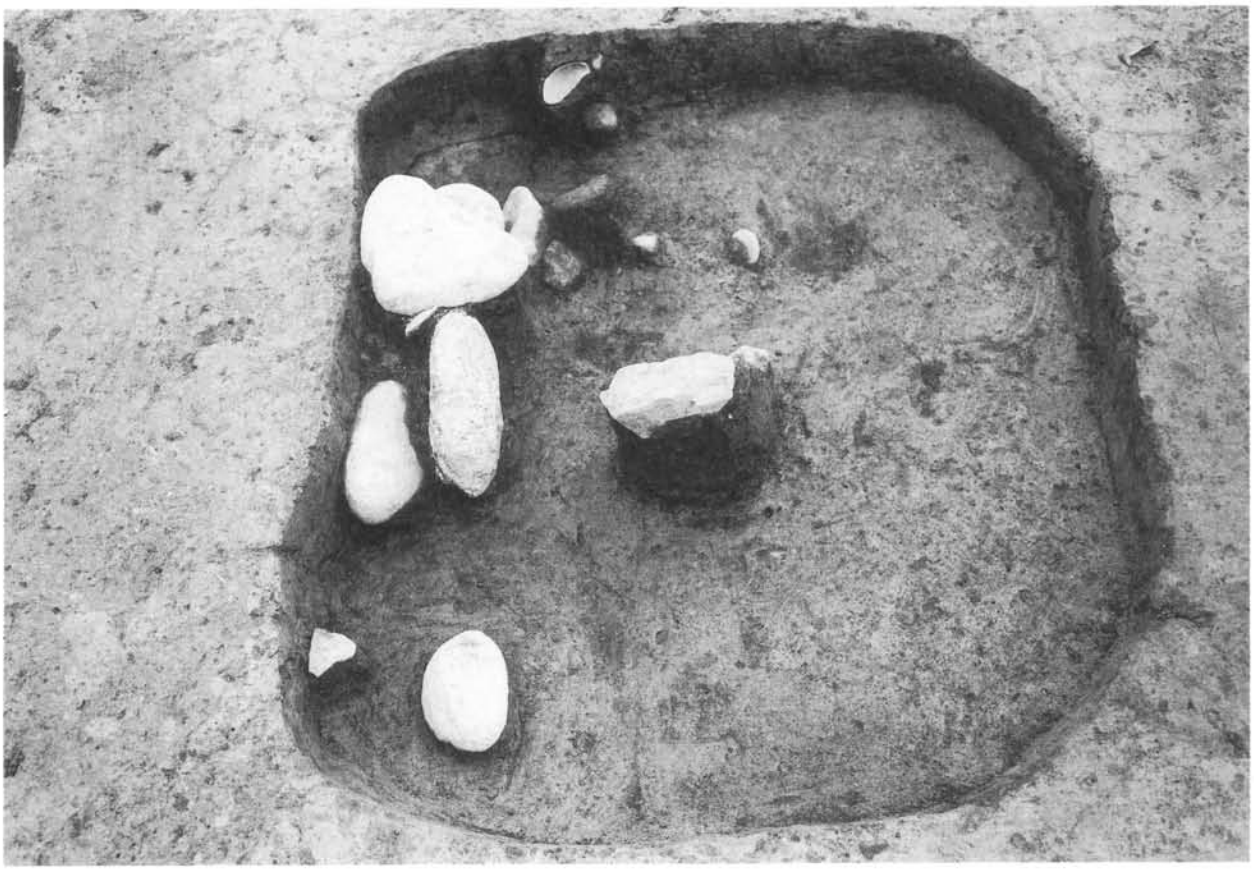
ＳＸ 4026（東から）

ＳＸ 4168 遺物出土状況（西から）

ＳＸ 4063 ・ 4060 （南西から）

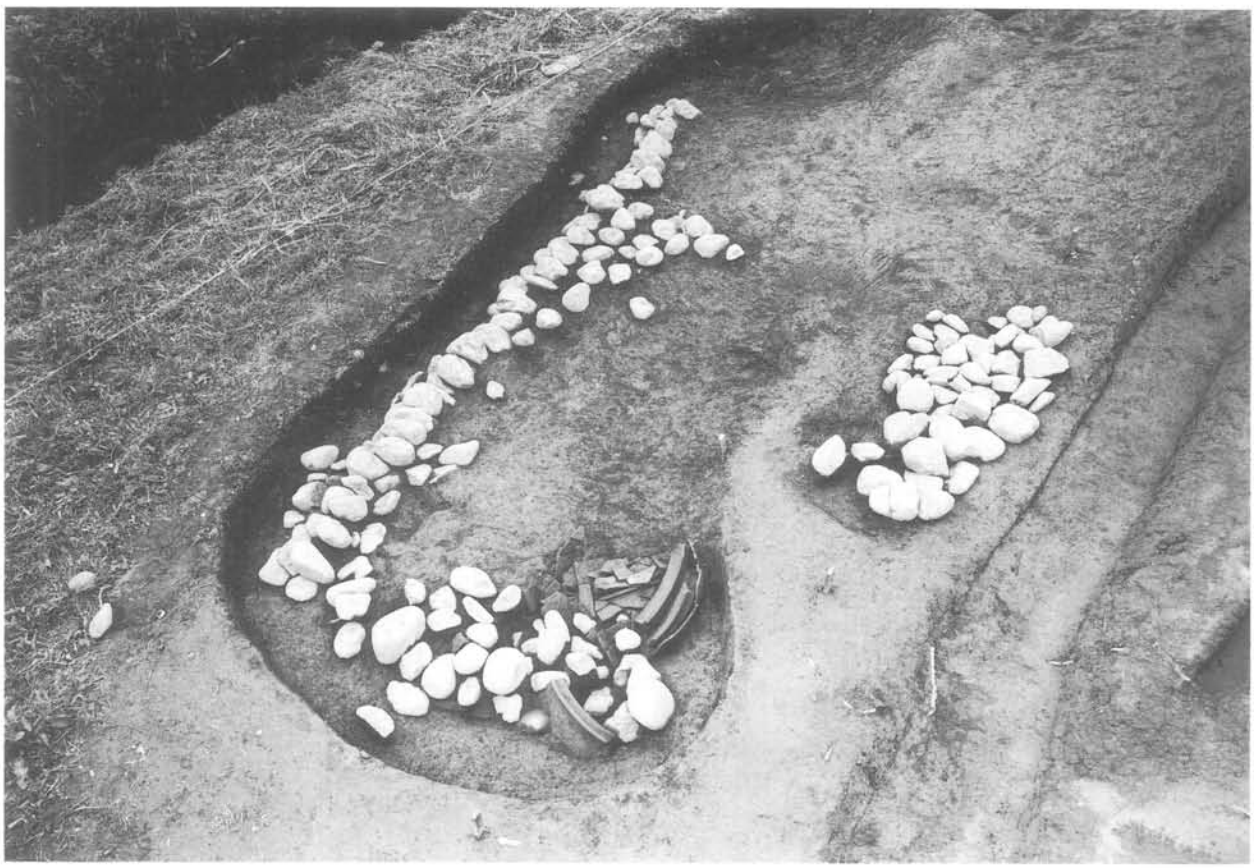


ＳＸ 4086 （南から）



S X 4103（南西から）

S X 4142（北西から）



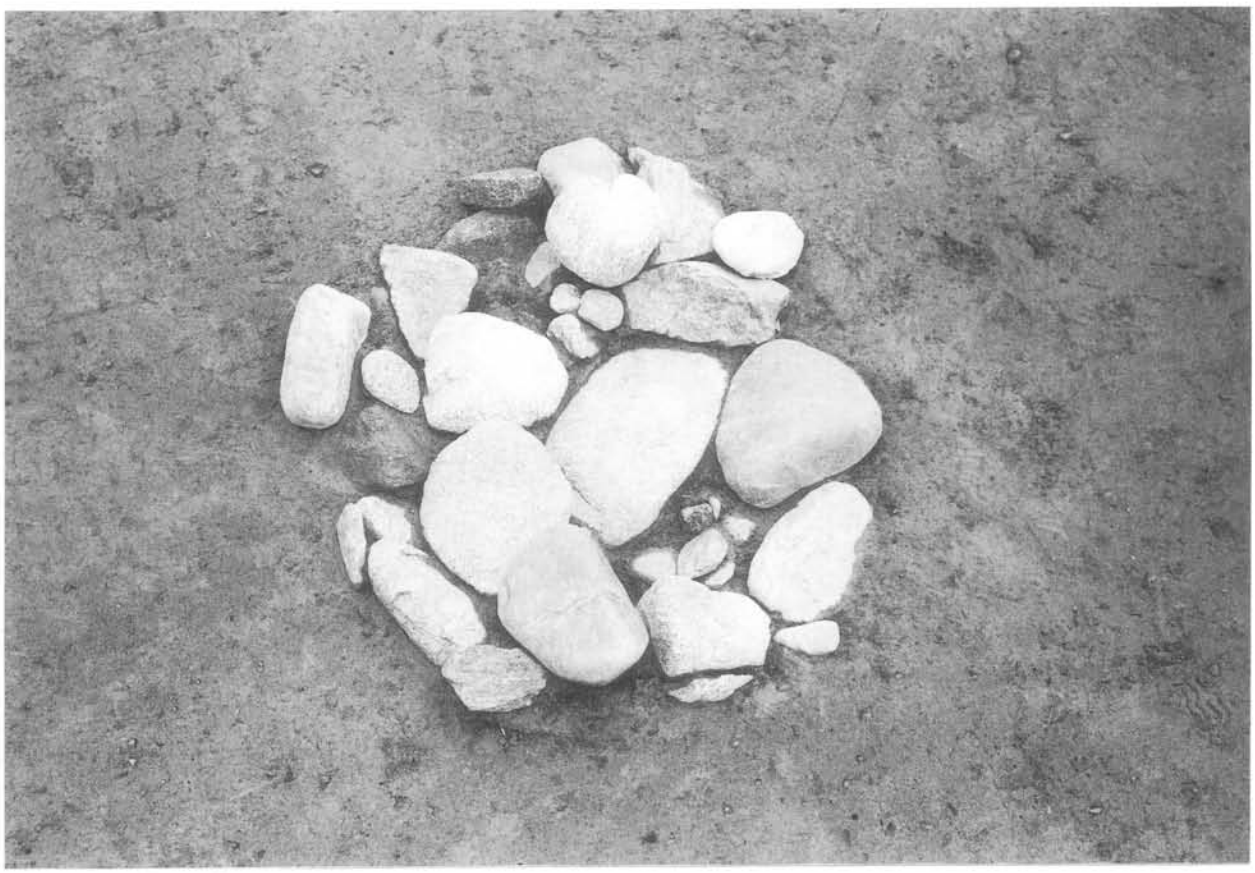
ＳＸ 4132 ・ 4133、ＳＺ 4025（南西から）

ＳＸ 4134～4136、ＳＺ 4199（南東から）

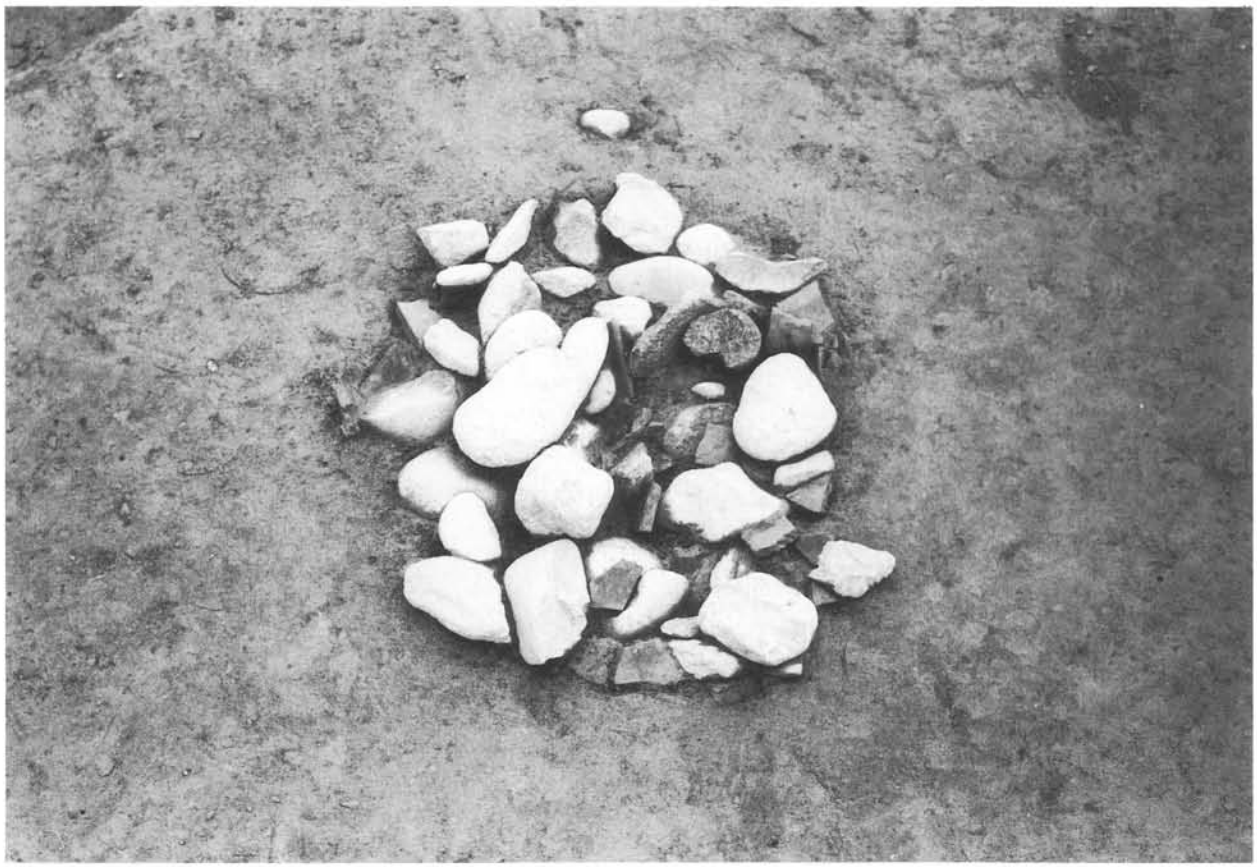
S X 4147 ・ 4148 （南から）

S X 4135 （南東から）

SX 4134（北から）

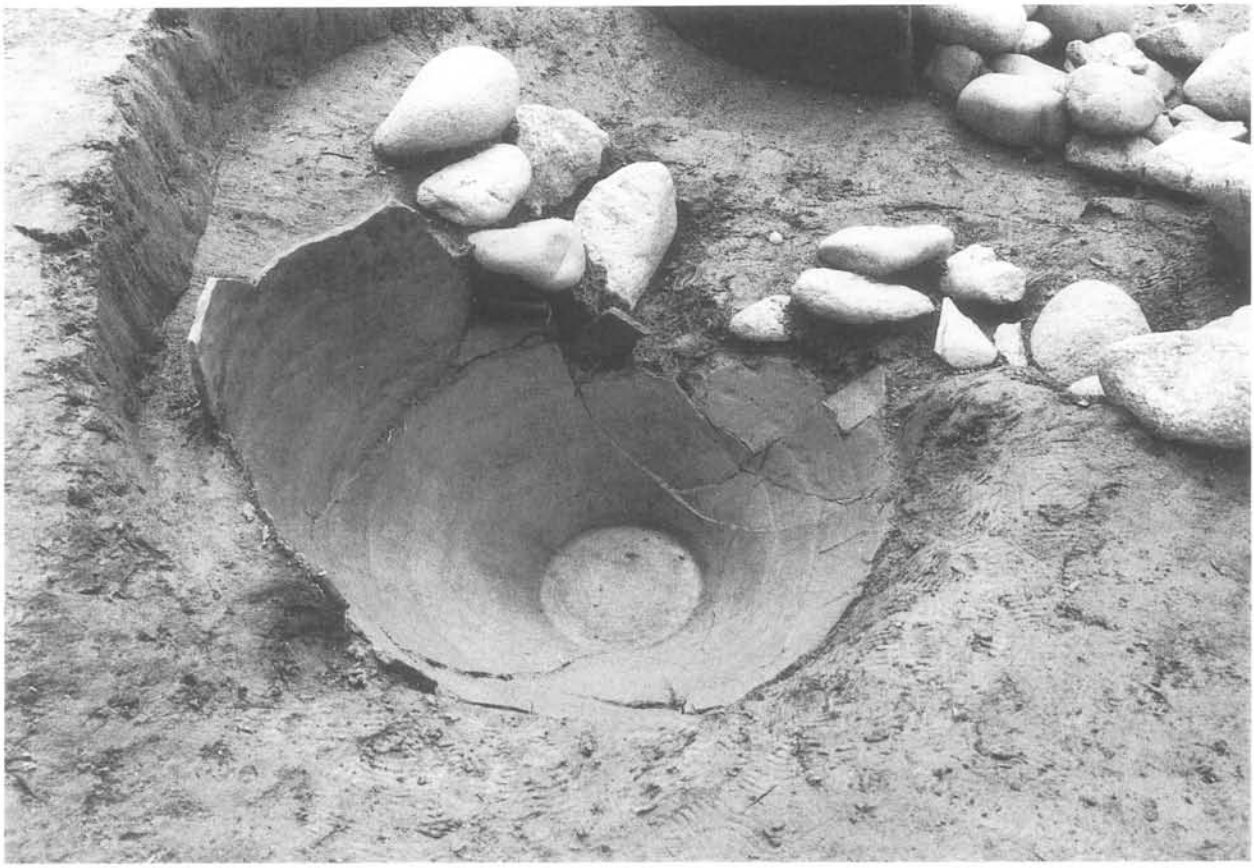


SX 4145（東から）

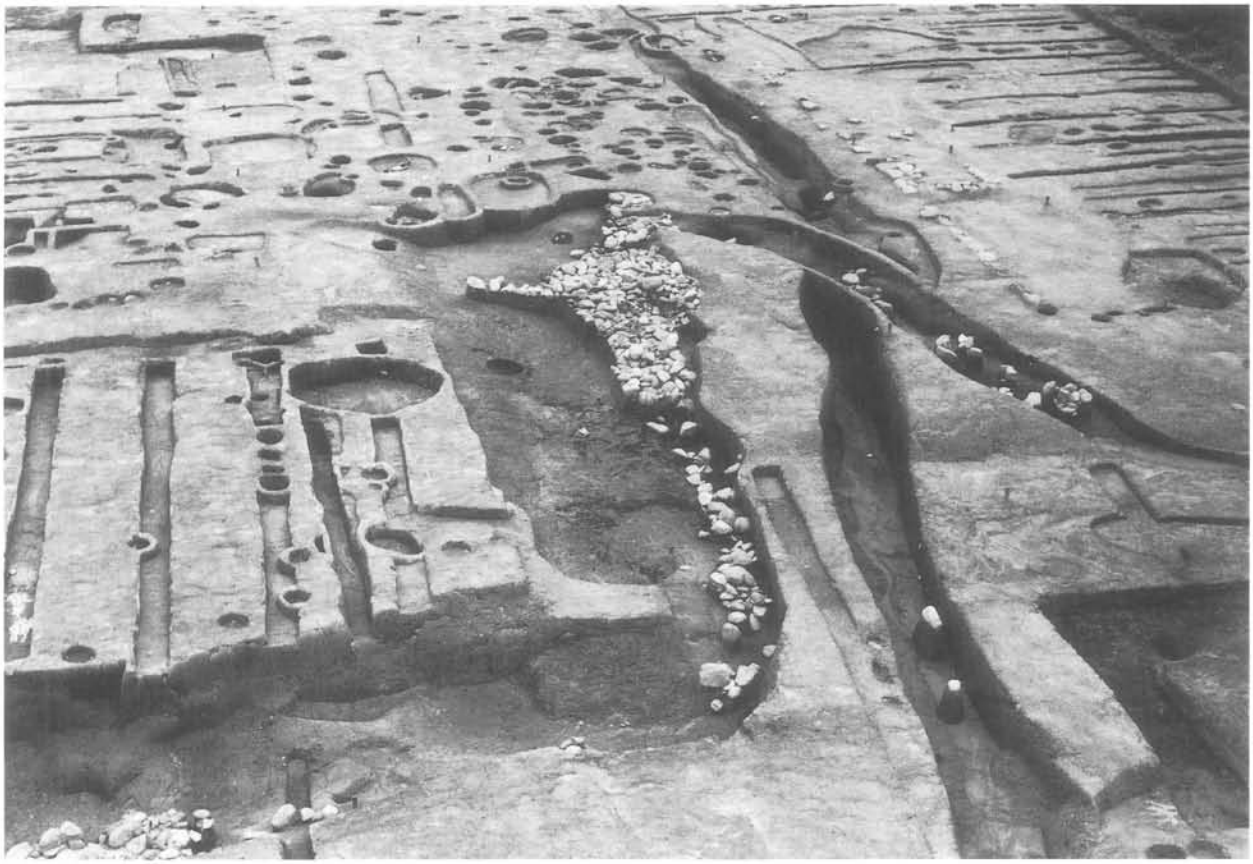


ＳＸ 4146 （北西から）

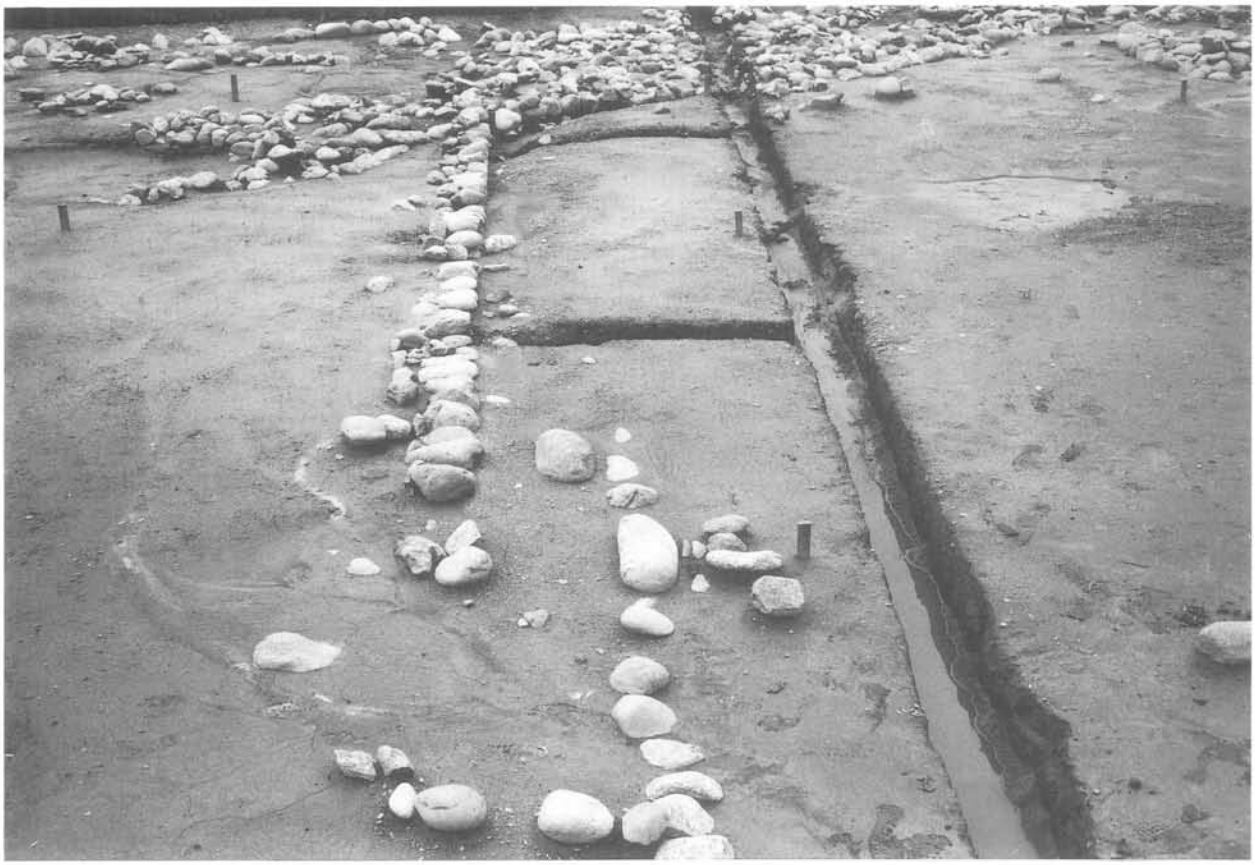
ＳＸ 4146 （南西から）



ＳＸ 4132 （北から）



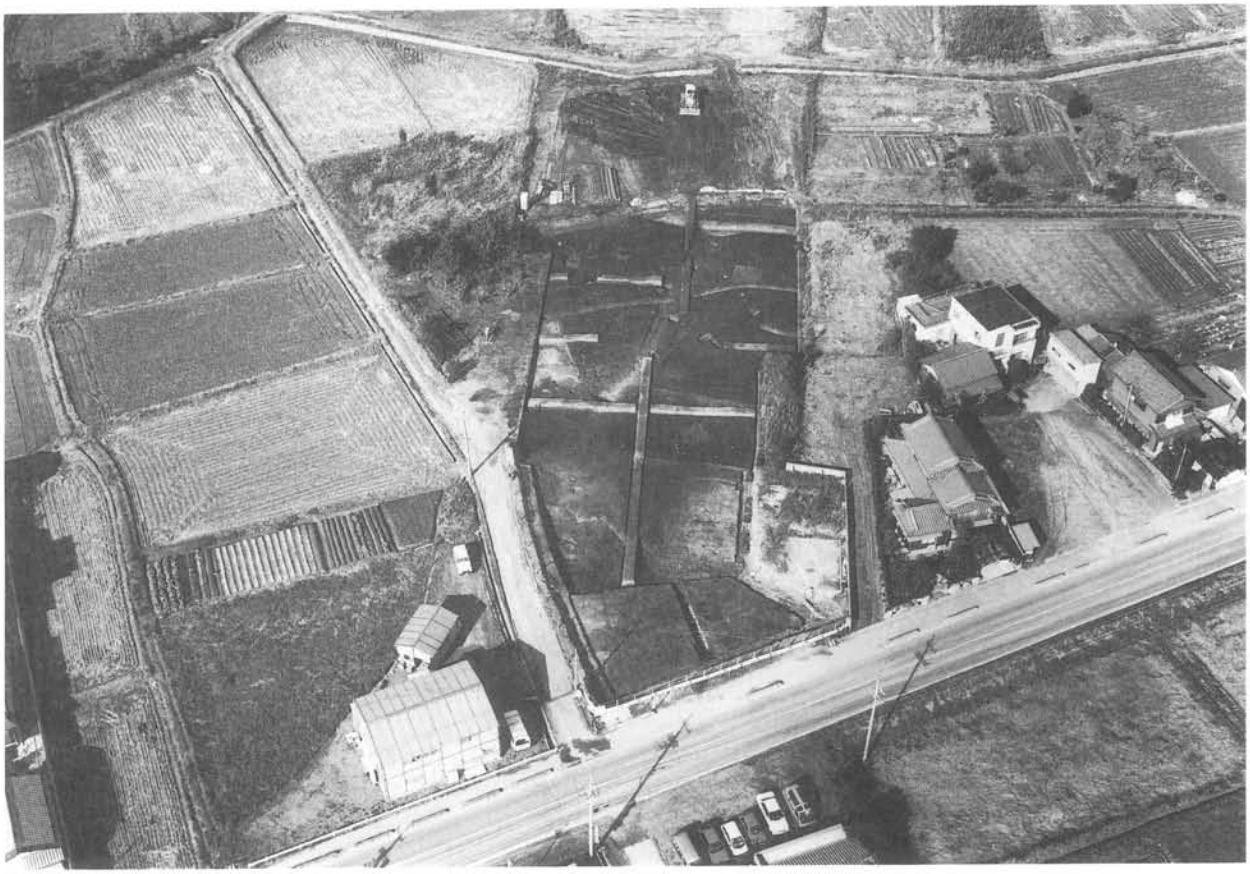
ＳＺ 4198 ・ 4109 、ＳＤ 4101 ・ 4102 （北西から）



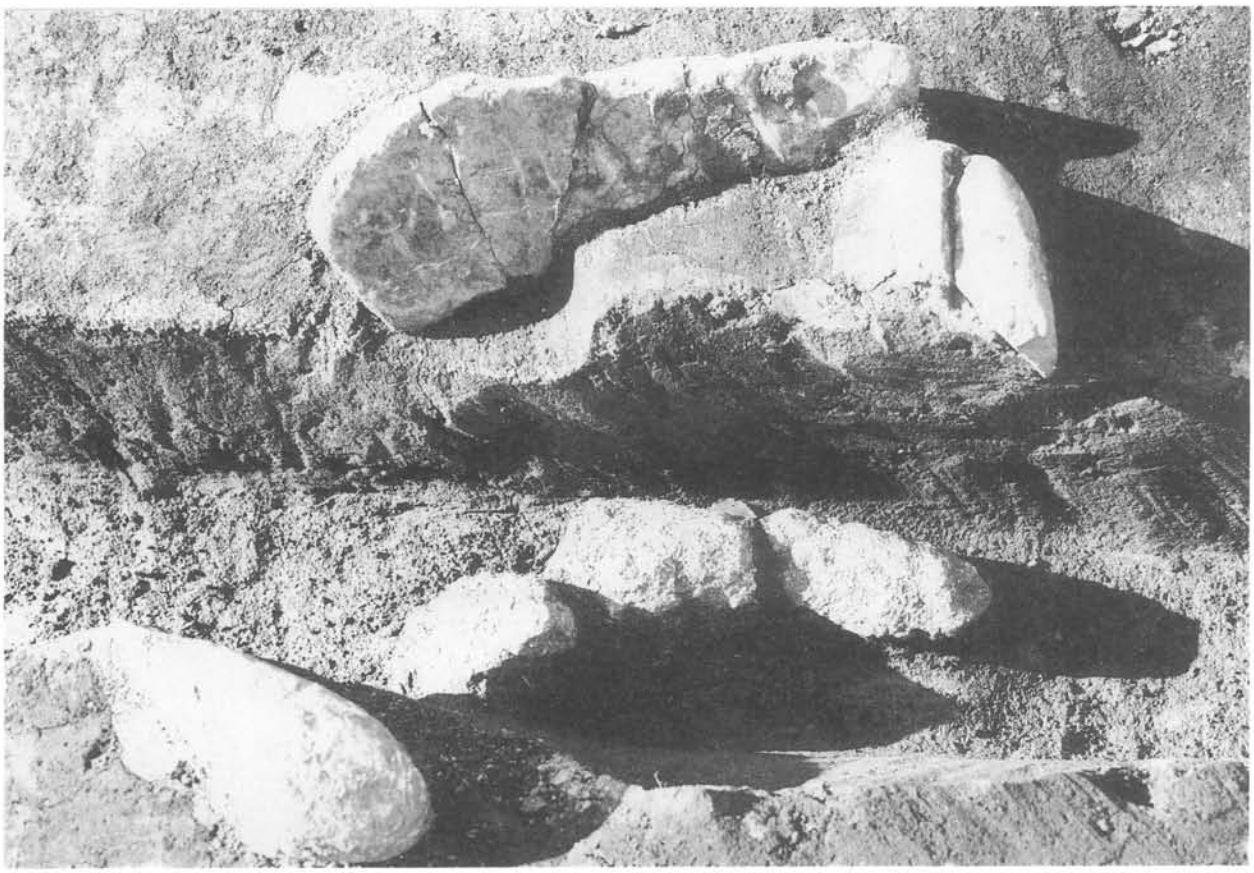
ＳＺ 4198 （南東から）

ＳＥ 4149 （南東から）

第５次　調査区調査前風景（南から）



第５次　調査区全景（南から）



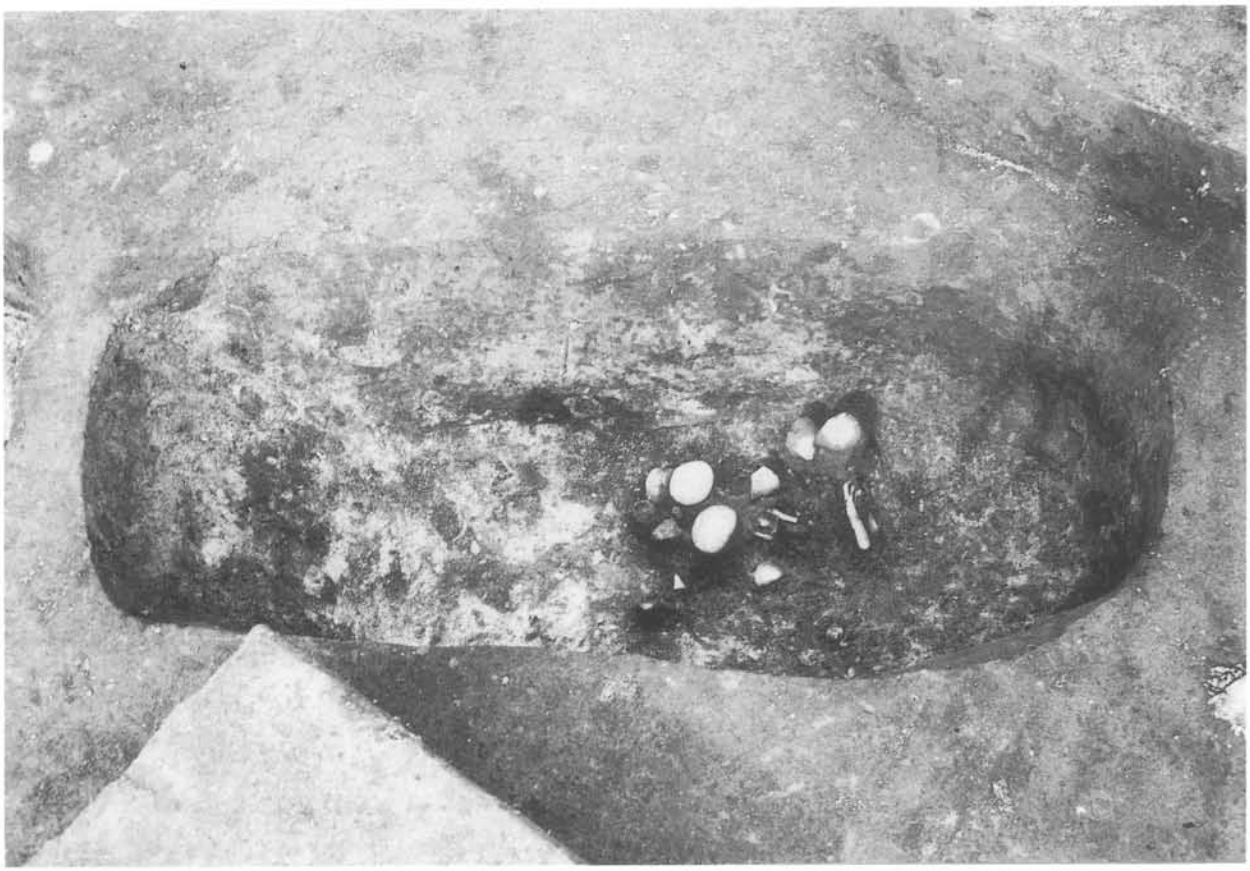
ＳＦ 524 （南東から）

ＳＺ 533 （東から）

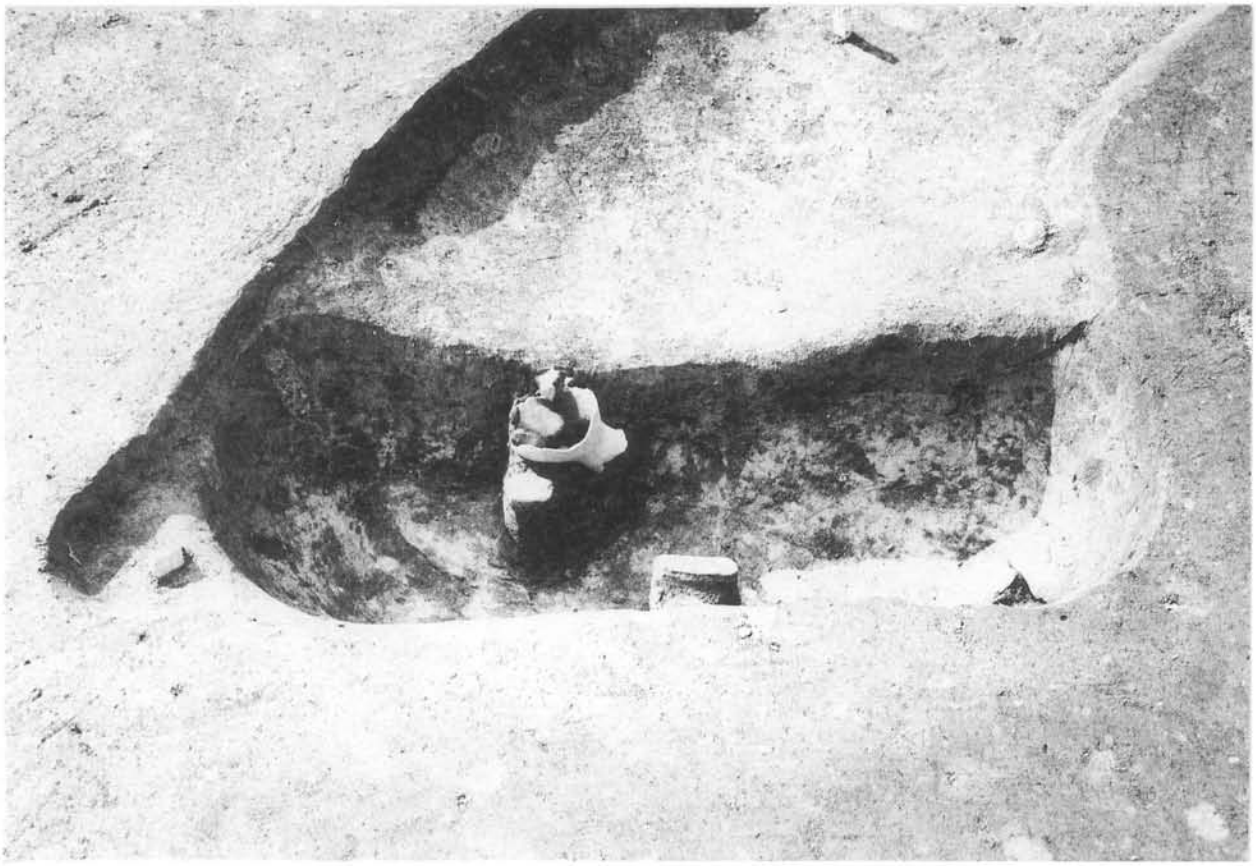
S X 505 （北から）

S X 505　土器出土状況近景（東から）

S X 507 （南西から）

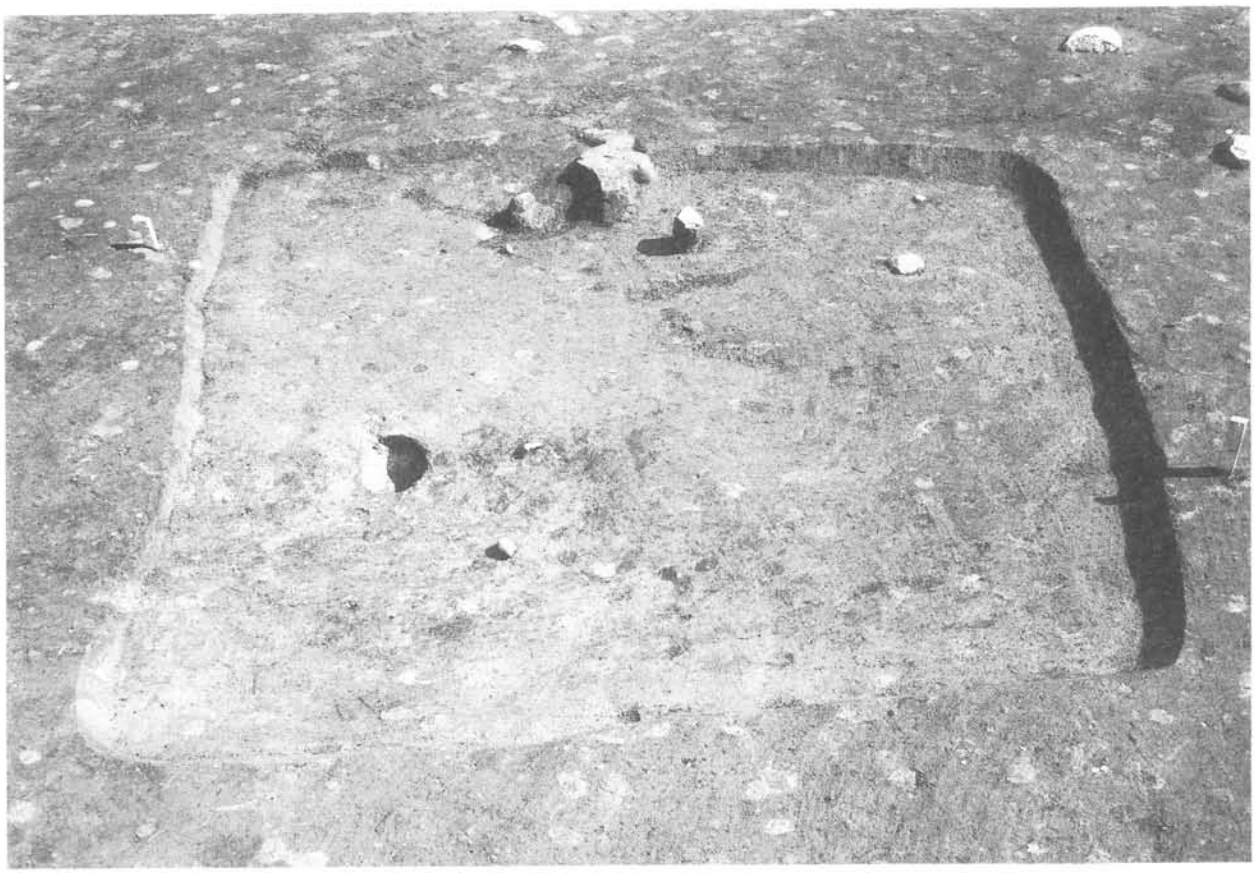


S X 508 （南から）

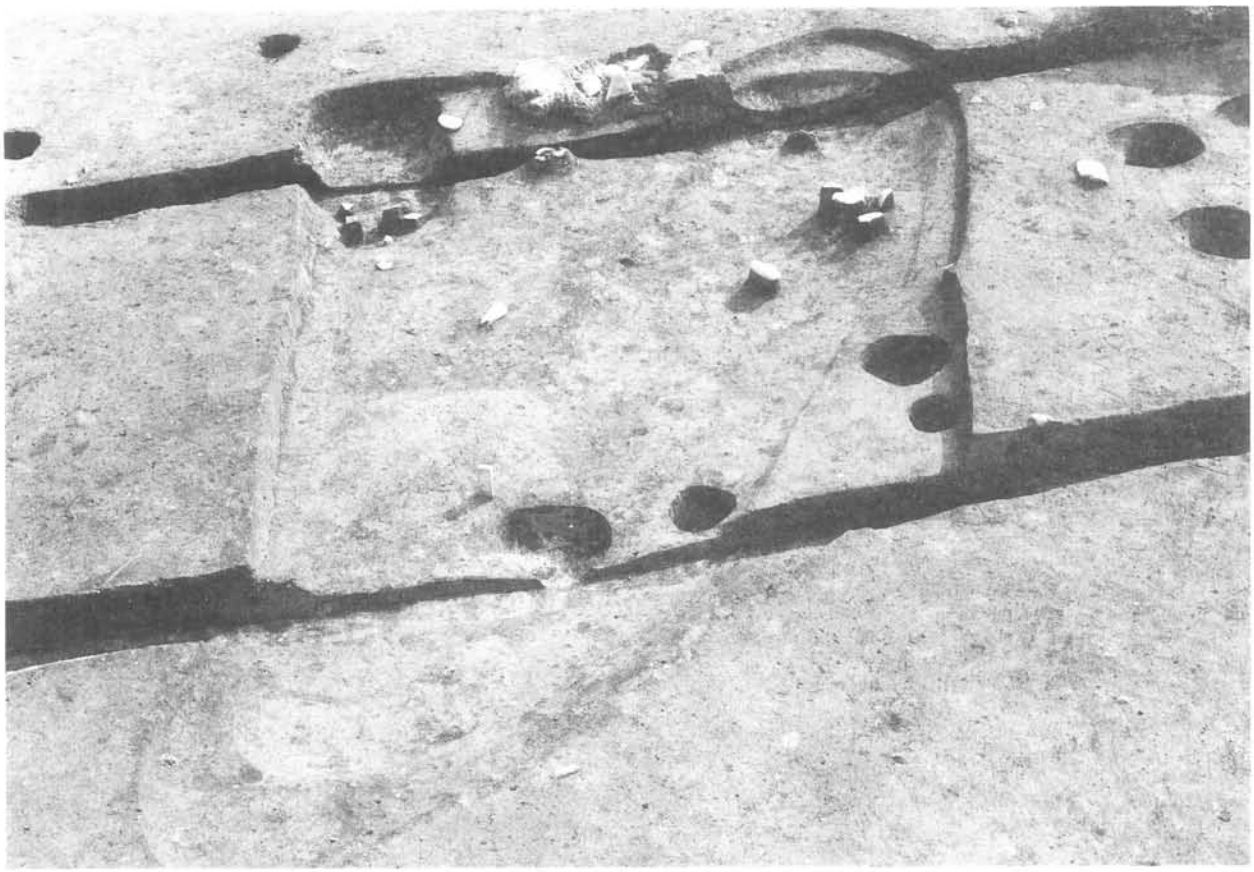


S X 516（西から）

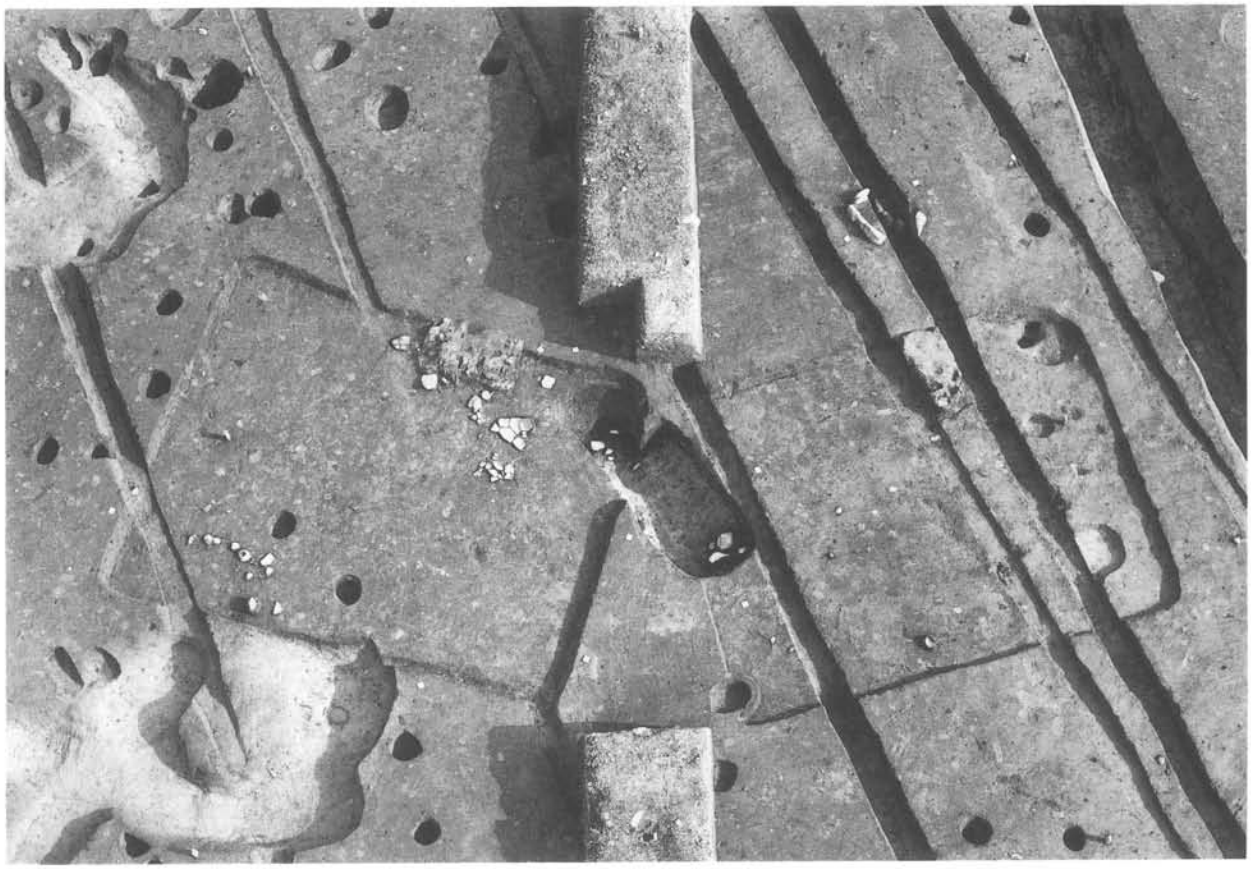
S X 556（西から）



ＳＨ 502 （北西から）

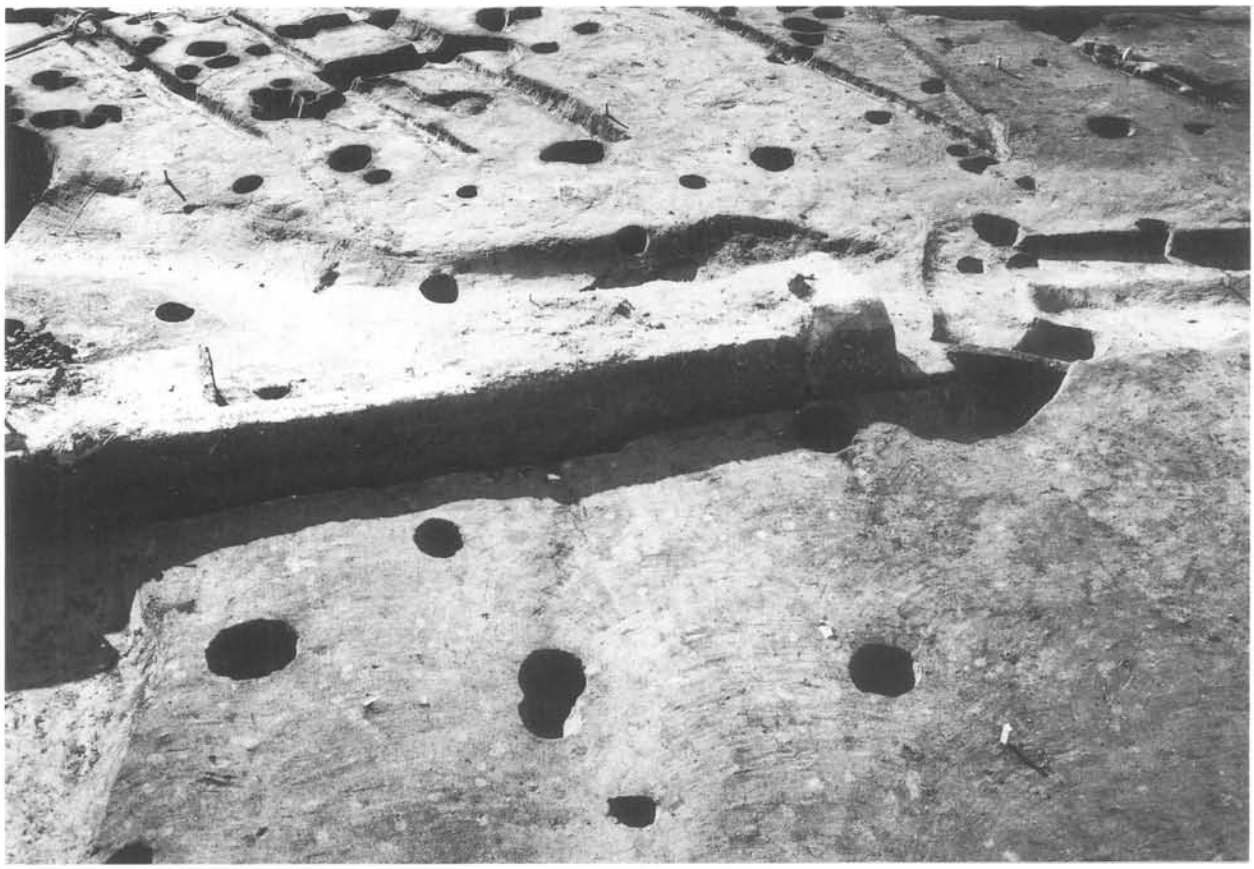


ＳＨ 519 （北西から）

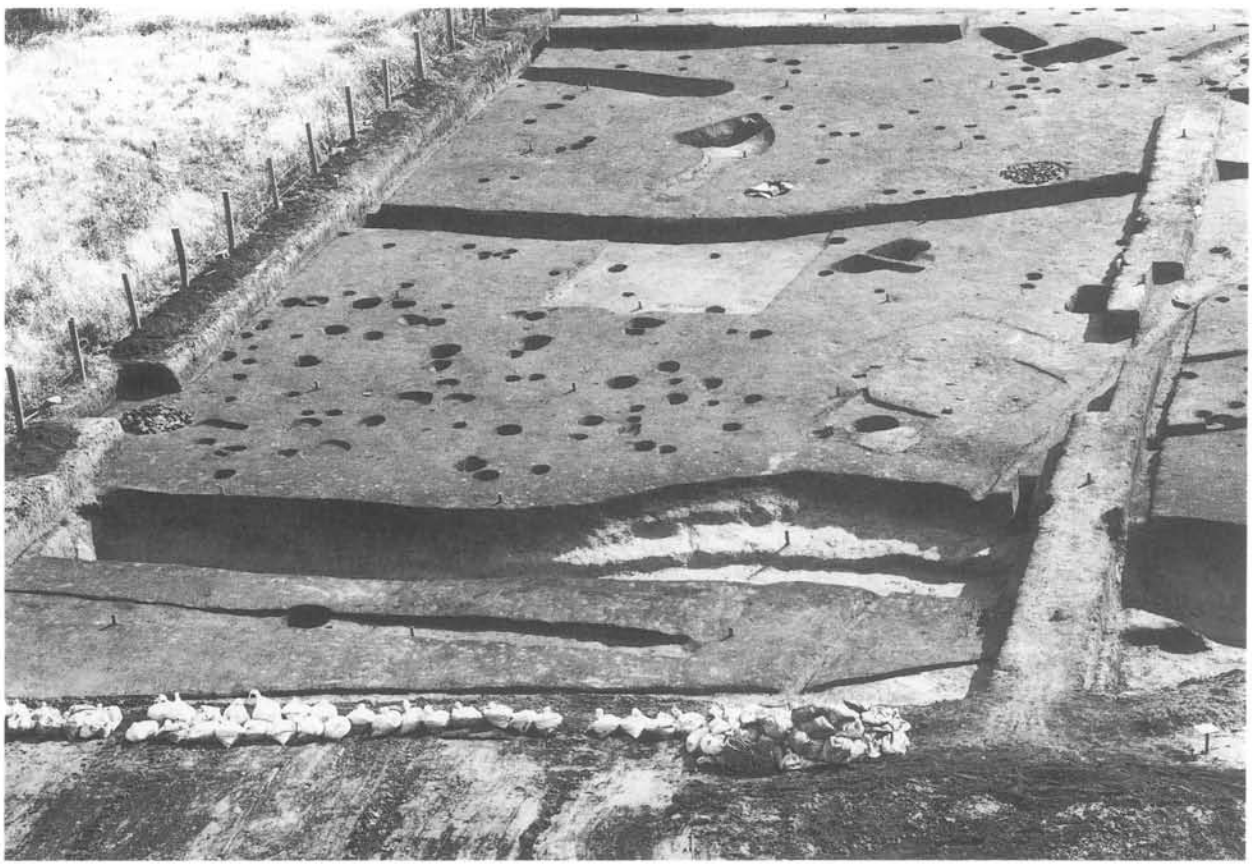


ＳＸ 526、ＳＨ 520・521（南西から）

ＳＦ 540（西から）



ＳＢ 536 （北東から）

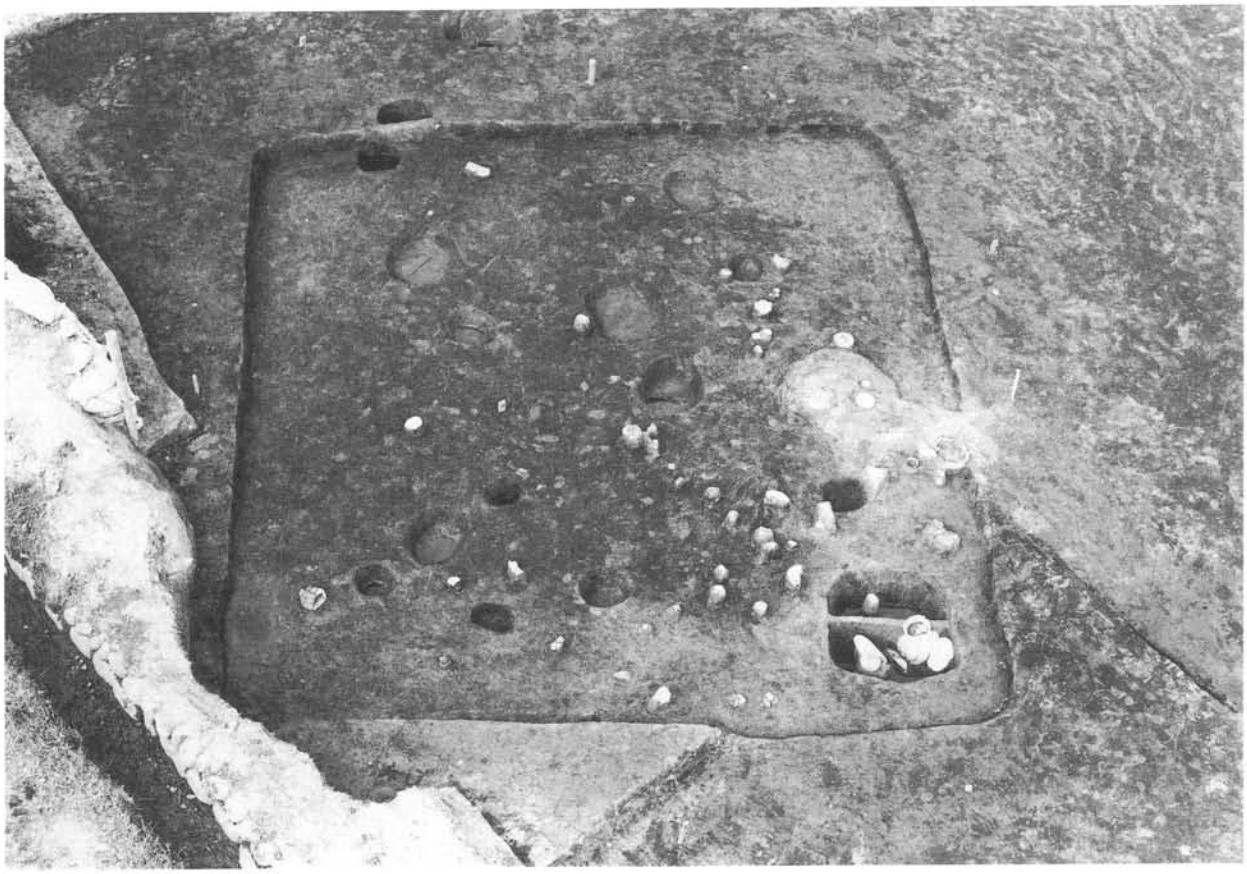


ＳＨ 514 ・ 534 、ＳＢ 538 ・ 539 （北西から）

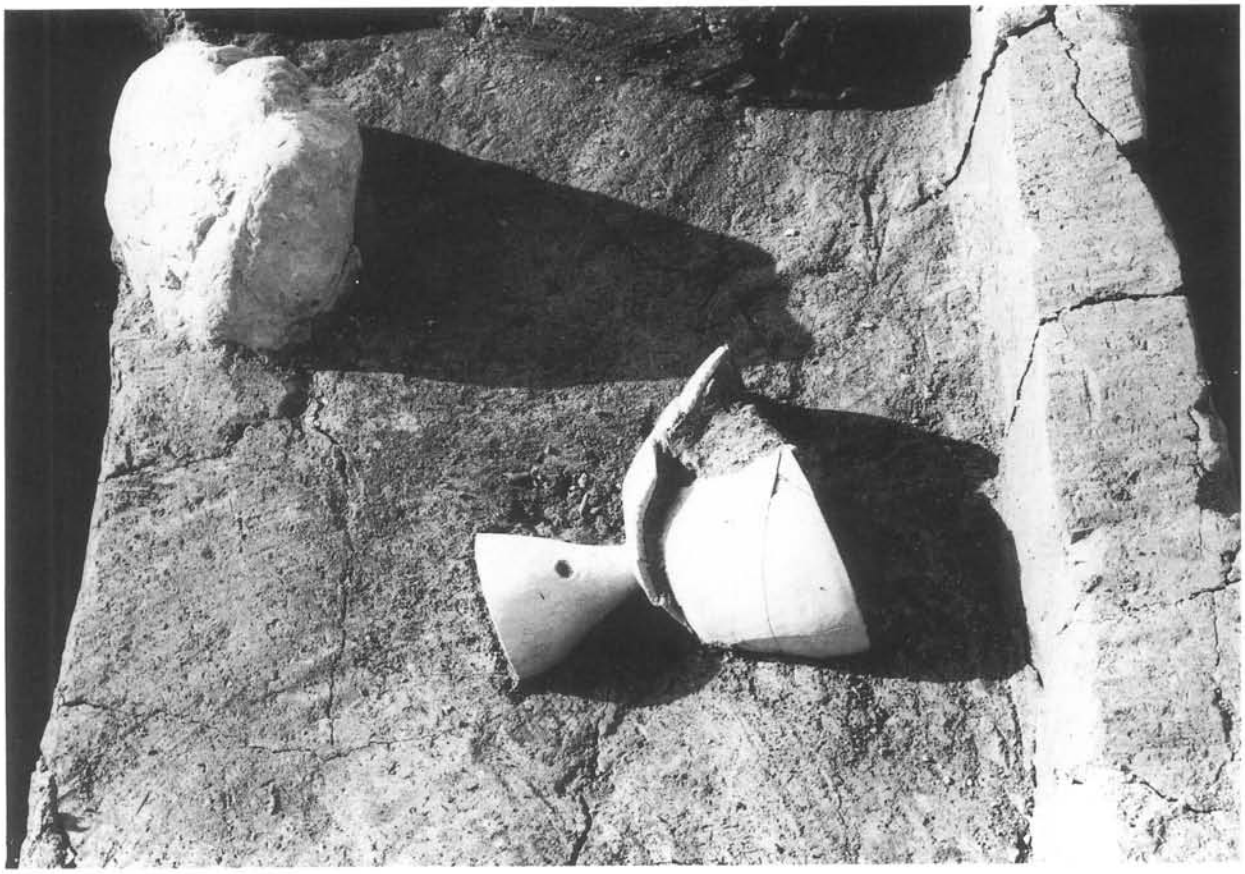
第６次調査区全景（北から）

ＳＤ 603（南から）

SH 605・606（南から）

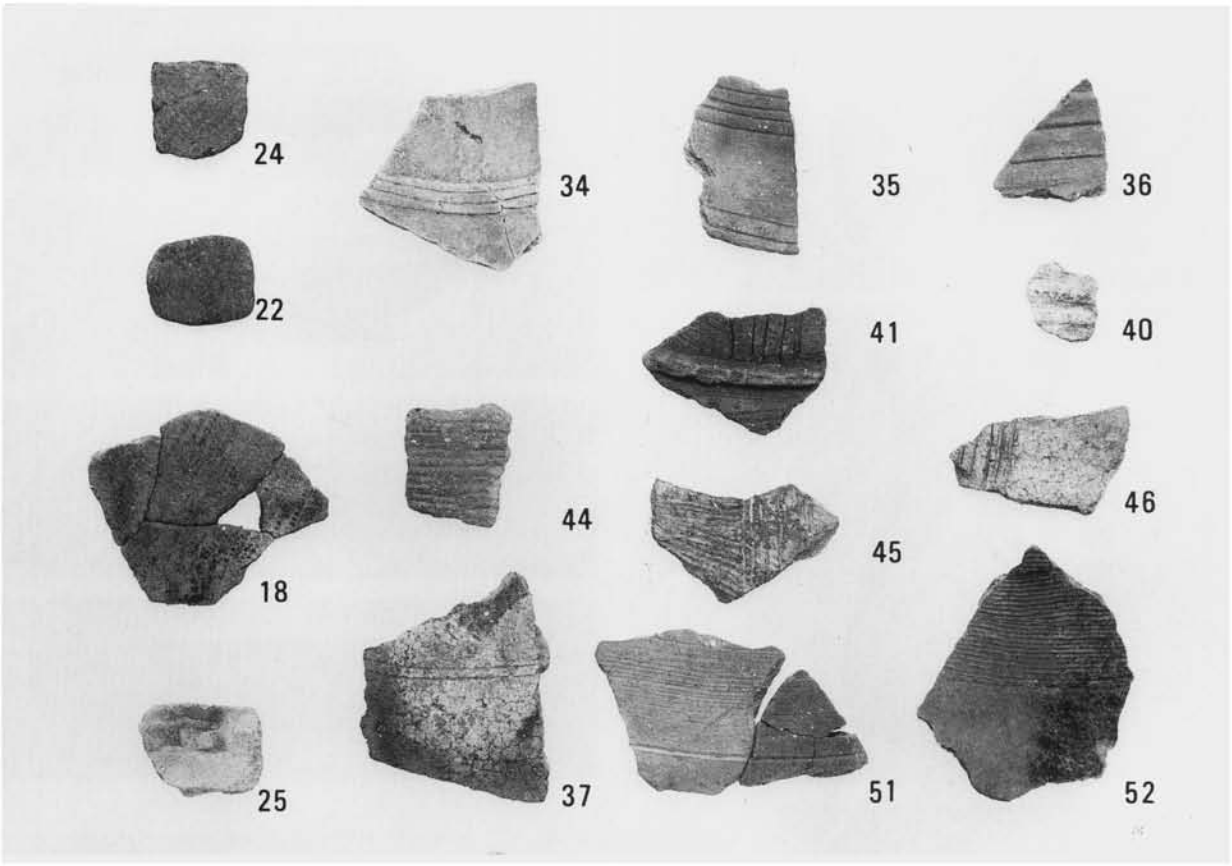


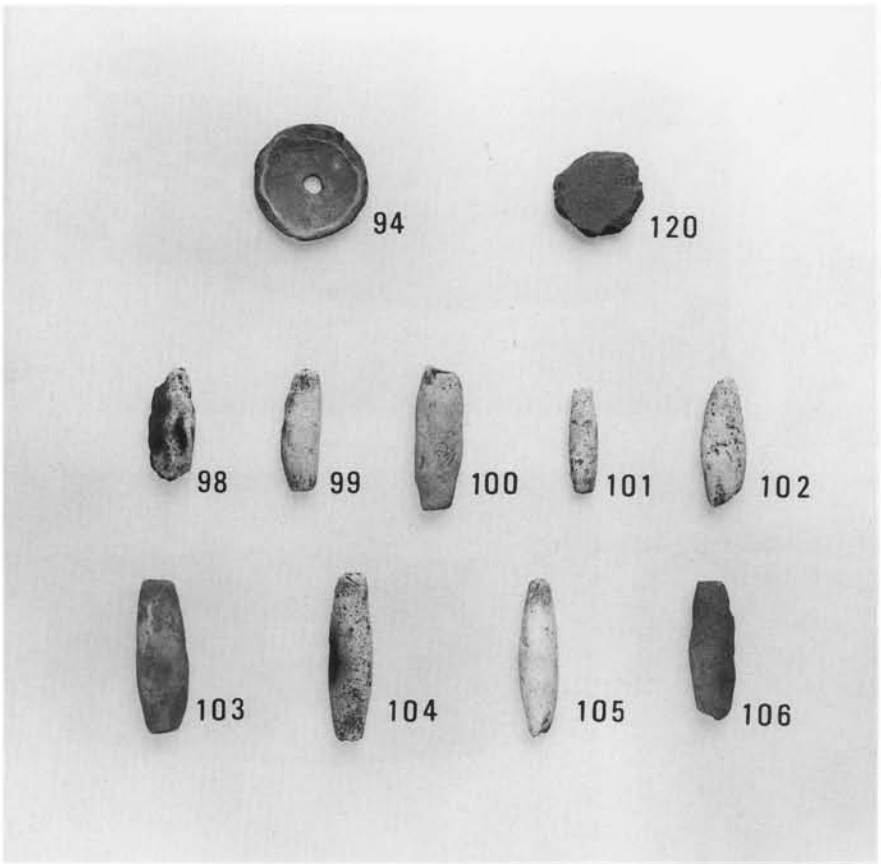
SH 606（南から）



ＳＤ 603 遺物出土状況（北から）

ＳＤ 606　貯蔵穴遺物出土状況（南から）





第1次調査出土遺物（1：3）

第１次調査出土遺物（１：３）

61

67

68

69

70

71

72

74

75

77

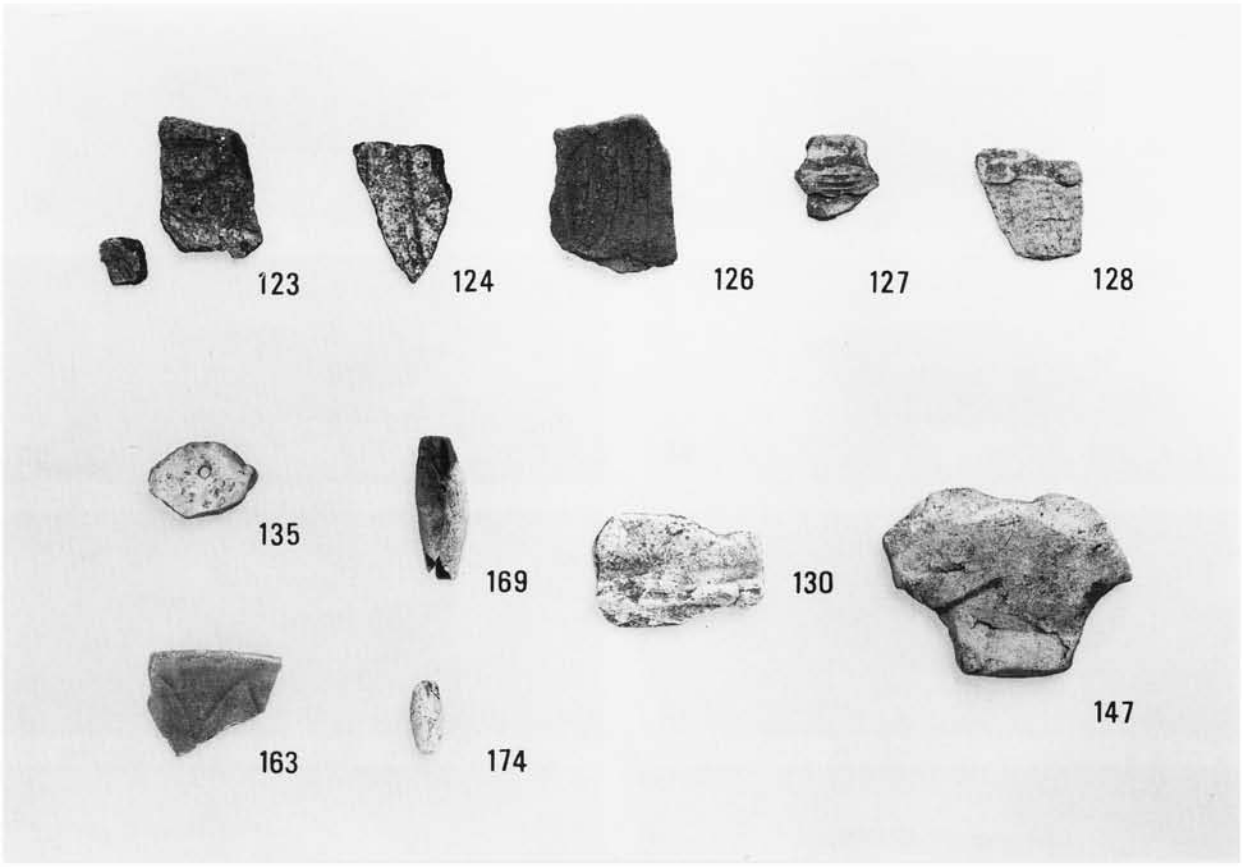
79

80

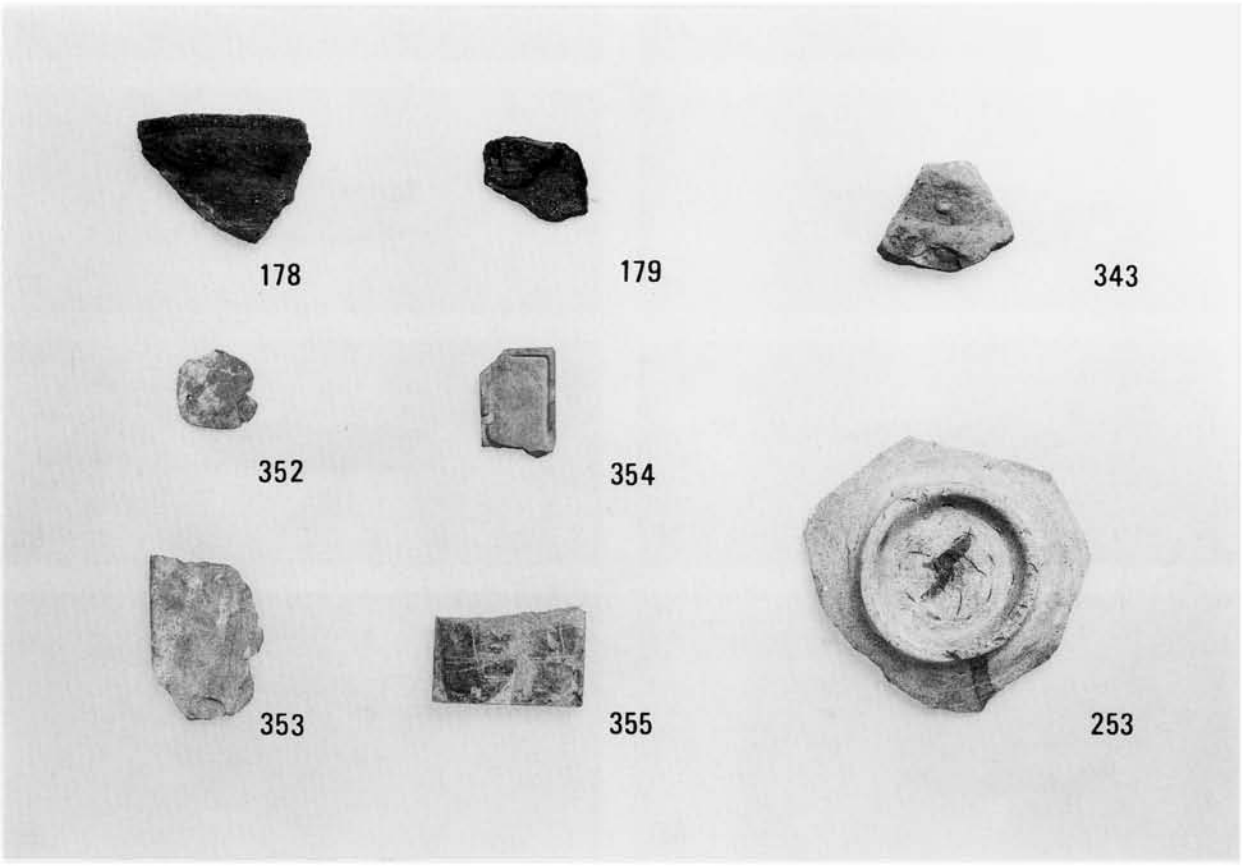
83

95

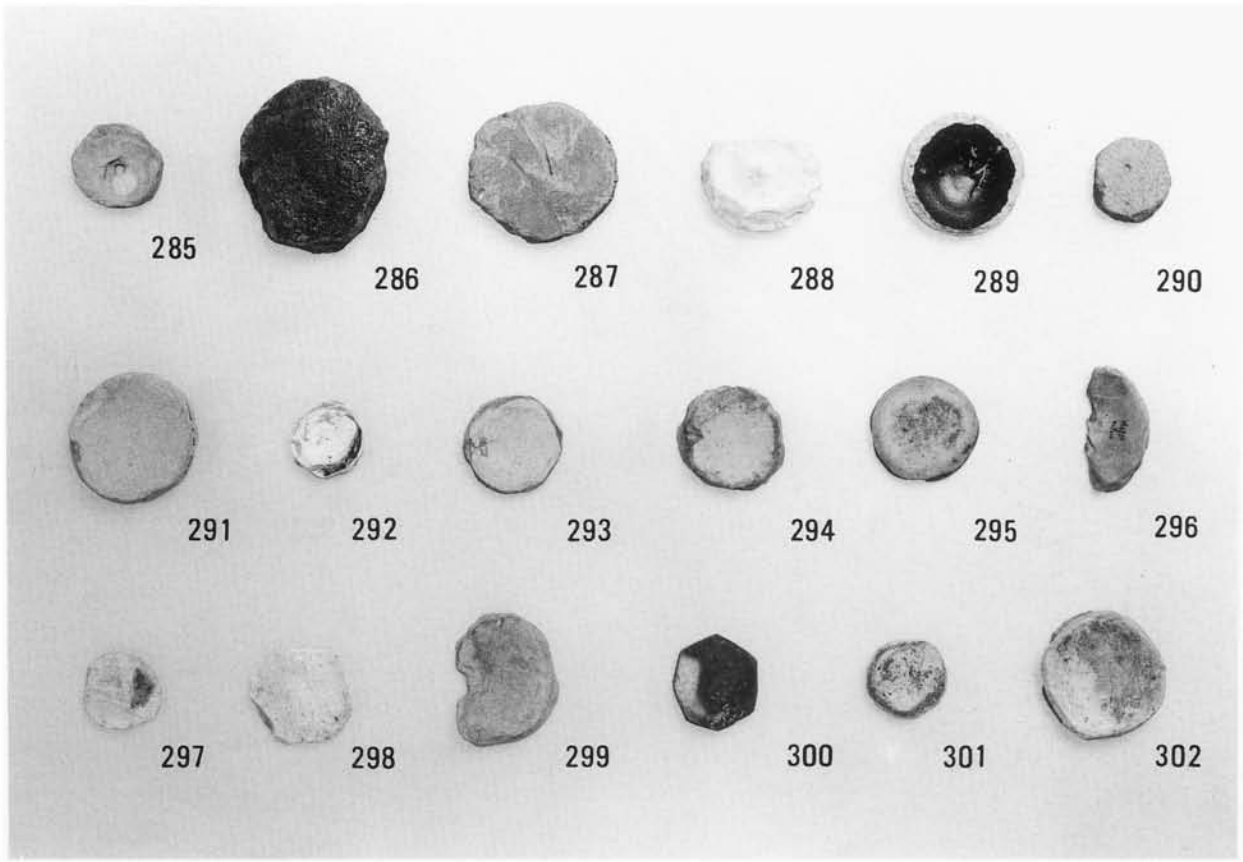
第１次調査出土遺物（１：３）



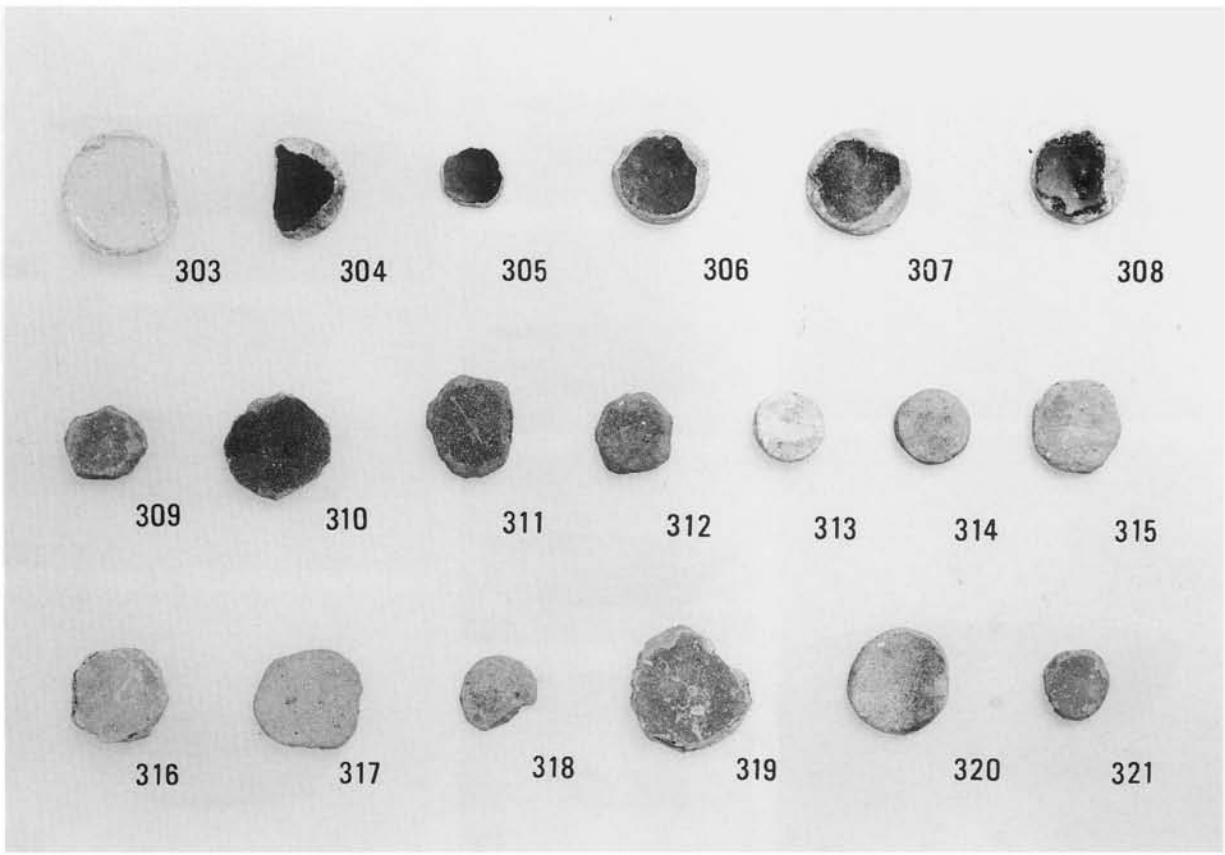
第 2 次調査出土遺物（1 ： 3）



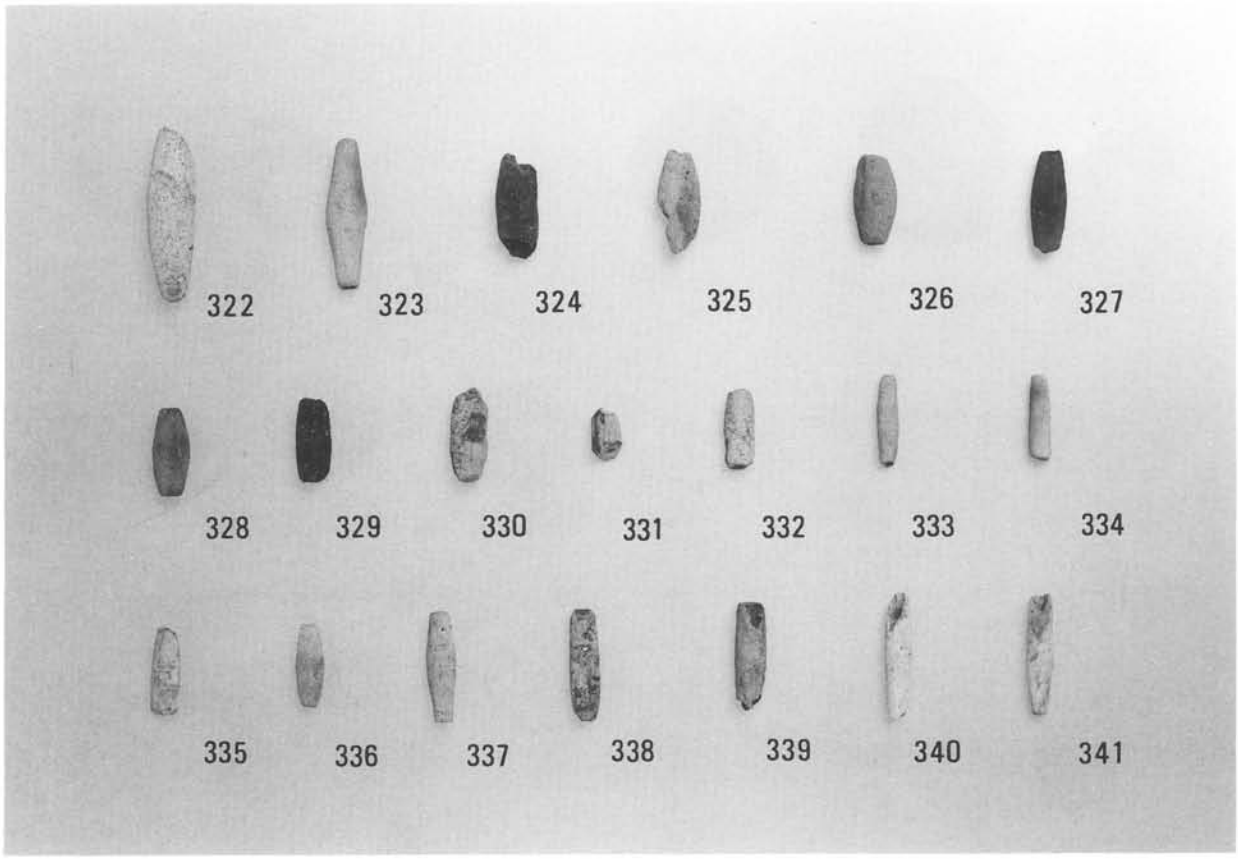
第 3 次調査出土遺物（1 ： 3）



第３次調査出土遺物（１：３）



第３次調査出土遺物（１：３）

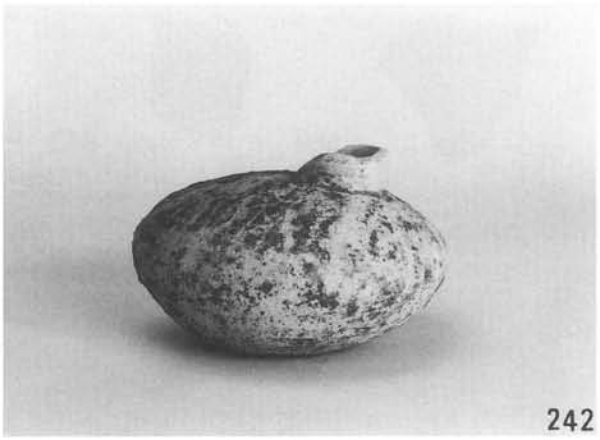


第３次調査出土遺物（１：３）

239

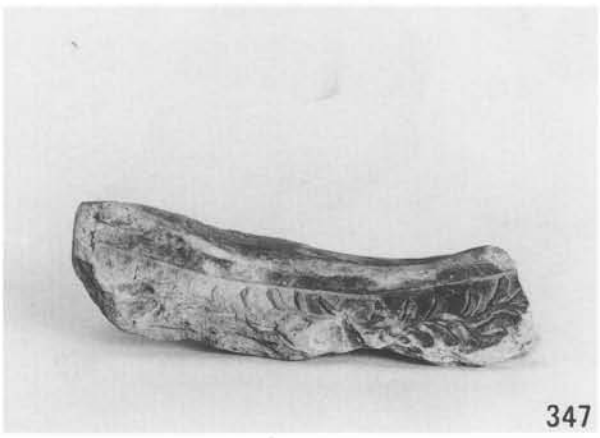
248

278


242

344

345


347

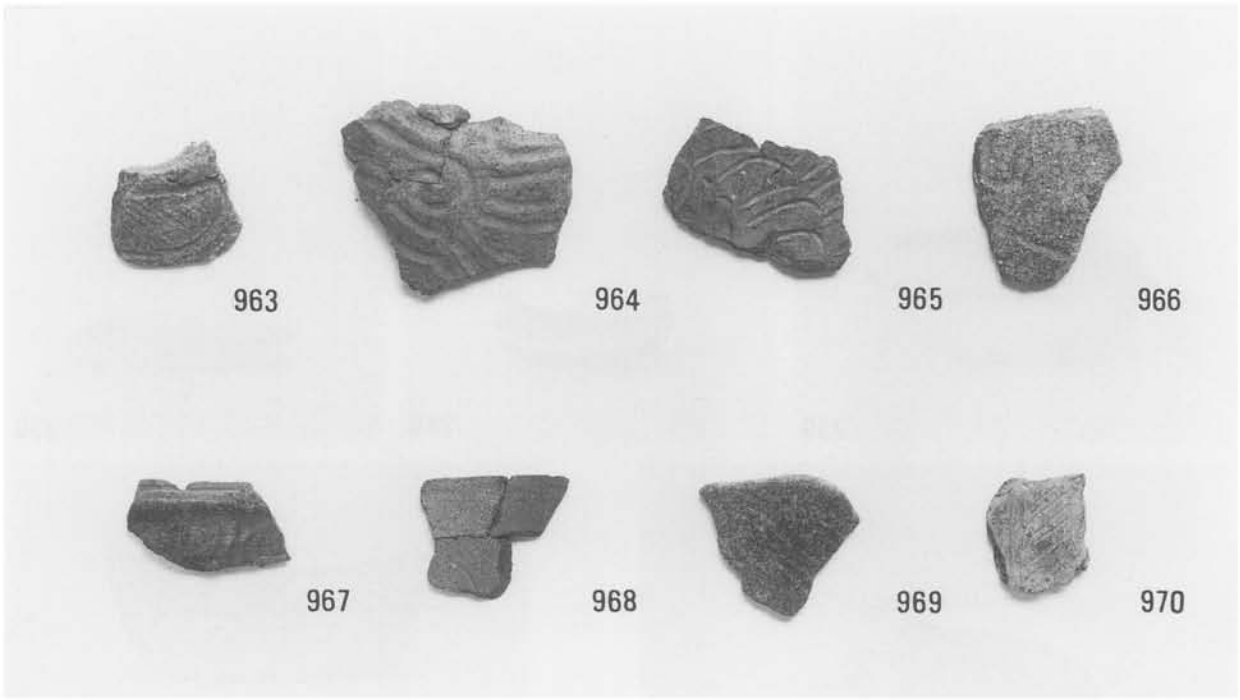
346

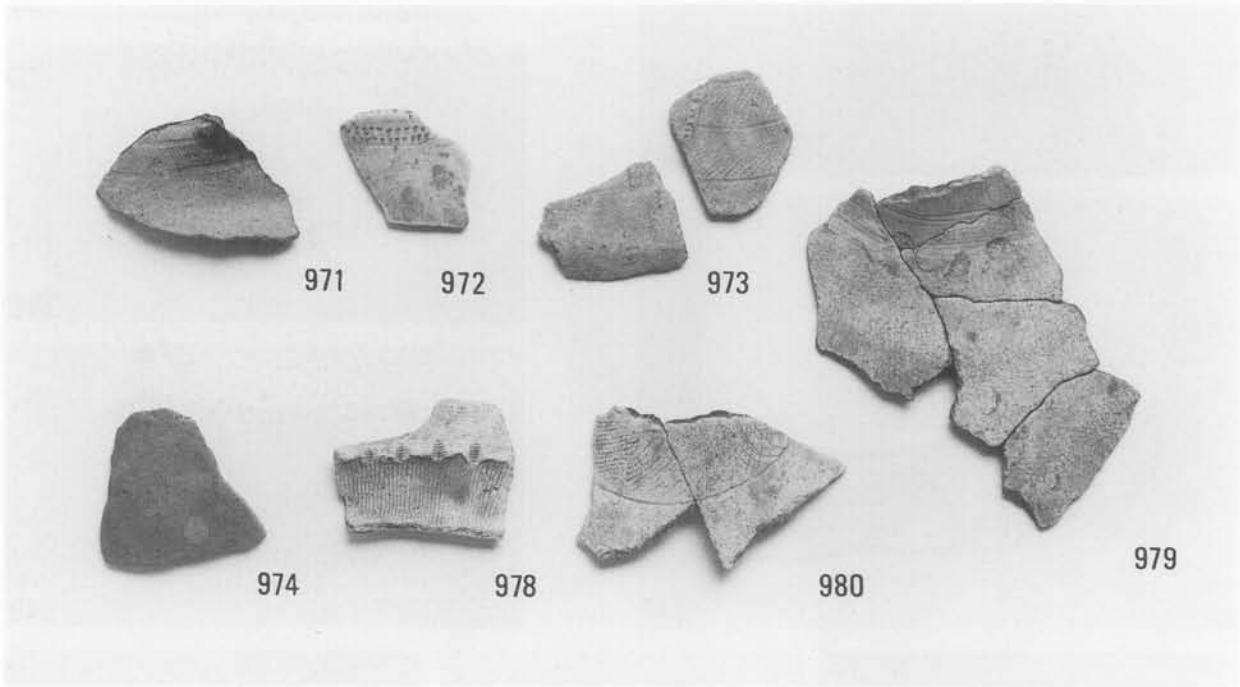
284

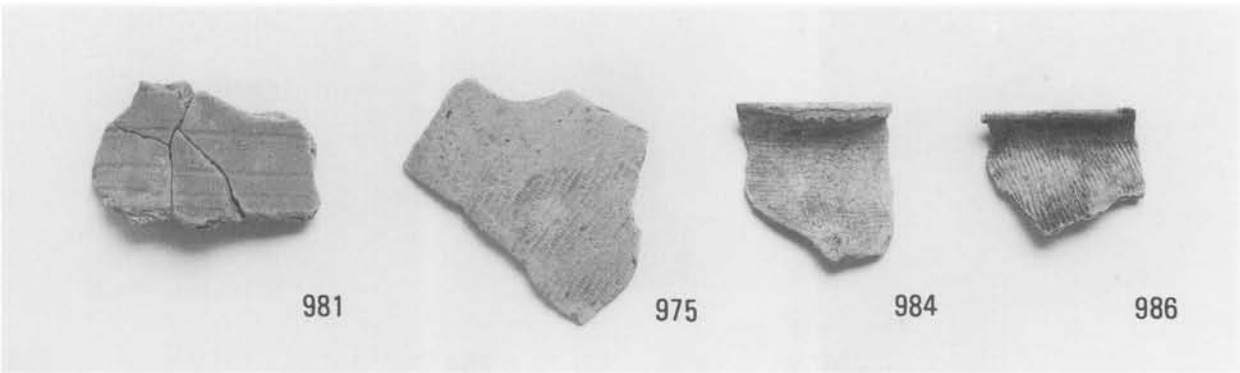
284

284

第３次調査出土遺物　284＝１：２、他は　１：３







第４次調査出土遺物（１：３）

459

365

393

392

402

397

390

403

412

409

406

414

415

417

418

421

424

425

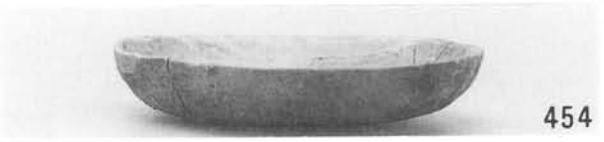
436

440

443

445

第４次調査出土遺物（１：３）


454

460

461

462

463

465

466

474

476

481

485

489

492

495

998

999

1000

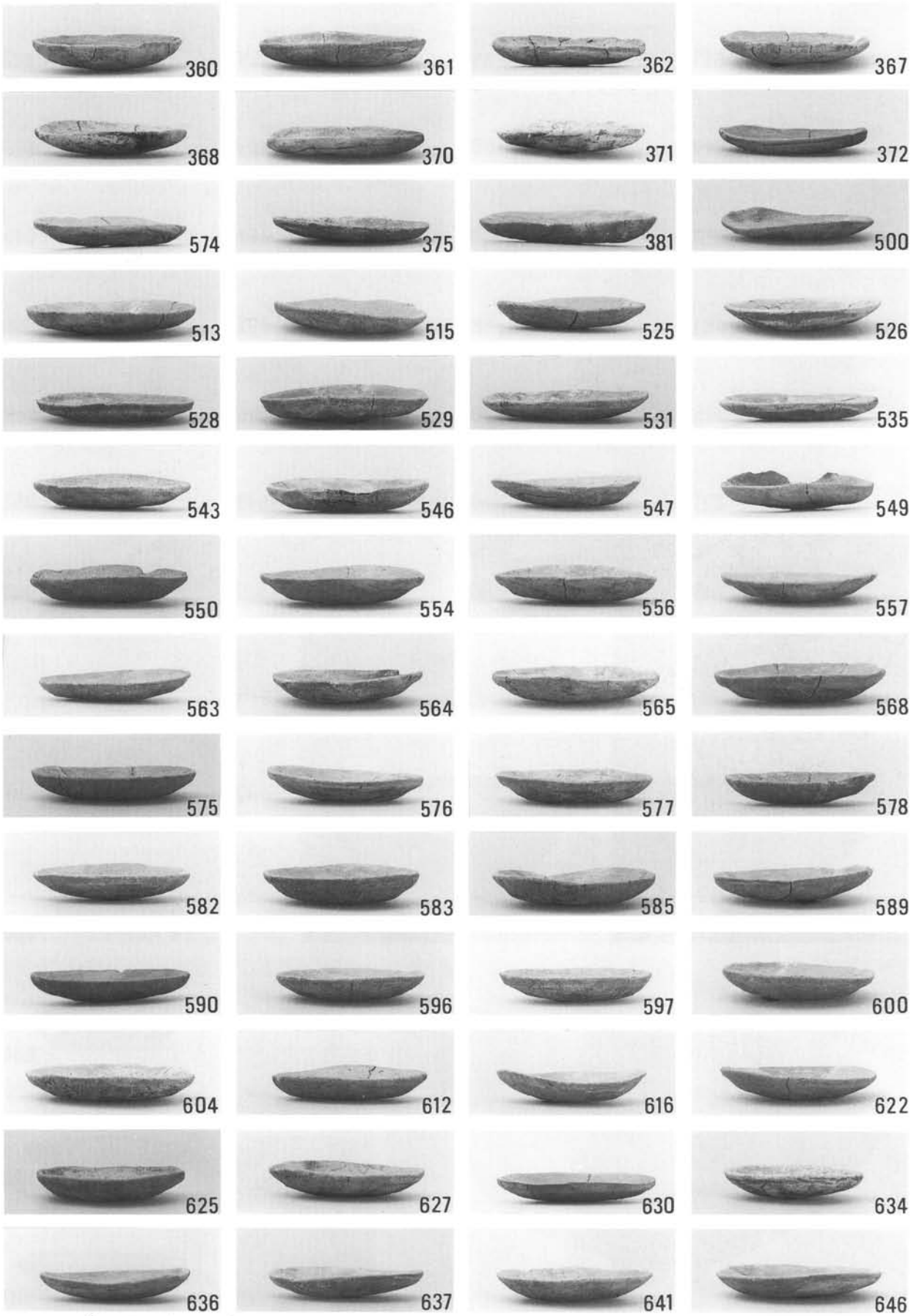
1001

948

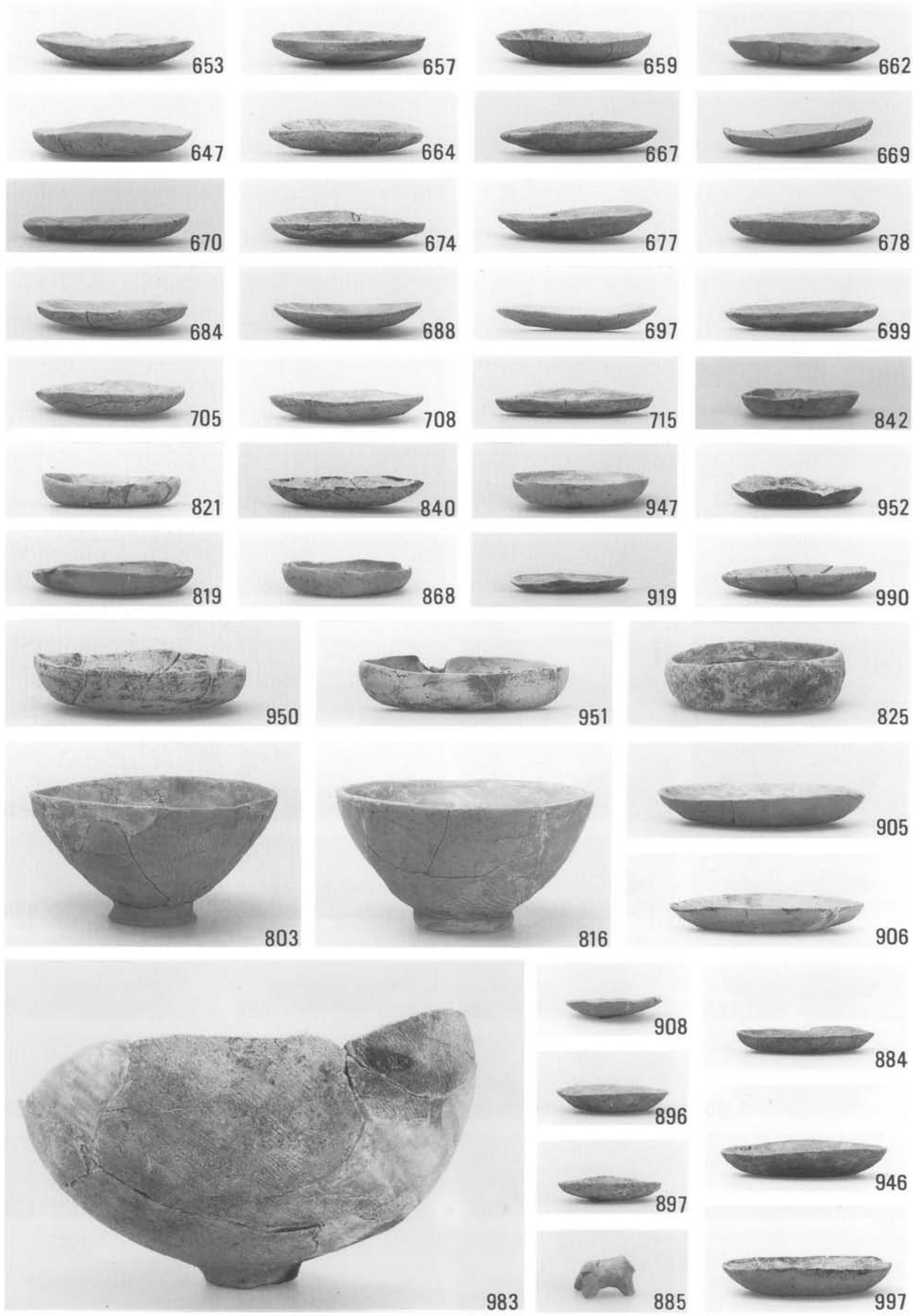
1002

966

第４次調査出土遺物（１：３）



第４次調査出土遺物（１：３）



第４次調査出土遺物（１：３）

376

389

749

751

752

753

755

756

758

762

740

769

871

879

739

741

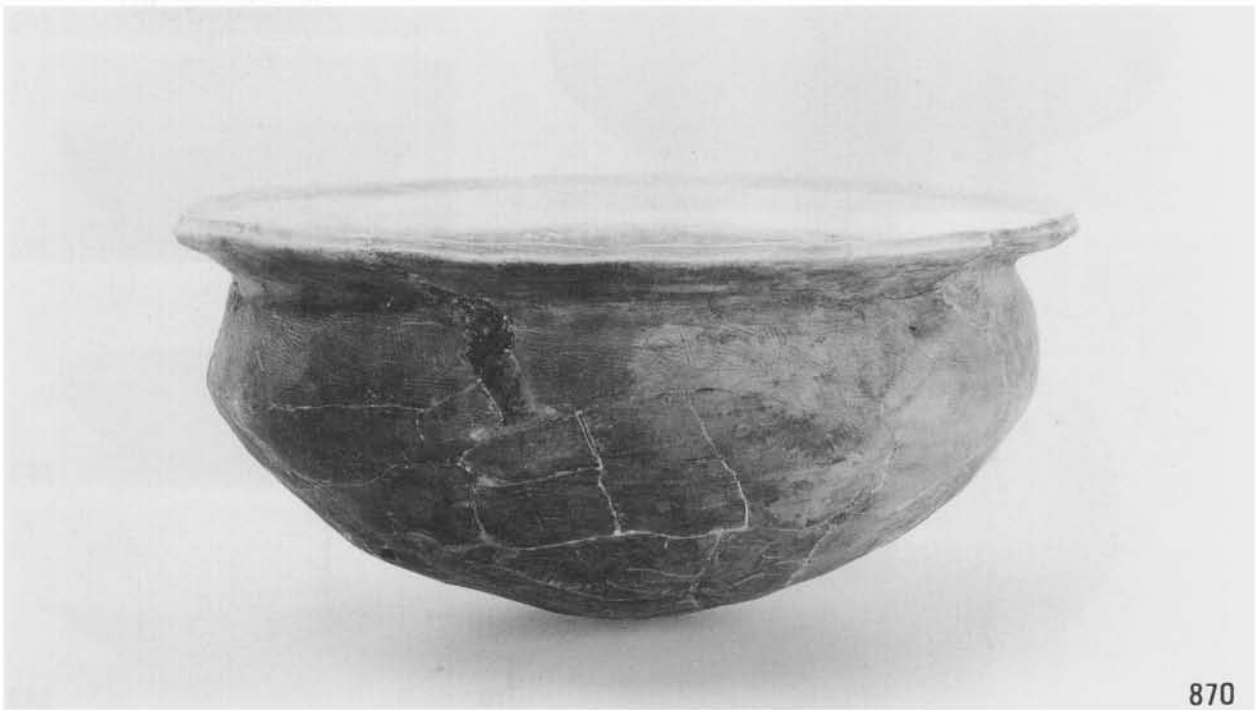
742

743

744

388

第４次調査出土遺物（１：３）



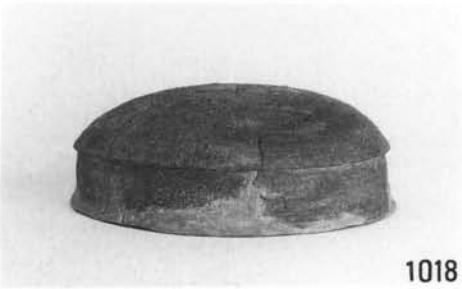
第４次調査出土遺物（１：３）

781

778

385

782


1018

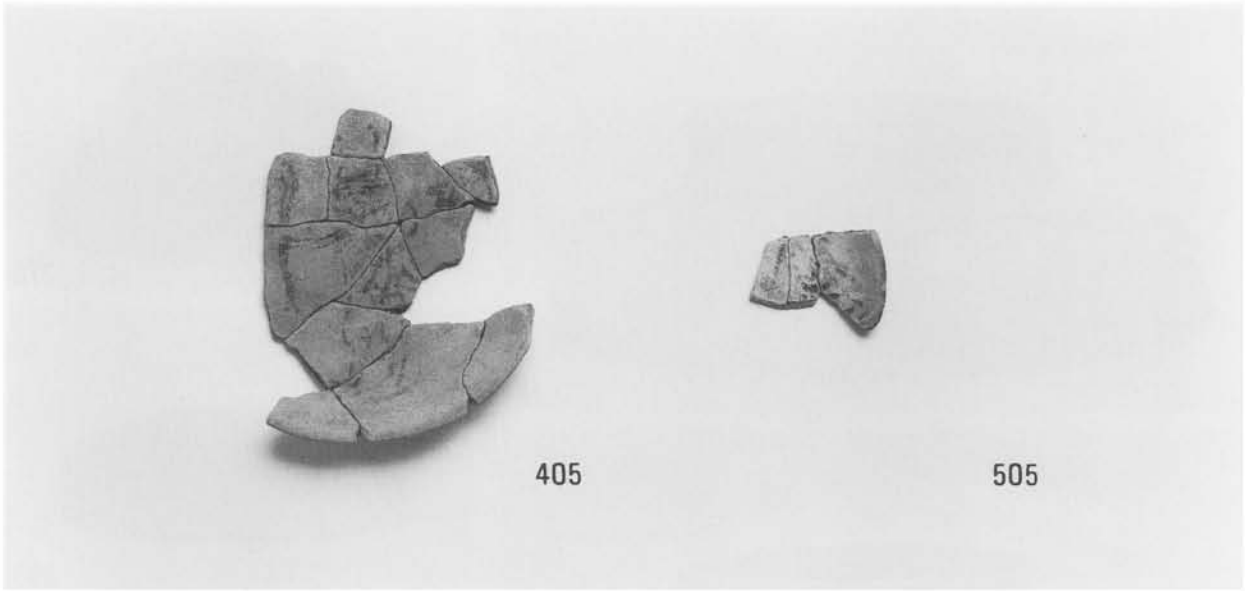
784

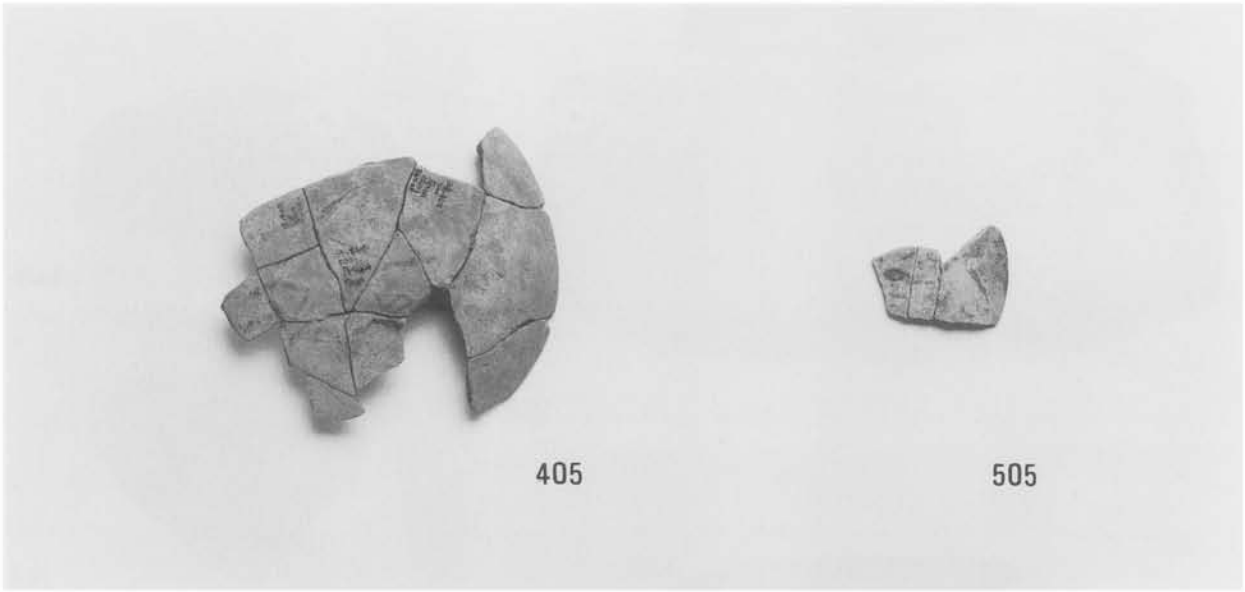
783

1026

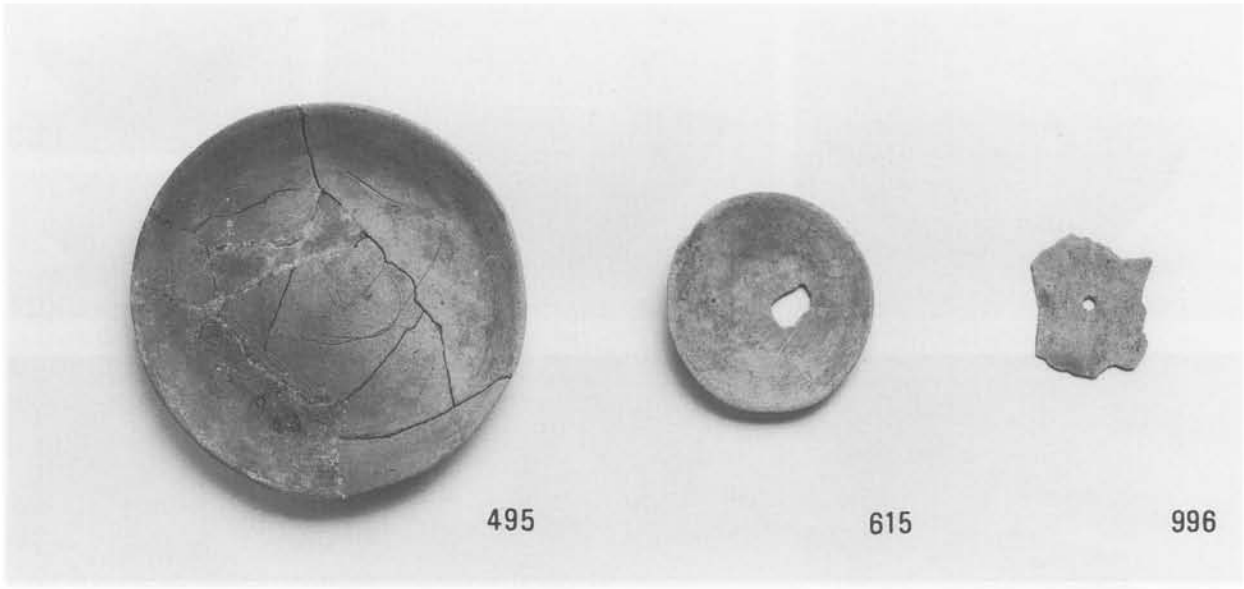
913

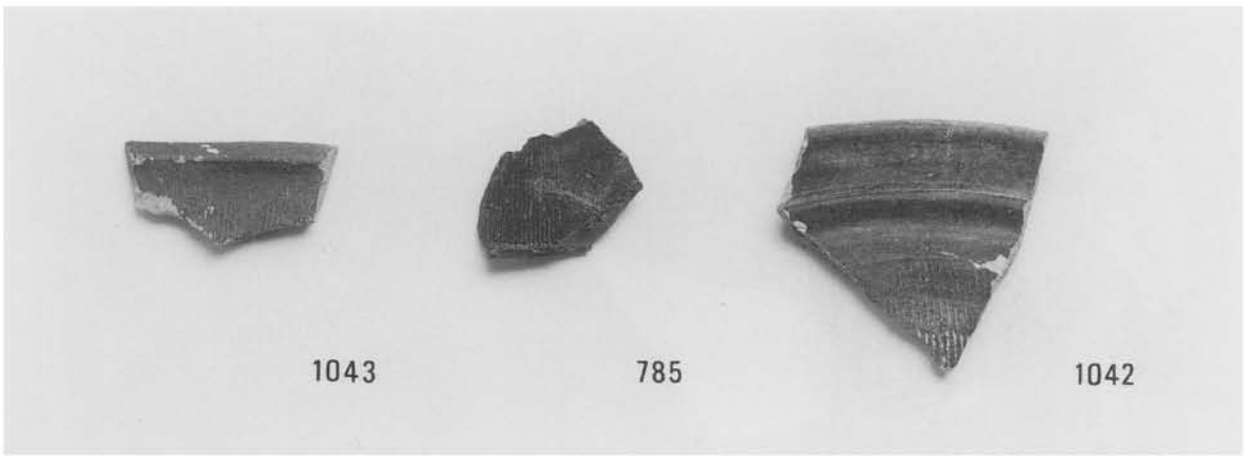
第４次調査出土遺物（１：３）

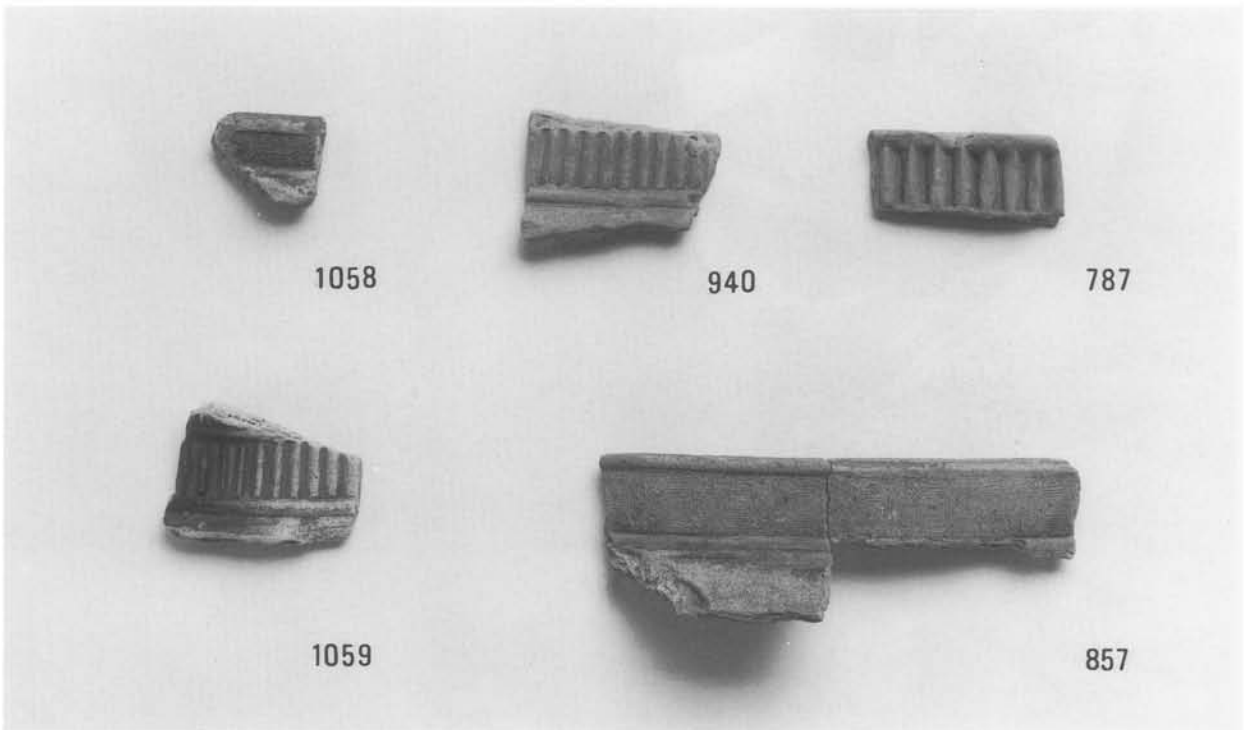




第４次調査出土遺物（１：３）







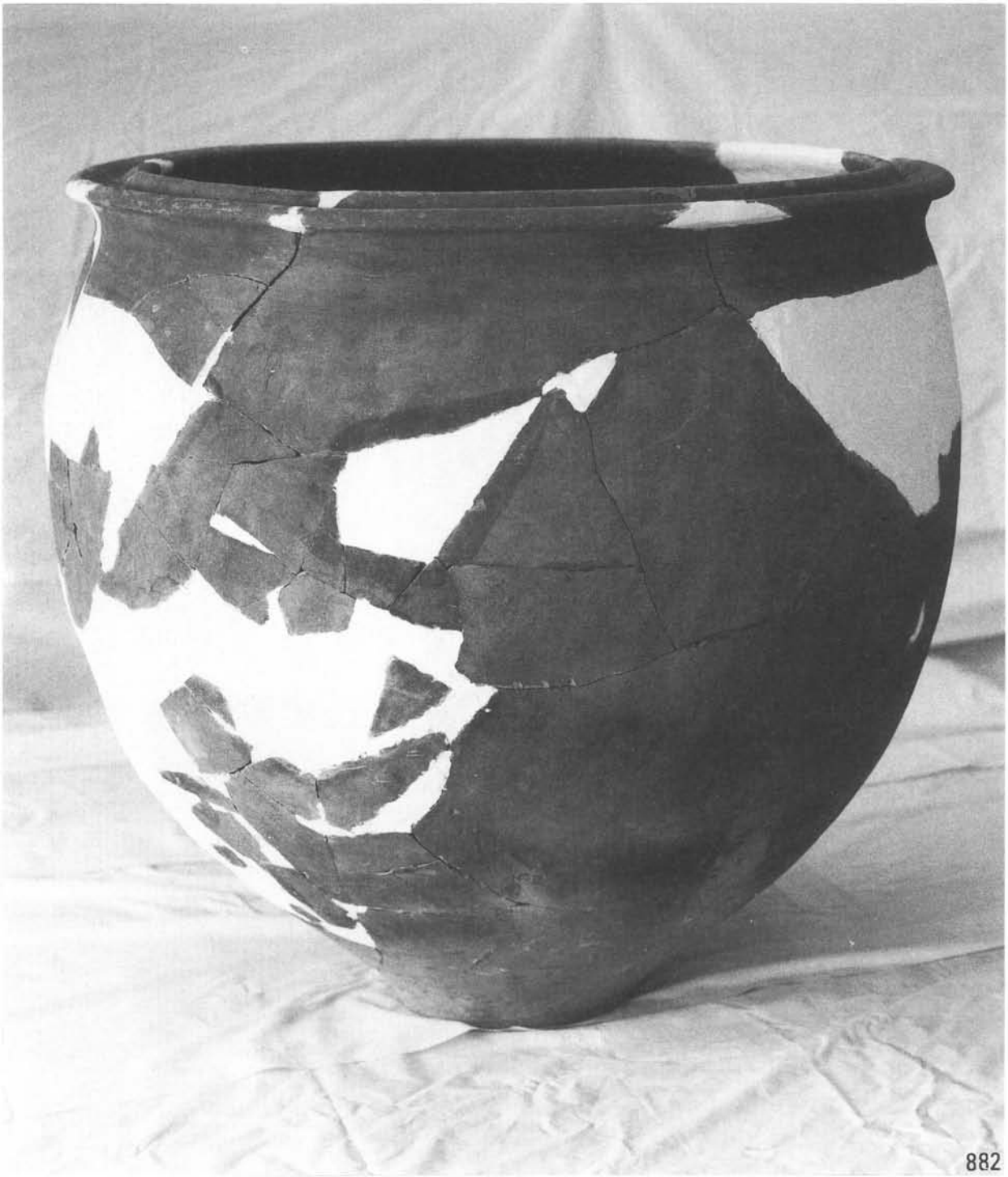
第4次調査出土遺物（1：3）

856

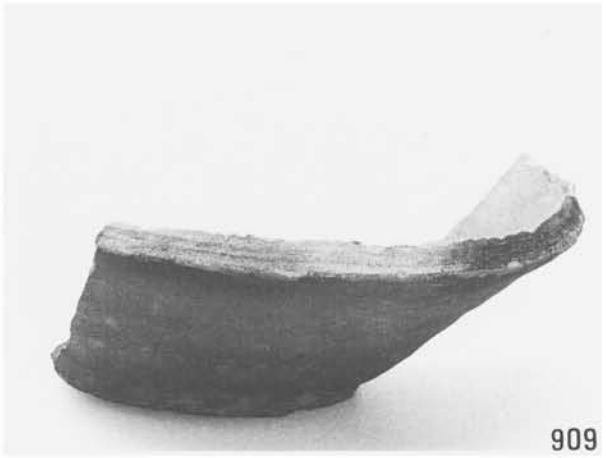
1021

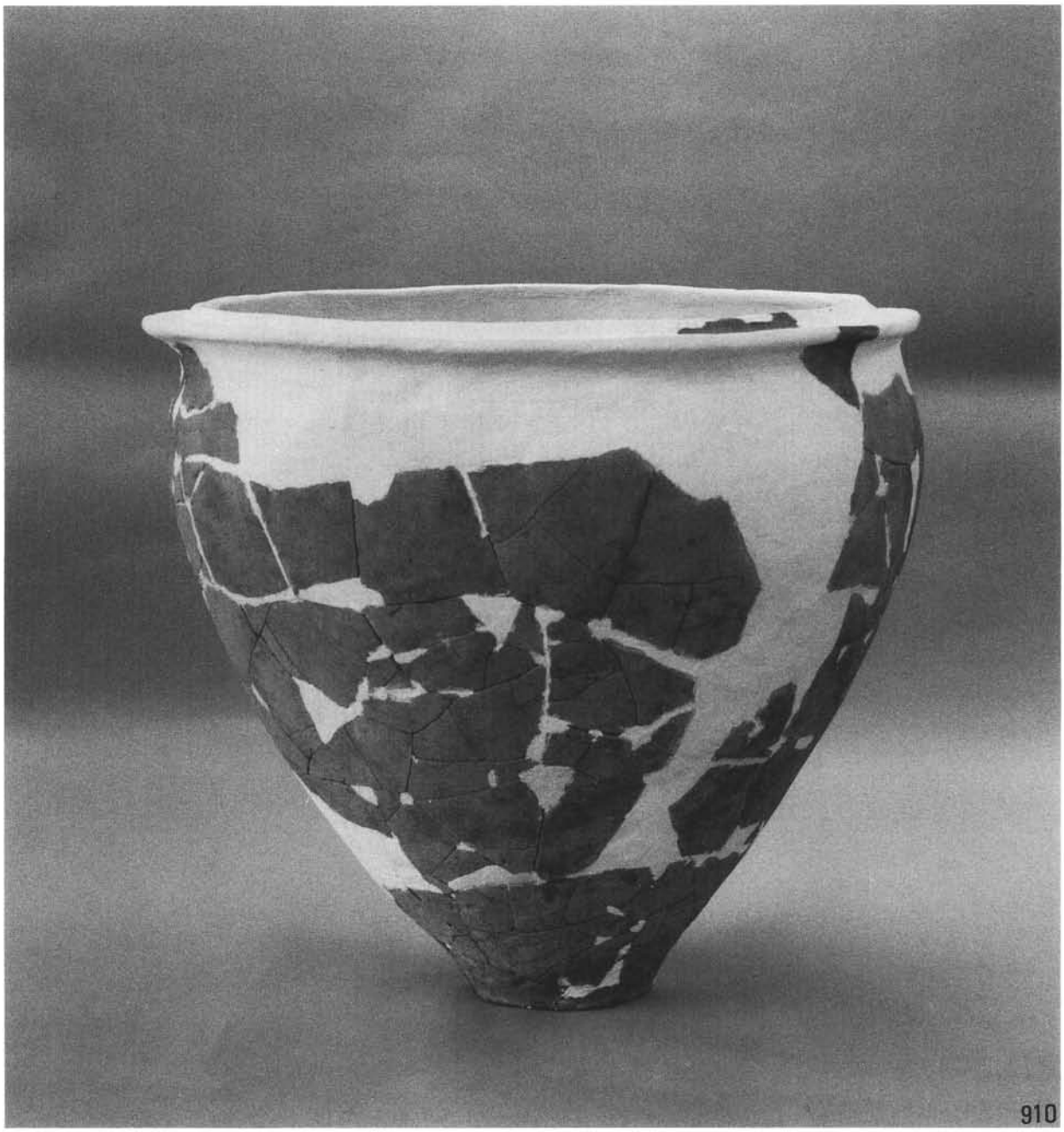
1023

1024

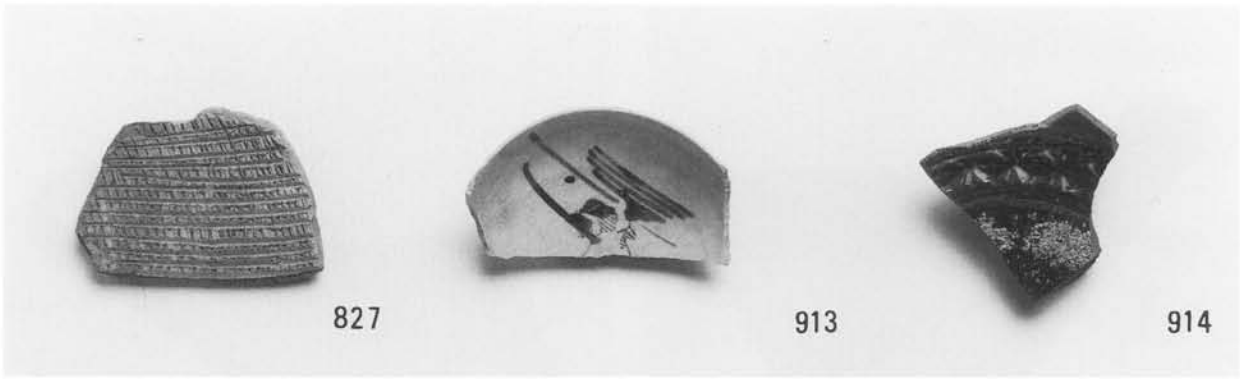

882

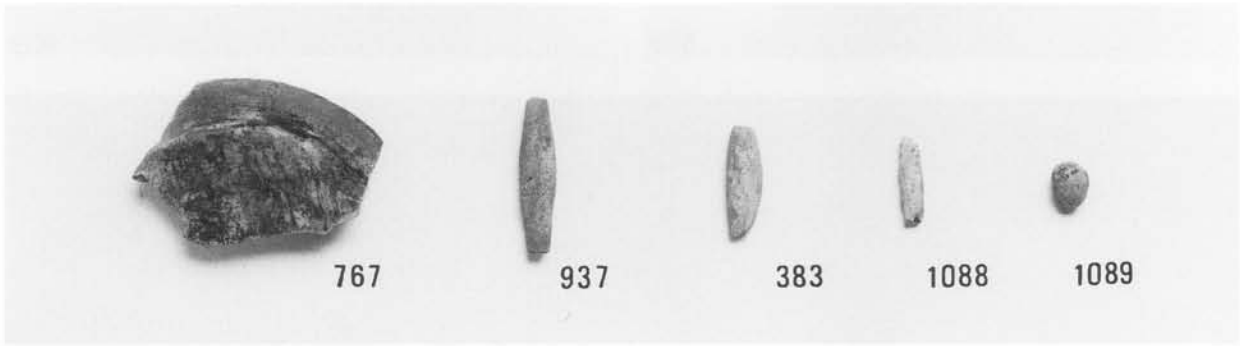
第４次調査出土遺物（１：３、882＝１：６）

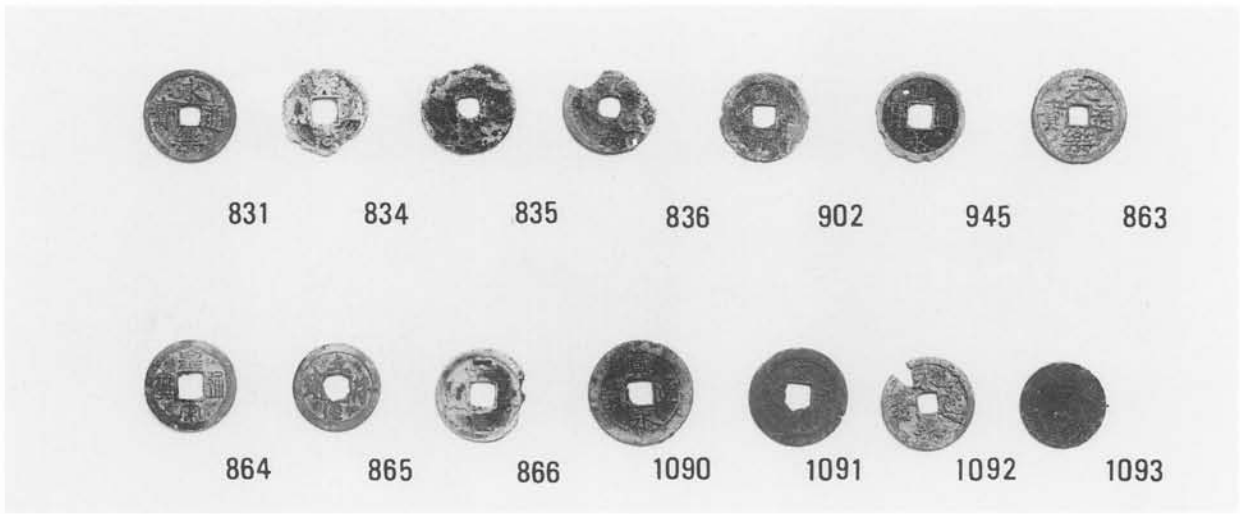


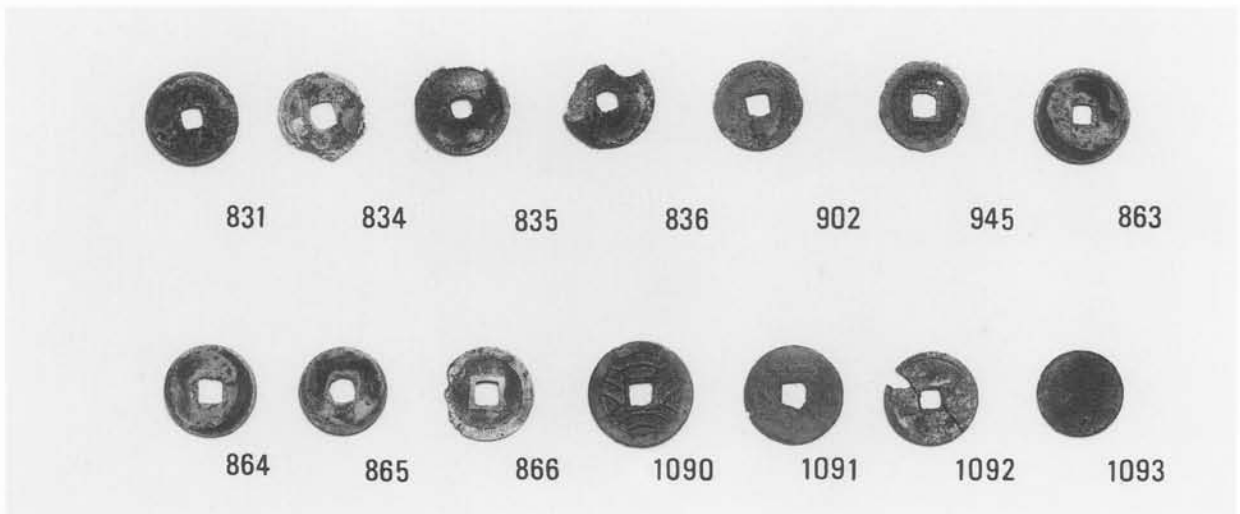


第４次調査出土遺物（１：３、910＝１：６）

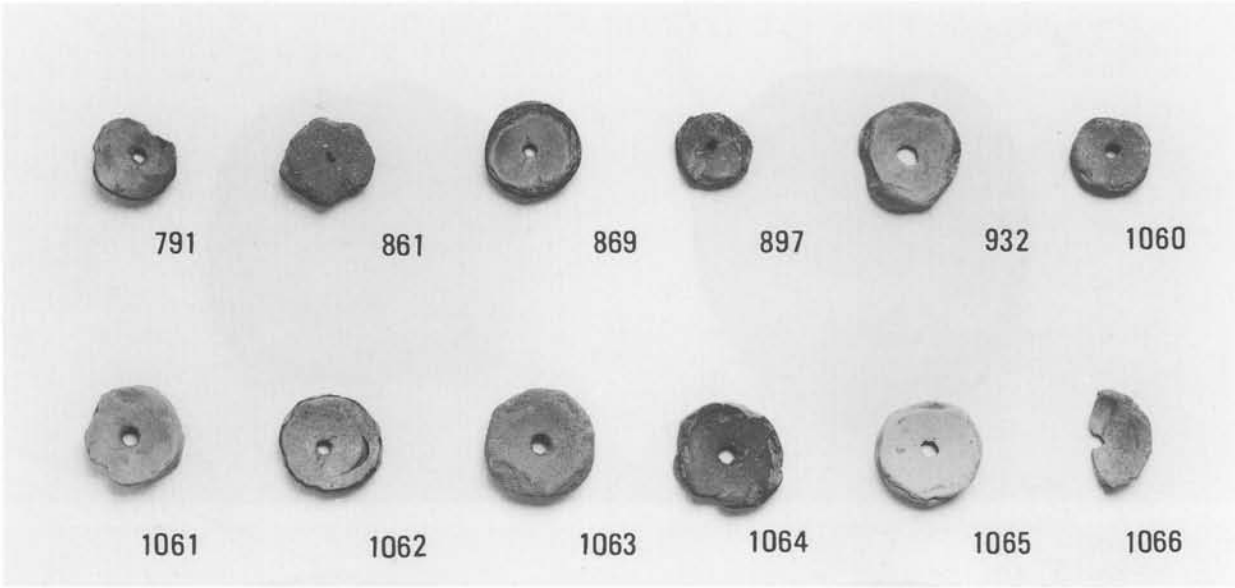


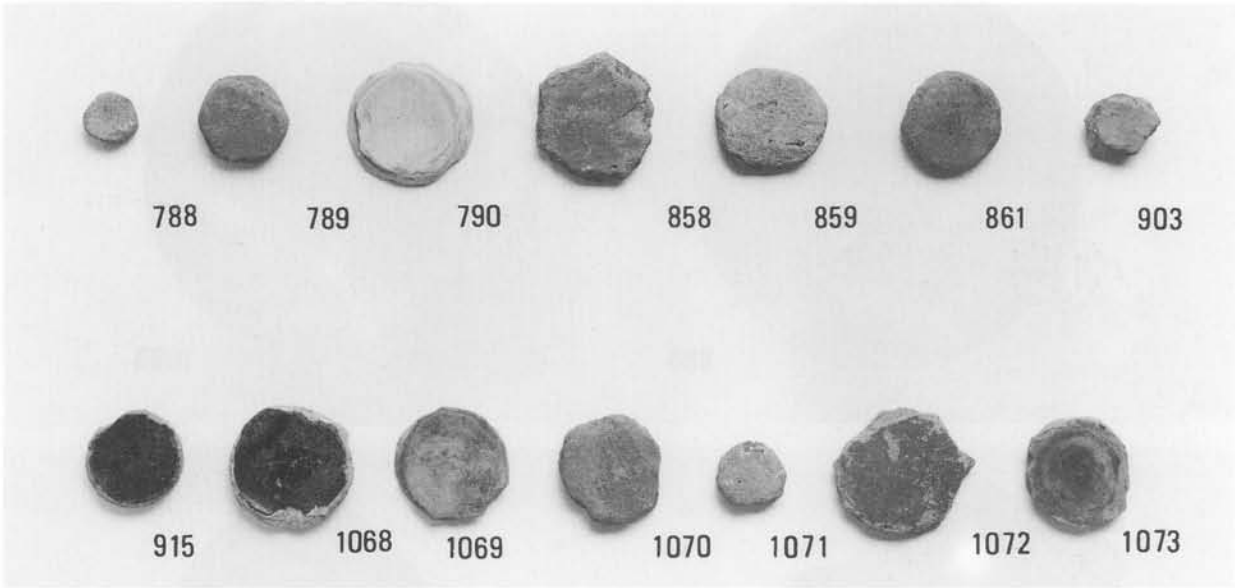


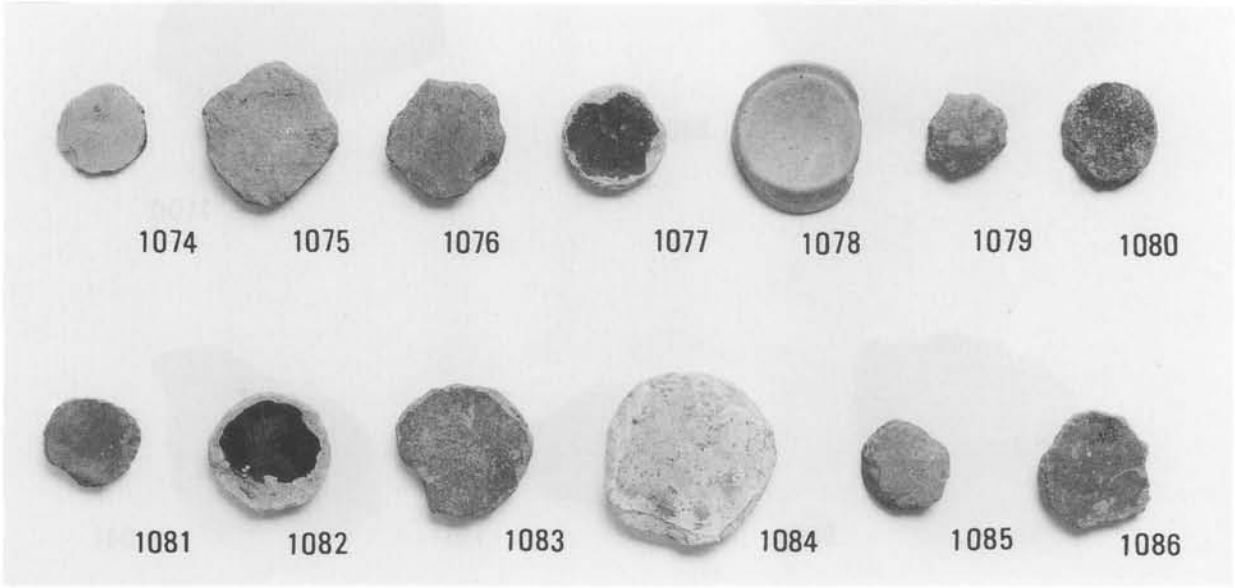




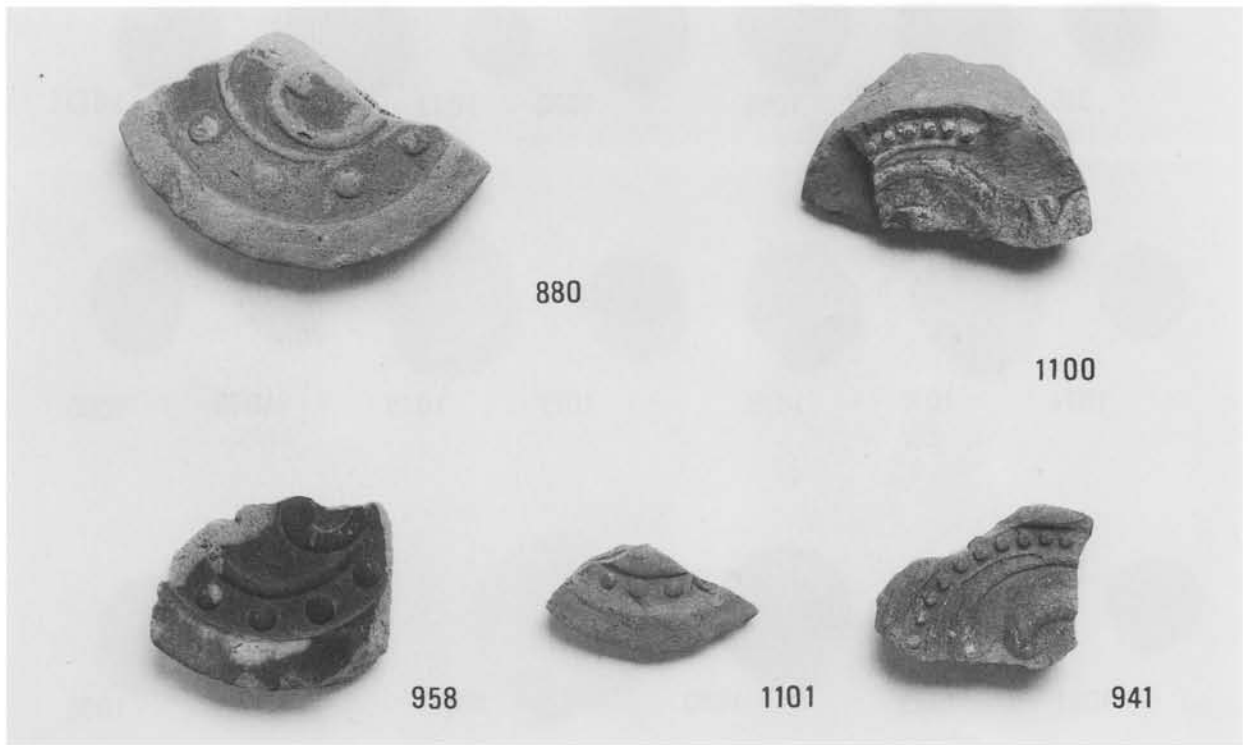
第４次調査出土遺物（１：３、銭貨＝１：２）



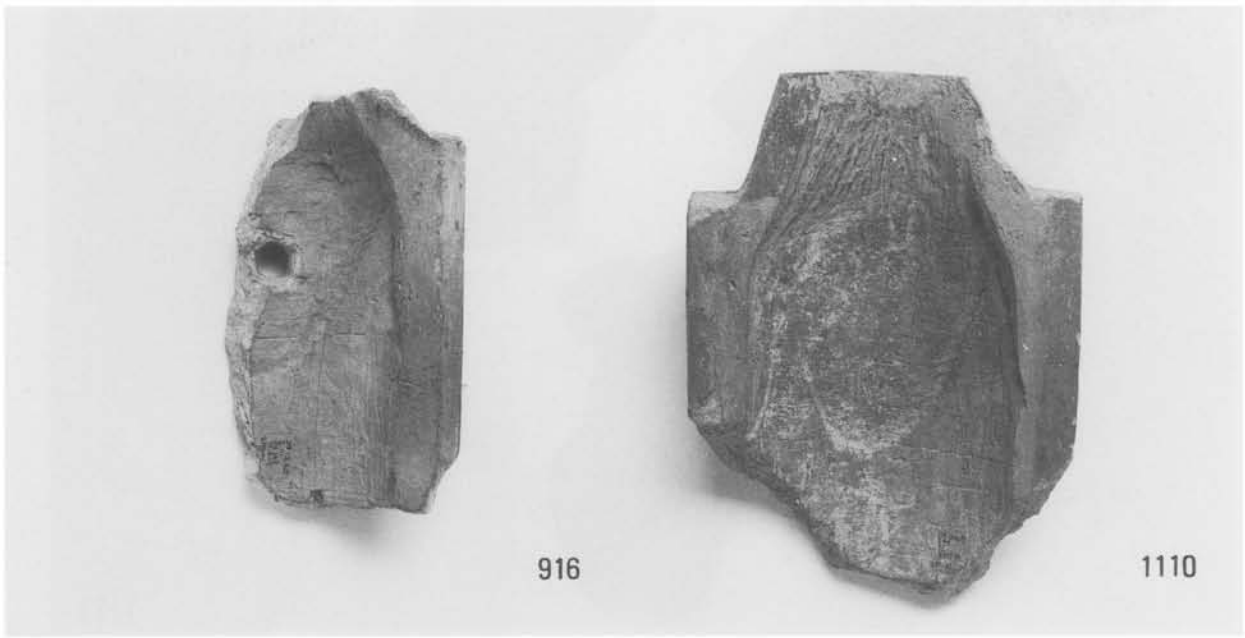




第４次調査出土遺物（１：３）



第4次調査出土遺物（1：3）



第４次調査出土遺物（１：３）

第５次調査出土遺物（１：３）

1144

1232

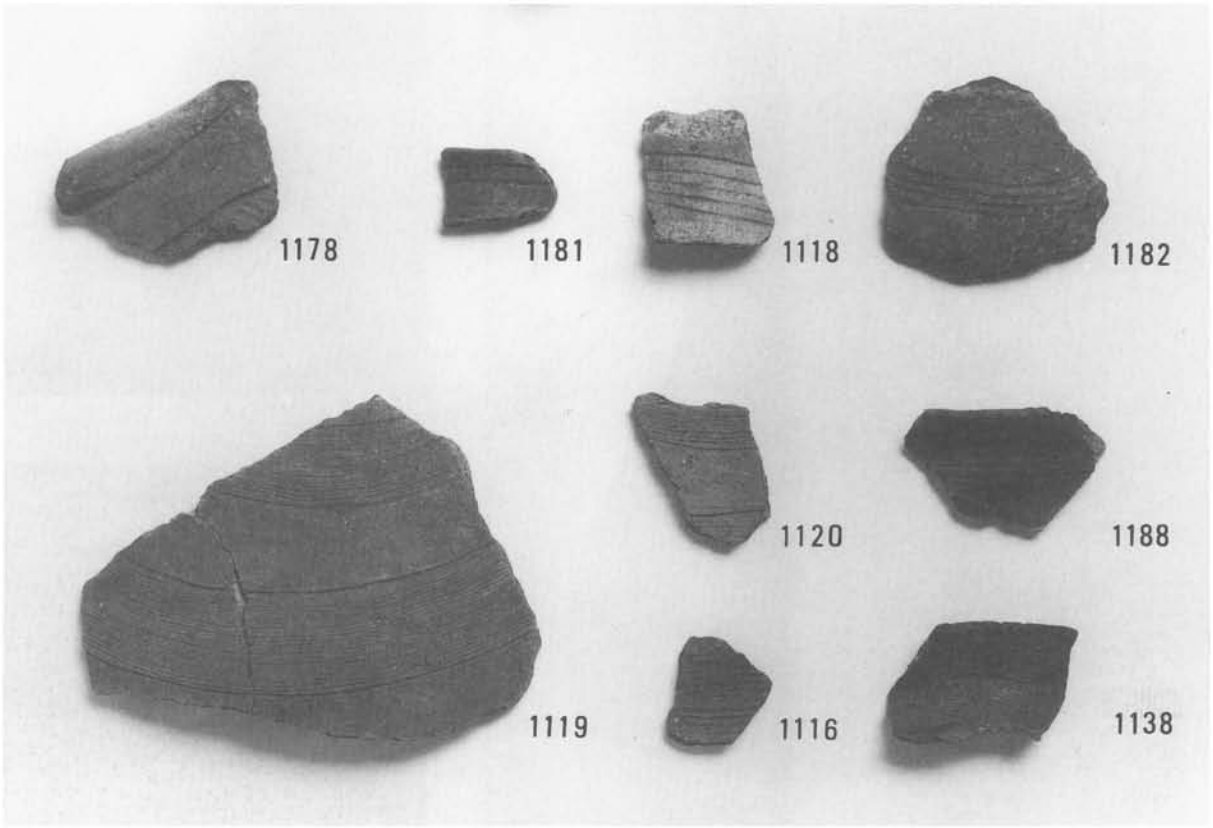
1173

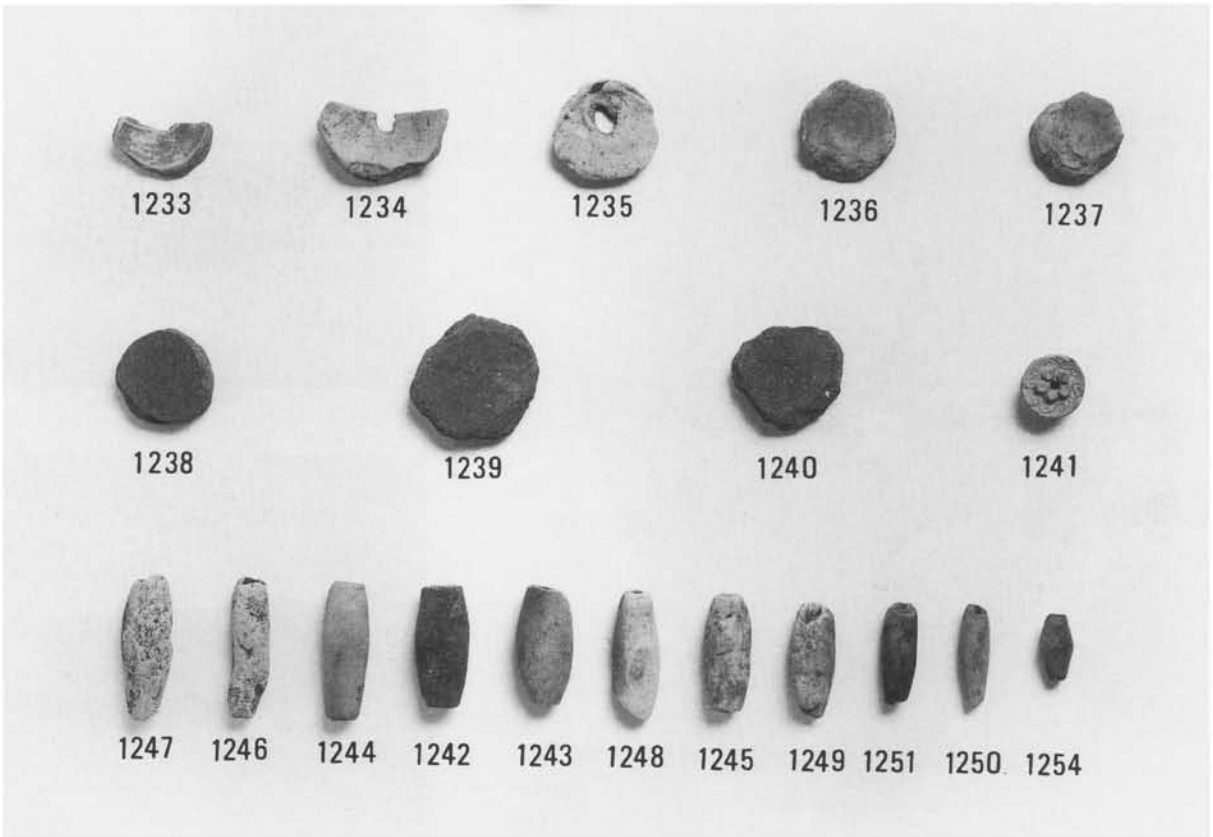
1129

1157

1204

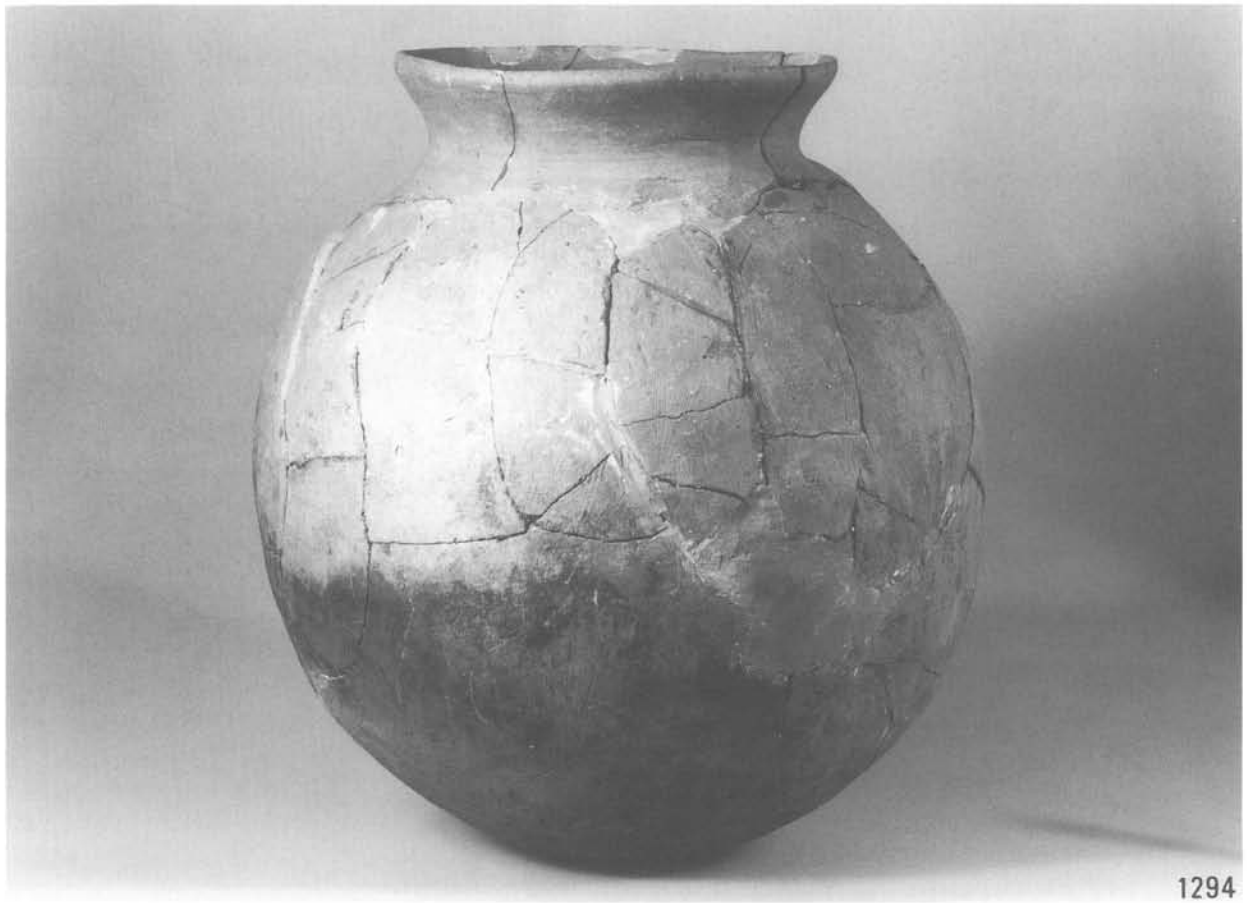
第5次調査出土遺物（1：3）





第５次調査出土遺物（１：３）

第５次調査出土遺物（１：３）



第6次調査出土遺物（1：3）

1258

1259

1260

1261

1257

第6次調査出土遺物（1：3）

第６次調査出土遺物（１：３）

報告書抄録

ふりがな	こうの きい せき じょうそうへん
書名	鴻ノ木遺跡（上層編）
副書名	一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	Ⅳ
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	１２３－４上
編著者名	小浜　学・小山憲一・下平康弘・田村陽一・西村修久・森川常厚・山田　猛・（株）パリノサーヴェイ
編集機関	三重県埋蔵文化財センター
所在地	〒５１５－０３　三重県多気郡明和町竹川５０３　TEL 05965-2-1732
発行年月日	西暦　１９９８年　９月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 m²	調査原因
こうのき 鴻ノ木遺跡	みえけんまつさかしいざわちょう 三重県松阪市射和町 あざこうのき 字鴻ノ木ほか	２０４		３４度 ３０分 １２秒	１３６度 ３６分 ２２秒	第１次調査 １９９０１０１１～ １９９１０３１９ 第２次調査 １９９１０４２３～ １９９１０５３１ 第３次調査 １９９２０５１１～ １９９２０８３１ 第４次調査 １９９３０４１９～ １９９３０８２９ 第５次調査 １９９３０８２３～ １９９４０３３１ 第６次調査 １９９４０８２３～ １９９５０１２５	１，５００ （下層）　850 ４６０ ３，５００ （二次検出）　850 ３，６００ （二次検出）　400 ２，２００ （下層）　1,800	一般国道42号松阪・多気バイパス建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鴻ノ木遺跡	集落跡	縄文時代後～晩期	石囲炉　１基 配石　１基	縄文土器	
		弥生時代中～後期	土壙墓　６基 方形周溝墓　１基	弥生土器（壺・高杯） 土製品	
		古墳時代	竪穴住居　２棟 土坑　３基	古式土師器（壺・台付甕・高杯） 土師器（椀・小型壺・甕・高杯） 須恵器（高杯・平瓶）　石製品（管玉・剣形）	
		奈良～平安時代前期	竪穴住居　６棟 掘立柱建物　６棟	土師器（椀〈ヘラ書記号〉・杯〈ヘラ書記号〉・皿・甑） 須恵器（杯・蓋）　緑釉陶器（椀・耳皿）	
		平安時代後～末期	土壙墓　１基 井戸　１基 自然流水路　１条	土師器（椀・皿〈墨書文字・絵画〉高杯・甕） 黒色土器　ロクロ土師器　山茶椀 灰釉陶器（椀〈ヘラ書文字〉）　白磁　青磁	自然流水路から、推定812 個体の大小土師器皿が完形にちかい状態で出土した。
		室町～江戸時代	土壙墓　42基	土師器（椀・皿・蓋・鍋・茶釜・羽釜） 陶器（椀・皿・天目茶椀・擂鉢・甕） 瓦質土器（火舎）　磁器（椀・香炉） 瓦（軒丸・軒平・隅軒平・鬼） 土製人形（武人・犬）　銭貨	

平成10(1998) 年９月に刊行されたものをもとに

平成19(2007) 年２月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告１２３-４上

一般国道42号松阪・多気バイパス建設地内埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅳ

鴻　ノ　木　遺　跡

１９９８・９

編集・発行　三重県埋蔵文化財センター

印刷者　東海印刷株式会社